（財）大阪府文化財センター調査報告書　第178集

堺市

堺環濠都市遺跡Ⅱ

（SKT960地点）

少林寺・B団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年３月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第178集

堺市

堺環濠都市遺跡Ⅱ
（SKT960地点）

少林寺・B団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

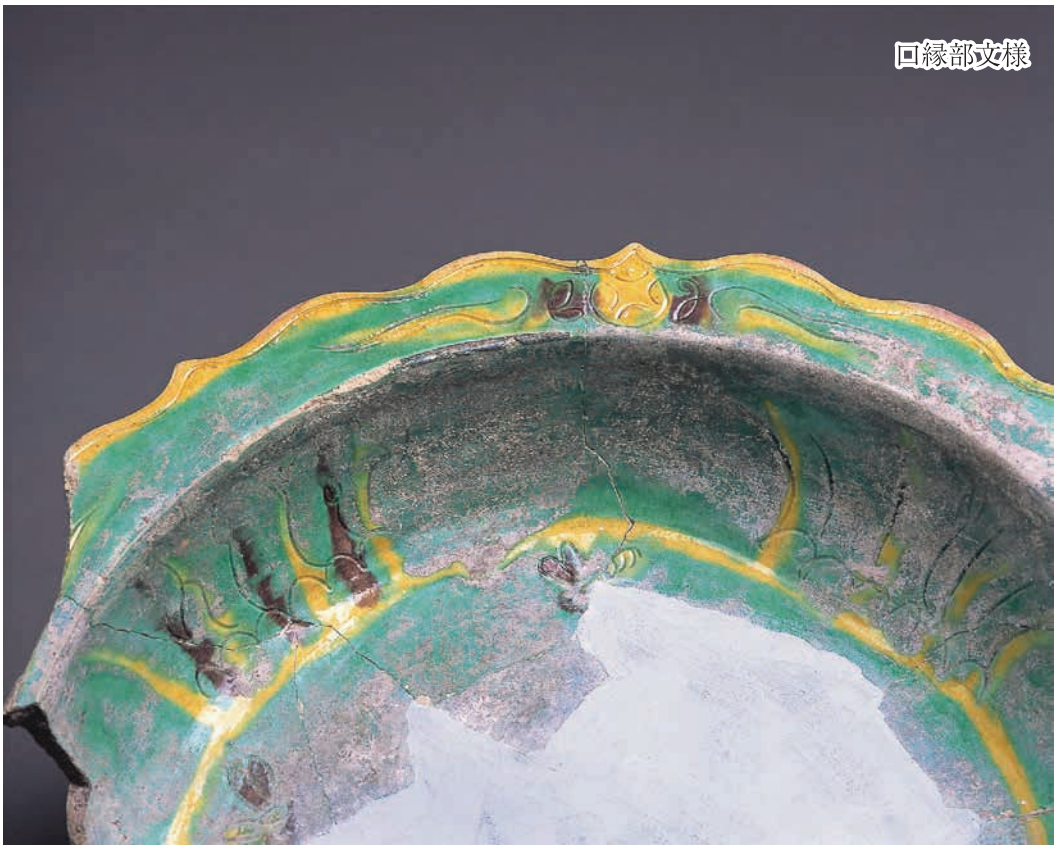
堺環濠都市遺跡全景（南東から）
〔堺市博物館所蔵〕

写真手前の堺環濠都市遺跡南東隅に位置する大きな区画が南宗寺。
南宗寺北側の広い校庭をもつのが堺市立少林寺小学校。
その西側の縦長の敷地がＳＫＴ960地点。
写真右側の南北に伸びる道路は阪神高速堺線（近世期の環濠跡）。

カラー図版２

１調査区第３面104土坑出土

華南三彩盤



序　　文

堺は、古く「百舌鳥野」の地に大王やそれに連なる首長たちが葬られた、国内屈指の大古墳群が造営され、日本の歴史上輝かしい足跡を示します。現在、堺市を中心にその大古墳群である百舌鳥古墳群を世界遺産に登録すべく活発な活動が展開されています。

さらに、堺には大古墳群に勝るとも劣らない歴史上重要な遺跡が多数存在しています。その一つが、堺環濠都市遺跡といえます。

堺環濠都市は中世・15世紀後半に日明貿易や琉球・東南アジアとの交易により、莫大な富を蓄えて町を発展させ、当時、博多と並び国内屈指の貿易都市として名を馳せることになりました。また、会合衆による自治が行われ「自治都市」あるいは「自由都市」と称される側面も持ち合わせていました。そして、それを象徴しているのが、イエズス会宣教師らが残した書簡や慶長年間に描かれたとされる『住吉祭礼図屏風』等にみられる環濠でありました。

堺はその経済力により、時の権力者達からの圧力を受けることもありましたが、強かにその世を生き抜き「黄金の日々」と称される繁栄を謳歌することとなりました。

今回の調査では、「自治都市」・「自由都市」堺を彷彿とさせる巨大な４条の環濠と近世期の職人町の構造を明らかにすることが出来ました。中でも、幅17m・深さ４mという驚くべき規模の巨大な濠の存在や、都市域を拡張するかのように連続して掘削された多重の濠は、堺の持っていた豊かな経済力を示すものと言えます。それと同時に、未だ謎多き環濠の実態を解明する上で重要な成果となりました。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にあたり多大なるご指導とご協力を賜りました、大阪府住宅供給公社、大阪府教育委員会、堺市教育委員会、堺市文化財調査事務所、堺市博物館、堺市立少林寺小学校、少林寺校区自治連合、そして地元住民の皆様に深く感謝すると共に、今後とも文化財の保護に一層のご協力とご理解を賜りますよう、お願いいたします。

2008年３月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水　野　正　好

例　　言

1．本書は大阪府堺市堺区少林寺町東３丁地内に所在する堺環濠都市遺跡06－１（SKT960地点）の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府住宅供給公社から財団法人大阪府文化財センターが、平成18年10月２日から平成20年３月31日の間委託を受け、平成18年10月27日から平成19年５月31日まで調査を行い、平成19年６月１日から平成19年12月28日まで遺物整理作業を行い、平成20年３月31日本書の刊行を以って完了した。

3．発掘調査及び整理作業は以下の体制で実施した。
調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、南部調査事務所所長　大野　薫、調査第二係係長　中村淳磯、副主査　立花正治〔写真〕、技師　新海正博、亀井　聡、福佐美智子、専門調査員　水野恵利子

4．調査の実施にあたり、南部調査事務所専門調査員　佐藤由美・関本優美子の援助があった。

5．珪藻分析を株式会社古環境研究所に委託して実施した。測定結果については、本文第５章第１節に掲載している。

6．出土した動物骨及び魚骨に関しては独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　松井　章氏ならびに京都大学大学院　丸山真史氏に同定及び分析をお願いし、玉稿を賜った。本文第５章第２節に掲載している。

7．出土した貝類に関しては財団法人大阪市文化財協会　池田　研氏に同定及び分析をお願いし、玉稿を賜った。本文第５章第３節に掲載している。

8．出土した石製品に関しては京都教育大学名誉教授　井本信廣氏に石材鑑定をお願いした。

9．出土した種子の同定は当センター中部調査事務所保存室主査　山口誠治が行った。

10．近世墨書の判読にあたっては、堺市博物館　矢内一磨氏のご協力を得た。

11．発掘調査及び遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏、機関にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
大阪府教育委員会、堺市教育委員会、堺市文化財調査事務所、堺市博物館、堺市立少林寺小学校、少林寺校区自治連合、1617会、関西近世考古学研究会
仁木　宏（大阪市立大学）、藤田裕嗣（神戸大学）、川口宏海・藤本史子（大手前大学）、松井　章（奈良文化財研究所）、井本信廣、玉井　功・橋本高明・山上　弘（大阪府教育委員会）、井溪　明・白神典之・近藤康司（堺市教育委員会）、十河稔郁・土山健史・北野俊明・森村健一・内本勝彦・嶋谷和彦・十河良和・續伸一郎・土井和幸・永井正浩（堺市文化財調査事務所）、角山　榮・村田和男・吉田　豊・樋口吉文・矢内一磨（堺市博物館）、積山　洋・池田　研・小倉徹也（財団法人大阪市文化財協会）、大澤研一（大阪歴史博物館）、松尾信裕（大阪城天守閣）、中西裕樹（高槻市立しろあと歴史館）、福島克彦（大山崎町歴史資料館）、山上雅弘（兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部）、大橋康二（九州陶磁資料館）、丸山真史（京都大学大学院）

12．本書の執筆は新海と水野が担当し、文責を目次に記した。遺物実測に関わるデジタル写真は水野恵利子が撮影を行った。本書の編集は水野の協力の下、新海が行った。

13. 本書に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は（財）大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系 - 世界測地系）第Ⅵ座標系を基準にした。
2．現地調査や遺物整理にあたっては、(財) 大阪府文化財センター　2003『遺跡調査基本マニュアル（暫定版)』に準拠して行い、地区割はこの中に定めた地区割法に則った。その詳細は第１章第２節に記述した。
3．本書に掲載された遺構図に付した方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。遺構図に記載した標高はmで示してある。
4．標高に関しては、すべて東京湾平均海面（T. P.）からのプラス値である。
5．本書で使用する遺構番号は遺構の種類と関係なく、調査時において検出した順に１からの通し番号を付与し、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付け「14井戸」などと表記した。なお、２調査区については遺構番号が１調査区と錯綜することがないように頭に２を付し、2001からの通し番号とした。
6．本書に掲載した平面図の縮尺は、200分の１或いは250分の１である。遺構図や断面図は統一していないが、各図に明記している。
7．遺物実測図の縮尺は、基本的に陶磁器・土器は３分の１、土製品・小型の石製品などは２分の１とし、大型の陶磁器や石製品などの遺物に関しては遺物の大きさに応じて適宜縮尺を変更した。
8．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版　標準土色帖』2006年版を基準としている。
9．写真図版の縮尺は任意である。

目　　次

カラー図版
序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と調査方法 ……（新海）… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　周辺の地理的・歴史的環境 …… 4
　第４節　調査地周辺の既往の調査成果 …… 8
第２章　調査の概要と基本層序 ……（新海）… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　基本層序 …… 11
第３章　１調査区の遺構と遺物 ……（新海）… 21
　第１節　１調査区の遺構と遺物 …… 21
　第２節　１調査区の包含層出土遺物 …… 88
第４章　２調査区の遺構と遺物 ……（水野）… 93
　第１節　２調査区の遺構と遺物 …… 93
　第２節　２調査区の包含層出土遺物 ……148
第５章　自然科学分析 ……149
　第１節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）における珪藻分析　……（株式会社古環境研究所）…150
　第２節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）から出土した脊椎動物遺存体…（松井　章・丸山真史）…161
　第３節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）調査出土の貝類について　……（池田　研）…165
第６章　総括 ……（新海）…167
遺構一覧表
遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿　入　写　真　目　次

写真１　堺環濠都市遺跡の珪藻

挿　図　目　次

図１　調査地の位置図
図２　地区割概念図
図３　調査位置と地区割
図４　堺環濠都市遺跡周辺の地形図
図５　元禄堺大絵図と調査区
図６　１調査区東壁　断面図
図７　１調査区西壁　断面図
図８　１調査区南壁　断面図
図９　２調査区東壁　断面図
図10　第１面　平面図
図11　第１面　70建物　平・断面図
図12　第１面　66土坑　断面図
図13　第１面　14・317井戸出土遺物、66土坑出土遺物（１）
図14　第１面　66土坑出土遺物（２）
図15　第１面　222井戸　平・断・立面図
図16　第２面　平面図
図17　第２面　51土坑　断面図
図18　第２面　51土坑出土遺物（１）
図19　第２面　51土坑出土遺物（２）
図20　第２面　29土坑　平・断面図、116土坑断面図
図21　第２面　30井戸、57土坑出土遺物
図22　第３面　平面図
図23　第３面　186瓦列　平・断・立面図、出土遺物
図24　第３～９面　102・188・240溝、第３面104・141土坑　断面図
図25　第３面　102溝出土遺物、104土坑出土遺物（１）
図26　第３面　104土坑出土遺物（２）
図27　第３面　遺構出土遺物
図28　第４面　平面図
図29　第４面　150土坑　断面図
図30　第４面　102溝出土遺物
図31　第４面　遺構出土遺物
図32　第５面　平面図
図33　第５面　175土坑出土遺物
図34　第５面　156・173・174・155埋甕　平・断面図、155埋甕実測図
図35　第５面　156・173・174埋甕出土遺物
図36　第６面　平面図
図37　第６面　188溝出土遺物（１）
図38　第６面　188溝出土遺物（２）
図39　第６面　215土坑、187埋甕、220礎石列、221礎石　平・断面図
図40　第６面　遺構出土遺物
図41　第６面　213井戸　平・断・立面図
図42　第７面　平面図
図43　第７面　229埋桶、256礎石群　平・断面図
図44　第７面　257建物、224溝　平・断面図
図45　第７面　257建物、246土坑、第８面258建物、第９面　328建物　断面図
図46　第７－２面　247カマド、第７－３面262カマド　平面図
図47　第７面　257建物関連遺構、232土坑出土遺物

図48　第８面　平面図
図49　第８面　西側礎石列　平・断面図
図50　第８面　274溝　平・断面図
図51　第８面　240溝出土遺物（１）
図52　第８面　240溝出土遺物（２）
図53　第８面　240溝出土遺物（３）
図54　第８面　240溝出土遺物（４）
図55　第８面　240溝出土遺物（５）、237・242土坑出土遺物
図56　第８面　258建物　平・断面図
図57　第８面　244・245埋甕　断面図
図58　第８面　258建物、281石敷出土遺物
図59　第９面　平面図
図60　第９面　298・307・320土坑、306・325埋甕、334集石　平・断面図
図61　第９面　328建物　平・断面図
図62　第９面　328建物、331土坑、333石敷出土遺物
図63　第９面・第９－２面遺構出土遺物
図64　第９－２面　平面図
図65　第９－２面　344土坑　平・断面図
図66　第９－２面　礎石列　平・断面図
図67　第10面　平面図
図68　第10面　遺構出土遺物
図69　第11面　平面図
図70　第12a面（左）・第12b面（右）　平面図
図71　第13b面　平面図
図72　第13b面　364・365土坑　断面図
図73　第14b面（左）・第15面（右）　平面図
図74　包含層出土遺物（１）
図75　包含層出土遺物（２）
図76　包含層出土遺物（３）
図77　第１面　平面図
図78　第１面　2126～2128礎石（2123建物）・2130・2131礎石（2124建物）　断面図
図79　第１面　2101溝　断面図、出土遺物
図80　第１面　2061・2119・2140土坑　断面図、2061土坑出土遺物
図81　第１面　2307土坑出土遺物
図82　第１面　遺構出土遺物（１）
図83　第１面　遺構出土遺物（２）
図84　第１面　2090埋甕、2091・2092・2093土坑　平・断面図
図85　第１面　包含層出土遺物
図86　第１－２面　北　平面図
図87　第１－２面　北　2172礎石
図88　第１－２面　北　2174土坑出土遺物
図89　第１－２面　北　2152埋甕　平・断面図
図90　第１－２面　北　2290溝　断面図、出土遺物
図91　第１－２面　南　平面図
図92　第１－２面　南　2372礎石
図93　第１－２面　南　整地層出土遺物
図94　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（１）
図95　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（２）
図96　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（３）
図97　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（４）
図98　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（５）
図99　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（６）
図100　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（７）
図101　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（８）
図102　第２面　焼土層出土遺物
図103　第２面　2362溝　平・断面図、出土遺物
図104　第２面　2153埋甕、2317・2320土坑断面図、出土遺物
図105　第２面　平面図
図106　第２面　遺構出土遺物
図107　第３面　平面図
図108　第２面　2330－１濠下層出土遺物
図109　第２面　2330－１濠上層出土遺物（１）
図110　第２面　2330－１濠上層出土遺物（２）
図111　第２面　2330－１濠上層出土遺物（３）
図112　第３面　2330－２濠下層出土遺物
図113　第３面　2330－２濠中－上層出土遺物
図114　第２・３面　2330濠出土遺物

図115　第３面　2325濠出土遺物
図116　第３面　2300濠（１）、2361土塁出土遺物
図117　第３面　2300濠出土遺物（２）
図118　濠アゼ　断面図
図119　10層出土遺物（１）
図120　10層出土遺物（２）
図121　２調査区側溝・サブトレ出土遺物
図122　堺環濠都市遺跡（その１）の2330－２濠における主要珪藻ダイアグラム
図123　堺環濠都市遺跡（その１）の2330－１濠における主要珪藻ダイアグラム
図124　堺環濠都市遺跡（その１）の2300濠における主要珪藻ダイアグラム
図125　堺環濠都市遺跡（その１）の2325濠における主要珪藻ダイアグラム

挿　表　目　次

表１　堺環濠都市遺跡（その１）における珪藻分析結果
表２　種名表
表３　集計表
表４　貝類集計表
表５　遺構一覧表（１）
表６　遺構一覧表（２）
表７　遺構一覧表（３）
表８　遺構一覧表（４）
表９　遺構一覧表（５）
表10　遺構一覧表（６）
表11　遺構一覧表（７）
表12　遺構一覧表（８）
表13　遺構一覧表（９）
表14　遺構一覧表（10）
表15　遺構一覧表（11）
表16　遺構一覧表（12）
表17　遺構一覧表（13）
表18　遺物観察表（１）
表19　遺物観察表（２）
表20　遺物観察表（３）
表21　遺物観察表（４）
表22　遺物観察表（５）
表23　遺物観察表（６）
表24　遺物観察表（７）
表25　遺物観察表（８）
表26　遺物観察表（９）
表27　遺物観察表（10）
表28　遺物観察表（11）
表29　遺物観察表（12）
表30　遺物観察表（13）
表31　遺物観察表（14）
表32　遺物観察表（15）
表33　遺物観察表（16）

写　真　図　版　目　次

図版１　１調査区断面
１調査区東壁中央１～10層
１調査区南壁東端１～10層
１調査区西壁中央１～10層
図版２　１・２調査区断面
１調査区南壁中央区画溝
２調査区東壁東端
１調査区南壁下層
図版３　１調査区遺構（１）
１調査区西側第１面（北から）
１調査区西側第１面70建物（西から）
１調査区西側第１面66土坑断面（南から）
図版４　１調査区遺構（２）
１調査区第８面西端礎石列（北西から）
１調査区第２面51土坑断面（東から）
１調査区第３面中央部（北西から）
図版５　１調査区遺構（３）
１調査区第５面中央部（北西から）
１調査区第５面156・173・174埋甕検出状況（西から）
１調査区第６面中央部（東から）
図版６　１調査区遺構（４）
１調査区第７面257建物（北西から）
１調査区第７－３面262カマド
１調査区第７面カマド断面
図版７　１調査区遺構（５）
１調査区第７面224溝（北西から）
１調査区第８面中央（北西から）
１調査区中央区画溝
図版８　１調査区遺構（６）
１調査区第８面258建物（西から）
１調査区第９面328建物（西から）
１調査区第９面333石敷（西から）
図版９　１調査区遺構（７）
１調査区第10面西端鋤溝群（北東から）
１調査区第12面（北東から）
１調査区第15面（北東から）
図版10　２調査区遺構（１）
２調査区第１面2152埋甕
２調査区第１－２面南端礎石建物（南西から）
２調査区第２面2362溝（東から）
図版11　２調査区遺構（２）
２調査区第３面濠全景（北から）
２調査区第３面濠全景（西から）
図版12　２調査区遺構（３）
２調査区第３面2361土塁
２調査区第３面2300濠（東から）
２調査区第３面2300濠西側断面
図版13　２調査区遺構（４）
２調査区第３面2325濠東壁（西から）
２調査区第３面2325濠中央断面（西から）
２調査区第３面2330－１濠東（西から）
２調査区第２・３面2330－１・２濠中央断面（南西から）
図版14　出土遺物１（陶磁器・土器）
図版15　出土遺物２（土製品、金属製品）
図版16　出土遺物３（木製品）
図版17　出土遺物４（石製品、骨・貝製品）
図版18　動物遺存体

第１章　調査の経緯と調査方法

第１節　調査に至る経緯と経過

堺環濠都市遺跡は大阪府堺市の北西部に広がる中世から近世に繁栄する都市遺跡である。近世期の遺跡の範囲は南北約３㎞・東西約１㎞に及ぶ広大なものである。遺跡名に冠されているように濠を都市の外郭に巡らせている。東側の濠は埋め立てられ、現在の阪神高速道路堺線となっているものの、西側と南側の濠はそれぞれ内川、土居川として現在でもその名残を留めている。

堺環濠都市遺跡が認識されるようになったのは、非常に新しく1970年代になってからである。それは、現在でも近世前期に建てられた住宅や寺社建築が数多く見られることから、中世堺環濠都市の生活面も現地表下の比較的浅い位置に存在しているものと捉えられ、当時の生活面の大半が後世の開発によって消滅していると推定されていたことに起因する。ところが、70年代後半に入ると、都市整備が進展するにつれ、それに伴う試掘調査や本調査が頻繁に行われるようになり、古くから開けていた旧市街地でも現地表下数ｍの地中に中世段階の堺、すなわち「自由都市・堺」の生活面が色濃く残されていることが次第に明らかとなっていった。

今回の調査地は、堺環濠都市遺跡内の東南部に位置し、大阪府住宅供給公社少林寺・Ｂ団地跡地内にあたる。少林寺・Ｂ団地は昭和25、26年度の建設以降50年余りが経過している。そのため、住宅規模や設備面等において現在の住宅ニーズに対応していない状況となり、平成13年11月に公表された「建替の時期に関する計画」に基づき、建替えの事業化を図ることとなった。これを受けて2006（平成18）年度に発掘調査事業が大阪府住宅供給公社から当センターに委託され、大阪府教育委員会文化財保護課の指

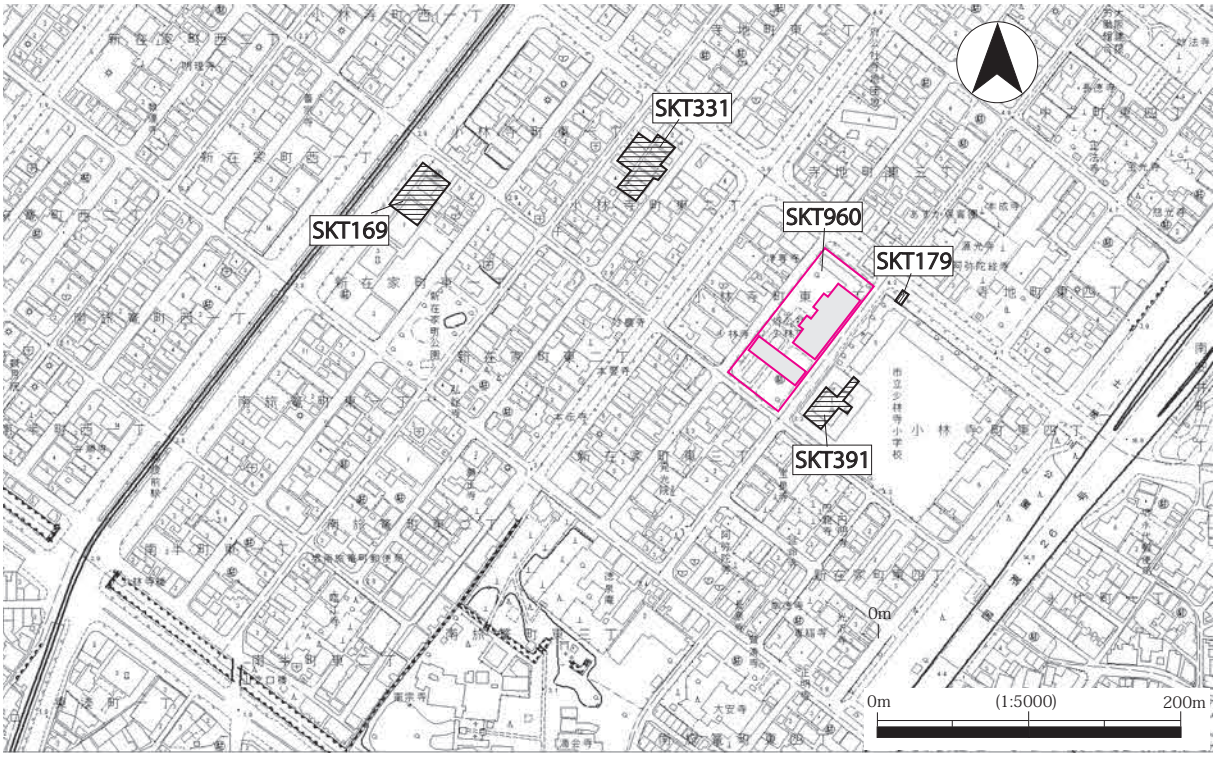


図１　調査地の位置図

導の下、2006（平成18）年10月27日から2007（平成19）年５月31日まで663㎡の発掘調査を実施した。

調査終了後は、南部調査事務所において報告書作成に伴う遺物整理を2007（平成19）年６月１日より2007（平成19）年12月28日まで行い、印刷業務を経た後、2008（平成20）年３月31日付けの『堺環濠都市遺跡Ⅱ（SKT960地点）』の刊行をもって全事業を終了した。

なお、調査期間中には2007（平成19）年２月21日に現地公開を、2007（平成19）年５月26日に現地説明会を実施し、それぞれ232人・821人の参加を得た。

第２節　調査の方法

今回の調査では、２箇所の調査区を設けることとなった。調査区の名称は、調査開始年度の西暦下二桁に着手順に枝番号を付した。従って、調査地内の南側に位置し道路となる部分の調査区を06－１－１調査区、北側に位置し住宅棟にあたる調査区を06－１－２調査区と呼称した（図３）。

調査区の現地標高はT.P.3.4～4.1m前後であり、直下の少林寺・Ｂ団地建設時の造成土、近現代整地土を機械にて約0.6～1.5m掘削した。それよりも下位に関しては人力にて掘削を行った。

発掘調査の方法は、原則的に当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）を基準として進めた。遺構図面作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割りは、上記マニュアルに則って世界測地系に準拠し、地区割りの基準線には国土座標系を利用する（図２）。大阪府は国土座標系では第Ⅵ系に区分される。これに則り、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小４段階の区画を設定した。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端Ｘ＝－192000m・Ｙ＝－88000mを基準とし、南北方向に６㎞・東西方向に８㎞で区画する。表示は、南西端を基点に北へＡ～Ｏ、東へ０～８とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に1.5㎞、東西方向に2.0㎞でそれぞれ４分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を１とし、東へ４まで、あとは西端を５、９、13、北西端を16と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へＡ～Ｏ、西へ１～20とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へａ～ｊ、西へ１～10とする。

今回の調査区の第Ⅰ・第Ⅱ区画はＦ４－12であり、第Ⅲ区画は５Ⅰ・６Ⅰ・６Ｊの範疇に含まれる。遺物取り上げ作業はすべて第Ⅳ区画で行った。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（Ｔ.Ｐ.）からのプラス値を用いた。

遺構の測量に関しては、平面図は100分の１を基本とし、個々の遺構測量に関しては必要に応じてそれ以外の縮尺を使用した。また、重要な遺構面に関してはクレーン撮影による空中写真測量を行い、50分の１縮尺の平面図とそれを縮小編纂した100分の１縮尺の遺構全体図を作成した。また、土層観察用の断面に関しては１調査区では20分の１縮尺の断面図を作成し、２調査区では三次元写真計測システム・クラベスを用いて図化を行った。

検出遺構には検出順に１からの通し番号を付した。ただし、２調査区に関しては遺構番号が１調査区と錯綜することがないように頭に２を付し、2001からの通し番号とした。調査の関係上複数にわたる遺構面を同時に調査した部分もあるため、遺構番号は同一遺構面での連番になっていない。

現場での写真撮影は６×７カメラ、35㎜カメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行った。また、台帳作成用にデジタルカメラを使用しての撮影を行った。

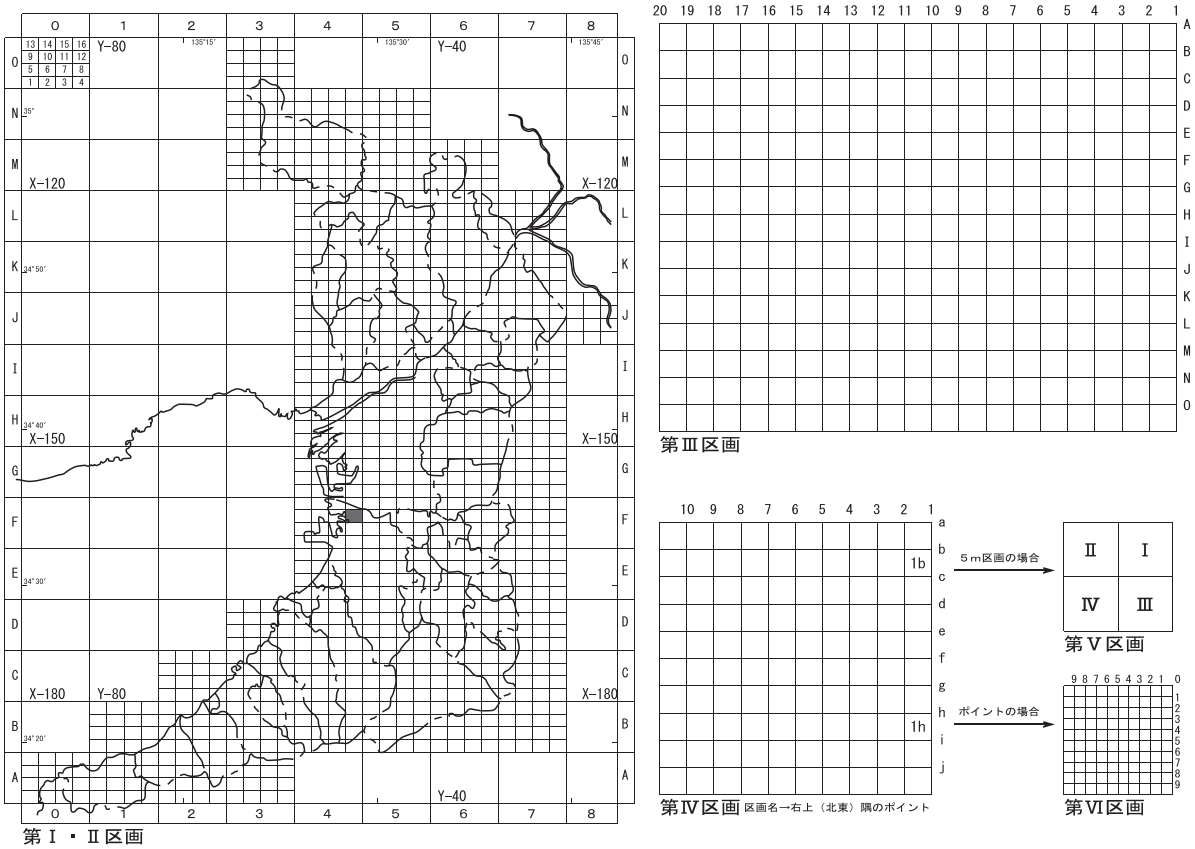


図２　地区割概念図

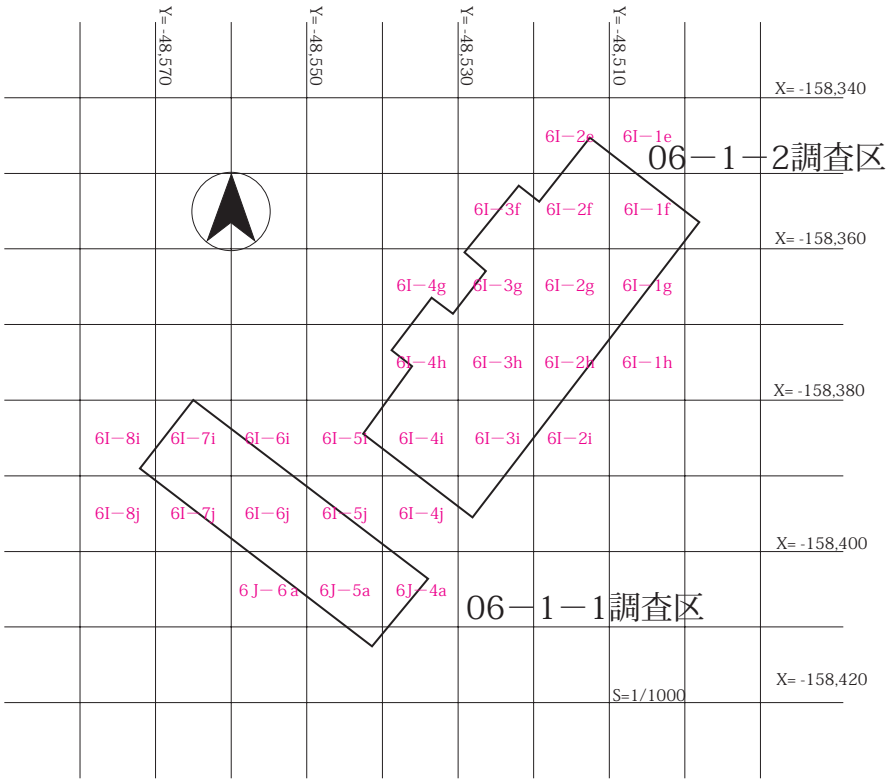


図３　調査位置と地区割

第３節　周辺の地理的・歴史的環境

堺環濠都市遺跡は大阪府堺市の北西部の海岸寄りに所在する。堺の地名の由来は和泉・摂津・河内の三国の境に位置していることに起因している。現在、堺市内には南海高野線堺東駅と南海本線堺駅を結ぶように大小路が存在するが、この大小路が和泉国（和泉国大鳥郡塩穴郷・堺南庄）と摂津国（摂津国住吉郡朴（榎）津郷・堺北庄）の国境となっていた。堺環濠都市遺跡はこの大小路と、現在阪堺電車が走る当時の紀州街道の結節点を中心として発展を遂げてきた。

現在周知されている範囲は、東・南・西側をそれぞれ江戸時代の環濠跡である阪神高速道路堺線、土居川・内川によって画された南北約３㎞、東西約１㎞にひろがる広大な遺跡である（図４）。江戸時代の東側環濠は完全に埋め立てられているものの、南・西側のものは現在でもその痕跡を留めている。また、中世期の環濠は近世期のものより内側に巡っており、一回り小さい都市域となっている。

堺環濠都市遺跡の東側は、河岸段丘、扇状地性段丘として分布する中位段丘から段丘崖を経て続く低位段丘面にあたる。この中位段丘面には、大山古墳（仁徳天皇陵）を代表とする百舌鳥古墳群が立地している。また、東側から張り出した低位段丘は遺跡の北側で急激に海側へと落ち込んで行くものの、南側では緩やかに遺跡内部にまで張り出している。一方、西側は大阪湾沿岸に形成された砂堆上の微高地となる。砂堆は海岸線にそって南北に形成された堺砂堆と呼ばれるもので、約6000年前の縄文海進後にひろがった大阪市内に存在する難波砂堆に連なるものである。遺跡の北東部では、これらの段丘と砂堆に挟まれて低くなっており後背湿地を形成している。

堺環濠都市遺跡周辺では歴史的に意義深い遺跡が数多く残されている。簡単に原始～近世の歴史環境について概観しておきたい。

主要な縄紋・弥生時代の遺跡として、堺環濠都市遺跡の南方約４㎞に位置する石津川河口付近に広がる船尾西遺跡・四ッ池遺跡が上げられる。船尾西遺跡では縄紋時代後・晩期の土器が出土し、四ッ池遺跡では後期中葉～晩期末の遺構や遺物が確認されている。両遺跡の立地環境や形成時期の観点から、両者の継続性、連続性が指摘されている。

四ッ池遺跡は弥生時代の大集落としてつとに著名である。集落は弥生時代前期から形成され、中期には集落規模を拡大し拠点的性格を有する集落として飛躍的な発展を遂げた。集落の立地する台地上に大溝を掘削し、集落を画する環濠に供しており、集落の北側や東側に広がる沖積平野には方形周溝墓を主体とした墓域が造営されている。後期に入ると、周辺の弥生集落の動向と同様に四ッ池集落も小集団化が進んだようであるが明確にはなっていない。四ッ池遺跡の南東に位置する下田遺跡からは扁平紐式６区袈裟襷文銅鐸が土坑に埋納された状況で発見されている。

弥生時代末～古墳時代前期の遺跡は先にも述べた船尾西・四ッ池遺跡で布留式期の土器や遺構が確認されている。また、下田遺跡でも多量の古式土師器の出土があり、和泉地域の土器研究に重要な資料となっている。

堺環濠都市遺跡東側に広がる中位段丘面は、古く「百舌鳥野」と呼ばれた地で、国内最大の大山古墳を筆頭とする巨大前方後円墳を擁した、国内でも屈指の大古墳群である百舌鳥古墳群が造営されている。古墳群の規模は南北約４㎞、東西約3.8㎞に及んでいる。古墳群は段丘先端に位置する前期末～中期初頭の乳の岡古墳の築造を嚆矢として、中期を主体として後期までに大小の古墳が築造された。百舌鳥野の地は大王、それに連なる系譜上の首長層の墓域と考えられている。現在、百舌鳥古墳群の世界遺

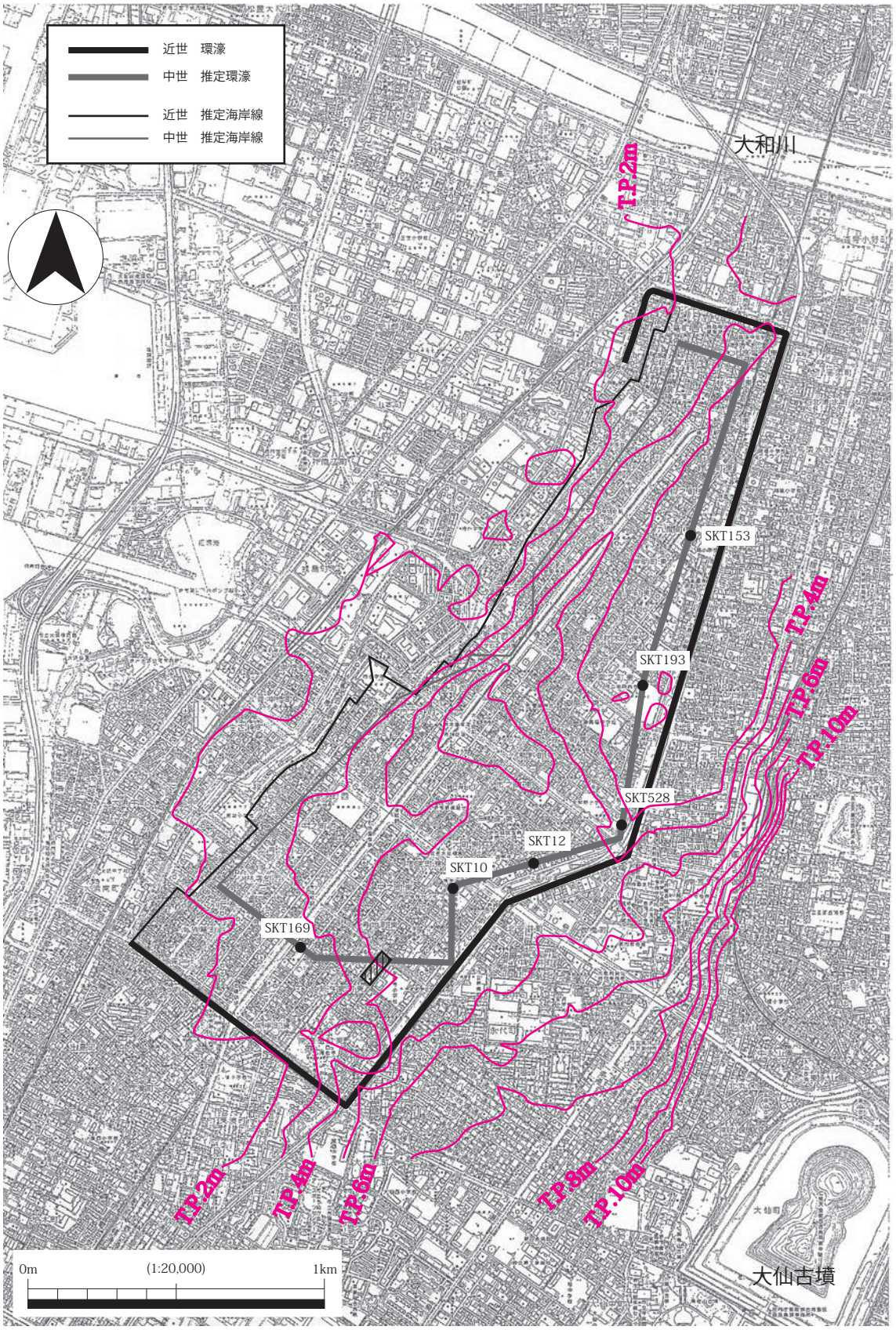


図 4　堺環濠都市遺跡周辺の地形図

産登録に向け活発な運動が行われているが、開発によって半数以上の古墳が姿を消している事実も忘れてはならない。また、古墳群南東部には中期～後期前半を主体とする土師遺跡や陵南遺跡が存在している。陵南遺跡からは多数の鍛冶関連遺物（鉄滓・羽口）が見つかっており、工房的な性格が想定されている。遺跡の立地環境から、土師遺跡を中心として百舌鳥古墳群造営に関わった「土師」部に関連する集団の居住域・生産地との指摘もある。

古代において、現在の堺市域は河内国の一部であったが、霊亀二（716）年和泉監として行政組織に組み込まれる。この和泉監は天平十二（740）年に廃止されて再び河内国に帰属することになる。しかし、天平宝字元（757）年に和泉国が設立され、河内国から離れることになる。その後、平安時代になると堺北庄・堺南庄の二荘園が作られたとみられ、現在市内にみられる大小路が和泉国（和泉国大鳥郡塩穴郷・堺南庄）と摂津国（摂津国住吉郡朴（榎）津郷・堺北庄）の国境となっていた。

また、永保元（1081）年に藤原為房が熊野詣の途に堺小堂に至ったこと[1]や建仁元（1201）年に後鳥羽上皇が熊野詣の途中に境王子に詣でたこと[2]が文献に記されている。院政期には境王子と呼ばれる小堂が建立されており、当時流行していた熊野詣の街道宿として栄えていたと考えられている。

中世に入ると、文献資料から13世紀中頃以降に河内丹南鋳物師の出荷港としての機能があったことが窺え、14世紀代になると海会寺や引接寺などの大きな寺院が建立されるなどの動きがあった。堺の都市としての発展基盤は、この頃に形成されていたことが発掘調査からも明らかにされてきている。応永六（1399）年に起こった応永の乱によって「１万戸」焼失と『応永記』にあるが、それが誇張された表現としても堺がかなりの規模をもった町であったことが窺える。なお、この時の焼土層は砂堆の最高所付近から検出されており、堺の町が砂堆部分を中心に形成され、拡大していくことが明らかとなっている。

その後、15世紀後半代に入ると、応仁の乱によって荒廃した京から多くの公家や僧侶、町人などが堺に避難したことや、文明元（1469）年の遣明船の寄港が契機となって町の発展に大きな拍車がかかったとされている。この日明貿易を基礎とし、さらには琉球や東南アジアとの貿易も加わり町は大いに繁栄することとなった。一方で、応永の乱以降、堺は数多くの大火に遭遇し、その度に力強い復興を遂げる。

大いなる富を得た堺は、その経済力を背景に会合衆によって町の自治管理が行われていたことが、ポルトガル人宣教師のガスパル・ヴィレラの残した書簡[3]から広く知られる。このことが堺が「自治都市」或いは「自由都市」と呼ばれる所以となっている。そして、それを広く象徴しているものが町の三方を取り囲んだ濠といえる。永禄十二（1569）年の天王寺屋宗及の茶会記によれば、上洛した織田信長から

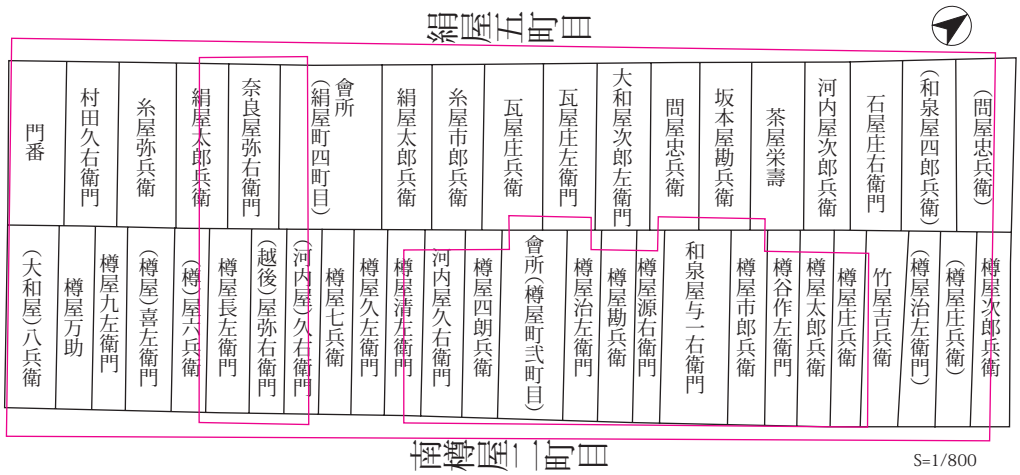


図５　元禄堺大絵図と調査区

の２万貫に及ぶ矢（屋）銭要求に対し濠を掘って対応しようとした町人の自治意識の高さが記されている。[4)]

こうした濠は天正十四（1586）年、天下統一を果たした豊臣秀吉によって埋め戻し令が出された。[5)]「自治都市」堺の政治的解体を象徴する出来事といえる。しかしながら、秀吉はその際、新たに区画整理事業や再開発事業を行い、都市の活性化を計ったと想定されており、経済的には一層の発展を遂げる結果となった。これは中国製染付、朝鮮王朝陶磁器、タイ・ベトナム産陶器などの外国産陶磁器や国内産陶磁器の出土量の急増などから窺える。まさしく、堺は「黄金の日々」を謳歌することとなる。

その後、慶長二十（1615）年、大坂夏の陣を迎え豊臣方の大野道犬による放火により、堺全域は焼失してしまう。翌元和二（1616）年、徳川幕府は堺を幕府直轄地とし、新たな整然とした町割によって商工業に特化した都市として再興された。元禄二（1689）年に作成された堺大絵図にその姿が描き出されている。なお、この堺大絵図を見ると調査地東半分は南樽屋二町目・西半分は絹屋五町目にあたり（図５）、道路を挟んで東側に引接寺と少林寺が建てられている。樽屋町・絹屋町はその名の通り職人町であり、間口が狭く（２間～３間）・奥行きが長い（樽屋側11間半・絹屋側10間）短冊形地割を示す町屋が連なっている。

註

1．「為房卿記」『歴代残闕日記』三　臨川書店

2．藤原定家「熊野行幸記」建仁元年十月六日条

3．『耶蘇会士日本年報』

4．『宗及他会記』永禄十二（1569）年三月条

「去年十月比ヨリ、堀ヲホリ、矢倉ヲアレ（ケ）、事外用意共イタシ候事無専、堺津之道具女子共迄、大坂・平野へ落シ申候也、」と書かれている。

5．『貝塚御座所日記』天正十四（1586）年十一月条

「一、去月廿六日より堺南北ノ堀ヲウムルナリ、即時ニウメテ　関白殿ヨリ被仰出候了、十一月三日四日之時分ハ大かたウメタル由申也、」と書かれている。

参考文献

堺市役所　1977『堺市史』

堺市教育委員会　1983「第１節　堺環濠都市遺跡の成果」『堺　堺市文化財調査報告　第15集』

小西瑞恵　1987「堺都市論―戦国都市堺の形成と自治―」『戦国期権力と地域社会』吉川弘文館

堺市博物館　1989『堺衆―茶の湯を作った人々―』

白神典之　1993「発掘調査にみる堺の歴史」『博多と堺』堺市博物館

續伸一郎　1995「開かれた防衛都市　堺」『中世の風景を読む　第五巻　信仰と自由に生きる』新人物往来社

西村　歩編　1996『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第18集　堺市下田所在　下田遺跡―都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書―』（財）大阪府文化財調査研究センター

堺市博物館　2001『堺発掘物語―古墳と遺跡から見た堺の歴史―』

第４節　調査地周辺の既往の調査成果

堺環濠都市遺跡ではこれまでに堺市教育委員会、大阪府教育委員会によって約1000件近い発掘調査が行われているが、調査地周辺は調査件数がさほど多くない地域である。しかし、注目すべき調査成果が多いため、以下に簡単に既往の調査成果を概観しておきたい。なお、本調査地点との位置関係は図１を参照されたい。

SKT169地点（堺市堺区新在家町東１丁）：本調査区から南西約300mに位置する。民間地開発に伴う発掘調査で、昭和62（1987）年10月～12月に堺市立埋蔵文化財センターによって実施された。

調査では17世紀前半～18世紀後半の近世の遺構面が確認され、その下位から濠が検出されている。

検出された濠は２本（SF01・SF02）存在するが、調査範囲の関係で両者が「Ｌ」字状に合流するのか、「Ｔ」字状に接合するのかは不明とされている。

SF01は褐色砂層を切り込んで形成されており、当初の規模は幅11.5m・深さ2.3mである。完全に埋没するまでに５段階あったとされ、４段階目に赤褐色砂礫層を用いて一気に埋め戻し、濠幅を４ｍまで減じている。SF02は推定幅４ｍ・深さ1.2mの規模である。この濠はSF01埋め立ての４段階目に用いられた赤褐色砂礫層で完全に埋没する。

SF02の西側すなわち都市域側に埋め立てに使用した赤褐色砂礫層の存在が確認されている。これは元々土塁状の構築物が存在しており、それを崩して濠を埋めたと想定されている。この行為は、文献資料にみられる天正十四（1586）年の豊臣秀吉による命によるものと捉えている。

SKT179地点（堺市堺区少林寺町東４丁）：下水道工事に伴う立会調査である。堺市立埋蔵文化財センターによって昭和62（1987）年８月～昭和63（1989）年３月に実施された。

本調査地点の東隣にある少林寺小学校の北西角付近に位置する場所（SKT179－１ライン５地点）において、現地表下約1.6m（T.P.2.4m付近）で石垣を伴う濠状遺構が確認された。濠はやや南へ振る東西主軸と推定されている。検出された石垣は花崗岩と砂岩を５段に積んだもので高さ約1.2mを測る。裏込めには多量の円礫を用いていた。濠の埋土は黒色粘土とされており、一辺約0.3m・長さ約1.3mの角材２本と一石五輪塔などが出土している。また、周辺の立会調査の結果からこの濠状遺構よりも南側では慶長二十年の焼土は検出されないとしている。

SKT391地点（堺市堺区少林寺町東４丁）：本調査地の東側に隣接する堺市立少林寺小学校の体育館改修工事に伴う発掘調査である。堺市立埋蔵文化財センターによって平成４（1992）年６月～９月に実施された。SKT391地点は元禄二（1689）年に作成された堺大絵図には、町名の由来ともなっている少林寺の一角であることが記されている。

調査では４時期の遺構・遺物が確認されている。Ⅰ期は古墳～奈良時代。Ⅱ期は16～17世紀初頭。Ⅲ期は17世紀前～中。Ⅳ期は18～19世紀。Ⅰ期には明確な遺構は存在しないものの、黒褐色及び暗褐色の包含層から須恵器、土師器、円筒埴輪などが出土している。Ⅱ期の遺構は粘土採掘坑が主体であったようで、中世環濠内の都市域への粘土供給地と推定されている。Ⅲ期には区画溝や埋甕がみられる。近世堺の寺町形成期に相当する段階としている。Ⅳ期には井戸、廃棄土坑が主体となっている。

先にも述べたように、この地点は少林寺の一角であったとされているが、それに関わるような直接的な遺構は検出されていない。

なお、基盤層は東から西に向けて落ちて行く低位段丘構成層の黄橙色または灰白色粘土となってい

る。Ⅰ期の遺物を含む包含層はこの直上に堆積したもので、少林寺町東から南旅籠町・南半町にかけて広がっているものである。

SKT331地点（堺市堺区少林寺町東２丁）：本調査地から西へ約120mに位置する。民間地開発に伴う発掘調査で、平成３（1991）年１月～５月に堺市立埋蔵文化財センターによって実施された。

調査では第二次世界大戦の焼土被災面を含めた７面が確認されている。第３遺構面と称されているのが慶長二十（1615）年の大火被災面であり、これよりも上位面とは様相が異なり、町並の方向が変わるようである。この遺構面には塼列建物が見られず、礎石が小さく粗末な礎石建物で町が構成されていたと推定されている。近世段階には規模の大きな竈遺構が多く築かれており、この地点の特徴的な資料と報告している。

なお、15世紀に遡る遺構面は確認されておらず、町として形成されるのは早くても16世紀中頃と想定されている。遺物には高級茶陶などが少なく、遺物量も少ないとされている。

参考文献

堺市教育委員会　1989『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書　SKT169地点―堺市新在家町東１丁11―１，２―』

堺市教育委員会　1990『堺市文化財調査概要報告第７冊　堺環濠都市遺跡立会調査概要報告Ⅱ―昭和62年度下水道地区整備事業に伴う事前調査（SKT179・180・182）』

堺市教育委員会　1992「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告―SKT331地点――堺市少林寺町東２丁３番１所在　ビル建設工事に伴う事前緊急発掘調査」『堺市文化財調査概要報告　第30冊』

堺市立埋蔵文化財センター　1994「１.堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告―少林寺東４丁（少林寺小学校）SKT391地点―」『堺市文化財調査概要報告　第45冊』堺市教育委員会

第２章　調査の概要と基本層序

第１節　調査の概要

今回の調査地は、堺環濠都市遺跡内の東南部に位置し、近世期の東側環濠から西に約200m、南側環濠から北へ約400mの場所にある。

この場所は、明治期には和泉豪商名家図譜にみられるように、油製造所が操業していた。それを窺わせるように機械掘削を行っている際には大きな礎石が並ぶ状況や、多くの井戸が掘削されている様子が看取出来た。また、操業時に使用されたと想定されるような直径約0.5m・高さ0.32mを測る巨大な花崗岩製の石臼の出土がみられた。

近世期は元禄堺大絵図に示されるように、調査地の東半分が南樽屋二町目・西半分は絹屋五町目である。それを看取させるように、町屋表側にあたる１調査区東・西端部及び２調査区東端部で礎石建物が立ち並び、裏側に当たる部分では多数の廃棄土坑や溝、埋甕、井戸などが検出された。町屋は絵図に記載されている通り、短冊形の地割りを呈し、１軒ずつの敷地は間口が狭く奥行きが長いものであった。また、樽屋町と絹屋町は調査地の中央を南北方向にはしる区画溝によって区分されていた。さらには、２調査区において中世環濠を埋め立て、近世町屋へと姿を変える過程を確認することが出来た。

中世期に関しては、調査地直近のSKT179－１ライン５地点において石垣を伴う濠状遺構が確認されていたことから、今調査においてその続きにあたる濠の検出が期待されていた。結果として、２調査区で濠が検出されたが、従来の予想や知見を覆す４条もの濠の存在を確認することとなった。濠は掘削と埋め戻しを繰り返して、南側へと都市域を拡張するかのように存在していた。一番北端で検出した2300濠は幅約17m、深さ約４mを測り、これまで発見されていた濠の中でも最大級の規模をもつものであった。この濠は内側（都市域側）に掘削土を積み上げた土塁状の施設を構築していた。埋め戻しに際しては、この土塁状施設を崩しながら埋めた様子が看取出来る。この様相は、これまでにもSKT169地点などで確認されている状況と同じで、天正十四（1586）年の豊臣秀吉の命によるものと推察される。

一番南端で検出した2330－１濠は、慶長二十（1615）年の大坂夏の陣による焼土がこの濠よりも北側に存在することや濠のすぐ南側に位置する１調査区には中世期の町屋が広がっていないことから、慶長二十（1615）年段階に機能していた濠であることが明らかとなった。また、先にも述べたように、この濠を埋め立てて近世堺へと変貌していく過程を明らかにすることが出来た。このように濠の変遷を明白に出来たことは、中世堺の発展を考える上でも重要な知見を得ることとなった。

なお、中世期の濠の外、すなわち都市域外の様子は１調査区において鋤溝群を検出したことから、耕地が広がっていたことを明らかにしえた。

中世以前に関しては、明確な遺構を検出することが出来なかったが、足跡が残された土壌化層を確認し、何らかの人為的活動が営まれていたことが解った。さらには、SKT391地点など調査地周辺で確認されている古墳～古代の遺物を含む包含層に対応する層を検出した。今調査においても埴輪や円面硯、須恵器、土師器などが出土している。また、土壌化層は複数存在することも判明し、調査地は東側にある低位段丘と西側にある砂堆に挟まれた後背湿地状の地形であったことが明らかになった。

第２節　基本層序

遺跡中心部は都市遺跡の性格上、度重なる大火による複数の焼土層と盛土による重層的な整地の繰り返しによって都市が形成されている。しかし、今回の調査地点は遺跡の南東部に位置し、都市の外郭に当たるため、中心部で見られるような鍵となる焼土層が明瞭ではなかった。また、近世段階では短冊形地割りを示す狭小な町屋単位で細かな整地層を盛るために、１つの調査区内だけを取り上げても共通する層序が存在しない状態であった。従って、少し煩雑にはなるが、調査区毎に簡単に層序を記述することにする。

なお、地表面から約0.6～1.7mの深さで確認される旧少林寺団地の造成土、近現代整地土は機械によって掘削した。また、一部を除き、近世整地層も機械を用いて掘削したが主な遺物は回収した。

１調査区東側〔図６・８〕

東端に礎石建物が重層的に構築される。基本的に東端には、段丘構成層を用いた厚い盛土による整地が行われ、建物内には黄色系粘土を敷いたり、シルトや細砂を丁寧に締め固めている。

敷地裏側に当たる西寄り部分には層厚0.1～0.2mの複数の砂質系整地層を盛って面を形成する。また、建物以外でも脆弱な部分には黄色粘土を薄く貼ったり、礫や瓦等を多量に入れ整地土の補強を行っている。

第１層　旧少林寺団地の基礎などの撹乱が著しく、全体に残りはよくない。調査区中央付近は暗灰黄～黒褐色系の中砂～粗砂でφ0.5～2㎝前後の礫や黄灰色粘土ブロックを含む。東端は黄褐～灰白色系粘土や礫層である。層厚は0.1～0.2m。近世末～近代の整地層である。

第２層　暗灰黄～暗オリーブ褐色系のシルト混極細砂～粗砂。炭や黄色系粘土ブロック等を含む。層厚は0.1～0.2m程度。瓦・陶磁器を含む。調査区東端付近には存在せず、中央付近にのみ見られる。近世末～近代の整地層。

第３層　調査区中央付近は明黄褐色のシルト混中砂～粗砂。炭や小礫・瓦・陶磁器を含む。層厚は0.1～0.25mである。調査区東端付近では黄褐色粗砂混シルトやオリーブ褐色・黒褐色の粗砂混シルト～中砂などが細かく整地され、第４層と区分し難い。近世後半の整地層。

第４層　暗灰黄～灰黄色系中砂～粗砂混シルト。炭や焼土、黄色系粘土ブロック、φ0.3～5㎝前後の礫を含む。層厚は0.1～0.25m程度。調査区東端付近では黄褐色粗砂混シルトやオリーブ褐色・黒褐色の粗砂混シルト～中砂などが細かく整地され、第３層と区分し難い。近世中頃の整地層。

第５層　黄灰色系のシルト質中砂～粗砂。炭や黄色系粘土ブロック、礫を含む。層厚は0.1～0.2m。調査区東端付近ではオリーブ黄色のシルト質細砂やオリーブ褐色の細～中砂混粘土などが細かく整地され第６層と区分し難い。層厚は0.2m程度。近世中頃の整地層か。

第６層　調査区中央部は褐灰～黄灰色系のシルト質粗砂。炭やφ0.3～0.5㎝の礫、黄色系の粘土ブロックを含む。層厚は0.2mを測る。場所によっては第７層と区分し難い。調査区東端付近ではオリーブ黄色のシルト質細砂やオリーブ褐色の細～中砂混粘土などが細かく整地され第５・７層と区分し難い。近世前半～中頃の整地層。

第７層　調査区中央部では黄灰色系シルト混細～粗砂。炭や焼土・φ0.3～1.5㎝前後の礫を含み硬く締まる。層厚は0.1～0.2mを測る。場所によっては第６層と区分し難い。東端は黄白色系礫混粘土（段丘

構成層）で非常に硬く締まる。近世前半の整地層。

第８層　褐色系粘土（第11層以下由来）ブロック・灰白色系粘土ブロック・黄褐色系粘土ブロックを混ぜたもの。または褐色系のシルト混中～粗砂。層厚は0.1～0.3m。東端の建物部分は黄色系粘土・細砂・緑色シルトなどを非常に薄く何層にも重ね硬く締める。近世前半の整地層。

第９層　黄灰～暗灰黄色系の極細～中砂。炭を含む。第10層を母材とした土壌化層である。層厚は0.1～0.3m。当層以下の堆積層は、近世以前の堆積層で調査範囲全域に検出されるものである。なお、当層の上部に部分的ではあるが灰状のシルト層が非常に薄く堆積するのを確認した。慶長二十（1615）年の大火の際の灰が降下した可能性が想定できる。

第10層　灰黄色系中～粗砂。層厚は0.2～0.5m。第９層の母材となる。東側が厚い。瓦器や瓦質土器を少量含む。北側では第11層をブロックとして含む。

第11層　黒褐色小礫混粘土。調査区全体に見られる土壌化層である。層厚は0.2～0.3mを測る。詳細に観察すると３層程度に細分出来る。土師器・須恵器・埴輪・黒色土器などを含む。

第12層　黒褐色礫・細～中砂混シルト質粘土。第11層同様に全体的に見られる土壌化層。層厚は0.1～0.15mを測る。東へ行くほど礫の含有量を減じる。無遺物層。

第13層　母材となるｂ層は褐灰色のシルト混粘土。上面は弱く土壌化している。層厚は0.1～0.15m。

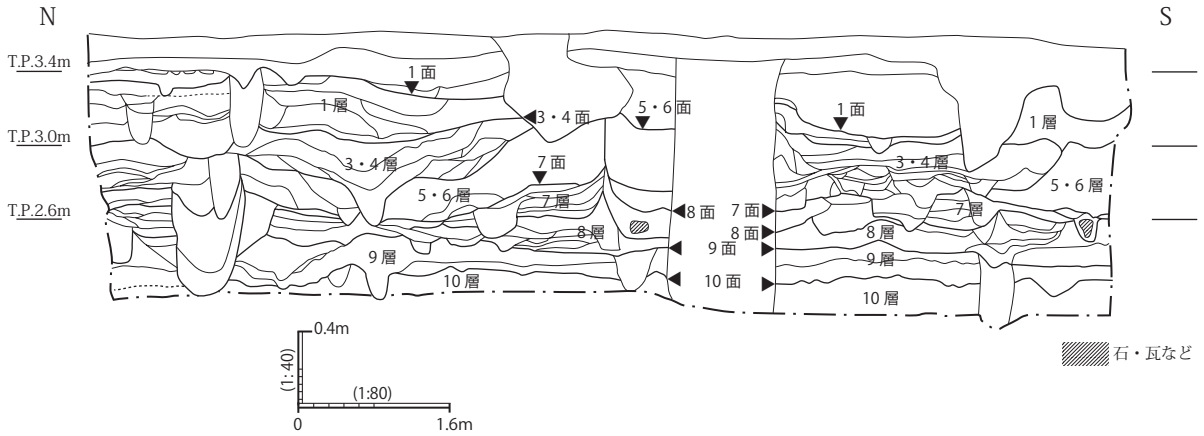


図６　１調査区東壁　断面図

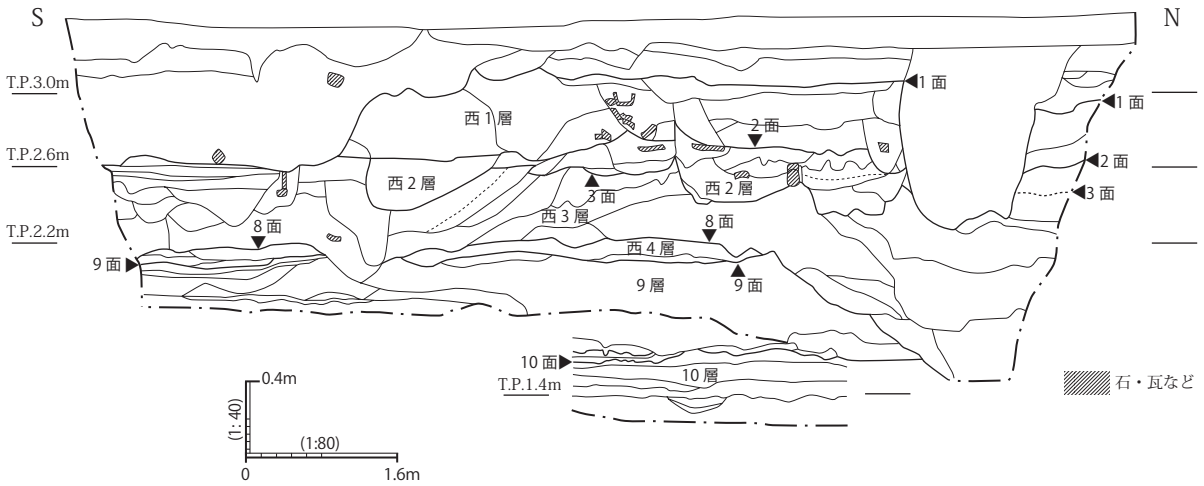
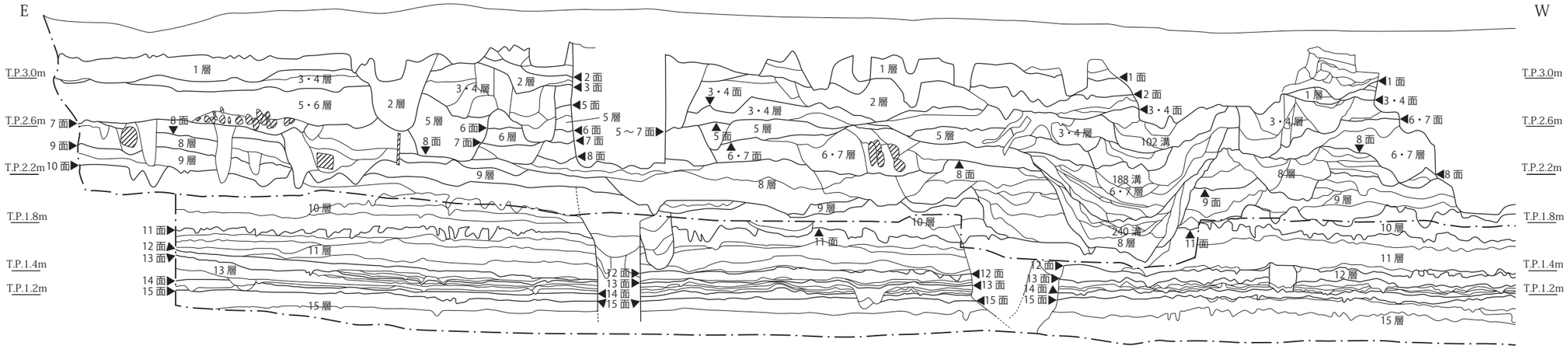


図７　１調査区西壁　断面図



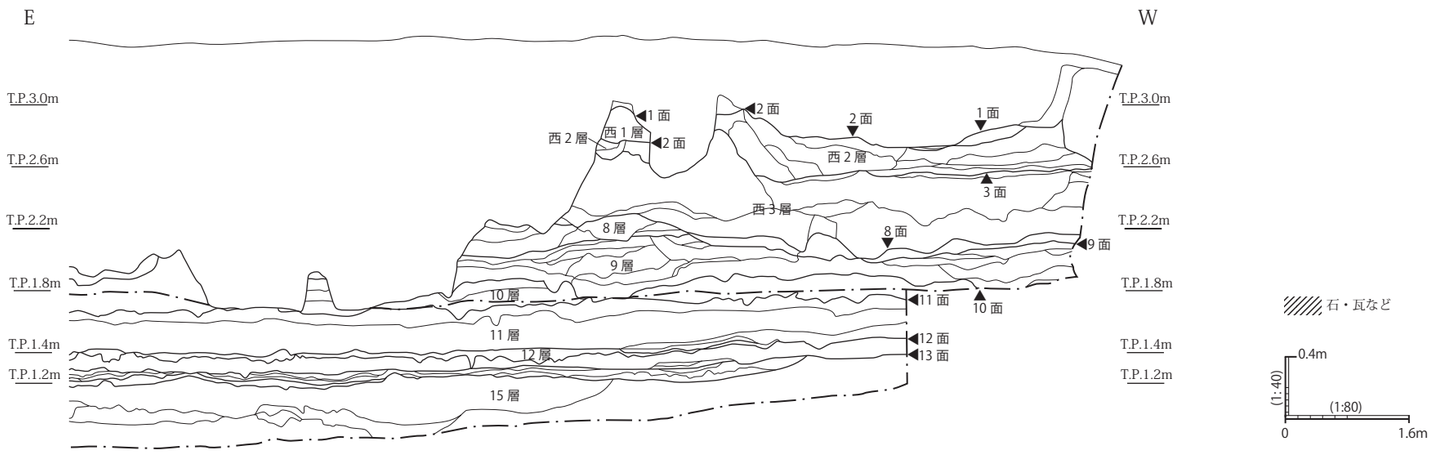


図 8　1 調査区南壁　断面図

但し、西側に厚く堆積するものの東に向かって薄い堆積となる。

第14層　母材となるｂ層は灰白色中～粗砂。上面は弱く土壌化する黒褐色極細～中砂混シルト質粘土。層厚は0.05～0.1m。西側に厚く堆積するものの東に向かって薄い堆積となる。

第15層　にぶい黄橙～灰色粗砂。φ0.3～2㎝前後の礫、カルシウム、炭、植物遺体を多く含む。非常に分厚く層厚0.8m以上を測る。

１調査区西側〔図７・８〕

旧少林寺団地の建物基礎による撹乱よりも西側。西端に礎石建物が重層的に構築される。基本的に建物下には砂を用いた厚い盛土による整地が行われている。本来は調査区東側同様に、敷地裏側に当たる部分には複数の整地層が盛られていたと考えられるが、旧少林寺団地の建物基礎により整地層は失われていた。結果として、調査区東側との関係を明確にするには至っていない。

第１層（西）　灰黄色系中～極粗砂。層厚は0.2～0.3mを測る。非常に締まりが悪く、上面に薄く黄色系粘土を貼り面を形成する。

第２層（西）　黄灰～黄色系中～粗砂。層厚は0.1～0.2mを測る。締まりが悪く、上面に薄く黄色系粘土を貼り面を形成する。焼土や炭を含む。

第３層（西）　黄褐～灰色系細～粗砂。φ0.3～１㎝の礫を多く含む。層厚は0.3～0.35m。全体的に締まりが悪く、上面に薄く黄色系粘土を貼り面を形成する。

第４層（西）　褐灰色系もしくは灰黄色系極細～粗砂。層厚は0.1～0.15mを測る。上層よりも砂による整地は締りがよい。礫を多く含んだ整地を行う部分も存在する。上面は黄色系粘土もしくは灰色系シルト質粘土を貼り面を形成する。

第５層（西）　１調査区東側第９層と同一。これ以下の層位は１調査区東側と共通する。

２調査区〔図９〕

１調査区東側同様に、東端には礎石建物が重層的に構築される。一方、建物の裏側にあたる西側部分は旧少林寺団地の建物基礎や近現代の撹乱により、整地層の大半は失われていた。結果として、調査区東側との関係を明確にするには至っていない。なお、当区では近世遺構面の下から環濠の検出が予想されていたため、調査期間との兼ね合いもあり東端で見られる近世整地層は機械で掘削し、断面観察に留めた。

第Ⅰ層　第二次世界大戦の焼土や旧少林寺団地の造成土などの現代の整地層。レンガやコンクリート、瓦、φ２～10㎝の礫を多量に含む。

第Ⅱ層　固く締まった黄色系粗砂や褐色系中砂を交互に積んだ整地層。段丘層由来の黄褐色系の偽礫ブロックやφ２～４㎝の礫を含む。近代の整地層である。１調査区の第１～２層に相当か。

第Ⅲ層　固く締まった黄色系極細砂や褐色系中砂を交互に積んだ整地層。段丘層由来の黄褐色系の偽礫ブロックやφ２～４㎝の礫、瓦を含む。近世の整地層である。１調査区の第３～６層に相当か。

第Ⅳ層　黄色系極細砂や褐色系細砂を交互に積んだ整地層。段丘層由来の黄褐色系の偽礫ブロックやφ２～５㎝の礫、瓦を含む。近世の整地層である。１調査区の第７～８層に相当か。

第Ⅴ層　調査区東側の北半部分と西側北半分にのみ存在する焼土層。層厚は0.1m程度。確認出来た部分では平坦に存在するのではなく、場所により0.2mほどの高低差がある。大坂夏の陣による焼土（慶

長の焼土）層に比定されるものであろう。

第Ⅵ層　第Ⅴ層である焼土層下位にある黄色系粘土ブロックを含む褐色系中～極細砂。大坂夏の陣以前の整地層か。層厚は0.1～0.3mを測る。

第Ⅵ層より下位の層位は１区東側の第10層以下と共通する。２調査区で検出した濠は１調査区の第10層が掘り込み面となっている。

なお、２調査区では１調査区で確認が出来なかった段丘層をT.P.０m前後にあたる2300濠の中段以下及び2330濠の底面で確認出来た。

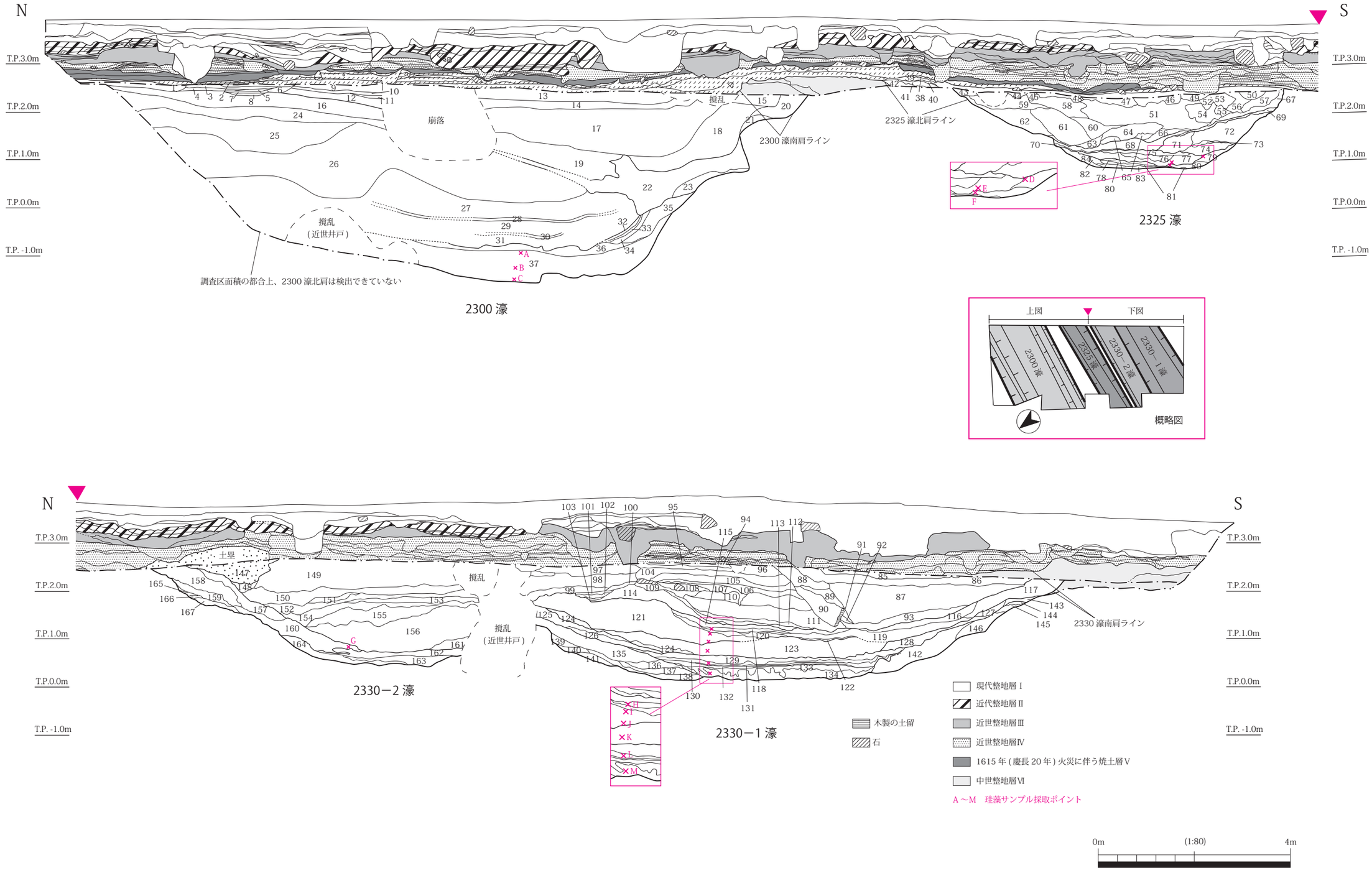


図 9　2 調査区東壁　断面図

2 調査区東壁濠部分断面図土色

2300濠

1.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質中砂　極細砂～φ0.5cmの礫混じる　オリーブ黄5Y6/3、褐灰シルトブロック、黄褐粘土ブロック多く混じる
2.黄褐2.5Y5/3　中砂～極細砂　粗砂～極細砂混じる
3.灰黄褐10YR4/2　粗砂質中砂～細砂　極粗砂～φ0.4cmの礫混じる　褐灰粘土ブロック、オリーブ黄シルトブロック混じる　上面に黄褐シルト貼る
4.灰黄褐10YR4/2　シルト質中砂　粗砂～φ0.5cmの礫含む　灰褐、オリーブ黄粘土～シルトブロック混じる
5.オリーブ褐2.5Y4/3　粗砂～細砂　φ0.3～1cm前後の礫含む
6.黒褐10YR3/2　極粗砂～シルト　φ0.2～2cm大の礫多く混じる
7.灰黄褐10YR4/2　粗砂～φ1cm大の礫　φ2cm大の礫含む
8.黄褐2.5Y5/3　粗砂～中砂
9.黒褐10YR3/2　粗砂～φ3cm大の礫混中砂
10.黒褐10YR3/2　粗砂質中砂
11.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～シルト　粗砂～φ1cm前後の礫混じる　φ2cm大の礫含む
12.褐灰10YR4/1　シルト～極細砂質粗砂　オリーブ黄、褐灰極細砂質シルトブロック混じる
13.オリーブ褐2.5Y4/3　中砂～極細砂　極粗砂～φ3cmの礫含む
14.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂～極細砂　極粗砂～φ1.5cm前後の礫混じる　φ5cm前後の礫含む　黄褐シルトブロック混じる
15.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質中砂～極細砂　粗砂～5cm迄の礫多く混じる
16.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質粗砂～細砂　φ0.2～1cmの礫混じる　褐灰粘土ブロック、オリーブ黄シルトブロック含む
17.暗灰黄2.5Y4/2～黄灰2.5Y4/1　粗砂～極細砂　φ0.2～1.5cmの礫多く混じる　褐灰シルトブロック混じる
18.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質中砂～極細砂　φ0.3～1cm前後の礫混じる　φ3～6cmの礫含む　黄褐粘土ブロック混じる
19.灰オリーブ5Y4/2～灰5Y2/1　シルト質中砂～極細砂　極粗砂～φ1cmの礫、オリーブ黄5Y6/4シルト質極細砂ブロック含む
20.オリーブ褐2.5Y4/3　粗砂～細砂（10層が垂れ込んだもの）φ0.3～1cm前後の礫含む　褐灰シルトブロック混じる　鉄分沈着
21.オリーブ褐2.5Y4/3　粗砂混中砂～細砂　φ0.5～1.5cmの礫含む
22.黒N1.5/0　粘土
23.黄灰2.5Y5/1　中砂質粗砂　極細砂～φ0.4cmの礫混じる　φ1cm大の礫含む
24.黄褐2.5Y5/6～暗灰黄2.5Y4/2（濠中央部においては緑灰5G5/1を呈する　グライ化か？）シルト質中砂～極細砂　粗砂～φ1cm迄の礫混じる　φ1～4cmの礫含む　オリーブ黄5Y6/3シルトブロック、褐灰粘土ブロック混じる
25.黄褐2.5Y5/4～オリーブ褐2.5Y4/4　中砂～細砂混シルト　1辺10cmの礫含む　黄褐～オリーブ黄極細砂質シルトブロック、黒褐10YR3/1シルト～粘土ブロック多く混じる
26.25と同質であるが暗青灰10BG4/1にグライ化　暗青灰10BG5/1極細砂質シルトブロック（25黄褐ブロックのグライ化）、黒褐2.5Y3/1粘土ブロック（25黒褐ブロックのグライ化）多く混じる
27.25と同質であるが灰7.5Y4/1にグライ化　オリーブ灰10Y5/2極細砂質シルトブロック（25黄褐ブロックのグライ化）、黒褐10YR3/1極細砂質シルトブロッ（25黒褐ブロックのグライ化）混じる
28.黒N1.5/0　粘土
29.灰オリーブ5Y4/2　中砂～細砂質シルト　極粗砂～φ1.5cmの礫混じる　3cm大の礫含む　緑灰10G5/1粘土ブロック、オリーブ灰10Y6/2極細砂質シルトブロック多く混じる
30.黒N1.5/0　粘土
31.灰オリーブ2.5Y4/2　粗砂～中砂質シルト　極粗砂～φ2cm前後の礫混じる　緑灰10GY5/1と褐灰10YR4/1極細砂質シルトブロック多く混じる
32.オリーブ黒7.5Y3/1　粘土　極細砂混じる（ラミナ確認）
33.灰オリーブ5Y5/2　シルト質細砂～極細砂（ラミナ確認）
34.オリーブ黒7.5Y3/1　粘土　極細砂混じる（ラミナ確認）
35.オリーブ黒5Y3/1　粗砂　黒褐2.5Y3/1　中砂混粘土質シルトブロック混じる
36.灰オリーブ5Y5/2　シルト質細砂～極細砂（ラミナ確認）
37.オリーブ黒7.5Y3/1　粘土　極細砂が混じる（ラミナ確認）

2325濠

38.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混シルト質中砂～細砂
39.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混シルト質細砂　明褐5YR5/8シルトブロック含む
40.オリーブ褐2.5Y4/3　中砂～粗砂　φ0.2～1cm前後の礫含む
41.暗オリーブ褐2.5Y3/3　細砂～中砂　灰オリーブ5Y6/2シルト質極細砂ブロック、炭含む
42.暗オリーブ褐2.5Y3/3　中砂～粗砂　φ0.2～1cm前後の礫含む
43.灰オリーブ5Y6/2　シルト
44.灰黄2.5Y6/2　中砂混シルト　粗砂混じる　炭含む
45.褐灰10YR4/1　中砂～粗砂
46.オリーブ褐2.5Y4/3　中砂～極細砂　極粗砂～φ1cm大の礫、炭混じる
47.暗オリーブ褐2.5Y3/3　シルト質中砂～細砂　φ0.5cm前後の礫混じる　φ1cm大の礫含む　炭混じる
48.暗灰黄2.5Y5/2　中砂～細砂
49.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～極細砂　粗砂～φ0.7cm大の礫混じる　黄褐シルト～粘土ブロック混じる　炭下部に多く堆積
50.褐灰10YR4/1　シルト質中砂～細砂　極粗砂混じる　褐灰粘土ブロック混じる
51.褐灰10YR4/1　極細砂質シルト　極粗砂～2cm大の礫含む
52.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層）（濠埋め戻し土のブロック）
53.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層）（濠埋め戻し土のブロック）
54.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト～中砂　褐灰粘土ブロック混じる（濠埋め戻し土のブロック）
55.褐灰10YR4/1　粘土質シルト φ1～2cmの礫含む（濠埋め戻し土のブロック）
56.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～極細砂　粗砂～φ1cmの礫混じる　炭、黄褐シルト～粘土ブロック混じる
57.灰黄褐10YR4/2　中砂～粗砂　φ1～3cm大の礫僅かに含む　褐灰シルトブロック混じる
58.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質細砂～極細砂　中砂～極粗砂混じる　φ1cm未満の礫含む　炭含む
59.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト～粗砂　極粗砂～φ1cmの礫混じる　φ1～2cm大の礫含む　灰オリーブ5Y6/2シルトブロック混じる　褐灰粘土ブロック含む
60.黄灰2.5Y4/1～暗灰黄2.5Y4/2　シルト質細砂～極細砂　φ0.5～3cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック、灰オリーブシルトブロック含む　炭含む
61.黄灰2.5Y4/1～暗灰黄2.5Y4/2　シルト質細砂～極細砂　φ0.5～3cm大の礫含む（60より礫多い）褐灰粘土ブロック、灰オリーブシルトブロック含む　炭含む
62.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質細砂～極細砂　粗砂～3cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック、オリーブ黄5Y6/3シルトブロック多く混じる　炭含む
63.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質中砂　φ0.4cm程度の礫含む　褐灰、灰オリーブシルトブロック混じる　炭含む
64.暗灰黄2.5Y4/2　細砂～中砂混シルト　φ0.3～3cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック、灰オリーブ5Y5/3シルトブロック多く混じる
65.灰オリーブ5Y5/3　シルト
66.黒褐2.5Y3/2　粗砂混シルト～中砂　φ0.2～1cm大の礫含む　褐灰シルトブロック混じる　炭含む
67.褐灰10YR4/1　粘土
68.暗灰黄2.5Y4/2　細砂～中砂混シルト　φ0.3～1cm大の礫含む　オリーブ5Y5/4シルトブロック 、褐灰粘土ブロック混じる
69.褐灰10YR4/1　粘土
70.黄灰2.5Y4/1　細砂混粘土
71.黒褐2.5Y3/2　粗砂混シルト～中砂　φ0.2～0.7cmの礫混じる　褐灰粘土ブロック混じる
72.オリーブ褐2.5Y4/3　中砂～シルト　φ0.3～2cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック混じる　炭僅かに含む
73.暗灰黄2.5Y5/2　粗砂質中砂
74.オリーブ褐2.5Y4/3　中砂～シルト　φ0.3～2cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック混じる　炭僅かに含む
75.黄褐10YR5/6　極粗砂混中砂　φ0.5cm前後の礫含む
76.黄褐2.5Y5/3　粗砂質中砂
77.褐10YR4/6　中砂～φ0.5cm前後の礫　φ1～3cm大の礫混じる　黄灰2.5Y4/1極細砂ブロック含む
78.褐灰10YR4/1　粘土
79.黒褐2.5Y3/2　中砂～粗砂 φ0.3～0.5cm前後の礫混じる φ1～1.5cm大の礫含む
80.灰黄2.5Y6/2　中砂～極粗砂（上方粗粒化）
81.黄褐2.5Y5/3　中砂　粗砂～極粗砂含む　炭粉多く含む

82.黒褐2.5Y3/2　中砂～粗砂　φ0.3～05cm礫混じる
83.オリーブ褐2.5Y4/4　シルト質細砂～中砂　粗砂～φ0.5cmの礫混じる　褐灰中砂混シルトブロック混じる　炭僅かに含む
84.黒褐2.5Y3/1　細砂混極細砂～シルト
2330-1濠
85.オリーブ褐2.5Y4/3　細砂～中砂　にぶい黄粘土ブロック混じる
86.黄灰2.5Y4/1　中砂～極細砂混シルト　φ0.5cm前後の礫含む　褐灰粘土ブロック含む　炭含む
87.暗灰黄2.5Y4/2　極細砂～シルト質粘土と明黄褐2.5Y7/6シルト質粘土が混じる　φ0.5～1cmの礫含む
88.明黄褐2.5Y6/6　細砂混極細砂質シルト　粗砂～φ1cm前後の礫混じる
89.黄褐2.5Y5/3　極粗砂混粗砂質中砂
90.明黄褐10YR6/6～灰白5Y7/1　粘土　粗砂～φ0.3cmの礫含む
91.黒褐2.5Y3/1　中砂混シルト質粘土　炭多く混じる
92.暗灰黄2.5Y4/2　極細砂質シルト φ0.5～2cm大の礫含む　炭含む
93.褐灰10YR4/1　シルト質粘土と緑灰10G6/1シルト質粘土が混じる　所々明黄褐色に変色
94.黄灰2.5Y4/1　シルト質中砂～極細砂　黄褐～淡黄粘土ブロック多く混じる
95.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～粗砂　極粗砂～φ1cm迄の礫混じる
96.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂～極粗砂混シルト～極細砂　φ1～2cmの礫含む　黄褐2.5Y5/6シルト質粘土ブロック多く混じる
97.黒褐10YR3/1　中砂～細砂質シルト　φ0.4～1cm迄の礫含む　炭粉含む
98.黒褐2.5Y3/1～3/2　細砂～中砂質シルト　φ0.2～1cmの礫混じる　オリーブ黄シルト質極細砂ブロック混じる
99.黄褐2.5Y5/4、オリーブ灰5GY6/1　粗砂混シルト質粘土
100.明黄褐10YR6/6～灰白5Y7/1　粘土
101.黒褐2.5Y3/2　シルト質細砂～極細砂　極粗砂～φ0.5cm迄の礫含む　炭含む
102.黄褐2.5Y5/4、オリーブ灰5GY6/1　粗砂混シルト質粘土
103.灰7.5Y5/1　中砂混細砂～極細砂
104.にぶい黄2.5Y6/3　極細砂～シルトと明黄褐2.5Y6/6粘土と暗灰黄2.5Y4/2極細砂質シルトが混じる
105.褐10YR4/6　シルト～極細砂とにぶい黄2.5Y6/3粘土が混じる
106.灰黄2.5Y6/2　中砂～粗砂混粘土
107.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂～シルト　極粗砂～φ0.5cmの礫混じる
108.灰5Y6/1　極粗砂～粗砂混粘土
109.褐灰10YR4/1　粗砂混細砂～シルト　極粗砂混じる
110.明黄褐10YR7/6～灰黄2.5Y7/2　粘土　粗砂～φ0.3cmの礫含む
111.緑灰10GY6/1　粘土　粗砂～φ0.3cm前後の礫含む　所々黄褐色に変色
112.黒褐2.5Y3/1　細砂混極細砂質シルト　φ1cm迄の礫、φ4cm大の礫含む　植物遺体多く混じる
113.黒褐2.5Y3/1　細砂混極細砂質シルト　φ0.3～5cm大の礫含む　灰白7.5Y5/1粘土ブロック混じる（北側では粘土ブロックが主体となる）植物遺体混じる
114.灰オリーブ5Y5/2～暗オリーブ灰2.5GY4/1　粘土　粗砂～φ0.5cmの礫含む
115.黒10YR2/1　極細砂混シルト～極細砂質シルト　暗オリーブ灰5GY4/1粘土ブロック含む　植物遺体多く含む
116.オリーブ黒5Y3/1　極細砂～細砂混粘土　φ1cm前後の礫含む　植物遺体多く含む
117.黒褐2.5Y3/1　シルト混中砂～粗砂（中砂主体）　黄褐、褐灰粘土ブロック混じる
118.灰5Y4/1　粗砂～中砂　極粗砂含む
119.黒褐2.5Y3/1　粘土　植物遺体僅かに含む　炭含む
120.オリーブ黒5Y3/1　粗砂～中砂　φ0.3～1cm大の礫含む
121.黒褐2.5Y3/2　シルト質中砂～細砂　φ0.5～1cm前後の礫、φ2～3cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック含む
122.オリーブ黒5Y3/1　中砂～極細砂　黒褐粘土ブロック混じる
123.黒N1.5/0　粘土
124.黒褐2.5Y3/2　細砂～極細砂質シルト　φ1cm迄の礫含む
125.暗灰黄2.5Y4/2　中砂質細砂～シルト　極粗砂～φ1cm前後の礫含む
126.黄褐2.5Y5/3　細砂～極細砂　φ0.5cm前後の礫含む
127.黒褐2.5Y3/2　シルト質中砂～極細砂　φ0.7～1cm大の礫含む　褐灰粘土ブロック含む　炭粉混じる
128.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂　φ1cm前後の礫含む　極粗砂含む
129.灰5Y6/1　中砂～細砂　φ0.3cm前後の礫含む　46が攪拌されたものがブロックとして混じる
130.黒褐10YR3/1　粘土
131.灰5Y4/1～5/1　中砂～細砂　粗砂混じる
132.黒褐2.5Y3/1　粘土
133.暗灰黄2.5Y5/2　極粗砂～φ0.5cmの礫混粗砂　φ1cm大の礫含む
134.オリーブ黒5Y3/1　粘土　極粗砂～中砂部分的に集中
135.オリーブ褐2.5Y4/3　粗砂～中砂　極粗砂～φ1cmの礫多く混じる　φ4cm迄の礫含む　黒褐2.5Y3/2粗砂～極粗砂混じる　シルト質中砂～細砂ブロック含む
136.オリーブ黒5Y3/1　細砂混シルト質粘土　φ0.2～0.4cmの礫含む　炭含む
137.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～φ1cm迄の礫　φ1～2cmの礫含む
138.オリーブ黒5Y3/1　細砂～極細砂
139.褐灰10YR4/1　シルト質中砂～極細砂　φ1cm迄の礫含む　粗砂～極粗砂混じる
140.黄褐2.5Y5/3　極粗砂～粗砂混中砂～細砂　φ7cm大の礫含む
141.黒褐2.5Y3/2　シルト質中砂～極細砂　φ1cm迄の礫含む　鉄分沈着目立つ
142.黒褐2.5Y3/1　シルト混中砂と　褐灰10YR4/1細砂混シルトが混じり合い堆積　φ1cm前後の礫含む　炭粉含む
143.黒褐10YR3/1　粗砂混シルト質粘土　極粗砂含む
144.褐灰10YR4/1　粗砂混シルト質粘土　極粗砂～φ0.5cmの礫混じる　φ1cmの礫含む
145.黒褐10YR3/1　シルト質中砂～極細砂　上部に極粗砂～φ0.3cmの礫混じる
146.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～極細砂　φ1cm大の礫含む　黒褐シルトブロック含む 極粗砂含む
147.暗灰黄2.5Y4/2　極粗砂～φ1cm迄の礫多く混じる中砂～細砂　φ1～4cm大の礫混じる　1辺がφ7～8cmの礫含む　（2330―1濠に伴う土塁）
148.黒褐2.5Y3/2　シルト混中砂～極細砂　φ0.2～0.5cm前後の礫混じる　φ0.5～1cmの礫含む　褐灰シルト～粘土ブロック多く混じる
2330-2濠
149.暗灰黄2.5Y5/2　粗砂～φ0.5cmの礫混中砂～極細砂　φ0.5～1cmの礫混じる　φ2cm前後の礫含む　黄褐粘土～シルトブロック混じる（部分的に集中）
150.黒褐10YR3/1　粗砂混中砂～シルト　φ0.3～0.5cmの礫含む　褐灰シルトブロック多く混じる 黄褐シルト～粘土ブロック含む　極粗砂混じる
151.黒褐10YR3/1　粗砂混中砂～シルト　φ0.3cm前後の礫含む
152.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～極細砂　極粗砂混じる
153.オリーブ褐2.5Y4/3　極粗砂～φ1cmの礫多く混じる粗砂～細砂　φ4cm迄の礫含む
154.黒褐10YR3/2　極粗砂～粗砂混中砂～極細砂　φ0.2～1.5cmの礫混じる
155.黒褐2.5Y3/2　粗砂～φ0.7cmの礫混じる中砂～極細砂　φ1cm前後の礫含む
156.黒褐10YR3/1　中砂質細砂～極細砂　粗砂～φ0.4cmの礫混じる　φ1cm前後の礫含む　褐灰細砂混シルト～粘土ブロック多く混じる
157.黄褐2.5Y5/3　シルト混中砂～極細砂　粗砂～φ2cm大の礫混じる　φ5cm前後の礫含む　黄褐シルト～粘土ブロック混じる　炭粉含む
158.黄褐2.5Y5/3　シルト混中砂～極細砂　粗砂～φ2cm大の礫混じる（157より礫の量多い）φ5cm前後の礫含む　黄褐シルト～粘土ブロック混じる　炭粉含む
159.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層が垂れ込む）
160.黒褐2.5Y3/2　シルト質極細砂　φ0.2～0.5cmの礫含む　炭混じる
161.黒褐2.5Y3/1　中砂混シルト質極細砂　φ0.2～0.3cmの礫含む　炭混じる
162.暗褐10YR3/3　粗砂～極細砂　極粗砂～φ2cm前後の礫多く混じる　φ7～10cm大の礫含む　特に156の直下にφ10cm前後の礫集中
163.暗灰黄2.5Y4/2　中砂～シルト　極粗砂～φ1cm前後の礫混じる　黒褐粘土ブロック混じる　炭粉含む
164.暗褐10YR3/3　162と類似。しかしφ5cmを超える礫はなく、礫の量も162より少ない
165.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層が垂れ込む）
166.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層が垂れ込む）
167.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～中砂（10層が垂れ込む）

第３章　１調査区の遺構と遺物

第１節　１調査区の遺構と遺物

１調査区は調査地の南側に位置し、東西に長いトレンチである。中央西寄りの部分は旧少林寺団地の建物により現地表下約1.7mまで大規模な撹乱を受けており、遺構面の遺存状況は極めて不良であった。それ以外の部分では近世期を主体として15枚の遺構面が確認できた。第１面～第９面が近世期の遺構面で、第10面が中世期、第11面以下が中世以前の遺構面である。先にも述べたように大規模な撹乱が存在していたため、東西方向において特に近世期段階での層の連続性が把握出来ない状況にあった。以下に各遺構面の概要を記す。

第１面〔図10〕　近代～現代の整地層や第二次世界大戦焼土層などを重機によって約0.5～0.7m除去して検出される面を第１面とした。調査区中央付近は暗灰黄～黒褐色系の中砂～粗砂が、西端は灰黄色系中～極粗砂が、東端は黄色系シルト質粗砂が基盤層となる。撹乱よりも西側は概ねT.P.2.7～2.9m、東側はT.P.3.0～3.1mを測り、東側が高くなっている。18世紀末～19世紀の遺構面である。

大規模撹乱より西側では複数の土坑と礎石建物１棟・井戸１基を、撹乱より東側では瓦組井戸３基や埋甕５基などを確認した。

70礎石建物〔図11・図版３中〕：調査区西側の南寄りで検出した。南側と西側は調査範囲外に延びると考えられ、現状では東西3.9m以上・南北2.1m以上を測る。礎石は北側の一辺にのみ遺存しており明確な並びを確認するに至らなかった。主軸はN-128°-Eである。建物内部は黄色～灰オリーブ色の粘土ブロックを混ぜた中砂～粗砂を５～10cm単位で丁寧に整地し、硬く締めて床面を形成している。図11断面１～５に貝を含むが、防湿を目的としたものでなく部分的なものであった。なお、床面には黄色系粘土の貼り床は認められなかった。また、北側の一辺には厚さ約５cmの黄色系粘土を貼っており、雨水等の浸入を防いでいたものと思われる。下面には第３面186瓦列があり、同位置に建物が建てられていることを示していた。建物内部の整地層から肥前染付碗、堺焼擂鉢、京焼系土堝・土瓶などが出土しており18世紀末～19世紀の建物と考えられる。

317井戸〔図13〕：70礎石建物の東側約1.4mの位置で検出した。平面形は一辺約1.5mの隅丸方形を呈する。井戸上部はレンガやコンクリートなどの廃材で埋め戻されていたため、当初は近代以降の所産であると捉えていた。しかし、下層から肥前染付広東碗、堺擂鉢、京焼系土堝などが出土したことから18世紀末～19世紀の所産と思われる。埋土は灰黄色系のシルト～粗砂で黄褐色系の粘土ブロックが多く含まれる。なお、中層～下層にかけて多量の瓦が廃棄されていたが、丸瓦や平瓦といった屋根瓦ばかりであったので、317井戸は素掘り井戸であった可能性が高い。図13－１は平瓦に刻まれた刻印で「泉堺／湊瓦□□□□□」とある。

66土坑〔図12～14・図版３下〕：調査区西側の北側隅で確認した。この位置は元禄大絵図によれば、会所の南端に当たる部分である。掘り方の北半分は調査範囲外に延びるが、平面形は一辺約１mの隅丸方形を呈する。断面は逆台形を呈し、深さ１mを測る。埋土は５枚に分かれ、炭・焼土を含む黄灰色の

中砂混シルトが主体をなす。中層には焼土と灰が0.1～0.2mの厚さで堆積していた。埋土には多量の近世陶磁器が含まれており、焼土や灰が堆積していたことも併せて考えると、66土坑は廃棄土坑として掘削されたものと推定される。また、出土遺物には肥前染付広東碗、堺擂鉢、瀬戸美濃皿、京焼土瓶、瓦質火鉢などがある。中でも特徴的な器種として37点（底部点数）出土した徳利が挙げられる。肥前磁器製４点・丹波焼などの陶器製が33点である。遺構の検出位置と多数出土した徳利を考えると当時の集会の様子を伺わせる面白い資料といえる。出土遺物から18世紀末～19世紀の時期が想定できる。

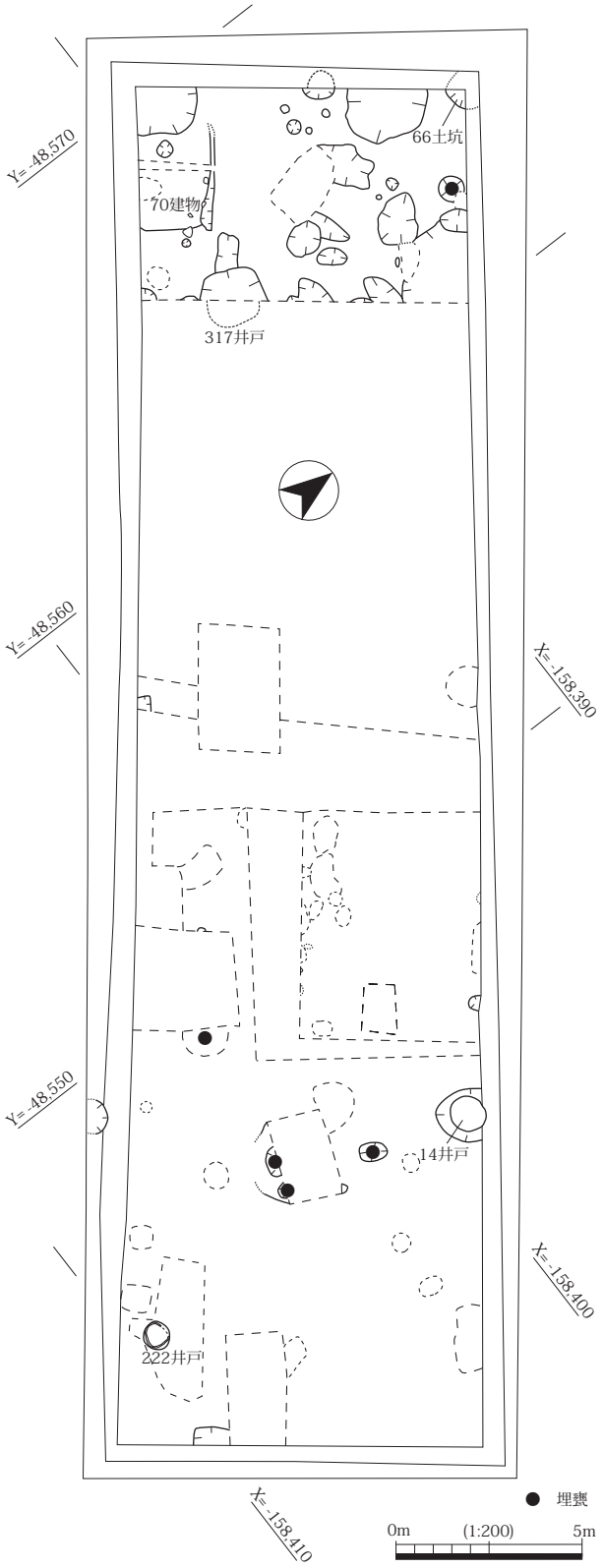


図10　第１面　平面図

図13－５は関西系陶器蓋。口縁部は無釉。６・７は京焼系碗である。６は丸碗。上絵で注連縄紋と海老が描かれる。徳島県産と思われる。７は高台が高く、底部から口縁に向かって直線的に開く。口縁部内面は肥厚させている。胴部内面と底部及び高台は無釉。８は灯明台である。脚部は中空で、受け皿内面には環状の突帯となった受けが１条巡っている。底部外面は無釉となっている。９は瀬戸美濃太白手皿。畳付は釉剥ぎである。

10は瀬戸美濃徳利。胴部下部には透明釉が、上部には灰釉がかけられる。11・12は丹波徳利である。11の胴部には線刻で「左今衛門ヵ」、12は白化粧土で「伯太山」と書かれている。共に肩部以上と胴部と別作りとなっており、接合して成形される。内面は一部を除き、透明釉がかけられる。外面は鉄釉が施釉される。13は大谷焼徳利。内面が赤いのが特徴的である。胴部には「六十□　布新」と線刻されている。底部は無釉である。

図14－１は堺擂鉢。口縁部外面に２条、内面に１条沈線を巡らせる。擂目はクシ状工具によって底部から口縁部に向けて密に施される。また、口縁部に及んだ余分な擂目を取り除くために、口縁部に回転ナデ調整を行っている。内面見込の擂目は中央を囲むように、３単位の擂目を重ねて所謂「ウールマーク」状の形をなす。２は肥前色絵輪花皿である。皿内面には東屋、船などの風景文が描かれ

る。底部は蛇の目凹形高台となっている。３は肥前外青磁鉢である。内面見込みには船、建物が描かれる。底部は蛇の目凹形高台となっている。４は肥前染付瓶。首部下端外面には山文が、胴部には草花文が描かれる。

14井戸〔図13〕：調査区南側の北寄りで検出した円形の瓦組井戸である。掘り方は平面1.75×1.66mを測る不整円形を呈し、井戸枠の直径は0.9mを測る。井戸は一辺22～23㎝・厚さ５㎝の大きさの井戸瓦を１段につき12枚円形に組み合わせて構築しており、調査では４段以上の遺存を確認した。なお、井戸瓦凸面には押圧による波状の刻みが施されている。井戸枠内の上層はコンクリートやレンガなどの廃材と共に多量の屋根瓦で埋め戻されていた。下層部分まで調査が及ばなかったため掘削年代は明らかでない。

出土遺物には、肥前染付碗・皿、肥前陶器碗・皿、京焼系土瓶・行平、堺擂鉢、土師質皿・甕・炮烙・瓦（軒丸・軒平・丸・平・桟）などがみられ、18世紀末以降の遺物が主体となっている。

図13－２・３・４は平瓦に刻まれた刻印である。２は「瓦新」３は「利右衛門」４は「堺改丹治利右衛門」と刻まれている。３・４の刻印は丹治利右衛門系の刻印。４の刻印には「改」の字がみられるが、刻印に「改」が加わるのは文政二（1819）年から文政四（1821）年の間とされており、製作年代はそれ以降とみなすことが出来る。

222井戸〔図15〕：調査区東南隅の撹乱の底で検出した円形の瓦組井戸である。撹乱内部には多量の屋

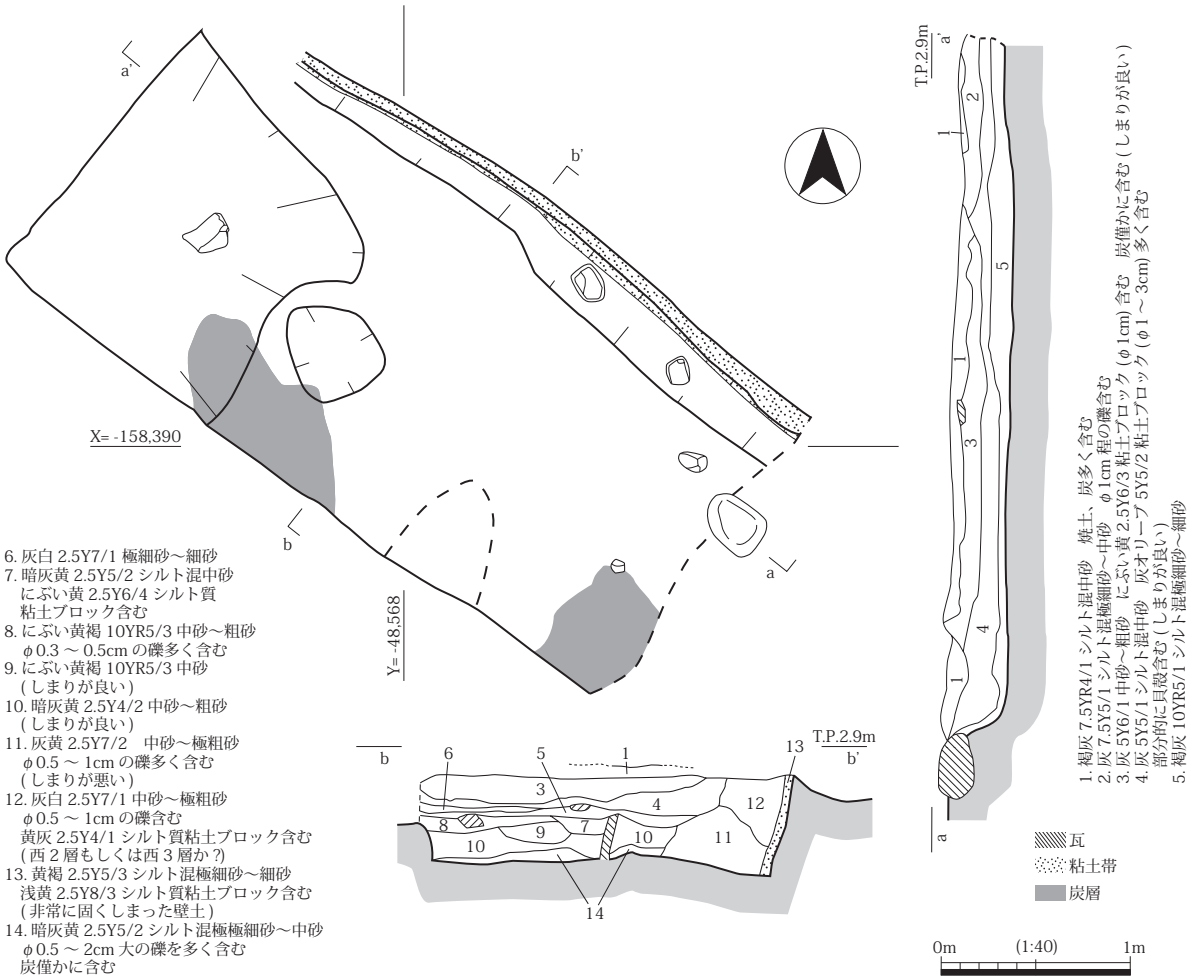


図11　第１面　70建物　平・断面図

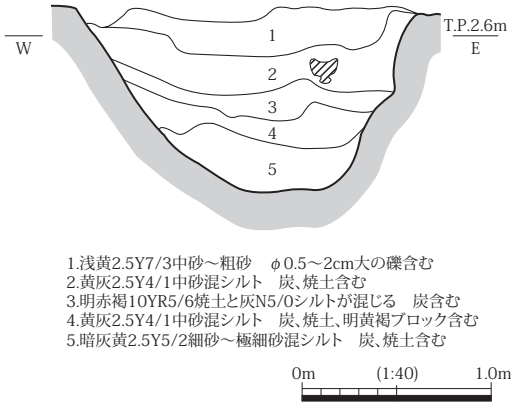


図12　第１面　66土坑　断面図

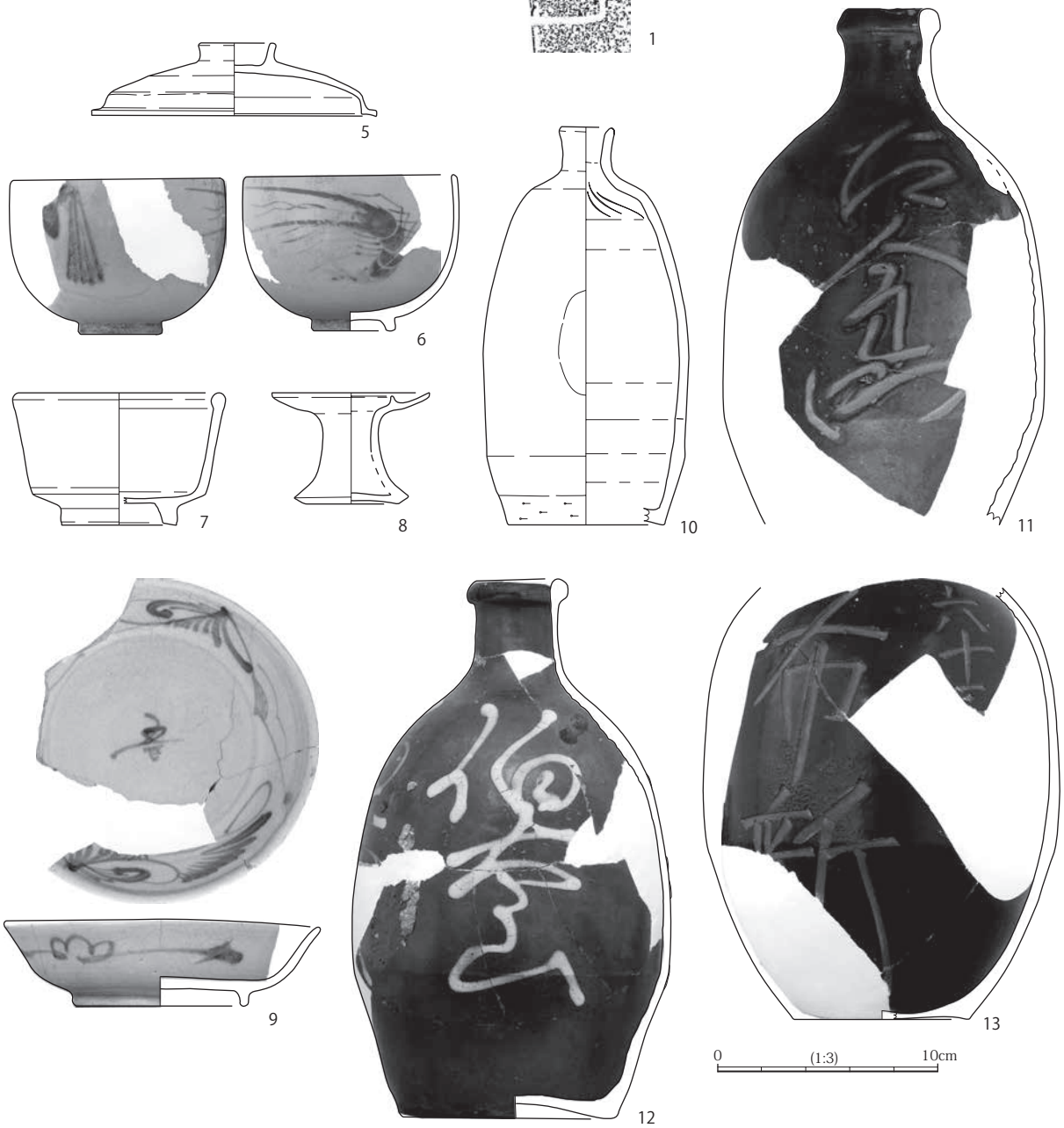


図13　第１面　14・317井戸出土遺物、66土坑出土遺物（１）

根瓦と共に相当量の井戸瓦も充填されていたことから、222井戸の上部はこの撹乱によって失したと想定される。井戸は幅24.5㎝・長さ30㎝・厚さ2.5㎝の大きさの井戸瓦を１段につき８枚円形に組み合わせて構築しており、調査では３段以上の遺存を確認した。１段目の井戸瓦２枚には記号が刻まれていた。井戸枠の直径は0.6mである。

井戸枠内の下層から、印判手の肥前染付碗、肥前白磁碗、京焼風平碗、土師質皿、焼塩壺、炮烙、土錘、寛永通宝などが出土した。井戸最上部は第１面で検出したものの、出土遺物から考えると17世紀後半頃に掘削され使用され続けたものと推定される。

なお、当面で検出した埋甕は内部に白色～黄色物質の付着が顕著であり便所として使用された可能性が高い。使用された甕には土師質甕、焼締陶器系甕がみられた。

第２面〔図16〕　東西各第１層を除去して検出される面である。調査区中央付近は暗灰黄～暗オリーブ褐色系のシルト混極細砂～粗砂が、西端は黄灰～黄色系中～粗砂が、東端は黄色系シルト質粗砂が

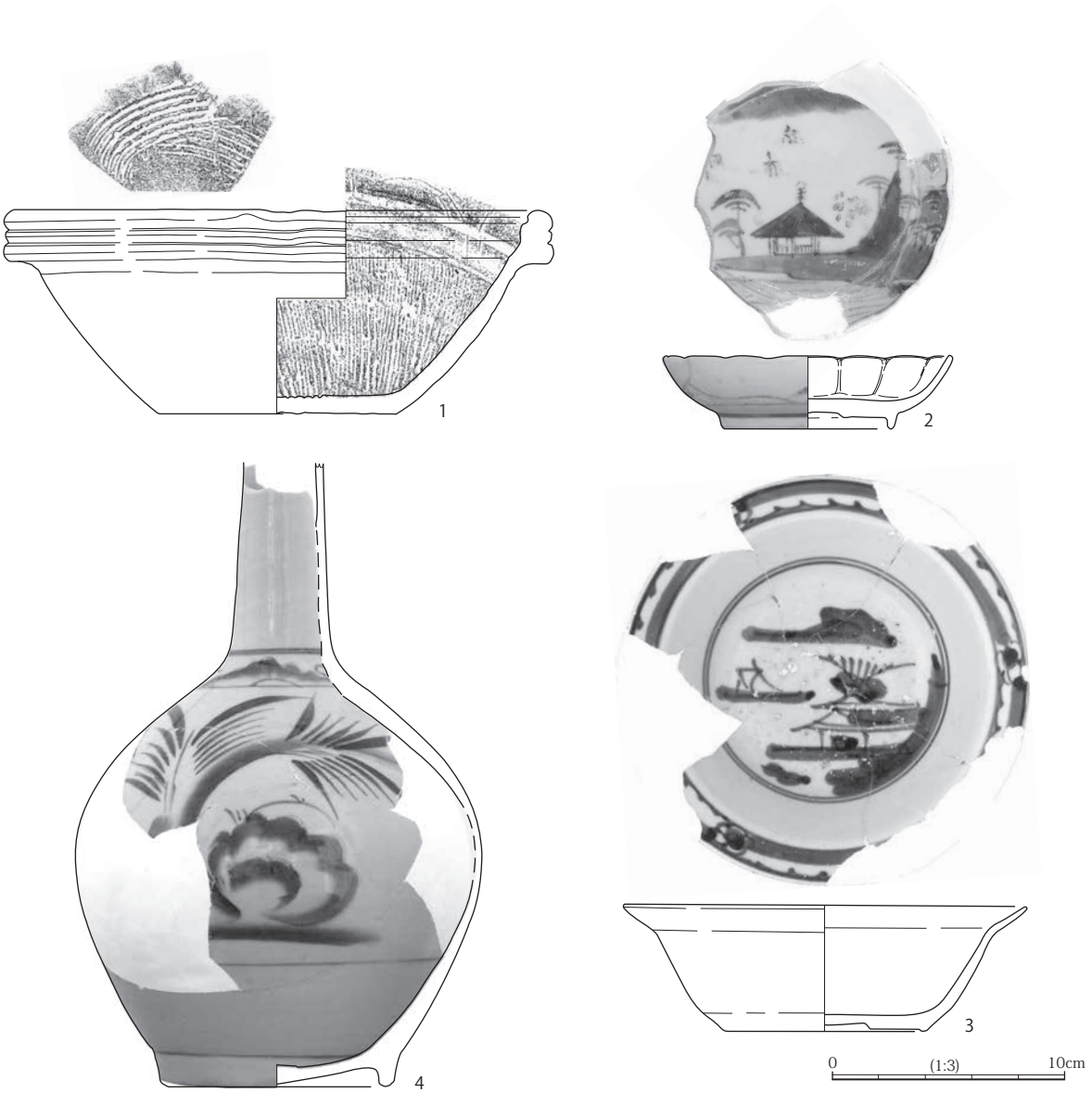


図14　第１面　66土坑出土遺物（２）

基盤層となる。撹乱よりも西側は概ねT.P.2.6〜2.7m、東側はT.P.2.9〜3.0mを測り、東側が高くなっている。

西側では土坑が数基、東側では廃棄土坑や井戸を中心に多くの土坑が検出された。廃棄土坑からは多量の近世陶磁器・瓦のほか貝などを主体とする食物残滓、土人形などの玩具、炭、灰などが出土している。建物は当面では確認出来なかった。遺構面の時期は第１面とそれほどの時期差がなく、18世紀後半〜19世紀である。

51土坑〔図17〜19・図版４中〕：調査区ほぼ中央で検出した土坑である。N−128°−Eに軸をもつ溝状の浅い土坑と切りあう。51土坑は一辺約0.85mを測り、平面正方形を呈する。ほぼ直に掘削されており、深さは0.8mである。埋土は細かく16層に分かれる。各層は５〜10㎝程度の厚みである。

土坑には多量の近世陶磁器（肥前染付碗・蕎麦猪口・段重・蓋、京焼系土瓶・行平・急須、土師質火鉢・皿・柿釉皿・甕・炮烙、瓦質火鉢など）や瓦などと共に炭、灰、焼土が廃棄されていた。また、埋土を水洗いしたところ、チャート製火打ち石、銅線、多くの小さな土人形（長さ２〜３㎝程度）や貝・動物遺存体（詳細は第５章第２・３節参照のこと）といった食物残滓が検出できた。典型的な廃棄土坑である。出土遺物から18世紀後半〜19世紀の所産である。

図18−１は京焼系碗である。透明釉がかけられる。高台は無釉。２は萩焼ピラ掛け碗である。灰白・黒の釉薬が掛け分けられている。胴部は直立しながら口縁部に向けて立ち上がる。口縁部は短く外反する。内面は白色釉が施釉される。３は京焼系土堝蓋である。外面に白化粧土で草花文が描かれる。口縁部と胴部中程外面は無釉で、摘み部及び天井部、胴下端部は鉄錆が施される。また、胴部中程外面には型押しの文様が施されている。内面は透明釉が施される。４は秉燭である。全面に黒色釉が掛けられ、

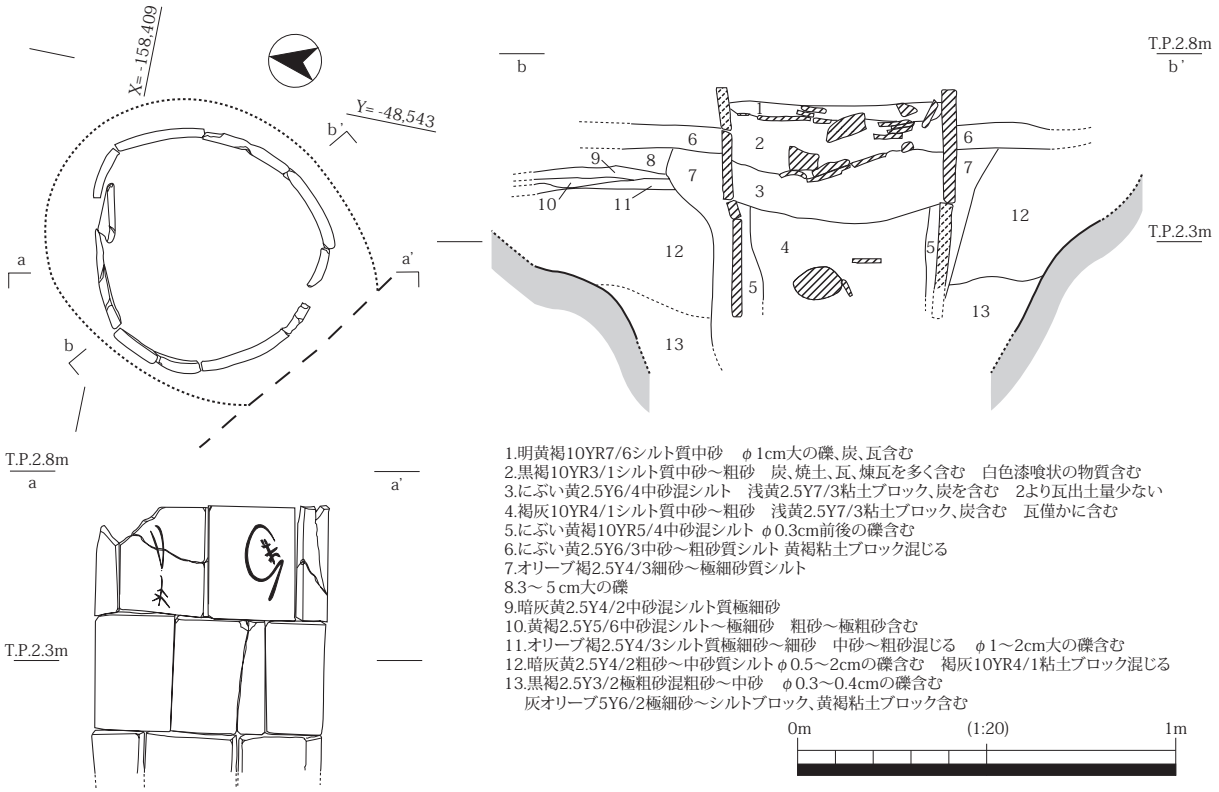


図15　第１面　222井戸　平・断・立面図

内面中央に灯心を保持する円筒形の突起が取り付けられる。この頂部から斜めに孔が穿たれており、灯心が容器内の灯油に触れるような構造をもつ。５は京焼系急須である。白色釉が流しかけられ、鉄釉で草花文が描かれる。６は不明陶器である。底部及び体部下半に直径0.5㎝の小孔が多数穿たれる。口縁は直角に外反し、何かに引っ掛けるかのような形をなす。茶漉し的な用途であろうか。口縁端部外面には鉄釉が、胴部内外面下半には透明釉が施釉される。７は堺擂鉢。口縁部外面に２条、内面に１条沈線を巡らせる。擂目はクシ状工具によって底部から口縁部に向けて密に施される。また、口縁部に及んだ余分な擂目を取り除くために、口縁部に回転ナデ調整を行っている。その結果、口縁部内面と体部との境には段を持つ。

図18－８は肥前染付蕎麦猪口である。外面には山や雲などの風景文が、口縁部内面には雲が描かれる。底部は蛇の目凹形高台となっている。９は肥前染付蓋である。外面には草花文が、内面見込には草文、口縁内面には複雑に絡み合った連弧文が施される。10は肥前染付段重。高台直上の体部外面は段が付けられ、重ねて使用出来るような形をなしている。また、重ねて焼成出来るようにこの段部分と口縁端面は無釉である。外面には格子文と福寿或いは寿福の文字が施される。焼継が行われ、高台内に「キ」の字状の焼継印を記す。

図19－１は肥前白磁の紅皿。貝殻状に型押し成形されたＢ類である。口径が大きく、扁平気味の器形である。口縁端部の幅は広い。19世紀前半の所産であろう。

図19－２～６は土製品である。２は土製独楽。中心に直径0.3㎝の孔が穿たれる。３は面打（泥面子）である。４は御堂を模した箱庭道具。全面に緑色の釉薬が掛けられる。５は鳩笛である。羽の一部に赤色顔料の痕跡が残る。６は土鈴。

図19－７は道具瓦。格子状に区画された中に外径３㎝の孔を穿っている。８は軒丸瓦。面径が小さく10㎝であることから道具瓦の一種であろう。瓦当面に宝珠文が施される。宝

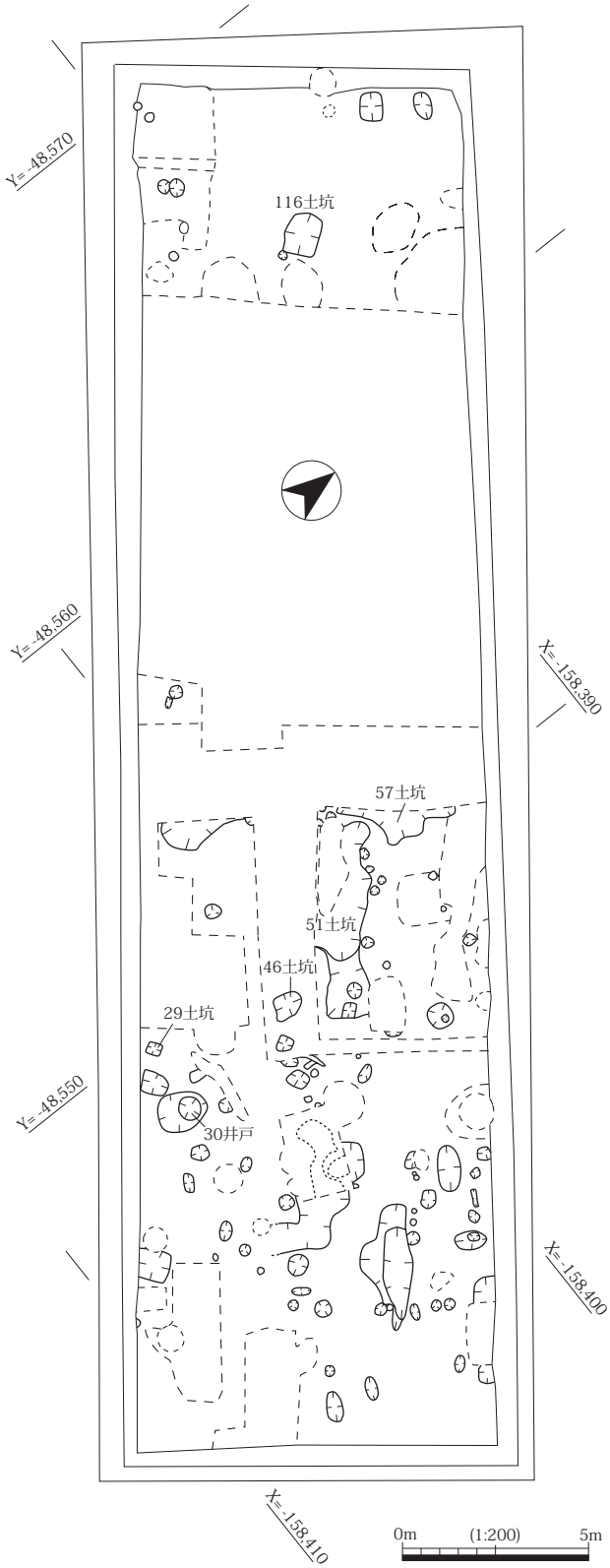
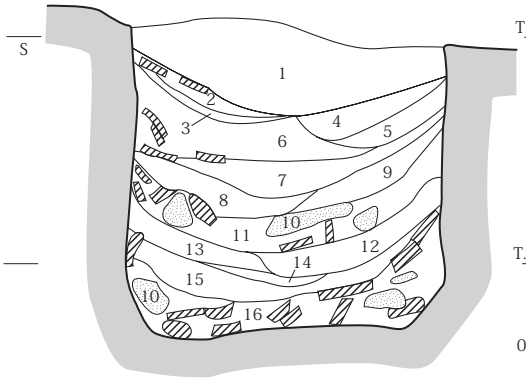


図16　第２面　平面図



1.黒褐5Y3/2細砂～粗砂質極細砂～シルト　極粗砂～φ0.7cmの礫混じる　炭含む　貝が底面に堆積　2.炭層　3.黒褐2.5Y3/1灰　極粗砂～φ0.3cmの礫混じる　φ2cm大の礫含む　炭混じる　上層の炭層との境に貝堆積　4.黒褐2.5Y3/2粗砂～極粗砂混シルト～極細砂　φ1～6cmの礫含む　炭混じる　5.黒褐2.5Y3/2極粗砂混細砂～極細砂質シルト　φ0.5～1cmの礫含む　炭混じる　6.にぶい黄褐10YR5/4粗砂～極粗砂混細砂質シルト　φ0.5～1cmの礫含む　炭、灰多く混じる　7.炭、にぶい橙7.5YR6/4灰、褐灰10YR5/1灰、炭、黒10YR1.7/1炭混じり灰、にぶい橙7.5YR6/4灰(左記の順で堆積)　8.にぶい黄褐10YR5/4～暗灰黄2.5Y4/2粗砂混シルト　炭、灰多く混じる　9.暗灰黄2.5Y4/2極粗砂混シルト～極細砂　炭、灰混じる　▒＝10.浅黄2.5Y7/4土壁又は漆喰状の物　極粗砂含む　11.黒褐2.5Y3/2シルト～極細砂　極粗砂～φ0.3cmの礫混じる　黄褐シルトブロック含む　炭混じる　12.暗灰黄2.5Y4/2～黒褐2.5Y3/2極細砂質シルト　粗砂～φ0.3cmの礫混じる　φ0.5～1cmの礫含む　炭混じる　13.暗灰黄2.5Y4/2　極細砂～細砂質シルト　極粗砂～φ0.3cmの礫混じる　炭混じる　14.貝が堆積　15.黒褐2.5Y3/2極細砂質シルト　極粗砂～φ0.3cm前後の礫混じる　φ0.7cm程の礫含む　炭、灰混じる　16.暗灰黄2.5Y4/2粗砂混細砂～極細砂質シルト　炭含む　瓦、陶磁器多く出土

図17　第２面　51土坑　断面図

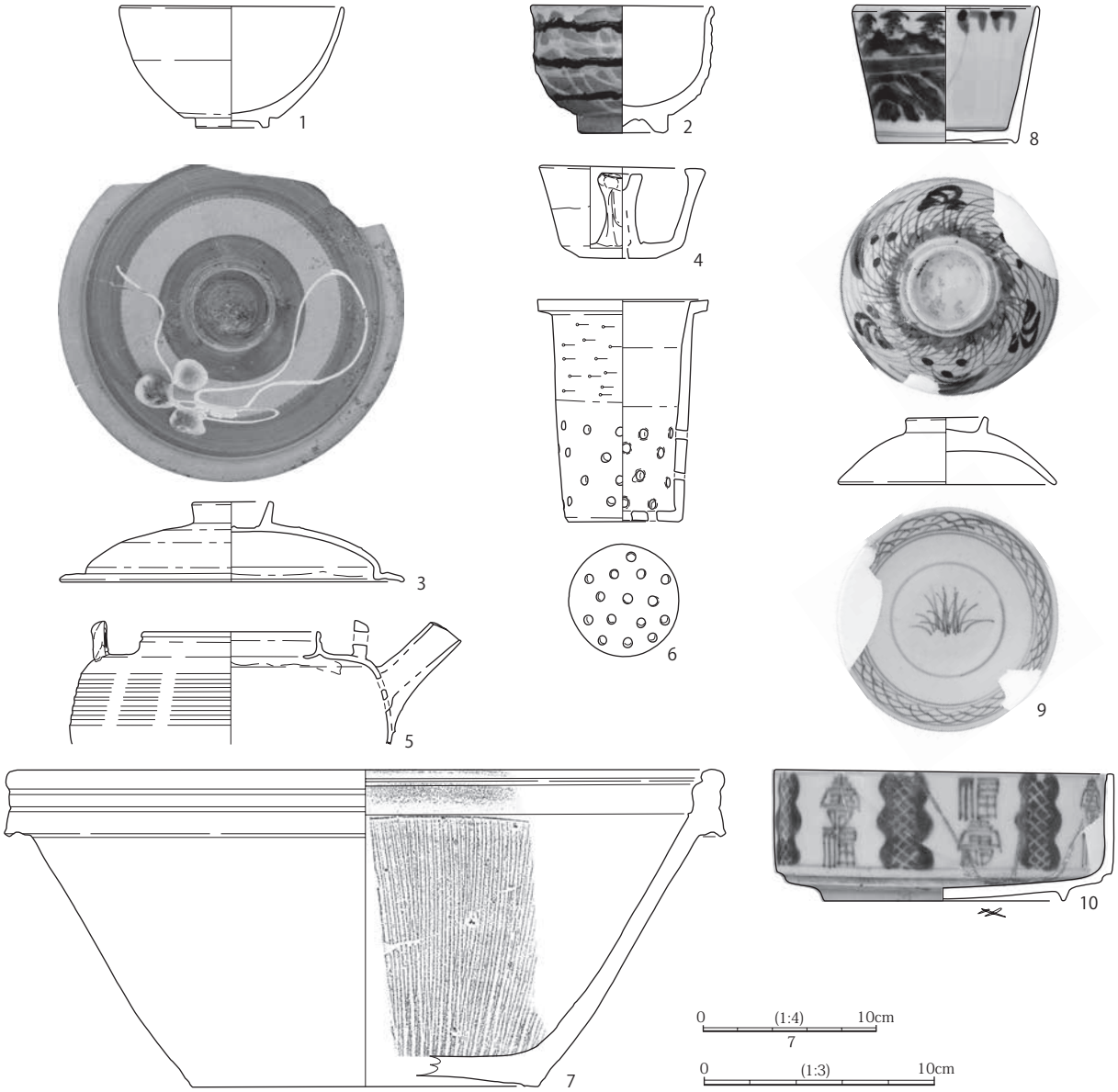


図18　第２面　51土坑出土遺物（１）

珠文の上にみられる「釣り針」状の文様は火炎を表したものであろうか。９は寛永通宝。なお、図化していないが蛤を用いた紅皿〔図版17右４〕や恵比寿・魚（平目）・果物（栗・ミカン）・道具（枡・桶）・土鈴を模した全長２～３㎝程度の小型土人形が多量に出土している。

29土坑〔図20〕：調査区東側の南寄りで確認した。一辺0.35mの平面方形を呈する。深さ0.2mを直に掘削し、四周と底面に厚さ２～５㎝の黄色のシルト混中～粗砂（非常に硬く締まる漆喰状物質）で塗り

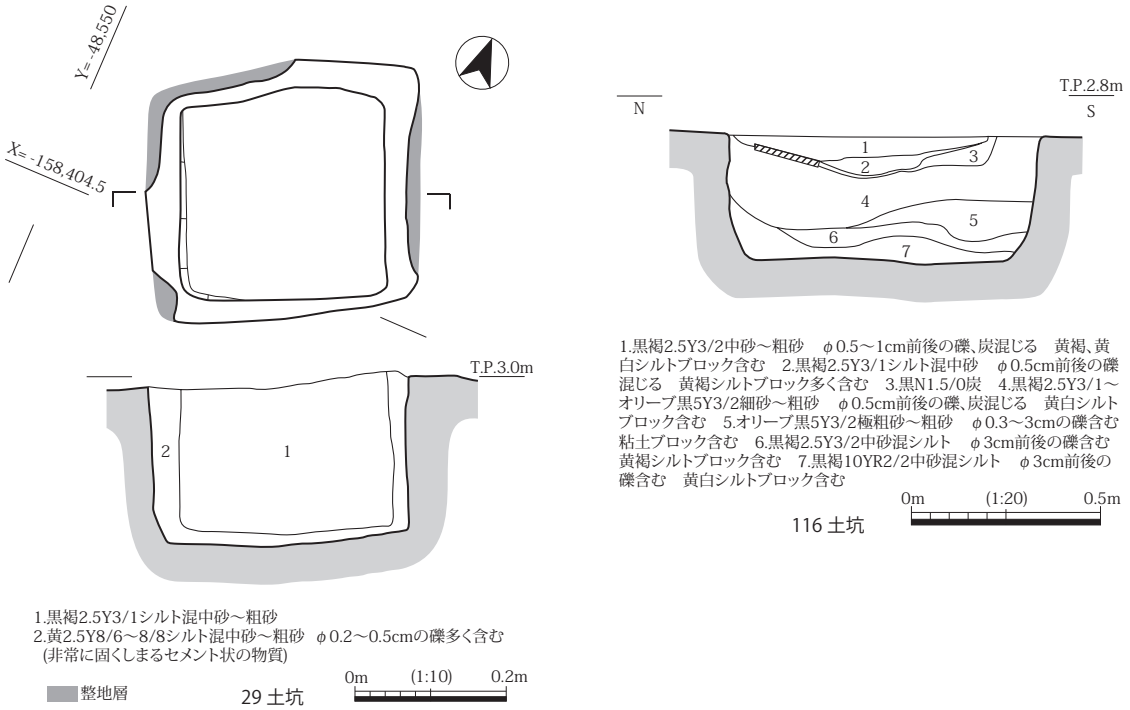


図20　第２面　29土坑　平・断面図、116土坑　断面図

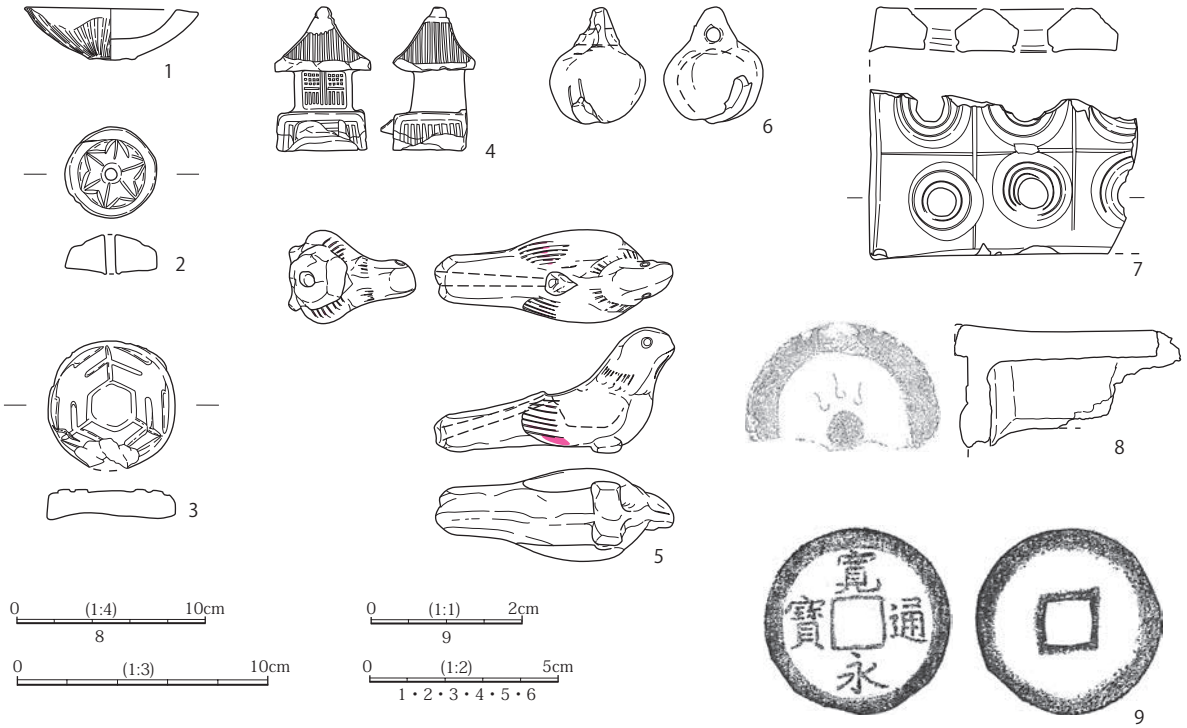


図19　第２面　51土坑出土遺物（２）

固めている。土坑の性格は不明である。なお、この漆喰状物質は51土坑をはじめとして当面で検出した土坑各所から壊れた状態で出土する。

30井戸〔図21〕：29土坑の東側1.5mで検出した素掘りの井戸である。掘り方は直径1.1mの平面円形を呈する。井戸枠部分は直径約0.8mの平面円形である。井戸枠内の埋土は締まりの悪い黒色のシルト～極細砂である。裏込めは黒褐色の細・中砂混シルトである。

図21－１は瀬戸美濃色絵蓋。上絵（赤・黄・青）で花文などが描かれる。２は瀬戸美濃火鉢。獣形の双耳が付く。口縁端部は敲打による凹凸が著しい。これは煙管を打ち付けた為と考えられ、煙草盆として使用されたものと想定される。外面には斜格子文、梅、人物が描かれる。底部には固定するための釘孔が穿たれている。３はバイ独楽〔図版17左４〕。バイガイの頭頂部を切り離したもので、そのままでは軽いため独楽として使用する際には内部に鉄や粘土を詰める。なお、３の内部は空洞であった。

57土坑〔図21〕：51土坑の北西側約３ｍで検出した不定形の廃棄土坑である。西側を撹乱により切られる。他の土坑同様に多くの近世陶磁器や瓦が廃棄されていた。埋土は黒色の炭混じりの細～中砂混シルトである。出土遺物から18世紀後半～19世紀の所産であろう。図21－４は緑色のチャート製火打ち石である。使用による敲打により、縁辺は潰れて全体的に丸みを帯びている。

116土坑〔図20〕：調査区西側の中央部で検出した。N-142°-Eに軸を持ち、長軸1.1m、短軸0.9mの平面長方形を呈する。断面は逆台形を呈し、深さ0.34mを測る。埋土は７枚に分かれ、黒褐色の粗砂や中砂混シルトが堆積している。なお、上層には炭層が確認出来る。

出土遺物には肥前染付碗（内面見込蛇の目釉剥ぎ）、肥前外青磁染付、京焼系半筒碗・土瓶、瀬戸美濃型紙刷り皿、堺擂鉢、土師質甕・火鉢・皿、瓦質火鉢、土人形（箱庭道具）などがある。出土遺物から18世紀後半～19世紀の所産といえる。

第３面〔図22〕　東西各第２層を除去して検出される面である。調査区中央付近は明黄褐色のシルト混中砂～粗砂、西端は黄褐～灰色系細～粗砂、東端は黄色系シルト質粗砂が基盤層となる。撹乱より西側は概ねT.P.2.5～2.6m、東側はT.P.2.7～2.9mを測り、東側が高くなっている。17世紀後半～18

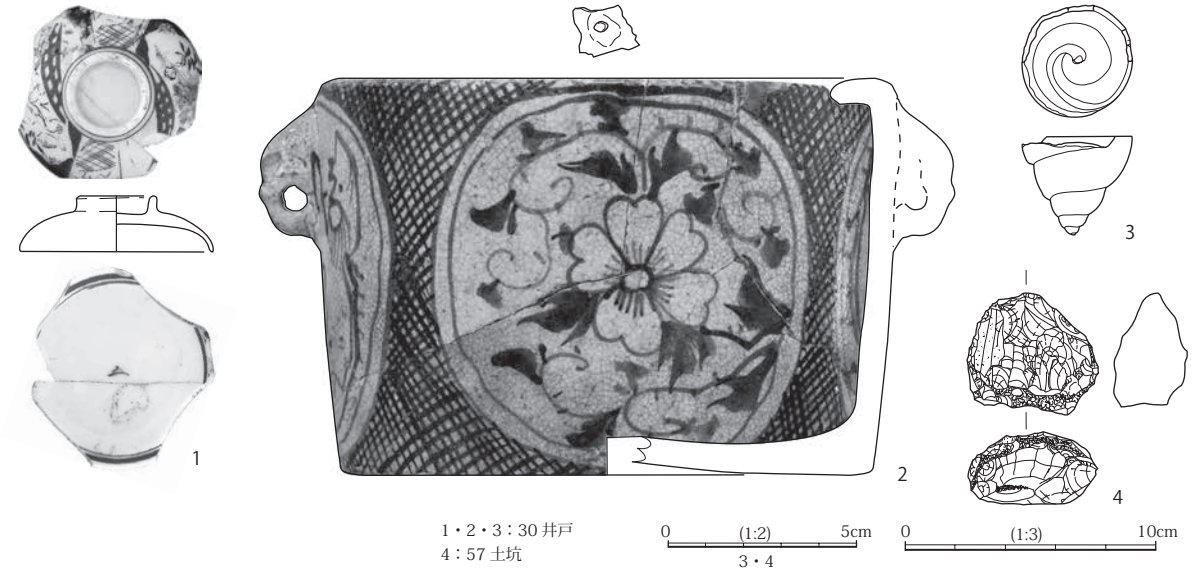


図21　第２面　30井戸、57土坑出土遺物

世紀の遺構面である。

西側では１条の瓦列と２条の粘土帯が検出された。瓦列・粘土帯は軸を揃えて構築されている。東側は第２面同様、廃棄土坑を中心に複数の土坑が検出された。廃棄土坑は１×２ｍ前後の方形のものが多い。中には複数が重複して掘削されており、一見すると巨大な土坑のように見えるものがあった。埋土には近世陶磁器や瓦が多量に廃棄されている。こうした廃棄土坑は後述する区画溝の両側―近世町屋構造では裏側にあたる部分―に集中して掘削されている。下位の遺構面で表側に礎石建物が建てられていることを勘案すると、近世町屋の敷地利用を検討する上で面白い資料である。

186瓦列〔図23〕：調査区西側の南寄りで検出した。N−127°−Eに軸をもつ。西側は調査範囲外に延びると考えられ、現状では東西3.2ｍを測る。一辺30㎝四方・厚さ５㎝の平瓦を11枚以上立て並べる（中央部で１枚分抜き取られたスペースが存在）。瓦列南側にはしまりの悪い灰色のシルト混中～極粗砂や黄灰色の細砂混シルト質粘土を厚さ約0.3ｍ入れ、その上面を硬く締まった黄灰色シルト混細砂で覆い、土間状にしている。瓦列検出位置は、第１面で確認した70礎石建物の下位にあたるため、これも建物の基礎であった可能性が高い。

図23－１は肥前染付皿。胴部は内彎しながら口縁部に向かって立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。胴部内面には松葉状の文様が描かれる。内面見込は蛇の目釉剥ぎになっている。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎである。

なお、186瓦列の北側約１ｍの位置に瓦列と平行するように黄色系粘土帯が構築されている。さらに、この粘土帯から北側へ５ｍ離れた位置に軸を同じくする青色粘土帯がみられる。瓦列・粘土帯ともに元禄大絵図に見られる短冊形地割を示すように構築されており、粘土帯は屋敷地を区画するものであった

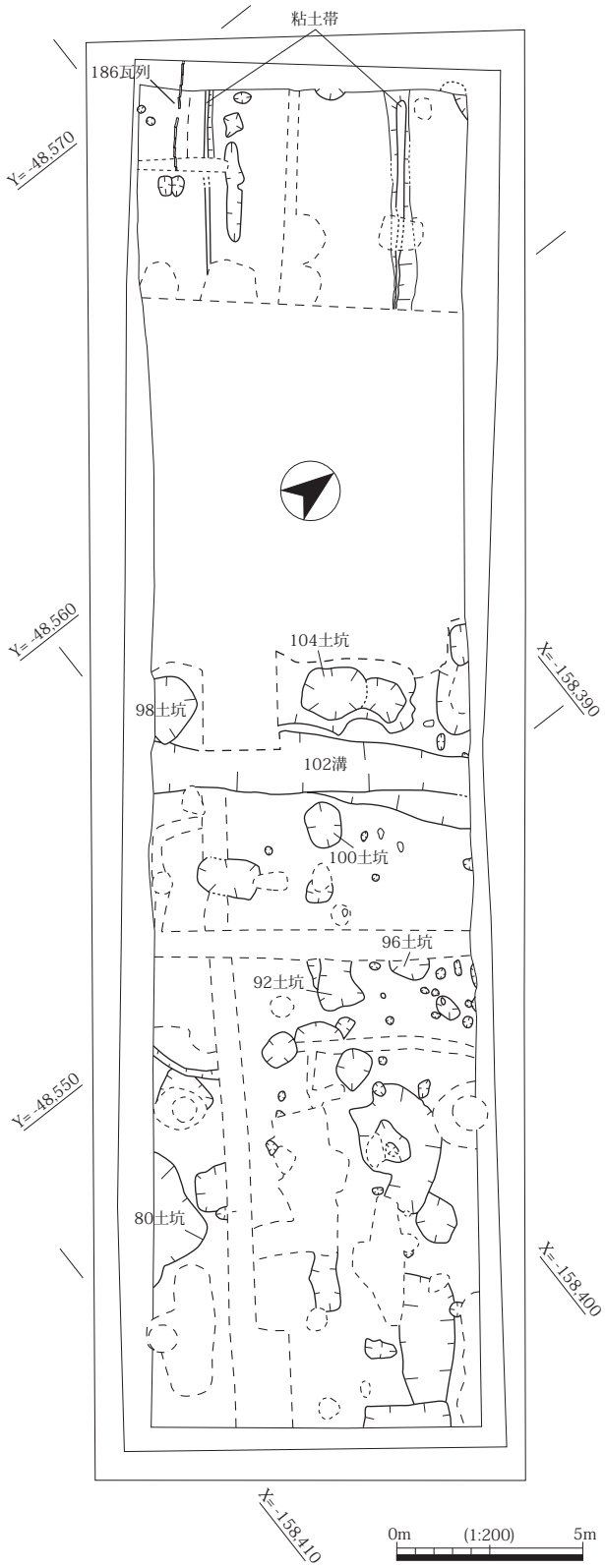


図22　第３面　平面図

と推定される。先にも述べたように、粘土帯間は５ｍあり約２間半の間口であったと思われる。残念ながら礎石等は遺存しておらず、建物は確認出来なかった。

98土坑〔図27〕：調査区のほぼ中央南寄りで検出した。102溝の西肩に接して掘削されている。平面隅丸長方形を呈し、長辺1.8m、短辺1.1m、深さ0.32mを測る。南側は側溝によって切られている。埋土は３枚に分かれ、灰色の中～粗砂やシルト混細砂が堆積していた。いずれの層にも近世陶磁器や炭・焼土を多量に含んでおり、廃棄土坑と思われる。

出土遺物には肥前染付碗・皿・仏飯器・水滴、肥前青磁碗・香炉、肥前白磁碗・皿、肥前陶器碗・皿、中国製染付碗・皿、堺擂鉢、備前灯明皿・擂鉢、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・平・丸）、サヌカイト製火打ち石、金属製品（釘・煙管）などがある。出土遺物の傾向から17世紀後半～18世紀の所産と思われる。

図27－２は肥前陶器皿である。高台は高く、胴部は高台から緩やかに上方に向けて立ち上がり、口縁部は端反形を呈する。内面見込は蛇の目釉剥ぎになっており、釉剥ぎ部分に鉄錆が施されている。また、内面に鉄釉で菖蒲状の花が描かれている。図27－７は銅製針である。先端は欠損し、体部中ほどで「く」の字に折れ曲がっている。頭部は扁平に、体部は丸く作られる。頭部には直径0.1㎝の孔がみられる。

104土坑〔図24～26〕：調査区のほぼ中央で検出した。102溝の西肩に接して掘削されている。当初は、平面隅丸長方形を呈し、長辺3.8m・短辺2.1mを測る巨大な土坑と捉え調査を行ったが、２基の土坑が切り合っているものであった。新旧関係は南西側のものが新しく、北東側のものが古い。埋土は灰色系や黒色系のシルト混中～粗砂が10㎝前後の厚さで複数枚堆積している。各埋土には炭や礫、瓦、近世陶磁器が数多く含まれており、廃棄土坑としての性格を有していたと思われる。

出土遺物には肥前染付碗・皿、肥前青磁碗・蛇の目釉剥ぎ皿、肥前白磁碗・皿、肥前陶器碗・皿、中国製染付碗・皿、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙・十能・擂鉢、瓦質火鉢などの近世陶磁器や瓦（軒平・平・丸）、石製品（砥石）、金属製品（釘・煙管）、鋳造炉片、動物遺存体などがある。出土遺物の傾向から17世紀後半～18世紀前半に機能していたものと思われる。

図25－９は肥前陶器小杯。胴部は内彎しながら口縁部に向けて立ち上がり、口縁端部はナデて尖り気味に成形する。内外面に鉄釉を施釉。高台内も鉄釉を施し、畳付は釉剥ぎとなっている。砂目積み。18

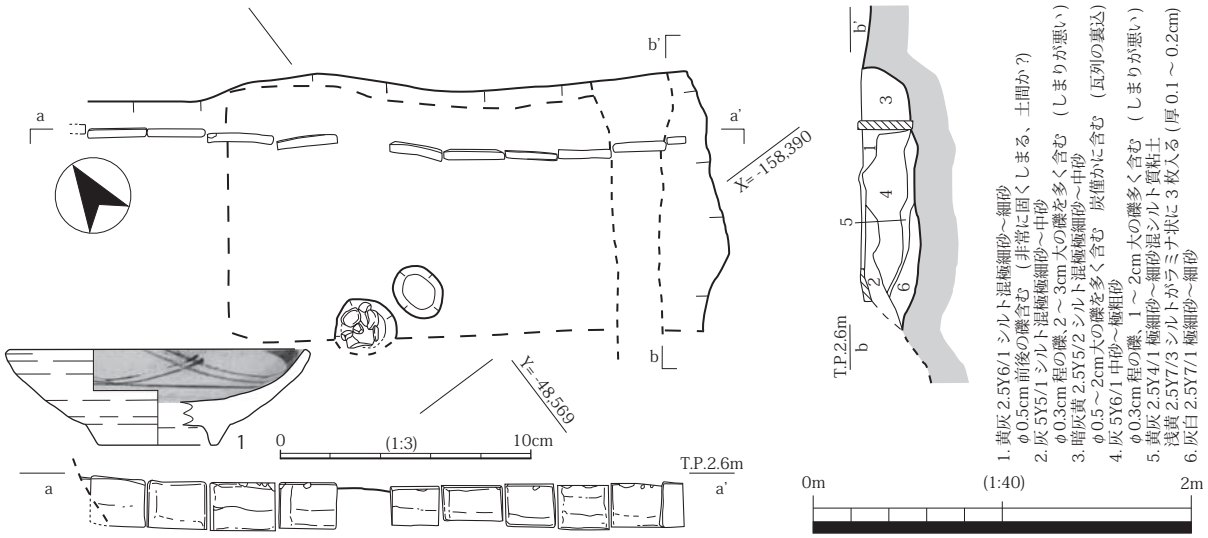


図23　第３面　186瓦列　平・断・立面図、出土遺物

世紀の所産か。10は肥前陶器碗である。高台から体部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面に透明釉を施釉。内面見込は蛇の目釉剥ぎ。高台内は無釉である。内野山窯産。18世紀前半の所産か。11は瀬戸美濃鉢。胴部は高台から内彎しながら急激に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口

102 溝＝(第 3 面)14、15　(第 4 面)16　(第 5 面)20
188 溝＝(第 6 面)25 ～ 28　(第 7 面)31 ～ 34
240 溝＝(第 8・9 面)38 ～ 52

104 土坑 A＝54 ～ 56
104 土坑 B＝1 ～ 7、57 ～ 60
141 土坑＝8 ～ 13、61

1. 灰オリーブ 7.5Y5/2 シルト質極細砂～中砂　φ0.5 ～ 3cm の礫、炭含む (第 3 層)　2. 灰 7.5Y5/1 シルト混中砂～粗砂　φ0.5 ～ 3cm の礫、浅黄 5Y7/3 シルトブロック、炭含む　3. 灰 7.5Y5/1 シルト混粗砂～極粗砂　灰白 7.5Y7/2 シルトブロック、炭僅かに含む　4. 黒褐 2.5Y3/1 極細砂～細砂混シルト　オリーブ黄 5Y6/3 シルト質粘土ブロック含む　10YR6/4 にぶい黄橙シルト～極細砂ブロック含む (骨片が腐食したものか ?)　炭多く含む　5. 灰 5Y4/1 シルト～中砂　オリーブ黄 5Y6/4 中砂ブロック、炭含む　6. 灰 5Y4/1 シルト混粗砂　φ0.5cm 前後の礫、炭多く含む　7. 灰 5Y4/1 粗砂混シルト質粘土　φ0.5cm 前後の礫、一辺 5cm の礫含む　炭多く含む　8. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混中砂～粗砂　一辺 2cm 前後の礫含む　にぶい黄褐 10YR5/4 シルト～極細砂ブロック多く含む (骨片が変質したものか ?) 炭多く含む　焼土僅かに含む　9. 黄灰 2.5Y5/1 極細砂～細砂混シルト　にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～シルトブロック多く含む　炭僅かに含む　10. オリーブ黒 5Y3/1 シルト質粘土　炭、瓦、陶磁器多く含む　11. 黄灰 2.5Y4/1 極細砂混シルト　炭、瓦、陶磁器多く含む　12. 灰 5Y5/1 中砂～粗砂　灰 5Y4/1 シルト質粘土ブロック、炭、瓦含む　13. 灰 7.5Y6/1 中砂～粗砂　14. 灰 7.5Y4/1 シルト質粘土　一辺 5cm の礫、炭、瓦、陶磁器多く含む　15. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘土　一辺 2 ～ 3cm の礫、灰オリーブ 7.5Y6/2 中砂ブロック、炭含む　16. 灰 7.5Y4/1 極粗砂混シルト質粘土　一辺 3cm の礫、炭、瓦、陶磁器多く含む　17. 灰 5Y5/1 シルト混中砂～粗砂　φ0.5cm 前後の礫混じる　一辺 5cm の礫、浅黄 5Y7/4 シルトブロック、炭含む (第 4 層)　18. 灰 5Y4/1 中砂～粗砂混シルト (17 より粘性高い)　φ0.5 ～ 2cm の礫、炭含む (第 4 層)　19. 灰 5Y5/1 シルト～中砂と浅黄 5Y7/3 シルトブロックが混じる　一辺 2cm 前後の礫含む (第 4 層)　20. 黄灰 2.5Y4/1 極細砂混シルト質粘土　φ0.5 ～ 2cm の礫、炭、陶磁器含む (炭は特に下部に多い)　21. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混粗砂～極粗砂　φ0.5cm の礫、オリーブ黄 5Y6/3 シルトブロック、炭含む (第 5 層)　22. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混中砂　炭僅かに含む (第 5 層)　23. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混粗砂　φ0.5cm 程の礫、浅黄 2.5Y7/4 シルト質粘土ブロック含む　24. 黄灰 2.5Y5/1 シルト混極細砂～中砂　灰白 2.5Y8/2 粘土ブロック、浅黄 2.5Y7/3 シルトブロック多く含む (第 5 層か ?)　25. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混中砂～粗砂　φ2cm の礫、木片、炭含む　25′オリーブ黒 5Y3/1 中砂混シルト質粘土　φ2cm 大の礫、炭含む　26. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混シルト質粘土　27. 灰 5Y5/1 粗砂混シルト質粘土　28. オリーブ黒 5Y3/1 粘土　粗砂ブロック、木片、炭含む　29. 灰 5Y4/1 中砂～粗砂混シルト　φ0.5cm 大の礫、炭含む (第 6 層)　30. 浅黄 2.5Y7/4 極細砂～中砂混シルト質粘土 (第 6 層)　31. 黄灰 2.5Y5/1 極粗砂混シルト (第 6 層)　32. 黄灰 2.5Y5/1 中砂～粗砂混シルト質粘土　φ1 ㎝程の礫、浅黄 2.5Y8/3 粘土ブロック、炭含む　33. 黄灰 2.5Y5/1 シルト混粗砂～極粗砂　φ0.3 ㎝程の礫混じる　炭多く含む　34. 灰 5Y4/1 シルト混粗砂～極粗砂　φ0.5 ～ 3 ㎝大の礫、炭、陶磁器含む　35. 灰 5Y4/1 シルト混中砂～粗砂　上面に灰白 7.5Y7/2 シルト質粘土が部分的に張られる (第 7 層)　36. 黄灰 2.5Y5/1 シルト混極細砂～粗砂　φ0.5 ㎝前後の礫、炭多く含む　浅黄 5Y7/3 シルト質粘土ブロック上部に多く含む (第 7 層)　37. 灰白 7.5Y7/2 ～浅黄 7.5Y7/3 極細砂～細砂混シルト　φ0.5 ㎝の礫多く含む　一辺 3 ～ 5 ㎝の礫、灰 7.5Y6/1 中砂ブロック含む (第 7 層)　38. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂～極粗砂混シルト　φ1 ㎝前後の礫、炭、木製品含む　39. 黒褐 2.5Y3/1 シルト質粘土　一辺 3 ～ 5 ㎝の礫、炭含む　木製品多く含む　40. 黒褐 2.5Y3/1 シルト混粗砂～極粗砂　φ0.5 ～ 1cm 程の礫混じる　炭含む　41. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混極細砂～中砂　炭多く含む　42. 暗灰 N3/0 シルト混粗砂～極粗砂　φ1 ～ 3cm の礫含む　炭多く含む　鉄分沈着が顕著　43. 黒褐 2.5Y3/1 シルト混中砂～粗砂　炭、木製品、陶磁器多く含む　44. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混中砂～粗砂　φ0.5 ～ 1cm の礫、炭、瓦、陶磁器含む　45. 黄灰 2.5Y5/1 中砂～粗砂混シルト質粘土　46. 灰 5Y4/1 シルト混中砂～粗砂　炭、木製品多く含む　47. 灰 5Y4/1 シルト質粘土　炭、木製品多く含む　48. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混中砂～粗砂　φ0.5cm 程の礫、炭、灰含む　49. 灰 N4/0 シルト混中砂～極粗砂　φ0.3 ～ 0.5cm の礫、木質、炭含む　鉄分沈着が顕著　50. 黄灰 2.5Y4/1 極細砂～粗砂　φ0.5 ～ 1cm の礫、炭多く含む (第 8 層 ?)　51. 暗灰 N3/0 シルト混極細砂～粗砂　φ1 ～ 3cm の礫、炭含む　鉄分沈着が顕著　52. 灰 7.5Y6/1 中砂～極粗砂　一辺 3 ～ 10m の角礫、円礫多く含む　炭僅かに含む　53. 灰 N4/0 シルト～中砂　54. 灰 5Y4/1 シルト混中砂～粗砂　一辺 3 ～ 5cm の礫、焼土、炭含む　55. 灰 7.5Y4/1 シルト混中砂　炭、焼土多く含む　56. 灰 5Y4/1 シルト混粗砂～極粗砂　浅黄 2.5Y7/3 シルト質粘土ブロック、炭、焼土を含む　57. 灰 10Y5/1 シルト混極細砂～中砂　一辺 2 ～ 3cm の礫、浅黄 5Y7/3 シルトブロック、炭、瓦含む　58. 灰 5Y6/1 シルト混中砂～粗砂　浅黄 5Y7/4 シルト質粘土ブロック、炭含む　59. 灰 5Y5/1 シルト混中砂　φ0.5cm 程の礫、炭含む　60. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混中砂　炭、瓦、近世陶磁器多く含む　61. 黄灰 2.5Y4/1 中砂混シルト　にぶい黄褐 10YR5/4 極細砂～シルトブロック多く含む　炭僅かに含む

図24　第 3 ～ 9 面　102・188・240溝、第 3 面　104・141土坑　断面図

縁部外面直下には凹線が１条廻る。内面見込には目跡が３箇所みられる。高台及び胴部下端は露胎となっている。12は肥前陶器の京焼風皿。高台は高く、径は大きい。胴部は高台から緩やかに上方に向けて立ち上がり、口縁部は端反形を呈する。内面見込には山水画が描かれ、高台内には刻印がみられる。

図25－13は肥前染付碗。胴部は内彎しながら口縁部に向けて立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面見込は蛇の目釉剥ぎされ、剥いだ部分に乳白色のアルミナが塗布される。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎされている。18世紀前半の所産。14は景徳鎮窯青磁木瓜形皿。口縁端部及び畳付は無釉である。16世紀中頃の所産。15は肥前白磁香油壷。低い高台が付き、算盤玉形の胴部をもつ。内面は無釉。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。17世紀後半～18世紀初頭のものか。

図26－１・２は肥前染付皿。１は胴部が高台から口縁部に向けて斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内面見込には五弁花が、胴部内面には笹・草文が施される。高台内には渦「福」がみられる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。波佐見窯系産であろう。18世紀後半の所産。２は内面見込に花文が、胴部内面には唐草文が施される。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。高台内には「太明年製」の銘がある。３は有田染付皿。内面見込にはコンニャク印判による鳳凰に桜文が、周囲にはツララ文が描かれる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。17世紀末～18世紀初頭の所産。

図26－４〔カラー図版２〕は華南三彩盤である。胎土は灰白色の精良なもので、軟質である。底部は平底で、胴部は内彎しつつ底部から立ち上がり、口縁部は水平に大きく折り返す。口径のわりに器高が低く扁平な形をなす。口縁部は稜花状を呈する。内面側面には草花文、口縁部には円文・雲文を描いている。釉は緑釉を基調に、文様部分には黄釉と褐釉をかけ分けている。外面は底部以外に緑釉が施釉される。なお、破断面には漆修復の痕跡がある。華南三彩盤は近世以前の堺環濠都市では約50例の出土が知られている。今回、近世の廃棄土坑から出土したことは、貴重な品として伝世していたと想像するに難くない。

図25－16は銅製壷か。非常に薄い製品である。胴部と頸部の境で屈曲し、頸部は外に開くように上方へ伸びる。口縁部はほぼ水平に外反し、端部を肥厚させる。また、頸部外面には雷文が陰刻されている。17〔図版15左４〕は銅製の毛抜き。

他に、図化はしていないがタイ産陶器壷〔図版14左３〕がある。玉葱状の胴部を持ち、胴部外面上部には多条の沈線が廻る。胎土は明褐灰色でφ0.1～0.3㎜の黒色砂粒を多く含む。合せ口で焼成されるため、外面上半部は還元状態となり黄灰色を呈する。下半部には鉄奨を施す。

102溝〔図24・25・図版２上・７下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、幅0.5m・深さ約0.2mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。埋土は２枚に分かれ、上層は灰色のシルト質粘土、下層はオリーブ黒色の粘土が堆積している。上層には近世陶磁器や瓦、礫などが多量に廃棄されていた。溝の規模は異なるものの、下位遺構面でも同位置に築かれており近世期を通じて存続していたことが確認されている。元禄大絵図によると調査地は西側が絹屋町・東側が樽屋町となっており、この溝によって両町が区分されていたと考えられる。102溝や下位遺構面のこの位置に築かれた溝（188・240溝）は区画溝としての性格を有するものであろう。

出土遺物には肥前染付碗・皿、肥前青磁、肥前陶器碗・皿、中国製染付皿、堺擂鉢、備前擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器や椀形滓、軒平瓦、軒丸瓦、砥石などがある。出土遺物の傾向から102溝は17世紀後半～18世紀に機能していたものと思われる。

図25－１は土師質鉢である。体部は底部から口縁に向かって開き、口縁部は内彎する。口縁端部は丁

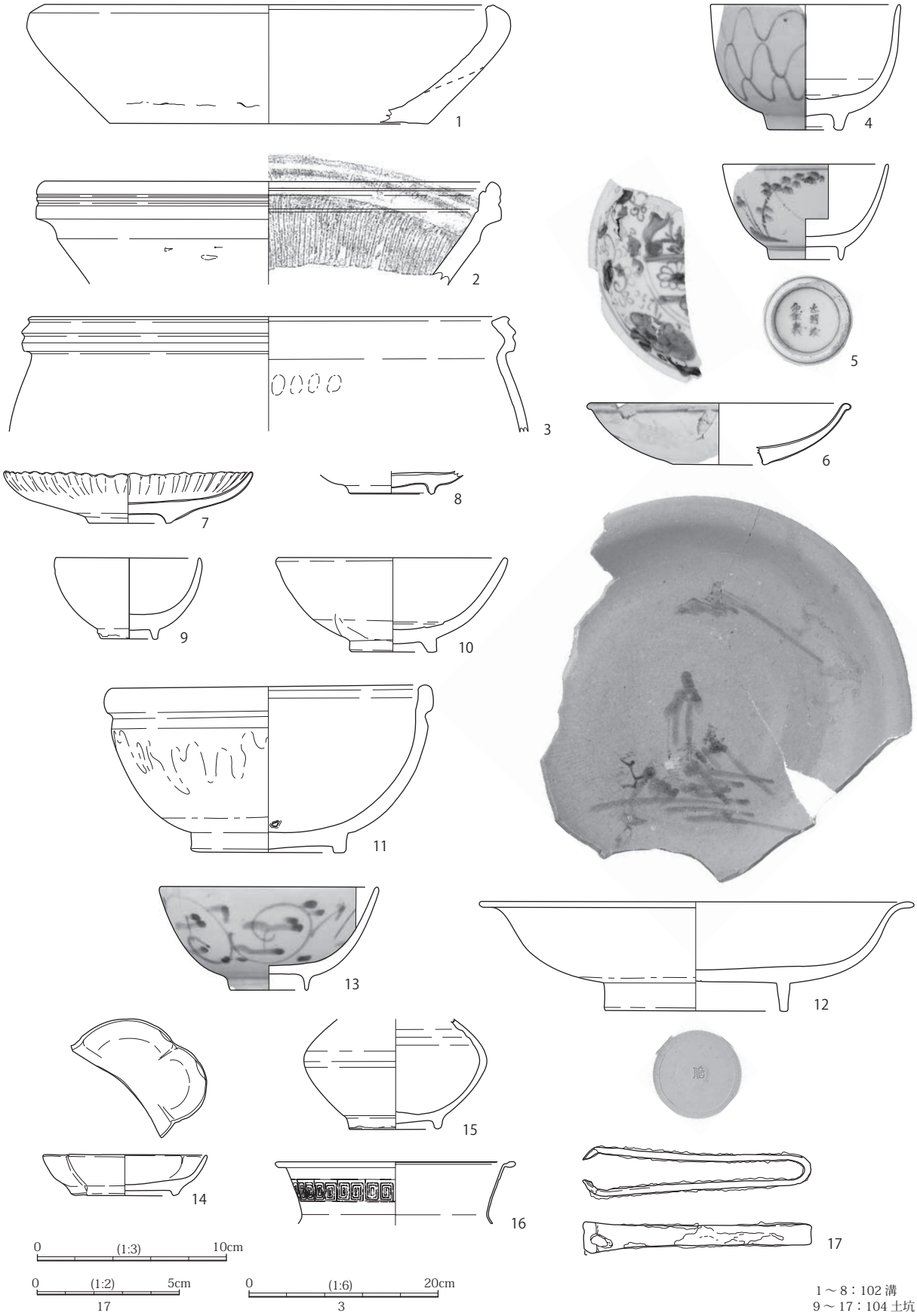


図25　第３面　102溝出土遺物、104土坑出土遺物（１）

図26　第３面　104土坑出土遺物（２）

寧にナデられ面取り状を呈する。２は堺擂鉢。口縁部外面に２条、内面に１条沈線を巡らせる。擂目はクシ状工具によって底部から口縁部に向けて密に施される。また、口縁部に及んだ余分な擂目を取り除くために、口縁部に回転ナデ調整を行っている。その結果、口縁内面と体部との境には段を持つ。

図25－３は肥前陶器甕。口縁部は内彎する。口縁部内面と体部との境には段を持つ。また、口縁部外面には２条の凹線が廻る。口縁部内外面は露胎。但し、外面下端及び端部は施釉される。４は肥前染付丸碗である。外面には一重網目文を施す。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎとなっている。５は肥前染付碗。外面には竹文と花文が描かれる。高台内に「太明成化年製」の銘が入る。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎとなっている。４、５共に17世紀後半（大橋編年Ⅲ期）の所産。６は肥前染付皿。胴部は高台から内彎しながら口縁部に向かって伸びる。口縁部は短く端反る。内面には草花文が描かれる。畳付は釉剥ぎ。７は肥前青磁輪花皿。胴部は高台から内彎しながら口縁部に向かって伸びる。高台内は施釉

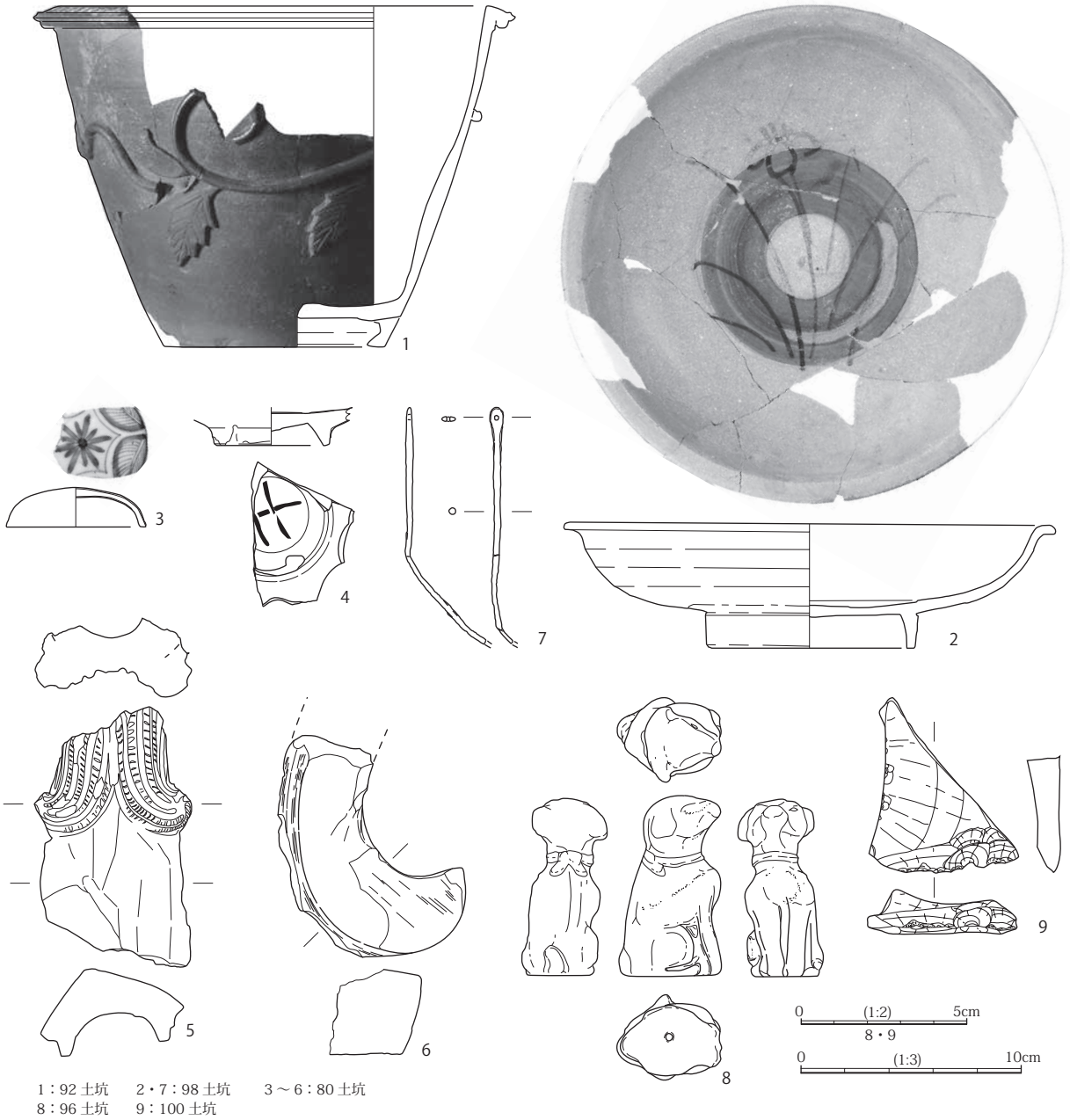


図27　第３面　遺構出土遺物

され、畳付は釉剥ぎ。６、７共に17世紀中頃（大橋編年Ⅱ－２～Ⅲ期）の所産。８は漳州窯系染付碗。

なお、１・２・４～６は上層、３・７は下層出土資料である。

100土坑〔図27〕：調査区のほぼ中央、102溝を挟んで104土坑と向かい合う位置に掘削されたものである。平面隅丸長方形を呈し、長辺1.2m、短辺0.9m、深さ0.37mを測る。埋土は黒褐色のシルト混中砂で、炭や近世陶磁器を多く含んでいる。廃棄土坑であろう。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文・内面見込蛇の目釉剥ぎなど）・皿・鉢・小杯、肥前青磁碗、肥前陶器碗・皿・甕、中国製染付碗・皿、備前擂鉢、丹波擂鉢、土師質皿・甕・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器、サヌカイト製火打ち石などがある。出土遺物の傾向から17世紀後半～18世紀前半に機能していたものと思われる。

図27－９はサヌカイト製火打ち石である。平面三角形を呈し、一辺に敲打の痕跡が認められる。

96土坑〔図27〕：調査区のほぼ中央やや東寄りの北側に位置する。西半分を土層観察用トレンチにより失うが、平面隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.1m、短辺0.5m、深さ約0.6mを測る。埋土は黒褐色のシルト混中～粗砂で、炭や近世陶磁器を多く含む。廃棄土坑として機能していたものと思われる。

出土遺物には肥前染付碗（コンニャク印判・内面見込蛇の目釉剥ぎ・くらわんか碗など）・皿、肥前外青磁染付碗、肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃甕・端反小杯、京焼系陶器碗、軟質施釉陶器、備前甕、堺擂鉢、土師質皿・甕・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒丸・道具・平）、土人形（牛、鳥、馬）などがある。出土遺物の傾向から18世紀後半～19世紀の所産であろう。本来ならば、第２面で検出すべき遺構である。

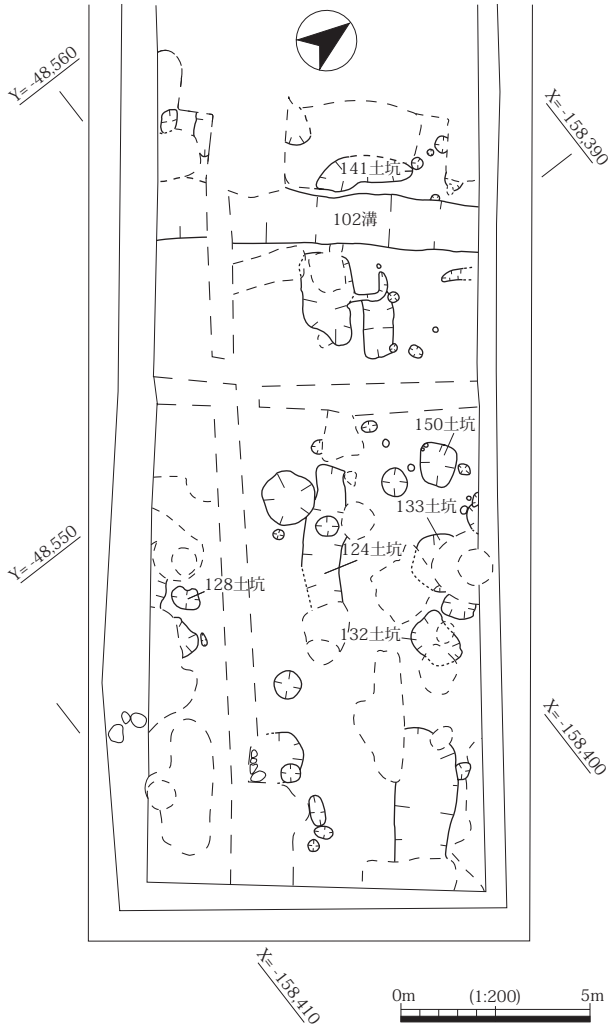


図28　第４面　平面図

図27－８は犬型の土鈴である。首輪を巻き、座った姿を忠実に表現したものである。型合せによって作成されている。剥落が著しいが柿釉や褐色釉の塗布がみられる。なお、図化を行わなかったが、牛形の土人形がまとまって出土している。

92土坑〔図27〕：96土坑の南側１ｍの位置に存在する。西半分を土層観察用トレンチにより失う不定形土坑である。長辺1.4m、短辺1.2m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色のシルト混中砂で、炭や近世陶磁器を多く含んでいる。

出土遺物には肥前染付碗（一重網目文など）・端反碗・皿・鉢・段重、肥前青磁碗、肥前白磁皿、肥前陶器碗・皿、京焼系土堝・水滴、堺擂鉢、不明植木鉢、土師質皿・甕・炮烙・火鉢、瓦質火鉢などの近世陶磁器、平瓦、チャート製火打ち石などがある。出土遺物の傾向から18世紀後半～19世紀の所産であろう。92土坑の検出位置は、第２面の51土坑

を切る溝状の浅い土坑の南端と重複する場所である。当土坑の深さも浅いことから、先の溝状土坑の掘り残しの蓋然性が高い。従って、本来は第２面に帰属すべき遺構であろう。

図27－１は植木鉢である。３方向に脚が付き、底面中央に直径２㎝の円孔が1孔穿たれる。胴部は底部から口縁部に向けて直線的に開く。口縁部は大きく外反し、外面に１条の沈線が廻る。口縁端面には刻みが施される。胴部外面には粘土紐を貼り付けて蔓草のレリーフを施す。堺焼であろうか。

80土坑〔図27〕：調査区東側の南端で検出した不定形土坑である。南側は調査範囲外に延びると思われる。現状で長辺3.7m、短辺1.5m、深さ約0.7mを測る。埋土は黒褐色のシルト混中～粗砂で、炭や近世陶磁器を多く含んでいる。

出土遺物には肥前染付碗（一重網目文・コンニャク印判など）・皿・端反小杯・鉢・合子、肥前青磁碗、肥前白磁碗・皿、肥前陶器碗・皿・鉢、堺擂鉢、丹波擂鉢、土師質皿・甕・炮烙・火鉢・羽釜、瓦質火鉢などの近世陶磁器、染付転用円盤、瓦（鬼・軒丸・平）、金属製品（釘・銅製ピン）、椀形滓などがある。出土遺物の傾向から18世紀後半以降の所産。本来は第２面に帰属すべき遺構であろう。

なお、椀形滓がまとまって出土したが、土坑周辺では第２面においても当面においても鍛冶作業を想定させるような遺構は確認出来なかった。椀形滓は直径10㎝・厚さ４～６㎝・重量0.3～0.6kgを測るもので、大きさの割に重量感があるものが多い。金属鉄はほとんど残留しない。

図27－３は肥前染付合子蓋。つまみは付かない。口縁端部は無釉となっている。天井部外面の頂部には花文を、周囲には葉文を描いている。４は肥前白磁皿。高台内は無釉で、「キ」の字状の墨書がある。５・６は鬼瓦と思われる。５は断面「く」の字状を呈し、外面には垂下する２本の突帯がある。それぞれ突帯の下端は外側に開く。突帯上には沈線が施され、沈線間には刻み目がみられる。６は鬼瓦の下端鰭部分か。平面「し」の字状を呈する。

当面では上位面の整地の際に礎石等を抜き取り・廃棄しているためか、建物に関しては明らかに出来なかった。

第４面〔図28〕　東西各第３層を除去して検出される面である。調査区中央付近は暗灰黄～灰黄色系中砂～粗砂混シルトが、東端は黄色系シルト質粗砂が基盤層となる。概ねT.P.2.6～2.9m前後である。17世紀中頃～後半の遺構面である。但し、調査区西側第４面は遺構の残存状況や遺物の所属時期から調査区東側第８面に対応するものと考えられるので後述する。

東側は第３面同様に、廃棄土坑を含む土坑群と区画溝が確認されている。土坑は平面形が円・方形と多様になり、上位面で多数確認出来た陶磁器の多量廃棄が行われるものが減少している。廃棄システムの違いが存在するのであろうか。

102溝〔図24・30・図版２上・７下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、幅1.1m・深さ約0.3mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。第３面のものよりも若干規模が大きい。埋土は灰色の粗砂混シルト質粘土である。礫、瓦、炭、近世陶磁器を多く含んでいる。出土遺物には肥前染付碗・小碗・皿・仏飯器、肥前青磁・鉢、肥前白磁仏飯器、肥前陶器碗・皿・瓶、中国製染付碗、志野鉄絵瓶、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・軒丸）、石製品（硯・砥石・五輪塔）、磁器転用円盤などがある。出土遺物の傾向から102溝は17世紀中頃～後半に機能していたものと思われる。

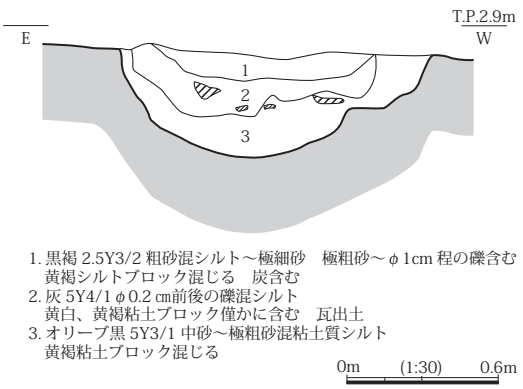
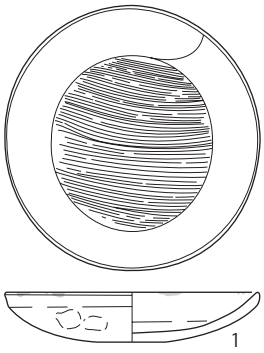
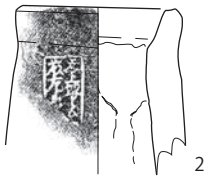
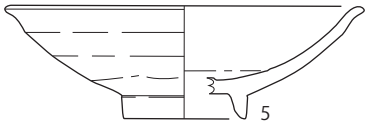
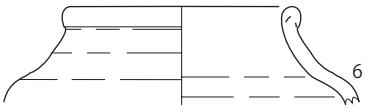


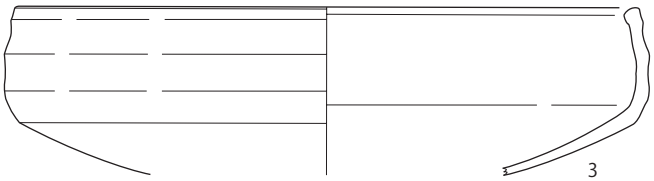
図29　第 4 面　150土坑　断面図

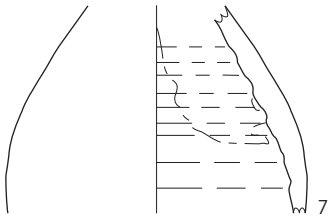


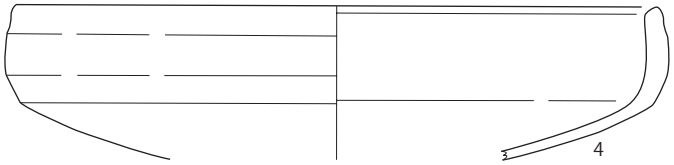


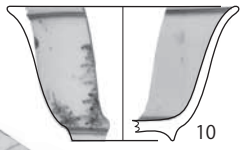


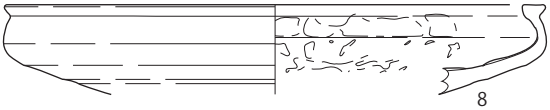


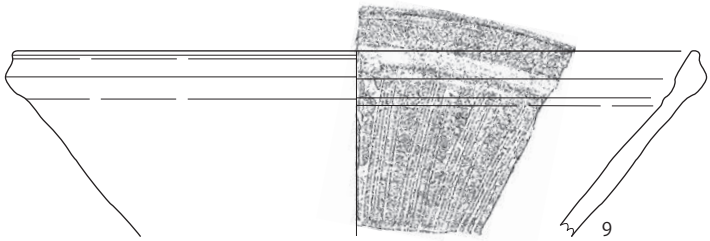


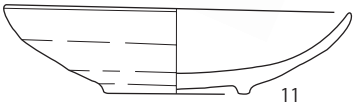


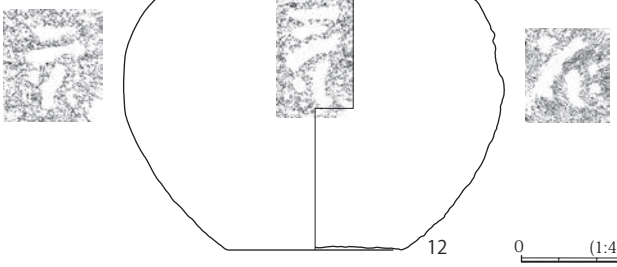












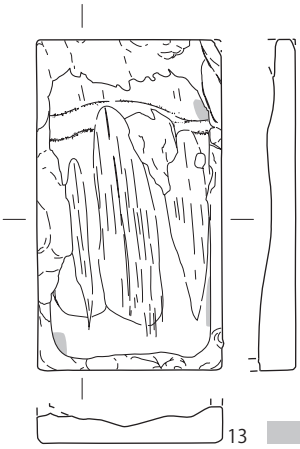


図30　第 4 面　102溝出土遺物

図30－１は土師質皿。口縁端部はつまみ上げて、尖り気味におさめる。胴部外面には指頭圧痕が残る。口縁～胴部内面には回転ナデが、内面見込には横位の粗いナデを施す。口縁部には油煙の付着がみられる。２は焼塩壷である。口縁部は短く外反する。口縁部内面は丁寧にナデる。胴部内面には布目が残り、粘土帯巻き上げの際の絞り目が残る。輪積み成形である。また、胴部外面には「天下一堺□/藤左□」の刻印がみられる。天下一の銘があることから17世紀後半の所産であろう。３・４は土師質炮烙である。胴部は緩やかに内傾しながら口縁に向けて立ち上がる。３・４共に胴部外面にはタタキは施されない。３の胴部外面には２条の凹線が廻る。４は口縁部外面直下に１条の凹線が廻る。３に比して４の胴部はやや肥厚している。

図30－５は肥前青磁皿。高台はやや高く、胴部は高台から緩やかに上方に向けて立ち上がり、口縁部は端反形を呈する。内面見込は蛇の目釉剥ぎになっている。胴部下半部及び高台は露胎。内野山窯産。17世紀後半の所産。６は肥前陶器壷。口縁部は玉縁となっており、外面全面に鉄釉を施す。17世紀前半の所産。７は志野鉄絵瓶。17世紀初頭の所産。８は肥前青磁鉢。口径に比して器高が低く扁平な器形である。胴部は底部から緩やかに斜め上方に伸び、途中から口縁部に向けて内彎しながら短く立ち上がる。口縁部は水平に短く外反する。口縁端部には鉄錆を施す。９は丹波擂鉢。口縁部外面には１条の凹線が廻る。口縁部内面と胴部の境には段を持つ。口縁部は外側にやや肥厚する。擂目は４条１単位のクシ描きである。17世紀前半～中頃（大平編年Ⅲ～Ⅳ期）の所産か。10は肥前染付小杯。高台は低く、胴部は高台から緩やかに外半しながら立ち上がる。口縁部は端反る。胴部外面には草文が描かれる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。17世紀後半の所産。11は肥前染付皿。高台は低く、胴部は高台から緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。内面見込には花文を、周囲には格座間形の区画の中に梅状の文様を施す。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎとなる。

図30－12は五輪塔の水輪。四方に梵字を刻印する。梵字は発心・修業・菩提・涅槃を表すもので、五輪塔に定型的に刻まれるもの。石材は粗粒黒雲母花崗岩。13は硯。非常によく使用され、陸部には使用による３条のくぼみがみられる。石材は凝灰質頁岩。

150土坑〔図29〕：調査区の中央東寄り、102溝の東約５ｍで検出した。平面隅丸長方形を呈し、長辺1.05m、短辺0.95m、深さ0.42mを測る。埋土は３枚に分かれる。土坑の東側は１段掘りであるが、西側は２段に掘り窪めている。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文）・端反碗・皿、肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃菊皿、備前擂鉢、土師質皿・羽釜・炮烙などの近世陶磁器、瓦（軒平・軒丸・丸）、石製品（砥石）・スサ入り焼土塊などがある。17世紀後半の所産であろう。

141土坑〔図24・31〕：調査区のほぼ中央で検出した。102溝の西肩に接して掘削されている。第３面の104土坑の下位で検出した土坑である。断面逆台形を呈する。埋土は７枚に分かれ、黄灰色の砂混シルトが主な堆積土である。各埋土には近世陶磁器や瓦、炭を多量に含み、廃棄土坑としての性格を有している。土坑床面付近には平瓦が敷き詰められたかのように多量に廃棄されていた。

出土遺物には肥前染付碗（コンニャク印判）・小杯・皿・瓶、肥前青磁、肥前白磁碗・小杯・皿、肥前陶器碗・皿、京焼風皿、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙・十能・擂鉢、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・平・丸）などがある。出土遺物の傾向から17世紀後半～18世紀前半に機能していたものと思われる。調査段階では、第３面の104土坑よりも古い時期の土坑との認識であったが、出土遺物の内容や時期を検討すると、104土坑と141土坑では大きな差が認められない。従って、141土坑は104土坑の下層部分として捉えなおしたい。

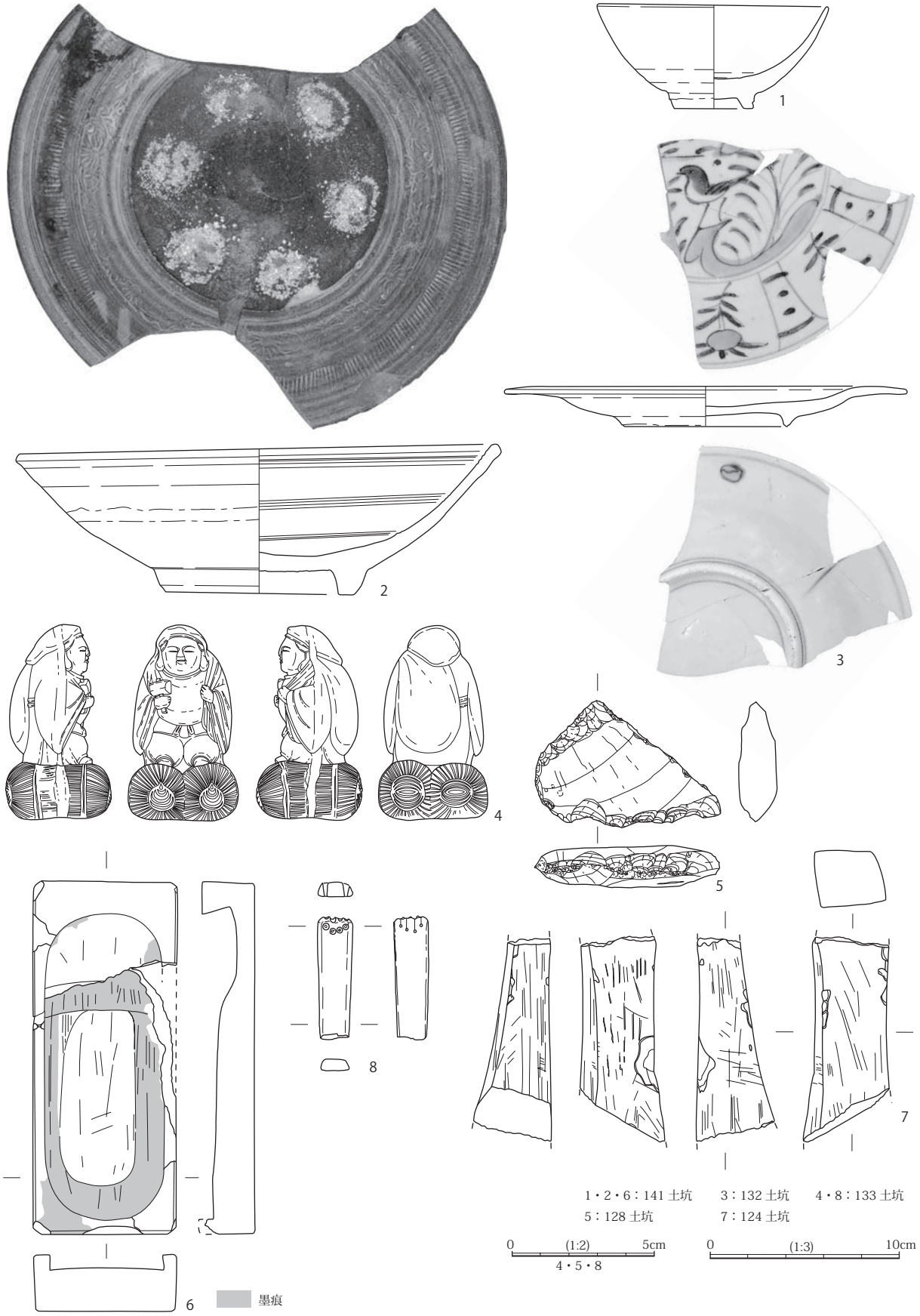


図31　第４面　遺構出土遺物

図31－１は肥前陶器碗。胴部は高台から緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや尖り気味におさめる。内外面に透明釉を施釉。高台は露胎となっている。内面見込は蛇の目釉剥ぎ。内野山窯系産。２は肥前陶器三島手大皿。高台は幅広く、畳付部分の角を落とす。胴部外面上半部は鉄釉を、下半部に鉄錆を施す。高台は露胎。内面見込には砂目痕跡を６箇所残す。象嵌は不明瞭である。18世紀前半～中頃の所産。６は硯〔図版17左１〕。四隅は面取りしている。陸部に墨痕が残る。石材は流紋岩質凝灰岩。

124土坑〔図31〕：調査区東側ほぼ中央に位置する。N−130°−Eに軸をもち、長さ5.2m、幅1.1m・深さ約0.2mを測る溝状の浅い土坑。埋土は黒褐色の粗砂混シルトである。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文・宣明銘）・小杯・皿、肥前青磁碗、肥前白磁碗・小杯・皿、肥前陶器碗・皿、備前甕・壷か、土師質皿・甕・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・平・丸）、土錘、石製品（砥石）などがある。出土遺物の傾向から17世紀中頃～後半に機能していたものと思われる。図31－７は砥石である。４面を使用する。使用によって、中央部の厚みが減じている。黒色頁岩製。

133土坑〔図31〕：124土坑の東側約３ｍに位置する。土坑東側は第１面14井戸に、南側は第３面の土坑に切られ、形状は不明瞭。埋土は黒褐色シルト混極細砂。

出土遺物には肥前染付碗（一重網目文）・皿、肥前青磁碗、肥前白磁碗・皿、肥前陶器碗・皿、備前甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・炮烙、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・平・丸）、石製品（砥石・石臼）、骨製品（櫛払い）などがある。出土遺物からみれば17世紀中頃～後半に機能していたものと思われる。

図31－４は土人形。俵に乗った大黒。型合せによって作成されている。表面には型離れのための雲母が多く付着する。８は骨製の櫛払いの柄〔図版17左３〕。断面台形を呈する。片側穿孔による直径0.2㎝の小孔が４孔確認出来る。また、破断面にも同様の孔の痕跡が４箇所認められるため、本来は８孔存在したと思われる。

132土坑〔図31〕：133土坑の東側約１ｍに位置する。N−90°−Eに軸をもち、長辺1.4m、短辺１ｍ・深さ約0.7mを測る平面隅丸長方形の土坑。埋土は３枚に分かれる。上層は黄灰色のシルト混微砂、中層は浅黄色の粘土ブロックと灰色シルトが混じったもの、下層が瓦溜まりである。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文）・端反碗・皿、肥前青磁碗、肥前陶器碗・皿、中国製染付碗、備前擂鉢、土師質皿・甕・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器、瓦（軒平・平・丸）、寛永通宝などがある。出土遺物の傾向から17世紀中頃～後半に機能していたものと思われる。

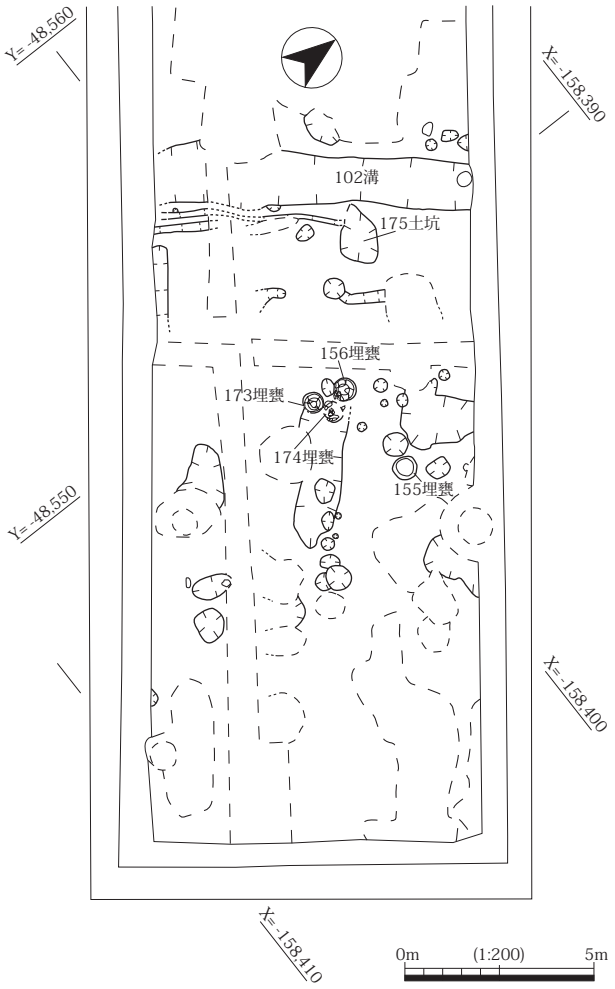


図32　第５面　平面図

図31－３は肥前染付皿。高台は低く、径は大きい。また、口径のわりに器高が低いため、扁平な器形となる。口縁部は水平に大きく外反する。内面見込には鳥と草が、周囲には草花が描かれる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。

128土坑〔図31〕：調査区の東側の南寄りで、124土坑から南に約５ｍの位置で検出した。平面不定形な土坑である。埋土は締まりの悪い黒褐色粗砂混シルト～細砂。出土遺物には肥前染付碗・皿・瓶、肥前白磁小杯、肥前陶器碗・皿、丹波擂鉢、土師質皿・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器や土錘、サヌカイト製火打ち石などがある。出土遺物から18世紀前半の所産と思われる。本来は第３面に帰属すべき遺構である。図31－５はサヌカイト製火打ち石。１側面に原礫面を残す。縁辺部に著しい敲打の痕跡がみられ、潰れて丸みを帯びる。

当面では上位面の整地の際に礎石等を抜き取り・廃棄しているためか、建物に関しては明らかに出来なかった。

第５面〔図32〕　東西各第４層を除去して検出される面である。調査区中央付近は黄灰色系のシルト質中砂～粗砂が、東端は黄色系シルト質粗砂が基盤層となる。概ねT.P.2.5～2.8m前後である。17世紀中～後半の遺構面と考えられる。ただし、調査区西側第５面は遺構の残存状況や遺物の所属時期から調査区東側第９面に対応するものと考えられるので後述する。

東側では溝・土坑・埋甕４基を検出した。

102溝〔図24・図版２上・７下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、幅1.4m・深さ約0.3mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面形は浅い皿状を呈する。第４面のものよりも若干規模が大きい。埋土は１枚で黄灰色の極細砂混シルト質粘土である。断面でみると明瞭な形で確認出来るが、平面では輪郭が不明瞭であったため、当面では102溝としての調査が行えなかった。結果として、第６面の188溝の上層として一緒に掘削している。従って、当面の102溝としての出土遺物は確認出来ていない。

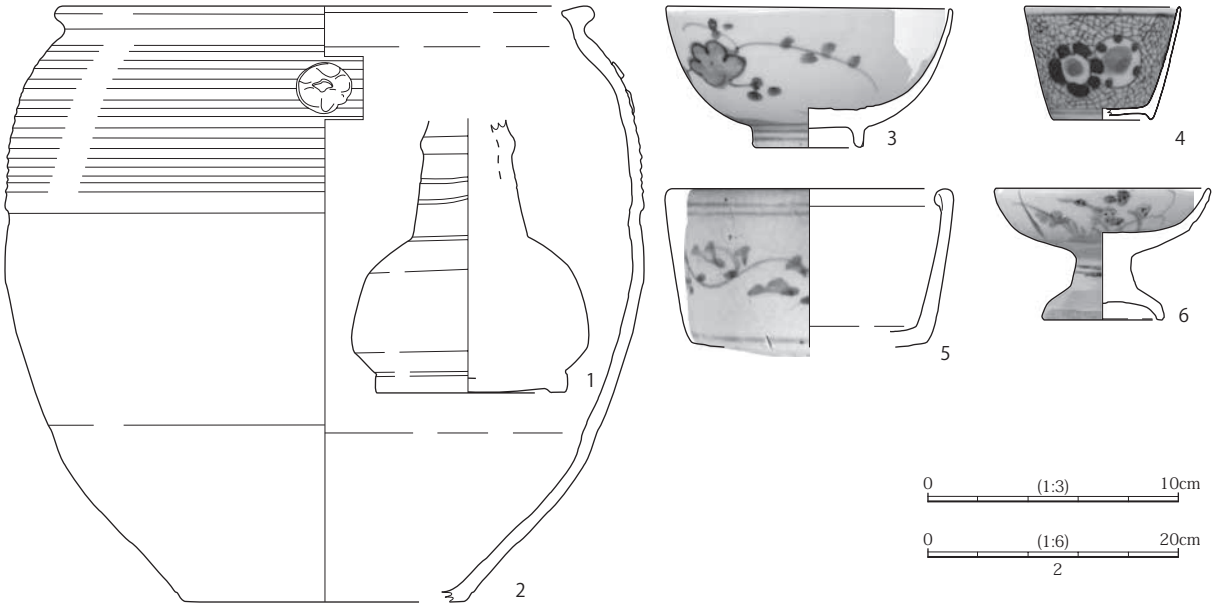


図33　第５面　175土坑出土遺物

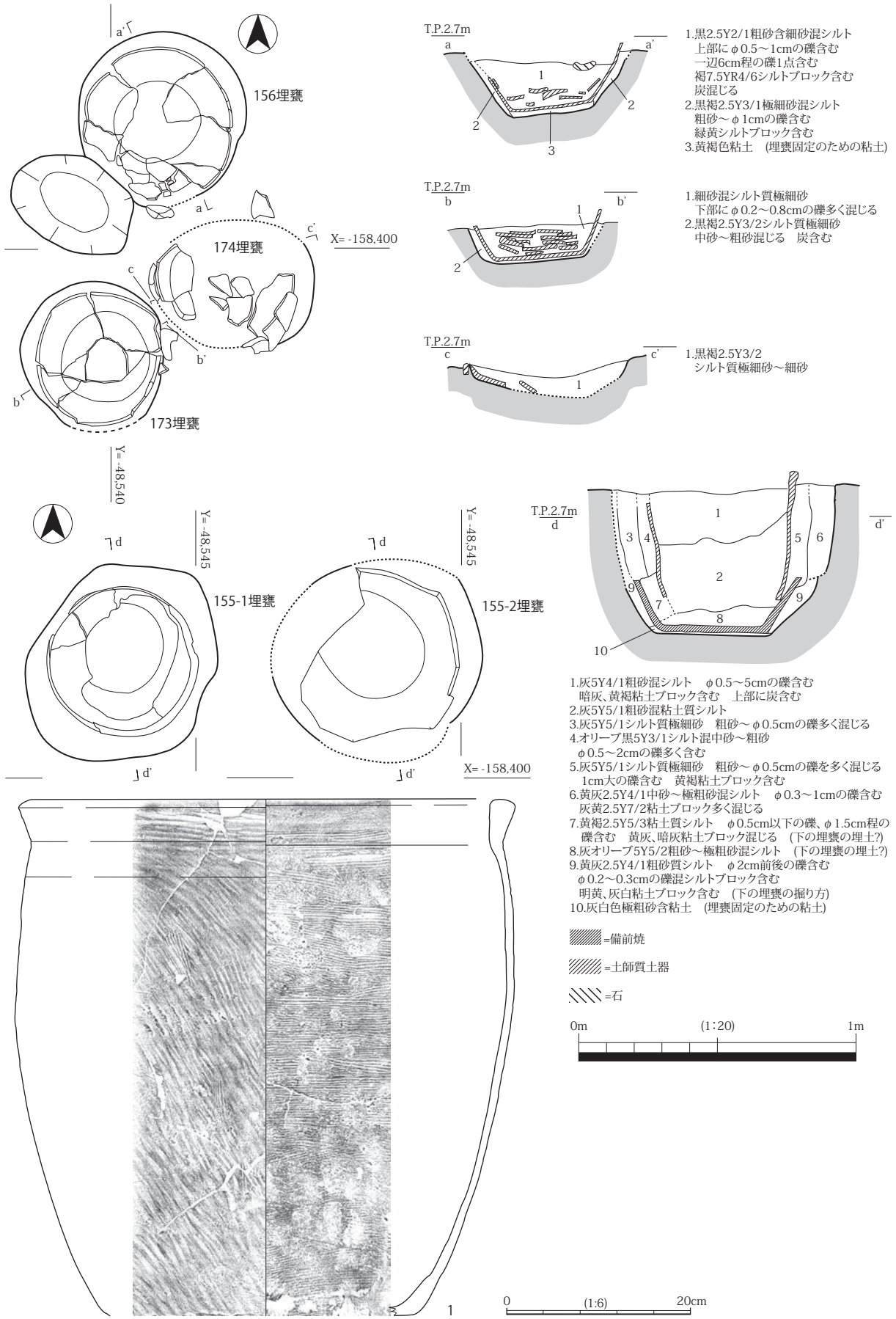


図34　第５面　156・173・174・155埋甕　平・断面図、155埋甕実測図

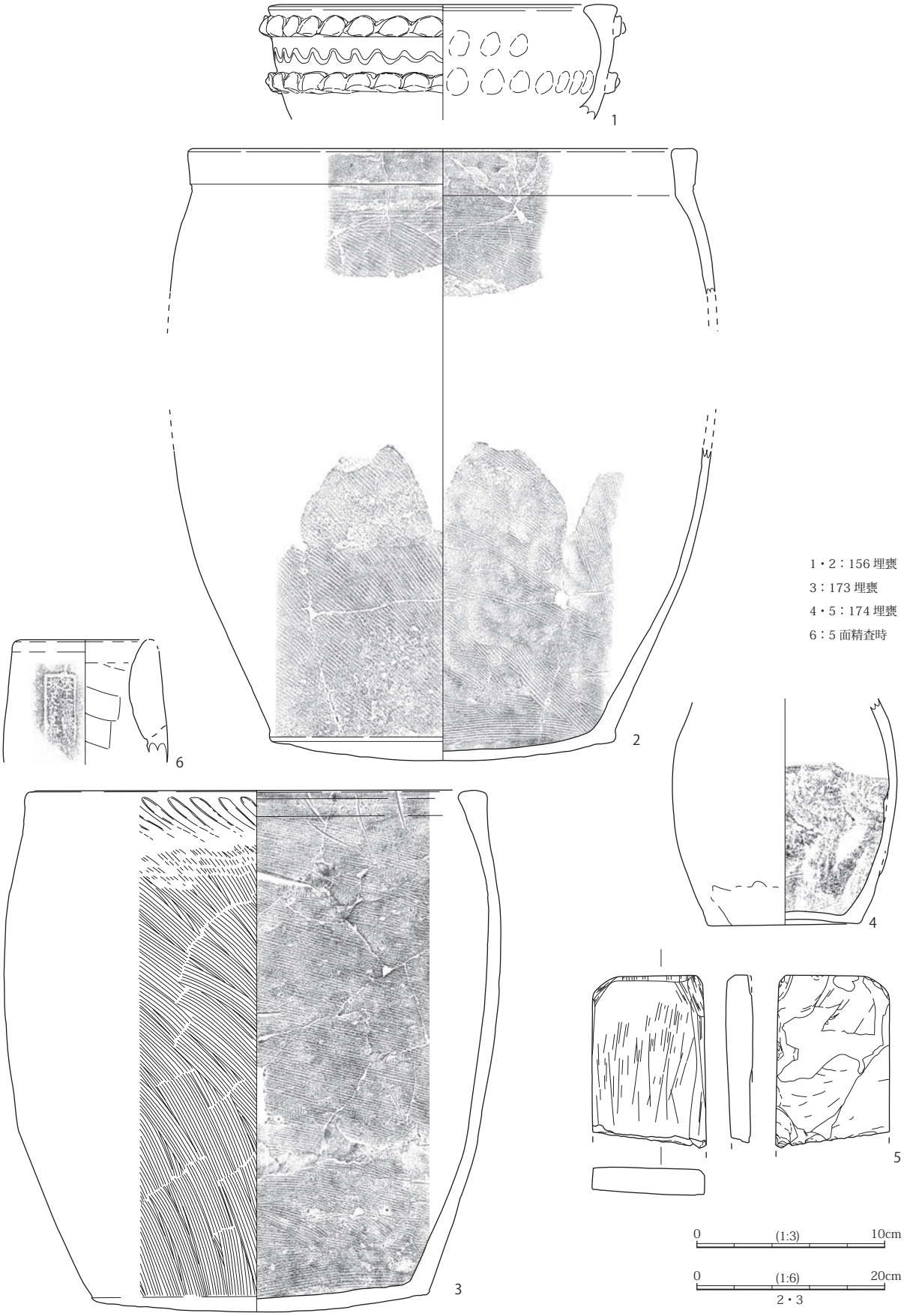


図35　第 5 面　156・173・174埋甕出土遺物

175土坑〔図33〕：調査区中央、102溝の東肩に接するように掘削された不定形な土坑である。埋土は５枚に分かれ、灰色のシルト混細～中砂や細砂混シルトが堆積していた。いずれの層にも炭・焼土が含まれる。廃棄土坑として掘削されたものであろう。

出土遺物には肥前染付碗（一重網目文・二重網目文・内面見込蛇の目釉剥ぎ）・皿・火入れ・仏飯器、肥前青磁碗、肥前白磁小杯・皿、肥前陶器碗・皿・甕、土師質皿・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器や丸瓦などがある。出土遺物から17世紀後半～18世紀の所産と思われる。本来は第３面で検出すべき遺構であったもの。

図33－１は肥前陶器壷。低い高台に玉葱状の胴部を持ち、頸部は口縁部に向かってすぼまり、上部に１条の突帯が廻る。外面には白化粧土を回しかけられ、鉄釉を流しかける。高台は露胎である。２は肥前陶器甕である。胴部は内彎しながら口縁部に向かって立ち上がり、最大径を胴部中程にもつ。また、口縁部から３分の１下がった胴部外面に、段をもつ。そしてこの段から口縁部までの間には多条の沈線を廻らせ、貼花文を施す。口縁部は内外面共に水平に短く突出し、「Ｔ」の字状を呈する。17世紀前半の所産であろう。３は肥前染付丸碗。外面に折枝梅文を描く。内面見込は蛇の目釉剥ぎで、剥いだ部分にアルミナをかけている。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。17世紀後半（大橋編年Ⅲ期）の所産か。４は肥前染付猪口。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。高台内に二重圏線に福の銘がみられる。18世紀前半の所産か。５は肥前陶胎染付火入れである。胴部は口縁部に向け直線的に斜め上方に伸びる筒型の器形。口縁部は内側に短く折り返す。胴部外面には唐草文を描く。内面は露胎である。６は肥前染付仏飯器。高台内は比較的深く削り込み、坏部は口縁部が上方に向かって広がりながら伸びる。坏部外面には草花文が描かれる。17世紀後半の所産か。高台及び高台内は無釉。

155埋甕〔図34〕：調査区東側中央の北寄りで検出した。元々、155－２埋甕とした備前甕を埋置した埋甕が築かれており、その底部だけを残して胴部以上を抜き取った跡に、155－１埋甕と称した直径約0.55mの土師質甕を据えている。155－２埋甕の底部を残していたためか、155－１埋甕の底部は抜かれている。埋甕内部には２枚の埋土がみられた。共に灰色の粗砂混シルトが主体であるが、下層の方が粘性が強い。なお、155－２埋甕設置に際しては、甕と土坑底面との間には灰白色系粘土を入れ安定を図っていた。裏込めにはシルト質極細砂や砂混シルト等を入

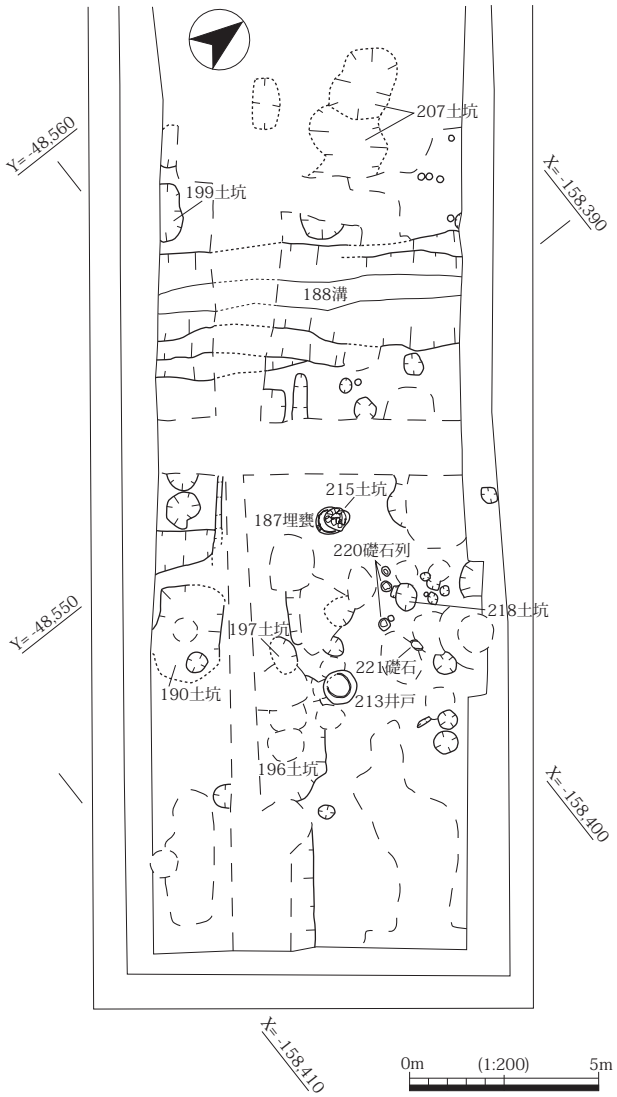


図36　第６面　平面図

れている。

図34－１は155－１埋甕。土師質甕である。先にも述べたように底部は抜かれている。胴部は底部から口縁部に向け内彎するように伸び、胴部中程に最大径を持つ。口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面と胴部との境には段がみられる。口縁部外面には横位の、胴部外面には右斜め下がりのタタキが施される。また、胴部内面には横位のハケメが施される。

156・173・174埋甕〔図34・35・図版５中〕：調査区東側の中央で検出した。３基とも上位の整地の際に削平されたのか、下半部しか遺存していなかった。

156埋甕は直径0.6mの掘り方の中に土師質甕を据えたもの。埋甕内部に土師質甕の上半部が落ち込んでいた。155埋甕同様に、甕と土坑底面との間には黄色粘土を入れて甕の固定を図っていた。裏込めには極細砂混シルトを入れている。

173埋甕は直径0.5mの掘り方の中に土師質甕を据えたもの。甕内部に土師質甕の上半部が落ち込んでいた。173埋甕は156埋甕とは異なり、土坑底面には甕の固定のための黄色粘土を入れていない。裏込めにはシルト混極細砂を用いている。

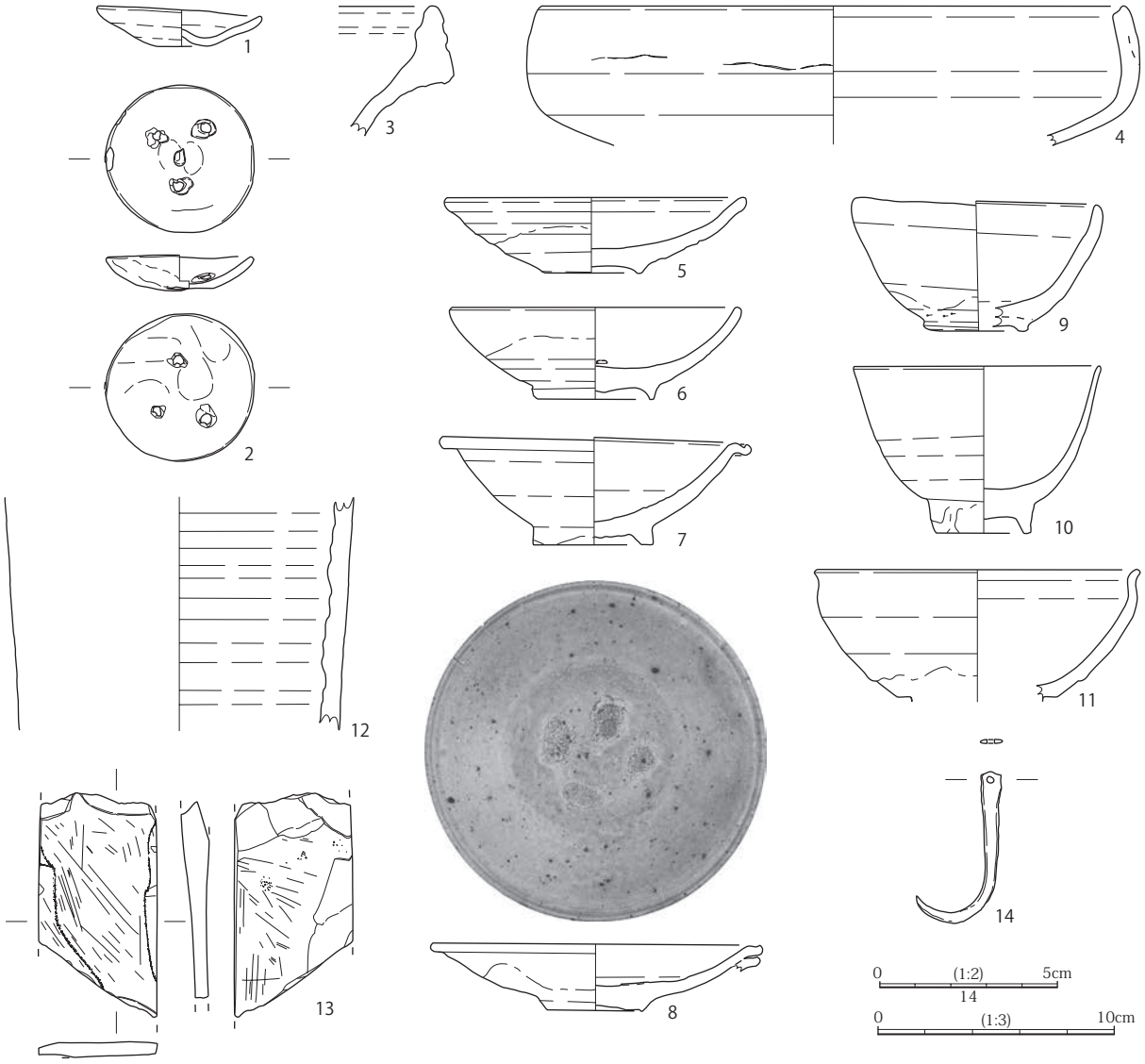


図37　第６面　188溝出土遺物（１）

174埋甕は３基の中で一番遺存状況が悪かった。直径約0.55mの掘り方の中に土師質甕を据えていたと思われる。

図35－１は156埋甕出土の瓦質火鉢。口縁部は内外面共に水平に短く突出し、「Ｔ」の字状を呈する。口縁部直下と胴部に指で押圧した貼り付け突帯が廻る。また、突帯間にはヘラ描きによる波状文が１条廻る。胴部内面には指頭圧痕が残る。

図35－２・３は埋甕に使用された土師質甕。２は156埋甕である。先にも述べたように、甕上半部は埋甕内部から出土したものの、完全復元には至らなかった。底部は丸底で、胴部との境がやや段を持つように突出する。胴部は底部から口縁部に向け内彎するように伸び、胴部中程に最大径を持つ。口縁部は直立し、口縁端部は平坦に成形する。口縁部と胴部との境には内外面共に段がみられる。胴部外面には右斜め下がりのハケメが、口縁部直下の段付近には横位のハケメが施される。また、胴部内面には右斜め下がりのハケメが、口縁部直下の段付近と底部付近には横位のハケメが施される。３は173埋甕である。底部は丸底である。胴部は底部から口縁部に向け内彎するように伸び、胴部中程に最大径を持つ。

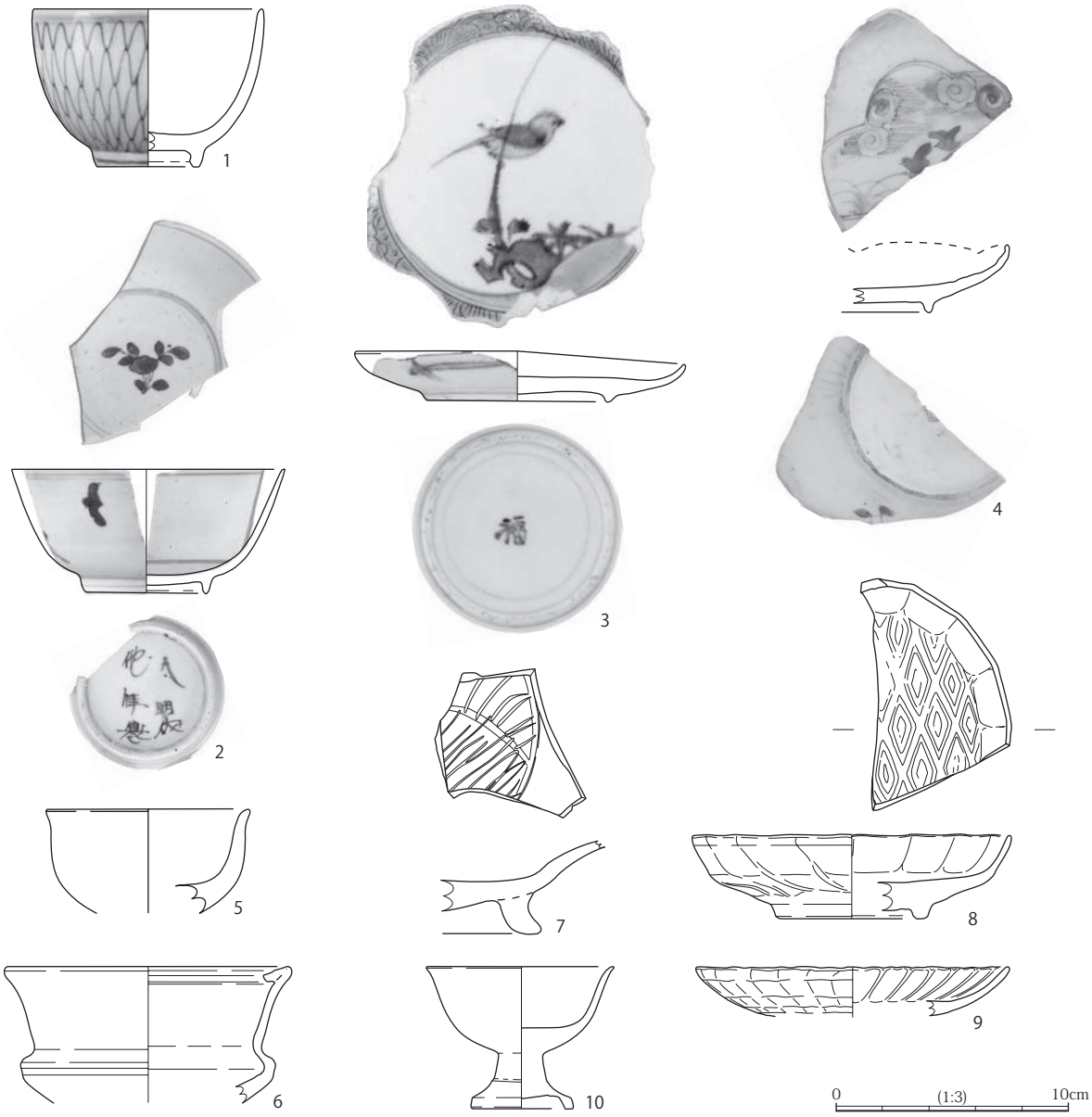


図38　第６面　188溝出土遺物（２）

口縁部はやや内彎し、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面には右斜め下がりのハケメが、口縁部外面には粗いタタキが施される。また、胴部内面には右斜め下がりのハケメが、底部付近には横位のハケメが施される。

図35－４は173・174埋甕から出土した肥前陶器瓶である。底部はやや上げ底気味となっている。タタキ成形である。胴部外面は鉄釉と白色釉が施釉される。胴部外面下端、底部外面及び胴部内面下半部は露胎。５は174埋甕から出土した砥石。２面使用。石材は珪質頁岩である。側面には成形時の擦痕がみられる。これらの埋甕は17世紀中～後半の所産である。

図35－６は第５面清掃時に出土した焼塩壷。外面には「天下一御壷□（師ヵ）／堺見なと伊□（織ヵ）」の銘が刻印されている。口縁部内面は丁寧なナデを、胴部内面は粗いナデを施す。天下一銘があることから17世紀後半の所産であろう。

155・156埋甕の事例をみると、当面で検出した土坑で底面に黄色・灰白色系粘土を貼っているものは、埋甕を抜き取った痕跡である蓋然性が高い。

なお、当面では上位面の整地の際に礎石等を抜き取り・廃棄しているためか、建物に関しては明らかに出来なかった。

第６面〔図36〕　調査区の東側のみで確認される東第５層を除去して検出される面である。褐灰～黄灰色系のシルト質粗砂が基盤層である。概ねT.P.2.4～2.8m前後である。17世紀前半～中頃の遺構面と思われる。区画溝・土坑・礎石が確認出来た。土坑は直径0.6m前後のものが多く、埋土にそれほど遺物が含まれない。性格不明のものが大半である。また、旧少林寺団地による大規模撹乱の底から廃棄土坑が検出されたが、掘り込み面が明確でないため現状では検出した当面で報告する。

188溝〔図24・37・38・図版２上・７下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、幅1.7～1.8m・深さ約0.3mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。上位面のものよりも規模が大きい。埋土は４枚に分かれる。上層はオリーブ黒色のシルト混中～粗砂、下層がオリーブ黒色粘土や灰色の粗砂混シルト質粘土である。礫、瓦、炭、木片、近世陶磁器を多く含んでいる。

出土遺物には肥前染付碗・小碗・皿、肥前青磁皿・鉢・香炉、肥前白磁輪花皿・仏飯器、肥前陶器碗・皿・瓶、中国製染付碗、ベトナム産陶器、備前擂鉢・甕・茶入、丹波擂鉢・壷、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器や、瓦（軒平・軒丸・平・丸）、砥石、磁器転用円盤、木製品（箸・糸巻き具・曲げ物・桶・樽・漆椀・下駄など）・植物種子（マクワウリの仲間）などがある。出土遺物の傾向から188溝は17世紀前半～中頃に機能していたものと思われる。上位の溝に比べ陶磁器の廃棄が多く見られるようになる。さらには、上位の溝ではみられなかった木製品の廃棄が行われている。

図37－１は土師質皿。へそ皿である。口縁端部は摘み上げて尖り気味におさめる。口縁部には油煙が付着する。２は土師質皿転用の土面〔図版14左１〕である。内面見込中央に残る粘土巻上げ痕跡を鼻として利用し、外面から目・口を穿孔して顔に仕上げている。３は備前擂鉢。口縁部外面には２条の沈線が廻る。擂目は13条１単位のクシ描き。４は土師質炮烙。胴部は緩やかに内傾しながら口縁に向けて立ち上がる。胴部外面にはタタキは施されない。胴部中程に粘土紐接合痕が残る。口縁端部には１条の沈線が廻る。

図37－５～８は肥前陶器皿。５は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎した胴部で、口縁部直下でやや外反する丸皿。胴部下半及び高台は露胎となっている。胎土目積みである。目跡が４箇所に残る。16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ－２期）の所産。６は高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲した胴部をもつ丸皿。胴部下半及び高台は露胎となっている。高台内には兜巾がみられる。胎土目積みである。目跡が３箇所に残る。16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ－２期）の所産。７は高台から上方に緩やかに立ち上がり、口縁部は水平に外反する。口唇部には溝を廻らせる溝縁皿である。畳付及び高台内は露胎。砂目積みである。目跡が４箇所に残る。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。８も７と同様の溝縁皿である。しかし、胴部の高台からの立ち上がりは７よりも緩やかなために器高が低くなり、扁平な器形となる。胴部下半及び高台は露胎である。内面見込４箇所に砂目積みの痕跡がみられる。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。なお、口縁部外面に重ねられた下の皿の溶着がみられる。

図37－９・10は肥前陶器碗である。９は高台が低く、高台から胴部が斜め上方に緩やかに内彎しながら伸びる。高台は露胎である。16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ期）の所産。10は高台が高く、胴部が高台から口縁部に向けてほぼ上方に伸びる器形。畳付及び高台内は露胎となっている。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。11は瀬戸美濃天目碗。胴部は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら斜め

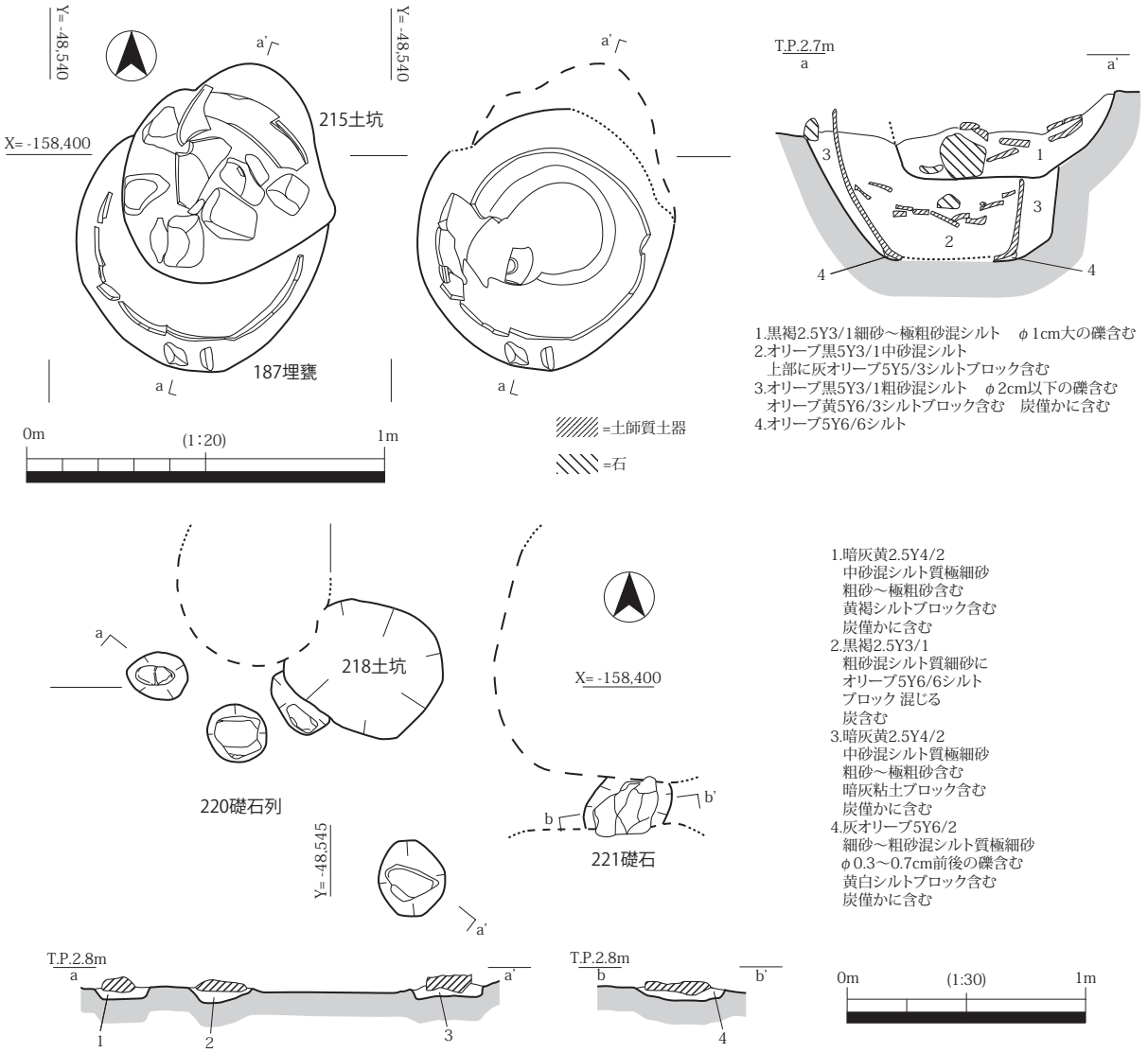


図39　第６面　215土坑、187埋甕、220礎石列、221礎石　平・断面図

図40　第６面　遺構出土遺物

上方に伸びる。口縁部は「く」の字に屈曲する。口縁部から胴部３分の２までは鉄釉が施される。12はベトナム産陶器長胴壷。胎土は褐灰色でφ0.1～0.3㎝の褐色砂粒を僅かに含むが精良である。内面はナデによる凹凸が著しい。

図38－１・２は肥前染付碗である。１は丸碗。外面に鋸歯状の一重網目文を施す。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。17世紀前半（大橋編年Ⅱ－２期）の所産。２は内面見込に牡丹状の草花文を、外面には鳥を描く。高台内には「太明成化年製」の銘がみられる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。

図38－３・４は肥前染付皿。３は高台径が大きく、胴部の立ち上がりは低い。内面見込に草に止まる鳥が描かれる。周囲には線刻した草文に染付を施している。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。高台内には「福」の銘がみられる。４は型押し。内面見込に鳥・草文・渦雲を描く。小片であるため判然としないが、口縁部は菊花形になるものか。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。２～４は17世紀中頃～後半の所産なので混入品であろう。

図38－５は肥前青磁碗か鉢。胴部はほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は小さく端反る。６は肥前青磁香炉。腰が張り、腰のくびれから口縁部に向けて斜め上方に直線的に立ち上がる。口径は腰周りよりもやや大きい。口縁部は内面に折り返している。内面も施釉される。７は肥前青磁脚付き皿である。内面見込には多条の沈線文がみられる。８・９は肥前白磁輪花皿。８の内面は型打ち成形。内面見込には線彫りによる菱形文がみられる。17世紀前半～中頃の所産。10は肥前白磁仏飯器。坏部は深く、口縁部は僅

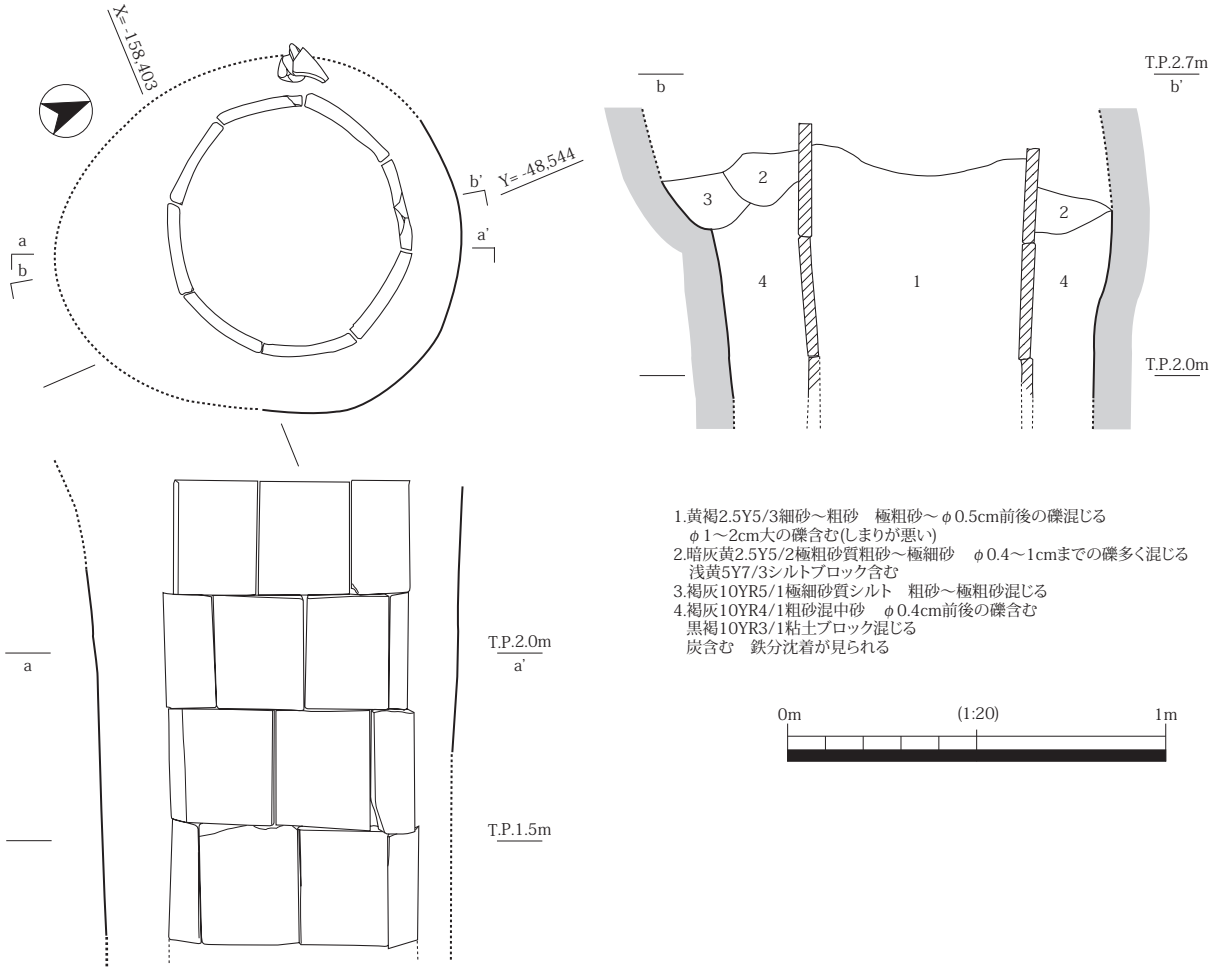


図41　第６面　213井戸　平・断・立面図

かに端反る。高台内の刳り込みはそれほど深くない。高台や高台内は無釉である。

図37－13は砥石。２面を使用している。中央部は使用により薄くなる。仕上げ砥である。珪質頁岩製。14は銅製の棹秤用鉤〔図版15－右２〕である。頭部は扁平に成形され、直径0.2㎝の孔が穿たれている。

207土坑〔図40〕：調査区中央西寄り、188溝から西へ約3.5mの位置で検出された土坑である。この位置は旧少林寺団地建物による撹乱の底にあたる部分なので、207土坑の掘り込み面は不明である。東西方向で２基の土坑が切り合っていた。西側の新しい土坑は長さ1.6m、幅1.7mを、東側の古い土坑は長さ1.5m、幅２mを測る。西側の埋土は黄灰色シルト質粘土で多量の近世陶磁器、瓦、礫含む。東側の土坑は５～20㎝の厚さで20枚程度の堆積層がみられた。

出土遺物には肥前染付碗（二重網目文など）・小碗・皿、肥前青磁皿・鉢、肥前青磁染付碗、肥前白磁碗・仏飯器、肥前陶器碗（呉器手など）・皿・瓶、瀬戸美濃小碗、京焼系皿・土堝、備前擂鉢・甕・茶入、丹波擂鉢・壷・徳利、堺擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器、土製品（土人形、ミニチュア土器）、瓦（平・丸）、石製品（砥石）、金属製品（釘）などがある。出土遺物の時期からみれば、時期幅があり17世紀後半～18世紀の所産であろう。本来は第３面に帰属する遺構と考えられる。

図40－６は土人形。表面には岩の上に座る人物と鍬を持つ人物が陽刻され、裏面には多条の沈線状の刻みが施されている。また、両面共に型離れをよくするための雲母がみられる。７～９は砥石である。７は断面六角形を呈する粗砥〔図版17左２〕である。石材は石英質砂岩。８は２面使用の砥石。細かな擦痕がみられる。仕上げ砥。９は粗い擦痕がみられる。使用により中央部が磨り減る。仕上げ砥〔図版17右２〕。８・９は珪質頁岩製である。

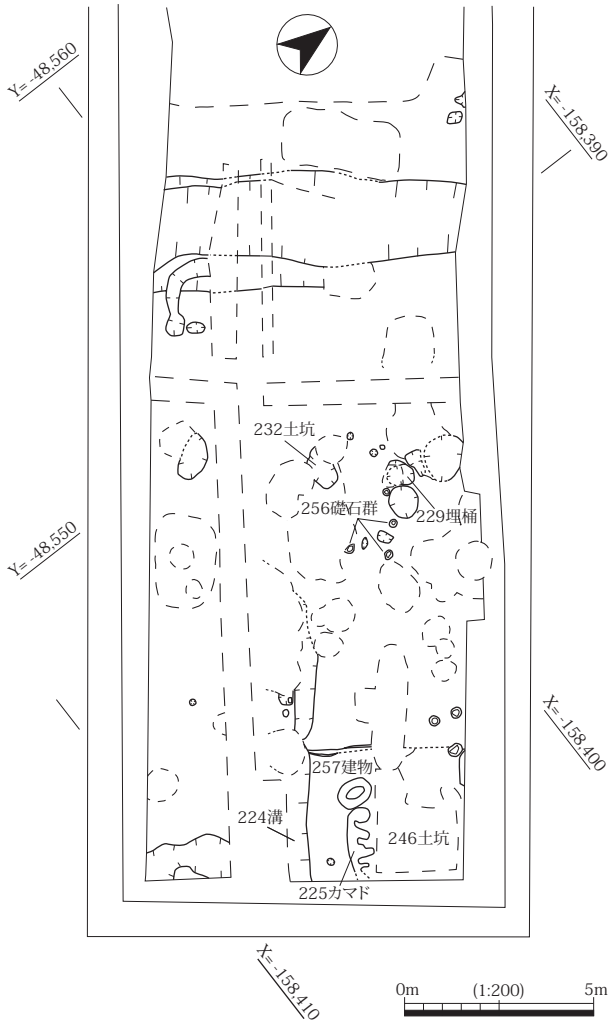


図42　第７面　平面図

199土坑〔図40〕：調査区中央部南寄り、188溝西肩に接するように掘削された土坑。南側は側溝により切られる。N-128°-Eに軸をもつ。現状で長辺1.4m、短辺0.6m、深さ約0.4mを測る。埋土は２枚に分かれる。上層は黄灰色のシルト混細～中砂が、下層は褐灰色の細～中砂混シルトで、いずれの層にも炭が多量に含まれる。

出土遺物には肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃皿、丹波擂鉢・鉢、土師質皿・甕・蓋・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器や、瓦（軒丸・平・丸）などがある。図40－１は肥前陶器皿である。高台から斜め上方に緩やかに立ち上がり、口縁部は水平に外反する。口唇部には溝を廻らせる溝縁皿である。鉄釉が施釉され

る。胴部下半及び高台内は露胎。砂目積みである。高台内には兜巾がみられる。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産であろう。２は丹波大平鉢。胴部は底部から直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部は外に開く。口縁端部は内外面を強くナデて三角形を呈している。口縁部と胴部の境には凹線が１条廻る。

187埋甕・215土坑〔図39・40〕：調査区東側ほぼ中央、188溝から東へ約４ｍに位置する。187埋甕は直径約0.7ｍの掘り方の中に土師質甕を据えたものである。埋甕北半部を215土坑によって切られる。その際に、土師質甕の上半部の一部が埋甕内部に落ち込んでいた。第５面で検出した埋甕同様、甕と土坑底面との間には、黄色のシルトを入れて甕の固定を図っていた。裏込めには黒色の粗砂混シルトを入れている。土師質甕の底部は設置する際に抜かれている。

215土坑は187埋甕の北半分を切るように掘削された土坑。直径約0.6ｍ、深さ0.24ｍを測る。埋土は黒褐色の細～極粗砂混シルトで、187埋甕の一部が含まれていた。

図40－11は215土坑出土の巴文軒丸瓦。縦方向に范傷がみられる。

220礎石列〔図39〕：調査区東側ほぼ中央、187埋甕から東へ約２ｍに位置する。N−128°−Eを軸として３基の礎石が並ぶ。礎石は一辺が0.2ｍほどの小さな扁平な板石である。礎石を据えるために浅い小さな掘り方をもつ。礎石列は１列しか確認出来ず、礎石建物を復元するには至らなかった。

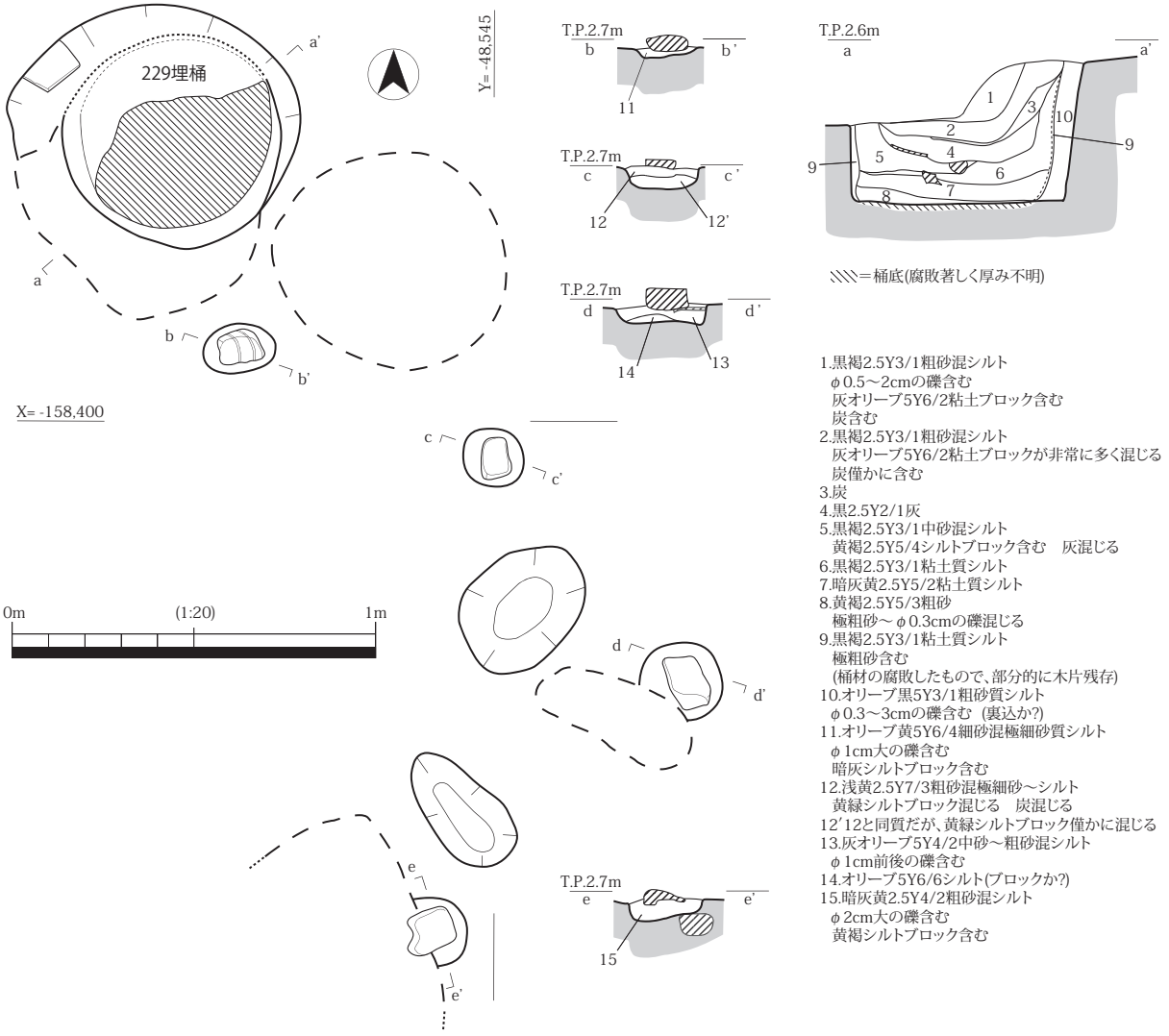
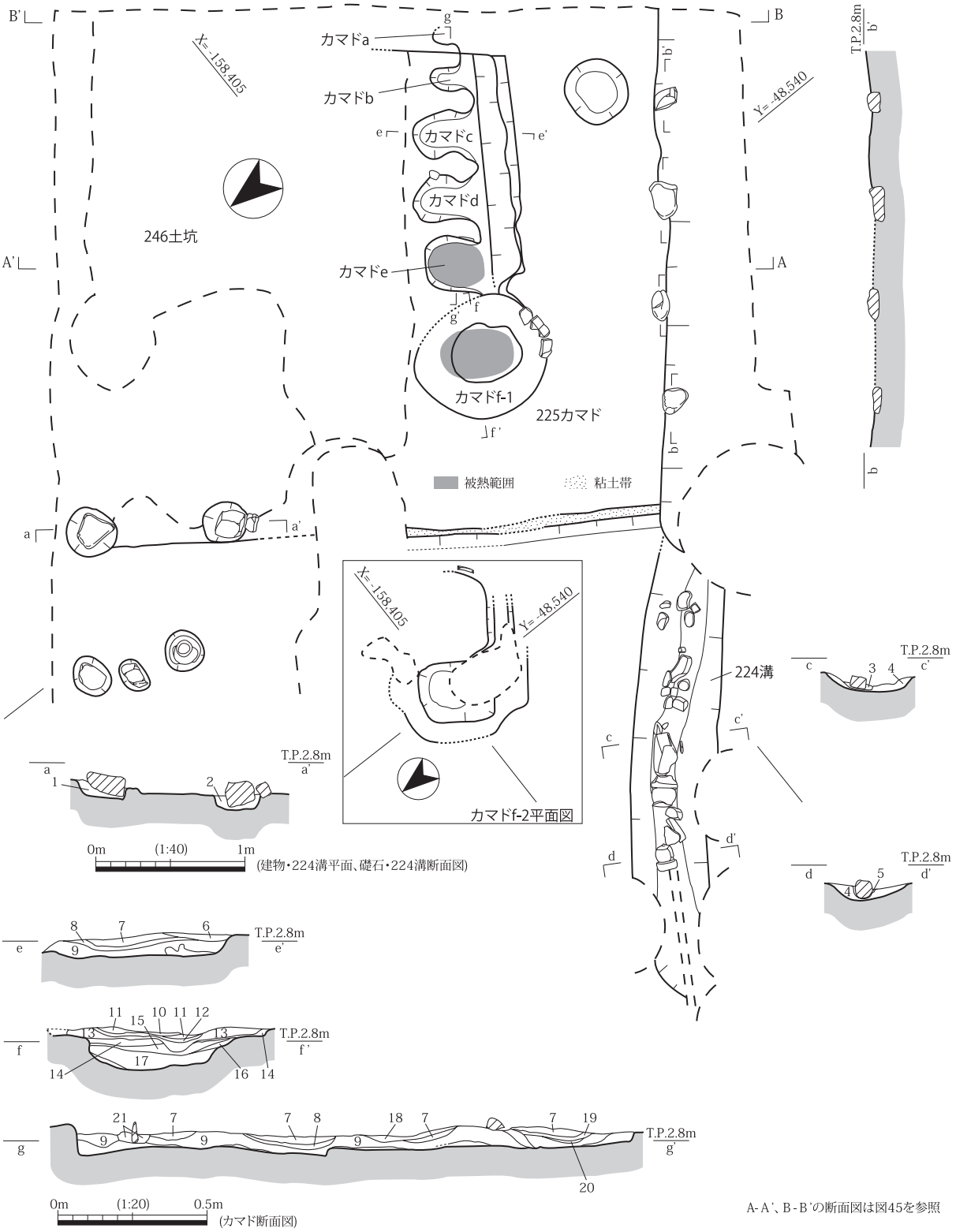


図43　第７面　229埋桶、256礎石群　平・断面図



1.暗灰黄2.5Y5/2シルト混粗砂～極粗砂　φ0.5cm前後の礫含む　にぶい黄2.5Y6/4シルト質粘土ブロック多く含む　2.黄褐2.5Y5/3シルト混極細砂～中砂　にぶい黄2.5Y6/4シルト質粘土ブロック含む　3.暗灰黄2.5Y4/2中砂混シルト質極細砂　4.暗灰黄2.5Y4/2細砂～極細砂質シルト　φ0.2～2cm前後の礫混じる　炭僅かに含む　5.黒褐2.5Y3/1φ0.3～0.5cmの礫混シルト　6.褐灰10YR4/1細砂～極細砂混シルト　炭、焼土多く含む　(カマドからかき出されたもの)　7.灰黄2.5Y6/2細砂～極細砂混シルト　8.黄灰2.5Y5/1細砂～極細砂混シルト　灰白2.5Y7/1シルト状の灰含む　9.にぶい黄2.5Y6/4細砂～極細砂混シルト　灰黄2.5Y7/2シルト質粘土ブロック混じる　(カマドa～eを構築)　10.灰白7.5Y7/2細砂～極細砂混シルト　φ0.5～2cmの礫含む　11.にぶい赤褐2.5YR4/3焼土と炭が混じる　12.赤褐2.5YR4/6シルト質粘土　(カマドfの床面)　13.明黄褐2.5Y7/6～2.5Y6/6シルト質粘土　(カマドfを構築する粘土)　14.明オリーブ灰5GY7/1φ0.5～2cmの礫混シルト　(カマドf－1を作るために敷いたもの)　15.明褐灰5YR7/1シルト　(カマドf－2に伴う灰)　16.にぶい橙7.5YR7/4シルト　(カマドf－2に伴う灰)　17.褐7.5YR4/4シルトと赤褐5YR4/8シルトが混じる　炭混じる　(カマドf－2の床面)　18.暗灰黄2.5Y5/2細砂～極細砂混シルト　灰白7.5Y7/1シルト状の灰混じる　19.明黄褐10YR6/6細砂～極細砂混シルト　20.明黄褐10YR6/6極細砂～中砂混シルト21.黄灰2.5Y5/1細砂～極細砂混シルト　(カマドb袖部分の瓦の裏込)

図44　第７面　257建物、224溝　平・断面図

197土坑〔図40〕：調査区東側ほぼ中央、220礎石列から南へ約３ｍに位置する。南半分が不明であるが、長軸0.95m、短軸0.55m、深さ約0.2mを測る平面長楕円形の浅い土坑である。埋土は灰色の細～中砂混シルトである。出土遺物には肥前染付碗・皿、中国製染付碗、土師質皿・甕、陶器水滴、平瓦がある。出土量はそれほど多くなく、廃棄土坑ではないと思われ、性格は不明である。

図40－４は陶器水滴〔図版14左２〕である。鮑と海草を模したものである。裏面以外に鉄釉が掛けられ、海草部分と鮑にみられる突起部分は白釉が施釉されている。7.3ccの容量をもつ。

196土坑〔図40〕：調査区の東側、197土坑の東に接するように掘削された大型の不定形土坑。埋土は灰黄色系の細砂混シルトである。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文）、肥前白磁、青磁、ベトナム産陶器、土師質甕・炮烙、瓦質火鉢、瓦（軒丸・平）、石製品（砥石）がみられる。

図40－３はベトナム産陶器長胴壷。やや内傾する頸部をもつ。口縁部外面には１条の沈線が廻る。口縁端部は平坦に成形され、内側にやや肥厚する。胎土は灰黄色の精良なもので、砂粒はほとんどみられない。10は砥石。２面が使用されている。中央部は使用により厚みを減じている。仕上げ砥。珪質頁岩製である。

190土坑〔図40〕：調査区の東側、南寄りの位置で検出した不定形の大型土坑。西及び東側を撹乱によって失う。埋土は灰黄色系のシルト混極細砂である。出土遺物には肥前染付碗（一重網目文）・皿（蛇の目釉剥ぎ）・鉢、肥前陶器碗・皿、肥前白磁、土師質皿・甕・炮烙、瓦（平）、土師器、須恵器などがある。図40－５は土師質獣脚。丸顔でやや頬骨が張った顔付きになっている。眉はやや隆起させ、その頂部に縦方向の短沈線３本で表現する。吊上がった両目は見開かれ、口元には牙がみられる。鼻の表現は簡素で２孔で示されている。

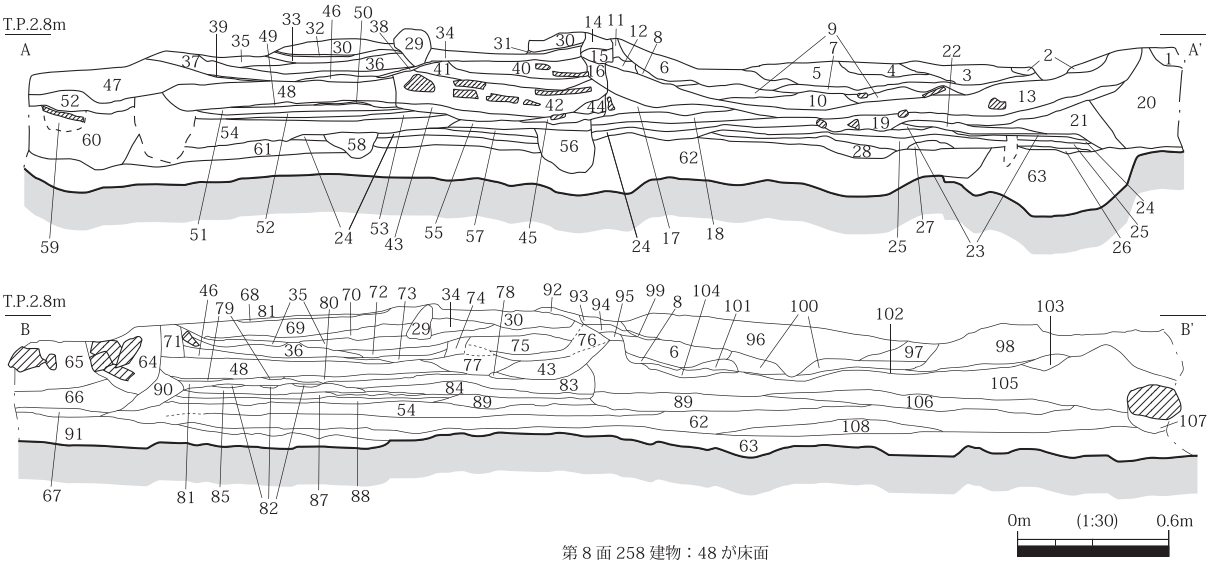
213井戸〔図41〕：調査区の東側、220礎石列の南東約３ｍで検出した瓦組井戸である。長軸1.1m、短軸0.95mを測る卵型の掘り方をもつ。井戸は幅24.5㎝・長さ30㎝・厚さ2.5㎝の大きさの井戸瓦を１段につき８枚円形に組み合わせて構築しており、調査では４段以上の遺存を確認した。井戸枠裏込には褐灰色の粗砂混シルトを用いている。井戸枠内には黄褐色の細～粗砂が充填されていた。

出土遺物には肥前染付碗（一重網目文・「大明年製」銘）・小碗・皿、肥前青磁皿・鉢・香炉、肥前白磁輪花皿・仏飯器、肥前陶器碗・皿（三島手・刷毛目唐津）・瓶、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙、瓦質火鉢などの近世陶磁器や、瓦（軒平・軒丸・平・丸）、石製品（石臼）、土師器、須恵器などがある。出土遺物から考えると17世紀中頃に掘削され使用され続けたものと推定される。

なお、当面では礎石を東側の中央部で数個検出したものの、明確な建物としては復元出来なかった。

第７面〔図42〕　東第６層を除去して検出される面である。調査区中央付近は黄灰色系シルト混細～粗砂が、東端は黄白色系礫混粘土が基盤層となる。概ねT.P.2.4～2.7m前後である。17世紀前半の遺構面である。検出した遺構には区画溝・土坑・礎石建物・石列などがある。礎石建物は調査区東端及び西端の近世町屋表側にあたる部分で確認した。土坑は不定形なものが多く、性格は不明である。

188溝〔図24・図版２上・７下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、幅約2.0m・深さ0.3～0.4mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。埋土は３枚に分かれ、黄灰色の粗砂混シルト～粘土が主体に堆積する。断面でみると明瞭な形で確認出来るが、平面では輪郭が不明瞭であったため、当面では188溝としての調査が行えなかった。結果とし



第7−1面 225 カマド：30 で構築　68・69 が建物床面
第7−2面 247 カマド：34 が灰　29・35 で構築
第7−3面 262 カマド：75 が灰　74・76 で構築　46 が建物床面か？

第8面 258 建物：48 が床面
第9面 328 建物：87 が床面か？
59：第9面 374 溝埋土
2〜10・92〜97・100・101：第7面 246 土坑埋土

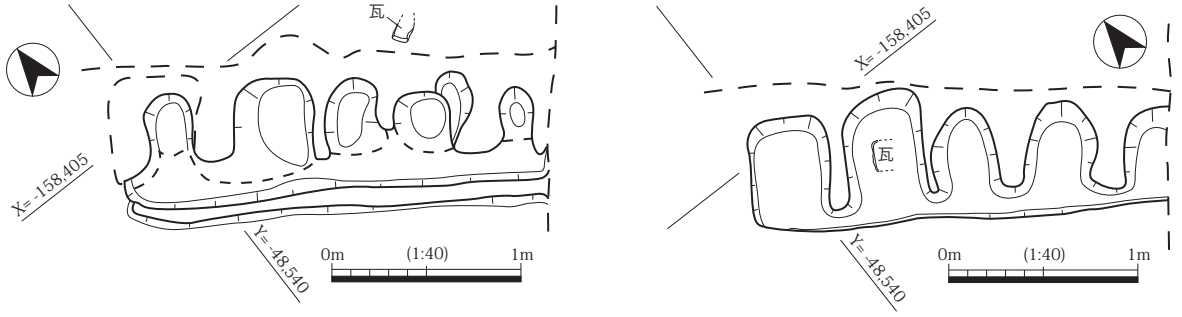
A-A'、B-B'の断面切り位置は図44を参照

1. 浅黄 5Y7/3 極細砂質シルト　φ0.3cm の礫含む　部分的に黄褐色に変色　2. オリーブ褐 2.5Y4/3 極細砂〜シルト　粗砂〜 0.7cm の礫、浅黄 2.5Y7/3 シルトブロック含む　3. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト〜極細砂に焼土、灰、黄褐粘土〜シルトブロック、灰白極細砂質シルトブロックが非常に多く混じる　4. 浅黄 5Y7/3 極細砂質シルト　粗砂〜中砂が部分的に集中　5. 浅黄 2.5Y7/4 シルト〜粘土　焼土多く混じる (特に底面に堆積)　炭、灰混じる　6. 淡黄 2.5Y8/4 粗砂〜極粗砂混シルト　φ0.3 〜 0.5cm の礫、焼土ブロック含む　7. オリーブ黄 5Y6/3 極細砂質シルト　8. 浅黄 5Y7/3 極細砂質シルト　9. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂〜中砂混シルト〜極細砂　黄褐シルト〜粘土ブロック、炭混じる　10. 灰黄 2.5Y6/2 極粗砂混粗砂質中砂〜極細砂　φ0.7 〜 1cm の礫含む　黄褐粘土ブロック、浅黄極細砂質シルトブロック混じる　11. 浅黄 2.5Y7/4 粗砂混シルト〜粘土　焼土多く混じる　12. 浅黄 2.5Y7/4 粗砂含極細砂質シルト　灰ブロック含む　13. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂〜細砂質極細砂〜シルト　浅黄 5Y7/3 極細砂質シルトブロック、炭混じる　斑点状で鉄分沈着あり　14. 浅黄 2.5Y7/4　粗砂〜極粗砂混粘土　15. 浅黄 5Y7/3 粗砂混極細砂質シルト　16. にぶい黄 2.5Y6/4 粗砂混シルト　17. オリーブ黄 5Y6/3 粗砂混極細砂〜シルト　浅黄極細砂質シルトブロック、黄褐粘土〜シルトブロック、炭、焼土混じる　18. 黄褐 2.5 Y 5/3 極粗砂混粗砂〜細砂　φ0.3 〜 2cm の礫含む　浅黄極細砂質シルトブロック混じる　19. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂〜極粗砂混中砂〜極細砂　φ0.7 〜 4 cm の礫含む　浅黄 5Y7/3 極細砂質シルトブロック、黄褐粘土ブロック混じる　20. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂混極細砂質シルト　極粗砂〜φ0.5cm の礫含む　炭粉混じる　21. 黄褐 2.5Y5/3 中砂〜極細砂　φ0.2 〜 0.5cm の礫多く混じる　22. 暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂混粗砂〜細砂　23. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂混中砂〜極細砂　φ0.3 〜 1cm の礫含む　24. 暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂混粗砂〜細砂 (固くしまる)　25. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂〜粗砂　φ0.2 〜 1cm の礫多く混じる　26. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂〜極粗砂混中砂〜細砂　φ0.4 〜 1 cm の礫含む　27. 明黄褐 2.5Y6/6 粘土　28. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混シルト〜極細砂φ0.3cm の礫、褐灰シルトブロック、炭混じる　29. 浅黄 2.5Y7/4 粘土　30. 浅黄 2.5Y7/4 〜褐 10YR4/4 粘土　φ2cm の礫含む　木質混じる　底面に焼土堆積　31. にぶい褐 7.5YR5/4 焼土　32. 灰オリーブ 7.5Y5/3 粗砂混極細砂質シルト　33. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂〜シルト　極粗砂含む　34. 灰黄褐 10YR4/2 灰　35. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト　焼土、淡黄 2.5Y8/4 粘土ブロック混じる　36. 黄褐 2.5Y5/4 〜明黄褐 2.5Y6/6 粘土　焼土、灰混じる　37. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂〜中砂混シルト〜極細砂　φ0.2cm の礫、明黄褐シルトブロック含む　38. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト　39. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂〜φ0.2cm の礫混極細砂　40. にぶい黄 2.5Y6/4 粗砂〜極粗砂含極細砂質シルト　φ1cm の礫含む　灰白 2.5Y8/2 シルトブロック混じる　41. 明黄褐 2.5Y7/6 粗砂混シルト〜粘土　42. 浅黄 2.5Y7/4 粗砂〜φ0.4cm 前後の礫混シルト〜粘土　43. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト　焼土ブロック多く混じる　44. オリーブ黄 5Y6/3 粗砂混極細砂〜シルト　45. 灰オリーブ 5Y4/2 粗砂混極細砂〜シルト　φ0.3cm 前後の礫含む　46. 黄灰 2.5Y6/1 〜 5/1 中砂〜細砂質シルト　極粗砂〜粗砂混じる (厚 0.2 〜 0.3cm で互層、固くしまる)　47. 灰オリーブ 5Y6/2 粗砂混細砂質シルト　φ0.7cm の礫含む　48. 灰白 10YR7/1 〜黄灰 2.5Y6/1 シルト〜粘土と灰白 2.5Y8/2 粘土が混じって堆積　粗砂〜φ0.3cm の礫多く混じる　φ1 〜 2cm の礫含む (固くしまる)　49. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂〜中砂混極細砂と黄褐粗砂〜中砂混極細砂 (互層、固くしまる)　炭含む　50. 黄褐色シルト〜粘土　下層に厚 0.1cm で炭が堆積　51. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂〜シルト (厚 0.1 〜 0.3cm で互層、固くしまる)　52. 灰オリーブ 5Y6/2 〜 5/2 中砂〜粗砂　φ0.2 〜 1cm 前後の礫、炭含む　53. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂〜中砂混極細砂〜シルト　上面と中程に炭堆積　54. 黒褐 2.5Y3/2 シルト〜極細砂質粗砂〜細砂φ0.5 〜 1cm の礫、褐灰粘土ブロック含む　炭粉混じる　55. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粗砂混中砂〜細砂　φ0.2cm の礫、炭含む　灰黄 2.5Y7/2 粗砂混極細砂質シルトブロック混じる　56. 黄灰 2.5Y4/1 中砂〜細砂　φ0.3cm 前後の礫混じる　φ2.5cm の円礫、炭含む　57. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂含極細砂質シルト　炭含む　58. 暗オリーブ 5Y4/3 粗砂〜極細砂　φ0.2cm 前後の礫、灰白 10YR7/1、浅黄 7.5Y7/3 シルトブロック、炭含む　59. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂〜中砂混極細砂質シルト　黄褐と灰白粘土ブロック含む　60. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混中砂〜極粗砂　φ0.3 〜 1cm の礫、炭混じる　61. オリーブ褐 2.5Y4/3 極細砂混粗砂〜細砂　φ0.2 〜 0.3cm の礫、炭含む　62. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂質中砂〜極細砂　灰白 2.5Y8/2 シルトブロック、黄褐シルト〜粘土ブロック、炭多く混じる (第 9 層)　63. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中砂〜シルト　極粗砂含む　炭混じる　64. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂〜中砂質極細砂〜シルト　φ0.3cm 前後の礫、浅黄 5Y7/3 極細砂質シルトブロック、炭含む　65. 灰黄 2.5Y6/2 〜暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂質シルト〜細砂　φ0.2 〜 0.5cm の礫、黄褐粘土ブロック、焼土、炭含む　66. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混中砂〜極粗砂　φ0.3 〜 1cm の礫、炭混じる　67. にぶい黄 2.5Y6/4 粘土質シルト　68. 黄褐色粘土　69. 灰オリーブ 7.5Y5/2 細砂混シルト質極細砂　φ0.5 〜 1cm の礫含む　部分的に中砂〜細砂集中　70. 灰黄 2.5Y6/2 極粗砂〜細砂質シルト　71. にぶい黄 2.5Y6/3 中砂混細砂質極細砂　φ0.2cm 前後の礫、黄褐粘土ブロック含む　72. 明黄褐 2.5Y7/6 〜浅黄 2.5Y7/4 粘土、灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト、明赤褐 5Y5/6 焼土が混じり合って堆積　73. 暗灰黄 2.5Y5/2 炭含む灰、灰白 7.5Y7/2 灰、浅黄 5Y7/4 粘土〜シルトが互層となり固くしまる　74. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト　木質混じる (カマド構築材として利用したと思われる)　75. 灰黄褐 10YR4/2 灰　上面と底面に炭堆積　76. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト 77. 浅黄 2.5Y7/4 〜明黄褐 2.5Y7/6 粗砂含極細砂質シルト　φ1cm の礫、炭含む　灰ブロック、焼土ブロック混じる　78. 褐 10YR4/4 灰　炭混じる　79. オリーブ黄 7.5Y6/3 〜オリーブ灰 10Y5/2 中砂含極細砂〜シルト　80. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂〜極細砂　極粗砂〜φ0.2cm 前後の礫混じる　炭僅かに含む　81 . 黄褐 2.5Y5/3 粗砂含シルト〜極細砂と暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂含シルト〜極細砂 (厚 0.1cm 程で互層、固くしまる)　炭含む　82. オリーブ黄 7.5Y6/3 〜オリーブ灰 10Y5/2 中砂含極細砂〜シルト　83. 灰白 7.5Y7/2 粗砂含極細砂〜シルト　焼土ブロック、炭混じる　84. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂〜中砂質極細砂〜シルト　焼土、黄褐色粘土、灰ブロック混じる　85. 黒褐 2.5Y3/1、暗灰黄 2.5Y5/2、明黄褐 2.5Y6/6 粗砂〜極細砂 (厚 0.1 〜 0.2cm で互層、固くしまる)　間に炭堆積　φ0.2cm 前後の礫含む　86.85 と類似　上面ににぶい黄褐 10YR5/3 粗砂〜極細砂が薄く堆積 (床面の可能性あり)　87. 明黄褐 2.5Y6/6 〜にぶい黄 2.5Y6/4 中砂〜粗砂含細砂質シルト〜粘土　部分的にシルト〜粘土となる　底面に薄く炭が堆積　88. 暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂混シルト質粗砂〜細砂　炭多く混じる (固くしまる)　89.88 と同質だが、褐色に近い色を呈す　88 との境に厚さ 0.1cm で黄褐色粘土が残存 (建物床面か？)　90. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂〜中砂質シルト　粗砂〜極粗砂混じる　91. 黒褐 2.5Y3/2 極細砂混細砂〜粗砂　極粗砂〜φ0.4cm の礫含む　炭粉混じる　92. 淡黄 2.5Y8/3 〜黄褐 10YR5/8 粘土　93. 浅黄 2.5Y7/4 粘土を主体に明赤褐 5YR5/6 焼土、炭がまだらに混じる　94. 灰白 7.5Y7/2 極細砂質シルト　95. 黄褐色粘土 96. 褐 7.5YR4/6 粗砂〜φ0.8cm 前後の礫を主体に中砂〜極細砂、φ1 〜 2cm の礫混じる　φ5cm の礫含む　97. 灰黄 2.5Y7/2 粗砂混極細砂〜シルト　98. 灰白 5Y7/2 粗砂〜中砂混極細砂質シルト　φ0.7 〜 0.8cm の礫多く混じる　φ1 〜 5cm の礫含む　99. 浅黄 2.5Y7/4 粗砂混シルト〜極細砂 (非常に固くしまる)　100. 明黄褐 2.5Y7/6 粗砂混シルト〜粘土　焼土ブロック、灰ブロック混じる　101. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混シルト〜極細砂　灰白色極細砂質シルトブロック、黄褐粘土ブロック含む　灰混じる　102. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂〜極細砂　灰白 5Y7/2 シルトブロック混じる (しまり良い)　103. 黄灰 2.5Y6/1　粗砂〜極細砂　極粗砂〜φ0.3cm の礫混じる　灰白 7.5Y7/2 シルトブロック含む　104. 褐 10YR4/6 粗砂含極細砂質シルト　黄褐粘土ブロック含む　鉄分沈着が見られる　105. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂〜細砂質極細砂〜シルト　浅黄 5Y7/3 極細砂質シルトブロック、炭混じる　106. 黒褐 10YR3/2 粗砂〜中砂　黄褐粗砂混粘土〜シルトブロック、炭混じる (固くしまる、建物床面であった可能性あり)　107. 灰オリーブ 5Y6/2 粗砂〜細砂　φ0.2 〜 2 ㎝の礫多く混じる (礎石の裏込か？)　108. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂〜細砂　φ0.3 ㎝前後の礫、黄褐シルトブロック含む　炭混じる (固くしまる)

図45　第7面　257建物、246土坑、第8面　258建物、第9面　328建物　断面図

て、第８面の240溝の上層として一緒に掘削している。従って、当面の188溝としての出土遺物は確認できていない。

229埋桶〔図43〕：調査区東側中央北寄り、188溝の東側約６ｍの位置で検出した埋桶である。掘り方の南半分を撹乱によって失うが、直径約0.6mの平面円形の土坑の中に径約0.5mの桶を埋置したものである。桶は土坑南側壁に接するように置かれ、桶と土坑北側壁との間には裏込として黒色の粗砂質シルトを充填している。桶は底に僅かな木質を残すが、側面は腐食しており断面でその痕跡を確認するにと



第 7-2 面　247 カマド　　第 7-3 面　262 カマド

図46　第７－２面　247カマド、第７－３面262カマド　平面図

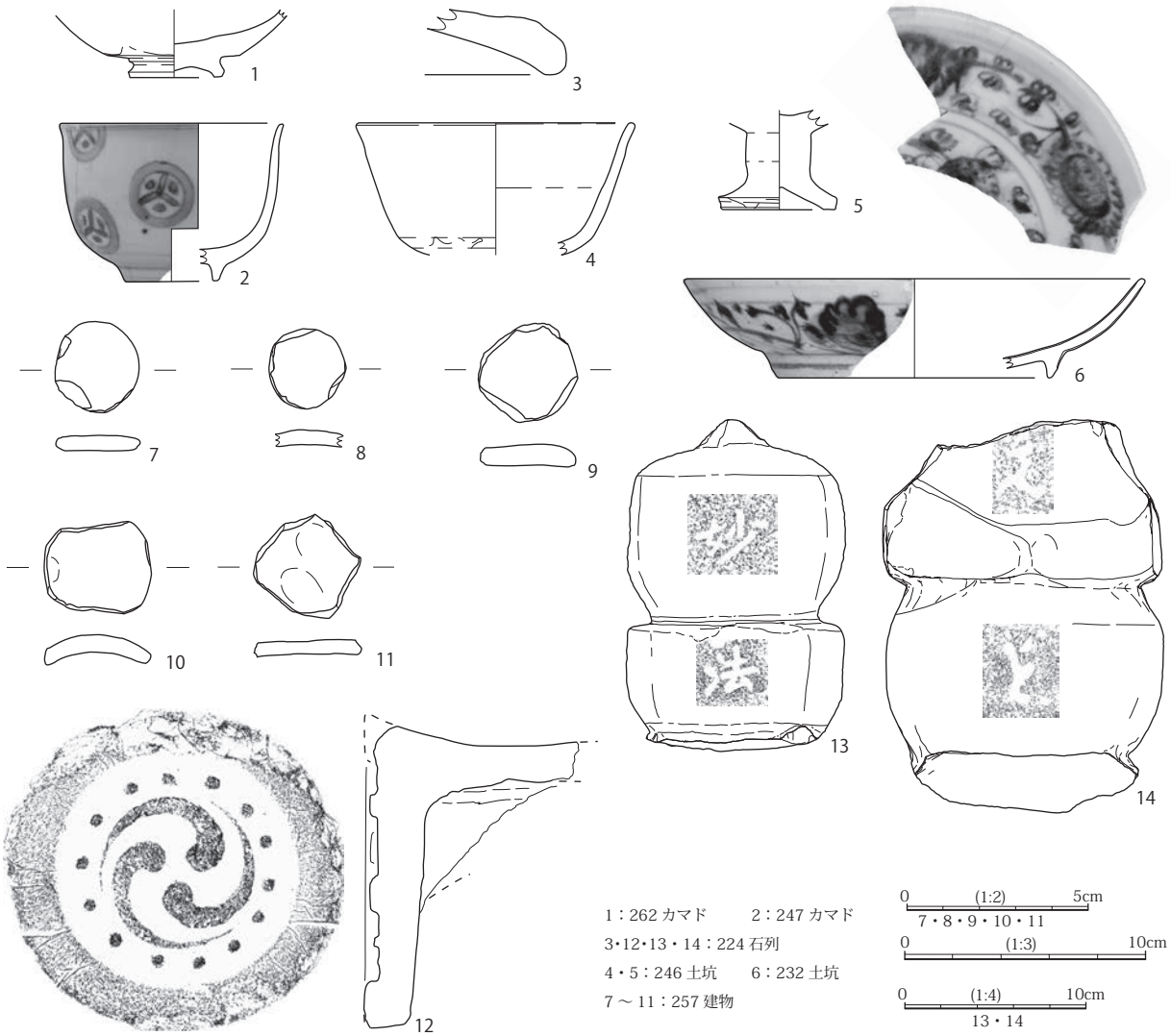


図47　第７面　257建物関連遺構、232土坑出土遺物

どまった。桶内部の埋土は８枚に分かれている。上層には黒褐色の粗砂混シルトが、中層には炭と灰が、下層には黄色系のシルトや粗砂が堆積している。

埋土からは肥前染付碗・皿・小杯、肥前白磁輪花皿（口縁部口紅）、肥前陶器碗、土師質皿・甕、丸瓦、肥前磁器・陶器転用円盤が出土している。17世紀中頃の所産か。なお、肥前磁器・陶器転用円盤〔図版15左１〕はまとまって12個出土しており、平均法量は、2.05㎝×1.77㎝・厚さ0.51㎝・重量3.1ｇを測る。

256礎石群〔図43〕：229埋桶の南東側に接する位置で検出した。逆「Ｌ」の字状に４基の礎石が遺存していた。N−127°−Eを軸として３基の礎石が並び、南東端の礎石から西側へ展開する。礎石は一辺が0.15〜0.2mほどの小さな扁平な板石である。礎石を据えるために浅い小さな掘り方をもつ。南北方向の礎石列は心々間で0.7mを、東西方向の礎石列は心々間で１mを測る。敷地の奥に小規模な礎石建物が建てられていた可能性が高い。

232土坑〔図47〕：調査区東側のほぼ中央、229埋桶の西側約１mで検出した。土坑の北及び南側を撹乱によって切られるが、N−90°−Eを軸とする平面長方形を呈するものである。埋土は黒褐色細〜粗砂混シルトである。近世陶磁器、瓦、礫などが多量に含まれる。廃棄土坑であろう。出土遺物には肥前白磁輪花皿、肥前陶器皿、中国製染付碗・皿・備前甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・炮烙（外面に平行タタキ）・火鉢、瓦（平・丸）がある。17世紀前半〜中頃の所産。図47－６は景徳鎮窯系皿である。胴部は内彎しながら緩やかに口縁部に向けて斜め上方に伸びる。口縁部は丸くおさめる。内外面に花文を描く。畳付は釉剥ぎされる。

246土坑〔図45・47〕：調査区東端で検出した257建物の廃絶後、建物北半部を切るように掘削された大型の土坑である。埋土は９〜11枚に分かれる。黄色系のシルト〜粘土、褐色系粗砂などが堆積していた。いずれの層にも瓦や焼土、炭、黄色系粘土を多量に含む。

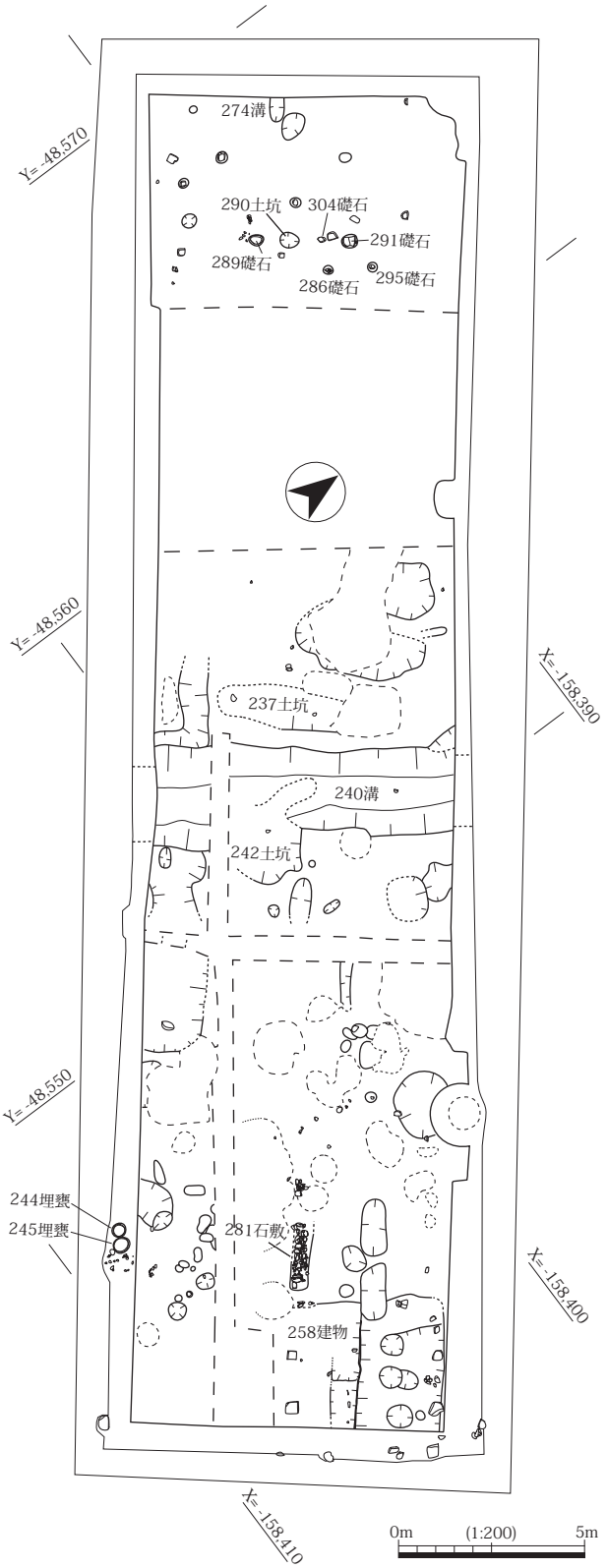


図48　第８面　平面図

焼土、炭、黄色系粘土は、後述する建物内に構築されたカマドを削平した際の廃棄物であろう。出土遺物には肥前染付碗・皿、肥前陶器碗・皿、土師質皿・甕・十能、焼塩壷、瓦（平・丸）などがある。17世紀前半～中頃の所産。

図47－４は肥前陶器碗。胴部は口縁部に向けて直線的に斜め上方に伸び、口縁部は短く外反する。灰釉を施釉。５は肥前白磁仏飯器。高台内面は深く刳り込み無釉である。

257建物・225・247・262カマド〔図44～47・図版６〕：近世町屋の表側にあたる調査区東端で検出した礎石建物。南側と西側に礎石列を残す。建物東部分は調査区外に延びる可能性が高く、北側は側溝と246土坑に切られており、現状では南北約4.2m・東西約3.6mの規模をもつ。主軸はN−127°−Eである。

南側礎石列は礎石４基・３間分残っており、心々間で約0.7mを測る。西側礎石列は礎石２基・１間分残っており、心々間で約0.9mを測る。さらに、西側礎石列の南側には撹乱を挟んで、幅0.1mの粘土帯が南北に1.7m以上に亘って存在し、建物の西壁基礎となっていたものと推定される。なお、各礎石は一辺が約0.2mの小さなもので、据えるために小さく浅い掘り方をもっている。

建物内部は246土坑による撹乱が著しいため明確には出来なかったが、撹乱の影響が及ばなかった南側礎石列から北へ１mのところに、建物と軸を揃えた６連のカマドが構築されていた（225カマド）。カ

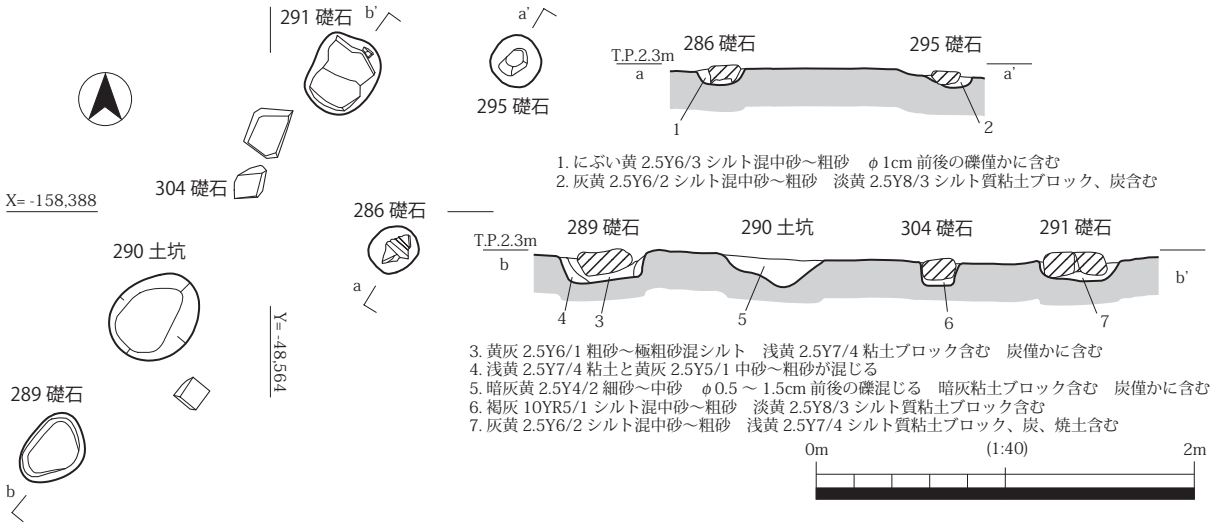


図49　第８面　西側礎石列　平・断面図

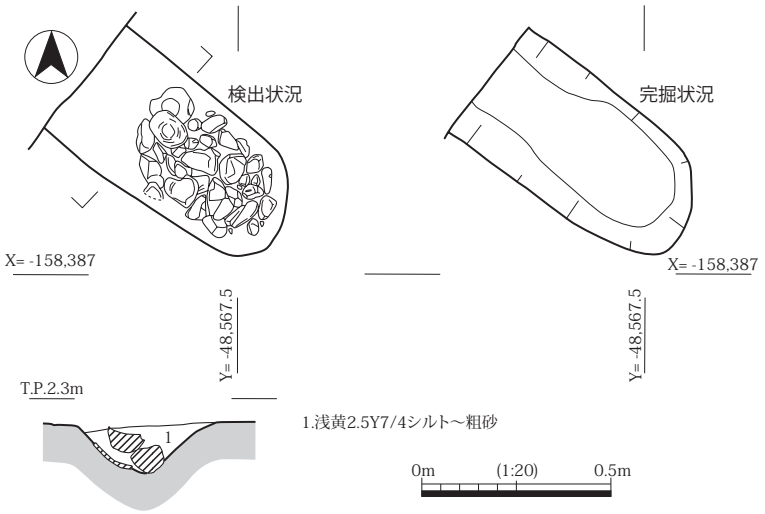


図50　第８面　274溝　平・断面図

マドは削平が著しく底面しか遺存していなかったが、黄色粘土を用いて構築されている。また、火床面の規模に差異があり、東側２基は小型（0.1×0.2m）・中央２基が中型（0.2×0.3m）・西側２基が大型（0.3×0.4m）となっている。225カマド－ｆは改修が行われたようで、改修の際に構築材の黄色系粘土の周囲に平瓦を立て並べ補強を行っている。カマドの焚口は南側に築かれている。なお、カマドは同位置で作り変えられており、225カマドの下位から247・262カマドを検出している。いずれの段階も５連以上の規模を有している。但し、これらのカマドは作り変える際の削平が著しく遺存状況は良くない。

南側礎石列とカマドの間の幅１ｍは、灰色系粗砂や緑灰色シルト、黄色系粘土を薄く何層にも重ねて構築しており、硬くしっかり締まっている。通路状の施設であったことが伺える。

建物内の出土遺物は非常に少なかった。図47－１は262カマド出土の肥前陶器皿。高台は無釉。砂目積みで、内面見込に３箇所目跡が残る。高台内には鬼兜がみられる。溝縁皿であろうか。２は247カマド出土の肥前染付碗。胴部は高台からほぼ真っ直ぐに口縁部に向けて伸び、口縁部は短く端反る。口縁端部には口紅を施す。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。１・２は17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

７～11は257建物整地層から出土した土師質皿転用円盤〔図版15左１〕。まとまって46点が出土している。平均法量は3.53㎝×3.03㎝・厚さ0.6㎝・重量6.87ｇである。

224溝〔図44・47・図版７上〕：257建物南側で検出した溝である。建物と同じ軸をもつ。検出長は約６ｍ、幅は0.6m、深さ約0.1mを測る。溝の東半分は撹乱によって南肩を切られており明らかではない。西半分は断面形が浅い皿状を呈し、溝内部に一石五輪塔や瓦、礫などを入れている。埋土は暗灰黄色の細砂質シルトである。隣の敷地との境界を示す雨落ち溝と考えられる。図47－３は土師質蓋。内面は斜め・横位のハケメのちナデを施す。口縁部外面はナデを施すが、天井部外面は無調整である。12は巴文軒丸瓦。珠文は14個。13・14は一石五輪塔の空風輪。13には「妙・法」が、14には梵字が印刻されている。石材は岩片を多量に含む不均質砂岩。

第８面〔図48〕　東第７層・西第３層を除去して検出される面である。調査区東側は褐色系粘土ブロック・灰白色粘土ブロック・黄褐色系粘土ブロックを混ぜたもの。または褐色系のシルト混中～粗砂が、西側は褐灰色もしくは灰黄色極細～粗砂が基盤層となる。撹乱より西側は概ねT.P.2.1～2.2m、東側はT.P.2.2～2.6mを測り、東側が高くなっている。17世紀前半の遺構面である。検出した遺構には区画溝・土坑・礎石建物・石列などがある。礎石建物は調査区東端及び西端の近世町屋表側にあたる部分で確認した。土坑は不定形なものが多く、性格は不明である。当面で西側第４面を合わせて記述する。

西側礎石列〔図49・図版４上〕：調査区の西側で検出した並行する２列の礎石列である。N-38°-Eに軸をもつ。西側の礎石列は３基の礎石と１基の抜き取り坑から構成される。東側の礎石列は２基の礎石が並ぶ。西側の礎石列は0.3×0.4mほどの大きな扁平な板石を使用している。一方、東側の礎石列は一辺0.2mほどの小さな扁平な礎石を用いている。どちらも礎石を据えるために浅い小さな掘り方をもつ。西側の礎石列は心々間で0.8mを、東側の礎石列は心々間で1.2mを測る。後述する東側で検出した礎石建物と同様に、町屋表側にあたる調査区西側部分にも礎石建物が建てられていたと推定される。また、礎石列南側すぐの所に、礎石列と直交するN-127°-Eの軸をもつ硬質な部分が存在する。これは幅約1.4mで断面蒲鉾状を呈する。通路状構造物であったと思われる。なお、286礎石は石臼の転用である。

274溝〔図50〕：調査区西側の西端で検出した。先の礎石列から西に2.5mの位置に在る。西側を側溝

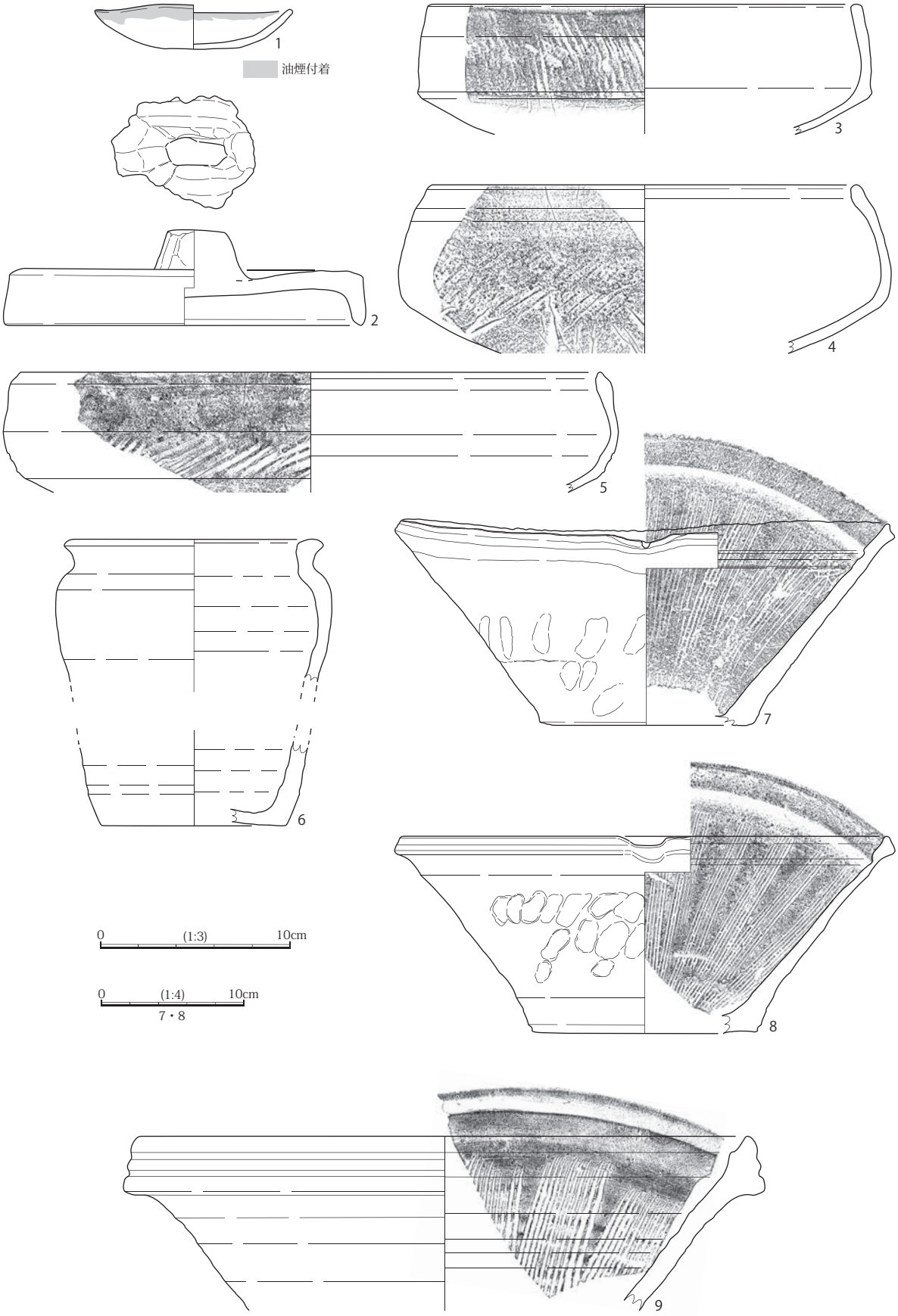


図51　第８面　240溝出土遺物（１）

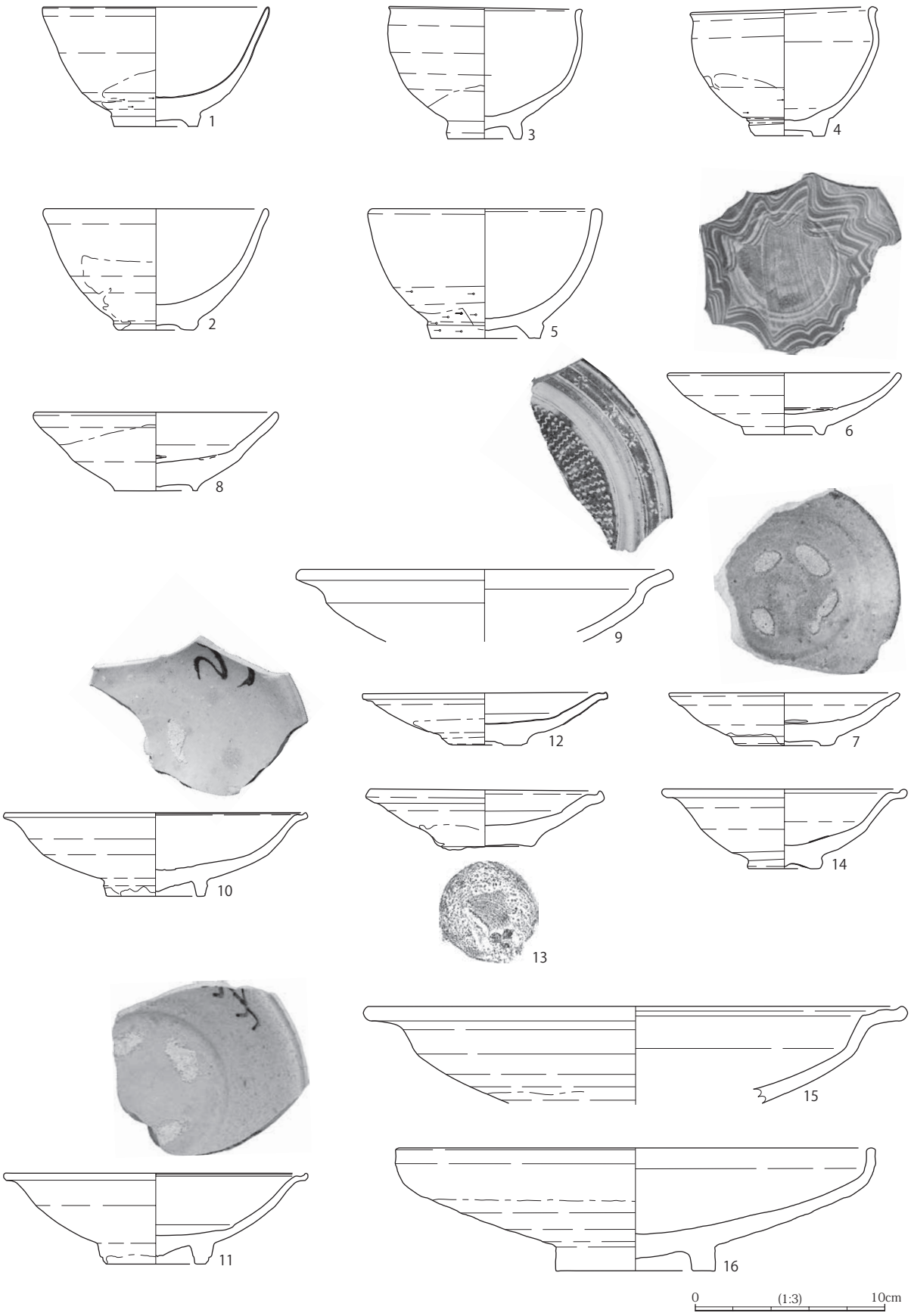


図52　第８面　240溝出土遺物（２）

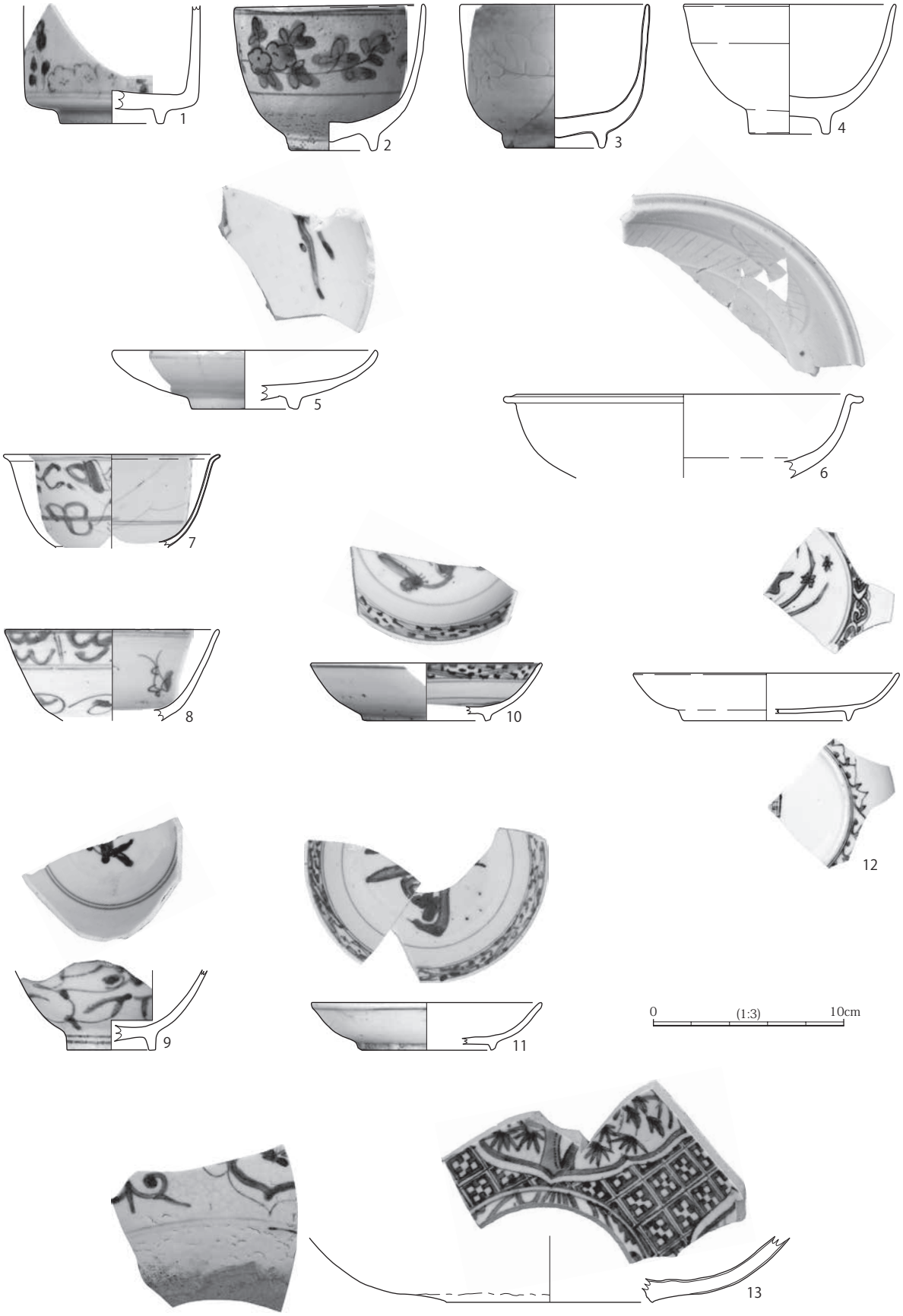


図53　第８面　240溝出土遺物（３）

によって失するが、現状で長さ0.65m、幅0.35m、深さ約0.15mを測る。N−127°−Eに軸をとる。溝内部には多量の礫が充填されていた。出土遺物には肥前陶器鉢、土師質皿が出土している。17世紀前半の所産である。

237土坑〔図55〕：調査区中央部やや西寄り、240溝西肩から西に約0.5mの位置で検出した土坑である。北側は撹乱によって失するが、現状で長軸3.3m、短軸1.2mを測る平面長楕円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さは約0.7mを測る。軸をN−49°−Eにもち、240溝と平行するように掘削されている。埋土は14枚に分かれ、上層は灰〜黄灰色系のシルト混中〜粗砂、中層は灰・黒色の灰や炭、下層は灰〜灰黄色系のシルト混細〜中砂である。堆積状況は西から東への傾斜がみられることから、西側から埋められたと思われる。出土遺物には肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃皿、土師質皿・甕・火鉢・擂鉢・炮烙・（外面に平行タタキ）、備前甕・鉢、丹波擂鉢、中国製染付碗・皿、瓦（平・丸）がある。肥前染付は含まれない。

図55−10〜12は土師質皿である。10・11は小型皿。底部から口縁部への立ち上がりが弱く、扁平である。手捏ね成形で、器壁が非常に厚い。外面には指頭圧痕が残る。底部外面は上げ底となっている。12は底部から口縁部へ向けて斜め上方に立ち上がる。口縁部はナデており、端部は尖り気味に仕上げる。胴部には指頭圧痕がみられる。口縁〜胴部内面には回転ナデが、内面見込には横位の粗いナデを施す。へそ皿状を呈する。

図55−13・14は肥前陶器皿である。13は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎した胴部で、口縁部直下でやや外反する丸皿。胴部下半及び高台は露胎となっている。胎土目積みで、内面見込に4箇所目跡を残す。14は高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲した胴部をもつ丸皿。胴部下半及び高台は露胎となっている。高台内には兜巾がみられる。胎土目積みで、内面見込に4箇所目跡を残す。13・14は16世紀末〜17世紀初頭（大橋編年Ⅰ−2期）の所産。

図55−15は丹波変形大皿。胴部は底部から内彎しながら口縁部に向けて斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。16・17は丹波擂鉢。16は口縁端部がほぼ水平に成形され、端面に1条の凹線が廻る。口縁部内面と胴部の境には凹線状の段をもつ。擂目は7条1単位のクシ描きである。17世紀初頭（大平編年Ⅰ期）の所産。17は口縁端部が丸みを帯びた方形に成形され、端面に細く弱い沈線が1条廻る。擂目はヘラ描きによる一本擂目。16世紀末〜17世紀初頭の所産であろう。

240溝〔図24・51〜55・図版2上・7下〕：調査区のほぼ中央で検出した。N−38°−Eに軸をもち、幅約2.4m・深さ0.6mを測る。北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。本来は第9面で検出すべき溝も併せて掘り上げてしまった可能性が高く、深さに関しては確実な数値ではない。埋土は大きくみて3枚に分かれる。上層には黒褐色のシルト質粘土〜シルト混粗砂、中層には灰〜黄灰色のシルト質粘土〜シルト混中・粗砂、下層にはオリーブ黒・灰〜黄灰色の細〜粗砂が主体に堆積する。これら埋土のうち、下層部分が第9面の溝と思われる。

第6面の188溝でも木製品の出土はみられたが、240溝からはより多くの木製品を出土することが特徴的である。それらの木製品には桶樽部材・箸・漆器椀・下駄・櫛・糸巻き具・羽子板・人形・桜樹皮・木っ端などがある。特に、桶樽部材・木っ端・桜樹皮・糸巻き具の存在は、元禄大絵図に示されるように、当地が樽屋町・絹屋町であったことを示す貴重な資料である。

木製品以外の出土遺物には肥前染付碗・小碗・皿、肥前青磁皿・香炉、肥前白磁、肥前陶器碗・皿（三島手他）・瓶、瀬戸美濃、中国製染付碗、呉須赤絵、備前擂鉢・甕・茶入、丹波擂鉢、土師質皿・甕・

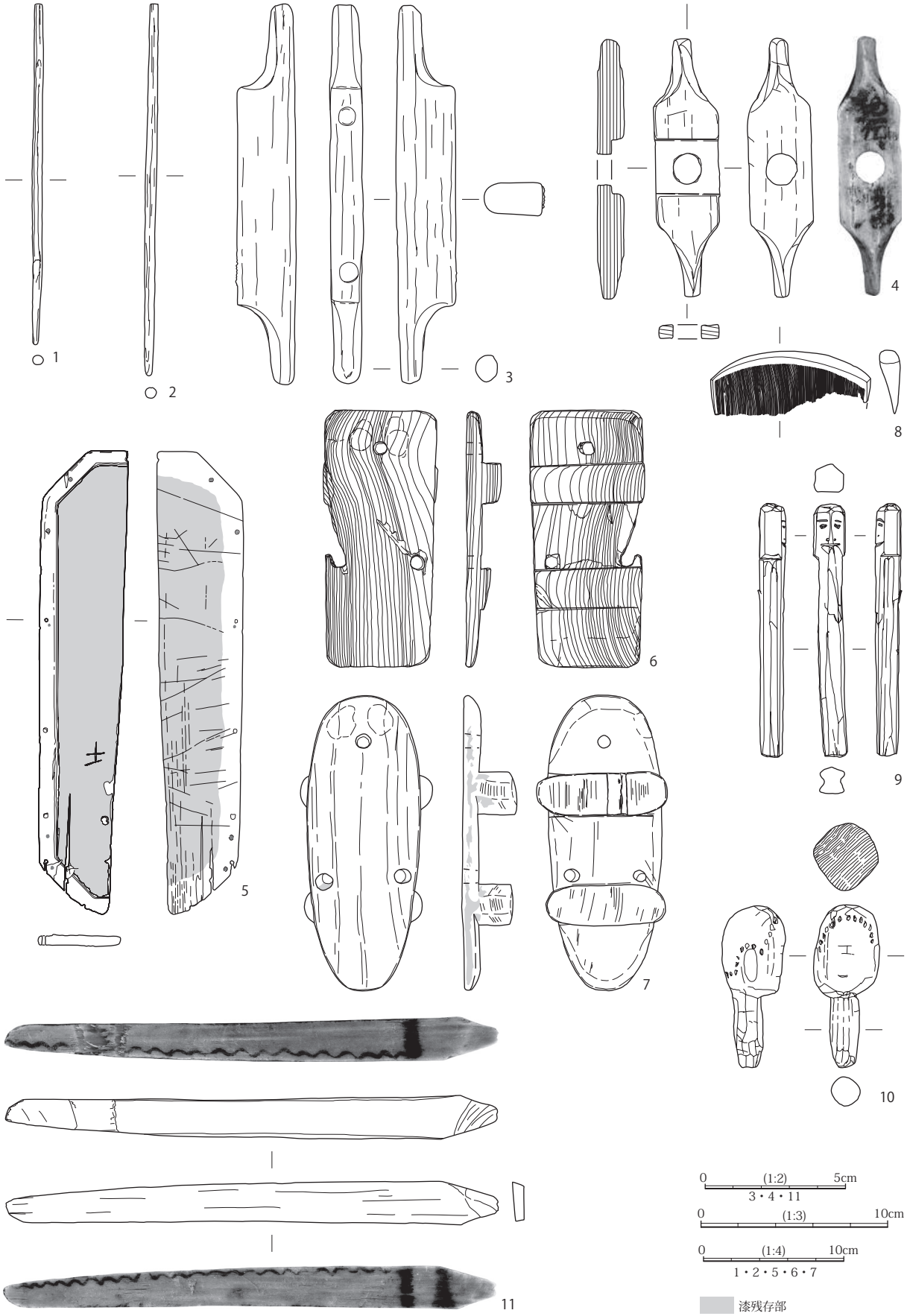


図54　第８面　240溝出土遺物（４）

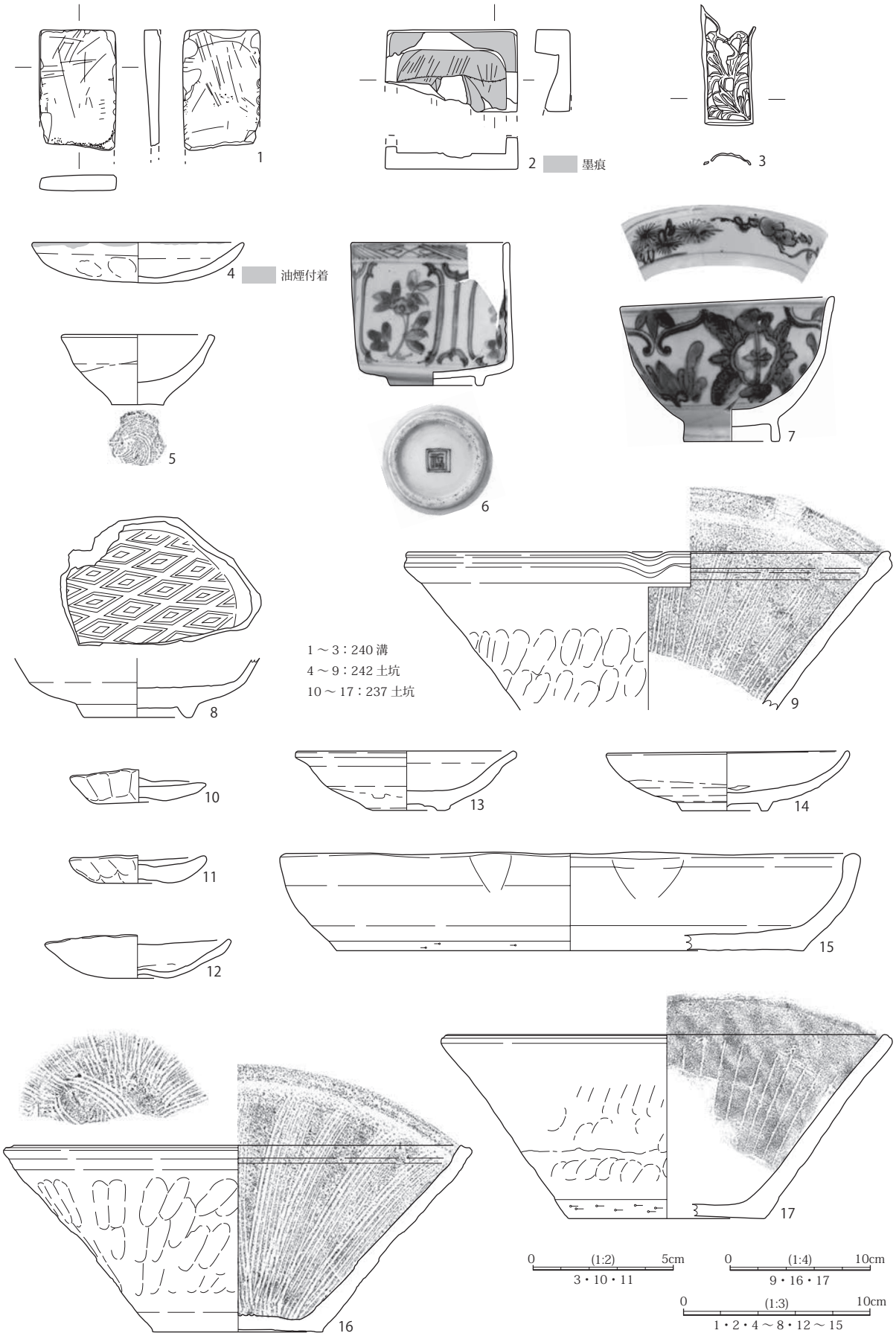


図55　第 8 面　240溝出土遺物（5）、237・242土坑出土遺物

火鉢・炮烙・擂鉢、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器や、瓦（軒平・軒丸・平・丸）、石製品（硯・砥石）、磁器転用円盤、椀形滓、植物種子（モモ科・ウリ科）がある。出土遺物の傾向から17世紀前半に機能していたとみられる。

図51－１は土師質皿である。胴部は口縁部に向けて斜め上方に緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。口縁部内外面に油煙が付着する。灯明皿として使用されたものである。２は瓦質蓋。背の高い方形の摘みが貼り付けられている。口縁端部は面取り状に仕上げられる。天井部外面は無調整。

３～５は炮烙。３は底部がやや丸みをもち、胴部は口縁部に向けてやや内傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめられる。胴部と底部の境には段をもつ。胴部外面には右斜め下がりの平行タタキが施されたのち横位のナデを行う。４は底部が丸みをもち、胴部は口縁部に向けて大きく内傾しながら立ち上がる。口縁部は内側にやや肥厚し、端部は丸くおさめられる。口縁部外面には不明瞭な幅広の凹線が１条廻る。最大径は胴部下半にもつ。胴部外面には左斜め下がりの平行タタキが施されたのちナデ消す。５は胴部が口縁部に向けて内彎しながら立ち上がる。口縁部は内外両側にやや肥厚し、端部は尖り気味におさめる。最大径は胴部中程にもつ。胴部外面下半には左斜め下がりの平行タタキが施される。

６は備前壷。口縁部は短く外反し、端部は尖り気味に成形される。肩部はなで肩で、肩部から底部に向けてすぼまるような器形である。７・８は丹波擂鉢である。７は口縁部外面に１条の凹線が廻る。口縁部内面と胴部の境には凹線状の段を持つ。口縁端部は剥落が著しい。これは煙管を打ち付けた為と考えられ、煙草盆として使用されたものと想定される。擂目は８条１単位のクシ描きである。８は７に比して口縁部が外側に肥厚し、三角形状を呈する。口縁部内面と胴部の境には凹線状の段を持つ。擂目は６条１単位のクシ描きである。７・８共に胴部外面は指頭圧痕が顕著で、口縁部は片口となっている。７は17世紀前半（大平編年Ⅱ期）、８は17世紀前半（大平編年Ⅲ期）の所産。９は備前擂鉢。口縁部は高さが寸詰りで、下端が張り出して断面三角形を呈する。口縁部外面には２条の沈線が廻る。口縁端部は摘むようなナデを施し、内側に凹線状の段がつく。擂目は11条１単位のクシ描きである。17世紀前半（乗岡編年近世１期）の所産。

図52－１～４は肥前陶器碗、５は北部九州産陶器碗である。１は胴部が高台から口縁部に向けて斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。胴部下半及び高台は露胎である。砂目積みである。北部九州産の可能性がある。２は灰釉碗。胴部が高台から口縁部に向けてやや内彎しながら斜め上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。胴部下半及び高台は露胎である。畳付に籾圧痕がみられる。焼け歪みが著しい。３・４は天目碗。胴部が高台から口縁部に向けて斜め上方に伸び、口縁部の下方で「く」の字状に緩く屈曲する。胴部下半及び高台は露胎となっている。共に内野山窯産。３は乳白色、４は灰白色の胎土を使用。５は胴部が高台から口縁部に向けてやや内彎しながら斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。高台は露胎である。北部九州産か。１～４は17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

図52－６～16は肥前陶器皿である。６は高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲した胴部をもつ丸皿。高台内は露胎となっている。内面には白化粧土を用いた波状の刷毛目文を施す。７は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎した胴部で、口縁部直下でやや外反する丸皿。胴部下半及び高台は露胎となっている。砂目積みである。内面見込に４箇所の目跡がみられる。北部九州産か。８は高台から口縁部に向けて直線的に伸びる胴部をもつ丸皿。胴部下半及び高台は露胎である。胎土目積み。内面見込に４箇所の目跡が残る。９は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎した胴部で、口縁部直下で屈曲し大きく口縁部

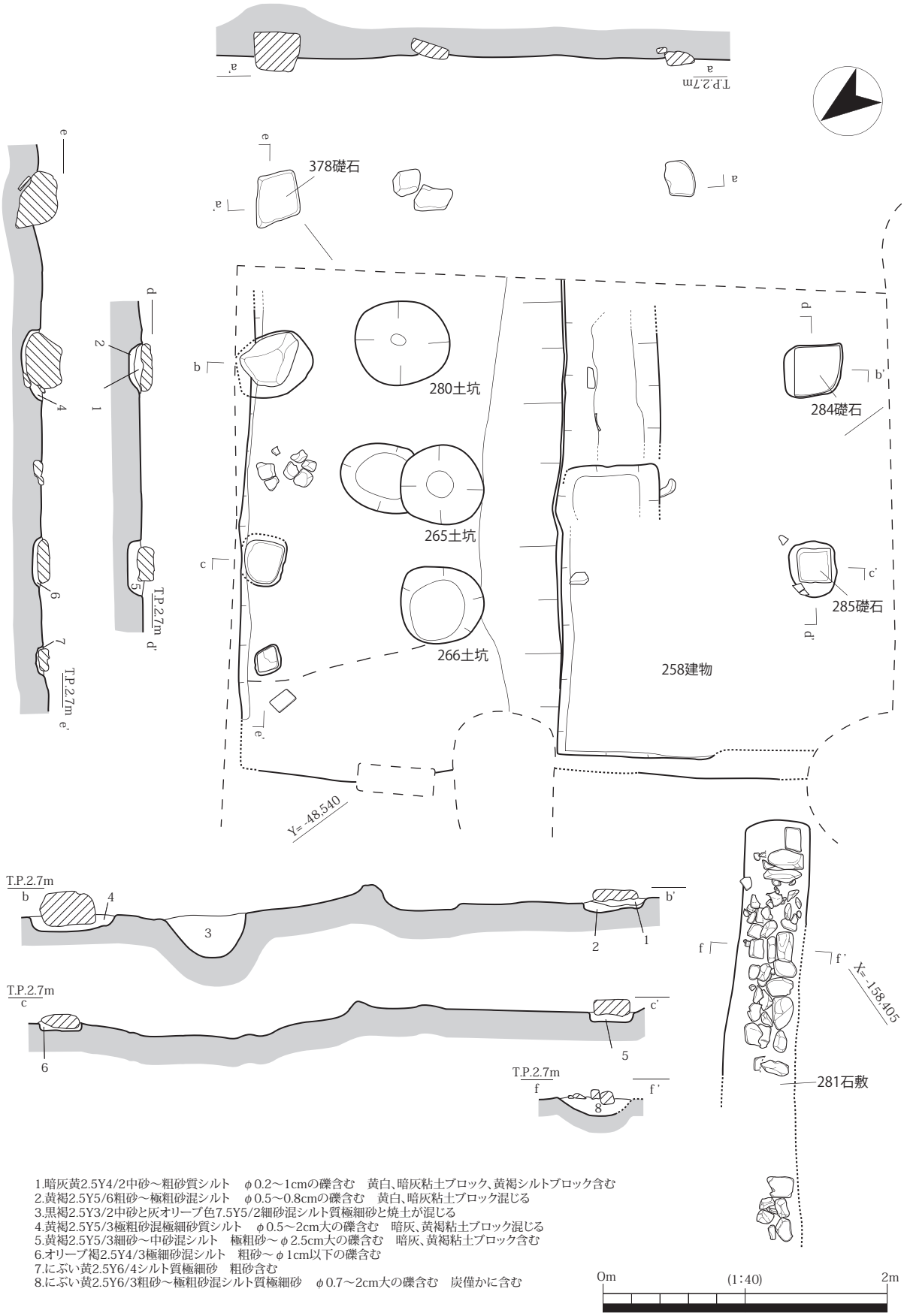


図56　第8面　258建物　平・断面図

が外反する皿。三島手皿である。10・11・14は胴部が高台から上方に緩やかに立ち上がり、口縁部は水平に外反する。口唇部には溝を廻らせる溝縁皿である。畳付及び高台内は露胎。砂目積みである。高台内には兜巾がみられる。10・11の内面には鉄絵が描かれる。11には漆修復の痕跡が残る。12・13も10などと同様の溝縁皿である。しかし、胴部の高台からの立ち上がりは10などよりも緩やかなために器高が低くなり、扁平な器形となる。12は鉄釉が、13は灰釉が施釉される。胴部下半及び高台は露胎である。13の高台は回転糸切底となっており、砂目跡を残す。12・13共に砂目積みである。15は高台から口縁部に向けて緩やかに内彎した胴部で、口縁部直下で屈曲し口縁部が大きく水平に外反する。胴部下半は露胎。二彩手皿である。16は胴部が高台から緩やかに斜め上方に立ち上がり、口縁部直下で屈曲する。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。胎土目積みで、内面見込には３箇所の目跡がみられ、その後方は釉剥ぎにしている。237土坑出土品と接合する。北部九州（福岡高取）系窯産か。６・９～16は17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

図53は肥前及び中国製磁器である。１・２は肥前染付碗。１は筒形碗。樹木文が描かれる。畳付は釉剥ぎ。２は胴部が高台から口縁部に向けて、急激に立ち上がる。外面には折枝梅文が描かれる。畳付は釉剥ぎ。３は肥前白磁碗。胴部が高台から口縁部に向けて、急激に立ち上がる。外面には線刻の花文がみられる。畳付は釉剥ぎ。４は肥前青磁碗。胴部が高台から内彎しながら斜め上方に立ち上がる。畳付は釉剥ぎ。５は肥前染付皿。高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲した胴部をもつ丸皿。畳付は釉剥ぎ。

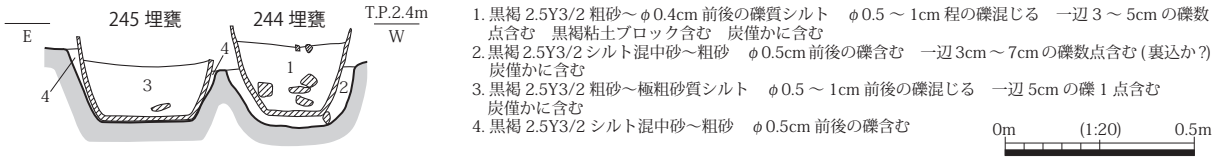


図57　第８面　244・245埋甕　断面図

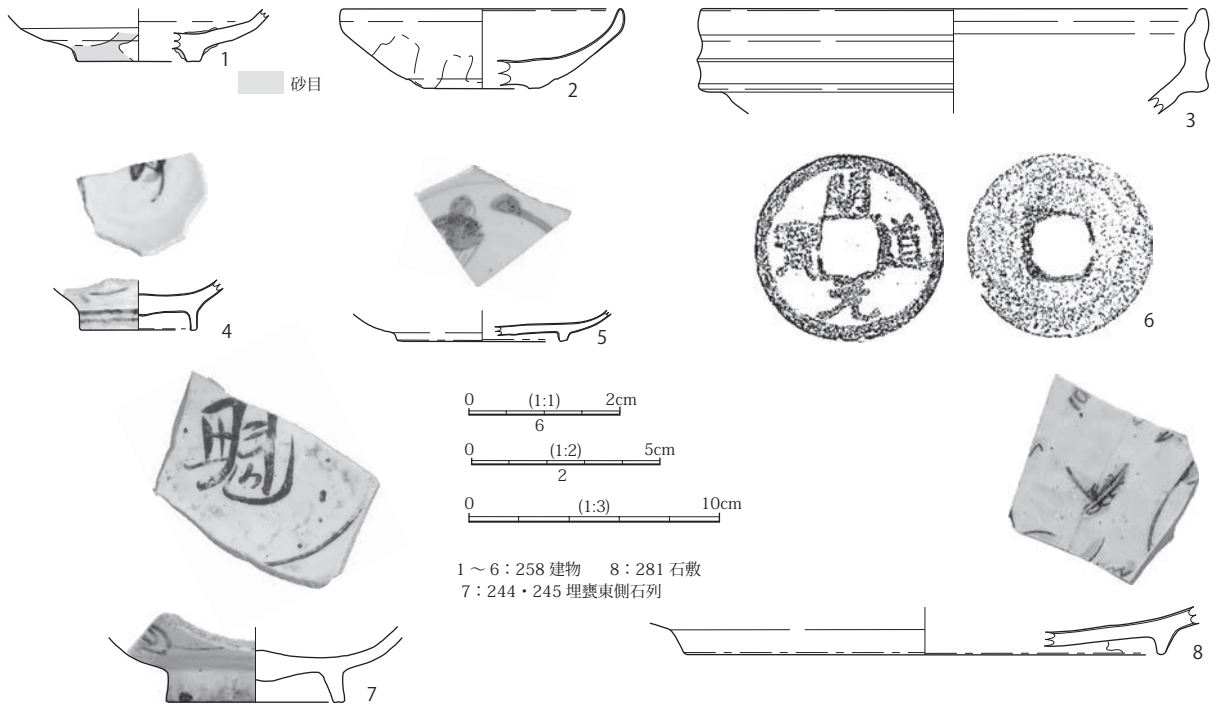


図58　第８面　258建物、281石敷出土遺物

１～５は17世紀前半（１は大橋編年Ⅱ－１期・２～５は同Ⅱ－２期）の所産。６は肥前青磁鉢。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は水平に折れ曲がる。17世紀前半の所産か。７～９は青花碗。７は景徳鎮窯系の製品。８・９は漳州窯系碗。８の内面には魚文が描かれる。10～13は青花皿。10～12は景徳鎮窯系の製品。10の内面見込には龍文が、11の内面見込には「寿」が、12の内面見込には草花文がみられる。９～12の畳付は釉剥ぎされている。13は漳州窯系皿。碁笥底である。胴部下端は露胎。第10面で検出した372集石出土のものと接合する。整地の際に削平されたものが混入したのであろうか。

図54は木製品である。１・２は白木の箸である。断面形は整正な円形を呈する。形状は中心付近に最大幅をもち、両端が細くなる両口箸である。３は糸巻き具の枠木である。平面「凸」の字状を呈する。中央部頂部の両端には直径0.6～0.7㎝の孔が穿たれており、この孔と４のような横木が組み合わされる。４は糸巻き具の横木である。中央が相欠き仕口のかみ合わせ部分で、軸孔は直径１㎝である。墨書がみられる。文字は不明瞭であるが「惣代　清」と書かれているのか。糸巻き具は３のような枠木４本と４のような横木４枚を組み合わせて構成されている。５は漆塗りの折敷。隅切折敷である。周縁に木釘痕跡が９箇所残り、うち５箇所に木釘が遺存。内面の漆は青味がかった灰色である。側壁を立ててから塗ったのか、側壁との接合部分は盛り上がっている。外面には茶褐色の顔料が塗布されている。

６・７は下駄である。共に連歯下駄。６は平面隅丸長方形で、歯は台座中央部に作られる。歯は擦り減っており、特に、後歯の摩滅が著しい。歯の縦断面形は長方形で、前歯は台座よりも僅かに幅広である。前緒穴周辺には指の圧痕がみられる。右足用であった可能性が高い。また、後緒穴には鼻緒による擦痕がみられる。７は漆塗りである。台座側面に僅かに痕跡が残る。平面長楕円形で、歯は台座中央部に作られる。歯は擦り減っており、特に、前歯前部の摩滅が著しい。歯の縦断面形は台形で、歯は台座よりも幅広となっている。また、歯の平面形状は、角を面取りして丸く仕上げ長楕円形に整形する。台座の裏面周縁部も丁寧に面取りしている。全体の造作が丁寧である。前緒穴周辺には指の圧痕がみられる。左足用であった可能性が高い。

８は挽歯技法による木製横櫛。梳櫛である。平面形は棟部が円弧状を呈し、肩部に角をもつ。断面形は面取りによって棟部が丸味を帯びる。

９は木製人形。頭頂部は細かな面取りによって丸味を帯びる。頭部下端側面部を削り込むことによって、頭部を成形する。顔面は面取りにより、断面形が台形を呈する。鼻は面取りによって作出された稜を利用し、２つの小孔を開けることによって表現する。眉及び眼は墨によって描かれる。口は削り込むことによって表現される。眉・眼は垂れ下がり気味に描かれ、口は口角を上げ気味に刳り込まれているため柔和な顔付きとなる。胴部側面は削り込まれており、腕を表現したものと思われる。10は繰り人形の頭部。頭頂部は細かな面取りによって丸味を帯びる。顔面は摩滅が著しく、眼・鼻の表現が不明である。口は一文字に切れ込みを入れて表す。また、額から側頭部には、髪を植えつけるための直径１㎜前後の小孔が連続して穿たれている。

11は小刀状木製品。両面に墨書によって波状の刃紋と鍔？が表現される。棟部、刃部共に直線ではなく、緩やかな反りをもつ。茎尻部は削り込んで身部よりも薄くしており、三角形に成形する。なお、刃部は本物の刃のように薄く仕上げていない。

図55－１は砥石。２面が使用されている。使用によって中央部の厚みが減じている。仕上げ砥。石材は珪質頁岩である。２は硯。ほぼ全面に墨の痕跡が残る。陸中央部は頻繁な使用によって溝状に窪んでいる。凝灰質頁岩製である。３は銅製の猪目透かしをもつ飾り金具〔図版15左２〕である。草文を透し

彫りにした八双金具。断面は弧状を呈する。１箇所に方形の釘孔がある。

242土坑〔図55〕：調査区中央部、240溝の東肩部に位置し、240溝を切るように掘削された不定形土坑である。断面形は逆台形を呈し、深さ約0.7mを測る比較的深い土坑。埋土は９枚に分かれる。上層には黒褐色の粘土が、中層には黄灰色の粘土が、下層には黒褐色のシルト混中～粗砂が堆積する。肥前染付碗・小碗・皿、肥前青磁皿、肥前白磁、肥前陶器碗・皿（三島手他）・瓶、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、土師質皿・甕・火鉢・炮烙・擂鉢、焼塩壷、瓦質火鉢などの近世陶磁器や、木製品、瓦（軒平・軒丸・平・丸）がある。240溝を切っているため、240溝・242土坑出土遺物間での接合がみられた。

図55－４は土師質皿。胴部は口縁部に向けて斜め上方に緩やかに立ち上がり、口縁端部は摘まみ上げるようにナデ、尖り気味に仕上げられる。胴部外面には指頭圧痕が残る。口縁部内外面に油煙が付着する。灯明皿として使用されたものである。５は肥前陶器小杯である。胴部は口縁部に向けて斜め上方に直線的に立ち上がり、胴部中央でやや角度を立ち気味に変えて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。胴部下半及び高台は露胎である。高台は削り込まず、回転糸切底のままである。６は肥前染付筒形碗。高台内に二重方形枠内に「福」の銘がみられる。口縁部外面には檜垣文が施され、胴部外面には区画文と牡丹状の草花文が描かれる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。７は肥前染付碗。高台は高い。胴部は高台から斜め上方に緩やかに伸び、胴部中程で口縁部に向けて直立するように伸びる。口縁部内面には松・折枝梅文が描かれる。胴部外面には草花文が描かれる。高台内は施釉され、畳付は釉剥ぎ。６・７は17世紀前半（大橋編年Ⅱ－２期）の所産。８は肥前白磁皿。内面見込には線彫りによる菱形文がみられる。第６面188溝出土遺物〔図38－８〕と接合する。17世紀前半の所産。９は丹波擂鉢である。口縁部外面には１条の凹線が廻る。口縁部内面と胴部の境には凹線状の段を持つ。擂目は５条１単位のクシ描きである。17世紀前半（大平編年Ⅱ～Ⅲ期）の所産。

244・245埋甕〔図57・58〕：調査区東側の南側溝内で検出した２基並んで築かれた埋甕である。削平を受けており、土師質甕の上半部は欠失する。両埋甕ともに直径約0.4mの掘り方の中に土師質甕を据えたものである。裏込めにはシルト混中～粗砂を入れている。上位の遺構面で確認した埋甕のような、甕と土坑底面との間には黄色粘土を入れて甕の固定を図る方法をとっていない。なお、245埋甕は土坑底面に接するように埋置されているが、244埋甕の土師質甕は底部から約５㎝浮いた状態で設置されている。使用されている土師質甕は胴部外面に斜め方向の粗いタタキを施す。上位の遺構面で確認した埋甕で使用されている甕よりも小型である。

図58－７は埋甕の東側にあった石列出土。漳州窯赤絵碗。高台内及び畳付は無釉。内面見込に「魁」の文字が書かれる。

258建物〔図56・58・図版８上〕：近世町屋の表側にあたる調査区東端で検出した礎石建物。北側、南側と東側の三方に礎石列を残す。建物の東面部分は調査区外に延びる可能性が高い。現状では約４m四方の規模をもつ。主軸はN-128°-Eである。

東側礎石列は本来礎石５基・４間分あったと推定され、現状で礎石３基が残っている。心々間で約1.1mを測る。南側礎石列は礎石２基・１間分残っており、心々間で約1.3mを測る。北側の礎石列は礎石３基・２間分残っていた。心々間で約1.2～1.3mを測る。なお、各礎石は一辺が約0.3～0.4mを測り、上位面で検出した礎石よりも大型のものを使用している。284・285礎石は石塔の台座を転用したものである。礎石を据えるために小さく浅い掘り方をもっている。

建物内部北側部分は南側よりも１段下がっており、約0.1～0.2mの高低差がある。この北側部分には、

直径0.5m・深さ0.3mを測る３基の土坑（265・266・280土坑）が、建物と軸を同じくして並列して掘削されていた。なお、当面の建物には上位面で構築されていたカマドは存在しない。

出土遺物は肥前陶器皿・瓶、備前擂鉢、丹波擂鉢、青花碗・皿、土師質皿・甕、瓦質捏鉢、土師器、須恵器、瓦（丸・平）、銭貨、煙管などがある。肥前染付は入っていない。17世紀前半の建物である。

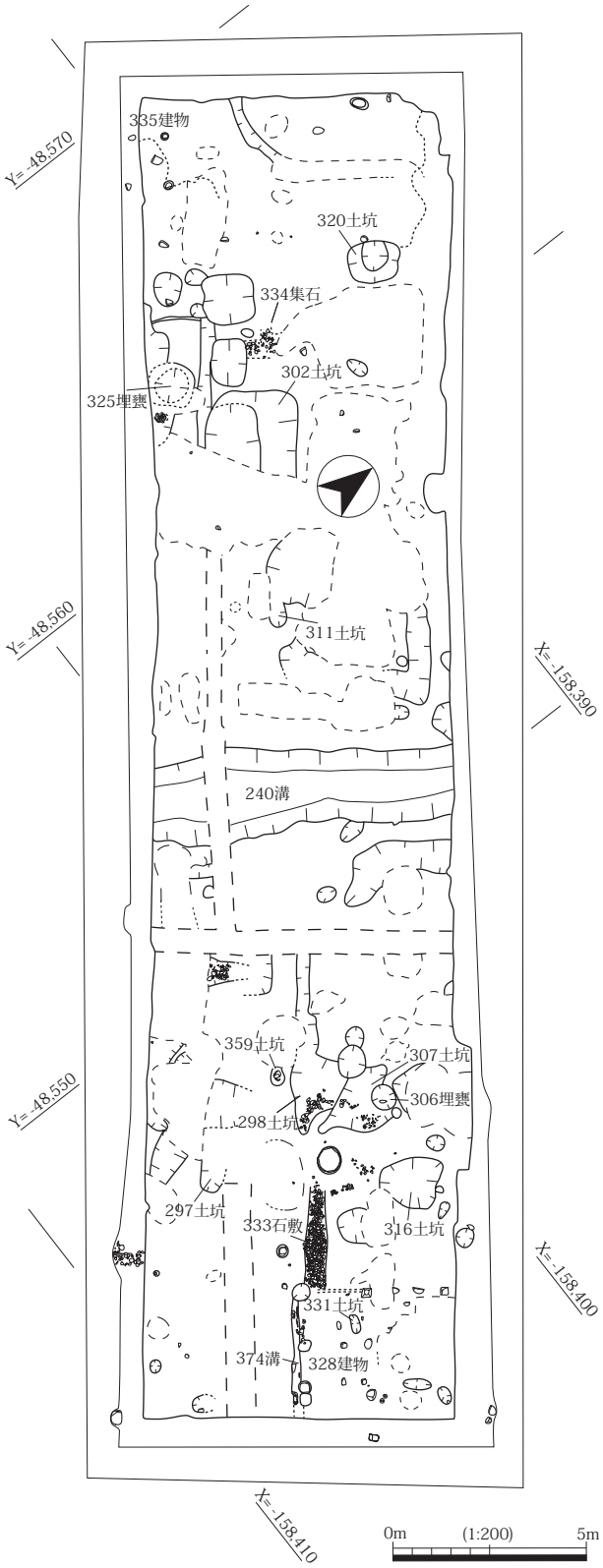


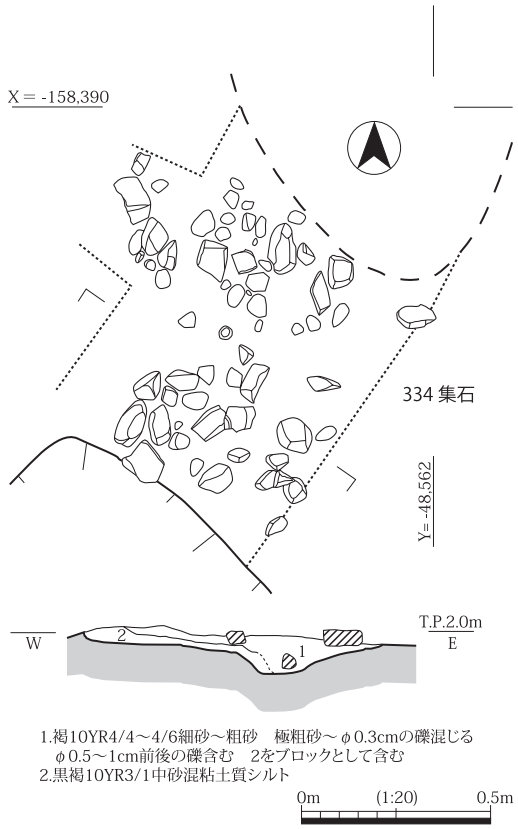
図59　第９面　平面図

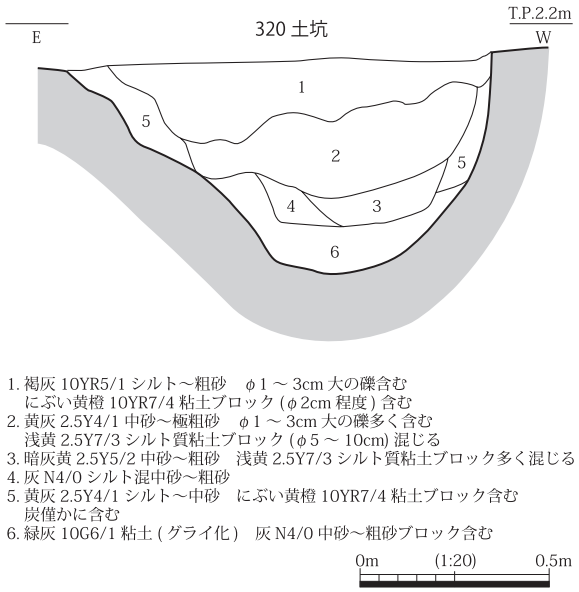
図58－１・２は肥前陶器皿。１は緩やかに胴部が斜め上方に伸びる。胴部下半及び高台は露胎。砂目積みである。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。２は高台が低く、胴部は高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲する。灰釉丸皿。胎土目積みである。胴部下半及び高台は露胎。16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ－２期）の所産。３は備前擂鉢。口縁部は板状で薄く高さがある。口縁部外面には２条の凹線が廻る。口縁端部は摘むようなナデを施し、内側に凹線状の段がつく。17世紀前半（乗岡編年近世１期）の所産か。４は漳州窯系碗。５は青花皿。景徳鎮窯系産。畳付は釉剥ぎである。６は開元通宝。鋳上がりは悪く、通が道にみえる。

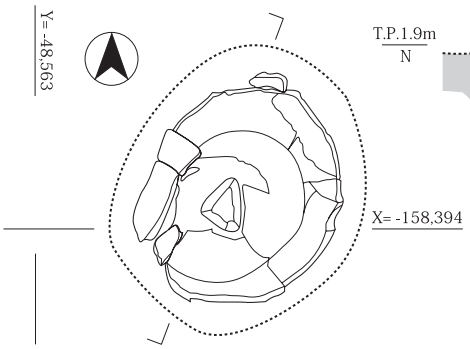
281石敷〔図56・58〕：258建物の南西隅から西に伸びる石敷である。建物と同じN-128°-Eに軸をもつ。検出長は約３ｍを測る。幅0.45m・深さ約0.1mの断面形が浅い皿状を呈する溝の中に、一辺0.2～0.3mを測る礫の平坦面を上にして敷き並べている。礫間には小さな礫を充填する。建物と裏庭を結ぶ通路と思われる。

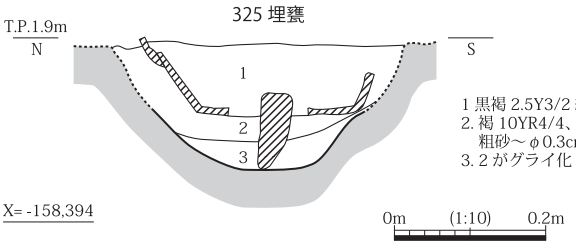
図58－８は漳州窯皿。呉須赤絵。焼けて色が退色している。高台内面には粗い砂が付着している。

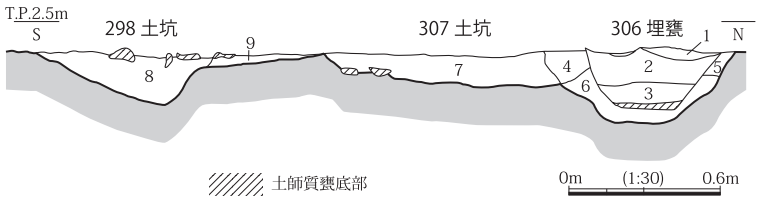
第９面〔図59〕　東第８層･西第４層を除去して検出される面である。黄灰～暗灰黄色系の極細～中砂が基盤層である。撹乱より西側は概ねT.P.2.0～2.1m、東側はT.P.2.0～2.5mを測り、東側が高くなっている。17世紀前半の遺構面である。検出した遺構には区画溝・土坑・礎石建物・石列・埋甕などがある。











1. 黄灰 2.5Y6/1 ～灰黄 2.5Y6/2 粗砂～極粗砂混細砂～シルト　灰白 2.5Y8/2 粘土ブロック含む
2. 黒褐 2.5Y3/2 シルト混細砂～粗砂　φ0.2 ～ 0.5 ㎝の礫混じる　オリーブ黄 5Y6/3 粘土ブロック混じる　炭含む　部分的に褐色に変色 (鉄分沈着か ?)
3. 褐 10YR4/6 粗砂～φ0.4 ㎝前後の礫　φ1 ～ 2 ㎝大の礫含む
4. 灰黄 2.5Y6/2 シルト混細砂～粗砂　極粗砂混じる　φ0.5 ～ 3 ㎝の礫含む　オリーブ黄 5Y6/3、黒褐 10YR3/2 粘土ブロック混じる　部分的に褐色に変色 (鉄分沈着か ?)
5. 1 と類似
6. 灰白 5Y7/2 ～灰オリーブ 5Y6/2 粘土　部分的に緑黄～褐色に変色 (埋甕固定のための粘土)
7. 黒褐 2.5Y3/1 ～ 3/2、灰黄 2.5Y6/2、明黄褐 10YR6/6、灰白 5Y8/1 シルト～極細砂　極粗砂～φ0.5 ㎝の礫混じる　φ1 ㎝前後の礫含む　暗灰粘土ブロック混じる　部分的に褐色に変色 (鉄分沈着か ?)
8. オリーブ黒 5Y3/2(部分的に暗オリーブ 5Y4/3) シルト～極粗砂　φ0.5cm 前後の礫多く混じる　φ1 ～ 5 ㎝の礫含む
9. 灰オリーブ 5Y6/2 中砂混シルト質極細砂　φ1 ～ 3 ㎝大の礫含む　暗灰、黄褐粘土ブロック含む

図60　第 9 面　298・307・320土坑、306・325埋甕、334集石　平・断面図

礎石建物は調査区東端及び西端の近世町屋表側にあたる部分で確認した。東側で検出した土坑は直径１ｍ内外の平面円形を呈するものが大半である。性格不明なものが多い。西側で検出したものは一辺1.2～1.5m前後の大型方形土坑が多い。埋土の状況から推察すれば水溜状の施設や井戸であった可能性が高い。当面で西側第５面を合わせて記述する。

335建物：調査区の南西隅で検出された礎石建物である。建物の西辺及び南辺は調査区外へと伸びている可能性があり、現状では1.5m四方の建物規模になる。礎石は一辺0.2m程度の小さな板石を使用している。主軸はN−128°−Eである。出土遺物には土師質皿・鉢、平瓦がある。

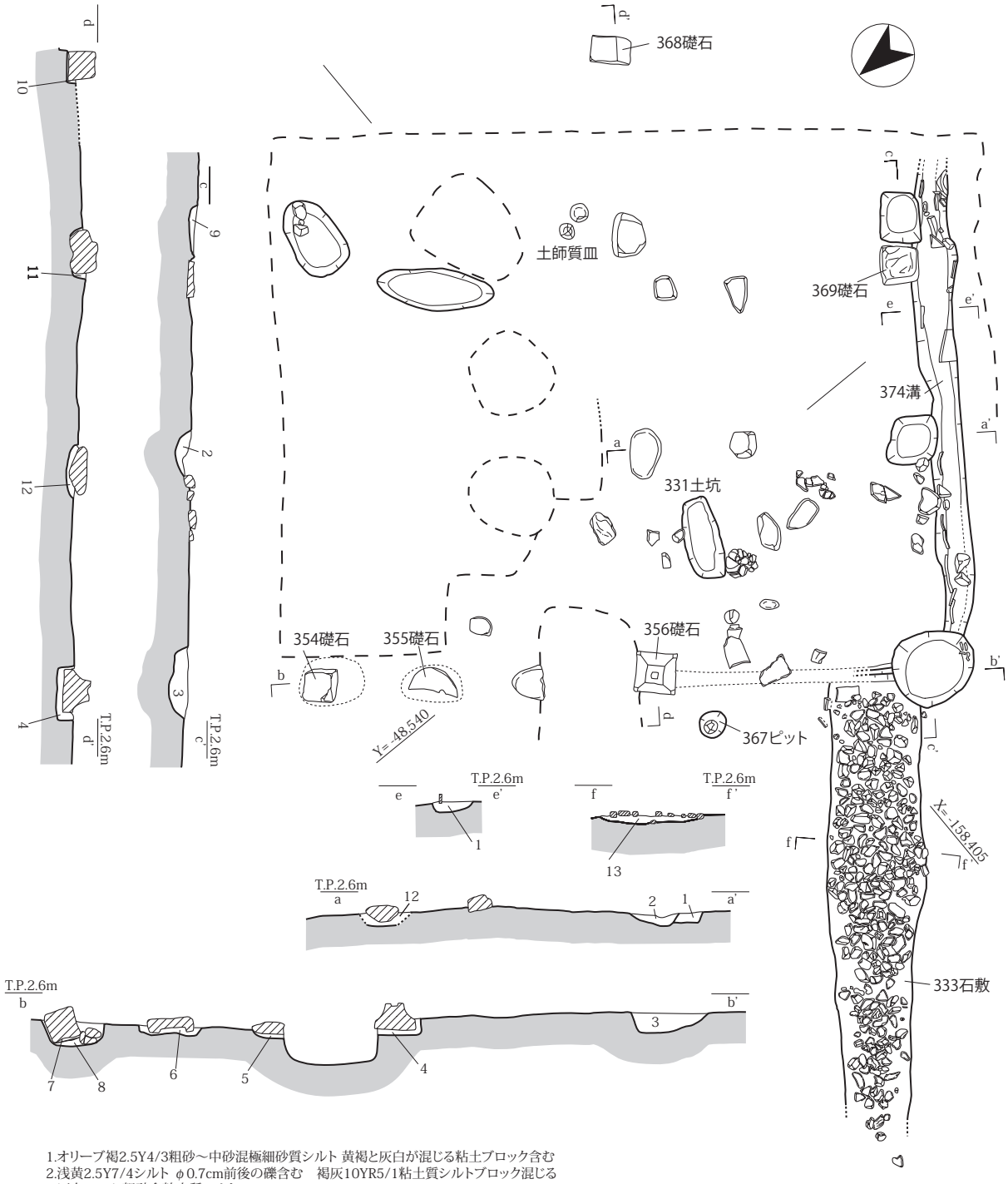
320土坑〔図60〕：調査区東側の北寄り、335建物の北東約5.5mの位置で検出した。長辺1.3m、短辺1.1mを測る平面隅丸長方形を呈する土坑。主軸はN−127°−Eである。東側壁は緩やかに２段に掘られ、西側壁は急傾斜に掘削される。土坑底面は平坦でなく、窪んでいる。深さ約0.6mを測る。埋土は６枚に分かれる。灰色系の中～粗砂が主な埋土であるが、最下層にグライ化した緑灰色の粘土が堆積する。水溜のような施設であったと思われる。出土遺物には肥前陶器皿（絵唐津）、備前甕、土師質皿・蓋がある。17世紀前半の所産である。

334集石〔図60〕：調査区東側の中央、335建物の東約４ｍの位置で検出した。集石の北側、南側は土坑によって切られるため、全体像は不明であるが、現況で東西0.7m・南北0.8mの範囲に一辺５～10㎝の礫を敷き並べている。礫を敷き並べるために浅い皿状の溝を掘削しているようである。また、遺存状況が良くなかったため確実ではないが、西に向かって伸びる部分が取り付いていた可能性がある。通路のような施設であろうか。出土遺物には肥前陶器碗・皿（絵唐津）、備前擂鉢、土師質皿・甕・羽釜（大和型羽釜）がある。17世紀前半の所産である。

302土坑〔図63〕：調査区東側の中央、334集石の南東約１ｍの位置で検出した。土坑東側部分は撹乱によって失われているが、現状で東西2.2m・南北2.4mを測る大型土坑である。２段掘りになっており、南側が深くなっている。深さは浅い北側で0.1m、南側で0.36mを測る。軸はN−127°−Eにもつ。埋土は６枚に分かれる。オリーブ褐色～灰黄色の細～粗砂が堆積していた。下層には炭が多くみられる。出土遺物には肥前陶器碗、備前擂鉢、丹波大平鉢、土師質皿・甕・擂鉢・羽釜（大和型羽釜）、中国製白磁碗、丸瓦などがある。図63－３は土師質羽釜。胴部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲し、口縁端部はナデて摘み上げ、断面三角形を呈する。大和型羽釜であろう。12は丹波大平鉢である。胴部は口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁部は断面隅丸方形に成形される。口縁端部には幅の細い沈線が１条廻る。また、口縁部内面には凹線状の段がみられる。

325埋甕〔図60〕：調査区東側の南寄り、302土坑の南西約１ｍの位置で検出した。基盤層が砂であったため、掘削中に掘り方上部が崩れてしまい、下半部のみの検出となった。また、埋甕上部は削平のため失している。復元される掘り方は直径約0.35mの不整円形を呈し、断面形は椀形を呈する。土坑底部中央に高さ0.1mの三角柱の礫を立て、それを固定するように褐色或いはオリーブ灰色の粘土質シルトを入れる。礫は完全に埋め殺すのではなく、上部３分の１は顔を出している。この上に底部中央部分を抜いた土師質甕を設置している。このような構造をもつ埋甕は上位面でも検出しておらず、礫の性格は不明である。使用されている土師質甕は胴部外面に斜め方向の粗いタタキを施す。上位の遺構面で確認した埋甕で使用されている甕よりも小型である。

311土坑〔図63〕：調査区中央部の中央で検出した小規模な土坑。撹乱によって北半部を切られる。埋



1.オリーブ褐2.5Y4/3粗砂～中砂混極細砂質シルト 黄褐と灰白が混じる粘土ブロック含む
2.浅黄2.5Y7/4シルト φ0.7cm前後の礫含む　褐灰10YR5/1粘土質シルトブロック混じる
3.灰白5Y8/2粗砂含粘土質シルト
4.オリーブ褐2.5Y4/3極粗砂～粗砂含中砂質シルト～細砂　黄褐2.5Y5/6シルトブロック含む　炭僅かに含む
5.灰黄2.5Y6/2極粗砂含シルト～粗砂　浅黄2.5Y7/3シルトブロック含む　炭僅かに含む
6.黒褐2.5Y3/3シルト～中砂　極粗砂～φ0.5cmの礫含む　浅黄2.5Y7/3シルトブロック含む　炭僅かに含む
7.明黄褐10YR6/8粘土質シルト
8.黒褐2.5Y3/2中砂混極細砂～シルト　黄褐粘土質シルトブロック混じる　炭含む
9.黄橙10YR7/8～灰白2.5Y8/2粘土質シルト　φ0.2～2cm大の礫含む
10.暗灰黄2.5Y4/2細砂混極細砂質シルト　浅黄2.5Y7/3極細砂質シルトブロック混じる　炭混じる
11.浅黄2.5Y7/3極細砂質シルト　炭混じる
12.オリーブ褐2.5Y4/3　細砂～中砂混極細砂質シルト　灰オリーブ5Y5/2極細砂質シルトブロック混じる　炭混じる
13.オリーブ褐2.5Y4/3極細砂～中砂　粗砂～φ1cm前後の礫多く混じる　炭混じる

0m　(1:40)　2m

図61　第９面　328建物　平・断面図

土は灰色の中～粗砂。炭を多く含む。出土遺物には肥前陶器皿、土師質炮烙がある。図63－10は肥前陶器皿。高台から胴部中程までは直線的に斜め上方に伸び、中程より上位は口縁部に向けて大きく外反する。胴部下半及び高台は露胎となっている。胎土目積みで、４箇所に目跡が残る。

240溝〔図24〕：調査区のほぼ中央で検出した。N-38°-Eに軸をもち、北側から南側へ緩やかに傾斜する素掘りの溝である。断面は逆台形を呈する。本来は当面で検出すべき溝も第８面段階で掘り上げてしまった可能性が高い。図24の42・49～52（オリーブ黒・灰～黄灰色の細～粗砂）が第９面240溝埋土であろう。幅約2.4m・深さ0.6mを測る。この溝底の標高はT.P.1.4m前後にある。この高さは次章で記述する２調査区第２面で検出した2330－１濠が機能していた最終段階の底面の高さに等しい。240溝の北側への延長方向に先の濠が存在することを勘案すれば、濠を埋め立てて近世町屋を構築する際に、濠の水を抜くため幅２m・深さ0.6mもの規模をもつ240溝を掘削した蓋然性が高い。このことは溝埋土・図24－52のように流水を窺わせる堆積物からも推察される。また、２調査区で検出した区画溝の規模が当溝よりも貧弱であったことからも両者の機能差が想定される。すなわち、240溝は区画位置を意識しながら、排水を主な目的として掘削されたものと理解したい。

359土坑〔図63〕：調査区東側中央、240溝の東約６mの位置にある。長軸0.5m、短軸0.4mを測り、平面楕円形を呈する。埋土は黒褐色の中～粗砂混シルトである。軸はN-127°-Eにもつ。出土遺物には肥前陶器碗・皿（絵唐津）・小杯、土師質皿、中国製染付碗、瓦質火鉢、丸瓦がある。図63－６は肥前陶器碗。胴部は高台から直線的に口縁部に向けて伸びる。胴部下半及び高台は露胎である。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

298土坑〔図60・63〕：調査区東側中央、359土坑の東約0.2mの位置にある不定形土坑である。東側は307土坑に切られる。埋土は２枚に分かれ、φ１～５cmの礫を多く含んでいる。出土遺物には肥前磁器碗（高台に鉄錆）、肥前陶器碗・皿、中国製染付皿、土師質皿（黒褐色の胎土も含む）・甕・炮烙（外面に平行タタキ）、瓦質甕・火鉢、須恵器、瓦（平・丸）などがある。出土遺物の傾向から17世紀前半の所産である。

図63－５は土師質炮烙。胴部は緩やかに内彎しながら口縁部に向けて立ち上がり、胴部下半に左斜め下がりの平行タタキを施す。胴部上半には凹線が２条廻る。口縁端部は内側にやや肥厚させる。11は肥前陶器皿。胴部は高台から口縁部に向けて斜め上方に緩やかに外反しながら伸びる。口縁端部は摘むようにナデており、直立する。高台内には鬼兜がみられる。胴部下半及び高台は露胎である。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

307土坑〔図60・63〕：調査区東側中央、298土坑の東側を切るように検出された不定形土坑である。土坑東側は306埋甕に切られる。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は１枚でφ１cm前後の礫を多く含む。出土遺物には肥前陶器碗・皿、中国製染付碗、土師質皿・甕・炮烙、瓦質火鉢、須恵器、瓦（平・丸）などがある。図63－７は肥前陶器碗。胴部は高台から斜め上方に開くように短く伸び、胴部下半で角度を変えて口縁部に向けて上方に伸びる。口縁部は僅かに外反する。胴部下半及び高台は露胎。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

306埋甕〔図60・63〕：調査区東側中央、307土坑の東側を切るように検出された埋甕である。土師質甕は抜き取られたようで、底部のみが遺存する状況であった。埋甕は直径約0.7mの掘り方の中に据えられていた。裏込めには灰色系のシルト混細～粗砂を入れている。甕と土坑底面との間には灰色粘土を入れて甕の固定を図っている。甕を抜き取ったあとには、褐～黒褐色のシルト混細～粗砂を充填してい

る。

出土遺物には肥前染付碗（筒形碗）、肥前陶器碗・皿、土師質皿・甕、石製品（硯・サヌカイト製火打ち石）、煙管がある。17世紀前半の所産である。図63－13は平面隅丸長方形を呈する硯である。内面には墨痕が残る。陸部中央は頻繁な使用によって溝状に窪んでいる。石材は黒色頁岩である。

316土坑〔図63〕：調査区東側中央、306埋甕の東側約1.6mの位置で検出した不定形土坑である。埋土は灰黄色系のシルト混細砂である。肥前染付碗（筒形碗）、肥前陶器碗・皿、備前擂鉢、中国製染付碗、青磁碗、土師質皿・甕・炮烙、須恵器、円筒埴輪が出土した。

図63－９は肥前陶器皿。高台から口縁部に向けて緩やかに彎曲した胴部をもつ丸皿。砂目積みで、３箇所に目跡が残る。高台は露胎となっている。内面には白化粧土を用いた波状の刷毛目文を施す。高台

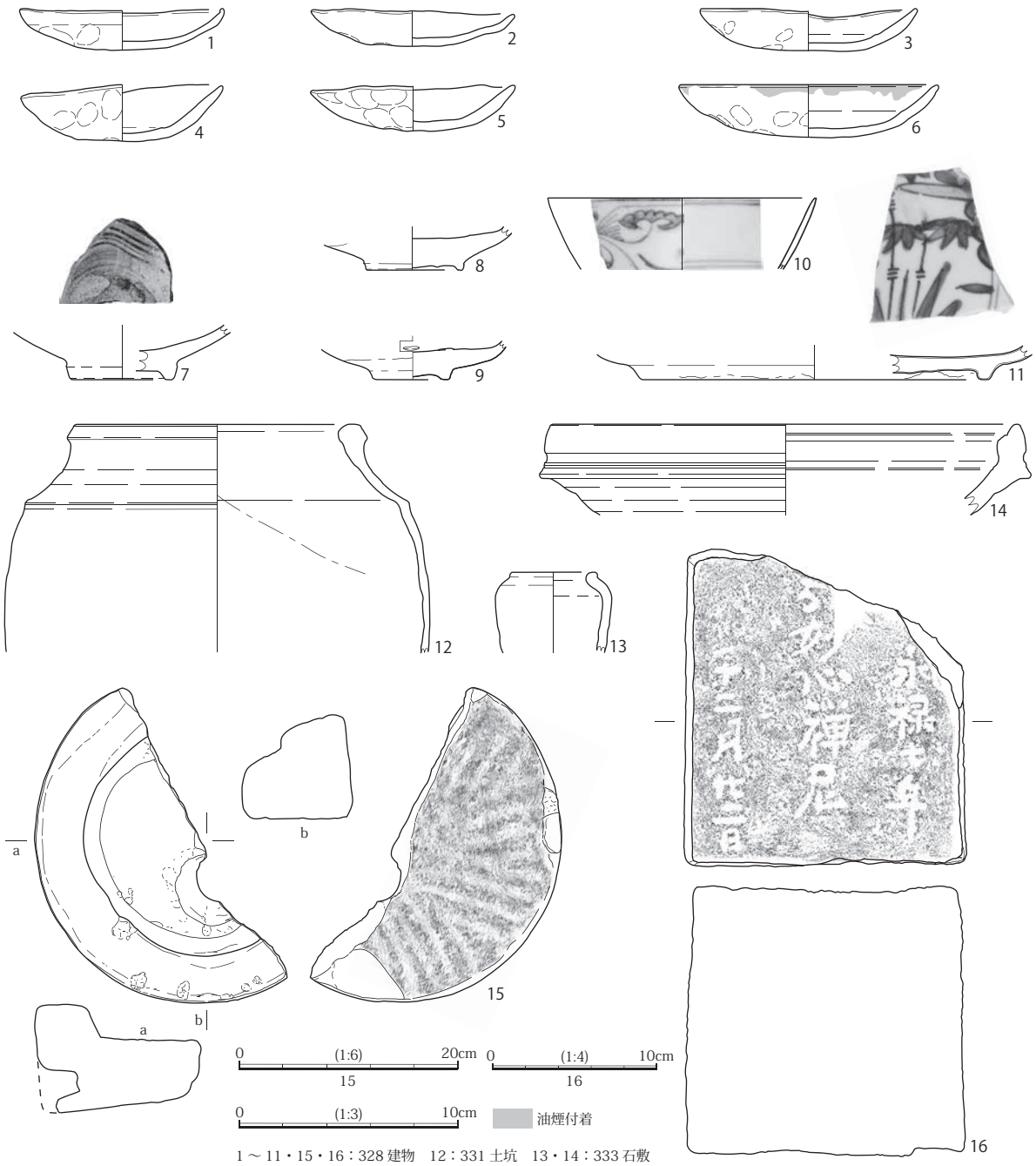


図62　第９面　328建物、331土坑、333石敷出土遺物

に籾殻の圧痕がみられる。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。

297土坑〔図63〕：調査区東側南寄り、298土坑の南東側約２ｍの位置で検出した不定形土坑である。撹乱による影響で土坑南東部のみの検出となった。肥前染付碗（鎬のある筒形碗）、肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃鉢、中国製青磁碗、土師質甕・炮烙、焼塩壷・蓋、瓦（平・丸）が出土している。17世紀前半の所産であろう。

図63－２は焼塩壷の蓋である。口縁部内面の一部に布目が残る。二次焼成のため部分的に赤橙色を呈する。４は焼塩壷。外面は縦方向の強いナデを施し、面取り状になり多角形を呈する。口縁部内面は丁寧にナデる。胴部内面には布目が残り、粘土帯巻き上げの際の絞り目が残る。輪積み成形である。８は瀬戸美濃（志野）鉢である。底部は碁笥底である。胴部は底部から口縁部に向けて斜め上方に伸びる。口縁部は玉縁状になり、外側に肥厚する。長石釉を施釉する。なお、底部は露胎となっている。

328建物〔図61・62・図版８中〕：近世町屋の表側にあたる調査区東端で検出した礎石建物。西側と中央部に礎石列を、東側と南側に１基の礎石を残す。建物の東面部分は調査区外に延びる可能性が高い。第８面建物とほぼ同規模で、現状では約４ｍ四方の建物が復元できる。主軸はN-127°-Eである。なお、中央部に礎石列をもつ構造は上位の遺構面の礎石建物にはなかったものである。

西側礎石列は現状で礎石４基と南西隅の礎石抜き取り痕で構成される。礎石の心々距離は約0.7～0.8ｍを測る。中央部礎石列は３基・２間分残っており、礎石の心々距離は約1.4mを測る。南側礎石列は

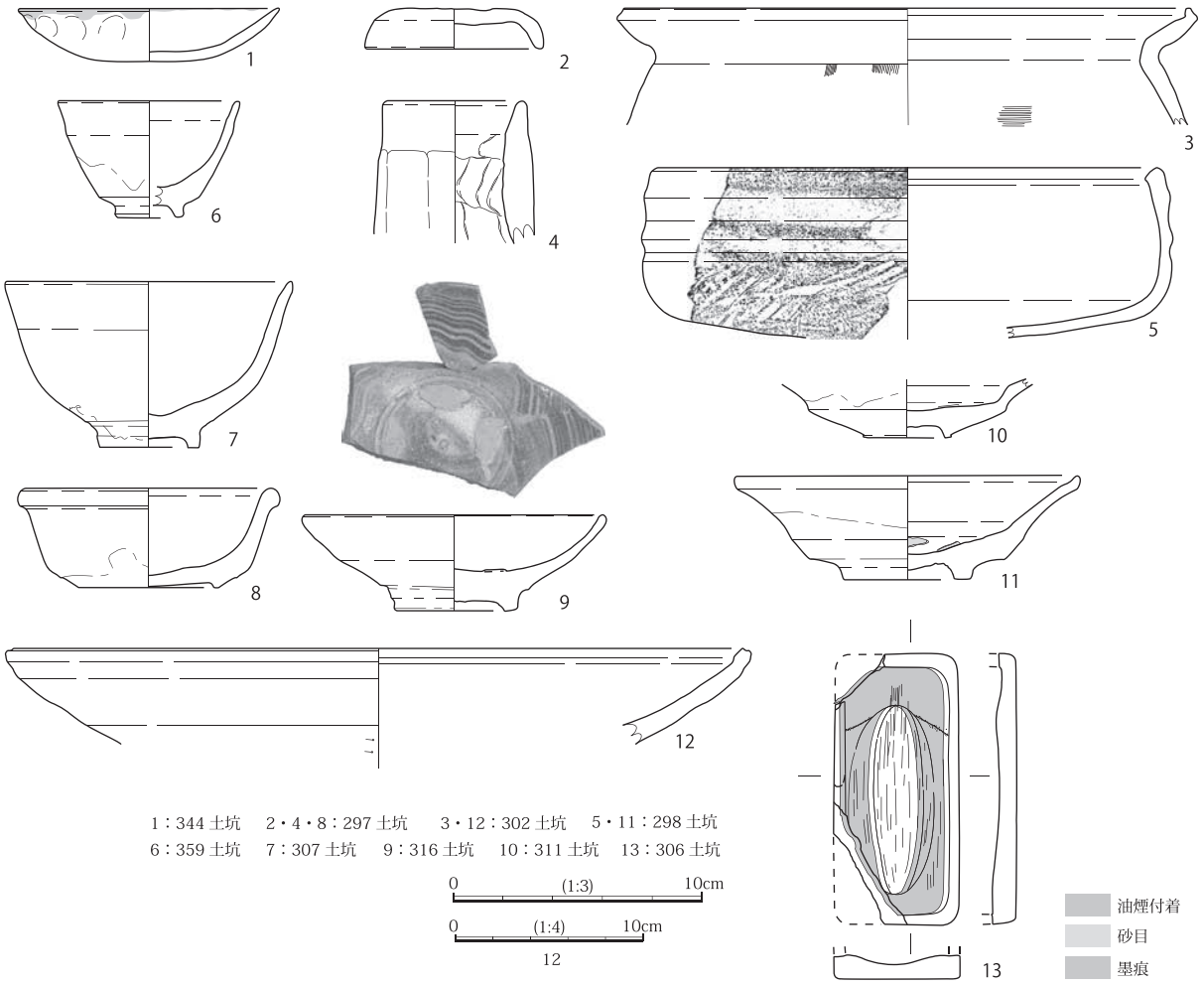


図63　第９面・第９－２面遺構出土遺物

礎石１基と３基の礎石抜き取り痕で構成される。礎石の心々距離は約1.4mを測る。使用された礎石は板石だけでなく、一石五輪塔（354礎石）や五輪塔火輪（356礎石）、石臼（355礎石）などの転用品がみられた。礎石を据えるために小さく浅い掘り方をもっている。

建物内部は第８面礎石建物とは異なり平坦であった。性格不明の小土坑が３基存在する。この土坑のうち北東隅に掘削されたものは、礎石抜き取り痕の可能性がある。なお、328建物には第７面建物で構築されていたカマドは存在しない。建物内整地層や建物西側の367ピット（直径0.15m）から土師質皿が数点出土しており、この建物の建築に伴う地鎮を行ったものと推察される。367ピット内には２枚の土師質皿が合せ口で収められていた。

出土遺物は建物内の土坑出土品も含め、肥前陶器皿・壷、中国製染付碗・皿、土師質皿・甕・羽釜・炮烙、土師器、須恵器、瓦（軒平・丸・平）、釘、瓦転用円盤などがある。肥前染付は入っていない。17世紀前半の建物である。

図62－１～６は土師質皿。いずれも胴部は底部から口縁部に向けて内彎しながら斜め上方にのびる。胴部外面には指頭圧痕が顕著である。１の口縁端部は摘み上げるようにナデてやや内彎する。図62－７～９は肥前陶器皿。７は緩やかに胴部が斜め上方に伸びる。内面には　白化粧土による波状の刷毛目文が施される。高台は露胎。砂目積みである。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）。８・９は灰釉皿。高台が低く、胴部は高台から斜め上方に大きく開くようにのびる。胎土目積みである。８には４箇所の目跡が、９には８箇所ほどの放射状の目跡が残る。胴部下半及び高台は露胎。16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ－２期）の所産。10は漳州窯系碗。草花文が描かれる。11は漳州窯系皿。内面見込には花鳥文が描かれる。畳付は釉剥ぎ。高台に粗い砂が付着する。12は建物内の331土坑出土。肥前陶器壷。胴部中程に最大径をもつ。頸部と胴部の境にはシャープな肩をもつ。頸部から口縁部に向けて内傾し、口縁端部は玉縁になっている。タタキ成形である。外面及び内面上半部には鉄釉が、内面下半部には鉄奨が施釉される。16世紀末～17世紀初頭の所産か。

15は328建物の355礎石である。石臼（上臼）を転用したもの。半裁されている。芯棒受けは確認出来ないが、供給口が残る。側面には、挽き木を差し込む深さ3.5cmのほぞ穴が１孔穿たれている。擂目は４条。石材は粗粒黒雲母花崗岩である。16は328建物の354礎石である。一石五輪塔の転用か。１面に墓碑が刻まれている。判読できる碑銘は「永禄七年/□妙心禅尼/十二月二十二日」。石材は岩片を多量に含む不均質砂岩である。堺では1564（永禄七）年12月に約１千戸焼ける大火があった。その時の被災者の墓碑であろうか。

333石敷〔図61・62・図版８下〕：328建物の南西隅から直線的に西に伸びる石敷である。建物と同じN-127°-に軸をもつ。検出長は約３ｍを測る。幅0.6m・深さ約0.1mの断面形が浅い皿状を呈する溝の中に、一辺0.1m程の小礫を密に敷き並べている。敷地裏側への通路として利用されていたものと推定される。

図62－13は北部九州産の茶入れか。口縁部は短く、肩部が張る。焼けが悪く、釉が綺麗に溶融していない。14は備前擂鉢。口縁部の高さは低く、寸詰まりである。口縁部外面には凹線が１条廻る。また、外面顎部が小さく張り出す。口縁端部は摘むようなナデを施し、内側に凹線状の段がつく。17世紀前半（乗岡編年近世1期）の所産であろう。

374溝〔図61〕：328建物の南面に平行してはしる溝である。検出長は約2.9m、幅約0.3m、深さ約６cmを測る。溝の両壁に平瓦を立て並べて、壁を擁護している。328建物に伴う雨落ち溝であろう。

第９－２面〔図64〕　東第９－１層・西第５－１層を除去して検出される面である。調査区の西端及び東端でのみ確認出来た。西側は概ねT.P.1.9～2.0m、東側はT.P.2.2～2.3mを測り、東側が高くなっている。17世紀前半の遺構面である。検出した遺構には溝・土坑・礎石がある。検出した土坑は不定形なものが多く、性格は不明である。

344土坑〔図63・65〕：調査区西側南寄りで検出した。長辺約0.9m、短辺約0.7mを測り、平面不整方形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.2mである。埋土は３枚に分かれ、暗灰黄色のシルト～粗砂が主な堆積層である。中層には炭を多量に含んでいた。出土遺物には肥前陶器碗、丹波擂鉢、

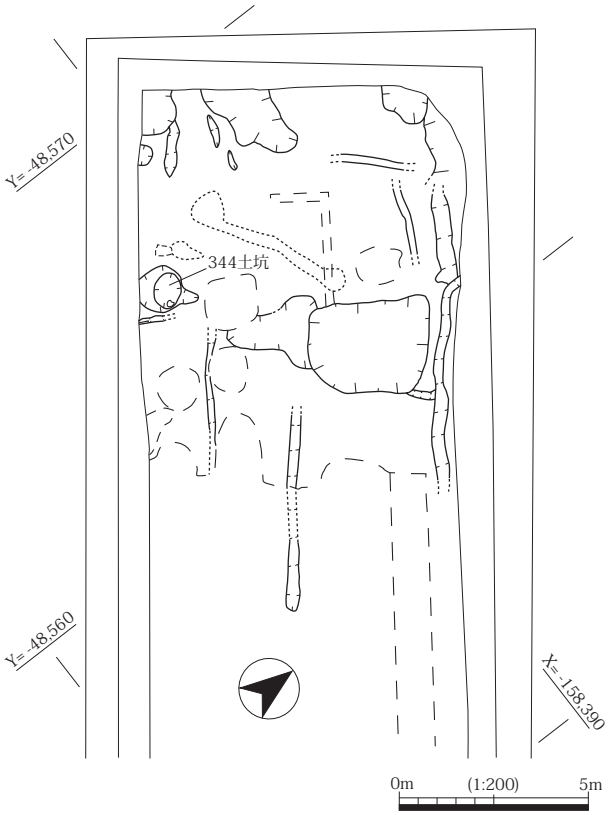


図64　第９－２面　平面図

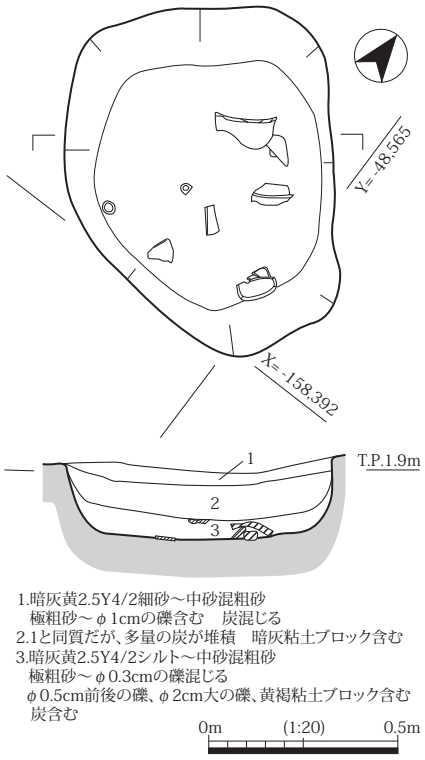


図65　第９－２面　344土坑　平・断面図

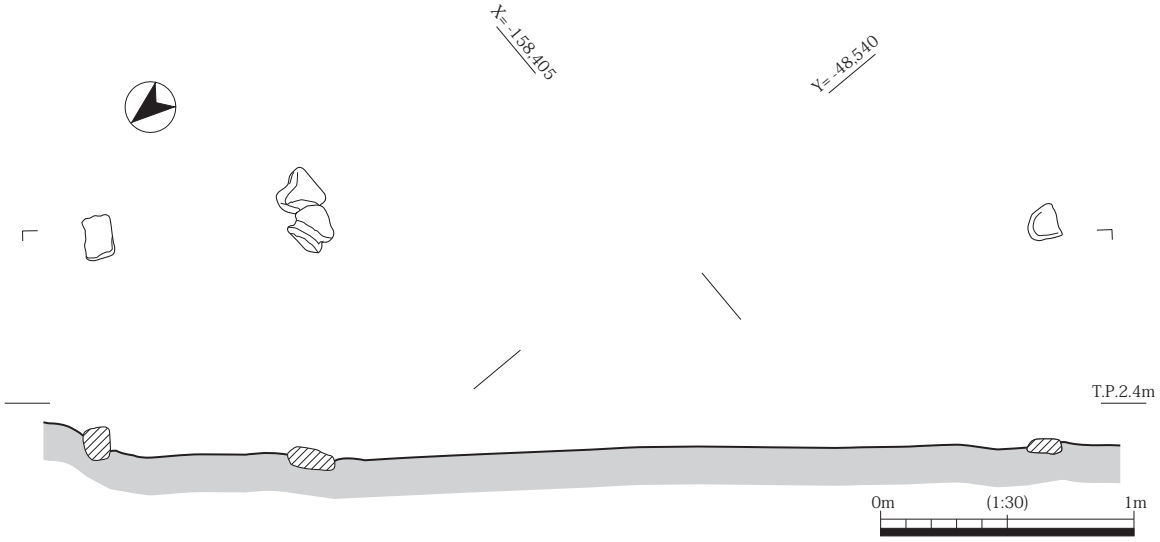


図66　第９－２面　礎石列　平・断面図

中国製染付碗、土師質皿・小型皿・甕・羽釜（大和型羽釜）、釘、布目瓦、土製円盤がある。

図63－１は土師質皿。胴部は底部から斜め上方に緩やかに伸びる。口縁端部は摘むようにナデられ、尖り気味に仕上げる。口縁端部には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

礎石列〔図66〕：調査区東側の東端で検出した礎石列である。第９面328建物の下面で検出。礎石は３基存在したが並びは明確でなく、建物として復元するには至らなかった。礎石は一辺が0.1～0.2mほどの大きさであった。

第10面〔図67〕　東第９層及び西５層を除去して検出される面である。ベースは第10層の灰黄色系中～粗砂である。遺構面は概ねT.P.1.9～2.0mを測り、緩やかに東側が高くなっている。西側では鋤溝群が検出された。一方、東側では不定形土坑が多く見られ、鋤溝群は明確ではない。第10層には瓦器碗や皿、瓦質土器（甕・羽釜・捏鉢）が少量ながら含まれることから、15世紀後半以降で近世までの遺構面である。

鋤溝群〔図版９上〕：調査区の中央から西側で検出した。撹乱の影響を受けており、相対的に残りは良くなかった。鋤溝は概ね幅0.2m・深さは浅く0.1m弱である。埋土は第９層の炭を含む黄灰～暗灰黄色系の極細～中砂となっている。N－8°－Wに軸をもつものとN－82°－Eに軸をもつものがあり、ほぼ東西・南北を指向している。出土遺物がほとんどみられないために、所属時期を明らかにし難いが、上位面で検出した近世段階の遺構が指向する方位とは異なる軸をとることから中世後半段階の遺構であることは確実である。鋤溝群は中世堺環濠都市を囲っていた濠の外部に位置することから、都市域外は耕地として利用されていたものと考えられる。

351落ち込み〔図68〕：調査区の中央で検出した不定形の落ち込みである。第９面の240溝の東肩部に広がる位置になる。埋土は黒褐色のシルト～粗砂。出土遺物には備前擂鉢、

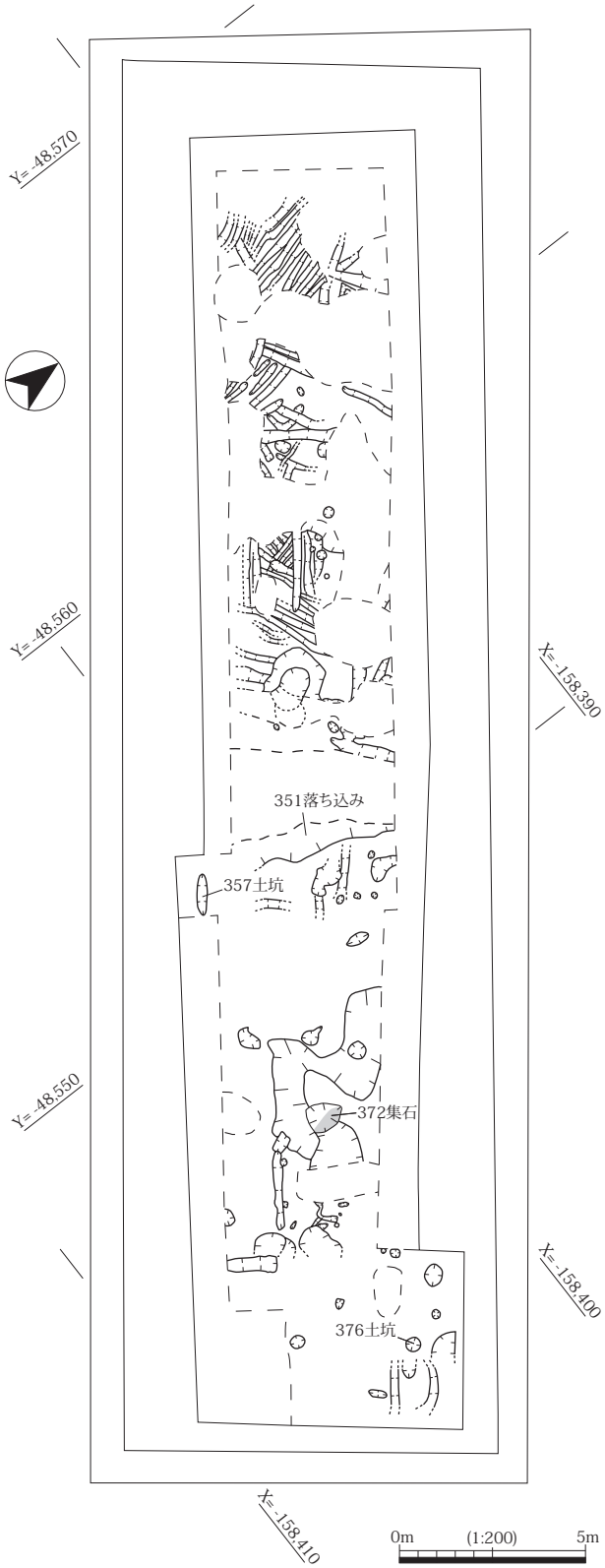


図67　第10面　平面図

中国製染付碗、白磁碗・小杯、土師質皿・甕・鉢・炮烙（外面に平行タタキ）、瓦（軒平・丸・平）、瓦器碗、土師器、須恵器がある。図68－４は軒平瓦である。瓦当端には菱形文がみられ、中心に向かって波状文が施される。

357土坑〔図68〕：調査区の中央南寄りで検出した平面長楕円形を呈する土坑。長軸1.1m、短軸0.25m、深さ約0.15mを測る。N−127°−Eに軸をもち、上位面の遺構の軸と同じくする。出土遺物には備前甕・擂鉢、土師質甕・羽釜・蓋がある。図68－２は土師質羽釜である。球形の胴部をもち、胴部中央やや下付近に幅の狭い鍔が廻る。胴部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲し、口縁端部はナデて摘み上げ、断面三角形を呈する。口縁端部は片口を呈する。大和型羽釜であろう。16世紀後半の所産。

372集石：調査区東側中央で検出した集石である。長辺が１ｍを測る不定形土坑の東半分を埋めるように、一辺0.2m前後の礫を多量に投棄していた。礫間からは土師質皿、漳州窯系皿の出土がみられた。漳州窯系皿は第８面240溝出土のもの（図53－13）と接合する。

376土坑〔図68〕：調査区東端の北寄りで検出した平面円形を呈する土坑。直径約0.4mを測る。埋土は暗オリーブ褐色のシルト質細～粗砂である。図68－１は土師質碗。底部は丸く、胴部はほぼ直上に口縁部に向けて短く立ち上がる。手捏ね成形のためか内外面共に指頭圧痕が顕著に残る。器壁は非常にぶ厚い。取瓶のようなものであろうか。３は瓦質の土製品。中空になっている。上面の縁辺には石塔台座などにみられるような弧状の文様が彫り込まれ、上面中央には方形孔が穿たれているようである。側面には横長長方形の格子状の区画が作られる。区画の中央下段のみ穿孔され内側まで貫通する。瓦塔の台座のようなものであろうか。

第11面〔図69〕　東第10層及び西６層を除去して検出される面である。調査区全体でみられる土壌化層である黒褐色小礫混粘土が基盤層である。概ねT.P.1.8m前後である。

調査区の全体で第10層の灰黄色系中～粗砂に覆われた牛・人の足跡を確認したが、特に顕著であったのは調査区中央から西側にかけての範囲であった。調査区の東側南寄りの位置では、N−98°−Eに軸をもつ畦畔状の高まりが１条確認出来た。検出長は約３ｍ、幅約１ｍを測る。

多数の足跡や畦畔状の高まりが検出出来たものの、確実な畦畔や耕作痕などが確認できず耕地としての利用を確定するには至らなかった。当面の時期は、上層の白色砂から瓦器碗や瓦質土器を主体とする

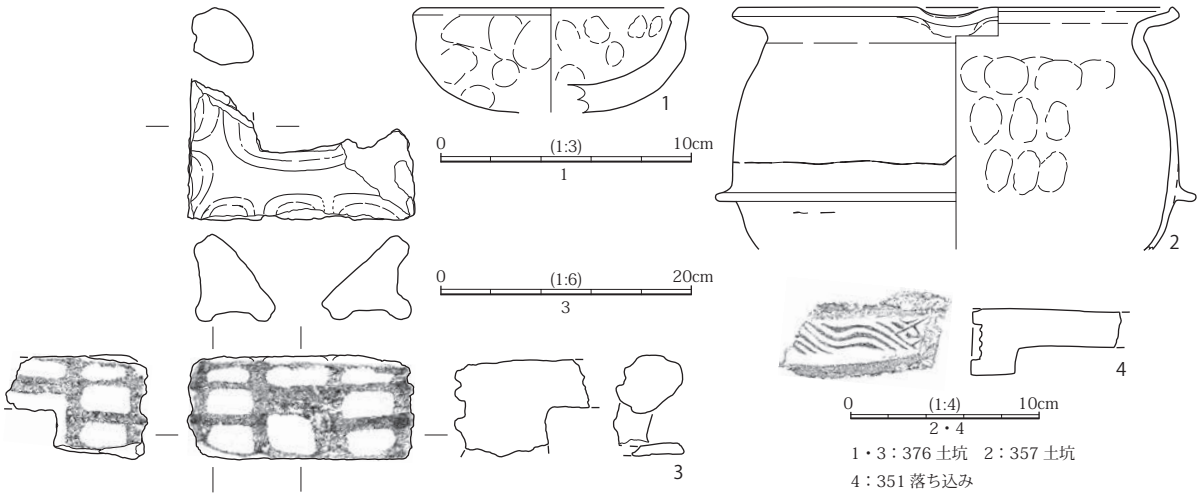


図68　第10面　遺構出土遺物

中世段階の遺物が出土すること、基盤層となる第11層中からは須恵器・土師器・埴輪等の古墳時代〜古代の遺物が多量に出土することを勘案すれば、古代〜中世であると思われる。

第12面〔図70・図版９中〕　西７層（＝東第11層）を除去して検出される面である。調査区全面でみられる土壌化層である黒褐色礫・細〜中砂混シルト質粘土を基盤層とする。なお、当面と第11層の間には部分的に非常に薄い灰白色の洪水砂が挟まれる。概ねT.P.1.4m前後である。調査期間の関係で当面以下は調査区の西側部分のみの調査となった。確認した遺構には溝・土坑がある。

調査区西側東端で溝･土坑を検出した。溝、土坑共にN−45°−Eに軸をもつ。溝は幅0.7m･深さ約0.15mを測り、長さ4.5mを検出した。土坑は溝から西へ約1.5mの位置で、溝と平行するように検出された。幅１m・長さ３mを測る。両者ともに洪水砂で埋没する。

また、溝や土坑より西側を中心に足跡が多数検出された。畦畔や耕作痕などが確認できず耕地としての利用を確定するには至らなかった。

遺構内から遺物の出土が見られないこと、基盤層が無遺物層であることから当遺構面の明確な時期を特定できない。

また、土壌化層である黒褐色礫・細〜中砂混シルト質粘土を掘削した下面にみられる細〜中砂混シルト層上面を第12－ｂ面〔図70右〕として調査を行った。概ねT.P.1.3〜1.4m前後である。

調査区西側の中央部で、第12－ａ層の黒褐色礫・細〜中砂混シルト質粘土が堆積した平面円形を呈する土坑を１基検出した。

第13面〔図71・72〕　西８層（＝東第12層）を除去して検出される面である。弱く土壌化した黒褐灰色のシルト混粘土が第13－ａ面の、褐灰色シルト混粘土がｂ面の基盤層となる。概ねT.P.1.25〜1.3m前後である。

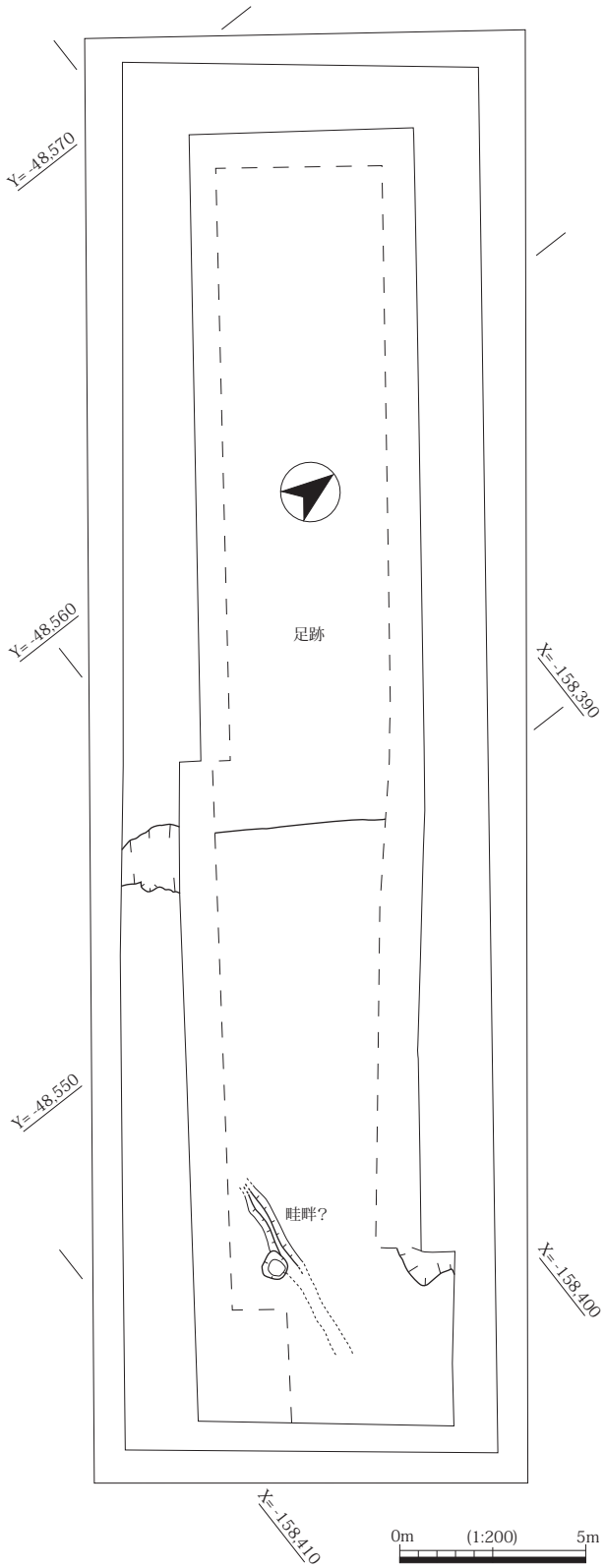


図69　第11面　平面図

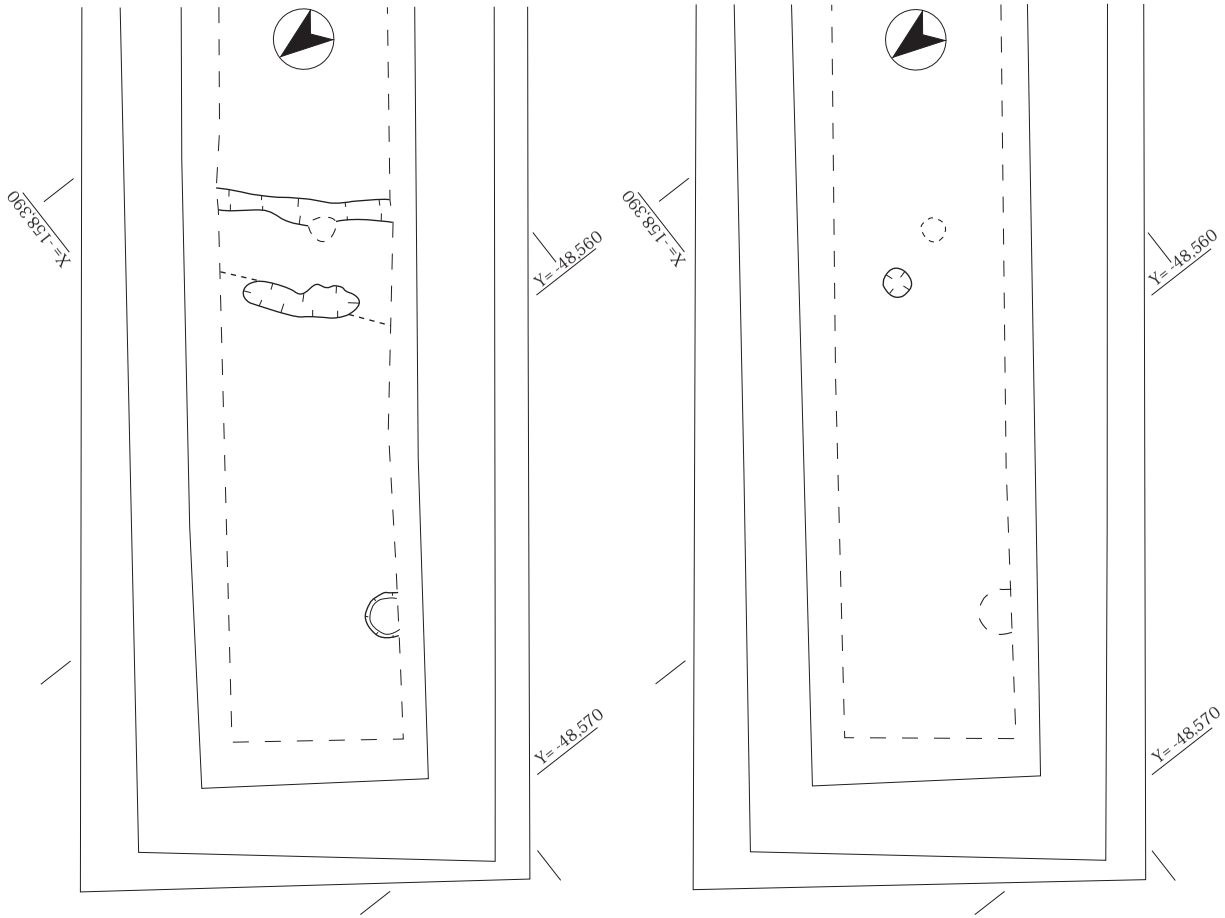


図70　第12a 面（左）・第12b 面（右）　平面図

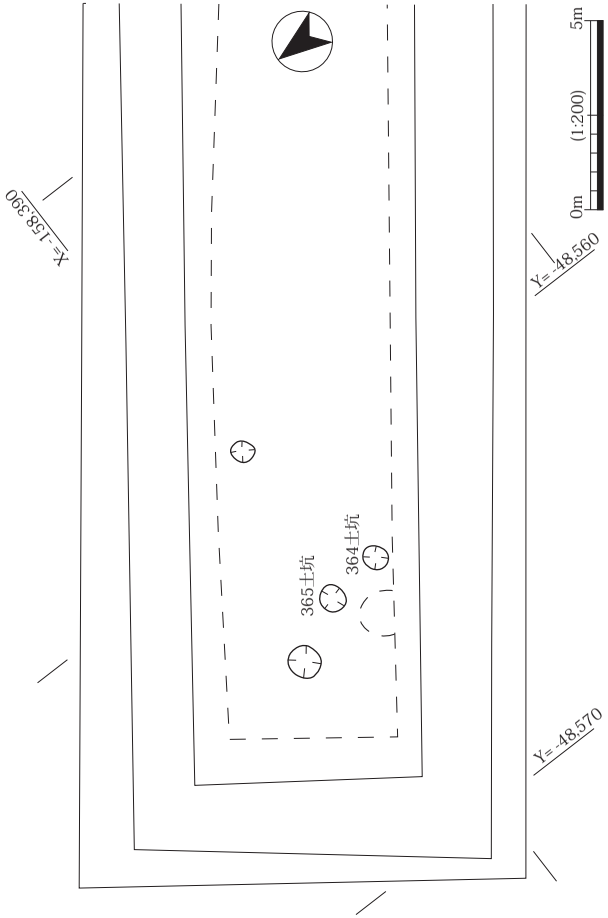


図71　第13b 面　平面図

ｂ面において、調査区の西端で土坑４基を検出した。土坑は平面円形を呈し、直径約0.6～0.9m・深さ約0.1～0.2mを測る。埋土は上層の黒褐灰色シルト混粘土である。遺構内から遺物の出土が見られないことから当遺構面の明確な時期を特定できない。

なお、当面は東西両側から緩やかに傾斜し、調査範囲の中央付近が低くなる地形となる。

第14面〔図73左〕　西９層（＝東第13層）を除去して検出される面である。弱く土壌化した黒褐色極細～中砂混シルト質粘土が第14－ａ面の、灰白色中～粗砂がｂ面の基盤層となる。概ねT.P.1.2～1.3m前後である。明瞭な遺構は存在しないが、ｂ面においてＹ＝－48,560ラインに沿った自然地形による落ち込みがみられ、上層の黒褐色極細～中砂混シルト質粘土の溜まりがみられた。

第13面同様に東西両側から緩やかに傾斜し、調査範囲の中央付近が低い地形となる。

第15面〔図73右〕　西10層（＝東第14層）を除去して検出される面である。にぶい黄橙～灰色粗砂が基盤層となる。明確な遺構は存在しない。当面は東から西へ緩やかに傾斜し、西から東へは急な傾斜をもち、調査範囲の中央付近が低くなる地形となる。概ねT.P.0.9～1.3mである。

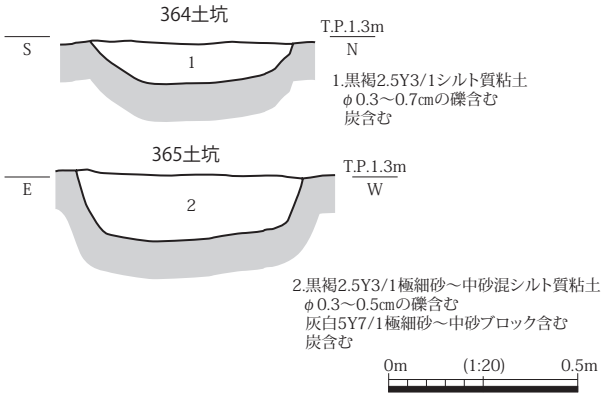


図72　第13ｂ面　364・365土坑　断面図

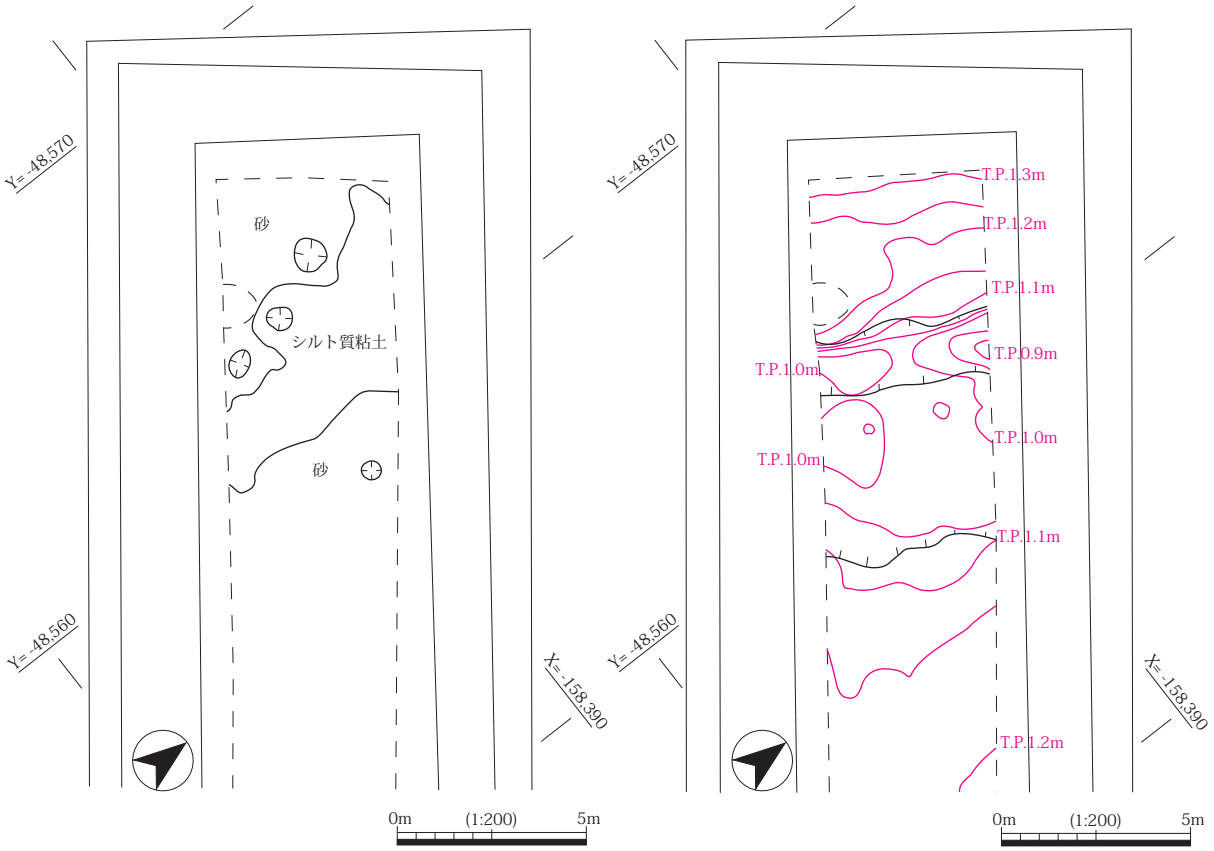


図73　第14ｂ面（左）・第15面（右）　平面図

第２節　１調査区の包含層出土遺物

都市遺跡という性格上、生活面を構築するために重層的な整地や盛土を行っている。こうした整地層や盛土の中には多くの遺物が混ぜ込まれ、整地の際の補強材的な役割を担っていたものと想像される。特に第１層から第６層にかけての成熟した近世段階の整地層からは近世陶磁器や瓦などが多量に出土している。近世陶磁器に関しては前節の各遺構出土遺物で触れたので、本節では第９層以下出土の近世陶磁器以外の遺物を主体として記述を進めることにする。

図74－１・２は土師質皿。１は器壁が厚く、内外面に指頭圧痕を残す。口縁端部は丸くおさめられる。所謂へそ皿系である。２は１に比して器壁は薄い。口縁部は１段凹ナデが廻る。胴部下半外面には指頭圧痕が残る。内面の口縁部と胴部の境には段がみられる。３は瓦質羽釜である。口縁部は直立し、口縁部直下には幅の狭い鍔が廻る。

図74－４は肥前陶器碗。ほぼ直立する胴部をもつ。口縁端部は尖り気味に仕上げる。17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。５・６は肥前陶器皿。５は高台から口縁部に向けて直線的に伸びる胴部をもつ丸皿。口縁端部には３箇所に押圧による楕円形の窪みがみられる。胴部下半及び高台は露胎である。高台内には兜巾がみられる。胎土目積みで４箇所に目跡が残る。６は高台から口縁部に向けて直線的に伸びる胴部で、口縁部直下で屈曲し口縁部が大きく水平に外反する。口唇部には溝を廻らせる溝縁皿である。５は16世紀末～17世紀初頭（大橋編年Ⅰ－２期）、６は17世紀前半（大橋編年Ⅱ期）の所産。７は肥前陶器瓶。胴部下半及び内面は鉄奬を施す。内面及び胴部外面下半には当て具痕が残る。タタキ成形である。８は瀬戸美濃（志野）菊皿である。長石釉を全面に施釉する。畳付及び高台内は無釉。９は景徳鎮窯系の白磁皿。口縁部は大きく外反する。畳付は釉剥ぎ。10は漳州窯系碗。胴部は高台から緩やかに内彎しながら立ち上がる。畳付は釉剥ぎ。

図74－11は丹波擂鉢。口縁端部は丸く、内面に肥厚する。内面の口縁部と胴部の境に段をもつ。擂目は５条１単位のクシ描きである。12は備前擂鉢である。口縁部は高さが寸詰りで、下端がやや張り出して断面三角形を呈する。口縁部外面には３条の沈線が廻る。内面には段がみられる。擂目は５条以上１単位のクシ描きである。17世紀前半（乗岡編年近世１期）の所産。１～12は第９層出土遺物である。なお、図化は行わなかったが、第９層からは上位層よりも瀬戸美濃焼の出土が多くなる傾向がある。

図74－13は黒色土器Ａ類碗か。摩滅が著しく調整は不明瞭。踏ん張るような外開きの短い高台が取り付く。14は土師器甕。なだらかな肩部に短く外半する口縁部が取り付く。15・16は土師器の把手である。15は断面楕円形を呈する。外面は面取りされている。16は屈曲して斜め上方に開く。平面三角形を呈する。

図74－17～19は須恵器坏身である。17は口縁部が短く内傾し、受け部は短く水平に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。TK10型式併行か。６世紀中頃の所産。18は口縁部が短く内傾し、受け部は短く水平に伸びる。口縁端部は　尖り気味に仕上げる。TK43型式併行か。６世紀後半の所産。19は内彎しながら立ち上がる胴部で、口縁端部は丸くおさめる。TK217～TK46型式併行か。７世紀前半～後半の所産。20は須恵器圏脚円面硯。長方形の透かしをもつ。21は須恵器坏Ｂ。外開きの短い高台が付く。８世紀代の所産であろう。22は製塩土器。内外面共に縦方向のナデを施す。23は須恵質蛸壷。頭部のみが遺存。頭部中央に直径0.4㎝の紐孔があり、頭部側面には幅0.2㎝の溝が刻まれる。13～23は第11層出土遺物で

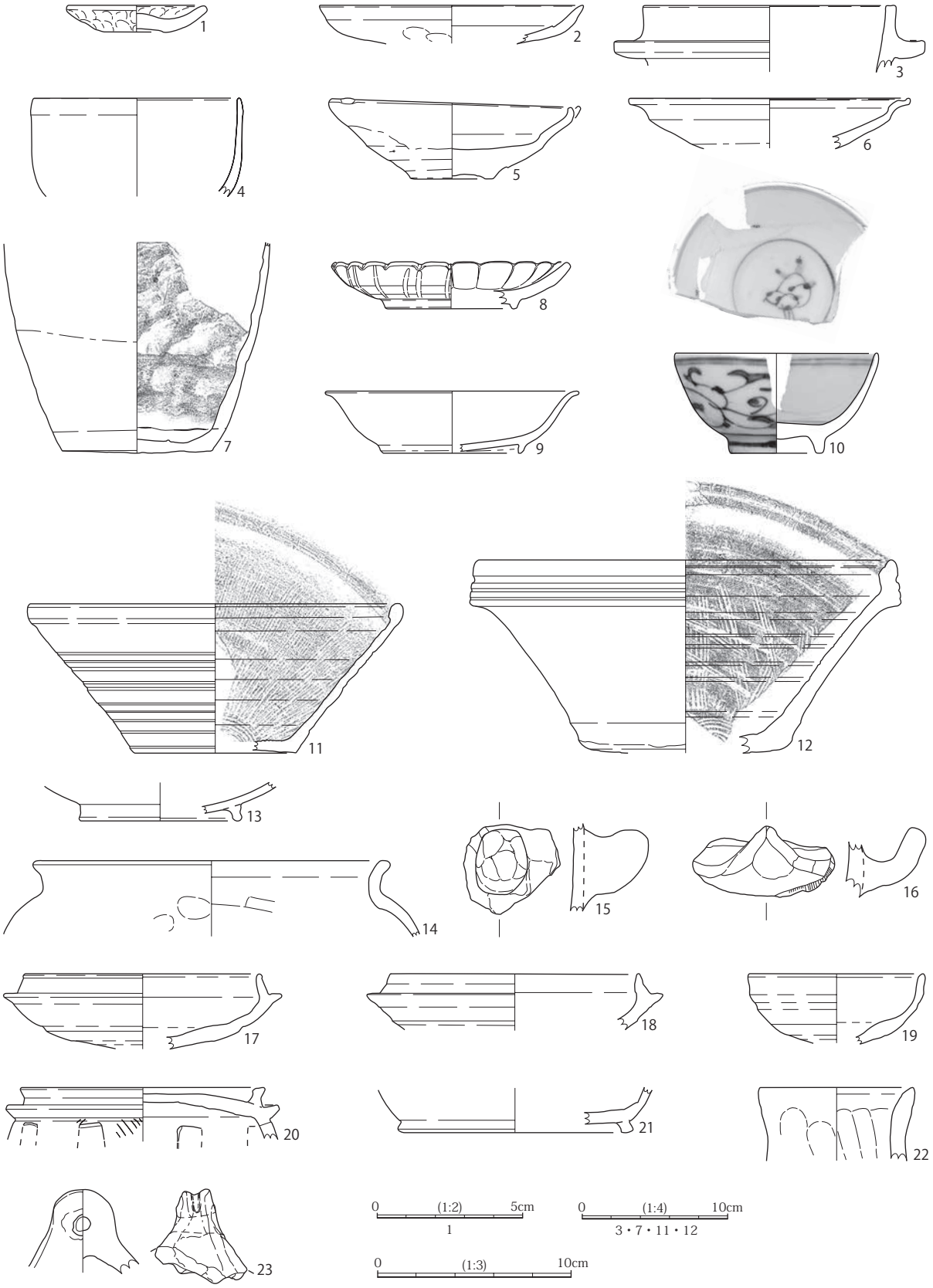


図74　包含層出土遺物（1）

ある。

図75－１～７は土製品。１は土製独楽。表面には梅花文が陽刻されている。中央には軸を差し込む孔が穿たれる。２は瓦質土製品。中央部は円柱形で両端が「ハ」の字状に開く。トチンのような形状であるが性格は不明である。３～７は土錘。３・４は瀬戸内式土錘。中央部は円柱形で両端が中央に比べ肥厚する。両端には紐孔が穿たれる。５は管状土錘。平面紡錘形を呈する。４条の短沈線が施される。６は平面紡錘形を呈する。側面に紐をかける幅0.6㎝の溝が廻る。７は平面楕円形を呈する。６に比して身が厚い。紐をかけるための溝が表裏面・側面に廻る。溝の幅は変わらないものの、深さは側面の方が深く0.8㎝、表裏面のものが0.2㎝となっている。１は側溝、２は第５層、３～７は第11層出土遺物である。

図76－１～６は瓦である。１・２は鬼瓦。１は鬼右眼部分。眼は両側穿孔されている。２は鬼の左眼及び鼻部分。眼は丸く窪ませるが裏面まで貫通しない。鼻は小鼻が膨らみ、孔が穿たれている。３は軒平瓦。瓦当の端に線の細い唐草文が施されている。４～６は刻印瓦。４は「堺瓦新」。５は「湊瓦喜三」。６は「堺改丹治利右衛門」。６の刻印には「改」の字がみられるが、刻印に「改」が加わるのは文政二（1819）年から文政四（1821）年の間とされており、製作年代はそれ以降とみなすことが出来る。

図76－７～９は石製品。７は碁石。平面不整円形で、扁平である。石材は黒色珪質頁岩（那智黒）。８はサヌカイト製火打ち石。一側面に原礫面を残す。原礫面の対面が著しく使用されており、縁辺部が潰れて丸味を帯びている。９はサヌカイト製の二次加工ある剥片。打面に原礫面を残す縦長剥片。背面側から両側辺に二次加工を加える。風化が進んでいないことから弥生時代の所産であろうか。

図76－10〔図版15右２〕は銅製の棹秤用鉤である。頭部は扁平に成形され、直径0.2㎝の孔が穿たれている。11〔図版15左３〕は銅製の錠前の牝金具。鍵爪部を下に置いた時、平面「つ」の字状を呈する。その状態でみると弦部と鍵爪部を繋ぐ屈曲した部分には龍の頭部が陽鋳されている。弦部側が龍頭部で、鍵爪側が首にあたる。あたかも弦部が龍の口から飛び出しているようにみえる。龍の首には細い線で鱗が陰刻されている。また、頭部から首の背にあたる部分には鰭がみられる。鰭にも細い線で皺状の文様が刻まれる。顔の表現は、目を窪ませ、耳を細い陽鋳された突起で示し、鼻をやや隆起させている。なお、口元の下にある三角形状の突起は顎髭を表現したものであろう。

12・13は銭貨である。12は皇宋通宝。13は元祐通宝。13は鋳上がりが悪く、銭名が不鮮明である。

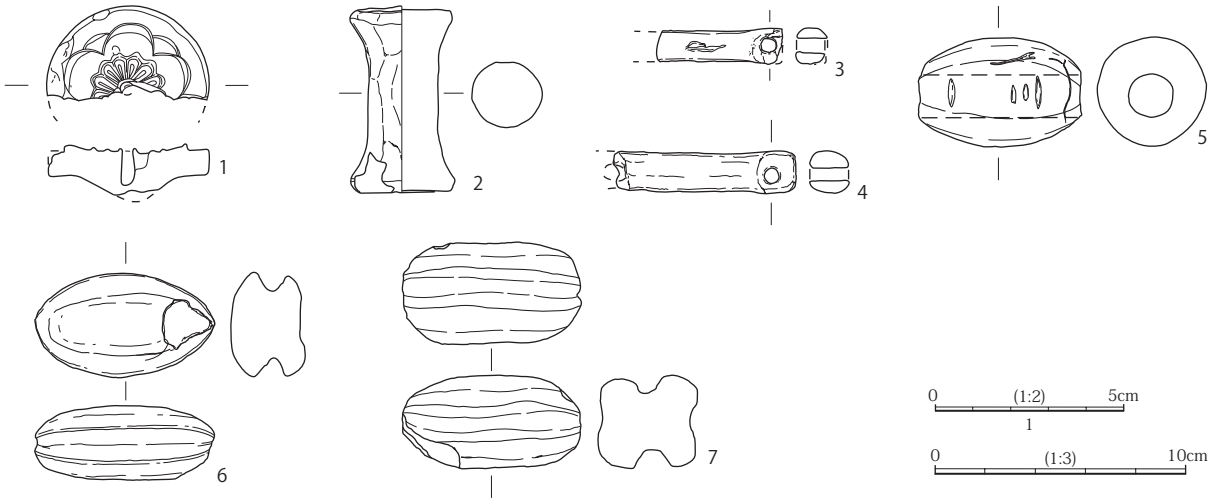


図75　包含層出土遺物（２）

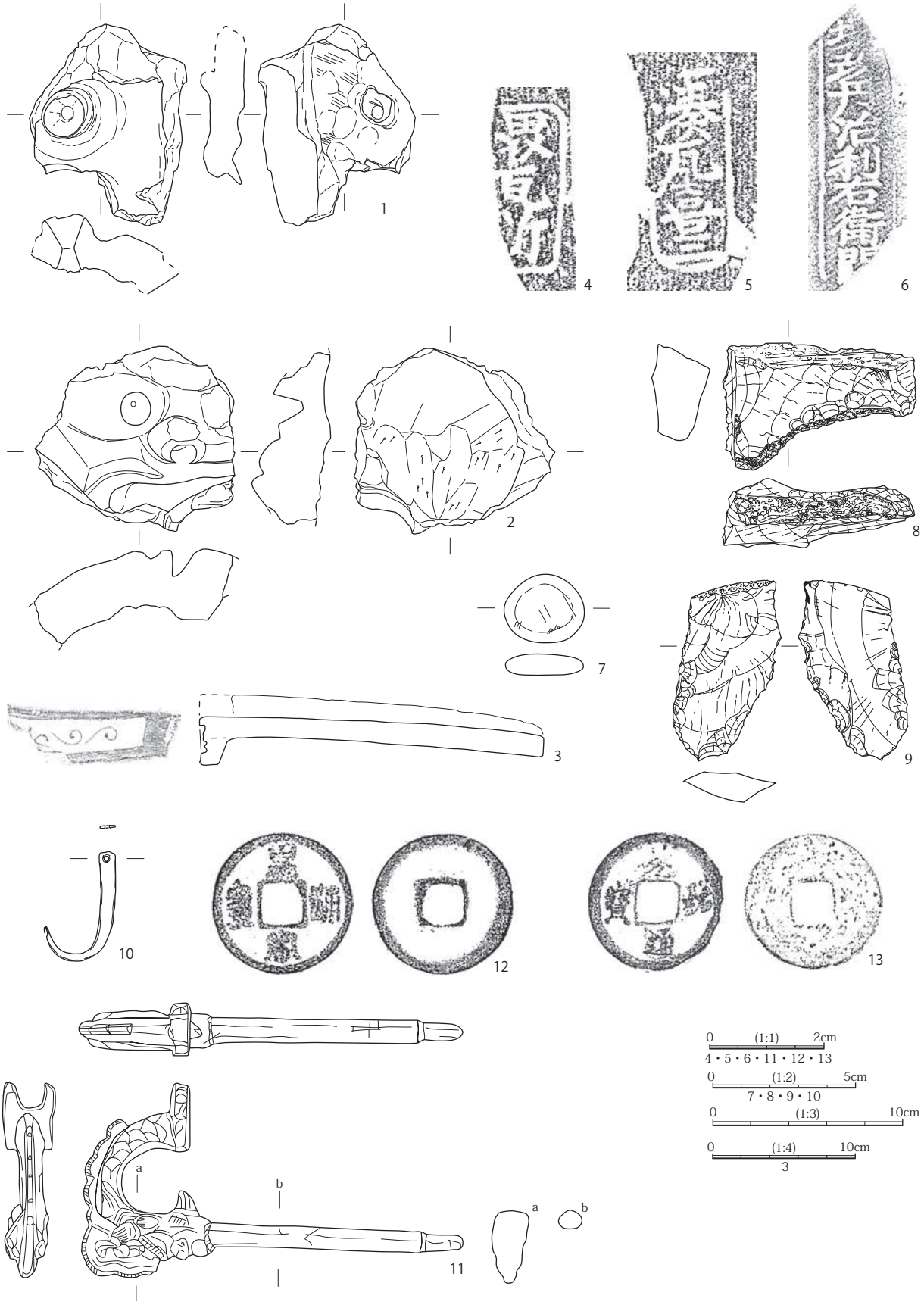


図76　包含層出土遺物（3）

いずれも北宋銭である。

１・７が第４層、２が表採、３～６が側溝、８が第８層、９が第９層以下、10が南壁清掃時、11が第９－２層、12・13が第９層出土遺物である。

なお、図化は出来なかったが、近世包含層からは多くの軽石が、第11層からは円筒埴輪や形象埴輪なども出土している。

註

１．嶋谷和彦　1999「近世・堺の瓦屋仲間と刻印瓦―住友銅吹所跡出土の堺銘刻印瓦に寄せて―」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号　財団法人大阪市文化財協会

参考文献（第３・４章共通）

小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究　第２号』日本貿易陶磁研究会

上野俊男・白神典之・森村健一　1983「第２節　堺環濠都市遺跡出土土器・陶磁器編年試案」『堺　堺市文化財調査報告　第15集』堺市教育委員会

堺市教育委員会　1985「第５章　堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告　堺市文化財調査報告　第37集』堺市教育委員会

上田秀夫　1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究　Ⅰ』関西近世考古学研究会

白神典之・増田達彦　1991「堺における近世の陶磁器と土器―遺跡出土の一括資料の紹介をかねて―」『関西近世考古学研究　Ⅰ』関西近世考古学研究会

大平　茂　1992「近世丹波焼擂鉢の型式分類と編年」『三田市下相野窯址　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ』兵庫県教育委員会

續伸一郎　1995「11. 貿易陶磁器（〔３〕中世後期の貿易陶磁器）」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

十河良和　1996「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・炮烙について」『関西近世考古学研究　Ⅳ』関西近世考古学研究会

白神典之・増田達彦　1999「堺環濠都市遺跡出土の調理具・貯蔵具―江戸期の擂鉢・鍋・徳利・植木鉢―」『関西近世考古学研究　Ⅶ』関西近世考古学研究会

積山　洋　1999「大坂の土師質土器―主要器種を中心に―」『関西近世考古学研究　Ⅶ』関西近世考古学研究会

森　　毅　1999「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器」『織豊期城郭研究会　第７回研究集会　土器・陶磁器からみた織豊期城郭』織豊期城郭研究会・日本中世土器研究会

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会

乗岡　実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会』発表要旨　中近世備前焼研究会

江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006『江戸時代のやきもの―生産と流通―』

第４章　２調査区の遺構と遺物

２調査区では中世～近世の遺構面を計４面検出した。第１面および第１－２面が近世、第２面および第３面が中世の遺構面である。近世遺構面においては地割りに沿った建物、町境を示す溝、大型廃棄土坑などを検出した。１調査区と同様の土地利用を確認し、近世都市外郭の様子を窺える資料となった。

一方、中世遺構面については、第２面において1615年（慶長二十年）大坂夏の陣に伴う焼土層を検出した。この焼土層をはさんで、中世町屋から近世町屋への様相の変化を確認できたことも大きな成果である。また、今調査では中世都市堺を取り囲んでいた濠を４条検出するという成果を得た。調査区北東に近接するSKT179－１ライン５地点において、石垣を伴う濠状遺構が確認されていたことから、当調査区内での濠の検出は予想されていた。しかし４条もの濠の存在を確認できたことは、堺環濠都市遺跡を理解するにあたって、今後とも重要な資料となるであろう。

さて、実際の調査についてであるが、明確な整地層を検出し面ごとに調査できたのは、調査区東側の幅2.5mの部分のみであった。調査区中央の幅7.5mは旧少林寺団地による撹乱が著しく、重機で撹乱を取り除くと第３面2300濠埋土が一部露呈する状況であった。重機掘削停止面を第１面として調査を行い、結果として１面のみの検出にとどまった。また、大撹乱以西については整地層の単位が不明瞭であったため、第１面調査後、近世遺構の見落としを防ぐために任意で0.1～0.2m程下げ、第１－２面として調査を行った。上記の理由から、第１面・第１－２面に関しては、調査区の東・中央・西で面の統合が果たせていない。

第１節　２調査区の遺構と遺物

第１面〔図77〕

近世後半～現代の整地層および撹乱を、重機によって約1.3～1.７m掘削して検出される面である。近世全般の遺構が錯綜しており、出土遺物を基に時期別に色分けを行った。17世紀代の遺構が大半であるが、例えば堺擂鉢などが出土する18世紀代の遺構も検出している。なお、色分けがなされていない土坑に関しては、時期判別に至る遺物が出土しなかったため、いつの遺構であるかは不明である。

調査区東側は近世において道路に面する表側にあたり、建物建築のための整地が繰り返し行われていることが確認できた。２棟の礎石建物、建物敷地、不定形土坑などを検出した。検出面標高はおおむねT.P.2.9mであった。

一方、調査区中央幅7.5mの部分は旧少林寺団地による撹乱が著しく、上部が削平された埋甕や土坑などを検出したが、いずれの遺構も掘り込み面は不明である。検出面標高はT.P.2.3～2.4mを測り、調査区東側に比べ0.5～0.6m低いことから、調査区東側と同時期の遺構面であるとは言い難い。また、調査区北側では中世の遺構面が遺存しており、その検出面はT.P.2.3～2.4mであることを考慮すれば、中世の遺構も混在している可能性があると言える。

調査区西側では、建物敷地、廃棄土坑、埋甕、溝などを検出した。１調査区で明らかとなった土地利用を勘案すると、調査区西側は建物の裏側にあたる。重複的な整地が行われなかったようで、調査区中央の撹乱を挟んで東と西での整地の単位が異なり、単純に土層を繋ぐことは困難な状況にあった。以上

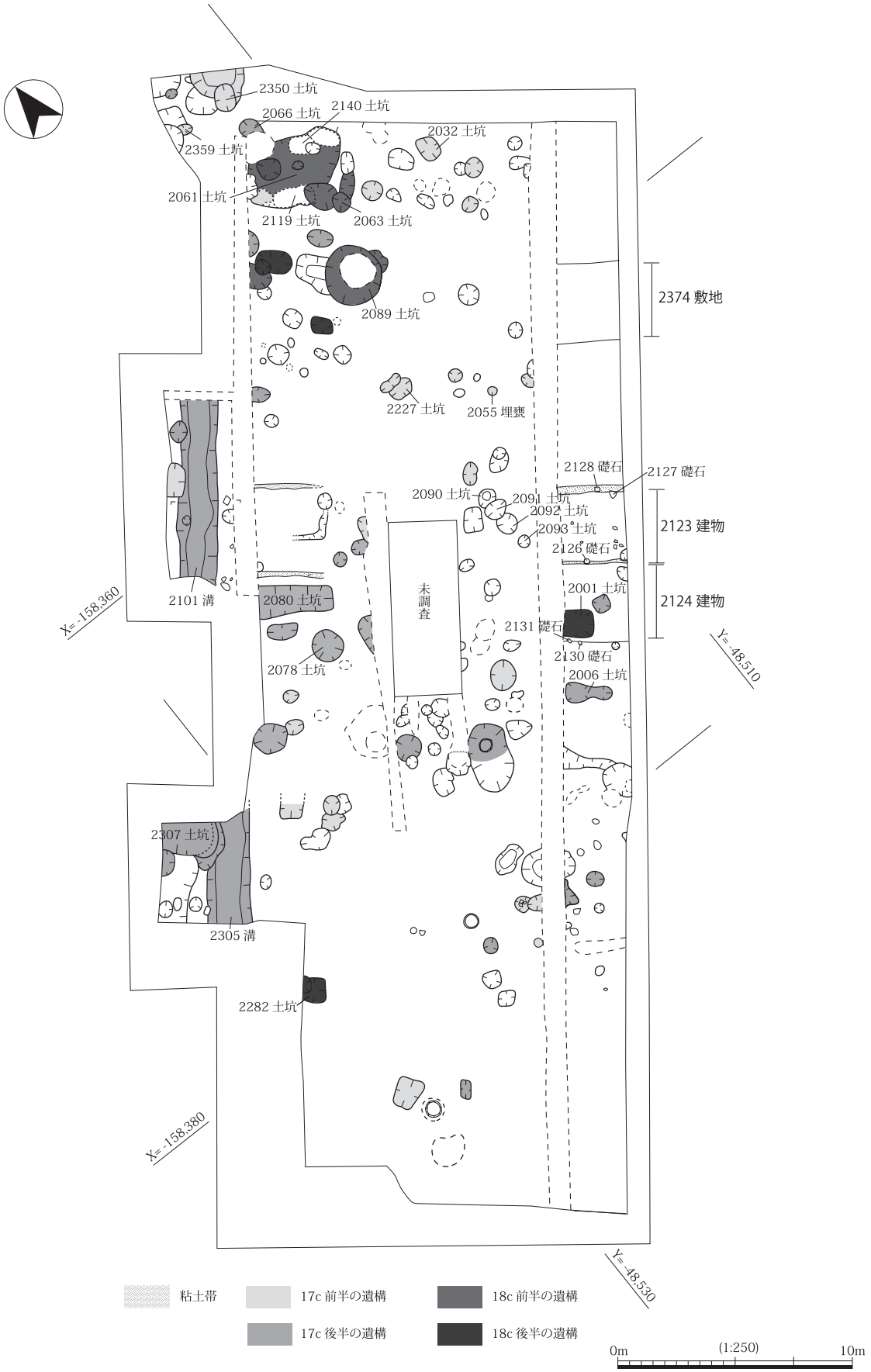

2350 土坑
2066 土坑
2140 土坑
2032 土坑
2359 土坑
2061 土坑
2119 土坑
2063 土坑
2089 土坑
2374 敷地
2227 土坑
2055 埋甕
2128 礎石
2127 礎石
2090 土坑
2091 土坑
2092 土坑
2093 土坑
2123 建物
2126 礎石
2101 溝
2080 土坑
未調査
2001 土坑
2124 建物
2131 礎石
2130 礎石
2006 土坑
2078 土坑
X=-158,360
Y=-48,510
2307 土坑
2305 溝
2282 土坑
X=-158,380
Y=-48,530
粘土帯
17c 前半の遺構
18c 前半の遺構
17c 後半の遺構
18c 後半の遺構
0m
(1:250)
10m

図77　第１面　平面図

の理由から、東側と西側の遺構面が同一時期のものであるとは言い切れない。

2123礎石建物・2124礎石建物〔図77・78〕：調査区東側で検出した。主軸はN−127°−Eで、近世地割りに平行する。２棟が隣接しており、幅0.1〜0.2mの黄白色粘土帯で敷地は区画される。敷地内は粘土質シルトを用いて固く締まった整地がなされていた。2123建物は幅約３m、2124建物は幅約3.2mを測る。2124建物南側の粘土帯は検出できなかったが、敷地内外の整地土の違いから範囲を特定した。

粘土帯のすぐ際で礎石を検出した。2123建物に比べ2124建物の方が、一回り小型の礎石を用いている。2123建物に伴う2127礎石・2128礎石の心々間は約0.7m、2124建物に伴う2130礎石・2131礎石の心々間は約0.5mを測る。2123建物礎石に関しては、掘り方底部に粘土質シルトを詰め、その上に礎石を据えている。どちらの建物にも共通することは、礎石を据えた後、オリーブ色粘土質シルトを用いて整地を行っていることである。

2123建物・2124建物およびその整地層からは、時期決定に至る遺物が出土しなかったため、正確な年代は不明である。また、上層から切り込んでいる遺構も同時に検出していることから、確実に建物に伴うと考えられる遺構の有無は不明である。

建物敷地の東側は調査区外へと続き、西側は旧少林寺団地の撹乱によって消失しているが、間口が狭く奥行きの長い短冊形地割りをもって敷地を区画していたことが推察される。なお、１調査区においても近世地割りと平行する建物を検出した。近世では敷地ごとに整地を行っており、一つの調査区内だけでも連続する整地層がなく、１調査区と２調査区の面の統合は困難である。よって、それぞれの調査区で検出した建物同士の関係は明らかにはできなかったが、敷地幅一杯に建物を建てるという構造は１調査区でみられた状況と同様である。

ところで、調査区西側でも並走する粘土帯を２条検出している。粘土帯間は約3.5mあり、2123建物・2124建物と同じく、敷地内は粘土質シルトで固く締まっている。しかし冒頭でも述べたように、調査区の西と東で面の統合が果たせておらず、また、2123建物・2124建物に伴う粘土帯の高さは西側２条の粘土帯より約0.2m高い。後述する2101溝に排水するために、東側が高く西側が低い整地を行った可能性もある。しかし、近世全般に亘って似たような地割りを踏襲していることから、東と西で検出した粘土帯は同時期に築かれたものではなく、類似する地割りが踏襲された結果である可能性もある。

2374敷地〔図77〕：2123建物から北へ６mのところで検出した。粘土質シルトを用いて固く締まった整地が行われており、建物敷地である可能性が高い。礎石や粘土帯は検出できなかったが、近世地割り

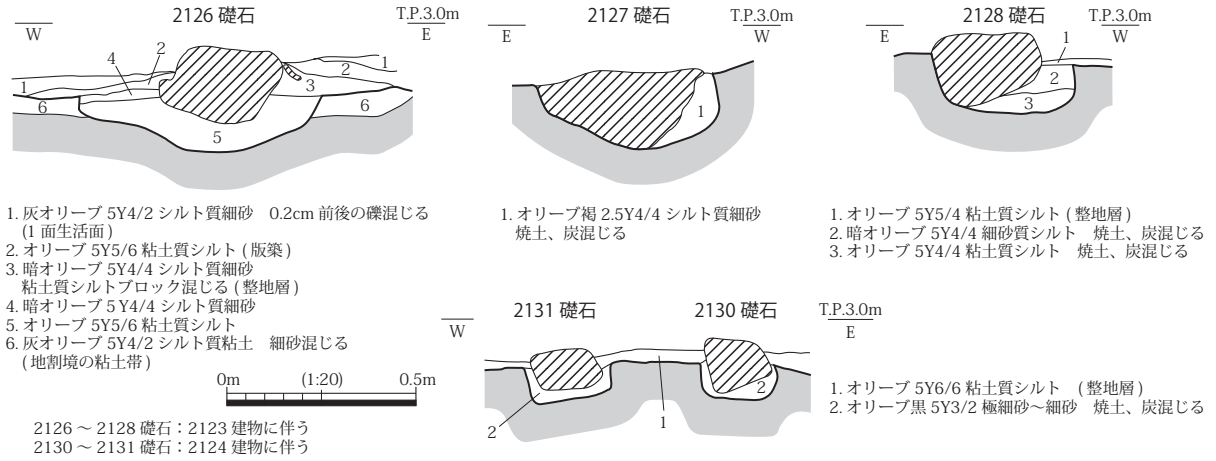


図78　第１面　2126〜2128礎石（2123建物）・2130・2131礎石（2124建物）　断面図

と平行して整地が行われている。幅約3.3mを測り、2124建物とほぼ同規模である。

2101溝〔図77・79〕・2305溝〔図77〕：主軸はN−38°−Eである。調査面積の都合上、2101溝と2305溝の連続性を証明することができなかった。よって異なる遺構番号をつけている。溝埋土は複数の層からなるが、黒褐色細砂〜粗砂混じりシルトが主体であった。

ところで、元禄大絵図に当調査区を重ね合わせると、溝を検出した位置付近で東は樽屋町、西は絹屋町に分かれる〔図５〕。１調査区では両町を区画する溝として102・188・240溝を検出した。これらの溝と、今回検出した2101・2305溝はほぼ一直線上に位置し、町境として連続する溝であってもおかしくはない。

しかし、１調査区と２調査区の区画溝は規模という点において異なりをみせ、何らかの機能の違いがあったと考えられる〔図24・79〕。240溝の底面標高はT.P.1.5m、2101・2305溝の底面標高はT.P.2.3mを測る。つまり両者の間には0.8mの高低差が存在する。この高低差は、２調査区南端で検出した2330－１濠と関係があったのではないかと推察できる。240溝は濠を埋め戻す際に、北が高く南が低い地形を利用して、濠の水を南へと排水するために掘削された可能性がある。そのために、濠の最終底面付近まで溝を掘り下げる必要があったのではないか。一方、濠の北側に位置する2101・2305溝に関しては、深く掘削せずとも水は自然に南へと排水される。以上のことから、１調査区と２調査区の区画溝は町境を示す役割は同じながらも、排水の目的からその底面標高に違いが見られるという結論に至った。

2101溝からは、土師質皿・甕・火鉢、瓦燈、炮烙、焼塩壷、瓦質火鉢、備前擂鉢、丹波擂鉢、肥前陶器碗・皿、肥前磁器碗・皿などが出土した。17世紀中頃の遺物が中心であるが、例えば肥前磁器二重網目文碗など、18世紀初頭頃の遺物も数点含む。また、鉄滓、羽口、砥石なども出土した。

図79－１は上部が欠損した土師質の瓦燈である。図79－２は肥前陶器三島手皿である。図79－３は肥

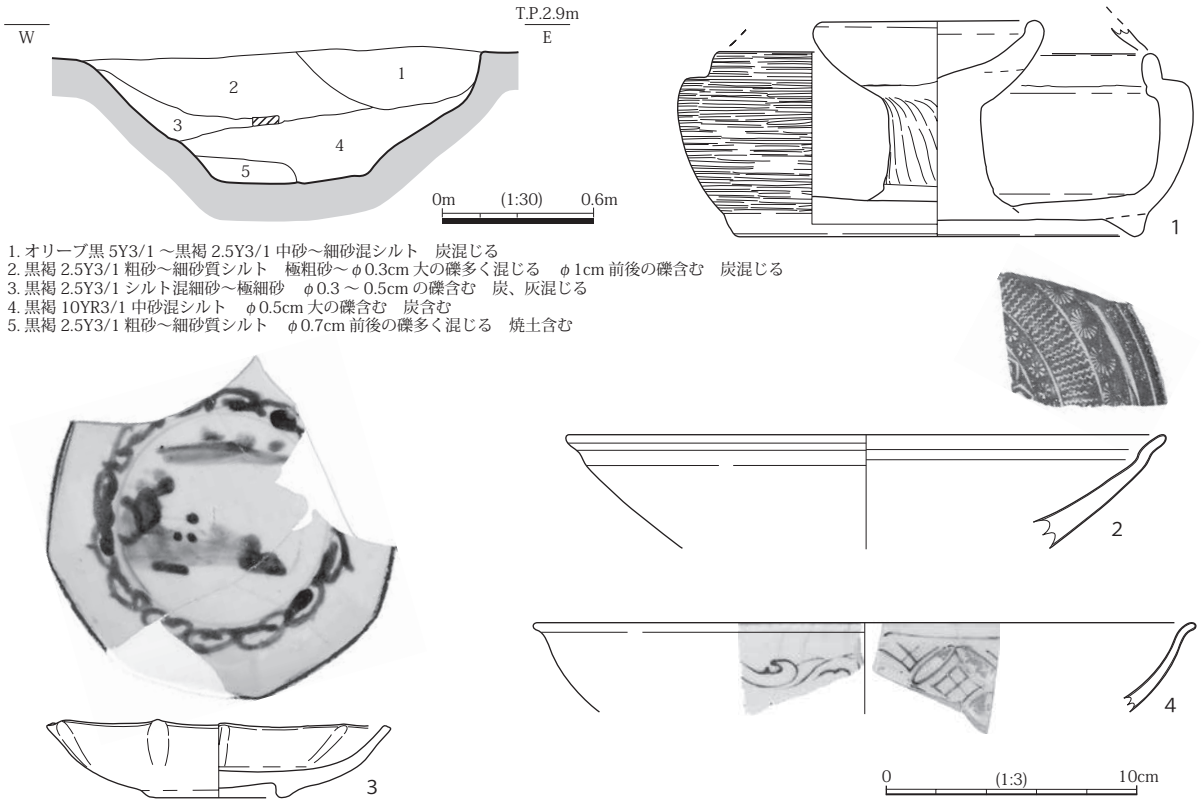


図79　第１面　2101溝　断面図、出土遺物

前磁器染付皿である。型打ち成形で、貼付高台をもつ。口紅装飾が施され、見込に崩れた山水画が描かれる。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。図79－４は古九谷様式の肥前磁器色絵皿である。緑色は銀化し赤色のみ遺存しており、外面に唐草文、内面に七宝繋文が描かれる。

一方、2305溝出土遺物は、器種・時期幅ともに2101溝と類似する。また、少量ではあるが、漆器椀、木製品（箸・板材）なども出土している。

2061土坑〔図77・80〕：調査区西側北端において、切り合う複数の土坑を検出した。建物裏側に掘削されていた廃棄土坑と考えられる。17世紀～18世紀にかけて繰り返し掘削されている。

2061土坑はその中でも大型の廃棄土坑で、長軸3.9m、短軸3.0m、深さ0.8mを測る。埋土は数枚に分かれるが、細礫と炭が混じるオリーブ黒色シルト質細砂が主体である。断面観察の結果、ある時期に規模を拡げて再掘削していることがわかった。

土師質皿・甕・火鉢、炮烙、瓦質火鉢・十能、瀬戸美濃天目茶碗、丹波擂鉢、備前擂鉢、呉器手・京焼風を含む肥前陶器、肥前磁器、仏飯器、水滴、瓦などが出土した。17世紀前半の遺物も含んでいるが、出土遺物の中心は17世紀中頃～後半にかけてのものである。また数点ではあるが、新しいものでは波佐見焼粗製皿や扇印のある備前徳利なども出土しており、18世紀にも機能していたと考えられる。

図80－１はベトナム陶器長胴壷である。胎土は緻密であるが、φ0.3㎝までの褐色砂粒を僅かに含む。内面は強いナデによって凸凹状を呈する。図80－２は丹波壷である。お歯黒壷かと思われるが、内面に鉄分の付着は認められない。図80－３は肥前磁器染付折縁皿である。見込部分を円凹状に窪ませている。円凹部分の大半は欠損しているため文様の有無は不明だが、円凹周囲には菊唐草文、口縁折縁部分には四方襷文が描かれる。全面施釉し、畳付は釉を剥ぐ。

2307土坑〔図77・81〕：調査区西端（絹屋町側）で検出した。長軸2.6m以上、短軸2.1m以上、深さ0.5mを測る。食物残滓など日常生活に伴う遺物が多量に出土しており、典型的な廃棄土坑である。特筆すべき遺物として糸巻具が出土しており、絹屋町という町名通り、絹屋の存在を示唆する資料である。

土師質皿・甕、炮烙、瓦質火鉢、備前擂鉢、丹波擂鉢・大平鉢、京焼風を含む肥前陶器碗・皿、白磁・

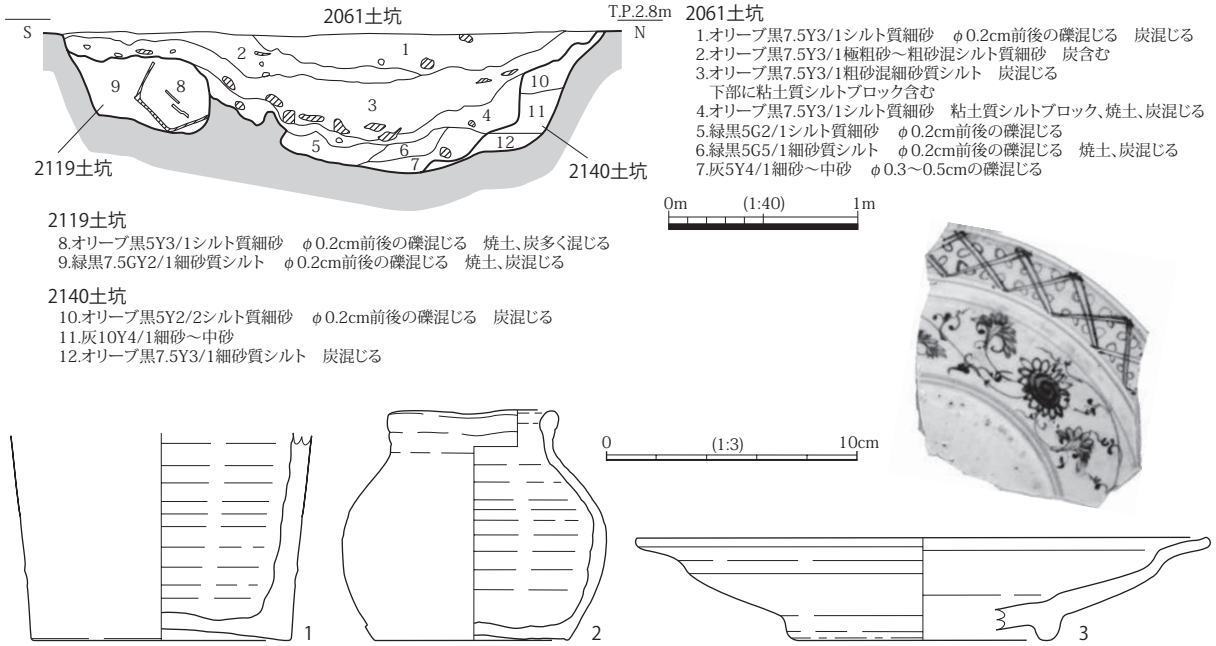


図80　第１面　2061・2119・2140土坑　断面図、2161土坑出土遺物

青磁を含む肥前磁器碗・皿、中国漳州窯赤絵碗、銅製の煙管など17世紀後半の遺物が中心に出土した。またその他にも、木製品（下駄・糸巻具・箸・板材・柄・桶材・折敷）、漆器椀、種子（ウリ科・マクワウリ）、魚のうろこ、骨１点（アマダイ）なども出土している。

図81－１は肥前内野山窯陶器碗である。銅緑釉を施し、高台は露胎である。図81－２は肥前陶器呉器手碗である。見込が広く、大振りの碗である。図81－３は肥前陶器三島手溝縁皿である。図81－４は肥前磁器染付碗である。口縁部を上方へ立ち上げやや内傾させており、天目茶碗を意識したものであろうか。胴部外面に竹文を描くが、呉須の発色は濃く紺色に近い。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。図81－５は肥前磁器染付仏飯器である。杯部高が器高の1/2以上を占めている。口縁部は端反る。高台内の刳り込みは浅く、無釉である。外面に唐草文が描かれる。二次焼成を受けており表面は乳白色を呈する。図81－６は肥前磁器香炉である。高台内の削りは高台脇より若干深い。外面は鉄化粧の後、鉄釉を掛け流して文様とする。内面には鉄化粧が垂れ込んでいる。高台は無釉である。図81－７は肥前白磁小杯である。口縁部は先細り、やや端反る。高台脇を削り出し、そこから高台内は無釉である。図81－８は漆器皿である。朱漆が全面に塗られ、金蒔絵が内面に施される。図81－９は角型の陰卯下駄である。部分的に漆が遺存する。これまでの近世の調査によると、近世初頭以前に陰卯下駄は一旦廃絶し、その後近世のある時期に再び出現し露卯下駄に取って変わる、と考えられている[1)]。後述する第１－２面検出の2343廃棄土坑は17世紀中頃まで機能していたと考えられるが、陰卯下駄は１点も出土していない。しかし2307土坑では出土していることを勘案すると、17世紀後半頃には陰卯下駄は再登場していたと推測できる。図81－10は曲物の底である。図81－11～14は木製の糸巻具である。13は２つの横木が組み合わさったものである。11・12は枠木と呼ばれる。今回出土した糸巻具は、組み合わせた横木で数本の枠木を固定し、そこに糸を巻きつけて使うタイプの糸巻具と考えられる。11の枠木には、「泉屋」と墨書が残る〔図版16左２〕。絹屋の屋号であろうか。残念ながら、元禄大絵図には泉屋という名は記されていない。13〔図版16右１〕・14の横木には「庄左衛門」と墨書が残る。図81－15・16は木製の刷毛である。どちらも柾目材からつくられる。先端に毛を固定するための２条の溝と孔が設けられている。図81－17は巴文と小粒の珠文で文様構成される軒丸瓦である。丸瓦部には穿孔がみられる。

2350土坑〔図77・82〕：調査区北端で検出した、長軸1.2m、短軸0.85m、深さ0.16mの廃棄土坑である。土師質皿・甕・擂鉢、須恵器蓋、瓦質羽釜、肥前陶器碗・溝縁皿、中国磁器碗、瓦などが出土している。17世紀前半の遺構である。図82－17は中国漳州窯磁器染付碗である。外面には唐草文を描き、全面施釉する。細かい砂が畳付に付着する。

2066土坑〔図77・82〕：調査区北端で検出した、長軸0.4m以上、短軸0.35m、深さ1.0mの廃棄土坑である。埋土はオリーブ色シルト質細砂からなり、φ0.2㎝前後の礫、粘土質シルトブロックを含む。土師質甕、炮烙、焼塩壷、肥前陶器鉢、肥前磁器一重網目文碗などが出土しており、17世紀後半頃の遺構と考えられる。図82－３は焼塩壷である。口縁部は欠損する。輪積み成形で、胴部内面には粘土帯巻き上げの際の絞り目が残る。外面は縦方向に強くナデ、面取り状になる。胴部に「御塩壷師／堺湊伊織」と刻印が残る。１調査区では「天下一御壷□／堺見なと伊□（織ヵ）」、「天下一堺□／藤左□」という刻印をもつ焼塩壷が出土したが、1682年に天下一の号の禁令が発せられ、それ以降「天下一」という称号が外されることになる。よってこの焼塩壷は1682年以降に生産されたものである。

2063土坑〔図77・82〕：調査区北側で検出した錯綜する土坑群の一つである。他の土坑を切っていることから、最終段階に掘削されたものと考えられる。長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。埋土

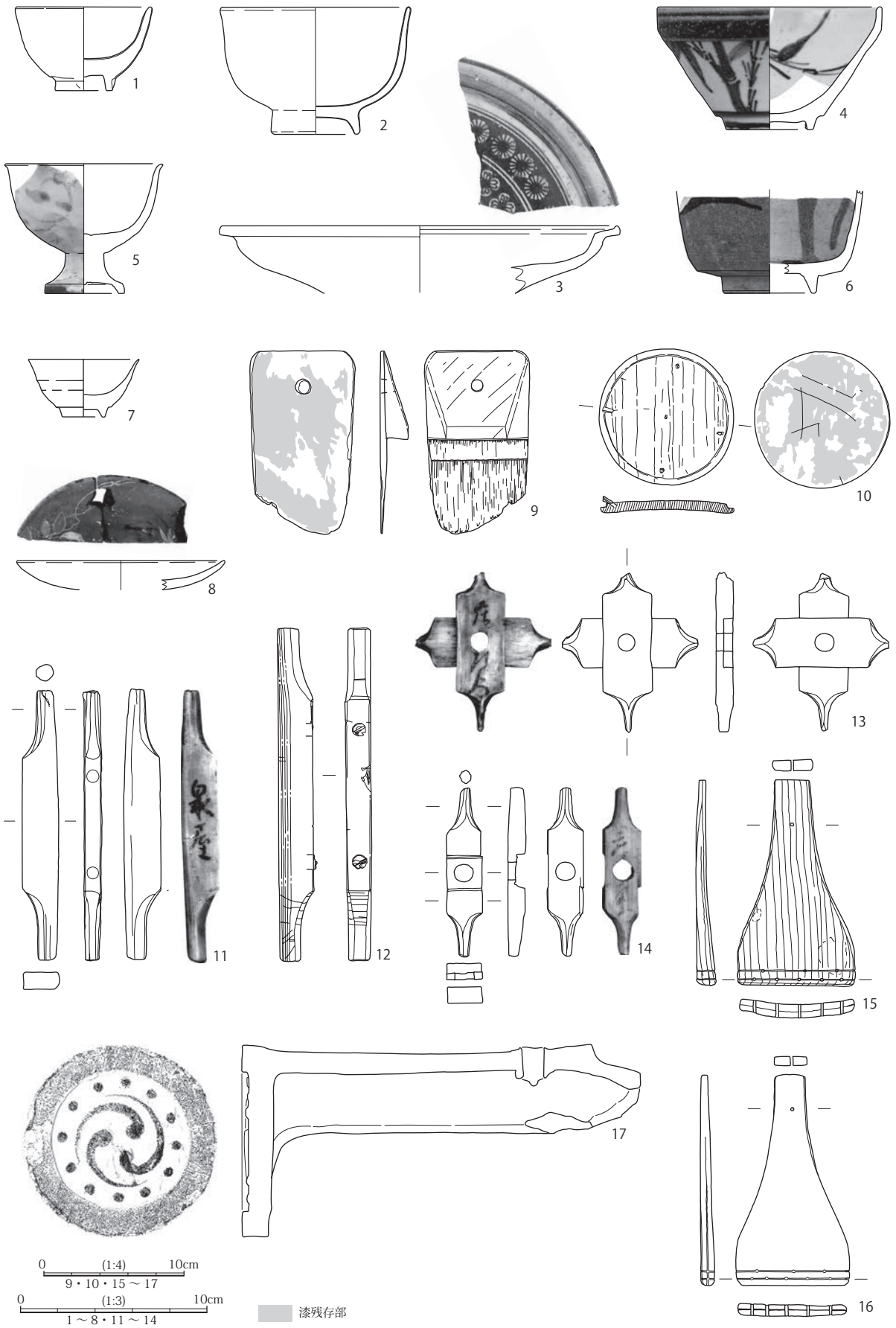


図81　第１面　2307土坑出土遺物

は黒色シルト質細砂からなり、炭、焼土、木片などが混じる。土師質皿・火鉢、炮烙、備前壷、丹波擂鉢、施釉陶器鬢水入れ、肥前磁器一重網目文碗、瓦などが出土した。18世紀前半の遺構と考えられる。図82－10は肥前陶器三耳壷である。叩き成形で、内面に同心円文の当て具痕が残る。明瞭な頸部をもち、肩部に沈線を施す。口縁部は上端を強くナデ、Ｔ字状を呈する。外面と口縁部内面に鉄釉が掛けられ、肩部外面には部分的に灰釉を掛け流している。また、外面には自然釉がみとめられる。

2359土坑〔図77・83〕：調査区北端で検出した、長軸0.5m以上、短軸0.5m、深さ0.15mの土坑である。土師質皿・甕・火鉢、大和型土堝、炮烙、焼塩壷、須恵器、瓦質火鉢・羽釜、備前擂鉢、肥前陶器碗・皿、骨製円盤、瓦などが出土している。遺物が比較的古いものであること、肥前磁器は１点も含まれないことから、中世末～近世初頭にかけての遺構と考えられる。図83－２は骨製円盤である。加工されているため骨の同定はできなかった。碁石もしくは駒として使われたのであろうか。骨製の双六の駒は、16世紀末～17世紀初頭の大坂城下町で出土例がある。

2032土坑〔図77・82〕：少林寺団地による撹乱を取り除いて検出した遺構である。よって上部は削平されている可能性がある。現状では長軸1.0m、短軸0.85m、深さ0.1mの隅丸方形土坑である。埋土は暗オリーブ色細砂からなり、炭、焼土を含む。コビキＢを含む丸瓦・平瓦が多く出土し、何点かは被熱している。その他は土師質甕、備前擂鉢・壷、丹波大平鉢、肥前陶器碗（もしくは鉢）が出土した。肥前磁器は含まれないことから、17世紀初頭までの遺構である可能性が高い。図82－４は丹波大平鉢である。図82－５は備前壷である。口縁部は丸くつまみ出し、先端を少し垂れ下がり気味に調整する。口縁の大部分を欠損するため正確な傾きは不明だが、おそらく頸部は内傾していたものと思われる。口縁部外面には自然釉がみとめられる。中世の古い段階の壷であろう。図82－６は、備前擂鉢である。８～９条のクシ状工具で斜めに擂目を施す。乗岡編年近世１期に属する。

2089土坑〔図77・82〕：調査区北側で検出した、長軸2.5m、短軸2.4m、深さ0.6mの円形の廃棄土坑である。明治時代の遺構によって土坑中央部分は撹乱を受ける。埋土はオリーブ黒色シルト質細砂からなり、φ0.2㎝前後の礫が混じる。土師質皿・鉢・堝、炮烙、瀬戸美濃香炉、備前建水か・甕、丹波甕、京焼風を含む肥前陶器碗・皿・瓶、肥前磁器染付碗・小杯・青磁碗・上絵碗、ベトナム陶器長胴壷、中国磁器染付碗、砥石、瓦などが出土した。肥前磁器には印判手・蛇の目釉剥ぎも含まれることから、18世紀前半の遺構と考えられる。図82－12は瀬戸美濃香炉で、外面の胴部～口縁部にかけて鉄釉が施される。図82－16はベトナム陶器長胴壷である。

2227土坑〔図77・82〕：少林寺団地による撹乱を除去した面で検出した遺構である。よって上部は削平されている可能性が高い。現状では長軸１m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は極粗砂混じりのオリーブ黒色粗砂～細砂からなる。出土遺物は少なく、土師質甕片、瀬戸美濃皿、中国磁器染付皿の３点が出土した。出土遺物が少ないため時期決定は困難であるが、中世末～近世初頭の遺構である可能性がある。図82－11は瀬戸美濃皿である。碁笥底状で高台内の削りも浅い。灰釉を全面施釉し、見込を釉剥ぎする。高台内には輪ドチ痕が残る。図82－19は中国景徳鎮窯磁器染付皿である。高台内には放射状の削りが顕著である。見込に車輪文、その周囲に花文を描き、全面施釉する。細かい砂が畳付に付着する。

2055埋甕〔図77・82・83〕：少林寺団地による撹乱を除去した面で検出した遺構である。埋甕上部は削平されており、本来の掘り込み面は不明である。現状では掘り方は長軸0.55m、短軸0.5m、深さ0.15mを測る。埋甕は土師質で、底径0.43mを測る。埋甕内埋土は２枚にわかれ、上層は黒褐色シルト

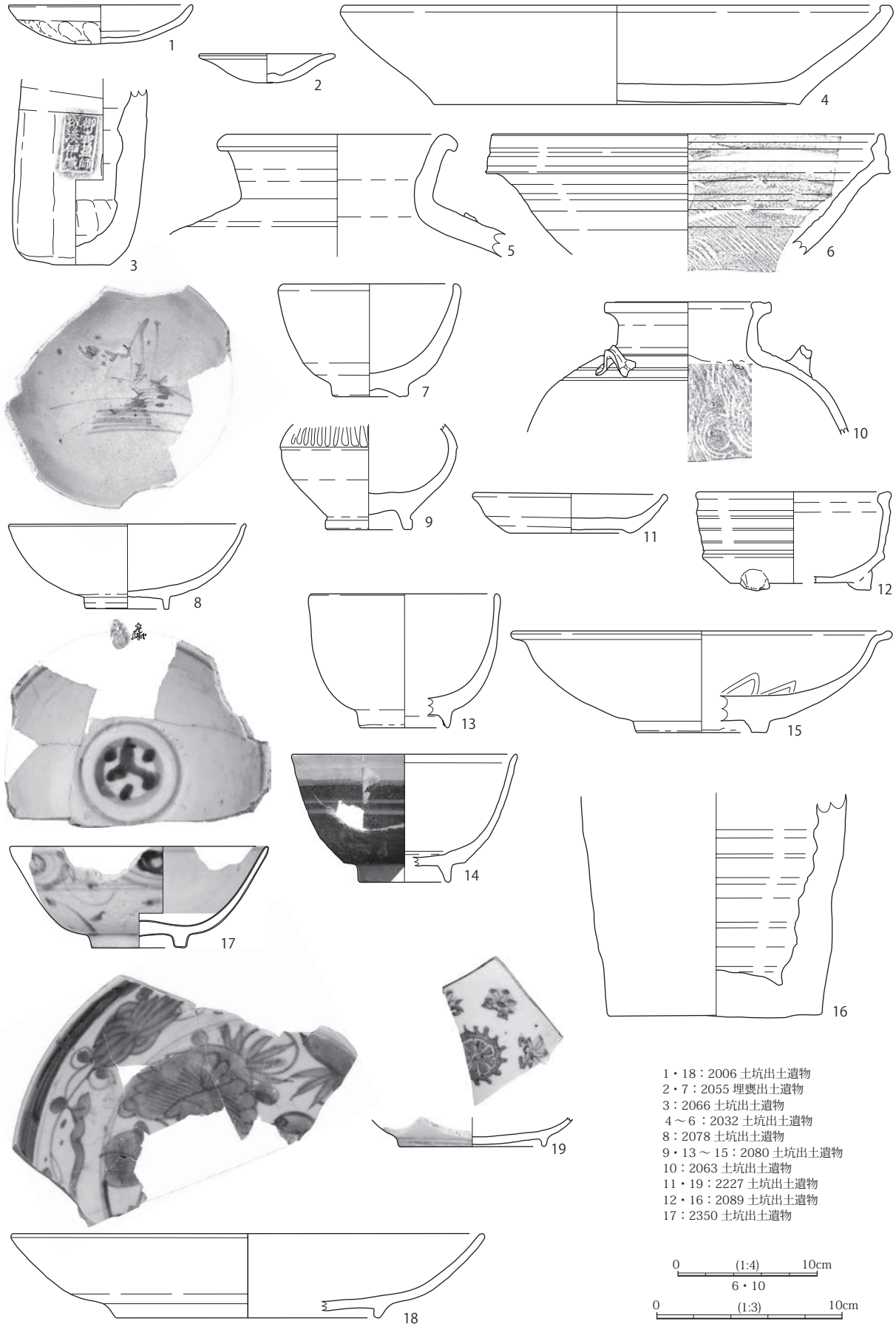


図82　第１面　遺構出土遺物（１）

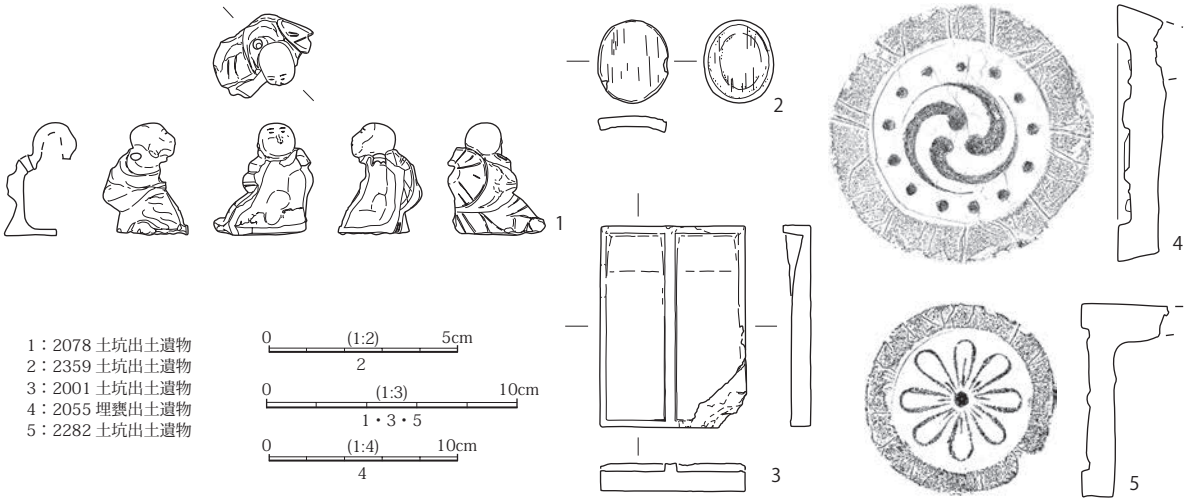


図83　第１面　遺構出土遺物（２）

質細砂、下層は灰色極細砂質中砂～極粗砂である。上層からは甕上部と思われる土師質甕胴部片が多く出土した。その他、土師質皿、瓦質火鉢、肥前陶器皿・碗、軒丸瓦が出土している。土師質皿、軒丸瓦には被熱痕が認められる。出土した肥前陶器碗は大橋編年Ⅱ期に属することから、17世紀前半の遺構と考えられる。図82－２は土師質皿である。口縁端部の内・外面はナデ、見込は強くナデて、へそ皿状につくる。胎土は緻密、焼成は良好である。図82－７は肥前陶器灰釉碗である。高台は露胎で、明瞭ではないが兜巾が残る。図83－４は軒丸瓦である。やや小振りの巴文と小粒の珠文で文様構成され、瓦当面裏側はユビオサエの後ヘラナデ調整を行う。二次焼成によって表面は浅黄橙に変色しており、瓦当面中央にはススが付着する。

2001土坑〔図77・83〕：調査区東側で検出した方形の土坑である。長軸1.3m以上、短軸1.2m、深さ1.6mを測る。土師質皿・火鉢、炮烙、十能、瓦質火鉢、堺擂鉢、肥前陶器、肥前磁器、道具瓦を含む瓦類、砥石などが出土している。肥前磁器には印判手、二重網目文、蛇ノ目釉剥ぎが含まれており、18世紀中頃以降の遺構と考えられる。図83－３は黒色頁岩製双履硯である〔図版17右１〕。向かって左側の海（墨や水を溜める部分）には、かすかにではあるが朱色が遺存しており、左側で朱色、右側で黒色の墨を使い分けていたのであろう。

2006土坑〔図77・82〕：調査区東側で検出した不定形の土坑である。長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.15mを測る。土師質皿・火鉢、肥前磁器染付碗・青磁香炉・白磁碗、中国漳州窯磁器染付碗・皿、煙管、砥石などが出土している。17世紀中頃～後半にかけての遺構と考えられる。図82－１は土師質皿である。内面・口縁部外面はナデ調整を行い、底部には指頭圧痕が顕著である。図82－18は中国漳州窯磁器染付大皿である。見込に花鳥文を描き、全面施釉する。粗い砂が畳付に付着する。

2080土坑〔図77・82〕：調査区西側で検出した、長軸3.2m以上、短軸1.4m、深さ0.5mの土坑である。主軸はN−127°−Eで、近世地割りに平行する。下位の遺構面においても、同じ位置で同じ方向に広がる遺構（2290溝）を検出している。埋土はオリーブ黒色シルト質細砂からなり、炭、φ0.2㎝前後の礫を含む。土師質皿・甕・火鉢、炮烙、瓦質火鉢、備前建水か、丹波擂鉢、肥前陶器皿・碗・壷、肥前磁器染付碗・小杯・青磁碗・白磁皿、平瓦などが出土した。17世紀中頃～後半にかけて機能していたと考えられる。図82－９は肥前陶器壷である。高台内の刳り込みは深く、高台脇には削り込みを入れ段をつ

くる。鉄釉で全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。17世紀第２～第３四半期のものであろう。図82－13は肥前青磁碗である。全面施釉し、畳付を釉剥ぎする。図82－14は肥前青磁碗である。内面と口縁部外面は青磁釉、胴部外面は鉄銹釉の掛け分けがなされており、鉄銹を拭い２条の圏線を施す。高台脇を平らに削り、高台は無釉である。図82－15は肥前青磁皿である。焼成不良のため釉薬が青く発色せず、灰白を呈する。波佐見焼の可能性が高い。見込には連弁文が線刻される。全面施釉し、畳付を釉剥ぎする。

2078土坑〔図77・82・83〕：調査区西側で検出した、長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.25mの円形の土坑である。埋土は炭が混じるオリーブ黒色細砂質シルトで、瓦の出土が目立った。その他、土師質皿・甕・火鉢、炮烙、備前擂鉢・甕、肥前陶器甕（格子タタキ）、肥前磁器染付碗・皿・小杯、京焼水滴、馬形の土人形が出土した。17世紀後半の遺構と考えられる。図82－８は肥前陶器京焼風皿である。見込に山水画が描かれ、高台内には「木下弥」の刻印が残る。高台は露胎である。図83－１は笠を背負った人形の水滴で、京焼きの型作りである。肩部分に穿孔する。眉、目、口を鉄釉で表現し、透明釉を施す。底部は露胎である。

2282土坑〔図77・83〕：調査区南側で検出した、長軸1.0m以上、短軸1.0m以上、深さ0.2mの方形の土坑である。埋土は粗砂混じりの黒色粘土質シルトからなる。土師質皿・甕・火鉢・堝、炮烙、瓦質火鉢、丹波徳利、肥前陶器碗・瓶、印判手を含む肥前磁器染付碗・皿・香油壷・外青磁碗、白磁碗、堺擂鉢、瓦が出土した。18世紀中頃の遺構と考えられる。図83－５は菊丸の棟込瓦である。瓦当面直径は7.6cmを測る。

2090埋甕、2091・2092・2093土坑〔図77・84〕：旧少林寺団地による撹乱を除去した面で検出した。４基が連なる形で検出された土坑群であるが、削平されており、本来の掘り込み面は不明である。2090埋甕、2091・2092土坑は切り合い関係にあり、2091土坑が一番新しい遺構である。一番南側の2093土坑については、掘り方が明確ではなく、その他の土坑と比べて非常に浅いこともあり、性格不明である。

2090埋甕は底径約0.3mの土師質の埋甕で、撹乱によって上部は削平されている。埋甕下部の側面には明黄褐色粘土が貼られており、この粘土で埋甕を固定していたと考えられる。埋甕内埋土からは同質の甕片が数点出土しただけで、時期特定に至る遺物は出土しなかった。

掘り方確認のため掘り下げたところ、その下から埋甕抜き取り土坑を検出した。底面には灰黄色粘土

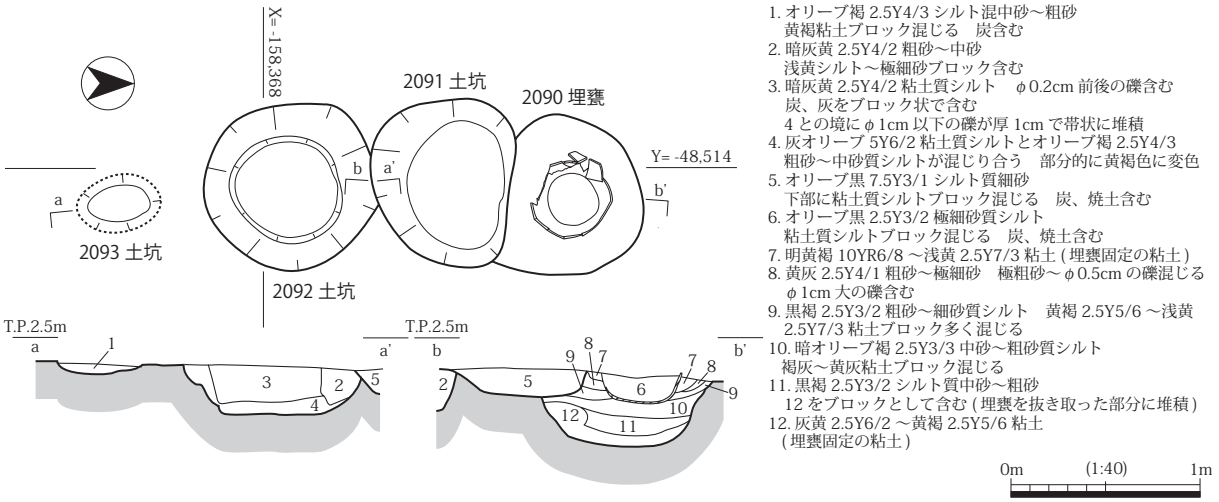


図84　第１面　2090埋甕、2091・2092・2093土坑　平・断面図

を厚さ６㎝程敷き詰め、これで埋甕を固定していたものと考えられる。建物の建て替えなどに伴い、古い埋甕を抜き取った穴を埋め、その上に新しい埋甕を据えたのであろう。１調査区においても重複する埋甕が検出されており、同じ位置に同じ用途を持つと考えられる埋甕を据え直している。この2090土坑についても同様のことが行われていたと推察できる。

2092土坑は埋甕の抜き取り土坑である。土坑底部埋土は粘土質シルトと中砂～粗砂質シルトがブロック状で入り混じったものからなる。その上面にはφ１㎝以下の礫が帯状（幅１㎝）に敷かれていた。埋甕固定に使われたものであろうか。土師質皿・甕、瓦質火鉢、平瓦、焼土塊が出土した。

2091土坑の埋土はシルト質細砂からなり、黄褐色粘土ブロックが多く混じる。土師質皿・甕片が出土した。この土坑の性格は明確ではない。しかし上記のように重複して埋甕を据えていることを勘案すると、埋甕抜き取り土坑である蓋然性が高い。

さて、2090埋甕・2091～2093土坑は2123建物敷地内に位置している。しかし遺構上部は削平されており、検出面は2123建物よりも0.6m近く低い。よって、2123建物と直接の関係はないものと考えられる。これらの土坑群の正確な時期は明らかにできなかったが、その検出面標高から中世の遺構である可能性もある。

第１面包含層〔図85〕：近世町屋の整地層からの出土遺物である。土師質、瓦質、備前、肥前陶磁器などが中心に出土しているが、その多くは小片であった。整地の際の補強材的な役割を担っていた可能性もある。図85には図化可能な遺物を掲載する。１は土師質の土錘である。胎土にはφ１㎜以下の砂粒を含み、硬く焼き締まっている。近代のものである可能性もある。２は輪積み成形の焼塩壷である。３は釣鐘型のタコ壷である。内面のナデ調整、均質な胎土、また焼成が非常に良いことから、近世のものと考えられる。４は備前火入れである。５は肥前陶器灰釉鉢である。見込は茶溜り状に凹む。口縁部内面には鉄釉を施す。高台は露胎である。６は中国景徳鎮窯染付皿である。小野編年Ｂ群に属する。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。畳付脇には粗い砂粒が付着する。７は寛永通宝である。

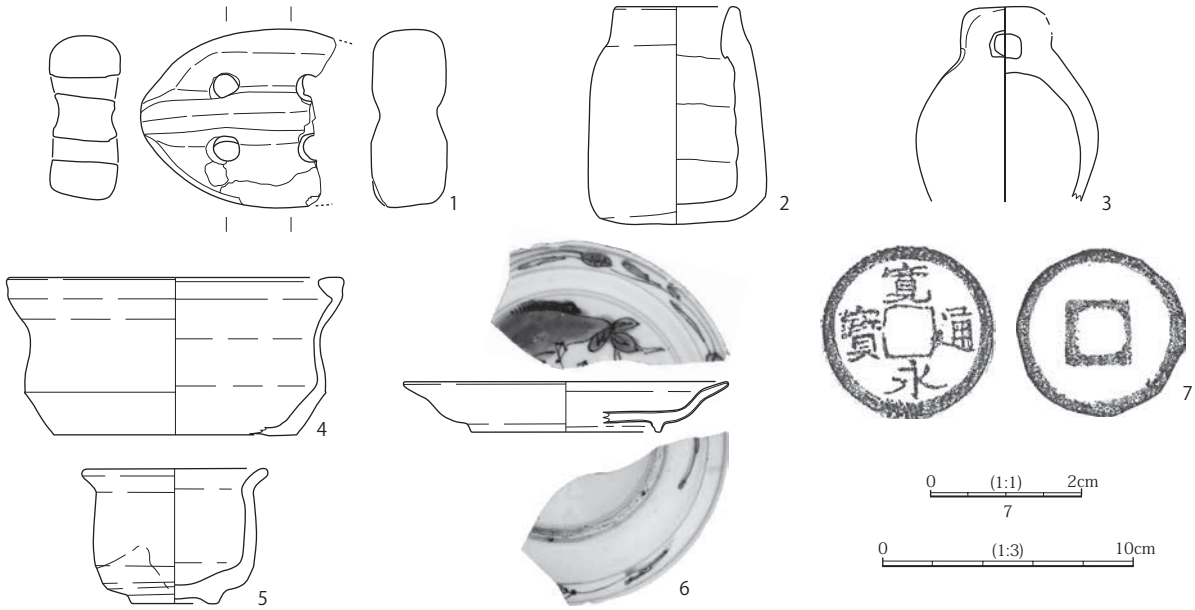


図85　第１面　包含層出土遺物

第１－２面〔図86・91〕

第１層を除去して検出される面である。調査の都合上、北と南に分けて調査を行った。図86は調査区北側で検出した近世初頭の遺構面である。検出面標高はT.P.2.7～2.8mであった。調査区東側では完形の土師質甕、土坑、礎石を検出した。一方、調査区西側については整地の単位が不明僚であったため、近世遺構の見落としを防ぐことを目的とし、任意で0.1～0.2m下げた面を第１－２面として調査を行った。検出面標高はおおむねT.P.2.6mである。以上の理由から、東側と西側の遺構面が同時期のものであるとは言い切れない。

図91は調査区南側で検出した近世初頭の遺構面である。赤色で示す遺構を調査後、整地層を掘り下げ、黒色で示す遺構を検出した。上位の遺構検出面の標高はT.P.2.5mであった。２条の粘土帯と土坑を確認した。一方、下位の遺構検出面の標高はT.P.2.2～2.3mであった。土坑、礎石建物、大型廃棄土坑を検出した。

整地層が複雑に切りあっているため、北と南で面の統合が果たせていない。よって以下に北と南にわけて概要を記す。

第１－２面北〔図86〕

2172礎石〔図86・87〕：調査区西側で検出した、一石五輪塔転用の礎石である。岩片を多く含む不均質砂岩製である。摩滅が著しく、碑銘は判読しがたい。「妙□位／□□□」。

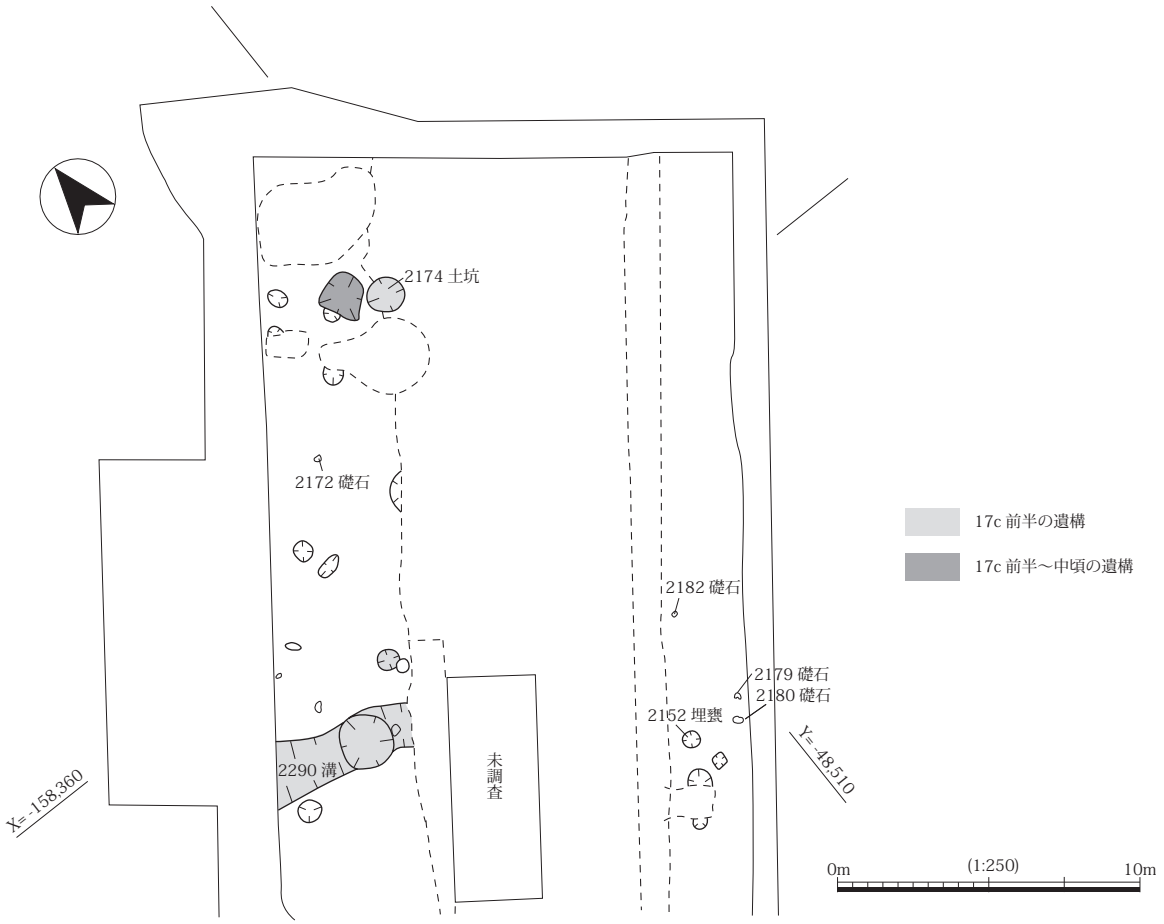


図86　第１－２面　北　平面図

図87　第１－２面　北　2172礎石

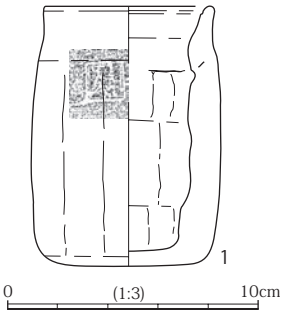


図88　第１－２面　北　2174土坑出土遺物

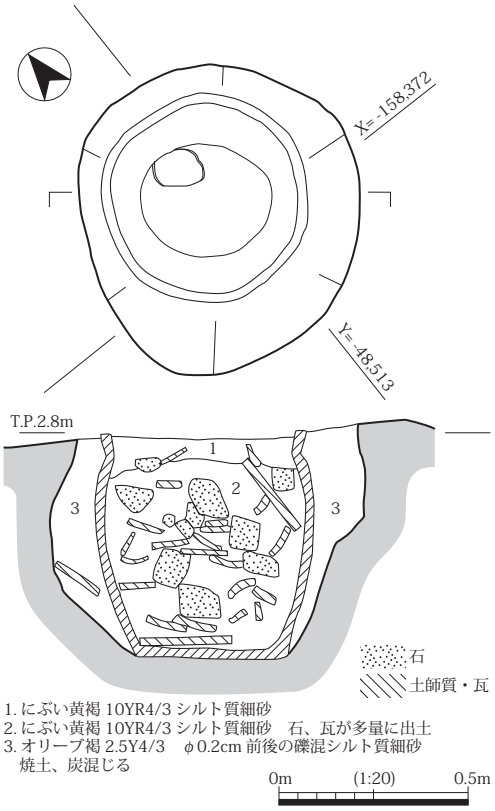


図89　第１－２面　2152埋甕　平・断面図

2174土坑〔図86・88〕：調査区西側で検出した、直径1.2m、深さ0.5mの円形の土坑である。埋土は黒褐色シルト質細砂からなり、細礫、焼土、炭を含む。建物裏側に掘削されていた廃棄土坑と考えられる。土師質皿・甕、焼塩壷、備前甕、肥前陶器皿（大橋編年Ｉ－１期）、布目・コビキＢを含む瓦などが出土した。肥前磁器の出土はなかった。17世紀初頭の遺構と考えられる。図88－１は焼塩壷である。銘は不明瞭ではあるが、ほぼ正方形の刻印が胴部に残る。

2152埋甕〔図86・89〕：調査区東側では完形の埋甕を検出した。底径0.4m、高さ0.6mの土師質甕で、底部隅に直径0.1m程の孔が設けられている。胴部外面上半には左上がりのタタキ痕が残り、内面は粗いハケメ調整を行う。内面一面に黄白色の付着物が見られた。埋甕内埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂からなり、瓦、土師質甕片が多量に出土した。また直径10㎝大の石が数点含まれ、そのうちの１点は一石五輪塔であった。一方、掘り方は0.7×0.8mの不整円形で、埋土はφ0.2㎝前後の礫が混じるオリーブ褐色シルト質細砂からなる。埋甕固定のための粘土は検出されず、素掘りの土坑の中央に直接甕を据えている。掘り方埋土からは土師質甕、炮烙、肥前陶器皿、軒平瓦、焼土塊が出土した。

2290溝〔図86・90〕：主軸はN−127°−Eである。溝の幅は1.5〜1.8mを測る。西側は調査区外へ、東側は旧少林寺団地の撹乱で消失しているため、全長は不明である。埋土は複数枚に分かれるが、黒褐〜黄褐色中砂〜粗砂質シルトが主体である。木片が多量に出土した。なお、図90の断面図１〜５は、上位の遺構面で検出した2080土坑の掘り残しの可能性がある。

土師質皿・甕・火鉢、瓦質火鉢、丹波擂鉢、瀬戸美濃碗、肥前陶器碗・皿・瓶、肥前磁器染付碗、中

国磁器染付碗、布目・コビキＢを含む瓦、煙管などが出土している。図90－１は肥前内野山窯陶器碗である。高台内の削りは浅い。灰釉が施され、高台は露胎である。図90－２は肥前陶器溝縁皿である。灰釉が施され、高台は露胎である。崩れて広がった砂目跡が４ヶ所みとめられる。図90－３・４は瀬戸美濃皿である。どちらの皿も鉄釉で文様が施される。高台内の刳り込みは浅いが、高台脇はしっかり削り明瞭な高台をつくる。目積み跡が残る。図90－５は丹波擂鉢である。７条のクシ状工具で擂目を施す。外面は指頭圧痕が顕著である。図90－６は肥前磁器染付碗である。外面は鎬状に削り込み、花文で区割りをする。全面施釉し、畳付を釉剥ぎする。図90－７は肥前磁器染付筒形碗である。外面には草花文が描かれる。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。図90－８～10は中国景徳鎮窯磁器である。

第１－２面南〔図91〕

２条の粘土帯〔図91〕：調査区東側では、幅約0.1mの粘土帯を２条検出した。主軸はN-127°-Eで、第１面検出の建物と同軸である。粘土帯は粗砂混じり黒色シルト質粘土からなり、粘土帯間は約1.6mを測る。第１面検出の敷地とは異なり、敷地内をシルト質粘土で固めるといった整地が認められない。

2347カマド跡〔図91〕：先述した２条の粘土帯のうち、南側の粘土帯から南へ約２ｍの間では黄褐色粘土で固く締まる整地層を確認した。建物敷地であったと考えられる。敷地内では2347カマド跡を検出

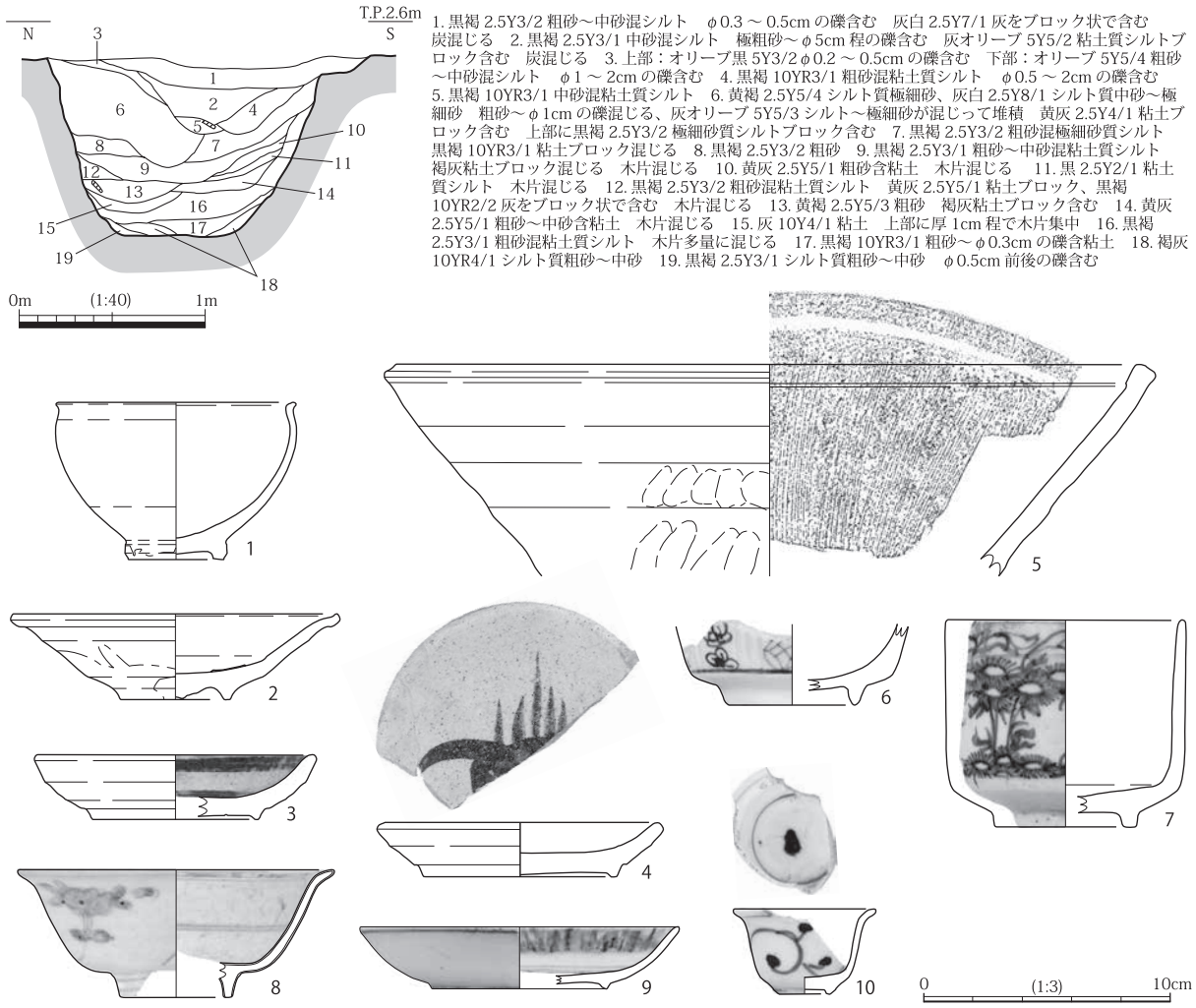


図90　第１－２面　2290溝　断面図、出土遺物

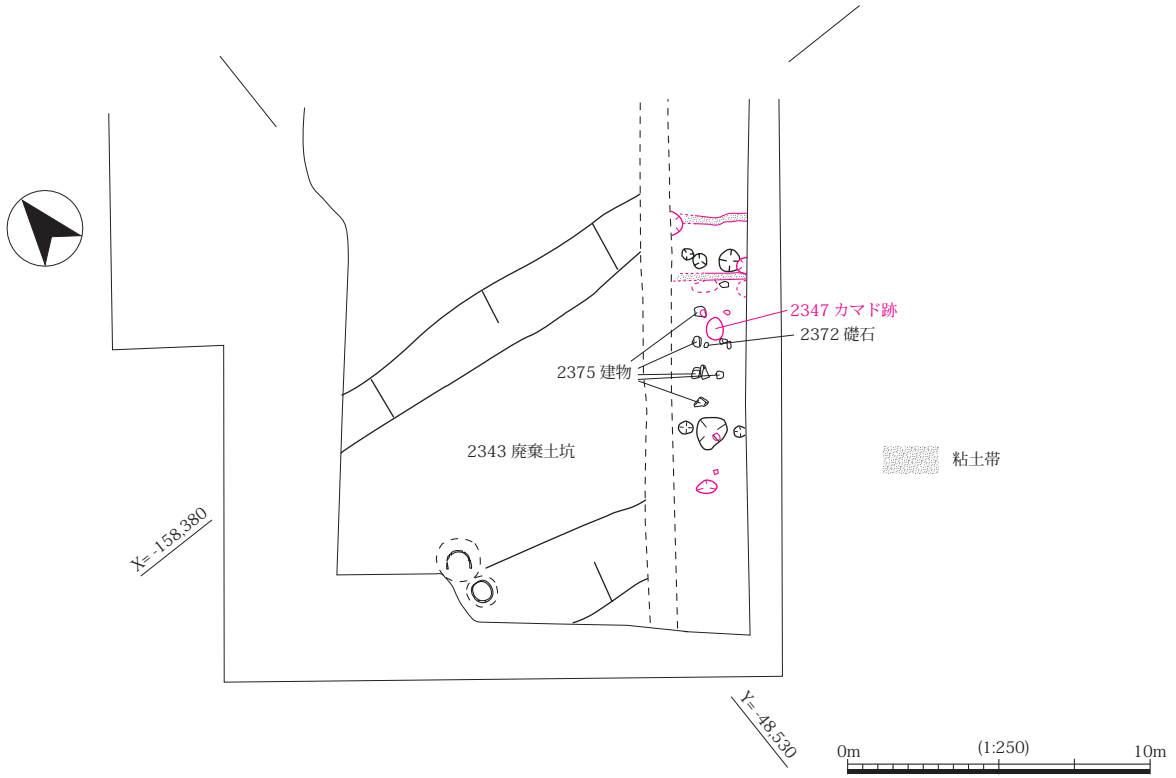


図91　第１－２面　南　平面図

した。カマドは取り壊されており、周辺にはカマド構築材、焼土、灰、炭が混じったものが広がっていた。それらを除去したところ、カマド底面がわずかに遺存しており、極粗砂を含む淡黄色粘土で構築されていたことが確認できた。カマドの大半は取り壊されており、はっきりと確認できたわけではないが、遺存する構築粘土の形状から２連のカマドであった可能性がある。

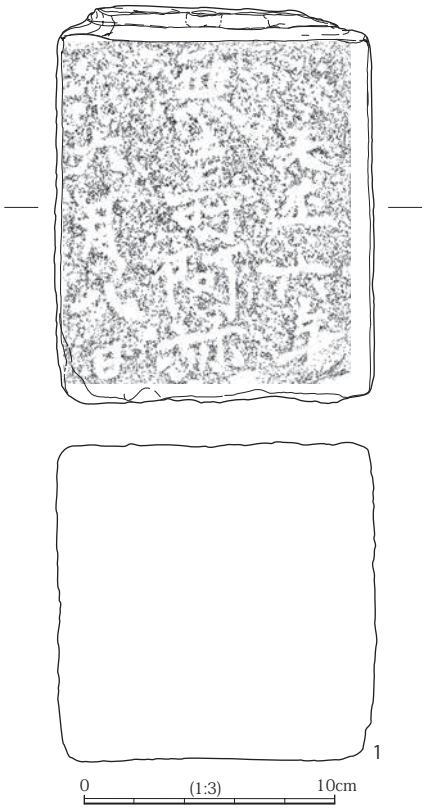


図92　第１－２面　南　2372礎石

2372礎石〔図91・92〕：一石五輪塔の転用である。「天正六年／無嘉阿弥／六月八（廿カ？）日」と碑銘が残る。

2375礎石建物〔図91・９・93〕：近世町屋の表側にあたる調査区東側で検出した。近世地割りに沿って建てられている。N−37°−Eに並ぶ礎石４基（心々間約1.0m）、N−127°−Eに並ぶ礎石２基（心々間約0.8m）を確認した。後述する2330－１濠を埋め戻した後に建てられたものである。埋め戻しには粗砂含む明黄褐色シルト質粘土を用いており、0.6mもの層厚であった（図９－85〜111）。おそらくは地盤沈下を意図した地業であろう。断面観察の結果、木製の杭で粘土を土留めしていたことがわかった。

整地層からの出土遺物は少なく、図化可能なものを図93に掲げた。実測遺物は図９－94から出土したものである。１は土師皿である。底部には指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ、内面はナデを施す。口縁部にはわずかに油煙が付着する。２はコビキＢの丸瓦である。外面はヘラ状のもので強く縦方向にナデ、面取り状に

なる。

2343廃棄土坑〔平面図：図91、断面図：図118、遺物：図94～図101〕：2375礎石建物の裏側で検出した大型廃棄土坑である。2330－１濠を埋め戻さずに、廃棄の場として利用したものと考えられる。埋土は中礫が混じるオリーブ黒～黒色細砂質シルトからなる。多量の木片（木っ端など）を含んでいた。

2343廃棄土坑は、平面上ではその存在を確認することができず、断面で確認した埋土の広がりを基に平面図を作成した。また、2375建物との切り合い関係であるが、東西方向の断面を残せなかったため確認ができなかった。調査区東側のサブトレンチ（図91で点線で囲っている部分）の西側断面では2343廃棄土坑堆積層が、東側断面では建物建設のための整地層が観察できた。よって、幅１ｍほどのサブトレンチ内で、廃棄土坑と建物整地層は切り合っていたものと考えられる。

2343廃棄土坑出土遺物については後述するが､その前にこの廃棄土坑の埋没時期について検討したい。1689年の元禄大絵図には、2343廃棄土坑のような大型土坑の存在は描かれていない。つまり17世紀後半にはこの廃棄土坑は埋め戻され、近世町屋へと変貌を遂げたことになる。実際、廃棄土坑からは17世紀前半の遺物が集中して出土しており、新しいものでも17世紀中頃までの範疇におさまる。

陶磁器、木製品、食物残滓など多量の遺物が出土した。また、元々は水を湛えた濠であったところに廃棄しているためか、木製品の遺存状態も良好であった。出土量が多いため、個々の実測遺物については遺物観察表を参照されたい。以下に、出土遺物内容別にまとめる。

土師質・瓦質土器〔図94〕 土師質皿・甕・鉢・火鉢・羽釜・擂鉢、焼塩壷、焼塩壷蓋、炮烙、十能、瓦質火鉢・羽釜などが出土した。出土遺物の内容は、２調査区で検出した他の近世廃棄土坑と同様であり、日常生活に伴う遺物が多い。

肥前陶器〔図95－１～12〕 碗・皿・小杯・片口鉢・擂鉢などが出土した。碗と皿の出土量に目立った差はない。胎土目積みの陶器も含まれるが、量が多いのは砂目積みのものであった。出土した肥前陶器の時期は、いずれも17世紀前半までにおさまる。珍しい遺物として、１は内面に鉄釉、外面に灰釉の掛

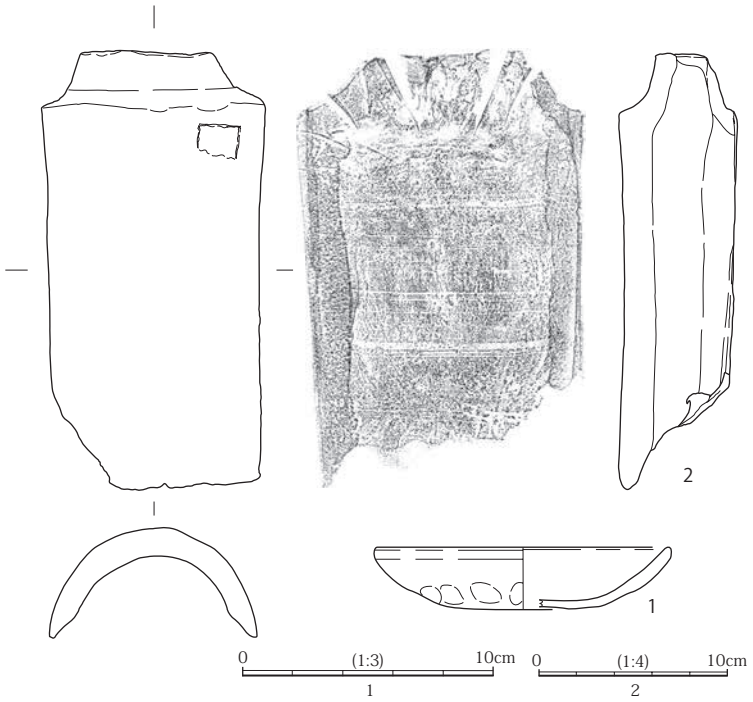


図93　第１－２面　南　整地層出土遺物

け分けがなされた碗である。外面には鉄釉で文様を描く。高台は露胎である。また、５の皿の内側には葦草文鉄絵が描かれ、全面施釉される〔図版14右１〕。磁器を意識したものであろうか。見込には４ヶ所の砂目跡が残る。７は灰釉皿である。高台は露胎である。口縁の３ヶ所を内側に折り込み、見込は円凹状に深く刳り込む。砂目積みである。11は片口鉢である。被熱しており表面が発砲しているが、元々は灰釉が施されていたと考えられる。

瀬戸美濃〔図95－13～20〕 計10点出土した。今調査において、瀬戸美濃がまとまって出土したのはこの2343廃棄土坑だけであった。出土したのは天目茶碗・鉢・瓶が１点ずつ、それ以外はすべて皿であった。13は天目茶碗である。鉄釉が施され高台は露胎である。14～18は皿である。14・15は灰釉のみを施釉、16～18には鉄絵で文様が描かれる。出土した皿は、すべて目積みで焼成されている。また、高台脇は明瞭に削り出すが、高台内の削りは浅いという共通の特徴をもつ。19は志野釉鉢である。底部には輪ドチ痕が残る。20は瓶である。底部は無釉で、右回転の糸切り痕が残る。肩部外面に緑釉を落とす。

肥前磁器〔図96〕 碗と皿の出土量に目立った差はなく、その他には壷・小杯などが出土した。多くは大橋編年Ⅱ期に属するものである。全面施釉するものの方が若干多い。５の染付碗は高台の一部が欠損している。これは使用による欠損ではなく、割れ口にも釉薬が掛かっていることから焼成段階ですでに欠損していたようである。外面に楼閣山水文であろうか、文様が描かれる。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。８は染付筒形碗である。胴部外面は縦縞状に削り込みをいれ、その上に文様が描かれる。口縁部外面には渦文が描かれる。９は百間窯の染付碗である。外面には雲気文を描き、内面は口縁と見込周辺に圏線を引く。貫入が顕著である。10の染付碗は、外面に松文を描き、全面施釉する。畳付は釉剥ぎする。器形は天目茶碗を意識したものと考えられる。肥前磁器としては高級品であったのではないだろうか。12は青磁手塩皿である。見込に菊花文が彫られる。全面施釉し、畳付を釉剥ぎする。14は型打ち成形の染付輪花皿である〔図版14右２〕。見込に花卉文が描かれる。釉薬が酸化しており、表面は玉子色、呉須は青黒っぽく発色しているのが特徴である。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。15は型打ち成形の染付輪花皿である。鉄銹で口紅装飾をし、見込に山水文（帆船、竹、雲）を描く。全面施釉する。18は染付皿である。型打ち成形で、外面に布目痕が残る。貼付高台である。胴部内面には瓢箪の文様が型取られる。見込には蝶、笹が描かれ、全面施釉される。21は染付皿である。見込の文様は、17世紀第２四半期頃の量産タイプの皿によく描かれる。全面施釉し、畳付は釉剥ぎする。

中国磁器〔図97〕 漳洲窯が一番多く、次いで景徳鎮窯のものが出土した。１～５・９・10・12が漳洲窯、６～８・11が景徳鎮窯である。６は景徳鎮窯の鉢、もしくは大振りの碗であるが、文様・器形を含めた全体的な様相が中国独特のものとは異なり、日本向けに特別に製作されたものの可能性がある。７・８は景徳鎮窯の皿で、細片のみの出土であった。７は見込に宝文、８は名山手が描かれる。11は景徳鎮窯染付碗の高台部分を、見込側から打ち欠いて円形に調整したものである。12も同じく漳洲窯呉須赤絵を円形に打ち欠いた円盤で、遊びの駒として使われたのであろうか。しかし11のように高台のでっぱりを残して打ち欠いているものについては、どのような用途で使用されたのかは不明である。

備前・丹波〔図98－１～６〕 備前は甕・擂鉢が多く出土した。また徳利・壷も１点ずつ出土した。１・２は乗岡編年近世２期に属する擂鉢である。４の徳利の底部には、直径１㎝ほどの円形の刻印が残る。丹波は壷が１点出土した他はすべて擂鉢であった。

砥石〔図98－７～10〕 ７～９は丹波産珪質頁岩製の仕上砥（合砥）、10は黒色頁岩製の中砥である。

碁石〔図98－11〕 黒色珪質頁岩製。所謂、那智黒である。

銭貨〔図98－12・13〕 ２点出土した。12は治平元宝である。13は銘が判読できないが裏面は平らであり、模鋳銭の可能性もある。

金属　陶磁器類に比してその出土量は多くはないが、釘、メッキされた銅、鉄鍋などが出土した。

木製品〔図99～図101〕 まず下駄についてであるが、遺存状態が悪いものも含め、下駄と判断できたものは計24点あった。その内訳は、連歯下駄が15点（丸型11点、角型４点）、露卯下駄が４点（丸型２点、角型２点）、刳り下駄が２点（角型２点）、不明３点（丸型１点、歯のみ２点）である。またその法量についてであるが、丸型連歯下駄11点に関しては、台長21cm前後、台幅　８cm前後の範疇におさまり、規格が存在したと考えられる。今回出土した下駄の中には、陰卯下駄と判別できたものはなかった。これまでの近世の調査によると、近世初頭以前に陰卯下駄は一旦廃絶し、その後近世のある時期に再び出現し露卯下駄に取って変わる、と考えられている[1)]。2343廃棄土坑が機能していた段階では、まだ陰卯下駄は普及していなかったのだろうか。

漆器については完形のものはなく、破片も含めた個体数は十数点であった。比較的残りの良いものを図99に掲げている。図99－７は漆器椀である。口縁部が欠損するが、文様の状況から深手の椀であると考えられる。高い高台をもつ。内・外面とも朱漆を塗る。外面には黒漆で「向かい鶴」が描かれ、その間に右向きの亀が描かれている。図99－８の漆器椀は高台部分のみ遺存する　内・外面とも朱漆が塗られる。高台内には黒漆で「上」の文字を丸で囲む文字紋が残る。

図99－９は、縦長の五角形をした将棋駒である。表に「歩兵」と墨書される。裏面にも墨書が残るが判読できない。図99－10・11は、挽歯技法でつくられた木製の横櫛である。表面には漆が塗られている。10の棟断面は逆台形を呈し、11の棟断面は円形を呈する。図99－12・13は箸である。完形のものも含め30点ほどの箸が出土した。欠損するものが大半であり、一概には言えないが、長さ24cm前後のものが多い。またその形状も丁寧さに違いはあるものの、いずれも面取りを行い断面は円形に近い形を呈する。出土した箸のほとんどは、先端が細く中央部が厚みをもつ両口箸であった。図99－14は火付け棒である。両端とも使用しており、先端にススが付着する。

図100－１～10は木製の人形である。１～５は一本作りの人形頭である。１・２・４〔図版16下３〕は鳥帽子をかぶった人を表現したものであろうか。カマ木を差し込むための穿孔は認められない。５の頭部に連続する穿孔は、頭髪を植えるためのものである。６～８〔７：図版16右３、８：図版16下２〕は棒状の人形である。７は、頭髪・眉・目・髭を墨で表現する。また、胴部側面２ヶ所に貫通する孔が設けられており、手を取り付けるための孔であると考えられる。９〔図版16下１〕・10は扁平な板状の人形である。

図100－11は桶材である。柾目材からつくる。外面３ヶ所にタガの跡が残る。先端は欠損しているが、並んで２ヶ所の穿孔が確認できる。内面には黄褐色物質が付着する。図100－12は桶栓である。図100－13・14はしゃもじである。先端へ向けて削り、先を細く調整している。図101－１は荷札である。上下に２ヶ所ずつ穿孔されるが、紐を通すための孔であろうか。右側の墨書は不明であるが、左側には「□舎个（屋号）」と墨書が残る。図101－２～５は糸巻具である。４は横木と枠木が組み合わさった状態で出土した〔図版16左１〕。５は横木である。「仁右」と墨書が残る。また、図化はしていないが、紡輪も５点出土している。

種子　主として食物残滓で、モモ・センダン・クルミ・ウリ科・マクワウリ・スモモ・カキノキ・ヤマモモ・クスノキなどが出土した。出土量が多いのはマクワウリで、100点に近い数が出土した。なお、

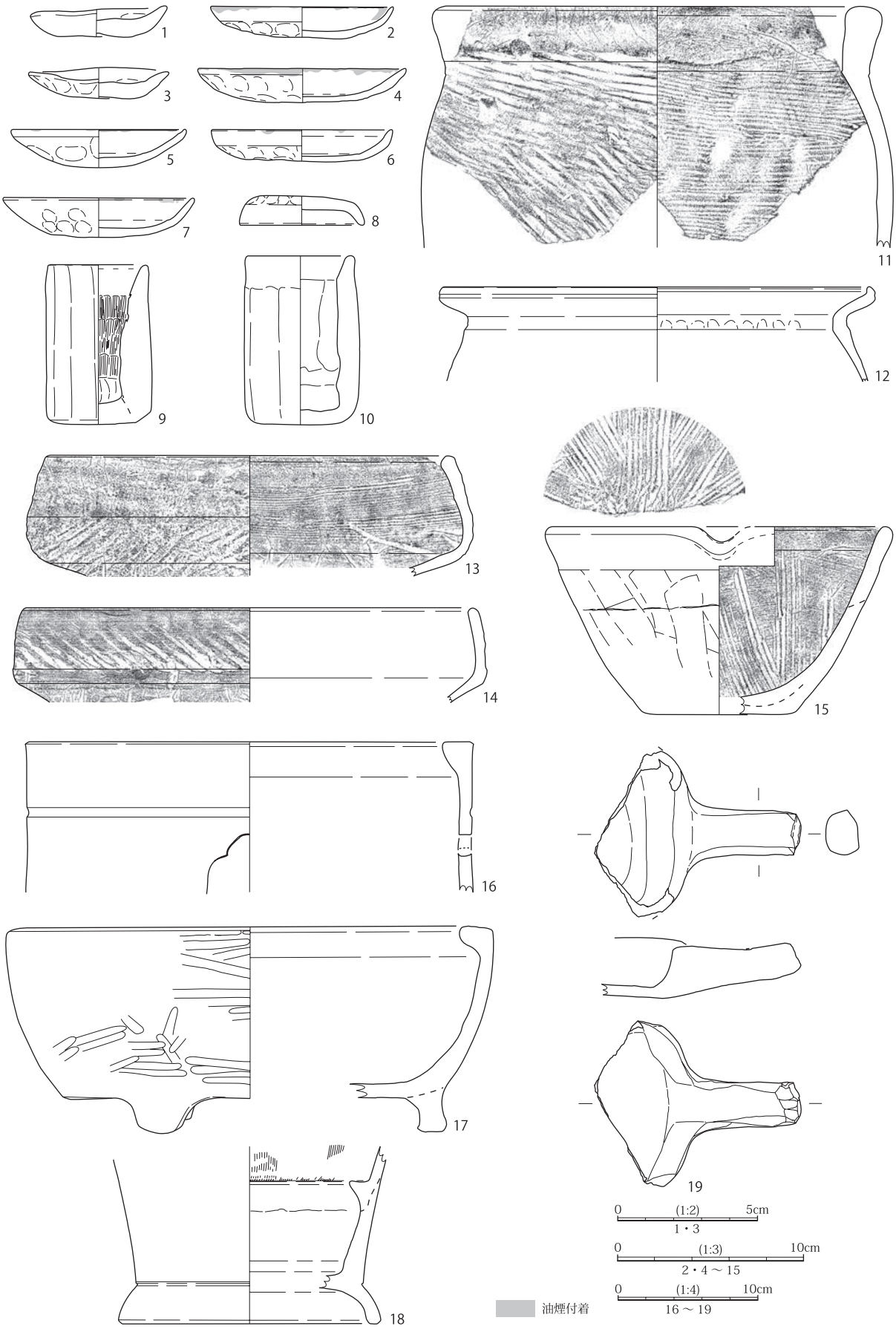


図94　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（１）

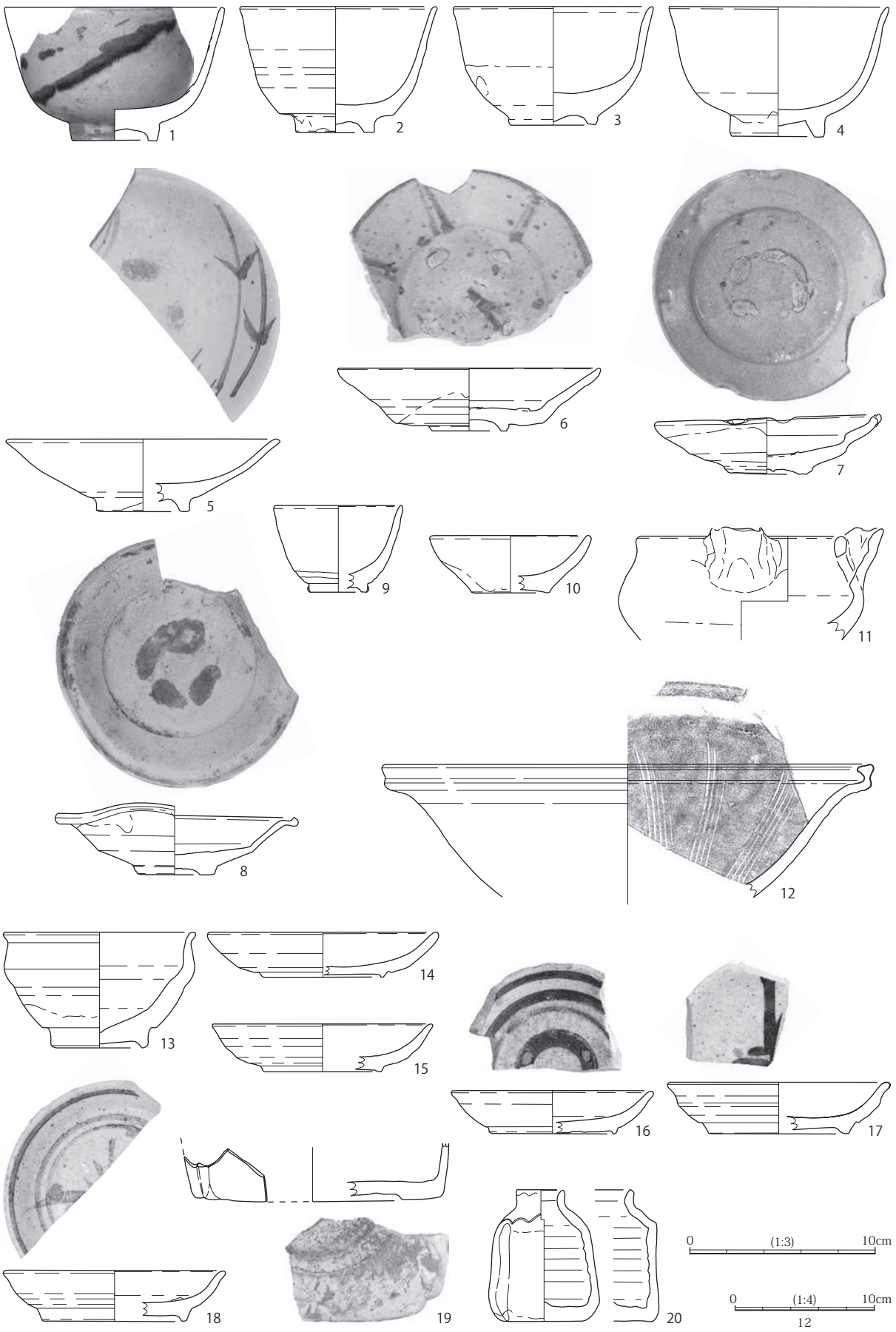


図95　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（２）

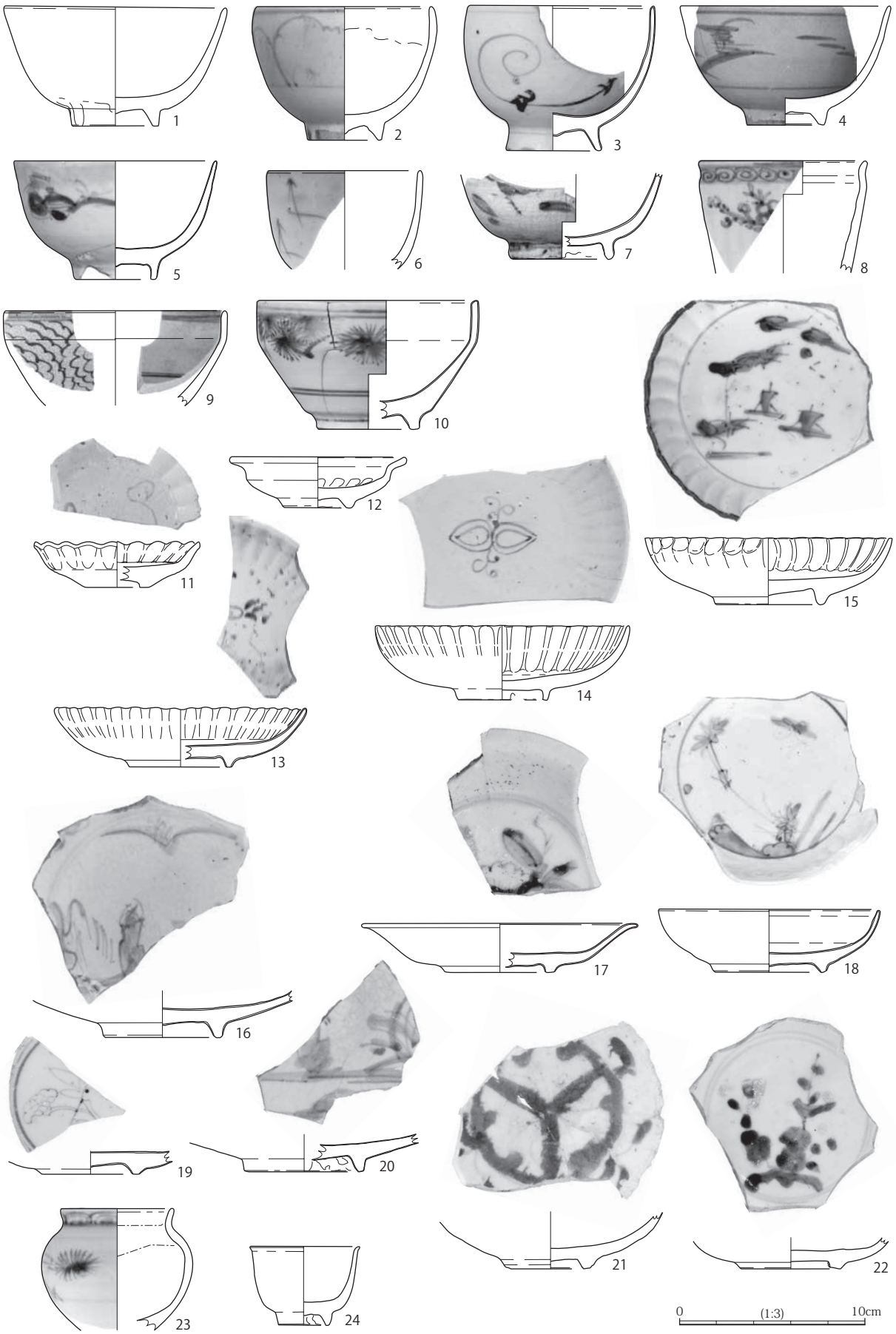


図96　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（３）

出土した種子は廃棄土坑埋土の一部を洗浄した結果発見に至ったものである。よって、取り上げられなかった種子が多いということを明記しておく。

骨　魚類・鳥類・哺乳類・爬虫類の骨が出土した。骨の同定結果については第５章を参照されたい。なお、廃棄土坑埋土の一部は洗浄を行い細片の採取に努めたが、それ以外は目視での採取であり、上記以外の骨が投棄されていた可能性はある。

貝　404固体が出土した。出土量が多いのはサルボウ（197点）で、その次がハマグリ（112点）である。多くは近海で採取可能な食用貝である。また、１点だけの出土ではあるが、鹿島灘以北あるいは日本海北部に生息するウバガイが含まれており、遠隔地より貝が持ち込まれていることがわかった。貝を利用した製品として、イタヤガイ杓子が出土した〔図版17右３〕。貝の分類結果については第５章に詳しい。なお、廃棄土坑埋土の一部は洗浄を行い細片の採取に努めたが、それ以外は目視での採取であり、取り上げられなかった貝が多いことを明記しておく。

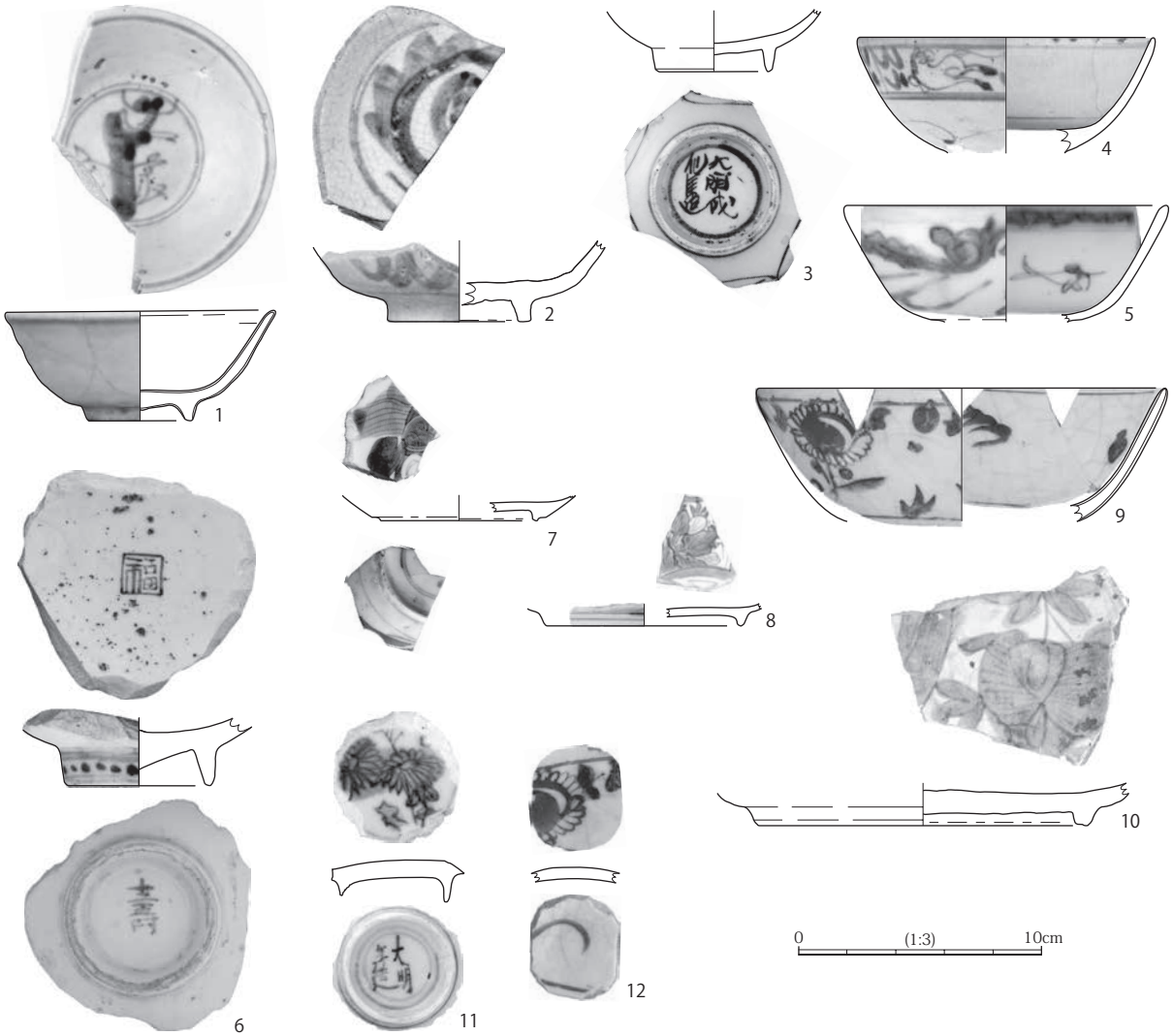


図97　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（４）

図98　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（５）

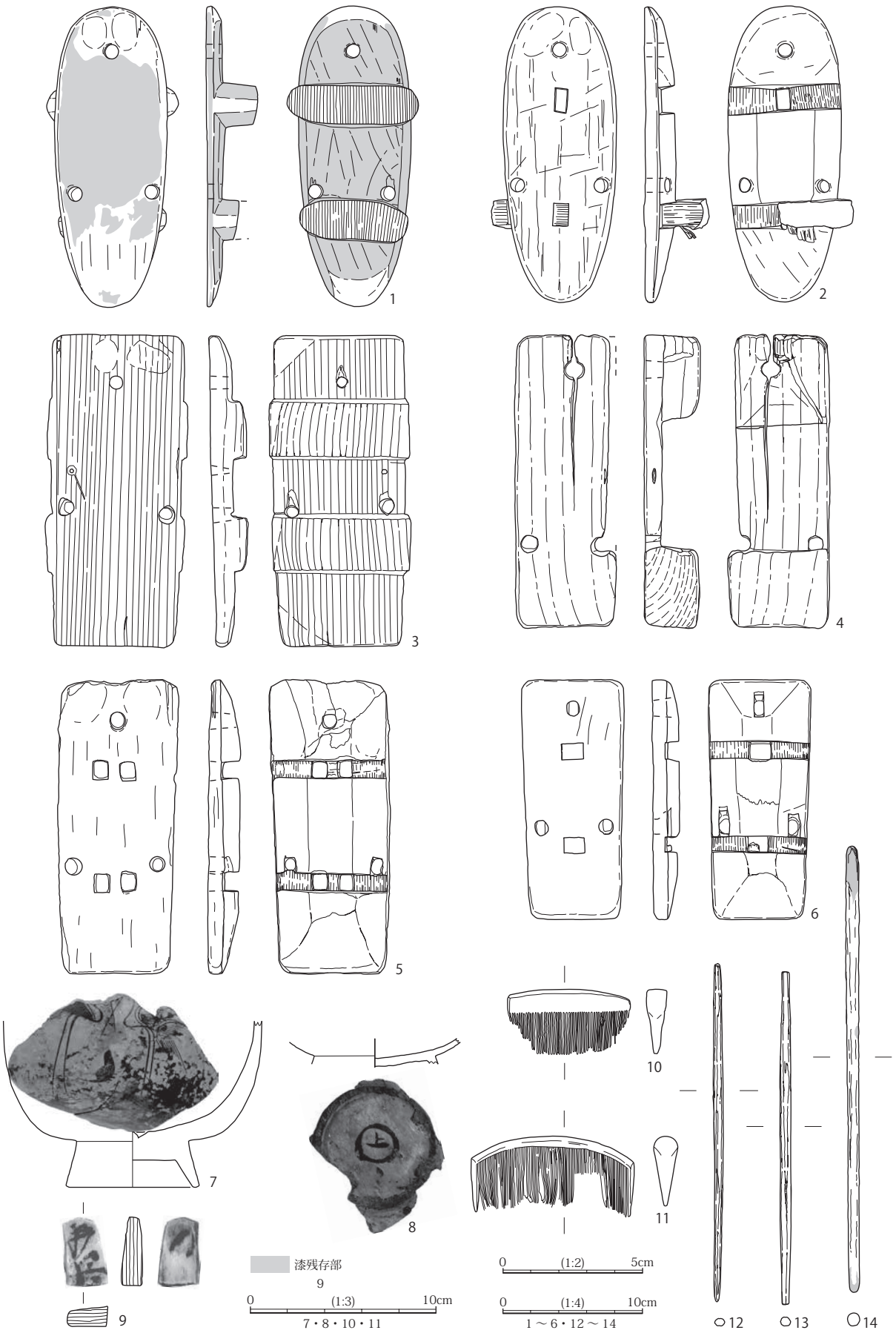


図99　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（６）

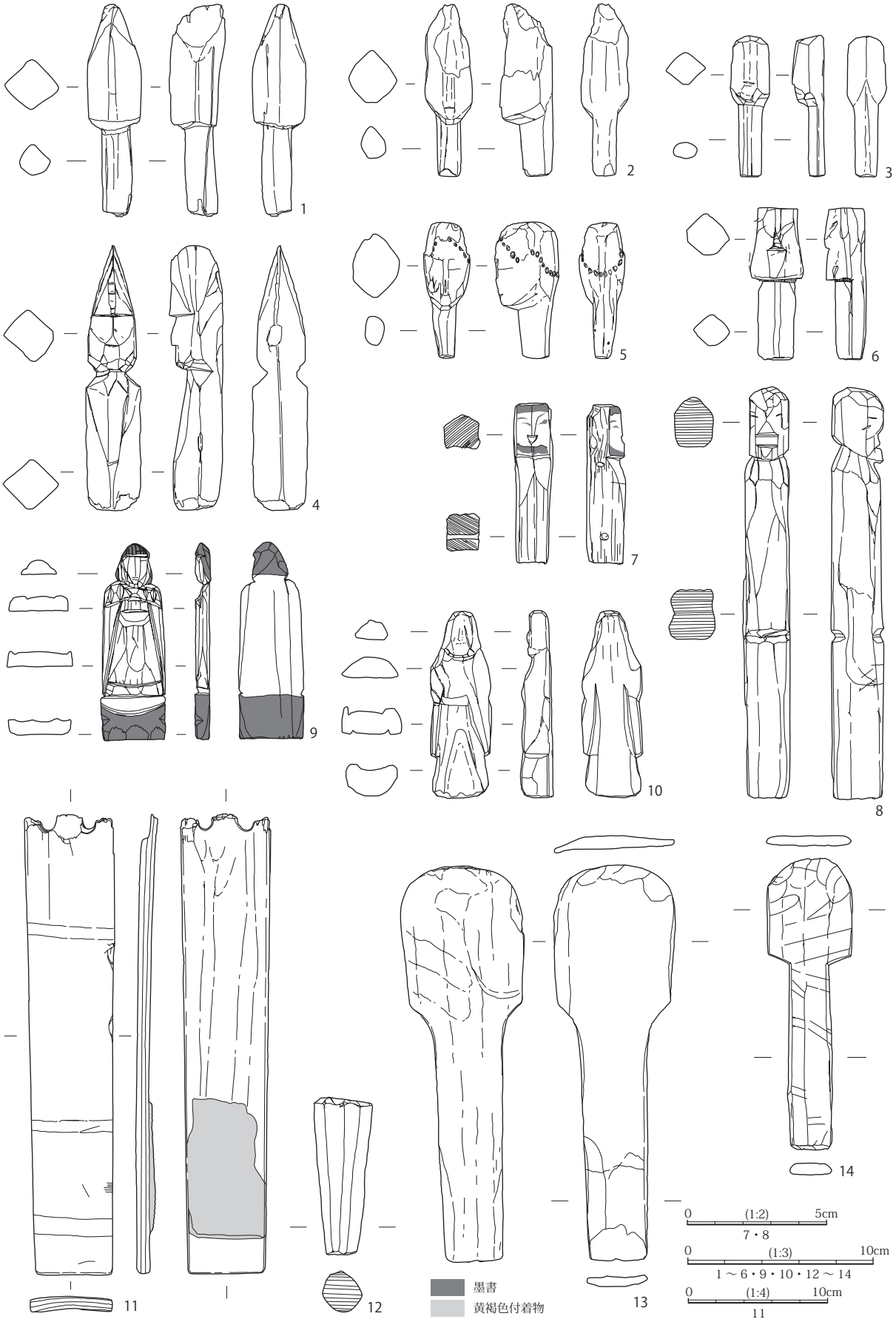


図100　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（７）

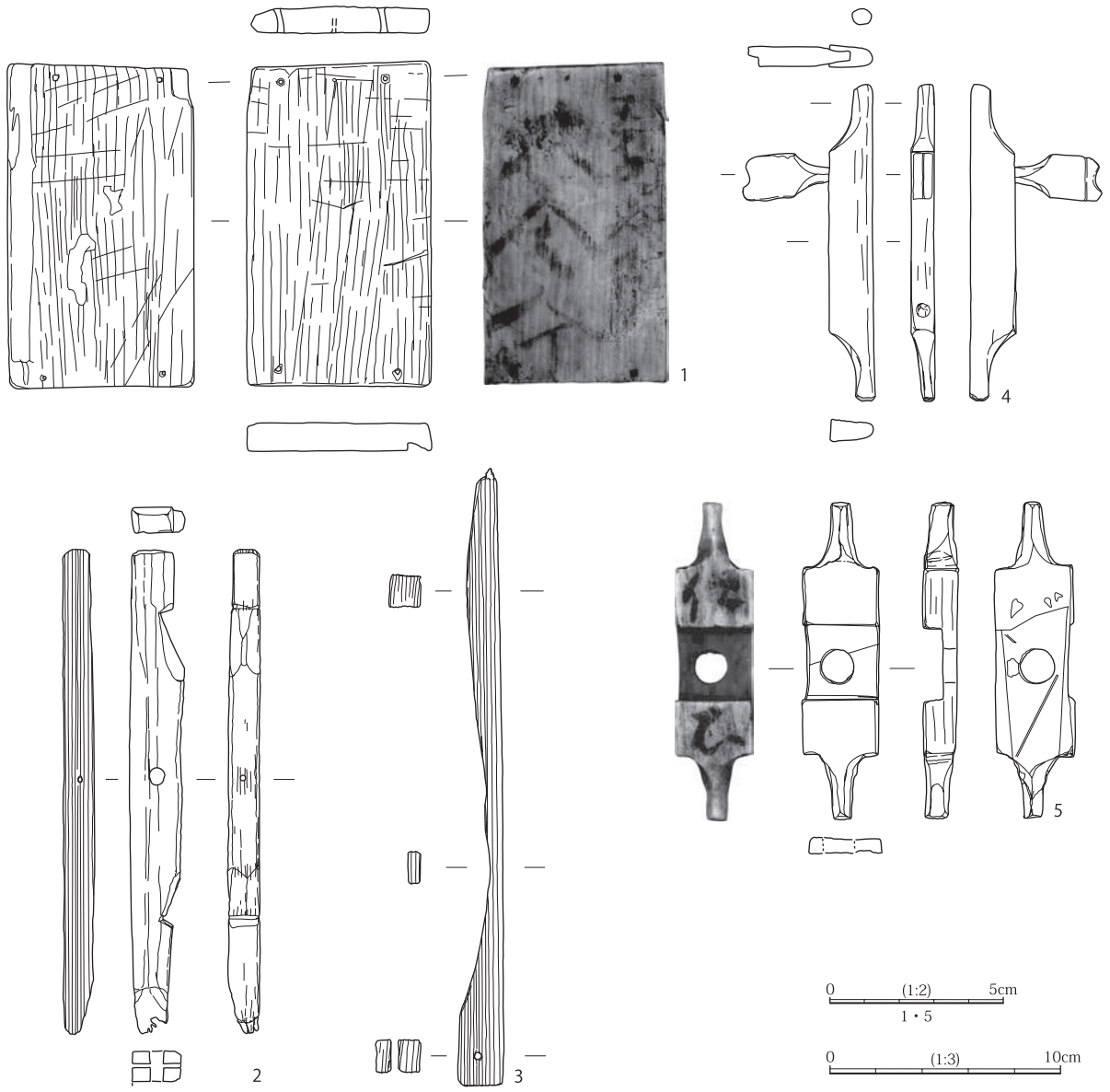


図101　第１－２面　2343廃棄土坑出土遺物（８）

第２面

第１－２層を除去して検出される面である。大坂夏の陣による焼土層を検出したことから、1615年当時の生活面と考えられる。2325濠、2300濠の跡地にも中世遺構面は遺存しており、濠を埋め戻した後に都市域が拡大されていたことが明らかとなった。土坑、礎石、溝などを検出した。

調査区南端では都市を取り囲んでいた濠を検出した。実際の調査では第３面として検出したが、焼土層の広がり、南接する１調査区では中世町屋が検出されなかったこと、また濠出土遺物の時期を勘案した結果、1615年に機能していた濠であるという結論に至った。したがって、2330－１濠の帰属面を第２面として報告する次第である。

以下に第２面の概要を述べるが、濠についてはここでは記さず、今調査で検出した濠４条とまとめて報告する。

焼土層〔図105・102〕：焼土層は2330－１濠に伴う土塁以北に広がっている。上位の遺構面では地割

りが近世のものに変遷すること、また焼土層出土遺物の時期から、この焼土は1615年（慶長二十年）大坂夏の陣によるものと考えられる。焼土層厚は0.1m前後であったが、その堆積は平坦ではなく、場所によって0.2mほどの高低差がある〔図９参照〕。濠埋め立て地は、そうでない場所に比べ地面が低かったことが確認できた。

調査区東側中央部では、焼土直下から壁土と考えられる網代目状の木質が検出されており、倒壊した

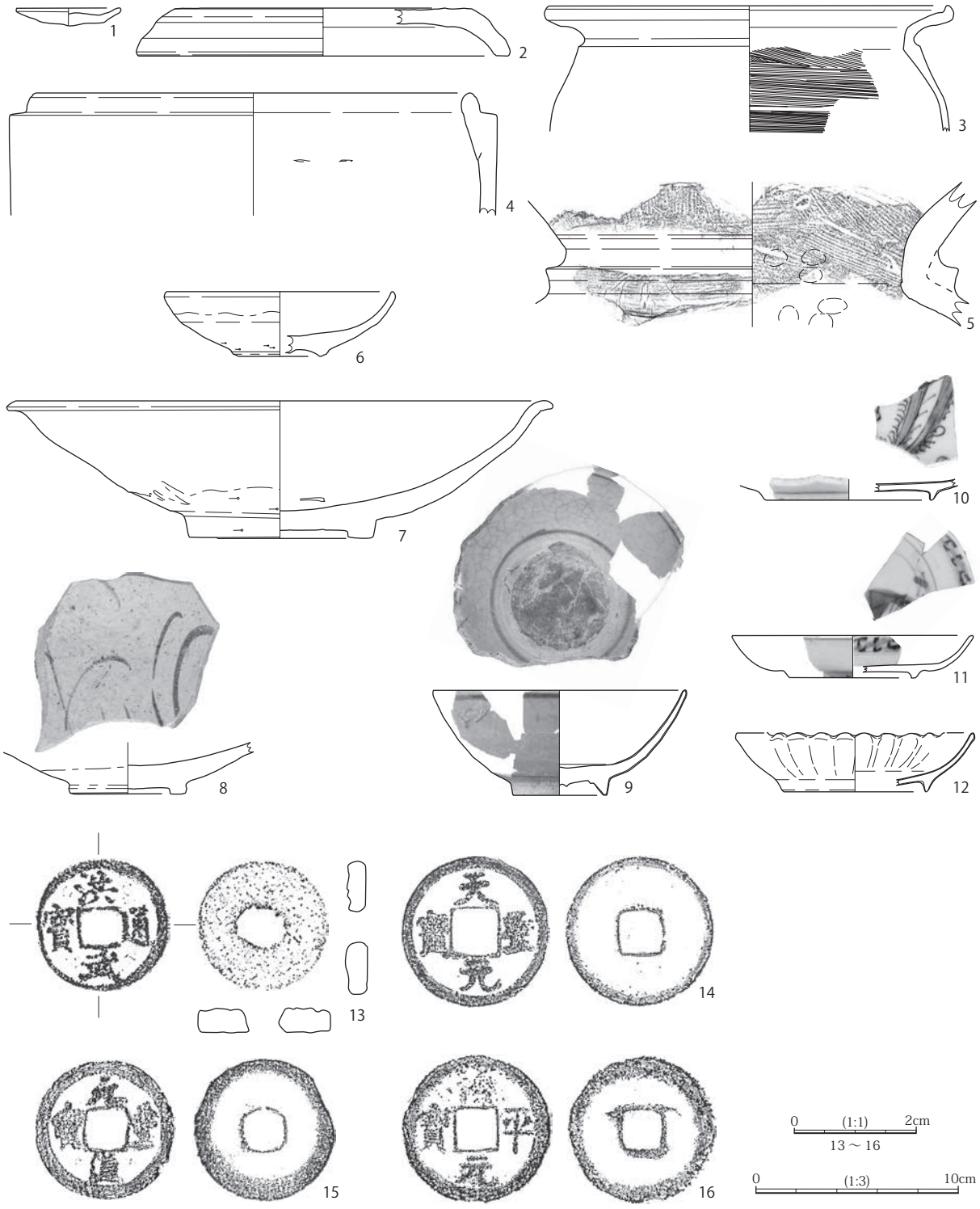


図102　第２面　焼土層出土遺物

建物の存在を推察できる。またその下の床面は赤褐色に焼き固まっており、火災に遭って倒壊したことは明らかであった。なお、この部分は2325濠の跡地であり、濠を埋め戻した後に都市域は拡大し、中世町屋が建てられていたことが確認できた。

土師質皿・甕・堝・蓋、焼塩壷、瓦質火鉢、備前擂鉢・甕・瓶、瀬戸美濃皿・天目茶碗、肥前陶器碗・皿、中国磁器皿・青磁皿、銭貨、砥石、硯、コビキBを含む瓦などが出土した。これらの中には、被熱痕が認められるものも含む。図102－１は土師皿である。手捏ね成形の小型皿で、雑なつくりである。図102－２は土師質蓋である。他の土坑で出土した土師質蓋よりも丁寧なつくりで、天井部外面にもナデを施す。天井端部はケズリで面をつくり、口縁上端は強くナデて面をつくる。図102－３は大和型土堝である。図102－４は火舎である。火舎は近世遺跡からの出土は少なく、近世にはいるとしだいに消えていく器種である。図102－５は朝顔形埴輪の頸部である。１調査区第11層からは埴輪を始め古代の遺物が出土しており、この埴輪もそういった古い層に帰属するものであろうか。図102－６～８は肥前陶器皿である。いずれも大橋編年Ⅰ期に属し、７は二次焼成を受けている。図102－９は漳州窯、図102－10～12は景徳鎮窯の碗・皿である。これらの中国磁器は、16世紀後半を中心に輸入されたタイプのものである。10・11は小野編年Ｅ群に属する。10は見込に龍であろうか、文様が描かれる。また、11の口縁部は崩れた襷文が描かれる。図102－13は絵銭である。厚さ0.4㎝、重量９ｇで、普通の銭貨に比べ分厚く重い。表に「洪武通寶」、裏は平坦で無文である。絵銭の用途、また正確な出現時期は確定されていないが、近世墓・集落などから出土例があり、近世以降に出現するものと考えられている。13は焼土層内ではなく、焼土層と近世整地層に挟まれるように出土したことから、近世の遺物が混入した可能性がある。図102－14～16は銭貨である。14は「天聖元宝」、15は「元□□宝」、16は「治平元宝」である。

2362溝〔図105・103〕：排水溝であると考えられる。側面を横板で土留めしており、幅約0.35ｍを測る。調査区外へと延びており全長は不明である。主軸はN-93°-Eであった。

土留めの横板の厚みは２㎝前後である。基本的に横板は１枚であるが、部分的に２枚が重なる。また0.4～0.5ｍ間隔で横板を押さえるために杭（直径３～５㎝）が打たれていた。横板もしくは杭の代用として角材が使われている部分もある。横板として利用されている角材は、建築部材の転用品であった。

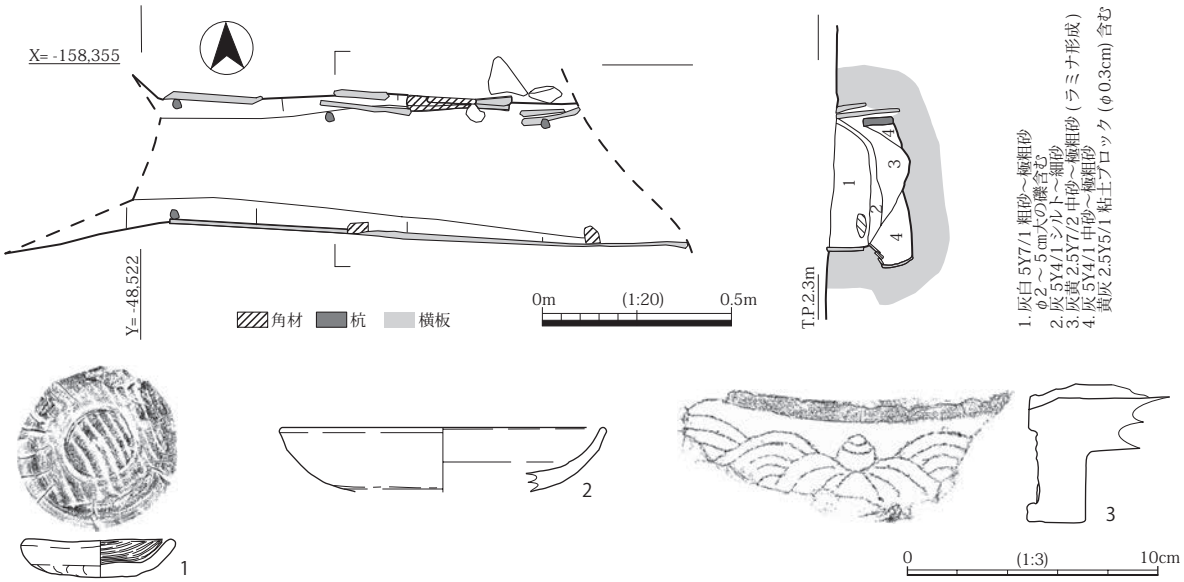


図103　第２面　2362溝　平・断面図、出土遺物

土師質皿・甕・羽釜、瓦質土器、備前壷、瀬戸美濃皿、肥前陶器碗・皿、中国白磁？皿、瓦などが出土した。１は器厚のある土師皿である。手捏ね成形で、口縁部はナデ、内面には目の粗いハケメを施す。２は中国白磁皿であろうか。焼成不良もしくは二次焼成によって釉薬が変色している。３は軒平瓦である。二次焼成を受ける。

2363礎石・2370礎石〔図105・106〕：先述した2362溝から南へ５ｍのところで２基の礎石を検出した。主軸はＮ−７°−Ｅで、2362溝と直交する。溝に沿って建っていた建物の礎石と推定できる。礎石の心々間は1.9mと広く、間にもう一つ礎石を挟んでいた可能性がある。図106−４は2370礎石である。石塔の台座を転用したものか。

2153埋甕〔図105・104〕：検出した埋甕は、口縁部断面が逆台形を呈する土師質甕で、推定底径0.3m、高さ0.5mを測る。底部が抜かれた状態で設置されていた。直径約0.6mの素掘りの土坑の片側に寄せて据えられており、裏込めには中砂〜粗砂混じりの黒褐色粘土質シルトが用いられていた。

なお、断面図１〜３は、後述する2320土坑埋土の可能性が高い。同じく2320土坑に切られて検出した2317土坑でも埋甕が見つかっている。両埋甕底部の標高はT.P.2.0m付近であり、同時期に存在した可能性がある。また、偶然の一致かもしれないが、両埋甕の配置の軸は、先述した2363・2370礎石とほぼ

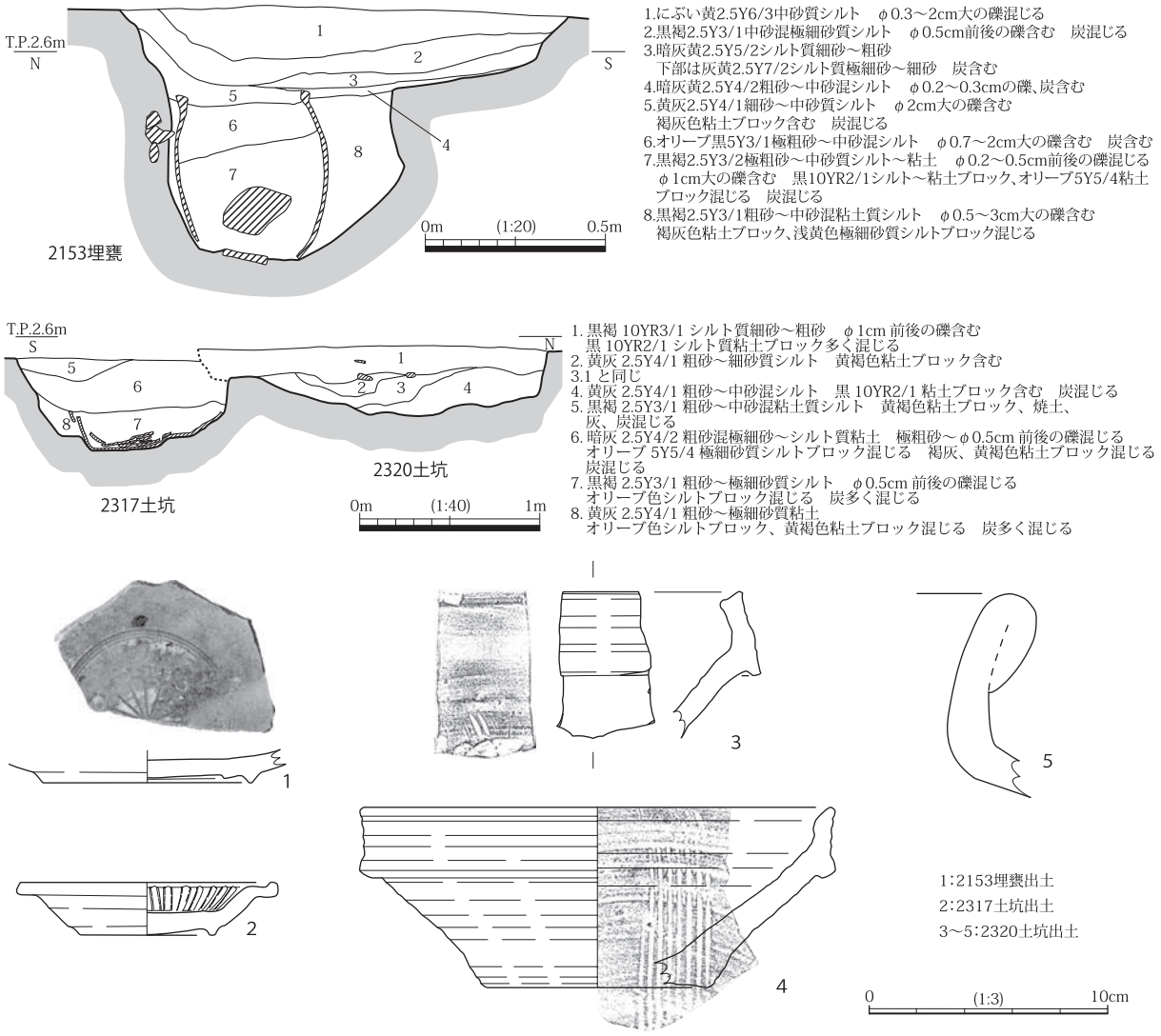


図104　第２面　2153埋甕、2317・2320土坑　断面図、出土遺物

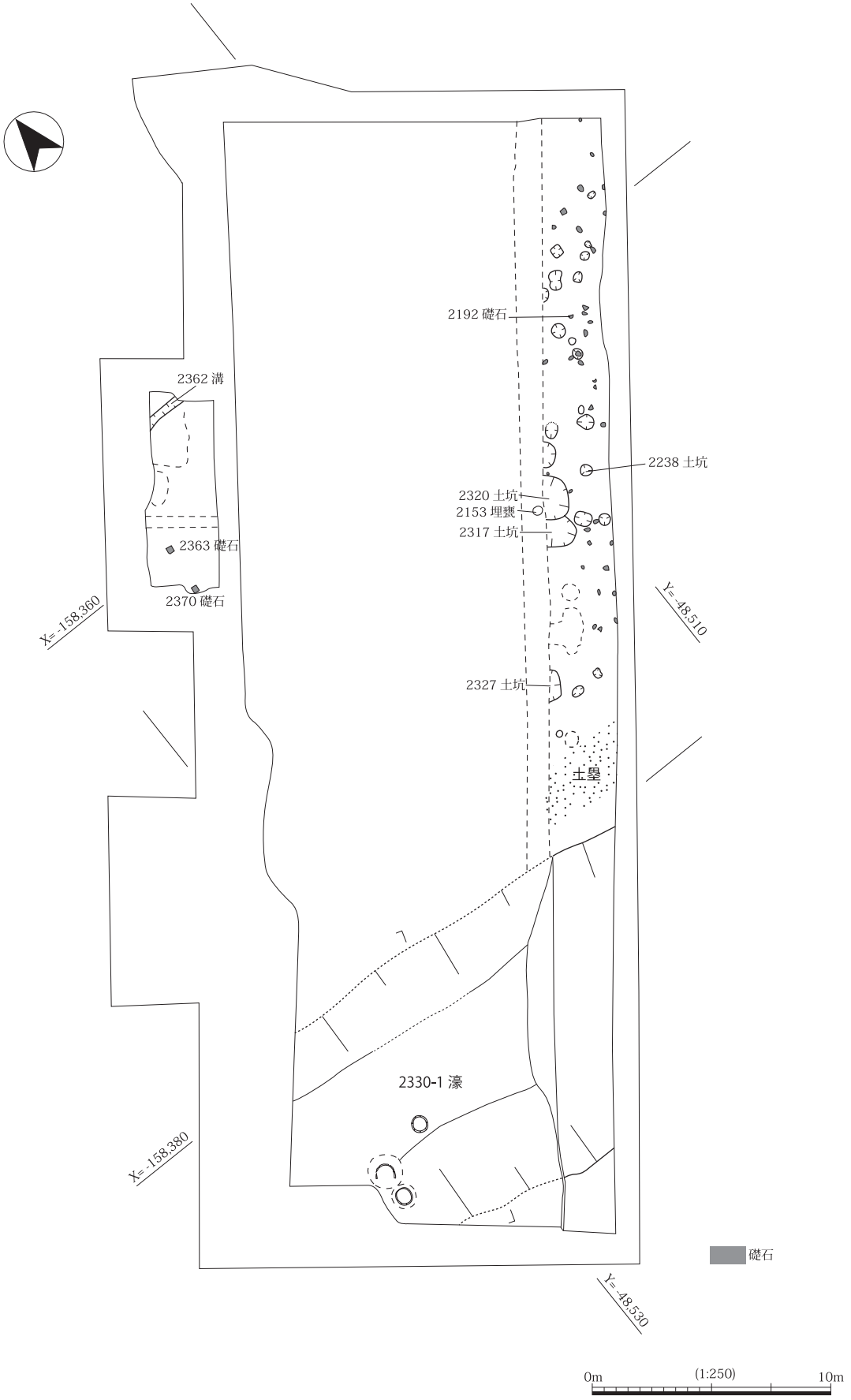

2192 礎石
2362 溝
2238 土坑
2320 土坑
2153 埋甕
2317 土坑
2363 礎石
2370 礎石
X=-158,360
Y=-48,510
2327 土坑
土塁
2330-1 濠
X=-158,380
Y=-48,530
礎石
0m
(1:250)
10m

図105　第２面　平面図

同軸であった。

埋甕内からは、土師質甕、炮烙、備前擂鉢、瀬戸美濃皿、肥前陶器皿（大橋編年Ⅰ－１期）、布目瓦が出土した。図104－１は瀬戸美濃皿である。見込には菊花が彫られ、その上から灰釉を施す。明瞭な高台をもっており、高台内には輪ドチ痕が残る。

2317土坑〔図105・104〕：土坑底部からは土師質埋甕の底部を検出した。底部は土坑基盤層にしっかりと据わっていたことから、投棄されたものではなく、原位置で取り壊されたものと考えられる。大部分が欠損しているため、埋甕の大きさは不明である。底部の標高とその検出位置を勘案すると、2153埋甕とセットで据えられていた可能性がある。

埋甕内からは上部と思われる土師質甕片が多く出土した。また、土坑内からは土師質皿、瓦器皿、瓦質こね鉢、備前甕、瀬戸美濃皿、中国青磁碗、瓦が出土した。図104－２は瀬戸美濃皿である。灰釉で施釉し、見込は釉剥ぎする。輪ドチ痕が残る。

2320土坑〔図105・104〕：サブトレンチによって西側は消失する。現状では1.8m×1.0m以上、深さ0.5mの土坑である。土錘、埴輪、土師質甕、須恵器高杯・甕（外面：格子タタキ・内面：青海波）・蓋、瓦質火鉢、備前擂鉢・甕・壷、中国青磁碗が出土した。図104－３・４は備前擂鉢、５は甕である。

2238土坑〔図105・106〕：調査区東側で検出した、直径0.5m、深さ0.15mの円形の土坑である。埋土

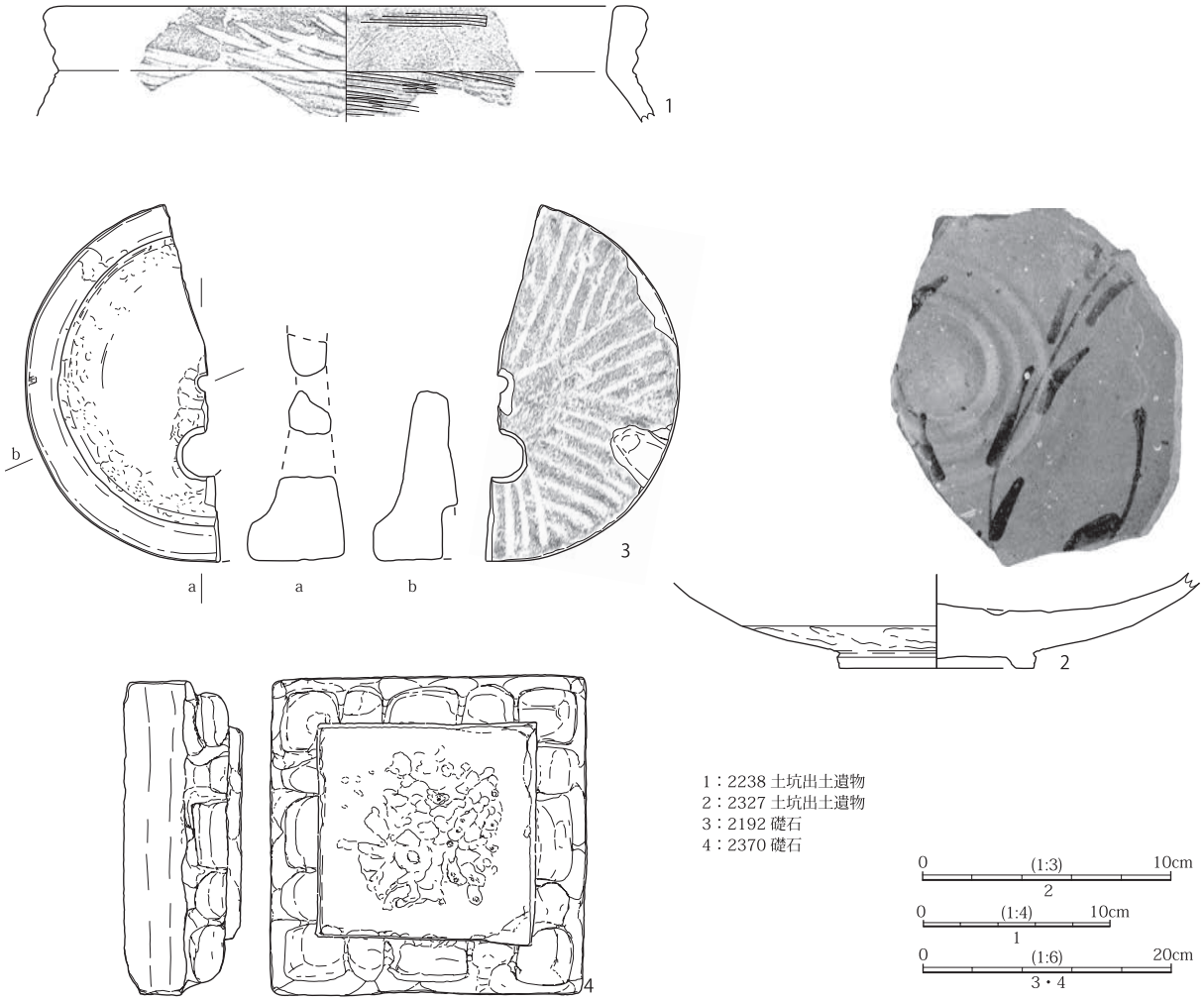


図106　第２面　遺構出土遺物

はオリーブ褐色シルト質細砂～中砂からなり、中礫、にぶい黄色粘土質シルトブロックを含む。土師質皿・甕、肥前甕、中国磁器染付皿、瓦が出土した。図106－１は土師質甕である。口縁部外面には左上がりの粗いタタキが残る。内面は口縁部がナデ、胴部は粗いハケメで調整する。

2327土坑〔図105・106〕：サブトレンチによって西側は消失する。現状では1.4m×0.6m以上の土坑である。図106－２は肥前陶器鉄絵皿である。

2192礎石〔図105・106－３〕：半裁された石臼（上臼）を転用したものである。擂目は６条である。直径２㎝ほどの芯棒受けが確認できる。

中世環濠〔全景写真：図版11〕

貿易で得た経済力を背景に自治を行い、「自由都市」と呼ばれた堺の象徴とも言えるのが、都市を取り囲んでいた濠であった。周辺の既往調査、中世都市堺の歴史については第１章で述べたので、ここでは省略する。

実際の調査における濠４条の検出状況についてであるが、第３面において４条の濠を検出した。2300濠・2325濠に関しては、１調査区における第10層を基盤として掘り込んでいるのが確認できたが、中世の整地層の単位が不明瞭であったため、同一面から掘り込んでいるのか否かを確定できなかった。また2330－２濠・2330－１濠に関しては、近世の整地層によって削平を受けており、検出面が本来の掘り込み面とは言い切れない。しかし両濠の切り合い関係は明らかであり、また焼土層の分布状況などから、2330－１濠は第２面に帰属するという結論に至った。

掲載している断面図についてであるが、各濠と直交するのは図118のアゼ断面図である。一方、図９の東壁断面図は調査区を通しての断面を意図して作成しており、濠に対して直交するものではない。また、図９の整地層部分の断面と濠部分の断面の間には、幅2.5mの小段を設けており、一点破線のところでズレが生じている。例えば2325濠北肩では、一点破線を挟んで濠の肩がずれている。これは濠が東壁に対して斜めに走っているからである。

遺物の取り上げ方については、個々の濠で言及する。調査期間の都合上、綿密に層ごとに遺物を取り上げることができなかった。また、これは４条の濠すべてに共通することだが、濠を埋め戻した後、近世以降に井戸が掘削されている。遺物が混入しないように注意したが、結果として新しい遺物も一緒に取り上げてしまった。したがって、濠出土として取り上げた遺物の中に近世の新しい遺物が混じっていた場合は混入と考え、意図的に除去した。紙面の都合上、個々の実測遺物についての記載は割愛する。遺物観察表を参照していただきたい。また、各濠からは骨、貝が出土している。詳細については第５章を参照されたい。

今調査では、濠が海と繋がっていたかどうかを調べるため、珪藻分析を行った。サンプル採取場所を図９に示す。分析結果については第５章に詳しい。

2330－１濠〔平面図：図105、断面図：図９・118、遺物：図108～111、写真：図版13－３・４〕：主軸はN-82°-Wである。幅約11.5m、底面の標高はT.P.0.0mを測る。濠の検出面はT.P.2.2～2.3mであったが、近世整地層によって削平されている可能性があり、本来の掘り込み面はもう少し高かったと考えられる。よって濠の深さは2.3m以上あったと推定できる。

埋土を下層・上層に大別した。下層は図９－125～146・図118－17～24、上層は図９－123～124・図118－16に対応する。

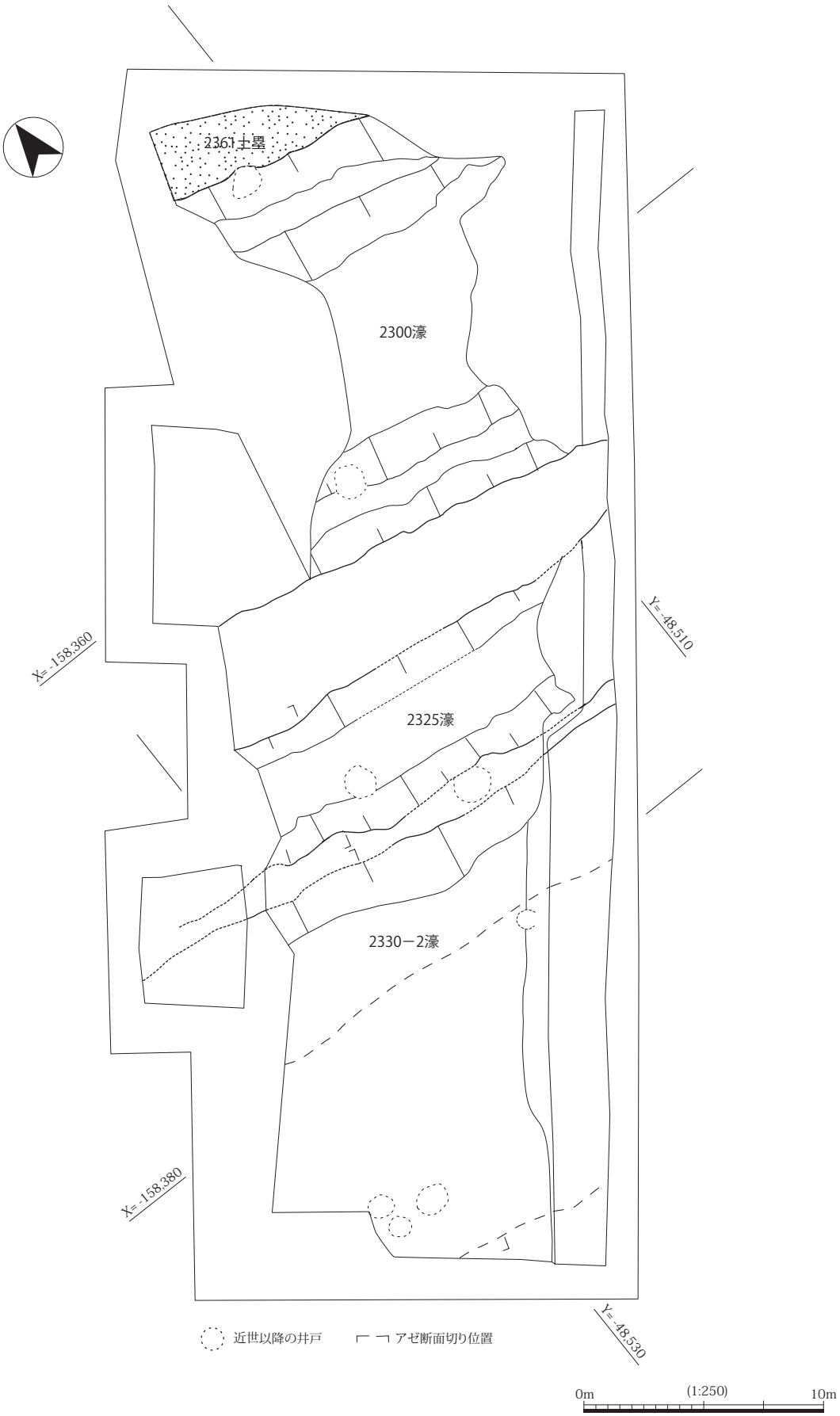

2361土壙
2300濠
2325濠
2330－2濠
X=-158,360
X=-158,380
Y=-48,510
Y=-48,530
近世以降の井戸
アゼ断面切り位置
0m
(1:250)
10m

図107　第３面　平面図

下層を更に下部（図９－133～134・図118－23）・上部（図９－129～132・図118－18～21）に細分した。上記以外の層については、その質・堆積状況から考えて、濠機能時の堆積層ではなく、肩からの崩落層の可能性が高い。下部は主として黒色粘土質シルトからなり、灰オリーブ黒色粗砂～極粗砂がブロック状に混じる。上部はオリーブ黒色の粘土質シルトと細砂～中砂の互層からなり、各層厚は３～５㎝であった。シルトと砂の互層は２回繰り返されており、両者の層理面は明瞭であった。ラミナが確認されなかったため、水の流れがあったか否かは明らかではない。しかし、他の濠では粘土と砂の互層においてラミナが確認されていることから、2330－１濠についても水が流れていた可能性は高い。なお、この互層は濠中央部では明瞭で、両端部では肩部分からの崩落土と混じり合い不明瞭であった。

上層は中礫を含むオリーブ黒色粘土質シルト～粘土からなる。0.5～0.6ｍもの層厚であった。滞水状態が長く続いたと考えられる。また、遺物が多量に出土していることから、ゴミが投棄されていたことが推察できる。

濠の北側（都市の内側）では土塁（図９－147～148）を確認した。中礫混じりの中砂～小礫（直径１㎝前後）で構築されている。上部は削平されており、下部のみ遺存していた。この土塁以北で大坂夏の陣の焼土層を検出した。濠以南では焼土層が検出されないこと、南側に近接する１調査区では中世町屋の広がりが認められないことを勘案すると、2330－１濠は1615年当時に機能していた濠と考えられる。上層に堆積する分厚い粘土層の存在から、当時の濠の水は淀んでいたことが推測される。

次に、出土遺物についてまとめたい。下層からは、土師質皿・甕・堝・蓋・擂鉢、土錘、焼塩壷、瓦器皿、瓦質火鉢、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、瀬戸美濃皿、肥前陶器碗・皿、中国磁器碗・皿、硯などが出土した。また、少量ではあるが、木製品（柄・桶栓・桶材・曲物・箸）、貝（サザエ）、骨なども出土している。

出土量が多いのは土師質土器である。図108－１は土師質蓋、図108－２は土師質擂鉢である。図108－５は瓦質火鉢で、胴部外面中ほどに菊花のスタンプが一定間隔で並ぶ。同じタイプのものが上層からも出土している。土師質土器の次に出土量が多いのは備前陶器である。その中でも擂鉢が多く、乗岡編年近世１期のものが中心に出土した。図108－６は備前甕、図108－７は備前擂鉢である。図108－８は丹波擂鉢である。一本擂目で丸みのある口縁部をもつ。図108－９～11は肥前陶器である。出土した陶器の多くは大橋編年Ⅰ期に属し、絵唐津も数点含む。しかし10の皿のように大橋編年Ⅱ期に相当するものも出土している。図108－12は瀬戸美濃皿である。大窯の中でも新しい段階に属するものであろう。図108－13～16は中国磁器である。15は16世紀代を通して出土するタイプのものである。新しい遺物としては13・14のように16世紀末～17世紀初頭を中心に輸入されたものが出土している。また、細片のため図化はしていないが、漳州窯赤絵碗も出土した。図108－17は柄、図108－18は桶栓である。図108－19は凝灰質頁岩製の硯である。

次に、上層出土遺物についてであるが、2330－１濠は近世初頭には2343廃棄土坑として機能していた。上層として遺物を取り上げた層は泥層であり、2343廃棄土坑に伴う遺物が沈み込んでいる可能性がある。

土師質皿・甕・火鉢、炮烙、焼塩壷、土錘、須恵器、瓦器皿、瓦質火鉢・十能・擂鉢、備前擂鉢、丹波擂鉢・鉢、肥前陶器碗・皿、中国磁器碗・皿、漆器椀などが出土した。また、木製品（柄・桶栓・桶材・曲物・箱材・糸巻具・箸・柱材）、植物種子、貝、骨なども出土した。

上層においても土師質土器が多量に出土した。図109－１～４は土師質皿である。油煙が付着し灯明皿として使われたものも含む。図109－５は土師質火鉢、図109－６は焼塩壷、図109－７・８は土師質

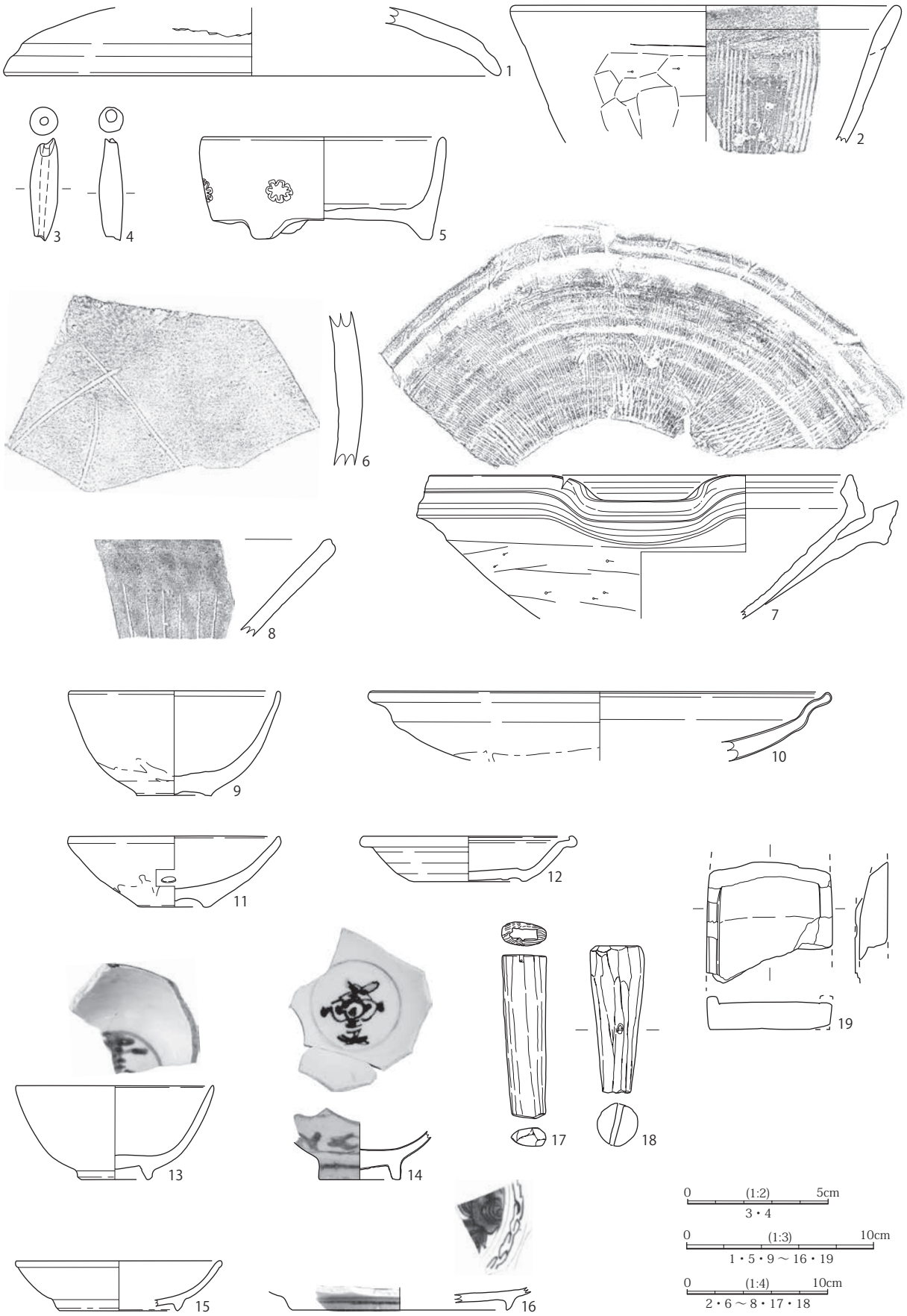


図108　第２面　2330－１濠下層出土遺物

甕である。7は口縁部がわずかに残存するのみで、実測図の傾きに関しては正確ではない。図109－9・10は炮烙である。図109－11は上部が欠損した瓦燈、図109－12～14は瓦質火鉢である。14は下層出土の瓦質火鉢と同じタイプで、胴部に菊花のスタンプが並んでいる。図109－15は瓦質十能、図109－16は瓦質擂鉢である。図110－1・2は備前擂鉢、図110－3・4は丹波擂鉢である。下層出土の擂鉢と時期的な差は認められない。図110－5は丹波大平鉢である。図111－1～17は肥前陶器である〔図111－14：図版14右3〕。大橋編年Ⅱ期の碗・皿の出土量が下層よりも増えている。図111－18～20は中国磁器である。出土した中国磁器は16世紀末～17世紀初頭を中心に輸入されたものばかりである。漆器椀は全部で3点出土した。遺存状態の良いものを掲げている。図111－21は内面は朱漆、外面は黒漆を塗り、外面

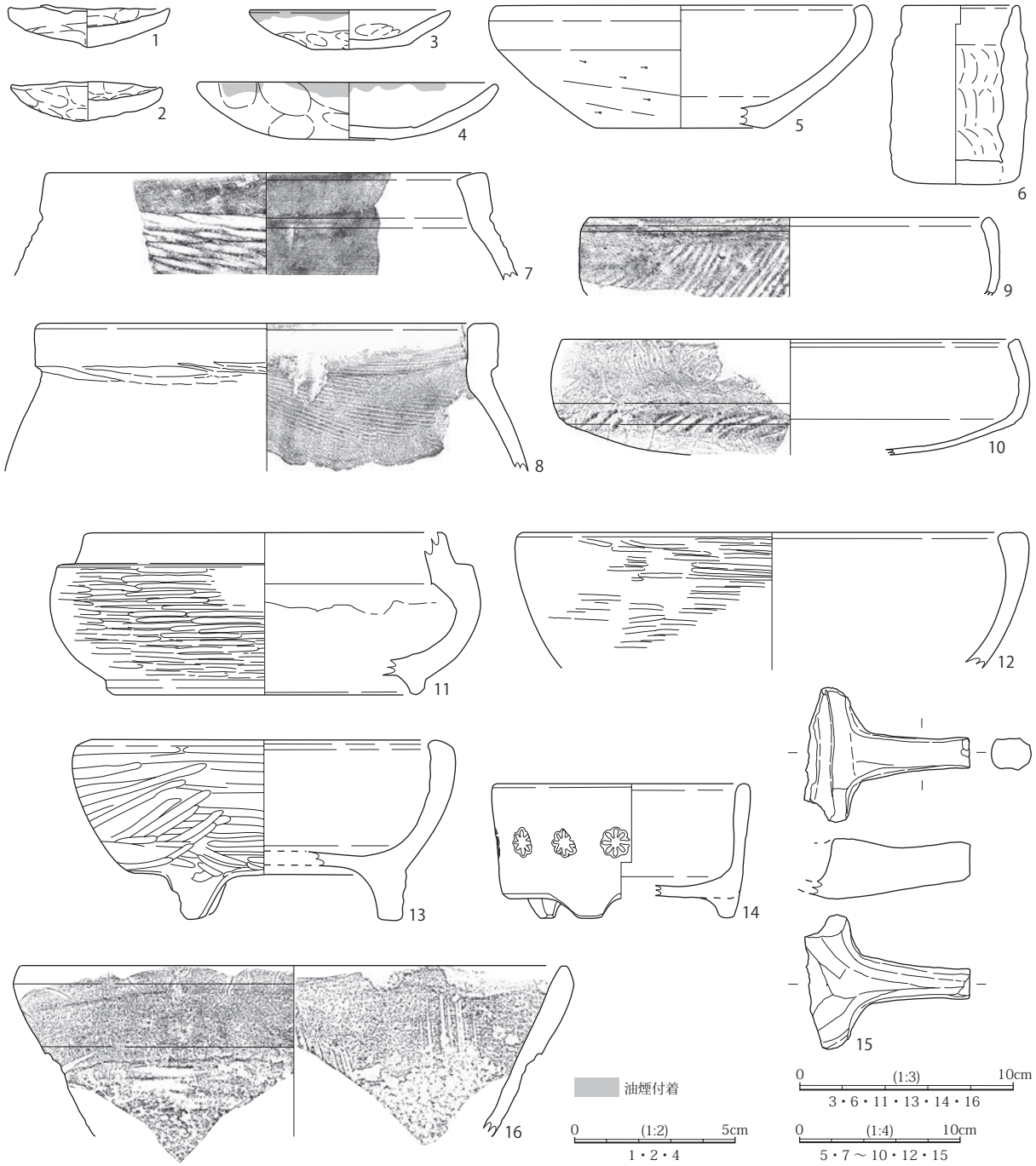


図109　第2面　2330－1濠上層出土遺物（1）

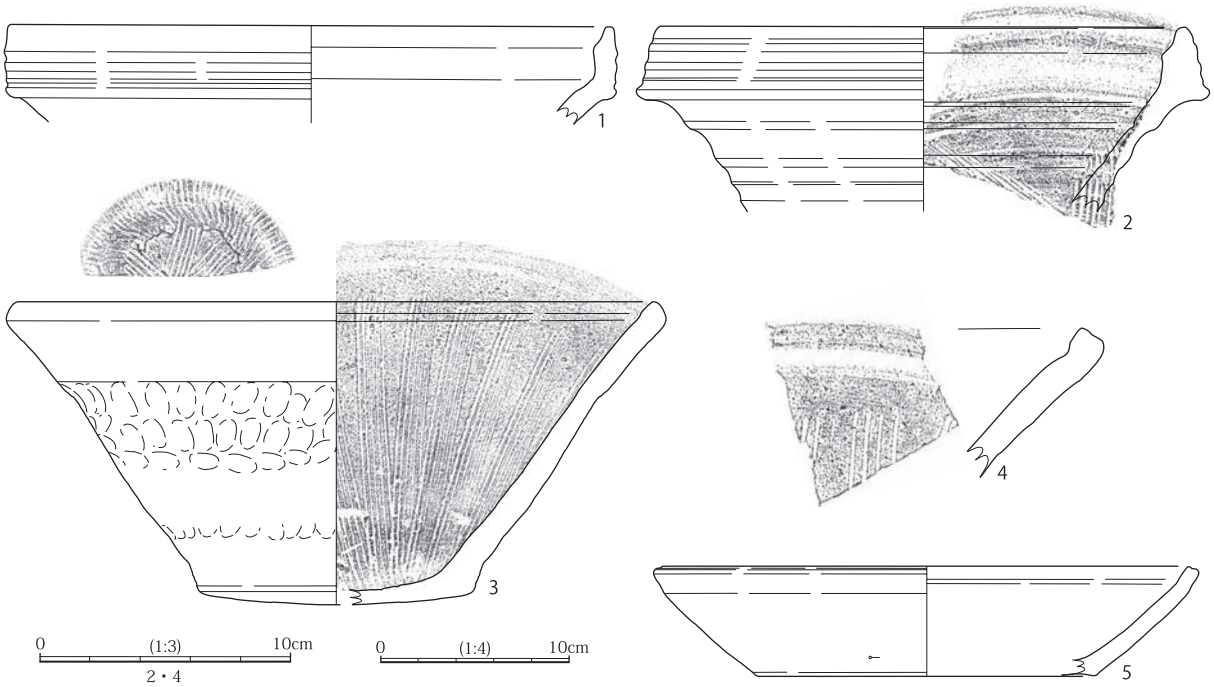


図110　第２面　2330－１濠上層出土遺物（２）

に朱漆で文様をつける。図111－22は丸型露卯下駄である。前緒穴周辺には指の圧痕が残る。図111－23は軒丸瓦である。

最後に2330－１濠の掘削時期について検討したい。この濠は後述する2330－２濠を切っていることから、2330－２濠が埋め戻された後に掘削されたことは間違いがない。ところが、2330－２濠からも2330－１濠同様に16世紀末～17世紀初頭の遺物が集中して出土している。つまり2330－１濠は1615年直前に掘削され、わずか数年しか機能していなかったことになる。上層と下層から出土した遺物に時期的な差が認められないということも、2330－１濠が短期間しか機能していなかったことを示唆しているのではないだろうか。

2330－２濠〔平面図：図107、断面図：図９・118、遺物：図112・113、写真：図版13－４〕：主軸はN-77°-Wである。南肩を2330－１濠に切られており、推定幅6.0～7.0m、底面の標高はT.P.0.2mであった。T.P.2.5～2.6mでの検出であったが、近世整地層によって削平されている可能性がある。よって深さは2.4m以上あったものと推測できる。

埋土を下層・中層・上層に大別した。下層は図９－162～164・図118－41～42、中層は図９－157～161・165～167・図118－26～40、上層は図９－149～156・図118－25に対応する。このうち下層が濠機能時の堆積層で、中層は肩からの崩落層、上層は埋め戻し土と考えられる。

下層は中礫を含む黄灰色中砂～極粗砂からなり、濠中央部では礫の量が増える。強い流水による堆積層と考えられる。

中層の主体は粗砂混じりの暗オリーブ褐色中砂からなる。複数の堆積層が認められるが、北側から徐々に埋まっていく状況が観察できる。これらの地層の中には基盤層が垂れ込んでいる部分（図９－165～167）が確認できたことから、人為的な埋め戻しが行われたと考えるよりも、崩落が起きた可能性を推定しておきたい。

上層はアゼ断面と東壁断面とでその堆積状況に違いが認められる。アゼ断面〔図118〕では、シルト

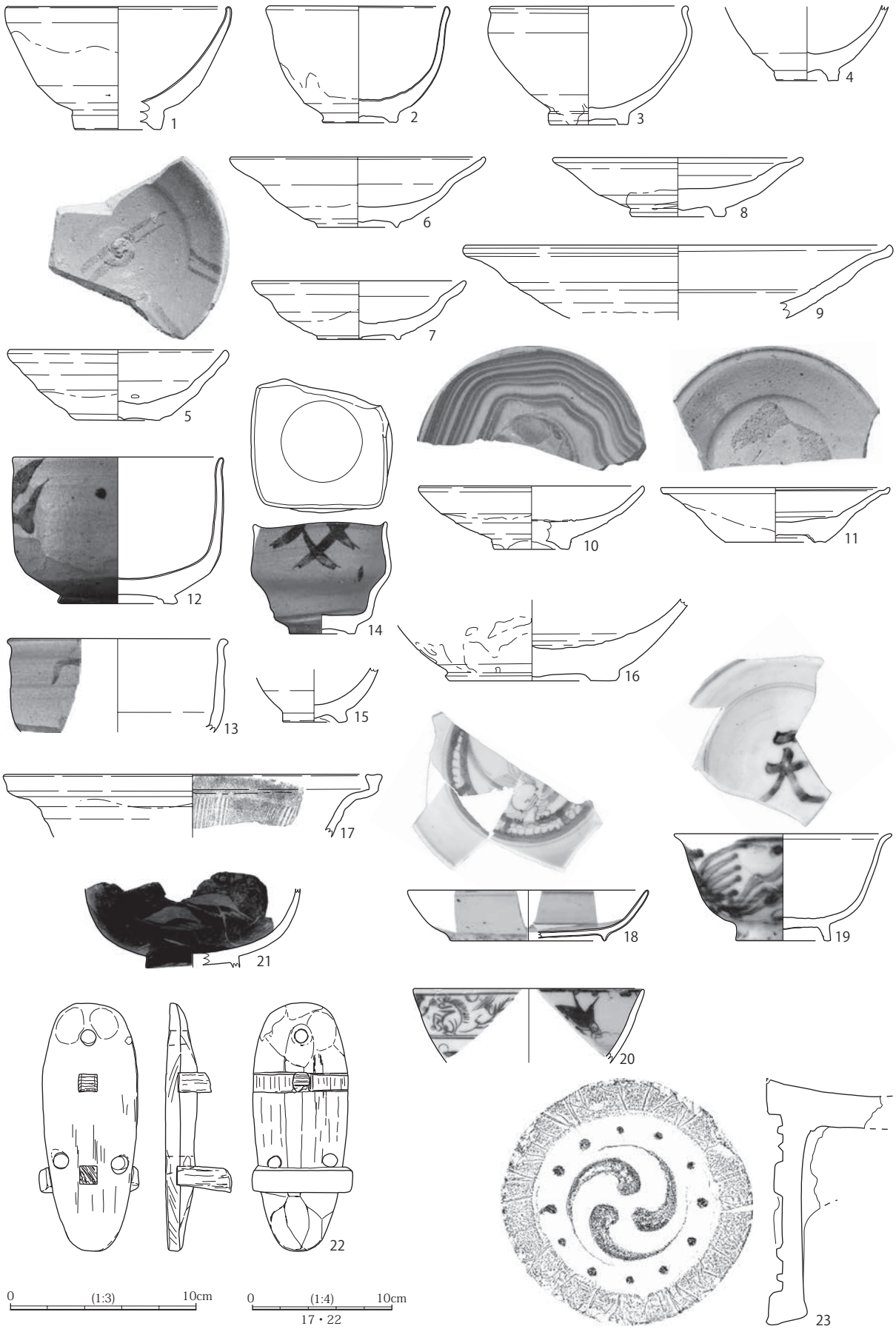


図111　第２面　2330－１濠上層出土遺物（３）

～粘土ブロックが多く混じる褐灰色中砂質細砂で一気に埋め戻している様子が観察できた。一方、東壁断面〔図９〕では何段階かに分けて埋め戻しを行っている様子が観察できた。図118－25と図９－156は同質と考えられる。したがって、西側を先に埋め戻し、その後東側を埋めていったと理解したい。

次に出土遺物をまとめる。先ず下層出土遺物についてであるが、洪水砂であるため、遠隔地から運ばれてきた遺物を含んでいる可能性がある。土師質皿・甕・羽釜、瓦燈、須恵器、瓦器皿、備前擂鉢・甕、丹波擂鉢、瀬戸美濃碗、肥前陶器碗・皿、中国磁器碗・皿、羽口、瓦、椀形滓、貝、骨などが出土している。16世紀前半頃の古い遺物も含んではいるが、肥前陶器鉄絵皿など16世紀末～17世紀初頭の遺物も出土している。図112－１～４は土師質皿である。３は胴部外面を強くナデ、段をつくる。図112－５・６は土師質甕である。５は玉縁、６は口縁部断面が逆台形を呈する。図112－７は土師質羽釜である。図112－８は油煙が付着する瓦燈である。図112－９・10は備前擂鉢、11は備前甕である。図112－12は丹波擂鉢で、ヘラ状工具で一本擂目を密に施す。図112－13は肥前陶器折縁皿である。鉄絵が描かれる。図112－14は瀬戸美濃碗である。見込が広いが、胴部の立ち上がりからみて碗であると思われる。底部には輪ドチ痕が残る。図112－15～17は中国磁器である。15・16は景徳鎮窯、17は漳州窯である。

中層出土遺物量はさほど多くはない。土師質蓋・羽釜・火鉢、焼塩壷、須恵器、瓦質擂鉢、備前擂鉢・甕、肥前陶器皿、中国磁器碗、瓦、貝、骨などが出土している。肥前陶器灰釉皿以外は、16世紀代の比較的古い遺物が出土している。中層では基盤層が垂れ込む状況が確認できた。よって、これらの古い遺物は基盤層から紛れ込んだ遺物と考えられる。図113－１は土師質蓋である。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面は無調整である。図113－２は備前甕である。図113－３は備前擂鉢である。図113－４は肥前陶器灰釉皿である。大橋編年Ⅰ期に属する。図113－５は中国景徳鎮窯染付碗である。

次に上層出土遺物についてであるが、土師質皿・蓋、瓦質甕、備前擂鉢・甕・汁注ぎ、肥前陶器皿、中国磁器碗・皿、漆器椀、瓦転用円盤、羽口などが出土している。図113－６は土師質皿である。見込には比較的粗めのハケメが顕著に残る。図113－７は土師質蓋である。図113－８は瓦質甕、図113－９は瓦転用円盤である。図113－10～13は備前陶器である。13は汁注ぎである。注ぎ口の左側に十字の線刻が残される。窯印であろうか。図114－14・15は肥前陶器皿である。14は大橋編年Ⅱ期に属する灰釉皿である。混入の可能性が高い。15は珍しい器形で、器高が高台径を下回る。全面施釉され、畳付には砂目跡が認められる。胎土目陶器と共に持ち込まれた初期の砂目と考えられる。図113－16～19は中国磁器である。16・19は景徳鎮窯、18は漳州窯のものである。17は表面が乳白色を呈し、青磁の焼成不良である。高台内に墨書が残るが、欠損しており判読できない。図113－20は漆器椀である。内・外面ともに黒漆を塗り、見込に朱漆で文様を描く。図113－21は鍛冶用羽口である。

図114に掲げるのは、2330濠出土として一括で取り上げた遺物であり、2330－１濠と2330－２濠、どちらに属するものかは不明である。１は土師質羽釜である。２は肥前陶器灰釉皿である。３は備前こね鉢である。４～６は中国景徳鎮窯磁器である。７は片状ホルンフェルス製の仕上砥（合砥）である。８は真鍮製煙管の雁首である〔図版15右３〕。

最後に2330－２濠が機能していた時期について検討したい。埋没時期に関しては、南隣に掘削される2330－１濠が1615年に機能していたことから、遅くとも17世紀初頭には完全に埋め戻されたと推定される。一方、掘削時期に関しては、基盤層から紛れ込んだ遺物とそうでない遺物の判別は困難であり、確実にこの年代と言える状況にない。しかし、2330－２濠の北側に位置する2325濠・2300濠よりは新しい段階に掘削されたと考えられることから、16世紀末頃を掘削年代として想定できよう。

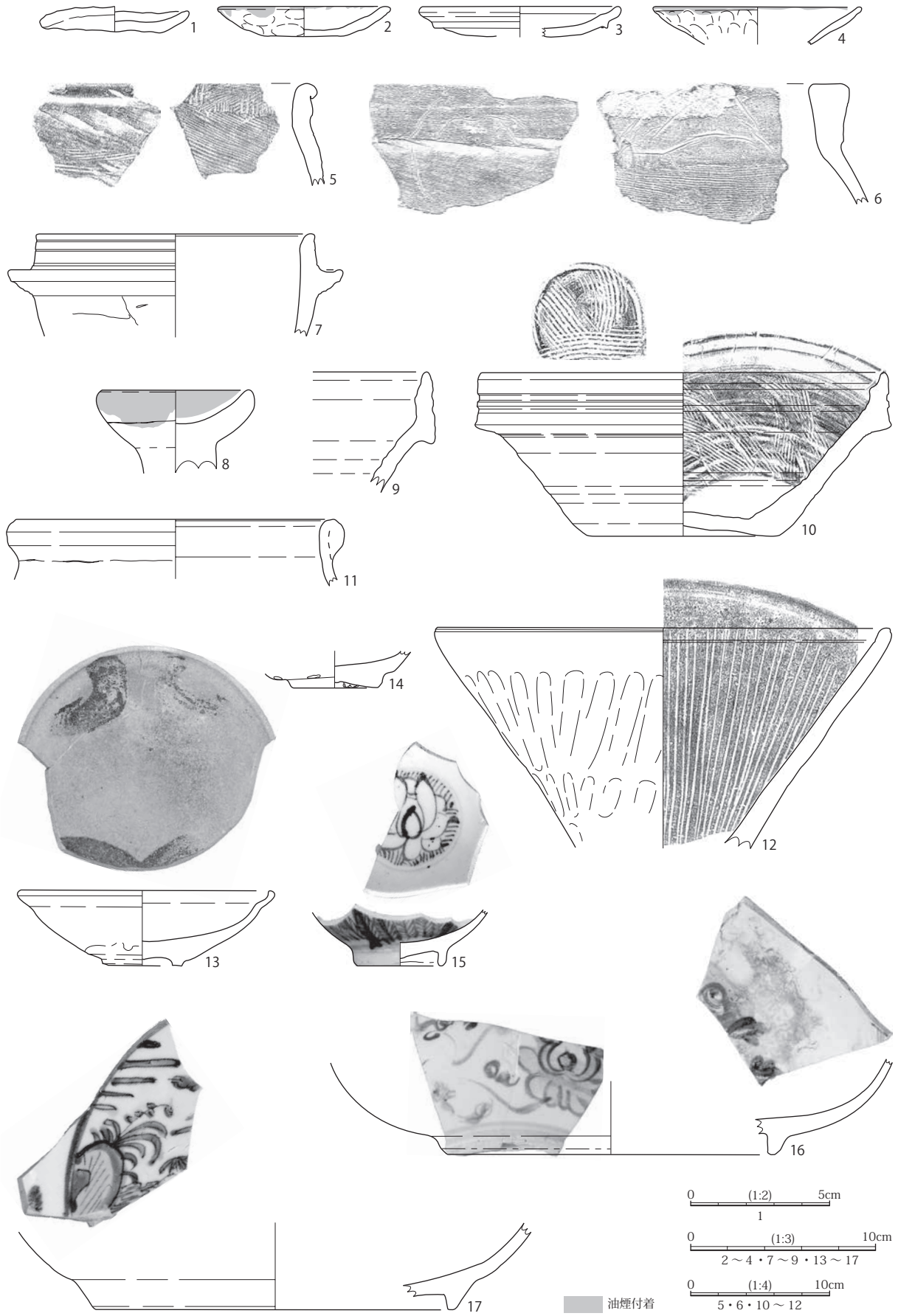


図112　第３面　2330－２濠下層出土遺物

図113　第3面　2330－2濠中―上層出土遺物

2325濠〔平面図：図107、断面図：図９・118、遺物：図115、写真：図版13－１・２〕：主軸はＮ－81°－Ｗである。幅約6.0m、深さ約1.8mを測る。底面の標高はＴ.Ｐ.0.8m、検出面標高はＴ.Ｐ.2.6m付近であった。基盤層として、１調査区における第10層を確認した。

埋土を下層・中層・上層に大別した。下層は図９－78～84・図118－18～29、中層は図９－75～77・図118－９～17に対応し、上層は上記より上位の地層である。なお、下層に分類したが、図９－79・82～84・図118－29は、濠機能時の堆積層ではなく、肩からの崩落層と考えられる。

2325濠堆積状況はアゼ断面と東壁断面において大きく様相が異なる。以下は、堆積環境が明瞭に観察できるアゼ断面を中心に記述する。

下層を更に下部（図118－24～28）・中部（図118－22～23）・上部（図118－18～21）に細分した。下部は暗灰黄色粘土質シルトと黄褐色極細砂～粗砂の互層からなり、それぞれの層厚は１～２㎝である。砂層ではラミナが顕著であった。中部は明褐色粗砂～中礫からなる。上方粗粒化が観察できたことから、洪水などの強い流水によってもたらされた土砂と考えられる。上部は下部と同様で、シルトと砂の互層からなる。

中層は中礫が混じる褐色中砂～極粗砂を主体とする。いずれも強い流水によってもたらされた土砂であるが、間に黒褐色粘土層（図118－14・16）を挟むことから、一度ではなく三度に分けて堆積したと推定される。この堆積層によって、濠の深さは半減する。

上層を更に下部（図118－６）・上部（左記以上の層）に細分した。下部はオリーブ黒色粘土層からなり、濠の最終機能時の堆積層である。層厚は約0.4mを測る。埋没直前は滞水状態にあったことが推測できる。上部は細礫混じりの褐灰色細砂～粗砂を主体とする、埋め戻し土である。その重みで一部はブロック化し下部の粘土層へ沈み込んでいた。これらの埋め戻し土の中には基盤層もブロック状で含まれ

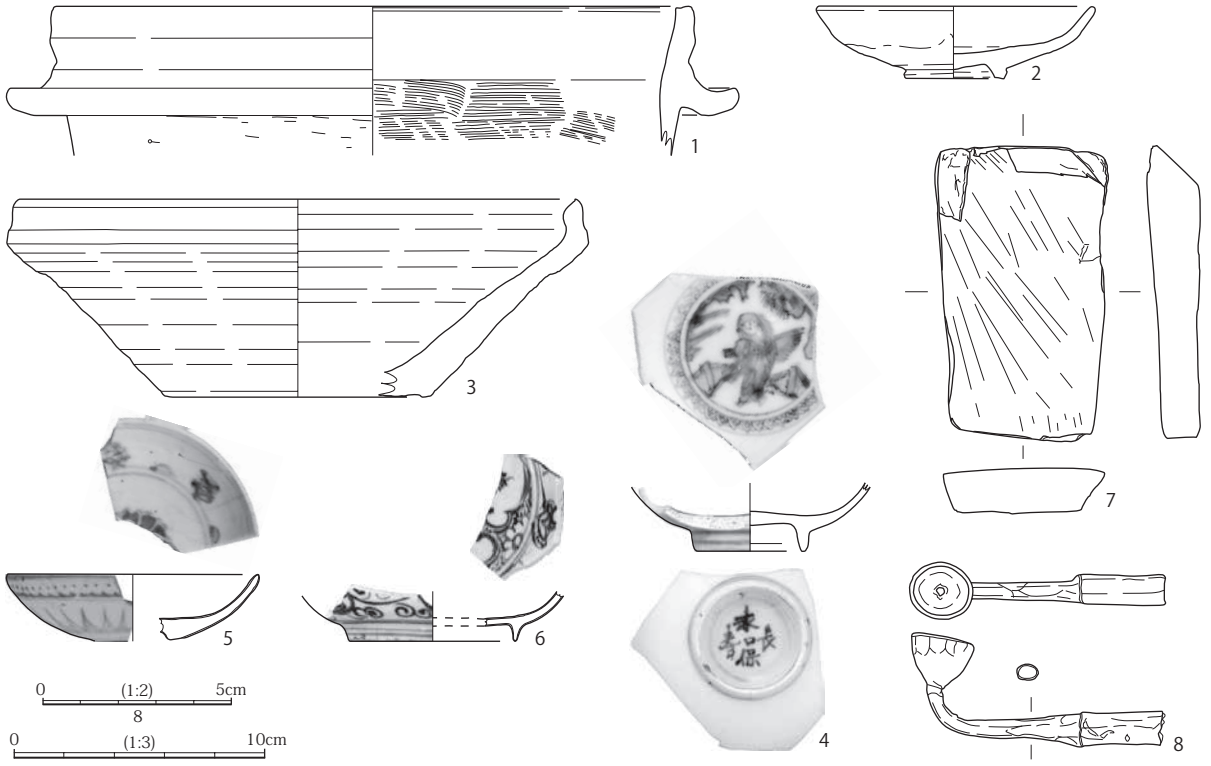


図114　第２・３面　2330濠出土遺物

ていたことから、濠周辺の土を利用して埋め戻したことが推測される。

一方、東壁断面においては、アゼ断面の下層・中層はかろうじて観察できる状態で、それより上位の層では埋め戻し土の複雑な堆積が観察できる。東西方向の断面を確認することができなかったため、アゼ断面との対応関係については明確ではない。

次に出土遺物について述べる。図115－１～９は下層、10～15は中層、16～23は上層出土遺物である。下層からは、細片も含めて50点ほどの遺物が出土した。土師質皿・甕・堝・擂鉢・羽釜、瓦質甕・こね鉢・火鉢・羽釜、須恵器、備前甕・擂鉢、丹波壷、信楽壷、瀬戸美濃鉢、肥前陶器皿、中国磁器碗・皿、瓦などが出土した。１は土師質堝である。外面の胴部下半は右上がりのタタキが施される。２は土師質擂鉢であるが、在地のものとはタイプが異なる。３は瓦質羽釜である。瓦質羽釜は合計12点出土した。そのうち１点は口縁部が直立気味で16世紀前半頃の遺物の可能性があるが、それ以外はすべて口縁部が内傾するタイプで15世紀後半のものである。４は瓦質甕である。５は備前甕である。備前陶器の出土量が目立つが、多くは甕・擂鉢の破片であり、個体数的に優位であるか否かは不明である。年代が特定できたのは数点ではあるが、擂鉢では乗岡編年中世５期～６期にかけてのものがある。６は肥前陶器灰釉皿である。大橋編年Ｉ－１期に属する。７は中国景徳鎮窯染付皿である。十字花文が描かれる。８・９は中国龍泉窯青磁である。龍泉窯青磁は７点出土しており、うち２点が稜花皿、５点が碗である。９の稜花皿については見込釉剥ぎがされており、16世紀後半頃のものであろうか。

中層からは、20点ほどの遺物が出土した。洪水砂であるため、遠隔地の遺物である可能性がある。土師質甕・瓦質火鉢・羽釜、須恵器、備前甕・擂鉢、中国龍泉窯青磁碗、朝鮮王朝白磁皿、羽口、布目瓦などが出土した。10は瓦質羽釜である。11は備前擂鉢、12は備前甕である。下層と同じく、備前陶器の出土量が目立つ。13は中国龍泉窯青磁稜花皿である。14は土龍泉である。見込に文字（不明）をスタンプする。表面はにぶい黄褐10YR5/4を呈する。高台内は釉剥ぎする。15は朝鮮王朝白磁皿である。表面は灰白5Y8/1を呈する。高台は無釉で墨書が残る。

上層からは、40点ほどの遺物が出土した。土師皿・甕・羽釜、須恵器、瓦器皿、瓦質火鉢・甕・羽釜、備前擂鉢・甕・壷、丹波壷、瀬戸美濃天目茶碗、信楽壷、常滑甕、絵唐津を含む肥前陶器、中国龍泉窯青磁碗、ベトナム陶器長胴壷、瓦転用円盤、布目・道具瓦などが出土している。16は土師質蓋、17は土師質羽釜、18は土師質甕である。19は肥前陶器あめ釉碗である。20は肥前陶器灰釉皿である。胎土目跡が４ヶ所残る。21は瀬戸美濃天目茶碗である。大窯の後半段階のものであろう。22は常滑甕である。23は中国青磁香炉である。

最後に2325濠が機能していた時期について検討したい。上層出土遺物には16世紀前半までの古い遺物が多い傾向があるが、新しい遺物としては肥前陶器が出土している。含まれる肥前陶器は大橋編年Ｉ－１期までのものであること、埋め立てた跡地からは大坂夏の陣の焼土に覆われた中世町屋を検出したことを勘案すると、埋没時期は16世紀末頃を推定できる。一方、掘削時期については、下層からは15世紀後半～16世紀前半の遺物が集中して出土している。しかし既往の調査によれば、当調査区付近まで中世都市が拡大するのは16世紀中頃以降のことであり、15世紀後半にこの地に濠が掘削されていたとは考えにくい。古い遺物は濠の基盤層（１調査区における第10層）から紛れ込んだ可能性が高いと考えるべきであろう。下層からは１点のみであるが肥前陶器が出土している。よって、16世紀後半を掘削時期として推定したい。また、既往の調査では２重の濠が検出されており、都市内側に幅広の濠、外側に幅狭の濠が掘削されている事例がある。2325濠と後述する2300濠の検出状況と類似していること、また出土遺

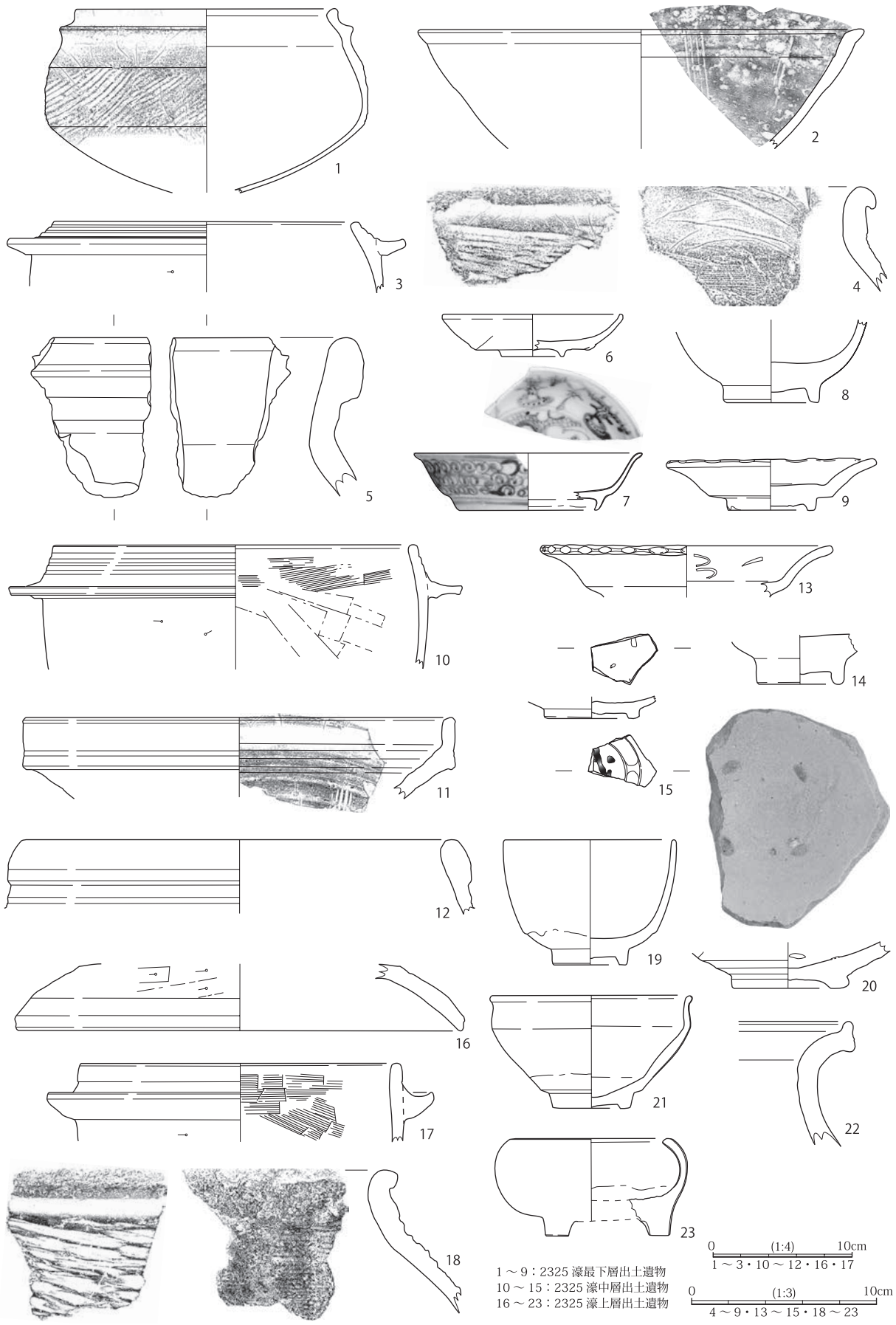


図115　第３面　2325濠出土遺物

物の時期から、これら２条の濠が並存していた可能性がある。

2300濠・2361土塁〔平面図：107、断面図：図９・118、遺物：図116・117、写真：図版12〕：主軸はN−76°−Wである。幅約17.0m、深さ約4.2mを測る。底面の標高はT.P.−1.8m、検出面はT.P.2.4m付近であった。基盤層として、１調査区における第10層を確認した。濠は法面中腹にテラスがあり、断面は逆凸形を呈する。

濠の掘削土を利用して北側（都市の内側）に土塁が構築されていた（図118−79〜93）。埋め戻しはこの土塁を崩して行われたようで、遺存しているのは土塁の下部のみであった。土塁は重層的に構築されており、細砂〜粗砂といった主として砂層からなる。

濠の埋土を下層・中層・上層に大別した。下層は図９−32〜37・図118−54〜78、中層は図９−16・24〜31・図118−32〜53、上層は図９−17〜23・図118−21〜29に対応する。下層が濠機能時の堆積層、中層は土塁を崩した埋め戻し土である。上層は新たに濠もしくは溝として機能していた時の堆積層とその埋め戻し土である。なお、上記に記載されていない層については、中世の整地層と考えられる。

下層はオリーブ黒色粘土からなる。綿密に観察すると、粘土層内には非常に細かい単位で極細砂が堆積しラミナを観察できた。また濠両肩でしか確認できないが、オリーブ黒色粘土と灰オリーブ色シルト質極細砂〜細砂が互層となり、砂層においては非常に細かい単位のラミナを確認した。以上の堆積状況の観察から、濠は主として滞水状態にあったが、時には水の流れがあったことが推測できる。

この下層から採取したサンプルの珪藻分析を行った。当調査地は中世の推定海岸線から0.6〜0.7㎞東に位置し、また濠の底面はT.P.−1.8m（O.P.−0.5m）であることから、海からの影響を受けていてもおかしくはない。しかし、検出された珪藻は淡水生種で占められており、海と繋がっていたことは証明できなかった。当調査地よりも西側に堰状もしくは土橋状の施設が存在した可能性も想定できる。

中層は埋め戻し土である。断面図にも顕著であるが、北から南へ向けての堆積が確認でき、これは北側に存在した土塁を崩しながら埋めていった結果と推察できる。埋め戻しは段階的に行われているが、その主体は細礫が混じる青みがかった暗灰色細砂質シルトからなる。これらの埋め戻し土にはオリーブ灰色極細砂質シルトブロックや黒褐色シルト〜粘土ブロックが多く混じっているが、2300濠掘削時に掘りあげられた低位段丘構成層やその上位の黒色粘土層（１調査区第11層）がブロック状となって混じり込んでいるものと考えられる。ところで、埋め戻し土の間には薄く粘土層が堆積する（図９−28・30、図118−50）。これは埋め戻し作業の中断時の堆積層と考えられる。これほどの規模の濠であるから、当然埋め戻しも段階的に行われており、雨などの水の流入によって堆積した粘土層であると推測した。

上層は中層とは明らかに異なる堆積状況を示す。埋め戻しは一端中層で終了し、新たに濠あるいは溝として機能していたようである。平面上では検出できず、断面のみでの確認となった。幅は約７mを測る。東壁断面で確認した底面はT.P.0.0m付近であったので、深さは２m以上あったと推定できる。底面には黒色粘土が堆積しており、これは濠機能時の堆積層であると考えられる。最終的には褐灰色シルトブロック、細礫が混じる暗灰黄色粗砂〜極粗砂で濠は埋め戻される。

次に出土遺物についてであるが、法面をつけての掘削であったため、掘削面積が限られていた。出土遺物は極めて少なく、下層・中層・上層あわせて40点ほどである。下層からは20点ほどの遺物が出土した。土師質甕・蓋、須恵器、瓦器皿、瓦質羽釜・片口鉢、中国青磁、木製品（板材・下駄・曲物）などが出土している。その中でも瓦質羽釜は８点と出土率が高い〔図116−３〜６〕。いずれも15世紀後半のものである。下層出土遺物で一番時期が新しいのは、図116−１の土師質蓋である。同類のものは他の

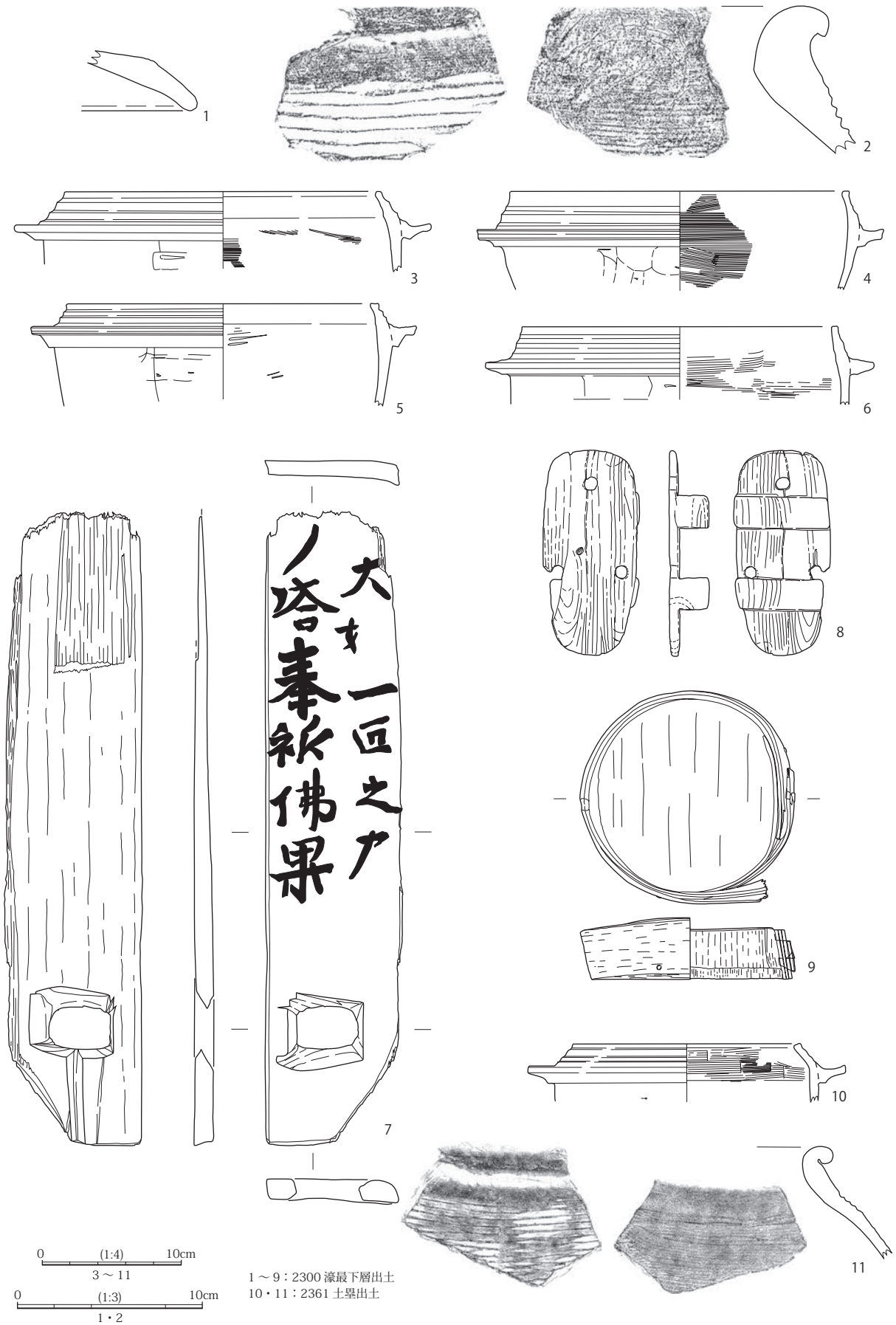


図116　第３面　2300濠（１）、2361土塁出土遺物

濠からも出土しているが、16世紀第３四半期頃から出現するものと考えられている。図116－２は瓦質甕である。図116－７は卒塔婆を転用した板材である。図116－８は丸型連歯下駄であるが、サイズからみて子供用と考えられる。図116－９は曲物である。

中層と上層は一括で遺物を取り上げた。土師質皿・甕・堝、須恵器杯、瓦器皿、瓦質羽釜・鉢、備前擂鉢・壷、瓦、貝、骨、木製品などが出土している。15世紀後半～16世紀初頭にかけての遺物が中心である。出土遺物の中で一番時期が新しいと考えられるのは図117－１の土師質甕である。口縁部断面は逆台形を呈し、16世紀後半頃のものであろう。図117－２は瓦器皿である。口縁部に油煙が付着する。図117－３は瓦質こね鉢である。図117－４・５は備前擂鉢である。乗岡編年中世５期に属する。図117－６・７は両口箸である。

図116－10・11は2361土塁出土遺物である。10は瓦質羽釜、11は瓦質甕であるが、15世紀後半～16世紀初頭頃のものである。その他、須恵器、土師質皿、羽口、布目瓦など、破片も含め20点ほどの遺物が出土している。

上記のように、2300濠からは15世後半～16世紀初頭にかけての古い遺物が出土している。しかし、濠の基盤層（１調査区における第10層）から瓦器皿を初めとした古い遺物が出土しており、濠掘削時に基盤層を掘ることで古い遺物が混じり込んだり、または基盤層が濠内に崩落したりすることで、古い遺物も同時に落ち込んだ可能性が高い。既往の調査から、当調査区あたりまで中世町屋が広がるのは早くても16世紀中頃以降と推定されている。都市域拡大に伴いこの地に濠が掘削されたのであれば、16世紀後半頃を掘削年代として推定するべきであろう。

なお、現地説明会資料では2300濠が15世紀後半に掘削された可能性があると記載したが、既往の調査と出土遺物を詳細に検討した結果、上記のように16世紀後半と考えるのが妥当との結論に至ったので、

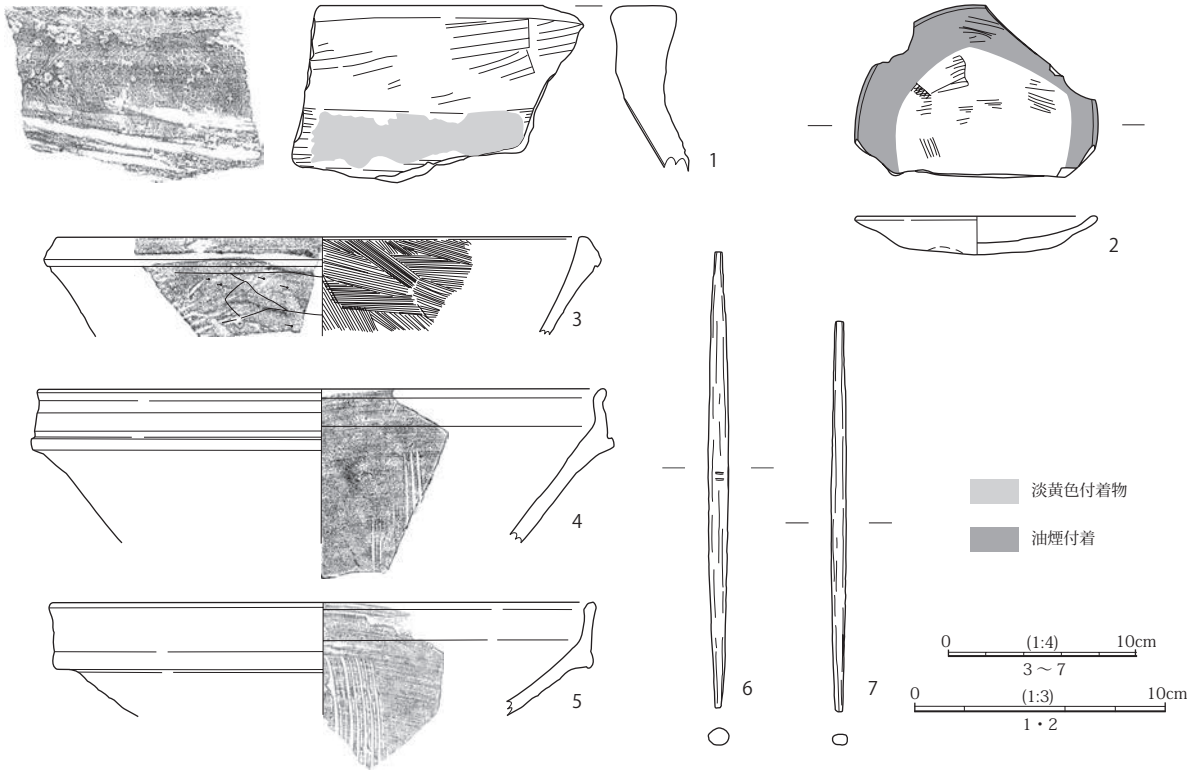


図117　第３面　2300濠出土遺物（２）

ここに訂正しておく。

ところで、既往の発掘調査でも土塁を崩し、その土砂で埋め戻すことによって幅を狭めている濠が検出されており、これは1586年（天正十四年）豊臣秀吉による濠埋め戻し令に対応したものと考えられている。この2300濠埋め戻し状況もそれに酷似しており、秀吉によって埋め戻された濠である可能性が高い。また、肥前陶器が１点も出土していないことを勘案すると、幅を狭め新たに濠もしくは溝として機能していた部分も含め、16世紀末までには埋め戻されていたと推定される。また、2325濠でも述べたが、既往の調査で２重の濠が検出されており、2300濠と2325濠の状況と酷似している。よってこの２条の濠が並存していた可能性がある。

小結

最後に、２調査区の調査成果についてまとめておきたい。第１－２面では、中世都市から近世都市へと変貌を遂げる過程の一端が垣間見られた。１調査区検出の240溝は、2330－１濠の排水の役割を担っていた可能性についてはすでに述べたが、ただ埋め立てるのではなく、排水することで強固な地盤を築くことを意識している。また、排水後は建物建設のために粘土を用いて地業を行っている。つまり、その場所が通りに面した表側であるという認識を前提に、濠の埋め戻しを行ったのであろう。都市再建が丹念に計画され、一環事業として行われていたことが推察できる。

また、第２面においては、埋め立てられた濠の上にも中世町屋が建ち並び、都市域が拡大されていたことが明らかとなった。既往の調査によれば、中世の町割りは三つのグループに分類される。そして各グループの方向軸には時期的変化が殆ど認められていない。当調査地は、三つの中でも最も開発が遅れたグループに属し、16世紀中頃以降に町屋として機能し始めた場所であると推定されている。その方向軸はN－２°～７°－Eで、和泉国大鳥郡塩穴郷の条里（N－３°－E）に規制されていた[2)]。今回検出した礎石の軸はN－７°－E、それと直交する溝の軸はN−93°－Eであった。また、１調査区においては鋤溝群を検出したが、その軸もほぼ同様の方向である。

第３面においては、中世都市堺を取り囲んでいた濠を４条も検出するという成果を得た。堺環濠都市遺跡の発掘調査件数はすでに1000件に近いが、幅６ｍを超える濠を検出したのはわずか20例ほどである。これまでの中世環濠に対する理解では、発見された濠を繋げることで漠然とそのラインが推定されていた。しかし今回の４条の濠検出にあたって、掘削と埋め戻しを何度も繰り返していることが明らかとなった。したがって、単純に発見された濠を繋ぐだけでは、中世堺環濠都市の全貌は窺えないと言える。

濠の基盤層からの混入遺物が多く、実際の機能時期を反映する遺物が少ないという制約はあるが、出土遺物から濠の変遷について検討してみたい。各濠は大きく２～３層に分層したが、上下の層からの出土遺物に時期幅があまり見られないという共通点がある。しかし、それぞれの濠の出土遺物を比較すれば、少しずつ時期差がみえてくる。まず、一番古いと推定した2300濠からは、16世紀後半の遺物は出土するが、肥前陶器は１点も出土していない。その次もしくは同時期に機能していたと考えられる2325濠からは、16世紀後半の遺物と伴に大橋編年Ⅰ－１期の肥前陶器が１点出土している。一方、2330－２濠からは、胎土目段階（大橋編年Ⅰ－２期）までの肥前陶器が出土している。なお、１点だけ大橋編年Ⅱ期の肥前陶器が出土しているが、混入の可能性が高い。2330－２濠を切る2330－１濠下層では胎土目と砂目が共存し、上層では砂目の量が増える。そして2330－１濠上部を利用した2343廃棄土坑では、17世

紀中頃までの肥前磁器が多量に出土する。このように、出土遺物検討の結果、北から南へと濠の位置を移動させていることが推定できる。また、各濠出土遺物には数十年という短い単位での変化がみられることから、濠は短期間のみ機能していたことが推定される。

最後に、同時期に存在した可能性のある2300濠と2325濠について検討したい。憶測にすぎない点も多いとは思うが、今後の調査への課題としてここに記したい。

両濠の相違点はまずその規模である。2300濠は幅約17.0m、深さ約4.2m（底面標高T.P.－1.8m）に対し、2325濠は幅約6.0m、深さ約1.8m（底面標高T.P.0.8m）を測る。また第２の相違点として、2300濠は滞水していたが、2325濠は水が流れていたという堆積相の違いが挙げられる。この規模と堆積相の違いは、それぞれの濠の役割と関係があると推察した。

2300濠はその規模から防御を意図したものであることは間違いなかろう。またその深さから、水源を外部に求めずとも、地下水によって自然と水を湛えていたものと推察できる。堰や土橋状の施設で濠が分断されていた可能性についてはすでに述べたが、下層における粘土層の堆積を勘案すると、水が堰き止められ淀んだ状況を想像するに難くない。一方、2325濠の底面標高はT.P.0.8mで、おそらく地下水位より高い標高と思われる。発掘調査時にもほとんど水は湧き出なかった。しかし、断面観察から水が流れていたことは明らかであり、水を供給する水源があったと考えられる。珪藻分析の結果では、2325濠では河川の影響が示唆されている。東が高く、西へと低くなる地形を考慮すれば、当調査地よりも東側に流れていた河川と繋がっていたと推測できる。

2325濠は防御としての役割は2300濠に劣ると考えられる。両濠が同時に存在したのであれば、何らかの別の目的をもって、2300濠の外側に2325濠は掘削されていたのではないだろうか。当調査地は和泉国大鳥郡塩穴郷の条里に規制されていたことはすでに述べたが、都市が拡大する以前はこの条里に従った農耕地が広がっていたと推定されている。本来灌漑用水を引くために掘削されていたものを濠として再利用した可能性についてはすでに指摘されている[2)]。2300濠は規模が大きく、また内側に存在するため、農耕地へと水を引くのは困難と思われる。しかし2325濠に関しては、耕地へ水を供給する灌漑用水路として利用されていた可能性を想定できるのではないか。2325濠は強い流水による堆積層（中層）によって深さが半減し、それ以後は滞水状態にあったと考えられる。この流水による堆積層によって下流が埋まり、水が堰き止められたと推測できる。その結果、灌漑用水路としての機能はしだいに失われ、埋め戻しへの一途をたどったのではないだろうか。

今後の調査において資料が蓄積され、堺環濠都市についての更なる解明を期待したい。

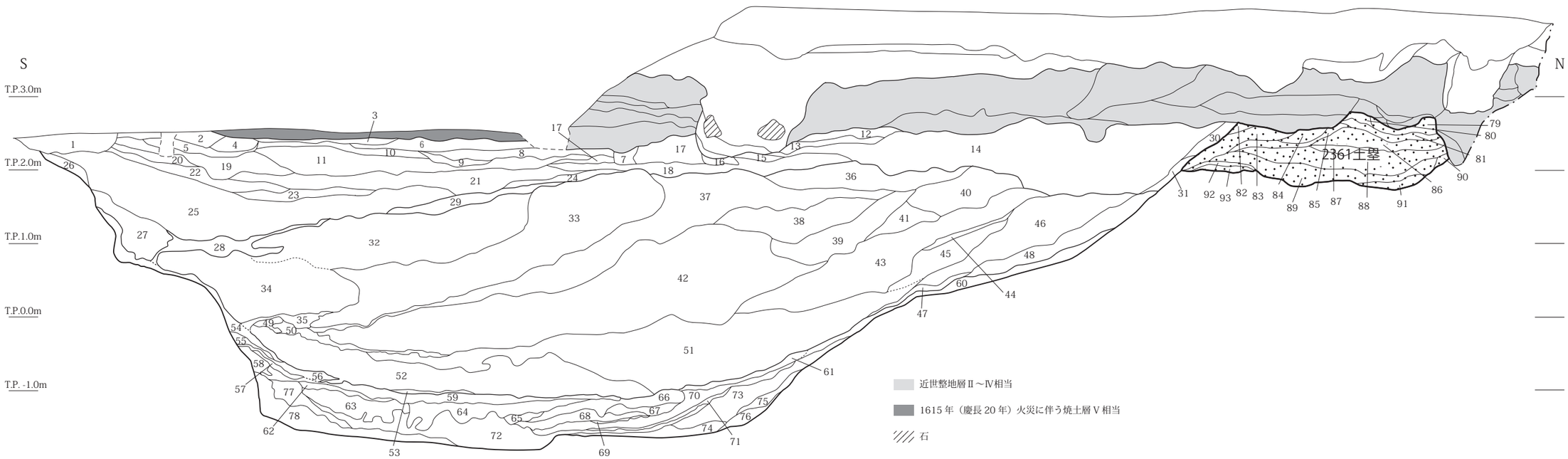
現地説明会資料に記載した濠の名称との照合について、2300濠＝濠１、2325濠＝濠３、2330－１濠＝濠２－１、2330－２濠＝濠２－２となる。なお、番号は濠の掘削の順番を示すものではない。

財団法人　大阪府文化財センター　2007『堺環濠都市遺跡SKT960』（現地説明会資料）

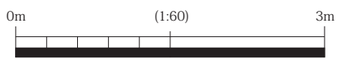
註

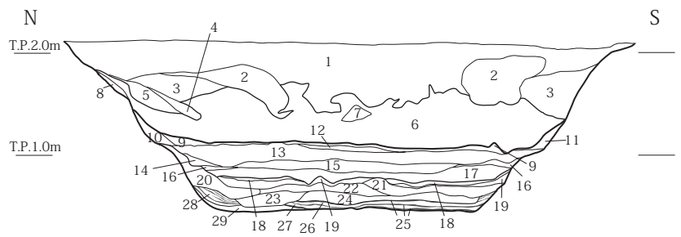
１）江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

２）續伸一郎　1994「中世都市堺　都市空間とその構造」『都市空間―中世都市研究１』中世都市研究会

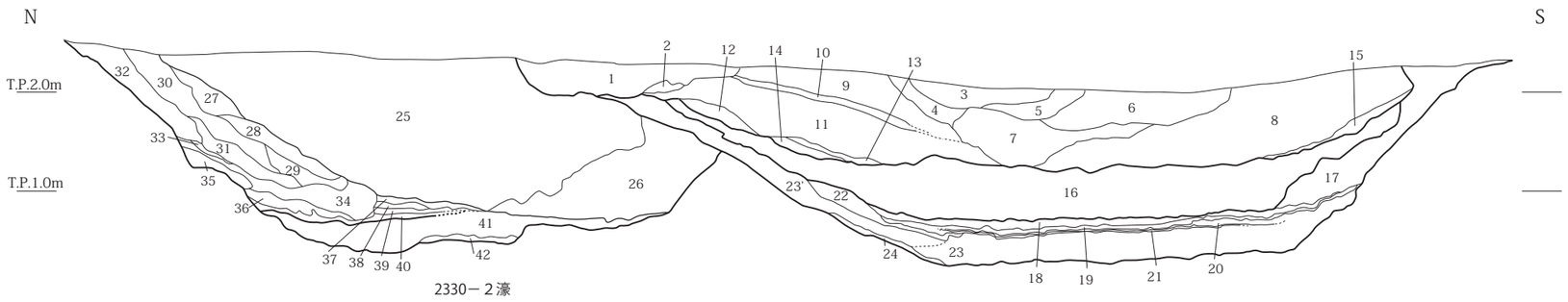


2300濠　西側断面図

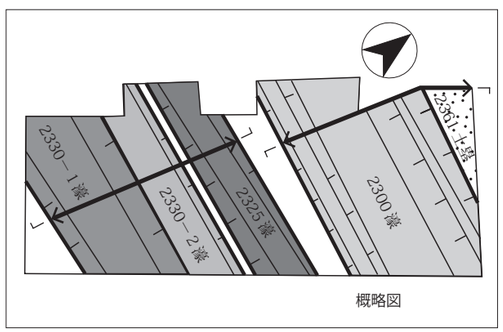




2325濠　アゼ断面図



2330濠　アゼ断面図



概略図

図118　濠アゼ　断面図

2 調査区濠アゼ断面図土色

2300濠

1.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質細砂（土坑埋土）　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、炭混じる
2.褐灰10YR4/1　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
3.黒褐7.5YR3/2　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、焼土混じる
4.黒褐10YR3/2　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
5.褐灰10YR4/1　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、シルトブロック（12層）混じる
6.褐灰10YR4/1　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
7.オリーブ黒7.5Y3/2　細砂～粗砂　0.2cm前後の礫混じる
8.黒褐2.5Y3/1　細砂質シルト　シルトブロック（12層）混じる
9.黄灰2.5Y4/1　シルト質細砂　粘土質シルトブロック混じる
10.暗灰黄2.5Y4/2　細砂質シルト
11.黒褐10YR3/1　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、シルトブロック（12層）混じる
12.にぶい黄褐10YR4/3　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、細砂混じる
13.黒褐10YR3/2　細砂～極細砂　粘土質シルトブロック混じる
14.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
15.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
16.灰5Y4/1　粘土質シルト　0.2cm前後の礫、シルト質細砂ブロック混じる
17.オリーブ黒5Y3/2　細砂～中砂　シルトブロック混じる
18.灰7.5Y4/1　粘土質シルト　0.2cm前後の礫、細砂ブロック混じる
19.にぶい黄褐10YR4/3　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、シルトブロック混じる
20.黒褐2.5Y3/1　細砂質シルト　0.2cm前後の礫混じる
21.黒褐2.5Y3/1　細砂質シルト（木片含む）　0.5～3cm前後の礫、炭、焼土、細砂混じる
22.黒褐2.5Y3/1　極細砂～細砂　シルトブロック混じる
23.黒褐2.5Y3/2　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック（12層）混じる
24.オリーブ黒5Y2/2　細砂質シルト　0.2cm前後の礫混じる
25.オリーブ黒5Y3/2　粗砂混シルト質細砂　0.5～2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、シルトブロック混じる
26.黄褐2.5Y5/4　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
27.オリーブ黒5Y3/2　極細砂～細砂（木片含む）　粘土質シルトブロック、シルトブロック混じる
28.黒10Y2/1　粘土
29.黒褐2.5Y3/1　シルト　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
30.黄褐2.5Y5/4　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
31.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト　0.2cm前後の礫混じる
32.オリーブ褐2.5Y4/3　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
33.オリーブ黒5Y3/1　細砂～中砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
34.オリーブ黒5Y3/2　細砂～極細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
35.黒2.5Y2/1　シルト
36.黒褐10YR3/1　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、シルトブロック（12層）混じる
37.オリーブ黒5Y3/1　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、シルトブロック（12層）混じる
38.灰オリーブ5Y4/2　細砂質シルト　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
39.灰オリーブ5Y4/2　粘土質シルト　0.2cm前後の礫混じる
40.オリーブ黒5Y3/2　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
41.オリーブ黒5Y3/1　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
42.灰10Y4/1　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
43.オリーブ黒5Y3/1　細砂～極細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
44.灰オリーブ5Y4/2　極細砂～細砂混粘土質シルト　0.2cm前後の礫混じる
45.オリーブ黒5Y3/2　極細砂～細砂　0.5～1cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
46.灰10Y5/1　極細砂混粘土質シルト　0.2cm前後の礫混じる
47.黒5Y2/1　粘土質シルト
48.暗灰黄2.5Y4/2　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
49.灰オリーブ5Y4/2　細砂質シルト　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
50.黒5Y2/1　粘土
51.オリーブ5Y5/4　粘土質シルト　0.2cm前後の礫混じる
52.暗オリーブ5Y4/3　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
53.オリーブ黒5Y3/2　シルト
54.オリーブ黒5Y3/1　中砂～粗砂
55.オリーブ黒4Y3/2　シルト
56.黒7.5Y2/1　粘土
57.オリーブ黒7.5Y3/2　極細砂～粗砂
58.灰7.5Y4/1　細砂～中砂　粘土質シルトブロック混じる
59.黒7.5Y2/1　粘土
60.オリーブ黒5Y3/1　極細砂～粗砂
61.黒5Y2/1　粘土
62.黄褐2.5Y5/4　シルト　粘土質シルトブロック混じる
63.オリーブ黒7.5Y3/2　細砂～中砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
64.黒褐2.5Y3/2　シルト質細砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック混じる
65.暗オリーブ褐2.5Y3/3　シルト質細砂
66.灰7.5Y4/1　細砂混シルト質極細砂　2～5cm大の礫含む　黒褐粘土ブロック混じる　緑灰10G5/1極細砂質シルトブロック混じる
67.オリーブ黒7.5Y3/1　粘土　0.2cm前後の礫混じる
68.オリーブ黒7.5Y3/1　粘土
69.灰オリーブ5Y5/2　極細砂質シルト　極粗砂含む
70.オリーブ黒7.5Y3/2　極細砂質シルト（下部にいくにつれ粘土質となる）
71.黒（少し青みがかった）10Y2/1　粘土
72.オリーブ黒5Y3/1　粘土
73.灰（青みを加えた）10Y4/1　粗砂～極細砂　0.5cm前後の礫混じる　φ1cm～3cm程の礫含む
74.オリーブ黒5Y3/1　細砂～極細砂質シルト　粗砂～0.3cm前後の礫混じる　緑灰10G5/1極細砂質シルトブロック混じる
75.暗オリーブ灰5GY4/1　粘土質シルトブロック、0.2cm前後の礫混じる
76.暗緑灰75GY4/1　極細砂～中砂　0.2cm前後の礫混じる
77.灰10Y4/1　細砂～粗砂　粘土質シルトブロック混じる
78.オリーブ黒10Y3/1　細砂～粗砂　0.2cm前後の礫、粘土質シルトブロック、シルトブロック混じる
79.黒褐2.5Y3/2　極細砂～細砂　0.2cm前後の礫、シルトブロック（12層）混じる
80.オリーブ褐2.5Y4/4　シルト質細砂　シルトブロック（12層）、粘土質シルトブロック混じる
81.黒褐2.5Y3/2　細砂～中砂　シルトブロック（12層）が多く混じる
82.オリーブ褐2.5Y4/3　細砂～粗砂
83.オリーブ褐2.5Y4/4　細砂～粗砂　0.2cm前後の礫、シルトブロック（12層）混じる
84.暗灰黄2.5Y4/2　細砂～中砂　0.2cm前後の礫、焼土、炭、シルトブロック（12層）混じる

85.暗オリーブ褐2.5Y3/3　シルト質細砂
86.オリーブ褐2.5Y4/3　細砂～中砂　シルトブロック（12層）混じる
87.オリーブ褐2.5Y4/4　細砂～粗砂　0.2㎝前後の礫、シルトブロック（12層）混じる
88.黒褐2.5Y3/2　細砂～粗砂混シルト（12層を主とする）　0.2㎝前後の礫混じる
89.オリーブ褐2.5Y4/4　細砂～中砂　シルトブロック（12層）混じる
90.オリーブ褐2.5Y4/3　細砂～粗砂
91.暗灰黄2.5Y4/2　極細砂～細砂
92.灰5Y4/1　細砂～中砂
93.黄褐2.5Y5/4　細砂～粗砂

2325濠

１.褐灰10YR4/1　シルト～細砂混中砂～粗砂　φ0.3～0.5㎝の礫混じる　黒褐10YR3/1粗砂混粘土ブロック多く混じる
２.黒褐2.5Y3/2　中砂～粗砂　黒褐2.5Y3/1粘土ブロック、オリーブ灰10Y5/2粘土質シルトブロック混じる
３.灰5Y4/1～オリーブ黒5Y3/1　粗砂～中砂混粘土　φ0.5㎝程の礫含む
４.オリーブ褐2.5Y4/3　粗砂～中砂混シルト　φ0.3～１㎝前後の礫多く混じる
５.暗灰黄2.5Y4/2　シルト質中砂～極細砂　φ0.2～１㎝の礫混じる　オリーブ5Y5/4極細砂質シルト～粘土ブロック混じる
６.オリーブ黒5Y3/1　中砂～細砂混粘土　φ１～２㎝の礫含む　オリーブ灰10YR4/2シルト質極細砂ブロック含む　下部は厚1.5～２㎝の帯状に暗オリーブ5Y4/3に変色
７.オリーブ黒5Y3/1　シルト～細砂混中砂～粗砂　φ0.3～0.5㎝の礫混じる
８.暗灰黄2.5Y4/2　極粗砂含シルト混中砂～極細砂
９.黒褐2.5Y3/1　中砂混粘土
10.黒褐2.5Y3/2　中砂～細砂混シルト質極細砂　φ0.4～0.7㎝の礫含む
11.黒褐10YR3/1　シルト混粗砂～中砂
12.黄褐2.5Y5/3　粗砂～中砂
13.褐10YR4/4　極粗砂～中砂　φ0.2～３㎝前後の礫多く混じる
14.灰黄2.5Y6/2　中砂～極細砂
15.褐10YR4/4　極粗砂～中砂　φ0.2～５㎝前後の礫多く混じる
16.黒褐10YR3/1　粘土
17.褐10YR4/4　極粗砂～中砂　φ0.2～３㎝前後の礫多く混じる
18.黄褐2.5Y5/3　粗砂～中砂
19.黒褐2.5Y3/1　粘土
20.黒褐10YR3/1　粘土（11層が垂れ込んだものか？）と暗灰黄2.5Y4/2粗砂～細砂が乱れながらも互層となる（ラミナ顕著）
21.黒褐10YR3/1　粘土と黄褐2.5Y5/3中砂～粗砂が乱れながらも互層となる
22.暗灰黄2.5Y5/2　極粗砂混粗砂　φ0.5㎝前後の礫混じる
23.明褐7.5YR5/8　（上方粗粒化）上:φ0.7～1.5㎝程の礫　中:φ0.5～１㎝までの礫　下:粗砂混極粗砂～φ0.3㎝前後の礫
24.黄褐2.5Y5/3　中砂質粗砂　φ１㎝大の礫含む
25.暗灰黄2.5Y4/2　粘土質シルト
26.黄褐2.5Y5/3　粗砂混じり中砂
27.灰オリーブ5Y5/2　極細砂～細砂
28.25～27が乱れながらも互層となる（ラミナを確認）
29.黒褐10YR3/1　粗砂混粘土　φ0.3㎝前後の礫含む

2330濠

１.黒褐2.5Y3/1　中砂混細砂　φ0.1～３㎝の礫含む　にぶい黄褐10YR5/3極細砂ブロック含む
２.黒褐2.5Y3/2　中砂混細砂（シルト僅かに含む）　φ0.1～３㎝の礫多く含む
　オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルトとオリーブ黒5Y3/2中砂混細砂質シルトが混じる　φ0.3～２㎝の礫僅かに含む　炭含む
３.黒褐2.5Y3/1　粗砂～中砂混細砂　暗オリーブ褐2.5GY4/1極細砂質シルトブロック、灰オリーブ5Y5/3極細砂ブロック、暗緑灰7.5GY4/1細砂ブロックが混在　φ0.3～３㎝の礫含む　炭僅かに含む
４.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト　φ２～３㎝の礫僅かに含む
５.黒5Y2/1　中砂混細砂質シルト～細砂　φ0.2～３㎝の礫含む　炭含む
６.黒褐2.5Y3/1　粗砂～中砂混細砂（シルト僅かに含む）　φ0.5～10㎝の礫僅かに含む　炭含む
７.オリーブ黒5Y3/2　粗砂～中砂混シルト質細砂　φ２～７㎝の礫僅かに含む　木質多く混じる
８.黒7.5Y2/1　粗砂～中砂混細砂質シルト　φ0.5～５㎝の礫含む　炭含む　木質多く混じる
９.黒褐2.5Y3/1　中砂混細砂　φ0.1～３㎝の礫含む　にぶい黄褐10YR5/3極細砂ブロック含む
10.オリーブ黒5Y3/1　中砂混細砂質シルト　オリーブ灰5GY5/1シルト質極細砂と灰オリーブ5Y5/2極細砂質シルトブロックが大部分を占める　φ0.1～３㎝の礫多く含む　炭僅かに含む
11.黒2.5Y2/1　粗砂～中砂混シルト質細砂　φ0.5～３㎝の礫含む　炭含む
12.黒褐2.5Y3/2　粗砂～中砂混細砂（シルト僅かに含む）　φ0.3～0.5㎝の礫多く含む　φ３㎝程度の礫含む
13.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト～粘土
14.暗灰黄2.5Y4/2　中砂混細砂　16をブロックとして含む
15.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト　φ0.3～２㎝の礫僅かに含む　黄灰2.5Y6/1粘土質シルトブロック含む　炭含む
16.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト～粘土　φ３～５㎝の礫含む
17.暗灰黄2.5Y4/2　中砂と黒褐2.5Y3/1粘土質シルトが混在　φ0.3～５㎝の礫含む　炭僅かに含む
18.灰10Y4/1　粗砂～中砂　φ0.1～0.5㎝の礫多く含む　φ1～2㎝の礫含む
19.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト　φ２～３㎝の礫僅かに含む
20.オリーブ黒7.5Y3/1　中砂～細砂　φ１～３㎝の礫僅かに含む
21.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト　φ２～３㎝の礫僅かに含む
22.上部は黒褐2.5Y3/2　粗砂混中砂　下部は黒褐2.5Y3/1粘土質シルト～細砂質シルト　φ２～３㎝の礫含む
23.オリーブ黒5Y3/1　粘土質シルト　灰オリーブ5Y4/2極粗砂～中砂ブロック含む
23′オリーブ黒5Y3/1　粗砂混中砂（上層に粘土質シルト僅かに含む）　φ0.1～0.5㎝の礫多く含む　φ２～４㎝の礫含む
24.オリーブ黒5Y3/1　細砂質シルト～粘土質シルト　下部にいく程中砂混細砂に変化　φ２～３㎝礫含む
25.黒2.5Y2/1　中砂混粘土質シルト　φ0.1～６㎝の礫僅かに含む　灰オリーブ5Y5/3シルト質極粗砂ブロック僅かに含む　上部に炭含む
26.黒2.5Y2/1　粗砂～極粗砂混中砂　φ0.1～0.5㎝の礫含む
27.黒褐2.5Y3/2　シルト質細砂　φ0.3～0.5㎝の礫含む　マンガン斑確認
28.黒褐2.5Y3/1　中砂混シルト質細砂　φ１～３㎝の礫含む　炭含む　ラミナ確認
29.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂～細砂　φ0.1～0.3㎝の礫含む　φ２～４㎝の礫僅かに含む　濠中央にいく程中砂混シルト質細砂に変化　北端にラミナ確認
30.暗オリーブ褐2.5Y3/3　粗砂混中砂　φ0.3～３㎝の礫含む
31.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂　φ１～８㎝の礫含む
32.黄褐2.5Y5/3　極粗砂～粗砂混中砂　φ２～６㎝の礫多く含む
33.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂　φ１～２㎝の礫含む
34.黒褐2.5Y3/1　シルト質細砂～極細砂　φ１～３㎝の礫含む
35.上部は黒褐2.5Y3/1　粗砂混中砂　下部は暗オリーブ2.5Y3/3シルト質中砂～細砂　φ１～４㎝の礫含む
36.暗灰黄2.5Y5/2　細砂～極細砂に黄褐2.5Y5/3極粗砂～粗砂混中砂が混じる　φ１～３㎝大の礫含む
37.黒褐2.5Y3/1　中砂混シルト質細砂　暗オリーブ2.5Y5/3粗砂混中砂～細砂ブロック僅かに含む　φ１～７㎝の礫含む　炭含む
38.黒褐2.5Y3/1　中砂混シルト質細砂　φ１～３㎝の礫僅かに含む　炭僅かに含む
39.暗灰黄2.5Y4/2　粗砂混中砂　φ0.5～１㎝の礫多く含む　φ２～３㎝の礫含む
40.黒褐2.5Y3/2　粘土質シルトに黄灰2.5Y5/3粗砂～中砂混シルト質細砂が混じる　φ１㎝程度の礫含む
41.上部は灰5Y4/1　粗砂混中砂　中部はオリーブ黄5Y3/1粘土質シルト　下部は2.5Y4/1極粗砂～粗砂混中砂（粘土質シルト僅かに含む）　φ１～４㎝の礫僅かに含む　中央にいく程下部が大部分を占め、明褐2.5Y/8に変化
42.オリーブ褐2.5Y4/4　粗砂混中砂～細砂（僅かにシルト含む）　上部にいく程φ0.5㎝程度の礫多く含む　基盤層（10層）との境に暗灰黄2.5Y4/2粘土が帯状にみられる

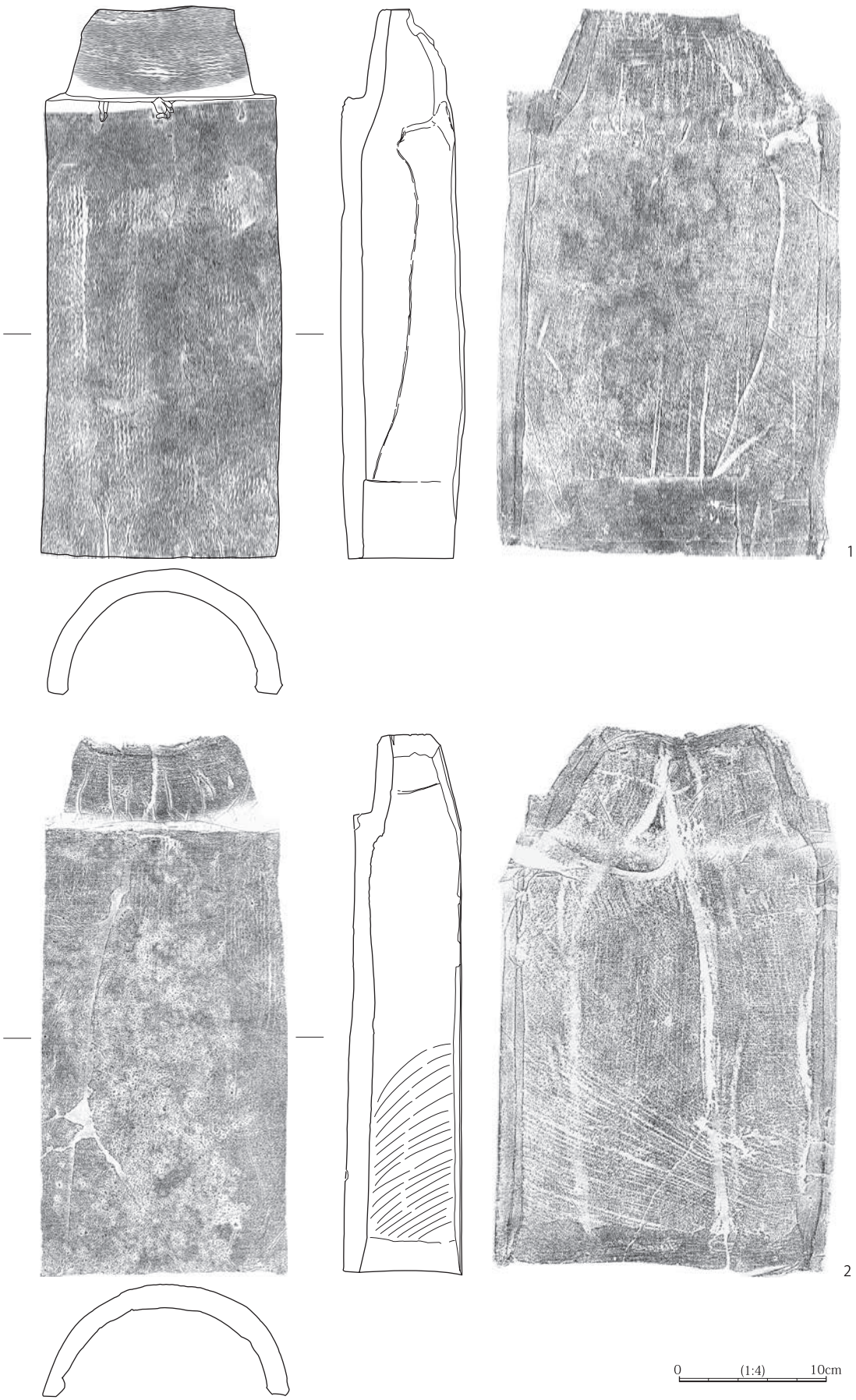


図119　10層出土遺物（1）

第２節　２調査区の包含層出土遺物

図119・120は中世の包含層（１調査区における第10層）から出土した遺物である。２調査区では、この第10層を濠の基盤層として確認した。掲載している丸瓦・平瓦は一箇所からまとまって出土した。図121は側溝から出土した遺物の中から、遺存状態の良いものを掲げている。紙面の都合上、詳細は割愛する。遺物観察表を参照されたい〔図121－２：図版14右４、図121－４：図版14左４〕。

図120　10層出土遺物（２）

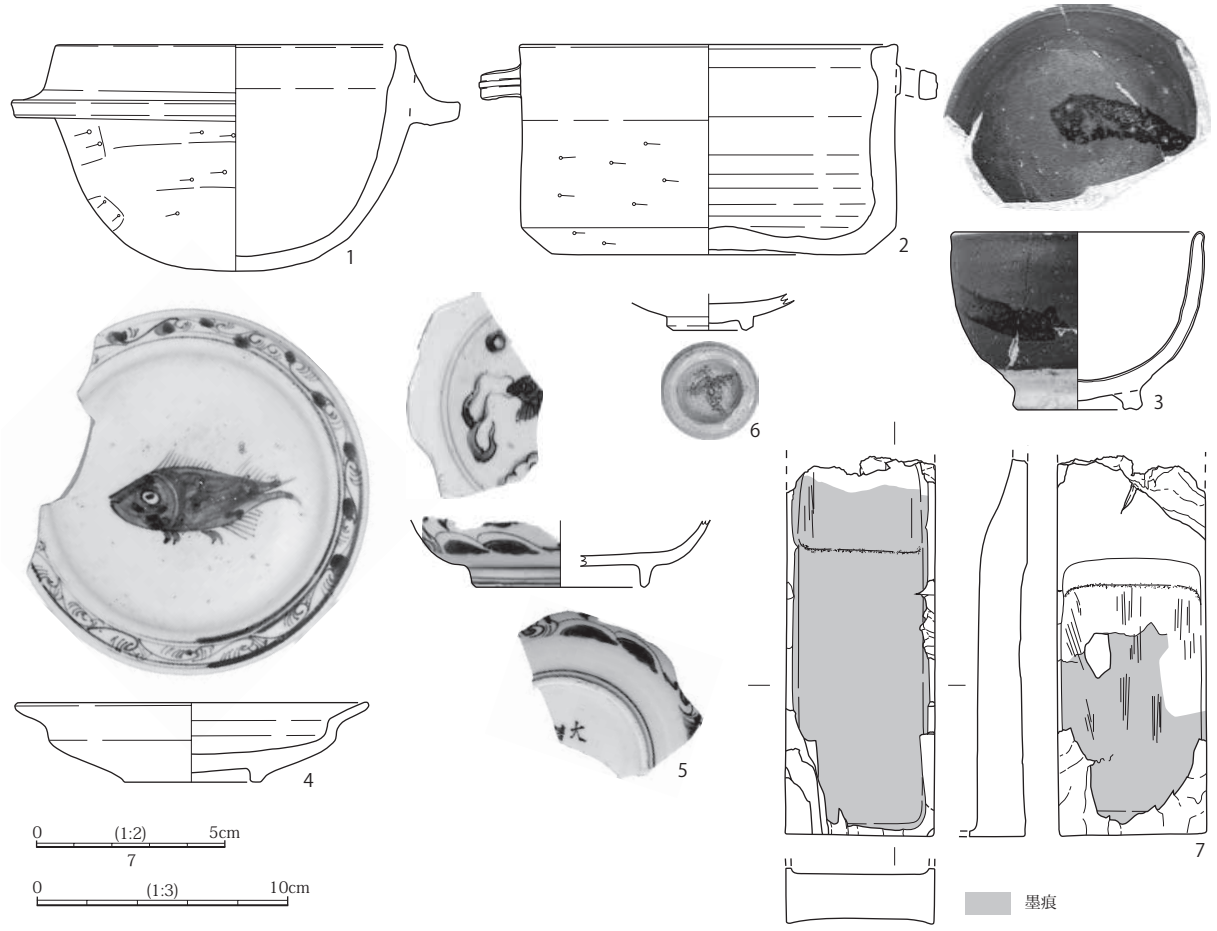


図121　２調査区側溝・サブトレ出土遺物

第５章　自然科学分析

今回の調査では多量の近世陶磁器をはじめとし、石製品や金属製品、木製品など多岐にわたる遺物が出土している。こうした出土遺物の中には、動物遺存体、魚類遺存体、貝類、植物種実などの自然科学的な分析が有効である資料がみられた。これらを分析・同定することは当時の食生活復元において重要な情報をもたらすものである。

また今回、中世の「自治都市」或いは「自由都市」堺を象徴する濠を４条調査する機会を得た。これまでの約1000件に及ぶ堺環濠都市遺跡の調査において、濠は23（本調査を含む）地点で検出されているものの、これらの濠が直接海と繋がっていたものなのか否かは解明されていなかった。

そこで、こうしたことを明らかにすべく各種分析・同定を依頼した。次節から、これらの分析結果及び考察について報告する。なお、植物種子に関しては、当センター保存室の山口誠治に、石製品の石材に関しては京都教育大学名誉教授の井本信廣氏に同定を依頼した。本章で詳細な報告を行わないが、その結果は第３・４章の調査成果の中に反映している。以下に、簡単ではあるがここでも触れておく。

種子には近世の区画溝や廃棄土坑からマクワウリの仲間、ウリ科種子（カボチャ？）、モモ核、センダン種子、クルミ属、スモモ種子、カキノキ種子、ヤマモモ種子、クスノキ種子、松ぼっくりが出土している。石製品の石材は、砥石に珪質頁岩（仕上げ砥）・黒色頁岩（中砥）・片状ホルンフェルス（中砥）・石英質砂岩（粗砥）が、硯に黒色頁岩・凝灰質頁岩・流紋岩質凝灰岩が、火打ち石にサヌカイトとチャートが、碁石には黒色珪質頁岩が、一石五輪塔などの中型品には岩片を多量に含む不均質砂岩が、五輪塔や石臼などの大型品には粗粒黒雲母花崗岩が使用される。珪質頁岩は京都北山周辺の、チャートは鞍馬周辺の良質なものである。

第１節は（株）古環境研究所に委託分析したものである。先に述べた濠と海との関係性を明らかにすべく、２調査区で検出した４条の濠堆積土の珪藻分析である。各濠において異なった環境であったことが明らかとなったが、検出された珪藻には海洋や内湾性のものが確認されていない。すなわち、今調査で検出された濠は直接海と繋がるものではなかったと想定される。海との関係性を明らかにするには、より西側、すなわちより海側で濠を検出し、そこでの再分析が必要と言える。

第２節は独立行政法人奈良文化財研究所松井章氏・京都大学大学院丸山真史氏による動物遺存体・魚類遺存体の分析・考察である。近世期の廃棄土坑や溝、中世期の濠から多くの動物遺存体・魚類遺存体が出土している。大半のものが食物残滓であることが明らかとなったが、食料とはならなかったネコ科の資料が出土しているのは稀有な例である。また、時期による廃棄方法の変化にも考察が加えられた。

第３節は財団法人大阪市文化財協会池田研氏による貝類の分析である。貝類の出土量は多くなかったが、大半のものが食物と成り得るものであった。また、少数例なので確実ではないが、出土する貝類に時期的な差がみられたことから、利用されたものが変化している可能性が想定出来た。さらに、製品へと加工された資料が存在することを明らかに出来たのも成果の一つである。

第１節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）における珪藻分析

株式会社　古環境研究所　金原　正子

１．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

堺環濠都市遺跡の発掘調査では、中世とされる濠が複数検出された。そこで、濠内の堆積物について珪藻分析を行い、当時の堆積環境について検討を行うことになった。

２．試料

分析試料は、2330－２濠から採取された試料Ｇの１点、2330－１濠から採取された試料Ｈ～Ｍの６点、2300濠から採取された試料Ａ～Ｃの３点、2325濠から採取された試料Ｄ～Ｆの３点の計13点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、資料採取地点は図９を参照されたい。

３．分析方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１㎤を秤量

２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成

６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行う。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行う。

４．結果

（１）分類群

試料から出現した珪藻は、中―真塩性種（汽―海水生種）７分類群、中塩性種（汽水生種）７分類群、貧塩性種（淡水生種）85分類群である。表１に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図122から図125に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）や渡辺（2005）等の記載による。陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群のうち海水生種から汽水生種は小杉（1988)、淡水生種は安藤（1990）を参考にした。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔中―真塩性種〕

Bacillaria paradoxa、*Navicula capitata*

〔中塩性種〕

Navicula menisculus

〔貧塩性種〕

Achnanthes exigua、*Achnanthes hungarica*、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora montana*、*Amphora veneta*、*Aulacoseira granulata*、*Cyclotella meneghiniana*、*Cymbella silesiaca*、*Fragilaria capucina*、*Frustulia vulgaris*、*Gomphonema augur*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema* spp.、*Gomphonema truncatum*、*Gyrosigma* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula gregaria*、*Navicula kotschyi*、*Navicula margalithii*、*Navicula mutica*、*Navicula pupula*、*Navicula* spp.、*Navicula veneta*、*Navicula viridula v. rostellata*、*Nitzschia debilis*、*Nitzschia frustulum*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia recta*、*Nitzschia umbonata*、*Pinnularia microstauron*、*Surirella angusta*、*Surirella ovata*、*Synedra ulna*

（２）珪藻群集の特徴

１）2330－２濠・図122

検出された珪藻は、ほとんど貧塩性種（淡水生種）で、流水不定性種と陸生珪藻が多く、真・好流水性種も出現する。流水不定性種では、*Navicula pupula*、*Achnanthes hungarica*を主に、*Navicula* spp.、*Navicula veneta*、*Nitzschia palea*などが出現する。陸生珪藻では、*Amphora montana*がやや優占し、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula muticaなどが出現する。真・好流水性種では、中～下流性河川環境指標種群の*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Achnanthes lanceolata*や真・好流水性種の*Surirella angusta*、*Gomphonema parvulum*、*Surirella ovata*が低率に出現する。他に中塩性種（汽水生種）の*Navicula menisculus*がわずかに出現する。

２）2330－１濠・図123

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より５帯の珪藻分帯を設定する。

・Ⅰ帯（試料M）

検出された珪藻は、ほとんど貧塩性種（淡水生種）である。陸生珪藻が多く、*Navicula confervacea*と、流水不定性種の*Navicula pupula*が優占する。

・Ⅱ帯（試料Ｌ）

陸生珪藻の占める割合が低くなり、流水不定性種が優占し、*Achnanthes hungarica*が卓越する。

・Ⅲ帯（試料Ｋ）

流水不定性種の占める割合が半減し、真・好止水性種の占める割合が高くなり、中―真塩性種（汽―海水生種）が低率に出現する。流水不定性種では、優占していた*Achnanthes hungarica*が減少し、好止水性種の*Cyclotella meneghiniana*が優占する。好流水性種では、*Gomphonema parvulum*が、中―真塩性種（汽―海水生種）では、*Navicula capitata*が低率に出現する。

・Ⅳ帯（試料Ｊ）

再び流水不定性種の占める割合が高くなり、*Achnanthes hungarica*が増加する。

・Ⅴ帯（試料Ｈ、試料Ｉ）

ほとんどが流水不定性種の*Achnanthes hungarica*で占められる。

３）2300濠・図124

検出された珪藻は、ほとんどが貧塩性種（淡水生種）で、好止水性種の*Cyclotella meneghiniana*が卓越する。試料Ｂ、試料Ｃでは、河口浮遊性環境指標種群の*Nitzschia frustulum*が増加する。流水不定性種では、*Achnanthes hungarica*、*Nitzschia palea*などが出現する。

４）2325濠・図125

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より３帯の珪藻分帯を設定する。

・Ⅰ帯（試料Ｆ）

検出された珪藻は、ほとんど貧塩性種（淡水生種）であるが、中―真塩性種（汽―海水生種）の*Bacillaria paradoxa*がわずかに出現する。貧塩性種（淡水生種）では、流水不定性種が多く、真・好流水性種、真・好止水性種、陸生珪藻も出現する。流水不定性種では、*Navicula pupula*を主に、*Navicula gregaria*、*Navicula veneta*、*Navicula kotschyi*、*Nitzschia palea*などが出現する。真・好流水性種では、中～下流性河川環境指標種群の*Navicula viridula* v. *rostellata*や、真・好止水性種では、*Cyclotella meneghiniana*などが出現する。陸生珪藻では、*Navicula contenta*、*Navicula mutica*、*Navicula confervacea*などが低率に出現する。

・Ⅱ帯（試料Ｅ）

珪藻密度は検出されない。

・Ⅲ帯（試料Ｄ）

Ⅰ帯（試料Ｆ）より真・好流水性種、陸生珪藻の占める割合が高くなる。真・好流水性種では、中～下流性河川環境指標種群の*Navicula viridula* v. *rostellata*が高率に出現し、流水不定性種では、*Navicula pupula*、陸生珪藻では、*Navicula confervacea*、*Navicula mutica*、*Amphora montana*などが出現する。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

（１）2330－２濠

ほとんどが貧塩性種（淡水生種）であり、流水不定性種と陸生珪藻が多く、真・好流水性種が多少出現する。流水不定性種の出現から水位および流れの不安定な水域が示唆され、陸生珪藻からは湿った土壌の環境が示唆される。また、真・好流水性種の出現から流れのある環境が示唆される。以上のことから、2330－２濠は特定の環境ではなく、湿地から水位が変化し流れたりやや淀んだりする不安定な状態であったと推定される。わずかに中塩性種（汽水生種）が出現するが、これは生活排水により塩分が供給されたことによるものと考えられる。

（２）2330－１濠

珪藻分帯に沿って下部より環境を推定する。

１）Ⅰ帯（試料M）

陸生珪藻*Navicula confervacea*と流水不定性種の*Navicula pupula*が優占することから、湿った環境から不安定な水域の状態が示唆される。

２）Ⅱ帯（試料Ｌ）

流水不定性種の*Achnanthes hungarica*が卓越する。好塩性種でもあることから、中塩性（汽水）ほど塩分濃度は高くないが、微量に塩分を帯びた不安定な水域が示唆される。塩分は生活排水により供給されたと考えられる

３）Ⅲ帯（試料Ｋ）

流水不定性種の*Achnanthes hungarica*がやや減少し、好止水性種の*Cyclotella meneghiniana*が優占する。好流水性種では*Gomphonema parvulum*が、中―真塩性種（汽―海水生種）では*Navicula capitata*が低率に出現する。こうしたことから、比較的安定した止水域になったと推定される。優占する*Cyclotella meneghiniana*と*Achnanthes hungarica*は好塩性種であり、中―真塩性種（汽―海水生種）の*Navicula capitata*が低率に出現することから、やや塩分を帯びる水域であった。優占種は貧塩性種（淡水生種）の中の好塩性種であり、汽水まで塩分濃度は高くない水域がほとんどであり、一部やや塩分濃度の高い水域が分布していたと考えられる。海からの影響がある場合、潮汐により海洋や湾の真塩性（海水生）の優占種が直接流れ込み反映されるが、その影響は認められない。ただし、*Cyclotella meneghiniana*は河口浮遊性および最下流河川性でもあることから、この時期に汽水域である河口域からの影響があった可能性も考えられる。

４）Ⅳ帯（試料Ｊ）

*Achnanthes hungarica*が増加し、不安定な水域になる。

・Ⅴ帯（試料Ｈ、試料Ｉ）

流水不定性種で好塩性種の*Achnanthes hungarica*で占められる。微量に塩分を帯びた不安定な水域が示唆される。

（３）2300濠

検出された珪藻は、貧塩性種（淡水生種）で占められ、好止水性種の*Cyclotella meneghiniana*が卓越し、*Nitzschia frustulum*が伴われる。こうしたことから、淀みのある安定した水域が示唆される。これらは貧塩性（淡水生）の河口浮遊性でもあるため、河口からの影響があった可能性も考えられる。

（４）2325濠

珪藻分帯に沿って下部より環境を推定する。

１）Ⅰ帯（試料Ｆ）

検出された珪藻は、貧塩性種（淡水生種）で占められ、流水不定性種が多く、中～下流性河川環境指標種群を含む真・好流水性種、真・好止水性種も出現する。こうしたことから、河川の影響があり、淀んだ部分もあるやや不安定な水域が示唆される。

２）Ⅱ帯（試料Ｅ）

珪藻が検出されず、堆積速度が極めて速かったか、珪藻の生育できない環境が考えられる。

３）・Ⅲ帯（試料Ｄ）

真・好流水性種で中～下流性河川環境指標種群の*Navicula viridula* v. *rostellata*、が優占し、陸生珪藻もやや多くなる。河川と同様の流れを持つ水域が想定されることから、河川と直結していた可能性が考えられる。また、湿った環境が増加したと推定される。

６．まとめ

珪藻分析の結果、2330－２濠は、湿地から水位や流れの不安定な水域、2330－１濠は微量の塩分を帯びた淡水性の不安定な水域、2300濠は淀んだ安定した水域、2325濠は河川と同様の流れを持つ水域が推

定された。各濠により珪藻の優占種も異なり、やや異なった環境が示唆された。2330－１濠では生活排水によると考えられる塩分の影響、2300濠では河口からの影響、2325濠は河川からの流れ込みがそれぞれ推定された。塩分濃度のややある濠もあるが、海洋や内湾の珪藻は検出されず、海からの影響は認められなかった。

参考文献

Asai, K. &, Watanabe, T.　1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot　1986-1991　Bacillariophyceae・1－4.

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示　1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』６，p.23-45.

小杉正人　1986「陸生珪藻による古環境解析とその意義―わが国への導入とその展望―」『植生史研究』第１号　植生史研究会，p.29-44.

小杉正人　1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27，p.1-20.

渡辺仁治　2005『淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能』内田老鶴圃，pp.666.

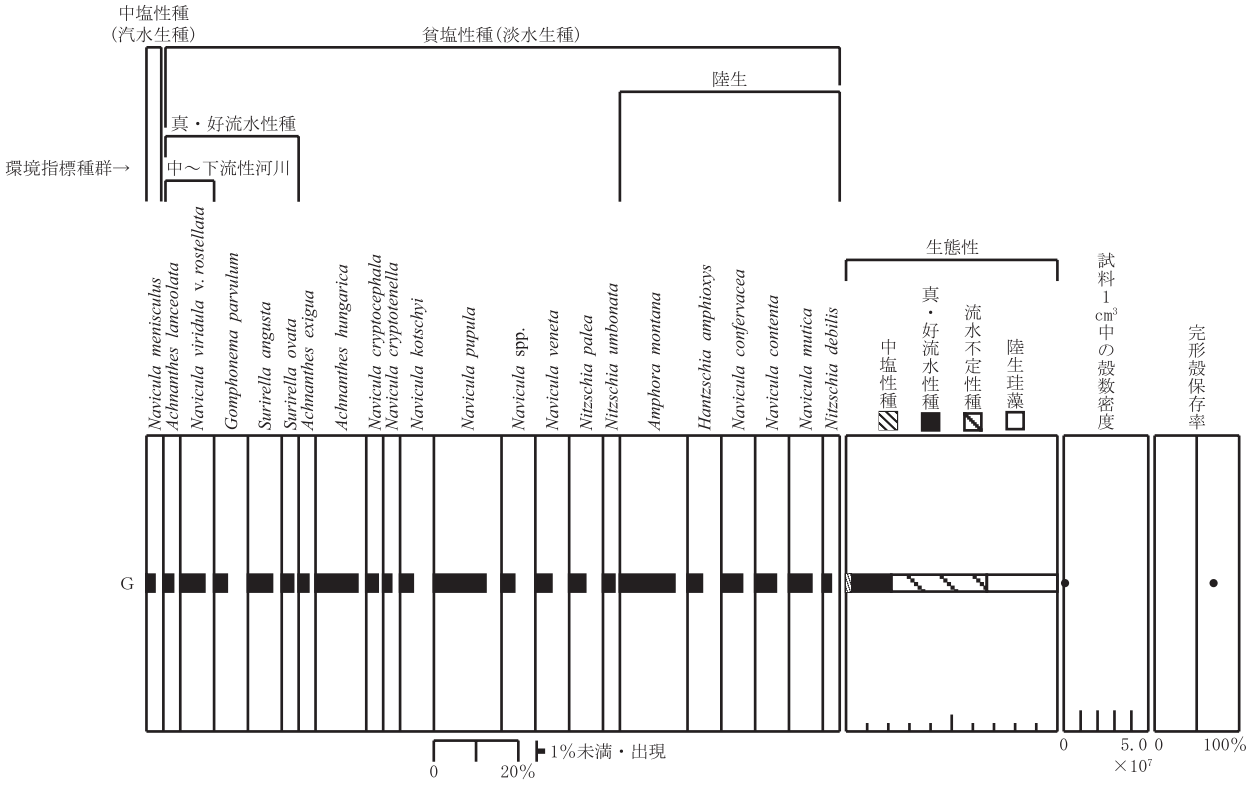


図122　堺環濠都市遺跡（その１）の2330－２濠における主要珪藻ダイアグラム

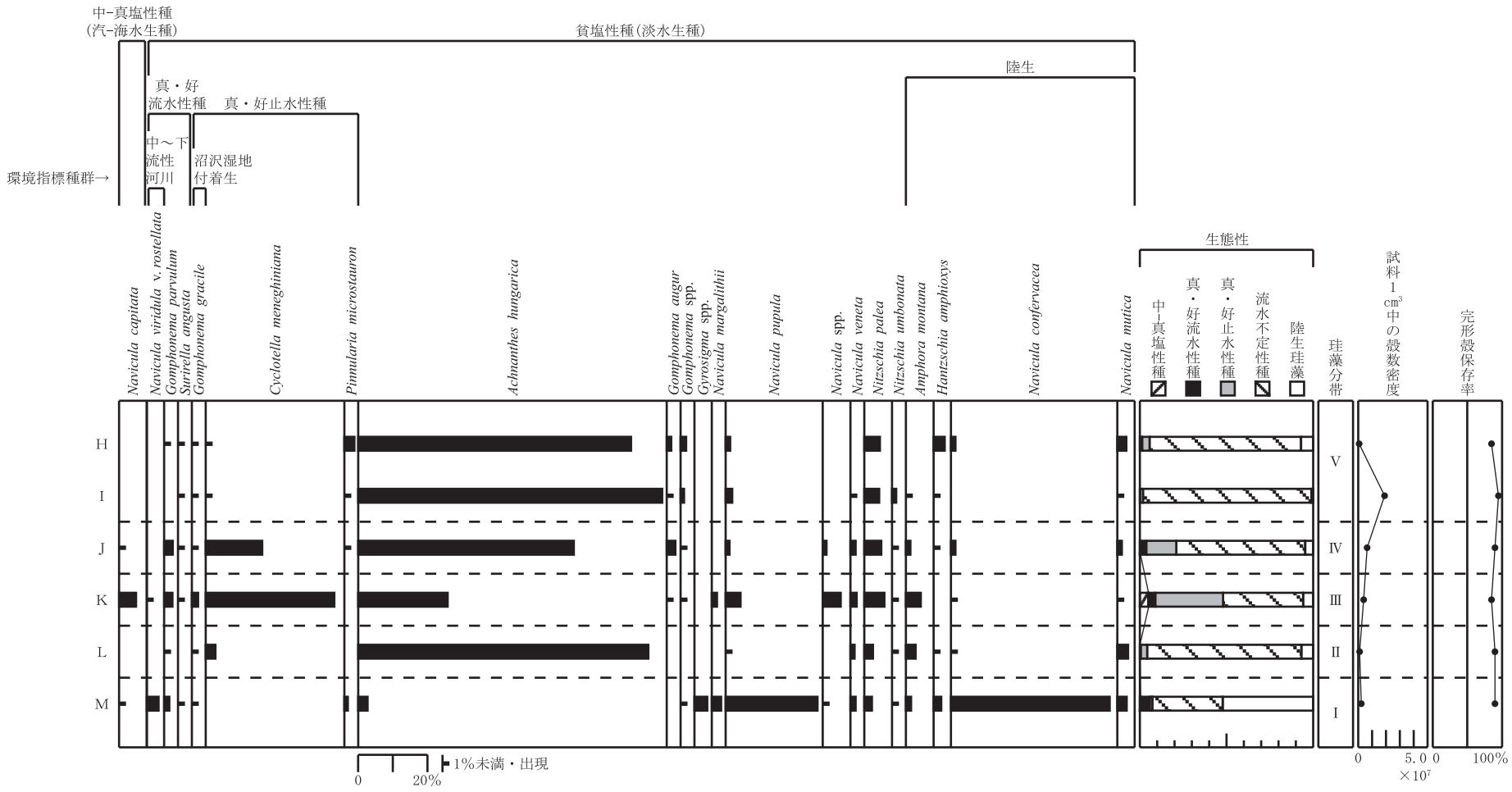


図123　堺環濠都市遺跡（その１）の2330－１濠における主要珪藻ダイアグラム

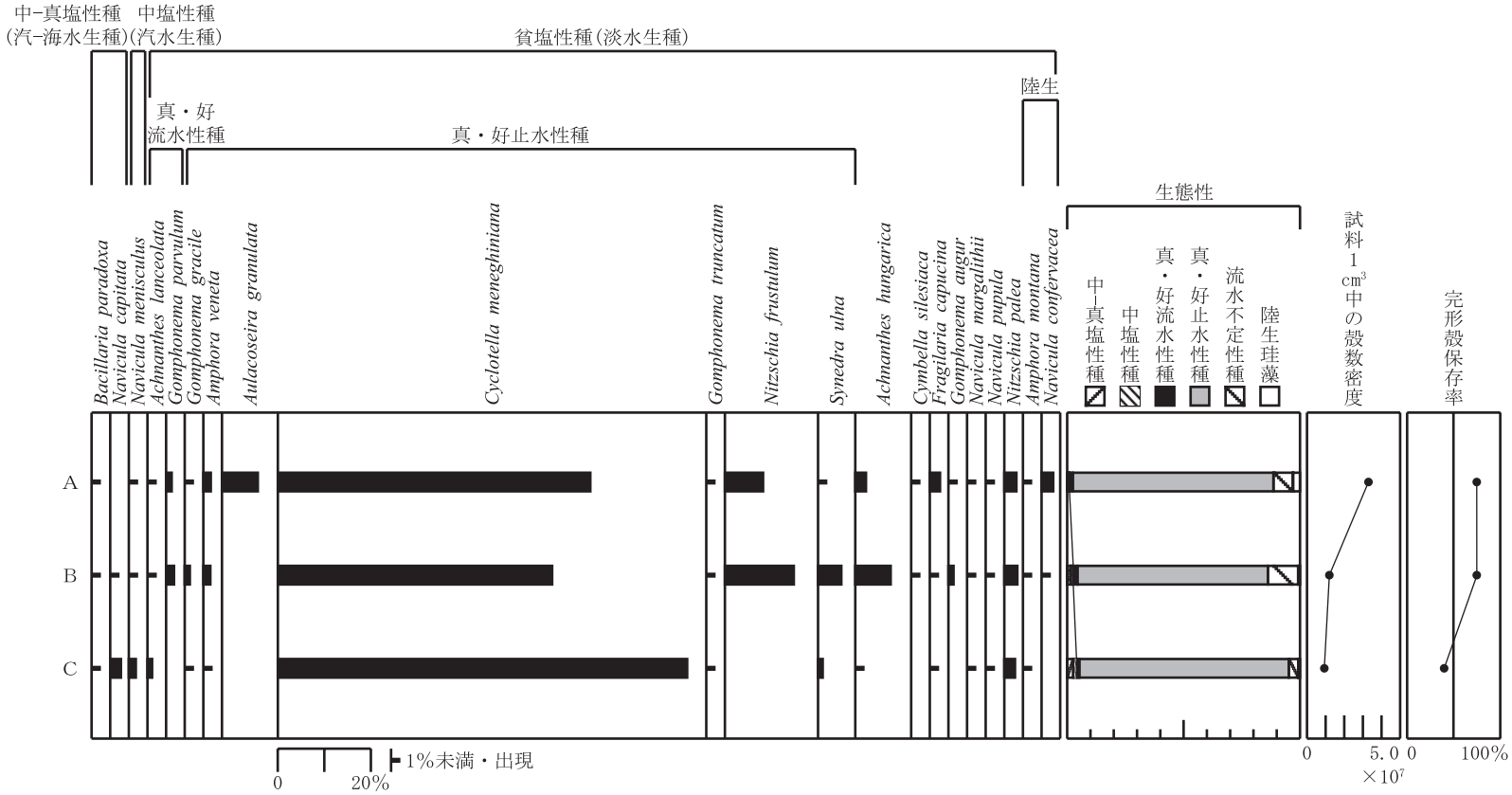


図124　堺環濠都市遺跡（その１）の2300濠における主要珪藻ダイアグラム

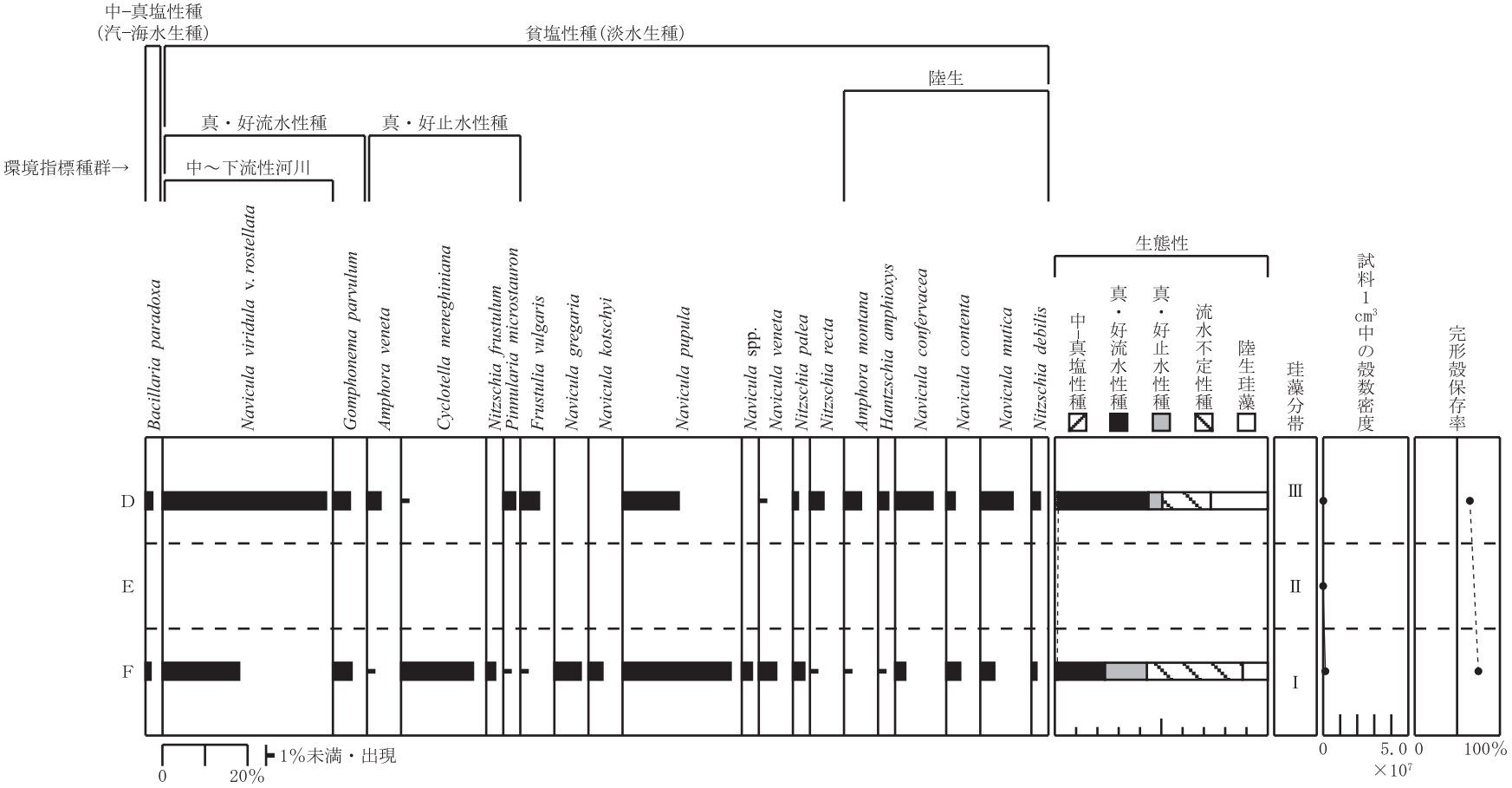


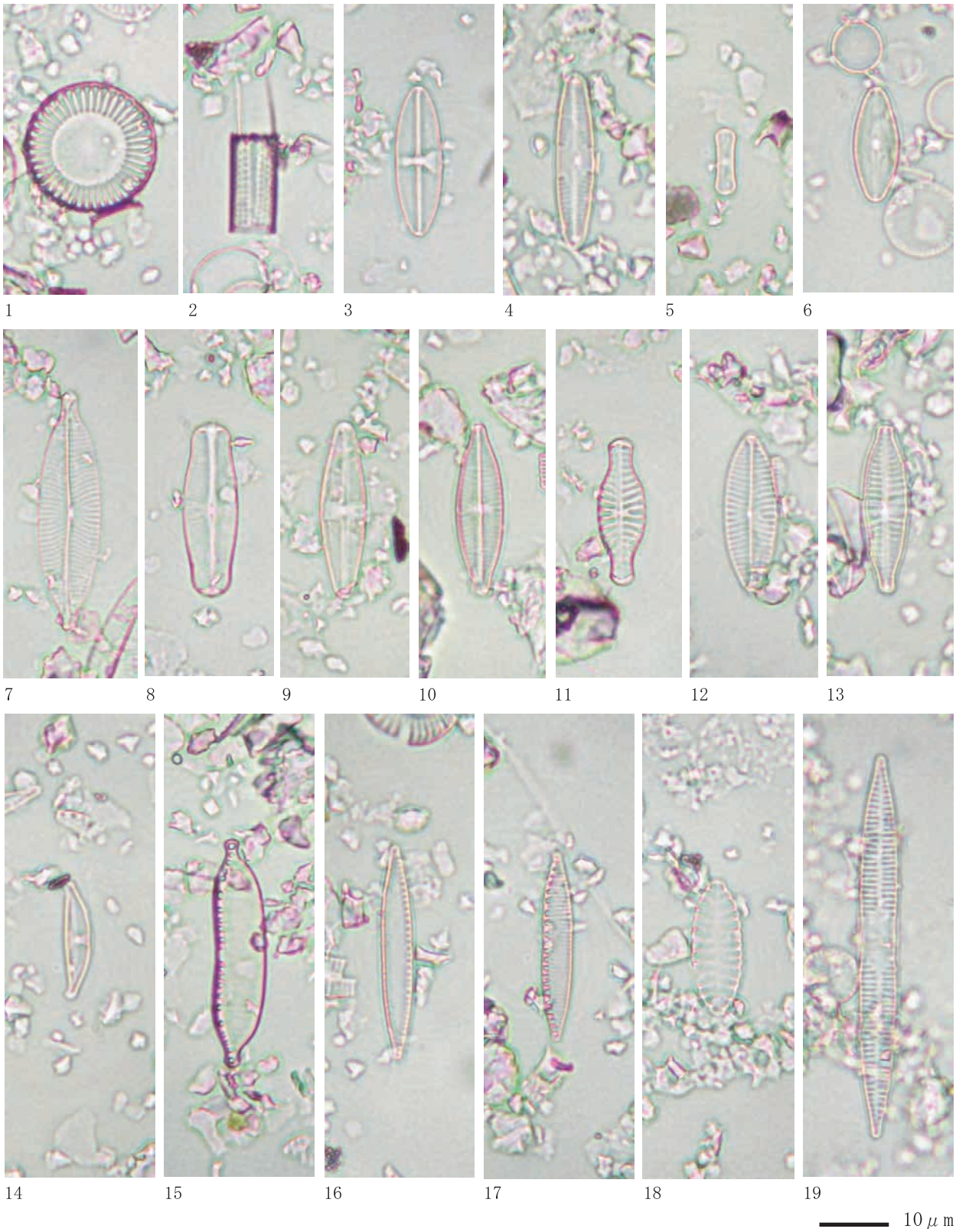
図125　堺環濠都市遺跡（その１）の2325濠における主要珪藻ダイアグラム

表１　堺環濠都市遺跡（その１）における珪藻分析結果

	2330－2	2330－1						2300			2325		
分類群	G	H	I	J	K	L	M	A	B	C	D	E	F
貧塩性種（淡水生種）													
Achnanthes exigua	6						1	1	1				7
Achnanthes hungarica	26	244	450	293	85	273	11	16	41	2			3
Achnanthes lanceolata	6		1		1	1	4	1	1	4	1		
Achnanthes spp.									2				
Amphora copulata											1		5
Amphora fontinalis	2						1						
Amphora montana	34		3	6	14	9	6	4	3	2	10		3
Amphora spp.		1											
Amphora veneta				3	3			11	8	1	8		1
Anomoeoneis sphaerophora		1											
Aulacoseira granulata								53					1
Aulacoseira spp.					1								
Caloneis bacillum	1						2	1					
Caloneis hyalina													1
Caloneis silicula	1										2		
Cyclotella meneghiniana	3	2	4	77	122	9		459	319	348	1		57
Cymbella minuta	3												
Cymbella silesiaca	2		2	1		1		3	5		4		3
Cymbella tumida				3						1	1		
Diploneis spp.											1		1
Fragilaria capucina							1	15	1	1	1		
Fragilaria construens													1
Frustulia vulgaris	4						1		1	1	11		2
Gomphonema acuminatum									2	1			
Gomphonema affine													2
Gomphonema angustatum	2		1		1		1		2				
Gomphonema augur		4	2	12	3			4	6				2
Gomphonema augur v. *turris*							5	2		1	1		1
Gomphonema gracile		2	2	1	6	3	2	1	6	3	1		1
Gomphonema parvulum	8	2		12	8	2	6	8	9		10		15
Gomphonema pseudoaugur		4			2								
Gomphonema spp.	1	5	5	4	2		2		4		1		3
Gomphonema truncatum				2	1			6	3	1			1
Gyrosigma spp.							15			1	2		1
Hantzschia amphioxys	9	10	1	4		2	9		1		6		3
Navicula cincta													1
Navicula clementis										1			
Navicula confervacea	13	4		6	2	1	187	17	1		22		8
Navicula contenta	13				2	6	2	2	1	1	5		11
Navicula cryptocephala	7		4	1	3	1	1						3
Navicula cryptotenella	5	2					1				4		
Navicula cuspidata		1		4			1				1		
Navicula elginensis	4	1					3			2	5		2
Navicula gregaria													21
Navicula kotschyi	8						1						11
Navicula laevissima											3		2
Navicula margalithii	4				5		11	1	2	2	2		5
Navicula mutica	14	8	1	6	3	10	11	1	1	1	19		11
Navicula mutica v. *ventricosa*					1								
Navicula placentula	1												
Navicula pupula	32	4	10	5	14	2	108	1	1	3	33		86
Navicula radiosa	1												

	2330－2	2330－1						2300			2325		
分類群	G	H	I	J	K	L	M	A	B	C	D	E	F
Navicula rhynchocephala	1												
Navicula spp.	8			5	17		3	1		2			8
Navicula veneta	10		4	7	6	4	6	3		1	2		14
Navicula viridula										3			
Navicula viridula v. *rostellata*	15				3		14				96		61
Neidium affine											1		2
Neidium ampliatum	1												
Neidium spp.	1										2		
Nitzschia angustata		1											2
Nitzschia brevissima	3						1			1	1		2
Nitzschia debilis	5						5				5		4
Nitzschia frustulum					2			56	80				7
Nitzschia nana						1							
Nitzschia palea	10	14	22	23	19	8	9	18	15	9	3		9
Nitzschia recta											8		1
Nitzschia spp.	3				1								1
Nitzschia terrestris	1			1			1						
Nitzschia umbonata	7		6	1	1	3	1	1					3
Pinnularia acrosphaeria	1			1	1						2		1
Pinnularia borealis		1											
Pinnularia divergens							1						
Pinnularia gibba	1		1	1			1			1			
Pinnularia interrupta							1				2		1
Pinnularia major							1						
Pinnularia mesolepta	2												
Pinnularia microstauron	3	9	2	3			4		1	1	7		1
Pinnularia spp.	2	3	1								3		1
Pinnularia subcapitata	2	5									2		
Rhopalodia gibberula						1		1			1		
Stauroneis anceps													5
Surirella angusta	15	2	1	4	3		2	1		1	2		4
Surirella ovata	7	1		1	1								
Synedra ulna				1	1			3	27	4			
中塩性種（汽水生種）													
Navicula menisculus	5				1		1	1	5	6	4		3
Navicula menisculus v. *upsalinesis*										1			1
Navicula peregrina										3			
Nitzschia constricta		1		1	2								
Nitzschia levidensis v. *salinarum*				1	1		1		1				2
Nitzschia levidensis v. *victoriae*	1						4						1
Nitzschia lorenziana	1						1						
中－真塩性種（汽－海水生種）													
Achnanthes delicatula							2						
Bacillaria paradoxa	2						7	6	5	1	4		4
Cocconeis scutellum			1							1			
Navicula capitata	4			2	16		1		4	9	1		6
Navicula capitata v. *hungarica*					1								
Navicula salinarum							1						1
Nitzschia hungarica					3		1						
合　計	321	332	524	492	358	337	462	698	559	421	302	0	420
未同定	17	15	22	20	12	22	7	24	26	31	3	0	12
破片	131	66	31	45	73	36	58	237	207	616	150	3	136
試料１㎤中の殻数密度	7.7×10^{5}	6.4×10^{5}	1.9×10^{7}	6.4×10^{6}	3.9×10^{6}	1.0×10^{6}	2.2×10^{6}	3.3×10^{7}	1.2×10^{7}	9.3×10^{6}	9.1×10^{4}		1.3×10^{6}
完形殻保存率（%）	72.1	84.0	94.6	91.9	83.5	90.9	89.0	75.3	73.9	42.3	67.0	－	76.1

写真１　堺環濠都市遺跡の珪藻



1．*Cyclotella meneghiniana* 2．*Aulacoseira granulate* 3．*Achnanthes hungarica* 4．*Pinnularia microstauron*
5．*Navicura contenta* 6．*Navicula confervacea* 7．*Navicula viridula* v. *rostellata* 8．*Navicula pupula*
9．*Navicula mutica* 10. *Navicula veneta* 11. *Navicura capitata* 12. *Navicula menisculus* 13. *Gomphonema parvulum*
14. *Amphora montana* 15. *Hantzschia amphioxys* 16. *Nitzschia palea* 17. *Nitzschia frustulum* 18. *Surirella angusta*
19. *Synedra ulna*

第２節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）から出土した脊椎動物遺存体

丸山真史（京都大学大学院）・松井章（奈良文化財研究所）

概要

今回、報告するのは16世紀後半から19世紀にかけての遺構や遺物包含層から出土した脊椎動物遺存体である。出土した遺物は、51土坑の埋土のみフルイがけによって、それ以外は発掘中に肉眼によって選別、採集されたものである。水分が豊富な土壌環境により、動物遺存体は保存されたと考えられる。出土した破片点数は総計394点にのぼり、そのうち種類や部位を同定したのは252点を数える。その内訳は哺乳類が126点で半数を占め、鳥類が68点、魚類が40点、爬虫綱が15点、両生類が３点と続く。これらのうち解体痕が見られたのは14点で、骨角器の製作時に生じた廃材が２点出土している。なお、記載する魚類の体長は、現生骨格標本との比較によって推定した。

種類別および遺構別の特徴

動物遺存体が出土したのは、１調査区では土坑15基、溝２条、建物３棟、井戸２基、計22の遺構、２調査区では土坑11基、溝２条、濠４条、埋桶１基、計19の遺構である。これらのうち動物遺存体が10点以上出土している遺構は、１調査区で30井戸、51土坑、98土坑、240溝の４つ、2330濠、2330－１濠、2330－２濠、2343廃棄土坑の４つである。哺乳類は16世紀後半から17世紀の遺構を中心として出土している。イノシシやニホンジカは濠や溝から出土しているものが多く、イヌやネコは濠、溝以外に土坑からも出土している。魚類は、土坑を主体として17世紀以降に出土している。スッポンやニワトリといった小型の動物は、濠からも出土している。

哺乳類はネコが最多で34点、イヌが32点、ニホンジカが27点と続き、この３種でほぼ４分の３を占める。この他にウマが12点、イノシシが９点、ウシとネズミ科が各４点、ヒトが３点、クジラ類が１点と続く。ネコは同一個体と思われるものが多く、最小個体数を算定すると２個体となり、イヌやイノシシが４個体であるのに比べて少ない[1)]。イヌの大きさは長谷部言人（1952）の５段階の分類によると、中小級、中級、中大級に相当するものばかりである。イヌの頭蓋骨（2330濠出土）は、縫合が終了しておらず、第４前臼歯の咬耗が見られないことから１歳以下の幼獣と考えられ、右側頭部に３条の平行する傷が見られる[2)]。イノシシの大腿骨（2330－１濠出土）とニホンジカの椎骨３点（2330濠出土）、中手骨１点（2330濠出土）、脛骨１点（240溝出土）には切傷や切断された痕跡が見られる。ウシの中足骨２点（240溝出土）に、鋸による切断痕が見られる。イノシシの下顎骨１点（2330－２濠）は、第一後臼歯が萌出途上で生後１年に満たない幼獣である。イノシシとした個体は飼育されたブタの可能性があるが、形態的にブタと同定できる資料は見られない。

魚類はマダイが最多で10点、ハモ属が６点、ブリ属とマグロ属が各４点と続く。ほかにタイ科とタチウオ科が各３点、サメ類とアジ科が各２点、エソ科、アマダイ属、キダイ、ハタ科、カツオ、ウシノシタ科が各１点出土している。マダイは体長15cmから40cm程度で、歯骨１点は前位部が切断されている。ハモ属は体長50cmから150cm程度、ブリ属は体長60cm以上で、椎骨１点は正中線と直交する方向に輪切り状に切断されている。マグロ属は体長60cm以上で、大きな個体は100cmを越える。タイ科は体長20cmから50cm、タチウオ科は100cm程度である。サメ類は椎体横径36.6mmと13.2mmの個体、アジ科は体長30cm以下の個体ばかりである。アマダイ属は体長30cm程度、キダイは20cm以下、ハタ科は40cm程度、カツオとウシノシタ科は20cm程度である。鳥綱はニワトリが最多で35点、サギ科が30点、カモ科が２点、キ

ジ科が１点と続く。ニワトリ２点（2343廃棄土坑出土）には、切傷が見られる。爬虫綱は総計15点が出土しており、スッポンが12点、バタグールガメ科が３点を数える。両生綱は総計３点が出土しており、いずれもカエル類である。

考察

近年の歴史考古学と動物考古学の隆盛により、獣肉食を忌避したと考えられてきた中近世の人々が、肉食に親しんでいたことが明らかになりつつある（松井2005）。本資料のイヌ、イノシシ、ニホンジカにも、肉食を示唆する遺存体が含まれている。イヌは頭蓋骨の側頭部に切傷が見られ、ニホンジカは椎骨の肋骨窩付近が切断されており、刃物で椎骨と肋骨の関節部を一刀両断にしたのであろう。イノシシは大腿骨の近位部に鋭利な刃物が幾度も叩きつけられており、胴体から後肢を切断するために、寛骨と大腿骨の関節部を切り離そうとしたことが窺える。これらは解剖学的な位置をとどめず散乱状態で出土しているものが多いことからも、解体や肉食が想定される。一方、出土量が最も多いネコは同一個体の可能性があるものが多く、食用にしたかどうか定かではないが、皮を利用した可能性が考えられる。

魚類も食用と考えられ、マダイやブリ属には調理した刃物の痕跡が見られる。17世紀から19世紀までに、外洋性のカツオやマグロ属、回遊性のアジ科やマダイなどが出土しており、エソ科、アマダイ属、ハタ科、タチウオ科、ウシノシタ科といった本遺跡の従来の報告では知られていない種類も出土している。海浜部に位置する都市において、水産物の消費の多様性が窺える。19世紀半ばの『守貞漫稿』には、堺から京都へ行く「鮮魚売」について記されており（喜田川1906）、近世の堺が他所へ水産物を供給する拠点であったと推測される。鳥類は江戸時代の遺構からニワトリが出土しており、尺骨と胸椎に解体痕が見られ、食用にされたと考えられる。爬虫類はスッポンの甲板が散乱状態で出土しており、解体痕は見られないが食用とも考えられる。爬虫類のバタグールガメ科や両生類のカエル類は食料になるが、出土量が乏しく明らかではない。

西日本では16世紀後半から、従来のニホンジカの角、中手骨、中足骨に加えて、牛馬骨の特定の部位に鋸による切断痕が多く見られ、骨角器の素材として利用されたことが明らかにされている（久保1999）。本遺跡SKT78地点では、16世紀後半の牛角が出土しており、それらは角鞘を切り開いて偽鼈甲に利用されたと考えられている（松井2000）。本資料の切断されたウシの中足骨は２点とも骨端部であり、直線的で分厚い骨幹部を素材として得るために両端部を切断した際に生じた廃材である。このように中世の堺でも牛馬骨を素材とする骨器が製作されたのであろうが、ウシ、ウマの出土量は少なく、別の場所で解体や骨角器の製作が営まれたと考えられる。

環濠が巡らされる17世紀前半までは、濠や溝といった大きな遺構に様々な動物遺存体がゴミとして廃棄され、なかでもイノシシやニホンジカといった大型の哺乳類が多い。17世紀以降に濠が埋められ町屋が建設されると、土坑に魚類や小型の動物骨が廃棄され、18世紀になるとイノシシやニホンジカが減少する。これは都市部で哺乳類の利用が減少したこと、皮革や骨角器の製作が町の周縁に移動したことなどが想定される。あるいはイノシシやニホンジカなどの大型の残滓はかさばるうえに、骨に付着する筋肉や脂肪、骨内の髄が腐敗すると悪臭を放つことなどから、都市の周縁に位置する濠や溝に廃棄したことも考えられる。

まとめ

SKT960地点の発掘では、動物遺存体の内容から、堺環濠都市における生ゴミ処理の変化が明らかとなり、魚類や鳥類など小さな廃棄物とイノシシやニホンジカなどの大きな廃棄物の投棄法が異なること

がわかった。出土したほとんどの種類が食用となるが、ネコが食料となった可能性は低い。イノシシやニホンジカは明確な解体痕が見られ、貴重な動物性タンパク源となったであろう。魚類からは海に面した堺の町屋衆の多様な水産物の消費が明らかになった。また、堺は貿易港としてだけでなく、漁港としても重要であり、中世から近世にかけての漁業の発達を知る手がかりとなるだろう。

註

1　一個体に一つしかない骨格部位で、最多の出土数を示す部位の点数を最小個体数（MNI）とする。

2　茂原信生氏（京都大学名誉教授）に多くのご教示をいただいた。

参考文献

喜田川守貞　1906「鮮魚売」『近世風俗誌』更生閣書店p.142

久保和士　1999「近世大坂の骨細工」『動物と人間の考古学』真陽社pp.245-262

長谷部言人　1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁pp.146-150

松井　章　2000「斃牛馬利用の動物考古学的考察」『動物考古学』第14号　動物考古学研究会pp.11-22

松井　章　2005「考古学から見た動物と日本人の歴史」『周縁文化と身分制』脇田晴子、マーチン・コルカット、平雅行共編　思文閣出版pp.187-239

表 2　種名表

脊椎動物門　Vertebrata
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　サメ類　Lamniformes fam.,.gen. et sp. indet.
硬骨魚綱　Osteichthyes
　ウナギ目　Anguilliformes
　　ハモ科　Muraenesocidae
　　ハモ属の一種　*Muraenesox* sp.
　ヒメ目　Aulopiformes
　　エソ科　Synodontidae
　　エソ科の一種　Synodontidae, gen. et sp. indet.
　スズキ目　Percidae
　　ハタ科　Serranidae
　　ハタ科の一種　Serranidae, gen. et sp. indet.
　　アマダイ科　Malacanthidae
　　アマダイ属の一種　*Branchiostegus* sp.
　　アジ科　Carangiae
　　ブリ属の一種　*Seriola* sp.
　　アジ科の一種　Carangiae, gen. et sp. indet.
　　タイ科　Sparidae
　　マダイ　*Pagrus major*
　　キダイ　*Dentex tumifrons*
　　タチウオ科　Trichiuridae
　　タチウオ科の一種　Trichiuridae gen. et sp. indet.
　　サバ科　Scombridae
　　カツオ　*Katsuwonus pelamis*
　　マグロ属の一種　*Thunnus* sp.
　　カレイ目　Pleuronectiformes
　　ウシノシタ科　Cynoglossidae
　　ウシノシタ科の一種　Cynoglossidae, gen.et sp. indet.
爬虫綱　Reptilia
　カメ目　Chlonia
　　スッポン科　Tnonychidae
　　スッポン　*Trionyx sinensis*
　　バタグールガメ科　Bataguridae
　　バタグールガメ科の一種　Bataguridae gen. et sp. indet.
鳥綱　Aves
　カモ目　Anseriformes
　　カモ科　Anatidae
　　カモ科の一種　Anatidae gen. et sp. indet.
　　キジ目　Galliformes
　　キジ科　Phasianidae
　　ニワトリ　*Gullus domesticus*
　　キジ科の一種　Phasianidae gen. et sp. indet.
　　コウノトリ目　Ciconiformes
　　サギ科　Ardidae
　　サギ科の一種　Ardeidae gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
　食肉目　Carnivora
　　イヌ科　Canidae
　　イヌ　*canis familiaris*
　　タヌキ　Nyctereutes procyonoides
　　ネコ科　Felidae
　　ネコ　*Felis catus*
　奇蹄目　Perissodactyla
　　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ/ブタ　*Sus scrofa*
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos taurus*
　　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　齧歯目　Rodentia
　　ネズミ科　Muridae
　　ネズミ科の一種　Muridae gen. et sp. indet.
　クジラ目　Cetacea
　　クジラ目の一種　Cetacea, gen. et sp. indet.
　霊長目　Primates
　　ヒト科　Homonidae
　　ヒト　*Homo sapiens*

表 3　集計表

1Tr.	遺構名	大分類	小分類	部位	ー	右	左	計
17c初	328建物	硬骨魚綱	カツオ/マグロ属	擬鎖骨			1	1
		哺乳綱	ウマ	上腕骨		1		1
17C初～前	建物アゼ	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	1			1
17c前～中	240溝	哺乳綱	イヌ	肋骨			1	1
			イノシシ	脛骨		1	1	2
			ウシ	中足骨			2	2
			ウマ	中手骨		1		1
				中手骨/中足骨	1	1		2
			ニホンジカ	肩甲骨		1	1	2
				上腕骨			1	1
				脛骨			1	1
17c後～18c後	104土坑	硬骨魚綱	不明	椎骨	1			1
		哺乳綱	イヌ	椎骨	2			2
				脛骨		1		1
	98土坑	哺乳綱	ネコ	下顎骨		1		1
				尺骨		1	1	2
				上腕骨		1		1
				大腿骨			1	1
				中足骨		2	2	4
				脛骨		1	1	2
				腓骨	1			1
19c	51土坑	硬骨魚綱	アジ科	主鰓蓋骨			1	1
			ウシノシタ科	椎骨	1			1
			エソ科	椎骨	1			1
			キダイ	角骨			1	1
			タチウオ科	歯骨			1	1
				椎骨	1			1
			ハモ属	角骨		1		1
				椎骨	1			1
			マダイ	主上顎骨		1		1
		哺乳綱	ネズミ科	下顎骨			1	1
				寛骨			1	1
	70建物	哺乳綱	ウシ/ウマ	中足骨？	1			1
19c～	30井戸	硬骨魚綱	ハモ属	角骨		1		1
				歯骨		1		1
			ブリ属	椎骨	2			2
			マグロ属	椎骨	1			1
		鳥綱	カモ科	烏口骨			1	1
				上腕骨		1		1
			キジ科	大腿骨			1	1
			サギ科	烏口骨		1		1
				下顎骨		1	1	2
				胸骨	3			3
				肩甲骨		1		1
				上顎骨	1			1
				上腕骨		3	3	6
				足根中足骨		1	5	6
				大腿骨		1	1	2
				頭蓋骨	1			1
				脛足根骨		5	2	7
			ニワトリ	烏口骨		2	1	3
				胸骨	9			9
				肩甲骨		1		1
				手根中手骨		3		3
				足根中足骨		1	1	2
				椎骨	1			1
				頭蓋骨	1			1
				複合仙骨	6	1	1	8
				橈骨		2		2
				脛足根骨		1		1

2Tr.	遺構名	大分類	小分類	部位	ー	右	左	計
16c後	2300濠	哺乳綱	イヌ	大腿骨			1	1
				脛骨			1	1
			ニホンジカ	肩甲骨		1		1
		爬虫綱	スッポン	烏口骨			1	1
				背甲板			3	3
			バタグールガメ科	背甲板	1			1
				腹甲板		1		1

＊集計表に掲載した動物遺存体は、遺構について記載されているものに限る。

2Tr.	遺構名	大分類	小分類	部位	ー	右	左	計
16末～17初	2330－2濠	哺乳綱	イヌ	上腕骨		2		2
				橈骨		1		1
				脛骨			1	1
			イノシシ	下顎骨			1	1
			ニホンジカ	肩甲骨			1	1
				上腕骨			1	1
				中手骨			1	1
				中足骨		1		1
			ネコ	大腿骨		1		1
				脛骨		1		1
				腓骨		1		1
17C初～前	2330－1濠	鳥綱	ニワトリ	足根中足骨			1	1
		哺乳綱	イヌ	下顎骨			1	1
				寛骨			1	1
				肩甲骨			1	1
				上腕骨			2	2
			イノシシ	大腿骨		1		1
				脛骨			1	1
			ウシ	上腕骨			1	1
			ウマ	上腕骨		1		1
				橈骨		1		1
			ニホンジカ	上腕骨			1	1
				大腿骨			1	1
				橈骨			1	1
		爬虫綱	スッポン	上腕骨		1		1
17c前	2330濠	哺乳綱	イヌ	頭蓋骨	1			1
			ウシ/ウマ	肋骨			1	1
			ウマ	椎骨	1			1
			ニホンジカ	大腿骨			1	1
				中手骨			1	1
				椎骨	3			3
				肋骨			4	4
				橈骨		1		1
		爬虫綱	スッポン	背甲板			1	1
	2343廃棄土坑	硬骨魚綱	カツオ	椎骨	1			1
			タイ科	擬鎖骨			1	1
				肩甲骨		1		1
				後側頭骨		1		1
			ハタ科	方骨		1		1
			ハモ属	歯骨		1		1
				前頭骨	1			1
			ブリ属	椎骨	2			2
			マダイ	角骨		1	1	2
				歯骨		1		1
				主上顎骨			1	1
				前上顎骨		1		1
				前鰓蓋骨		1		1
		鳥綱	ニワトリ	胸椎	1			1
				尺骨		1		1
		哺乳綱	ニホンジカ	中手骨		1		1
			ネコ	寛骨		2		2
				上腕骨		1		1
				椎骨	8			8
				肋骨	1	3	3	7
			ネズミ科	大腿骨		1		1
				頭蓋骨	1			1
		爬虫綱	スッポン	上腕骨		1		1
				椎骨	1			1
				腹甲板	1	1	2	4
17c前～18c前	2101溝	哺乳綱	イヌ	寛骨		1		1
				上腕骨			1	1
				大腿骨		1		1
				椎骨	2			2
				橈骨			1	1
				脛骨		1	1	2
			クジラ類	椎骨	1			1
17C後～18C	2307土坑	硬骨魚綱	アマダイ属	前鰓蓋骨			1	1
18c後	2001土坑	哺乳綱	ヒト	遊離歯		1	1	2
	2282土坑	哺乳綱	イノシシ	脛骨		1		1

第３節　堺環濠都市遺跡（SKT960地点）調査出土の貝類について

池田　研（財団法人　大阪市文化財協会）

ここでは堺環濠都市遺跡（SKT960）調査で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑［吉良哲明1954・波部忠重1961］を利用しており、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏よりご教示を賜った。個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

本調査では16世紀後半から明治時代にかけての遺構や包含層から21種、792個体の貝類が出土した（表４）。まず、貝種構成についてみると、カワニナは淡水性種、ヤマトシジミは汽水性種で、他は鹹水性種である。ナミマガシワとヘビガイは食用種ではなく、他の貝殻に付着して持ち込まれた可能性が高い。これらの資料には、鹿島灘以北あるいは日本海北部に棲息するウバガイや、外洋に棲息するダンベイキサゴが各１個体含まれるが、他は調査地周辺の近海で採取可能なものである。また、アカガイやアワビ類など商品価値の高い種の比率は低い。

個別の貝種別にみると、サザエはすべて無棘型の資料であった。2303井戸出土のイタヤガイは貝杓子に加工されたものでないことが明らかな資料である。51土坑出土のヤマトシジミには側歯角が広く、マシジミに似た特徴を示す資料が含まれていた。また、アカニシ・ツメタガイ・バイ・テングニシ・サザエ・アカガイなどには、抉りや孔など身を取り出す際の調理痕が観察された。

遺構別にみると、17世紀前半の2343廃棄土坑から404個体、19世紀代の51土坑から156個体が出土しており、両者で全体の約７割を占めている。2343廃棄土坑ではサルボウを筆頭に、ハマグリやバイがそれに続いているのに対し、51土坑ではヤマトシジミが約９割と圧倒的多数を占めている。本調査の出土資料のみで、当遺跡における時期別の貝種構成の変化を検討するには限界があるが、大坂城・城下町跡では18～19世紀にかけてヤマトシジミの占める比率が上昇する傾向を示しており［池田研2005］、これら２つの遺構の資料に見られる主要種の差異が、時期差を反映しているものであるか注目される。

一方、貝製品については51土坑からハマグリを用いた紅皿が１点、30井戸からバイ独楽が１点、2343廃棄土坑からイタヤガイ製の貝杓子２点が出土している。バイ独楽は殻口の直上を水平に切断し、切り口を丁寧に研磨している。当遺跡のSKT959地点の調査のほか、兵庫県伊丹郷町・明石城武家屋敷跡、大阪府中之島６丁目所在遺跡・堂島蔵屋敷跡などで出土例があるが、全国的には極めて少ない。今回の資料は時期の明らかな遺構から出土している点でも重要な資料であるといえる。

引用・参考文献

池田　研　2005「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」『待兼山考古学論集　―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学考古学研究室編、pp.859～886

吉良哲明　1954『原色日本貝類図鑑』保育社

波部忠重　1961『続原色日本貝類図鑑』保育社

表４　貝類集計表

遺構・層名	時期	フネガイ科	アカガイ	サルボウ	イタヤガイ	イタボガキ	ハマグリ	カガミガイ	バカガイ	シオフキ	トリガイ	ウバガイ	ナミマガシワ	ヤマトシジミ	カワニナ	アワビ類	クロアワビ	ニシキウズガイ科	ダンベイキサゴ	サザエ	ツメタガイ	アカニシ	テングニシ	バイ	ヘビガイ
１トレンチ																									
第１面遺構（15・307土坑、9瓦敷、28便所甕）	18c末～19c			3			1							2						3					
第１面遺構（66土坑・70建物）	18c後～19c			1			1																	1	
第２面遺構（34・51土坑、30井戸）	18c後～19c	○		2			12*							138	1	3		1	1?		3	4		1**	1
30井戸	19c中頃	○					6							1							1	1		1**	
51土坑	19c			2			6*							137	1	3		1	1?		1	3			1
第３面遺構（80土坑）	17c後～18c前																				1	1		1	
第３面遺構（81・85・98土坑）	17c後～18c前						○													1		2		4	
第７面遺構（224石列・222井戸・257建物カマド）	17c前～中頃			7			1									○				蓋1		1		4	
257建物内カマド	17c前			7			1									○								2	
第８面遺構（240溝・270土坑・258建物281石列）	17c前			12			6														1	1		2	
その他遺構（101土坑）	19c																					1			
第１層	18c末～19c					3																		2	
第２層	18c後						○									○	1			1		1			
第３層	17c末～18c初																			1				3	
第４層	17c中頃～後	○		○																		1			
西第４層	17c前			1																					
第６層	17c中頃			○																					
攪乱他				62			6									○				1	1	6	1	1	
２トレンチ																									
第１面明治遺構（2303井戸・2304土坑）	明治				1		3									○									
第１面近世遺構（2238・2301・2266土坑、2113井戸枠内、2274桶）	17c後～19c		1	1							3			1								2			
2300濠	16c後																					1			
2330－1濠上層	17c初～前			11	○	1	5				○					○				2	1	2	1	1	
2330－1濠下層	17c初～前																			1					
2330－2濠中層	16c末～17c初			1																				1	
2330－2濠下層	16c末～17c初	○		1																					
2343廃棄土坑	17c前		1	197	2***	1	112	1	1	1	4	1	○	2		1				殻12蓋6	13	13	1	41	○
第１層				1			17																		
側溝・サブトレ・機械掘削			1	2			4							2		1						1			

○　殻頂・殻口が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの
*　紅皿１点含む
**　バイ独楽
***　貝杓子２点含む

第6章　総　括

今回の調査では大きく見て３時期（近世期・中世期・中世期以前）の人々の営みの姿を確認することができた。最後に調査成果を簡単にまとめておきたい。

１．近世期

17世紀前半～19世紀の遺構面が確認出来た。

近世期の堺環濠都市は、堺市の旧市街地の町割りと同じ長方形街区であることが知られている。当調査地は元禄大絵図（元禄二年・1689）によれば、西側が絹屋五町目・東側が南樽屋二町目となっている。今調査では、その町割に直交して形成された明瞭な短冊形地割の町屋構造を検出した。その構造は道路に面する表側に礎石建物を建て、裏側に廃棄土坑・埋甕・井戸などを設けている。短冊形地割との名称が示すように一つの町屋の間口は非常に狭く、幅４～５ｍ（２間～２間半）程度である。そして表側からの奥行きは15m以上を測り、背割りの区画溝をもって敷地を画する。このような構造は、近世初頭からほぼ近世全般を通じて踏襲されていることが確認できた。なお、区画溝は絹屋町と樽屋町を区分する機能も果たしていた。

17世紀前半代は、道路に面する表側に一辺４ｍ前後の礎石建物が敷地幅一杯に建てられていた。なお、建物は通りに面した部分が調査区外に伸びている可能性が想定出来るので、奥行きの規模がもう少し大きくなるものと思われる。また、建物内や周辺から瓦が多量に出土することから、近世初頭の段階から瓦葺建物であったことが想定される。

樽屋町側の礎石建物には、建物内に５～６連のカマドを構築しているものが存在した。樽屋町という性格とカマドの規模を考慮すると、このカマドは調理に関わる施設というよりは、樽に使用する木材の樹脂抜きなどに利用されたものと推察される。

また、建物内部には、薄い整地層を積み重ねた硬く締まった通路が作られており、それに繋がるように建物裏側には礫を敷き詰めた石敷が構築されていた。裏庭への通路となっていたと考えられる。

建物裏側には埋甕・土坑などを設けている。また、表側からの奥行き15m付近には、背割りの区画溝（幅２ｍ・深さ0.6m）が掘削されていた。この区画溝には多量の陶磁器や木製品が廃棄されており、廃棄の場としても利用されていたものと推定される。

17世紀中葉以降の遺構面では、細かな整地が繰り返されたためか建物を明確にすることが出来なかった。しかし、裏側の構造は17世紀前半代と大きな違いを持たず、土坑・埋甕・区画溝などが設けられていた。なお、前段階との大きな違いが２点確認出来た。１点は区画溝の幅・深さといった規模が次第に小さくなり、廃棄の場として利用されていたものが、その利用頻度を減じることとなる。その代わりに、新たに区画溝の周辺に廃棄土坑が数多く掘削されるようになることである。もう１点は17世紀半ば以降、表側すなわち建物に近い位置に井戸が掘削されることである。17世紀前半代に遡る井戸が確認されていないことから、水の使用方法や入手方法に大きな変化が生じたとみられる。

なお、先にも述べたが17世紀前半代の区画溝から多量の木製品が出土する。それらの木製品には桶樽部材・糸巻き具・桜樹皮・木っ端などがあり、当地が樽屋町・絹屋町であったことを示す貴重な資料といえる。

2．中世期

中世期の堺環濠都市に関しては、２調査区において都市南限を画する濠４条を確認した。濠は全てが同時存在ではなく、短期間の間に掘削と埋め戻しを繰り返しながら、都市域を拡張するかのように、北から南へと少しずつ位置をずらして形成されていた。

先ず最初に、北側の都市域側に土塁状施設を伴った2300濠が掘削される。この掘削年代に関しては明確にしえなかったが、濠の最下層より16世紀第３四半期頃の土師質蓋が出土したことから、16世紀後半には機能していたものと想定できる。その後、この濠は土塁の土砂を利用して埋め戻されている。この状況は、従前の調査により確認された天正十四（1586）年、豊臣秀吉による濠埋め戻し令によって埋められた濠の状況と酷似している。

そして、大坂夏の陣直前には一番南端で確認した2330－１濠が掘削された。この濠は元禄堺大絵図にはその痕跡を留めていないため、大絵図完成までの時間の中で徳川幕府による堺再建プロジェクトによって埋め立てられ、近世町屋へと変貌を遂げたことが明らかとなった。2330－１濠が掘削された段階には、その北側にあった2300濠などの３条の濠は既に埋め戻されていた。埋め戻された跡地には、礎石建物が建てられ、板による土留めをもつ溝が作られるなどしており、都市域が広がったことを明らかに出来た。なお、塼列建物が見られず、礎石が小さく粗末な礎石建物で町が構成されていた点は、調査地西側にあるSKT331地点の調査成果と同様であり、都市の縁辺部であったことを物語るものであろう。これらの遺構は近世段階のものとは軸を異にしており、夏の陣以降の近世町屋とは大きく異なった町割であったことが看取出来る。

中世堺を囲う濠が海と繋がっていたのか否かは、これまで明らかにされていない問題として挙げられていた。今回、この問題に対して濠堆積土の珪藻分析を実施した。その結果、いずれの濠からも海洋や内湾性の珪藻は検出されず、当地点の濠は直接海と繋がっていたことを示すものではなかった。今後、より西側すなわち海側で検出した濠での再分析が必要と言える。

また、１調査区のように濠の外にあたる都市域外では鋤溝群がみられ、耕作地が展開していたことも明らかに出来た。

なお、１調査区で確認した17世紀前半代に掘削された初期の区画溝は、北から南へ傾斜し、幅２ｍ・深さ0.6ｍを測る巨大なものであり、単なる区画溝とは見做し難い規模である。そして、溝の北側への延長には、２調査区南端で確認した中世最終段階に掘削された濠、2330－１濠が存在する。溝底面の標高はＴ.Ｐ.1.4ｍを測り、2330－１濠の最終底面のＴ.Ｐ.値とほぼ同一である。調査区の関係で両者の交点部分の調査が行えなかったが、上記のような状況を考えると、近世初期に掘削された区画溝は中世環濠を埋め立てる際に邪魔となるであろう濠内の水を排水することを初期目的とし、更には併せて区画の意味を持たせて掘削されたものと想定される。

3．中世以前

中世以前の様相は古代～中世前半代には多数の牛や人間の足跡が見られる湿潤な地形が広がっており、明確には出来なかったが耕地として利用していた可能性をうかがわせる。また、足跡が残された遺構面の基盤層（第11層）には多量の須恵器・土師器・埴輪・土錘・円面硯が包含されており、近傍に古墳や集落が存在していたものと推察される。

足跡を確認した遺構面の下層でも、さらに暗色帯を形成するシルト～粘土を数枚確認出来たため、本調査区には後背湿地状の地形が広がっていたものと推察される。上記の遺物を多量に包含する層は、後

背湿地を利用可能な状態にするために近傍から客土された可能性も想定される。

当調査区の東隣に位置するSKT391では、西に向かって落ちていく低位段丘が確認されている。その上位では埴輪・須恵器などを含む包含層が確認されており、この層が今回検出した第11層に該当すると考えられる。当調査区より西側には砂堆が広がると想定されており、今回確認した後背湿地状の地形は東側の低位段丘と西側の砂堆との間に形成されていたと考えられる。

最後に、近傍の調査では、調査区の西に位置するSKT169において濠が２条検出されている。調査の制約上、２条の濠がＬ字状に合流するのか、Ｔ字状に接するのかは不明とされている。これらの濠は秀吉によって埋め戻された濠であると推定されていることから、今回検出した2300濠と関連する環濠であると思われる。しかし、両濠は規模・形状の点で大きな違いがあり、両地点を繋ぐ位置での調査によって、その関連性が明らかになることを期待したい。

濠に関する現状と課題

これまでにも述べてきたように、今調査では中世期の４条の濠を検出した。これらの濠は調査地の位置や慶長二十（1615）年の夏の陣の焼土層の分布状態から、中世堺の都市域を囲い遺跡名にも冠される環濠の一部といえる。長年続けられてきた堺環濠都市遺跡の約1000件もの調査において、濠に関する調査事例は今調査例を含めて23地点で確認されているに過ぎない。この中には調査面積の制約などから濠状堆積物のみの検出や濠の一部のみを確認したに留まる例が多く、堺環濠都市という遺跡名の割には濠に関して未だ不明な点が多い。ここでは、既往の調査成果を援用して濠に関してまとめておきたい。

濠の規模と形状

これまで確認されている濠の幅はSKT960地点（今調査）2300濠の17mを最大のものとし、最小はSKT153地点の4.1mである。概ね、７m以上とそれ以下とに２大別することが出来る。深さに関しては、SKT960地点の2300濠の４mを最大のものとし、最小はSKT193地点などの１m前後である。深さも幅同様に２m前後を測るものと1.5m前後のものとに２大別出来よう。濠規模と検出地点とを比べた場合、規模が大きいものが都市域の外郭部分（SKT153・193・43・10・960・169など）で検出され、小規模なものが都市内部（SKT771・123－４・112など）で検出される傾向がみられる。すなわち、都市を囲っていた濠の方が規模の大きいものであったことが窺える。防御などの観点からみても、その点は首肯できよう。一方、小規模なものに関しては、その造営位置周辺には宿院頓宮などが存在しており、寺院を囲むものや、区画や排水を意図するものであったと思われる。

ほとんどの濠は断面形状が逆台形を呈している。その中にあって、2300濠は二段掘りとなっており、断面形が逆「凸」の字状を呈する特異なものとなっている。これは濠の深さに関係するものと思われるが、何故この地点だけこのような形状になっているのかが問題として挙げられる。

また、環濠には土塁状の施設が伴っていたと考えられる調査例（SKT169・960など）が存在している。多くの濠は天正十四（1586）年の豊臣秀吉の埋め戻し令によって、埋め立てられその規模を減じることとなるが、環濠ではその際に土塁を崩しながら埋めたようである。なお、断面の状況から、埋め戻す際には一気に完全に埋めるのではなく、排水などに利用するため一部を埋め残していたと想定される。

濠底の標高

濠は掘削深度にある程度の斉一性がみられるが、濠底の標高を同一高に揃えて掘削された訳でなく、

T.P.０m以下のものと、T.P.1.5m前後のものに大別出来る。この高さの違いは濠の規模と関連するものではない。

都市の外郭に位置する大規模な濠でもSKT153（T.P.－1.1・－1.2m）・SKT193（T.P.－0.7・－1.0m）・SKT960（T.P.－1.6・0・0.4・0.7m）・SKT169（T.P.－0.9m）などでは前者であり、SKT528（T.P.1.9m）・SKT43（T.P.1.4m）・SKT360（T.P.1.8m）・SKT10（T.P.1.5m）などは後者である。これは、SKT528・SKT43・SKT360・SKT10などが立地するのは現地盤がT.P.４～５mにあり、SKT153・SKT193・SKT960・SKT169などは現地盤がT.P.４m以下に立地するといった地形的立地環境に起因している可能性がある。すなわち、都市を巡る濠はSKT528・SKT43・SKT360などが立地する堺市熊野町東・市之町東・甲斐町東付近を最高所とし、そこを分水嶺にするかのように、北・南へと傾斜を振り分けていたものと想定される。

また、そのように想定した場合、例えば、都市南東部の環濠と推定されるSKT10とSKT960両地点で比高差が最大3.1m存在することになり、低きに流れて行く水の性格を考えれば、永禄五（1562）年イエズス会士日本通信の「西方は海を以て、又他の側は深き濠を以て囲まれ、常に水充満せり」と書かれている記述にそぐわない。「常に水充満せり」が正確な記述と考えるならば、水を堰き止めるための施設が設けられていたと推定される。それは、今回、珪藻分析を行った結果、海洋や内湾性の珪藻が検出されず、SKT960地点の濠が直接海と繋がっていなかった可能性が高いことからも、堰状の施設や道路との交点に設けられた土橋状の施設などで濠が連続せず分断されていた状況も考える必要があろう。

多重の濠

中世堺を巡っていた濠は１条ではなく、多重であった可能性が高い。SKT153・193地点において平行する２条の濠の存在が確認されている。両地点で検出された濠は同規模のものが並列するのではなく、都市域側に幅広の濠（SKT153・幅８m、SKT193・幅11m）が、その外側に幅狭のもの（SKT153・幅4.1m、SKT193・幅５m）が掘削される状況にあった。今調査でも2300濠と2325濠が同時期に存在する可能性をみたが、その状況はSKT153・193地点と同じく都市域側に幅の広い2300濠が、外側に幅の狭い2325濠が掘削されている。SKT153・193地点は環濠都市の北部に、SKT960地点は南部にあたるため直接的に両者を結びつけることは出来ないが、それぞれ都市東側を巡る濠の一部を構成していたことに間違いないことから、東側の環濠は２重の濠で区画されていた可能性を想定出来よう。

濠はその機能を保持するため、浚渫・改修等の維持管理が行われたのは想像に難くない。故に、現状では掘削年代を推定することが困難な場合が多い。今後の調査成果の蓄積により、濠に関する文献との対応関係が一層明らかになることを期待したい。また、今回確認した都市域を拡張するかのように掘削と埋め戻しを繰り返して築かれた４条の濠の様相（変遷）が他の場所でも普遍的な状況であったのか、４条の濠がそれぞれ既往の調査例とどのように繋がるのか等残された課題も多く更なる検討が必要と言える。

参考文献

白神典之　1990「環濠都市「堺」の濠に関する二・三の問題」「堺環濠都市遺跡（SKT182）立会調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告　第６冊』堺市教育委員会
續伸一郎　2003「戦国時代の自治都市　堺―発掘調査からみた堺環濠都市遺跡―」『戦国時代の考古学』高志書院
増田達彦　2003『宣教師が見た堺－発掘成果からの生活復元－』堺市博物館
嶋谷和彦　2007『堺環濠都市における既往の“環濠”の調査事例』1617会堺環濠都市検討会発表資料

主要な既往の調査地点の位置は図４を参照して頂きたい。紙幅の関係で発掘調査報告書に関しては割愛した。

遺構一覧表

表 5 ～17

遺物観察表

表18～33

表５　遺構一覧表（１）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
3	第１面	ピット	6I-5j	0.25	0.15			
9	第１面	瓦敷	6I-6j	0.45	0.4			
14	第１面	瓦井戸	6I-5j	0.93	0.87	92＋α	19	掘方1.75m×1.66m 深さ86cm
15	第１面	土坑	6J-5a	0.98	0.5		19	
25	第１面	埋甕	6J-5a	0.75	0.5			便所甕
28	第１面	埋甕	6J-5a	0.4	0.2			便所甕
50	第１面	土坑	6J-5a	0.7	0.3+α	2.5		
222	第１面	井戸	6J-5a	0.635	0.635	61+α	17中～19	掘方0.9m×0.91m 深さ64cm＋α
63	第１面	土坑	6I-7i	1.65	1.2			
64	第１面	土坑	6I-7i～j	1.1+α	0.5	8.4		
66	第１面	土坑	6I-7i	0.5+α	0.5+α		18後～19	
67	第１面	土坑	6I-7i	1	0.8	18.1		
69	第１面	土坑	6I-7i	0.72	0.69	35		掘方0.8m×0.75m＋α 深さ35cm
70	第１面	建物	6I-7i～j	3.94+α	2.1+α		19	
71	第１面	土坑	6I-7i	1.2	0.6+α	20.4		
72	第１面	土坑	6I-7i	1.2+α	0.6			
73	第１面	土坑	6I-7i	1.1+α	1			
74	第１面	土坑	6I-7i	2.2	1.37	6	18後～19	
75	第１面	土坑	6I-7i	0.8	0.25+α	4.3	18後～19	
76	第１面	土坑	6I-7i	0.7+α	0.6	9.1		
77	第１面	土坑	6I-7i	2.2+α	1.25+α	64.6		
78	第１面	土坑	6I-7i	1.36	1.1	61	18後～19	
79	第１面	土坑	6I-7i	0.7+α	0.65	12.1		
317	第１面	井戸	6I-7i～j	1.4	1.3	0.63+α	18末～19	
29	第２面	土坑	6J-5a	0.36	0.34	26		
30	第２面	井戸	6J-5a	0.77	0.77	120+α	19中～後	掘方1.11m×1.1m 深さ120cm＋α
31	第２面	土坑	6J-5a	0.45	0.45	17.8		
32	第２面	土坑	6J-5a	0.5	0.2	15.2		
33	第２面	土坑	6J-5a	0.6	0.5	27.6		
34	第２面	土坑	6J-5a	3.4	0.9	28.3		
35	第２面	土坑	6J-5a	0.5	0.3	8.2		
36	第２面	土坑	6J-5a	0.5	0.4	3.8		
37	第２面	土坑	6J-5a	0.4	0.3+α	5.2		
39	第２面	土坑	6J-5a	0.75	0.6	6.2		
40	第２面	土坑	6J-5a	0.8	0.8	3.8		
41	第２面	土坑	6I-5j	0.7	0.7			
42	第２面	ピット	6I-5j	0.2	0.2			
43	第２面	土坑	6I-5j	0.4	1.5+α	21.2		
44	第２面	土坑	6I-5j	0.4	0.4		18後～19	
45	第２面	土坑	6I-5j 6J-5a	0.4	0.32		18後～19	
46	第２面	土坑	6J-5a	0.85	0.7		18後～19	
47	第２面	土坑	6J-5a	0.4	0.4			
48	第２面	土坑	6J-5a	3.4+α	1.45			不定形土坑
49	第２面	土坑	6J-5a	1.1+α	0.5			
51	第２面	土坑	6I-5～6j 6J-5a	0.85	0.85	80	18後～19	
52	第２面	土坑	6I-6j	3	2.5	2.3		
53	第２面	土坑	6J-6a	0.45	0.3+α	4.6		
54	第２面	ピット	6I-6j	2.5	1.5＋α	6.8		
55	第２面	ピット	6I-5j	2	2	4.8		
56	第２面	土坑	6I-6j 6J-6a	2.5	0・8+α			
57	第２面	土坑	6I-5～6j	3.2	0.9+α	10.4	18後～19	
58	第２面	土坑	6J-4a	0.8	0.4	6		
59	第２面	土坑	6J-5a	0.55	0.3			
60	第２面	ピット	6J-4a	0.25	0.25	5.7		
61	第２面	土坑	6J-5a	0.8	0.5	8.5		
62	第２面	土坑	6J-5a	0.5	0.4			

表６　遺構一覧表（２）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
115	第２面	土坑	6I-7i	1.15	0.9	9.9		
116	第２面	土坑	6I-7i	1.1	0.9	34	18後～19	
154	第２面	ピット	6I-7j	0.25	0.25	17.4		
80	第３面	土坑	6J-5a	3.7	1.5+α	67.5	18後～	第２面で検出すべき遺構
81	第３面	土坑	6J-5a	1.4	1+α			
82	第３面	土坑	6J-5a	1.3+α	1.2	2.4	18後	第２面で検出すべき遺構
83	第３面	土坑	6J-5a	1.6+α	0.75	20.8	18中	
84	第３面	土坑	6J-4a	2.3	0.7+α	6.7		
85	第３面	土坑	6J-4a	3.5+α	1.5	22.1	17後～18中	
87	第３面	溝	6J-5a	1.9+α	0.25			
88	第３面	溝	6J-5a	1.4+α	0.25	9.5		
89	第３面	土坑	6J-5a	1.1	0.9	45	17後～18	
90	第３面	土坑	6J-5a	1.1	0.9	16.5		
91	第３面	土坑	6J-5a	0.95	0.8			
92	第３面	土坑	6J-5a 6I-5j	1.4+α	1.2	18.1	18後～19	第２面で検出すべき遺構
93	第３面	ピット	6I-5j	0.2	0.2	10		
94	第３面	ピット	6I-5j	0.15	0.15	5.9		
95	第３面	土坑	6I-5j	0.7	0.45	10		
96	第３面	土坑	6I-5j	1.11	0.5	56	18後～19	第２面で検出すべき遺構
97	第３面	ピット	6I-5j	0.3	0.2	18.9		
98	第３面	土坑	6I-6j	1.8	1.1	32	17末～18	
99	第３面	土坑	6I-5～6j	0.65	0.6	18.9		
100	第３面	土坑	6I-6j	1.2	0.9	36.8		
101	第３面	土坑	6I-6j 6J-6a	1.2	0.95	13.5	19	第２面で検出すべき遺構
102	第３面	溝	6I-6j	8.5+α	0.5	12	17後～18	
103	第３面	ピット		－	－	－		
104	第３面	土坑	6I-6j	3.8	2.1	94	17末～18	
107	第３面	土坑	6J-5a	0.4	0.3		18	
108	第３面	土坑	6J-5a	3.7	2.2	45	18後～19	第２面で検出すべき遺構
109	第３面	土坑	6J-5a	－	－			
110	第３面	土坑	6I-5j	0.8+α	0.35+α	26.2		
111	第３面	土坑	6J-5a	1.45	1.1	2.5	17中～後	
112	第３面	土坑	6J-5a	0.6+α	0.4	21.3		
113	第３面	ピット	6I-5j	0.2	0.2	4.6		
114	第３面	ピット	6I-5j J-5a	0.2	0.2	15.8		
117	第３面	土坑	6J-5a	1.2	0.7+α		17末～18	
118	第３面	土坑	6J-6j	0.5	0.2	10.3		
119	第３面	土坑	6J-5a	0.35	0.3		17後～18	
120	第３面	ピット	6J-5a	0.4	0.3			
186	第３面	瓦列	6I-7i	3.2+α	0.04	25		
102	第４面	溝	6I-6j	8.5+α	1.1	31	17中～後	
121	第４面	土坑	6J-5a	0.5	0.45	23.9		
122	第４面	土坑	6J-5a	1.4	0.7+α			
123	第４面	土坑	6J-5a	0.7	0.7	42.9		
124	第４面	土坑	6J-5a	5.2+α	1.1	西15.7 中央16.6 東19	17中～後	
125	第４面	土坑	6J-5a	0.6	0.55	12.9	17後	
126	第４面	土坑	6J-5a	1.35	0.8	42.1		
127	第４面	土坑	6J-5a	0.37	3+α	6.7		
128	第４面	土坑	6J-5a	0.8	0.6	36.9	18前	第３面で検出すべき遺構か
129	第４面	土坑	6J-5a	1.1	0.55	14.4		
130	第４面	土坑	6J-5a	0.3	0.15	5.7		
131	第４面	土坑	6I-5j	0.7	0.7			

表７　遺構一覧表（３）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
132	第４面	土坑	6J-5a	1.4	1	73	17中～後	
133	第４面	土坑	6I-5j・6J-5a	1.55	0.9+α	89	17中～後	
134	第４面	土坑	6I-5j	0.4	0.15+α	6.3		
135	第４面	土坑	6I-5j	0.8+α		27.8	17後	
136	第４面	土坑	6I-5j	0.4	0.3	13.1		
137	第４面	土坑	6I-5j	0.4	0.3	9.7		
138	第４面	ピット	6I-5j	0.15	0.1	13.5		
139	第４面	土坑	6I-6j	2.5	1.2	18.1	18後	第２面で検出すべき遺構
140	第４面	土坑	6I-5j	1.5+α	0.8	5.8	17後	
141	第４面	土坑	6I-6j	2.4	0.9	63	17末～18	第３面104土坑の掘り残しか
142	第４面	土坑	6I-6j	0.5	0.2+α	12.7		
143	第４面	土坑	6I-6j	0.45	03+α	10.5		
144	第４面	土坑	6I-6j	1.2+α	0.7+α	32.9	17後	
145	第４面	土坑	6I-6j	1.1+α	0.5+α	15.8	17中～後	
146	第４面	土坑	6I-6j	0.5+α	0.4	6.9		
147	第４面	溝	6I-6j	0.8	0.2	4.6		
148	第４面	土坑	6J-5a	1.7+α	0.4+α	24		
149	第４面	土坑	6I-5j	0.3	0.3	3.8	17末～18	
150	第４面	土坑	6I-5j	1.05	0・95	42		
151	第４面	ピット	6I-5j	0.2	0.2	7.3		
152	第４面	土坑	6I-5j	0.9	0.5+α	1.6		
153	第４面	ピット	5I-5j	0.1	0.1			
155	第５面	埋甕	6I-5j	0.53	0.51	58＋α		掘方0.6m×0.6m 深さ50cm
156	第５面	埋甕	6I-5j	0.55	0.53	21＋α	17中～後	掘方0.63m×0.58m 深さ24cm
157	第５面	土坑	6J-5a	3.65+α	1.3	29.8		掘方0.63m×0.6m
158	第５面	土坑	6J-6a	1.75	0.35	15.1	17中～後	
159	第５面	土坑	6J-5a	0.7	0.5	27	17後～末	
160	第５面	土坑	6J-5a	1+α	0.6	15.5		
161	第５面	土坑	6J-5a	0.75	0.75	18.4		
162	第５面	土坑	6J-5a	0.45	0.3+α	7.9		
163	第５面	土坑	6J-5a	0.5	0.35	3.4		
164	第５面	土坑	6J-5a	0.35	0.35			
165	第５面	ピット	6I-5j	0.35	0.35	61	17中～後	
166	第５面	ピット	6I-5j	0.35	0.3	3.2		
167	第５面	土坑	6I-5j	1.8+α	0.95+α	16.2	17後	
168	第５面	土坑	6I-5j	1.3	0.7+α	23.3		
169	第５面	土坑	6I-5j	0.6	0.45	26		
170	第５面	土坑	6J-5a	0.65	0.5	19.5		
171	第５面	土坑	6J-5a	0.65	0.65			
172	第５面	土坑	6J-5a	1.4+α	0.8			
173	第５面	埋甕	6J-5a	0.48	0.45	16＋α		掘方0.52m×0.54m 深さ17cm
174	第５面	埋甕	6J-5a	0.51	0.24	12＋α		掘方0.57m×0.52m
175	第５面	土坑	6I-6j	1.5	1.1	25	17後～18	
177	第５面	土坑	6I-5j	0.55	0.55			
178	第５面	土坑	6I-6j	0.5	0.35	9.1		
179	第５面	土坑	6I-6j	0.45	0.3			
180	第５面	土坑	6J-5a・6I-5j	1.4+α	1+α	13.5		
181	第５面	ピット	6I-5j	0.2	0.2	5		
182	第５面	土坑	6I-5j	0.25	0.25			
183	第５面	土坑	6J-5a	0.65	0.65	34		
184	第５面	ピット	6I-6j	0.7	0.6	15.5		
185	第５面	土坑	6I-6j	1.1	0.7	17.8		
187	第６面	埋甕	6J-5a	0.59	0.53	43＋α	17中	掘方0.73m×0.73m 深さ37cm
188	第６面	溝	6I-5j	8+α	1.8	0.3	17中～後	
189	第６面	土坑	6J-4a・5a	3.2+α	0.6+α	31.8		
190	第６面	土坑	6J-5a	2.6	1.6	24.5		

表８　遺構一覧表（４）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
191	第６面	土坑	6J-5a	0.5+α	0.6	15.5		
192	第６面	土坑	6J-5a	0.6	0.5	24.5		
193	第６面	土坑	6J-5a	2.7+α	1.6+α	17.4		
194	第６面	土坑	6J-6a	0.8	0.4+α	15.8		
195	第６面	土坑	6J-6a	0.9	0.9	25.3		
196	第６面	土坑	6J-5a	3.2	1.25+α	21.6		
197	第６面	土坑	6J-5a	0.95+α	0.55+α	16.8		
198	第６面	土坑	6I-6j	1.2	0.6	29	17後～18前	撹乱底で検出したため掘り込み面が不明
199	第６面	土坑	6I-6j	1.42	0.6	39	17中	
200	第６面	土坑	6I-6j	1.1	0.4+α			
201	第６面	ピット	6I-6j	0.17	0.17			
202	第６面	溝	6I-6j	1.2+α	0.4	6.1	18後	第２面51土坑の掘り残しか
203	第６面	土坑	6J-5a	0.6	0.6	22.2		
204	第６面	溝	6J-5a	1.45+α	0.35+α	14.9		
205	第６面	土坑	6I-6j	0.6+α	0.5+α		17中	
206	第６面	土坑	6I-6j	0.4	0.3	6.1		
207	第６面	土坑	6I-6j	3.3+α	1.9	73	17後～18前	撹乱底で検出したため掘り込み面が不明
208	第６面	集石土坑	6I-5j	0.47	0.46	70		
209	第６面	土坑	6J-5a	0.6	0.6	124.2	17中	
210	第６面	ピット	6I-5j	0.25	0.2	13		
211	第６面	土坑	6I-5j	0.9+α	0.6+α		17中	
212	第６面	土坑	6I-5j	1.2	0.6+α			
213	第６面	瓦井戸	6J-5a	0.69	0.64	62＋α	17中～18	掘方1.1m×0.95m
214	第６面	ピット	6I-5j	0.3	0.3			
215	第６面	土坑	6J-5a	0.63	0.6	24		
216	第６面	土坑	6J-5a	0.5+α	0.5+α	16.6		
217	第６面	土坑	6J-5a	0.8+α	0.7+α	29.8	17中	
218	第６面	土坑	6I-5j・6J-5a	0.61	0.56	80	17中	
219	第６面	土坑	6J-5a	0.5	0.5	23.4		
220	第６面	礎石列	6J-5a	北西-南東 1.4	-			a・掘方0.25m 深さ4.5cm b・掘方0.27m 深さ5.5cm c・掘方0.27m 深さ4.5cm
221	第６面	礎石	6J-5a	0.27	0.2	6		掘方0.36m 深さ5.5cm
223	第６面	土坑	6I-5j	0.35	0.3+α			
224	第７面	石列溝	6J-5a	6＋α	0.6	12cm	17前	一石五輪塔転用
225	第７面	カマド	6J-4～5a	b・0.24 c・0.44 d・0.4 e・0.38 f・0.55 f-2・0.28	b・0.15 c・0.29 d・0.3 e・0.36 f・0.45 f-2・0.25	b・2.5 c・4 d・3 e・5 f・13 f-2・5.8	17前	257建物内
226	第７面	土坑	6J・6a	0.45	0.3			
227	第７面	溝	6J-6a	1.8	0.5	19	17前	
228	第７面	土坑	6J-5～6a	1.2	0.7+α	28.9	17前	
229	第７面	埋桶	6I-5j	0.56	0.52	38	17中	掘方0.63m×0.63m
230	第７面	土坑	6I-5j	1.2	1.14	30	17前	
231	第７面	ピット	6I-5j	0.2	0.15			
232	第７面	土坑	6J-5a	1.05	0.65	7.8	18前	第３面の遺構か
233	第７面	土坑	6I-6j	0.35	0.25			
234	第７面	土坑	6I-6j	0.45	0.3		17前	
235	第７面	土坑	6I-5j	0.7	0.3+α	28.6		
246	第７面	土坑	6J-4a	2.7	2.1		17前～中	257建物を切る
255	第７面	礎石	6J-5a	0.2	0.2			掘方0.25m×0.25m 一石五輪塔の転用か
256	第７面	礎石列	6I-5j 6J-5a	1.55	0.12	5.5		掘方0.25m　深さ６cm

表９　遺構一覧表（５）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
257	第７面	建物	6J-4～5a	4.2+α	3.6+α		17前	246土坑に切られる
247	第７－２面	カマド	6J-5a	b・0.28 c・0.31 c-2・0.42 d・0.41 e・0.53 f・0.33	b・0.18 c・0.31 c-2・0.19 d・0.26 e・0.42 f・0.26	b・4.1 c・4.9 c-2・12.7 d・4.3 e・8.1 g・2.1	17前	257建物内
262	第７－３面	カマド	6J-4～5a	b・0・44m c・0.44 d・0.43m e・0.61m f・0.58m	b・ 0.22m+α c・0.36m d・0.35m e・0.42m f・0.42m	b・8.5 c・6.4 d・4.4 e・4.5 f・6.2	17前	257建物内
236	第８面	溝	6J-6a	5.4+α	1.4+α	西30 東52	17中～後？	
237	第８面	土坑	6I-6j	3.3+α	1.2	67	17前	
238	第８面	土坑	6I-6j	3.5	1・3+α		17前～中	
239	第８面	土坑	6I-6j	0.9+α	0.5+α			
240	第８面	溝	6I-5～6j 6J-6a	8+α	2.4+α	60	17前	
241	第８面	土坑	6I-6j	0.4+α	0.2			
242	第８面	土坑	6I-6j	1.8	1.36	66	17前～中	
243	第８面	土坑	6I-6j	東西2+α 南北1.4+α	0.75	28	17前～中	
244	第８面	埋甕	6J-5a	0.32	0.32	24＋α	17前	掘方0.38m×0.38m 深さ16cm
245	第８面	埋甕	6J-5a	0.36	0.36	22＋α	17前	掘方0.36m×0.36m 深さ14cm
248	第８面	土坑	6I-5j	1.4	0.7+α			
249	第８面	土坑	6J-4a	1.2	0.6		18後	第２面の34土坑の掘り残し
250	第８面	土坑	6J-4～5a	1.5	0.7	38	18後	第２面の34土坑の掘り残し
251	第８面	土坑	6J-5a	1.2	0.9+α		17中	
252	第８面	土坑	6J-5a	0.65	0.2		17前	
253	第８面	土坑	6J-5a	1.2	0.5+α		17前	
254	第８面	土坑	6J-5a	0.6	0.4			
258	第８面	建物	6J-4～5a	5.8+α	4.45+α		17前	265土坑・266土坑・280土坑・282カマド・283土坑・284礎石・285礎石・378礎石を含む
259	第８面	土坑	6J-4a	0.6	0.5+α	62		
260	第８面	土坑	6I-5j	1.1	1	32+α		
261	第８面	土坑	6I-6j	1・5	1.1+α		17前	
263	第８面	ピット	6I-5j・ 6J-5a	0.3	0.2			
264	第８面	土坑	6I-5j	0.7+α	0.7			
265	第８面	土坑	6J-4a	0.58	0.5	32.6	17前	258建物内
266	第８面	土坑	6J-4a	0.59	0.55	19	17前	258建物内
267	第８面	ピット	6I-6j	0.3	0.3			
268	第８面	溝	6I-6j	1.1+α	0.5			
269	第８面	土坑	6J-6a	0.44	0.28	7.5	17中	
270	第８面	土坑	6J-5a	0.5	0.3			
271	第８面	土坑	6J-5a	0.5	0.3			
272	第８面	ピット	6J-4a	0.4	0.3			
273	第８面？	瓦列	6J-5a	－	－	－	17前	
276	第８面	土坑	6J-5a	0.35	0.2		17前	
277	第８面	土坑	6I-5j	0.4	0.35			
278	第８面	土坑	6J-5a	0.52	0.2	15		
279	第８面	土坑	6J-5a	0.68	0.15+α	0.95	17前	
280	第８面	土坑	6J-4a	0.57	0.39+α	19.5	17前	258建物内
281	第８面	石列	6J-5a	2.95	0.45	5	17前	
282	第８面	カマド	6J-4a	15.5	0.47	9	17前	258建物内
283	第８面	土坑	6J-4a	0.65+α	0.29+α	33	17前	258建物内

表10　遺構一覧表（6）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
284	第８面	礎石	6J-4a	0.33	0.27	4	17前	258建物内／掘方0.4m×0.37m深さ５㎝ 石塔台座の転用か
285	第８面	礎石	6J-4a	0.24	0.24	5.5	17前	258建物内／掘方0.39m×0.33m 深さ６㎝ 石塔台座転用
378	第８面	礎石	6J-4～5a	0.38	0.25	28	17前	258建物内
274	第８面	溝	6I-7i	0.65	0.35	13.5	17前	
275	第８面	ピット	6I-7j	0.4	0.3			
286	第８面	礎石	6I-6j	0.21	0.14	9.5		掘方0.27m×0.24m 深さ７㎝ 石臼転用
288	第８面	土坑	6I-7i	0.3	0.2	11.2		
289	第８面	礎石	6I-7i	0.4	0.3	13		掘方0.58m 深さ13㎝
290	第８面	土坑	6I-7i	0.45	0.4	17		
291	第８面	礎石	6I-7i	0.34	0.3	13		掘方0.45m×0.35m 深さ９㎝
292	第８面	礎石	6I-7i	0.22	0.2	10		掘方0.3m×0.25m 深さ７㎝
293	第８面	礎石	6I-7i	0.19	0.2	12		掘方3.2m×3.2m 深さ11㎝
294	第８面	礎石	6I-7i	0.25	0.16	9		掘方0.23m 深さ11㎝
295	第８面	礎石	6I-7i	0.15	0.1	7		掘方0.29m 深さ6.5㎝
304	第８面	礎石	6I-7i	0.18	0.1	8		掘方19㎝ 深さ８㎝
305	第８面	礎石	6I-7i	0.25	0.15	13		掘方0.33m 深さ10㎝
352	第８面	礎石	6I-7i	0.18	0.15	9.5		掘方0.27m×0.25m 深さ７㎝
379	第８面	礎石	6I-6j	0.16	0.11			掘方0.26m×0.26m
296	第９面	土坑	6J-5a	1.3+α	0・95+α		17前	
297	第９面	土坑	6J-5a	1.5+α	0.6+α		17前	
298	第９面	土坑	6J-5a	0.2+α	0.17+α	18	17前	
299	第９面	土坑	6J-5a	0.7＋α	0.3			
300	第９面	土坑	6J-5a	0.95+α	0.8+α			
301	第９面	溝	6J-5a	2.7＋α	0.3		17前	
303	第９面	土坑	6J-5a	0.9	0.77	20	17前	
306	第９面	埋甕	6J-5a	0.55	0.55	22＋α	17前	掘方0.76m 深さ30㎝
307	第９面	土坑	6J-5a	2.5	1.5	13	17前	
308	第９面	土坑	6I-5i・6J-5a	1.6+α	1.2+α		17前	
309	第９面	ピット	6J-5a	0.3	0.2			
311	第９面	土坑	6I-6j	0.8+α	0.4		17前	
312	第９面	土坑	6I-6j	1.8+α	1.2+α			
313	第９面	溝	6I-6j	2.4	0.8		17前	
314	第９面	溝	6I-5j	南北2.6 東西1.3	0.9		17前	
315	第９面	土坑	6I-5j・6j	0.5	0.4			
316	第９面	土坑	6J-5a	1.6	1.3		17前	
321	第９面	土坑	6I-6j	0.9+α	0.9+α			
322	第９面	土坑	6J-5a	1.1+α	0.4+α		17前	
327	第９面	ピット	6J-5a	0.35	0.3			
328	第９面	建物	6J-4a・5a	北東-南西 4.58+α	北西-南東 3.57+α		17前	329溝・331土坑・336土坑・354礎石・355礎石・356礎石・367ピット・368礎石・369礎石・374溝
329	第９面	溝	6J-4a・5a	2.3+α	0.2		17前	328建物内
331	第９面	土坑	6J-4a・5a	0.5	0.2		17前	328建物内
332	第９面	土坑	6J-5a	0.55	0.45			

表11　遺構一覧表（7）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
333	第９面	石列	6J-5a	3.13	0.64	5.5		
336	第９面	ピット	6J-5a	0.45	0.4		17前	328建物内
340	第９面	土坑	6J-5a	0.95	0.8+α			
341	第９面	土坑	6I-6j	0.4+α	0.3			
342	第９面	土坑	6J-5a	0.5	0.4+α			
353	第９面	土坑	6J-5a	0.8	0.7+α			
354	第９面	礎石	6J-4a	0.19	0.19	0.19		328建物内／掘方 0.39m＋α 深さ16cm 一石五輪塔転用
355	第９面	礎石	6J-4a	0.29	0.14	9		328建物内／掘方0.4m 石臼転用
356	第９面	礎石	6J-4a	0.27	0.26	16.5		328建物内／掘方 0.34m 深さ11cm 五輪塔火輪転用
359	第９面	土坑	6J-5a	0.5+α	0.4			
364	第９面	土坑	6I-7j	0.7	0.6	7		
365	第９面	土坑	6I-7i	0.7	0.7	14		
366	第９面	土坑	6J-5a	0.5	0.65			
367	第９面	ピット	6J-4a	0.17	0.16	10	17前	328建物内
368	第９面	礎石	6J-4a	0.19	0.18	17		328建物内／掘方 0.19m　　深さ１cm 一石五輪塔の転用か
369	第９面	礎石	6J-4a	0.24	0.24	5		328建物内 石塔台座転用
374	第９面	溝	6J-4a	2.9+α	0.27	6	17前	328建物内
302	第９面	土坑	6I-7j	2.4	2.2+α	36	17前	
310	第９面	土坑	6I-6j	1.2	0.9	40	17前	
318	第９面	ピット	6I-7i	0.3	0.2+α			
319	第９面	溝	6I-7i	3.5+α	0.4			
320	第９面	土坑	6I-7i	1.3	1.13	58		
325	第９面	埋甕	6I-7j	0.32	0.26	10		掘方0.38m×0.32m 深さ16cm
326	第９面	土坑	6I-7j	0.5	0.4			
330	第９面	ピット	6I-7j	0.3	0.2			
334	第９面	集石溝	6I-7j	東西 0.92+α	南北0.84	11		
335	第９面	建物	6I-7i	1.3+α	1.1+α			
337	第９面	礎石	6I-7j	0.27	0.16	7		掘方0.28m 深さ６cm
338	第９面	土坑	6I-7i	0.4	0.18	19		
343	第９－２面	土坑	6I-7j	0.9	0.9			
344	第９－２面	土坑	6I-7j	0.93	0.72	18	17前	
346	第９－２面	土坑	6I-7j	0.5	0.3+α	8.2		
347	第９－２面	土坑	6I-7i	3.2	2.3	24		
348	第９－２面	土坑	6I-7i	1.2	0.9+α			
349	第９－２面	土坑	6I-7i	2.1+α	0.8+α	20.8		
350	第10面	土坑	6I-6j	1.2+α	0.7	78		
351	第10面	落ち込み	6I-5j・6j	3.65+α	2.85			
357	第10面	土坑	6j-6a	1.1	0.25	13.3		
358	第10面	土坑	6I-6j	0.6	0.1			
360	第10面	溝	6I-7i・7j	1.8+α	0.2			
361	第10面	溝	6I-7i・7j	1.8+α	0.2			
362	第10面	溝	6I-6j	1.2+α	0.2	8.6		
339	第10面	溝	6I-6j	0.45+α	0.1			
370	第10面	土坑	6J-5a	3	2.9＋α	10		Z状を呈する
371	第10面	土坑	6J-5a	0.45	0.45	7.7		
372	第10面	石群	6J-5a	0.9	0.45			
373	第10面	溝	6J-5a	0.1	0.1	4.7		
375	第10面	土坑	6J-4a	1.75+α	1.47	53		
376	第10面	土坑	6J-4a	0.4	0.35			

表12　遺構一覧表（8）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
377	第10面	土坑	6J-4a	0.4	0.3			
363	第12-a面	溝	6I-6j	4.6m+α	0.7	13.4		
2001	第１面	土坑	6I-2h	1.3+α	1.2	160.2	18後	
2002	第１面	溝	6I-2h	2	0.9	55		
2004	第１面	土坑	6I-2h	0.35	0.35	85		
2006	第１面	土坑	6I-2h	2	0.9	15		
2008	第１面	土坑	6I-2h	0.72	0.7	27	17	
2009	第１面	土坑	6I-1g～h	0.6	0.45+α	9.5		
2011	第１面	土坑	6I-2h					
2019	第１面	埋桶	6I-2f					2069土坑内に存在
2020	第１面	土坑	6I-2f	0.9+α	0.8	28	18前	
2021	第１面	土坑	6I-2e	0.9	0.7	110	17中～後	
2022	第１面	土坑	6I-2f	0.8	0.7	9	18後	
2023	第１面	埋甕	6I-3f	0.43	0.41	36+α		掘方0.46m×0.51m 深さ36cm
2025	第１面	土坑	6I-2f	1.1	0.75	9	17後～18	
2026	第１面	土坑	6I-1f	0.9	0.9	47	17初	
2027	第１面	土坑	6I-2f	0.5+α	0.5	8		
2029	第１面	土坑	6I-2f	1.6	1.3+α	53	18中	
2030	第１面	土坑	6I-2f	0.8	0.8	10		
2031	第１面	土坑	6I-2f	0.6	0.6	8	18	
2032	第１面	土坑	6I-1f	1.1	0.85	12	17前	
2033	第１面	土坑	6I-2f	0.8	0.7	12		
2034	第１面	土坑	6I-2f	0.6	0.35	10		
2035	第１面	土坑	6I-2f	0.4	0.3	11		
2036	第１面	礎石	6I-2f	0.2	0.15			掘方0.3m×0.25m
2037	第１面	土坑	6I-2f	0.9	0.8	16		
2039	第１面	土坑	6I-2f	0.2	0.2	8		
2040	第１面	土坑	6I-3h	0.8+α	0.6	21	17後～18	
2042	第１面	土坑	6I-2f	0.35	0.35	8		
2043	第１面	土坑	6I-2f	0.6	0.6	16		
2044	第１面	井戸	6I-1f	1.1	0.4	35	17中	
2046	第１面	土坑	6I-1f	0.72	0.61	3		
2047	第１面	土坑	6I-1f	0.8	0.45	10		
2048	第１面	土坑	6I-1f	0.5	0.4	7		
2049	第１面	土坑	6I-1f	0.7	0.6	9	17初	
2050	第１面	土坑	6I-1f	0.5	0.25	7		
2052	第１面	土坑	6I-1g	0.7	0.6	29		
2053	第１面	土坑	6I-1f～g	0.9	0.9	29		
2054	第１面	土坑	6I-2g	0.3	0.2	6		
2055	第１面	埋甕	6I-1g	0.54	0.54	13	17前～中	掘方0.59m 深さ16cm
2056	第１面	土坑	6I-1g	0.8	0.25+α	13		
2057	第１面	土坑	6I-1g	0.6+α	0.5+α	16	17初	
2058	第１面	土坑	6I-2g	0.6	0.5	14		
2059	第１面	土坑	6I-2g	0.8	0.55+α	12		
2060	第１面	土坑	6I-2g	0.95	0.3+α	20	17初	
2061	第１面	土坑	6I-1～2e・f	3.9	3	73	17後～18	
2062	第１面	土坑	6I-1～2f	1.2+α	0.6	15	18前～中	
2063	第１面	土坑	6I-1f	0.7	0.6+α	23	18前～中	
2064	第１面	土坑	6I-2f	1.4	1.1	11	17後～18	
2066	第１面	土坑	6I-2e	0.4	0.35	109	17中	
2067	第１面	土坑	6I-1～2f	0.7	0.6	11	17後～18	
2068	第１面	土坑	6I-2f	0.5	0.35	7		
2069	第１面	土坑	6I-2e～f	1	0.4+α	18.9		
2071	第１面	土坑	6I-2g	0.6	0.6	16		
2073	第１面	土坑	6I-2g	1.1	0.4+α	15	17初	
2075	第１面	土坑	6I-2～3g	0.6+α	0.6	9	17後～18	
2076	第１面	土坑	6I-3g	0.6	0.6	7	17後～18	
2077	第１面	土坑	6I-3g	1.7	0.6+α	11	17中～後	
2078	第１面	土坑	6I-3g	1.4	1.3	24	17後～18	
2079	第１面	土坑	6I-3g	1.3	0.7	18	17中～後	

表13　遺構一覧表（9）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
2080	第1面	土坑	6I-3g	3.2+α	1.4	47	17前～中	
2081	第1面	土坑	6I-3g	0.4	0.2+α	6		
2082	第1面	土坑	6I-1f	0.9	0.8	8	17初	
2083	第1面	土坑	6I-1f	0.55	0.45+α	6		
2085	第1面	土坑	6I-2f	1.5	0.95	61	18後	
2087	第1面	土坑	6I-1f	1.1	0.9			
2088	第1面	土坑	6I-2f	0.9	0.7	25	18末～19	
2089	第1面	土坑	6I-2f	2.5	2.4	58	18前	
2090	第1面	埋甕	6I-2g	0.42	0.42	14		掘方0.81m×0.61m+α
2091	第1面	土坑	6I-2g	0.89	0.72	14		
2092	第1面	土坑	6I-2g	1.0+α	0.88	27		埋甕痕
2093	第1面	土坑	6I-2g	0.6	0.6			
2094	第1面	土坑	6I-2g	1.05	0.4+α	24		
2095	第1面	土坑	6I-2g	0.7	0.45	12		
2098	第1面	土坑	6I-2h	0.75	0.5	8		
2101	第1面	区画溝	6I-3f～g	7.9+α	0.65+α		17～18	主体は17前～中
2102	第1面	土坑	6I-2h	0.6	0.4	8		
2104	第1面	土坑	6I-3g	0.7+α	0.6	14	17前～中	
2105	第1面	土坑	6I-3g	1.5	0.8	72	17後～18	
2106	第1面	土坑	6I-1～2f	0.9	0.5	21		
2110	第1面	土坑	6I-3g	0.6	0.5	14	17前	
2113	第1面	井戸	6I-2h	1.4	1.2+α	21.8		
2114	第1面	土坑	6I-1f	0.6	0.6			
2115	第1面	土坑	6I-1f	0.9+α	0.6			
2116	第1面	土坑	6I-1f	0.6	0.25+α	17		
2118	第1面	溝	6I-3g	北西-南東 1.1+α 北東-南西 1.1+α	0.35	7		
2119	第1面	土坑	6I-2f	1.8	0.8	54		土坑内から埋甕出土
2120	第1面	土坑	6I-3f	1	0.75	24	17中	
2121	第1面	土坑	6I-3f	1.5	0.8	37	17前	
2122	第1面	土坑	6I-3f	0.5	0.5+α	50	17中	
2123	第1面	建物	6I-1～2g・h	2.8	2.8			
2124	第1面	建物	6I-1～2g・h					
2125	第1面	土坑	6I-1f・1～2e	1.6	0.8+α	54.2		
2126	第1面	礎石	6I-2h	0.2	0.33	24		
2127	第1面	礎石	6I-1g	0.45	0.3	20		掘方0.47m
2128	第1面	礎石	6I-1g	0.28	0.2	19		掘方0.37m
2129	第1面	井戸	6I-3h	0.85	0.85	7.3+α		掘方2.2m×1.6m+α
2130	第1面	礎石	6I-3h	0.16	0.2	14		掘方0.19m 深さ13cm
2131	第1面	礎石	6I-3h	0.17	0.2	10		掘方0.23m 深さ11cm
2140	第1面	土坑	6I-2e	0.8+α	0.7	61.7	17後	
2142	第1面	土坑	6I-2f	1	0.6+α	46	17前	
2160	第1面	土坑	6I-2e	0.95	0.95	8		
2166	第1面	土坑	6I-2f	0.24	0.7+α		19～	
2222	第1面	土坑	6I-2f	1	0.45	23	17初	
2224	第1面	土坑	6I-2g	0.6	0.6	16	17前～中	
2225	第1面	土坑	6I-2g	0.4	0.3	5		
2226	第1面	埋甕	6I-2f	0.41	0.37	12+α		掘方0.47m×0.45m 深さ50cm
2227	第1面	土坑	6I-2f	1.1	0.7+α	18	17初	
2228	第1面	土坑	6I-2f	1	0.4+α	12	18	
2239	第1面	土坑	6I-2h	1.3	1.1	46	17初	
2245	第1面	礎石	6I-2i	0.25	0.2			
2246	第1面	礎石	6I-2i	0.35	0.3			
2247	第1面	土坑	6I-2i	0.4	0.2+α			
2248	第1面	埋甕	6I-3i	0.33	0.33	21+α		掘方0.42m×0.42m 深さ25cm
2249	第1面	埋甕	6I-3i	0.4	0.4	16+α	17後～18	掘方0.75m×0.65m

表14　遺構一覧表（10）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
2250	第１面	土坑	6I-3i	0.4	0.4	12		
2251	第１面	土坑	6I-3i	1.25	0.55	8	17中～後	
2252	第１面	礎石	6I-3i	0.3	0.25			
2253	第１面	礎石	6I-3i	0.3	0.3			
2254	第１面	土坑	6I-3i	0.5	0.35	8		
2266	第１面	土坑	6I-3i	1.1	0.45	9.4+α		
2267	第１面	土坑	6I-3i	0.3	0.2+α	15		
2269	第１面	礎石	6I-3i	0.2	0.1			
2270	第１面	埋甕	6I-3i～j	0.45	0.44	24+α	17前	掘方0.47m
2271	第１面	埋甕	6I-3i			10+α	17前	掘方0.7m×0.6m+α 深さ12cm 埋甕の大きさは不明
2272	第１面	土坑	6I-3i	0.65	0.6+α		17前	
2273	第１面	土坑	6I-3i	0.7	0.6		17後～18	
2274	第１面	埋桶	6I-3i	0.6	0.6			
2275	第１面	土坑	6I-3i	0.8	0.7	26		
2276	第１面	土坑	6I-4i	1.3	1.2		17前	
2277	第１面	土坑	6I-4i	0.8	0.4	19	17前～中	
2278	第１面	土坑	6I-3h	0.8	0.7	21	17初～前	
2280	第１面	土坑	6I-4i	0.5	0.5		17前	
2281	第１面	土坑	6I-4h	0.7	0.35+α	32.1	18後	
2282	第１面	土坑	6I-4h	1.1+α	1	14	18後	
2283	第１面	土坑	6I-4h	2.3	1.6+α		18後	
2284	第１面	埋甕	6I-3h	0.3	0.2			
2285	第１面	埋桶	6I-3h	0.3	0.3	0.5		
2286	第１面	土坑	6I-3h	1.5	0.85	9		
2287	第１面	土坑	6I-3h	0.7	0.7	8	17初	
2288	第１面	土坑	6I-3h	1.3	0.4+α			
2296	第１面	土坑	6I-3h	1.3	0.9			
2299	第１面	土坑	6I-3h	1	0.6+α		17前	
2301	第１面	土坑	6I-4i	2.8	1.5		18～	
2302	第１面	井戸	6I-4i	0.98	0.98	1.06+α	18	
2305	第１面	溝	6I-4i～h	1.8	4.7+α		17～18	主体は17前～中
2306	第１面	土坑	6I-4g～h	1.15	0.5+α	43.9	18	
2307	第１面	土坑	6I-4g～h	2.6+α	2.1+α		17～18	主体は17前～中
2308	第１面	土坑	6I-4h	5.5	3.5	15.7		
2309	第１面	土坑	6I-2g	0.7	0.7	10		
2310	第１面	井戸	6I-3h	0.6	0.6	93+α	17中～後	掘方1.7m×2.67m
2311	第１面	土坑	6i-3h	0.9+α	0.7	26		
2312	第１面	土坑	6I-3h	1.1	1.05	30	17中～後	
2313	第１面	埋桶	6I-3h	0.48	0.48	20		掘方0.58m×0.55m
2314	第１面	埋甕	6I-3h	1.1	0.75+α			
2315	第１面	埋甕	6I-3h	0.5	0.45	9+α		
2316	第１面	土坑	6I-3h	0.6+α	0.4	11.9		
2318	第１面	土坑	6I-3h	0.6	0.6	15		
2321	第１面	埋甕	6I-2h	0.3	0.25+α	4.2+α		
2322	第１面	埋甕	6I-3h					
2323	第１面	土坑	6I-3h	0.4	0.4	13.7		
2324	第１面	土坑	6I-3i					
2326	第１面	埋甕	6I-3h	0.8	0.7	35		
2341	第１面	埋甕	6I-3h					
2348	第１面	土坑	6I-4h					
2349	第１面	井戸	6I-3i	1.6	0.85+α	45.1+α	18～19	
2350	第１面	土坑	6I-2e	1.2	0.85	16.3	17前	
2351	第１面	土坑	6I-2e	0.28	0.2+α	18.7	17前	
2353	第１面	土坑	6I-2e	0.3+α	0.3	8.7		
2354	第１面	土坑	6I-2e	1.3	0.5+α	14		
2355	第１面	土坑	6I-4e	0.9+α	0.8+α			
2356	第１面	土坑	6I-2e	1.25+α	0.85+α	45.1	17後～18	
2357	第１面	土坑	6I-3i					
2359	第１面	ピット	6I-2e	0.5+α	0.5	15	17初	
2374	第１面	敷地						
2150	第１-２面	ピット	6I-2h	0.4	0.4	7		礎石抜き取

表15　遺構一覧表（11）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
2151	第１－２面	土坑	6I-2h	1.05	0.5+α	36		
2152	第１－２面	埋甕	6I-2h	0.55	0.54	60		掘方0.89m×0.9m 深さ75cm
2153	第１－２面	埋甕	6I-2g	0.44	0.41	42	17初～前	掘方1.26m×024m＋α 深さ70cm
2155	第１－２面	土坑	6I-2f	1.5	1.3	43	17前～中	
2156	第１－２面	埋甕	6I-2f	0.58	0.57	40+α		掘方0.72m×0.61m 深さ37cm
2157	第１－２面	土坑	6I-2f	0.5	0.35+α	36		
2158	第１－２面	土坑	6I-2f	0.7	0.5	13		
2161	第１－２面	土坑	6I-2f	0.6	0.5+α	10		
2163	第１－２面	土坑	6I-2f	0.5	0.2+α			
2164	第１－２面	土坑	6I-2f	1.4	0.4+α	35	16末～17初	
2165	第１－２面	土坑	6I-2f	0.65	0.6	13		
2168	第１－２面	埋甕	6I-3g	0.33	0.33	11+α		
2169	第１－２面	土坑	6I-3g	0.5	0.2	4		
2170	第１－２面	土坑	6I-2g	0.4	0.4	14		
2171	第１－２面	土坑	6I-3g	0.7	0.7	25	17初～前	
2172	第１－２面	礎石	6I-2f	0・25	0.2			一石五輪塔転用
2173	第１－２面	土坑	6I-3g			29		
2174	第１－２面	土坑	6I-2f	1.2	1.2	46	17初～前	
2175	第１－２面	土坑	6I-2f					
2176	第１－２面	土坑	6I-2f	0.9	0.4	15		
2178	第１－２面	建物	6I-2h					2179・2180礎石によって構成される
2179	第１－２面	礎石	6I-2h	0.2	0.2			掘方不明 石臼転用
2180	第１－２面	礎石	6I-2h	0.3	0.2			掘方不明
2182	第１－２面	礎石	6I-2g	0.2	1.5			
2183	第１－２面	土坑	6I-2h	0.5	0.35+α	14		
2243	第１－２面	埋甕	6I-2f	0.29	0.25	28		掘方0.39m×0.28m＋α 深さ16cm＋α
2289	第１－２面	井戸	6I-3g	9.5	0.9		17前	
2290	第１－２面	溝	6I-3g	2.2	4.3+α	96	17前	
2342	第１－２面	土坑	6I-3i	0.7	0.3+α	12	17前	
2343	第１－２面	廃棄土坑	6I-4h・3～4i	12.1+α	10.5+α		17前	
2344	第１－２面	土坑	6I-2i	0.5	0.35	13		
2345	第１－２面	土坑	6I-2i	0.7	0.5	17.9	17	
2347	第１－２面	カマド	6I-3i	（カマドa） 0.32＋α	（カマドa） 0.32＋α		17	カマドbは崩れており不明
2358	第１－２面	礎石	6I-3i	0.2	0.2			
2364	第１－２面	埋甕	6I-2i	0.4	0.35	15		掘方規模は埋甕とほぼ一緒
2365	第１－２面	土坑	6I-2i	0.5	0.45	14		
2366	第１－２面	土坑	6I-2i	0.75	0.75	33	17前	
2367	第１－２面	土坑	6I-3i	0.5	0.5	5		
2368	第１－２面	土坑	6I-3i	0.5	0.4	15		
2369	第１－２面	土坑	6I-3i	1.05	1	18		
2372	第１－２面	礎石	6I-3i	0.2	0.15			一石五輪塔転用 天正六年銘あり
2373	第１－２面	礎石	6I-3i	0.4	0.3			墨書記号あり
2017	第２面	土坑	6I-1g	0.55	0.2+α	31.2	17初	1615年焼土層下
2018	第２面	ピット	6I-1g	0.3	0.2	6.6	17初	1615年焼土層下
2065	第２面	土坑	6I-1g	0.35	0.35	24.9	17初	1615年焼土層下
2111	第２面	土坑	6I-1g	0.51	0.45	62	17初	1615年焼土層下
2112	第２面	土坑	6I-1g	0.4	0.35	9.5	17初	1615年焼土層下
2184	第２面	土坑	6I-1g	0.7	0.7	18.1	17初	1615年焼土層下
2190	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1	11	17初	1615年焼土層下
2191	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1	12	17初	1615年焼土層下
2192	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1		17初	1615年焼土層下 石臼転用
2193	第２面	礎石	6I-1g	0.3	0.15		17初	1615年焼土層下

表16　遺構一覧表（12）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
2194	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.2	15.6	17初	1615年焼土層下
2195	第２面	礎石	6I-1f	0.15	0.1		17初	1615年焼土層下
2196	第２面	礎石	6I-1g	0.3	0.15	8	17初	1615年焼土層下
2197	第２面	礎石	6I-1g	0.3	0.2	16.4	17初	1615年焼土層下
2198	第２面	礎石	6I-1f	0.25	0.2	8	17初	1615年焼土層下 石塔台座の転用か
2199	第２面	礎石	6I-1f	0.3	0.2		17初	1615年焼土層下
2200	第２面	礎石	6I-1f	0.2	0.1		17初	1615年焼土層下
2201	第２面	土坑	6I-1f	0.35	0.25	7	17初	1615年焼土層下
2202	第２面	土坑	6I-1g	0.3	0.3	10.7	17初	1615年焼土層下
2203	第２面	土坑	6I-1g	0.7	0.5	14	17初	1615年焼土層下
2204	第２面	土坑	6I-1g	0.4	0.4	29	17初	1615年焼土層下
2206	第２面	礎石	6I-1g	0.36	0.15	16.6	17初	掘方0.63m 深さ22cm 1615年焼土層下
2207	第２面	礎石	6I-1g	0.1	0.1	5.2	17初	1615年焼土層下
2208	第２面	礎石	6I-1g	0.1	0.1	17.4	17初	1615年焼土層下
2209	第２面	礎石	6I-1g	0.25	0.2	12	17初	2265土坑が掘方
2210	第２面	礎石	6I-1g	0.25	0.1	7.1	17初	1615年焼土層下
2211	第２面	礎石	6I-1g	0.3	0.15	4.8	17初	1615年焼土層下
2212	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.15	10.7	17初	1615年焼土層下
2213	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1	10.8	17初	1615年焼土層下
2214	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1		17初	1615年焼土層下
2215	第２面	礎石	6I-1f	0.2	0.15		17初	1615年焼土層下
2216	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.1	10.4	17初	1615年焼土層下
2220	第２面	礎石	6I-2g	0.2	1		17初	1615年焼土層下
2221	第２面	礎石	6I-2g	1.5	1	6.5	17初	1615年焼土層下
2229	第２面	土坑	6I-1～2h	1	0.6+α	14	17初	1615年焼土層下
2230	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.1	13.6	17初	1615年焼土層下
2231	第２面	礎石	6I-2h	1.5	1	13.6	17初	1615年焼土層下
2232	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.2	12.9	17初	1615年焼土層下
2233	第２面	礎石	6I-2h	0.3	0.1	11	17初	1615年焼土層下
2234	第２面	礎石	6I-2h	0.1	0.05	11.4	17初	1615年焼土層下
2235	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.15	3.8	17初	1615年焼土層下
2236	第２面	礎石	6I-1g	0.2	0.2	13.1	17初	1615年焼土層下
2237	第２面	土坑	6I-1g	0.3	0.1	11	17初	1615年焼土層下
2238	第２面	土坑	6I-1g	0.5	0.5	9	16末～17初	1615年焼土層下
2244	第２面	土坑	6I-1g	0.4	0.5		17初	1615年焼土層下
2256	第２面	土坑	6I-2g	1.05	0.5+α		17初	1615年焼土層下
2257	第２面	土坑	6I-2g				17初	1615年焼土層下
2258	第２面	土坑	6I-1g	0.6+α	0.5	32.5	17初	1615年焼土層下
2265	第２面	土坑	6I-1g	0.49	0.35	7	17初	1615年焼土層下
2317	第２面	埋甕	6I-2g	0.55	0.55	22+α	17初	掘方1.35m×1.2m 深さ56cm 1615年焼土層下
2320	第２面	土坑	6I-2g	1.75	1	46	17初	1615年焼土層下
2327	第２面	土坑	6I-2h	1.4	0.6+α		16末～17初	1615年焼土層下
2328	第２面	ピット	6I-2h	0.4	0.36	45	17初	1615年焼土層下
2329	第２面	土坑	6I-2h	0.6	0.4	25	17初	1615年焼土層下
2330-1	第２面	濠	6I-2～4h・3～4i・3～4j	13+α	12	250	17初	
2331	第２面	土坑	6I-2g～h	0.75	0.5		16末～17初	1615年焼土層下
2332	第２面	礎石	6I-2h	0.3	0.15		17初	1615年焼土層下
2333	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.2		17初	1615年焼土層下
2334	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.1	12.4	17初	1615年焼土層下
2335	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.1	9.9	17初	1615年焼土層下
2336	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.1	11.9	17初	1615年焼土層下
2337	第２面	礎石	6I-2h	0.15	0.1		17初	1615年焼土層下
2338	第２面	礎石	6I-2h	0.2	0.2	13.7	17初	1615年焼土層下
2339	第２面	土坑	6I-2h	0.5	0.35+α		17初	1615年焼土層下
2340	第２面	土坑	6I-2h	0.25	0.25		17初	1615年焼土層下
2362	第２面	溝	6I-3f	0.37	0.57+α	29+α	17初	1615年焼土層下

表17　遺構一覧表（13）

遺構番号	遺構面	遺構種類	地区割	長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（cm）	時期	備考
2363	第２面	礎石	6I-3g	0.25	0.25		17初	1615年焼土層下 石塔台座転用
2370	第２面	礎石	6I-3g	0.25	0.25		17初	1615年焼土層下 石塔台座転用
2300	第３面	濠	6I-1～2f・ 1～2g	16+α	17	400	16後	
2325	第３面	濠	6I-2～3g・h	15+α	6	150	16後	
2330-2	第３面	濠	6I-3～4h・ 3～4i	13+α		250	16後～17初	
2361	第３面	土塁	6I-2e	6+α	3.6+α	100+α	16後	

表18　遺物観察表（1）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
図13-1	平瓦	第1面	317	井戸		10.7（幅）	2.1（厚さ）	(15.1)（長さ）		刻印瓦　「泉堺湊瓦□□□」
-2	平瓦	第1面	14	井戸	枠内	13.6（幅）	1.6（厚さ）	(16.6)（長さ）		刻印瓦　「瓦新」
-3	平瓦	第1面	14	井戸	枠内	(15.1)（幅）	1.8（厚さ）	(22.9)（長さ）		刻印瓦　「利右衛門」
-4	平瓦	第1面	14	井戸	枠内	(13.4)（幅）	1.7（厚さ）	(14.0)（長さ）		刻印瓦　「堺改丹治利右衛門」　1819～1821以降の製作
-5	関西系陶器蓋	第1面	66	土坑		13.5	3.3	3.3(つまみ径)	60	
-6	京焼系碗	第1面	66	土坑		9.5	7.1	3.5	50	上絵　注連縄文・海老文　徳島県産か
-7	京焼系碗	第1面	66	土坑		9.1	6	5.2	55	
-8	灯明台	第1面	66	土坑		7.2	5.05	4.3	70	
-9	瀬戸美濃皿	第1面	66	土坑		14.2	3.95	7.6	60	
-10	瀬戸美濃徳利	第1面	66	土坑		2.3	18.1	7.1	20	
-11	丹波徳利	第1面	66	土坑		3.7	(23.5)			線刻「左今衛門ヵ」
-12	丹波徳利	第1面	66	土坑		3.75	24.6	9.2	50	白化粧土「伯太山」
-13	大谷徳利	第1面	66	土坑			(19.7)	8	20	線刻「六十□　布新」
図14-1	堺擂鉢	第1面	66	土坑		22.8	8.8	10.2	70	
-2	肥前色絵輪花皿	第1面	66	土坑		12.3	3.2	7.2	(底部) 100	底部は蛇の目凹形高台
-3	肥前外青磁鉢	第1面	66	土坑		17.4	5.5	8.4	90	底部は蛇の目凹形高台
-4	肥前染付瓶	第1面	66	土坑			(26.9)	9.4		
図18-1	京焼系碗	第2面	51	土坑		9.6	5.3	3.1	85	
-2	萩焼ビラ掛け碗	第2面	51	土坑		7.8	5.55	3.5		灰白・黒の釉薬が掛け分け
-3	京焼系土鍋蓋	第2面	51	土坑		14.4	3.5	3.3(つまみ径)	90	白化粧土で草花文を描く
-4	秉燭	第2面	51	土坑		A:6.9　B:1.9	A:4.05　B:3	3.4	100	
-5	京焼系急須	第2面	51	土坑		7.6	(4.9)		35	白色釉が流し掛けられ、鉄釉で草花文
-6	不明陶器	第2面	51	土坑		7.4	9.65	4.8	70	φ0.5cmの小孔多数あり
-7	堺擂鉢	第2面	51	土坑		40.1	18.25	20	20	
-8	肥前染付蕎麦猪口	第2面	51	土坑		7.9	6	5.9	70	底部は蛇の目凹形高台
-9	肥前染付蓋	第2面	51	土坑		9.35	2.95	3.3(つまみ径)		
-10	肥前染付段重	第2面	51	土坑		14.5	5.7	10.4	95	焼き継ぎ「キ」の字状記号
図19-1	肥前白磁紅皿	第2面	51	土坑		4.6	1.4	1.1	100	貝殻状型押し成形
-2	土製独楽	第2面	51	土坑		2.4（幅）	1.1（厚さ）	2.4（長さ）		4.78（重量）
-3	泥面子	第2面	51	土坑		3.4（幅）	0.7（厚さ）	3.4（長さ）		9.21（重量）
-4	土人形	第2面	51	土坑		3.0（幅）	2.3（厚さ）	3.8（長さ）		箱庭道具　御堂　全面に緑釉
-5	鳩笛	第2面	51	土坑		6.4（幅）	2.5（厚さ）	3.3（長さ）		羽の一部に赤色顔料痕跡あり
-6	土鈴	第2面	51	土坑		2.7（幅）	0.4（厚さ）	3.1（長さ）		
-7	道具瓦	第2面	51	土坑		(6.8)（幅）	1.65（厚さ）	(10.7)（長さ）		格子状の区画内にφ3cmの円孔
-8	宝珠文軒丸瓦	第2面	51	土坑		9.7（瓦当面径）				宝珠と火炎を表現
-9	寛永通宝	第2面	51	土坑		2.5（直径）	0.6（孔径）	1.25（厚さ）		3.55（重量）
図21-1	瀬戸美濃色絵蓋	第2面	30	井戸		3	2.2		80	上絵　赤・黄・青
-2	瀬戸美濃火鉢	第2面	30	井戸		21.3	15.9	19.5	40	獣形の双耳　口縁端部は敲打による凹凸が著しい　底部には釘孔？
-3	パイ独楽	第2面	30	井戸		3.08（幅）	2.6			図版17左4　5.95（重量）　貝殻内部は空洞
-4	火打石	第2面	57	土坑		3.4（幅）	1.9（厚さ）	3.2（長さ）		チャート製　24.51（重量）　緑色チャート
図23-1	肥前染付皿	第3面	186	瓦列		11.8	3.8	4.8	40	内面見込は蛇の目釉剥ぎ
図25-1	土師質鉢	第3面	102	溝	上層	23.8	5.3	16.9	20	
-2	堺擂鉢	第3面	102	溝	上層	23.7	(5.45)			
-3	肥前陶器甕	第3面	102	溝	下層	49.4	(12.2)			
-4	肥前染付碗	第3面	102	溝	上層	10	6.65	3.8	35	一重網目文
-5	肥前染付碗	第3面	102	溝	上層	8.7	5.05	3.8	30	高台内に「太明成化年製」銘
-6	肥前染付皿	第3面	102	溝	上層	13.5	3.25	4.8	25	
-7	肥前青磁輪花皿	第3面	102	溝	下層	13	2.75	4.2	40	
-8	漳州窯系碗	第3面	102	溝	上層		(1.2)	4.2		
-9	肥前陶器小杯	第3面	104	土坑	下層	7.6	4.3	3	60	砂目積み

表19　遺物観察表（2）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
-10	肥前陶器碗	第３面	104	土坑	下層	12.1	5	4.3	90	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　内野山窯
-11	瀬戸美濃鉢	第３面	104	土坑		16.5	8.9	8	90	内面見込に目跡３箇所
-12	肥前陶器皿	第３面	104	土坑	下層	23.1	5.8	9.7	60	京焼風　高台内に刻印あり
-13	肥前染付碗	第３面	104	土坑	最下層	11.4	5.5	4	50	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　釉剥ぎ部分にアルミナ塗布
-14	景徳鎮窯青磁木瓜形皿	第３面	104	土坑		8.6（長軸） 6.4（短軸）	2.15	5.2（長軸） 4.3（短軸）	30	口縁端部と畳付は無釉
-15	肥前白磁香油壷	第３面	104	土坑			(5.9)	4.9	40	
-16	銅製壷	第３面	104	土坑		12.8	(3.3)		25	頸部外面に雷文
-17	銅製毛抜き	第３面	104	土坑	上層	1.2（幅）	0.3（厚さ）	8（長さ）		図版15左４　10.90（重量）
図26-１	肥前染付皿	第３面	104	土坑	上層	13.1	3.8	7.2	95	高台内には渦「福」銘　波佐見窯系
-２	肥前染付皿	第３面	104	土坑	下層	16.7	6.5	7.5	95	高台内に「太明年製」銘
-３	肥前染付皿	第３面	104	土坑	下層	17.7	3.2	11.1	95	コンニャク印判　有田か　墨引き技法
-４	華南三彩盤	第３面	104	土坑		30.4	5.1	20.1	70	口縁部は稜花状　緑釉を基調に黄釉と褐釉を使用　断面に漆修復痕
図27-１	植木鉢（堺？）	第３面	92	土坑		19.3	15.5	10	70	三方向に脚が付く　胴部外面に粘土紐で蔓草状レリーフを施す
-２	肥前陶器皿	第３面	98	土坑		21.85	5.75	9.2	80	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　釉剥ぎ部分に鉄錆　鉄釉描きの菖蒲状花文
-３	肥前染付合子蓋	第３面	80	土坑		6.4	1.8		20	口縁端部は無釉
-４	肥前白磁皿	第３面	80	土坑			(1.8)	5		高台内に「キ」の字状の墨書
-５	鬼瓦	第３面	80	土坑		6.5（幅）	1.5（厚さ）	11.5（長さ）		
-６	鬼瓦	第３面	80	土坑		8（幅）	3.9（厚さ）	10（長さ）		
-７	銅製針	第３面	98	土坑		0.6（幅）	0.25（厚さ）	(10.7)（長さ）		孔径0.1cm
-８	土鈴	第３面	96	土坑		3.1（幅）	2.6（厚さ）	5.4（長さ）		犬型　一部に柿釉や褐色釉が残る
-９	火打石	第３面	100	土坑		4.5（幅）	1（厚さ）	5.2（長さ）		サヌカイト製　19.57（重量）
図30-１	土師質皿	第４面	102	溝	最下層	10.1	2			口縁端部に油煙付着　灯明皿
-２	焼塩壷	第４面	102	溝		6.1	(6.3)			輪積み成形　外面に「天下一堺□／藤左□」銘あり
-３	焙烙	第４面	102	溝		24.7	(6.7)			胴部外面に２条の凹線
-４	焙烙	第４面	102	溝		25.6	(6.15)		20	胴部外面に１条の凹線
-５	肥前青磁皿	第４面	102	溝		13.9	4.5	4.9	30	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　内野山窯系
-６	肥前陶器壷	第４面	102	溝		9	(3.9)			
-７	志野鉄絵瓶	第４面	102	溝			(8.25)			
-８	肥前青磁鉢	第４面	102	溝		21.5	(3.6)			口縁端部は口紅
-９	丹波擂鉢	第４面	102	溝		35.4	(9.8)			擂目は４条１単位のクシ描き
-10	肥前染付小杯	第４面	102	溝		9	5.35	4		
-11	肥前染付皿	第４面	102	溝		13.8	3.55	5.6	50	
-12	五輪塔水輪	第４面	102	溝	下層	29.6（幅）	23.3（厚さ）			四方に梵字あり　粗粒黒雲母花崗岩
-13	硯	第４面	102	溝		7.4（幅）	1.5（厚さ）	13.2（長さ）		凝灰質頁岩
図31-１	肥前陶器碗	第４面	141	土坑		12.1	5.5	4.2	55	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　内野山窯系
-２	肥前陶器大皿	第４面	141	土坑		25.4	8	10	70	三島手（象嵌は不明瞭）　内面見込に砂目跡6箇所
-３	肥前染付皿	第４面	132	土坑		21.2	2.1	8.6		芙蓉手
-４	土人形	第４面	133	土坑		3.1（幅）	3.7（厚さ）	6.8（長さ）		俵に乗った大黒
-５	火打石	第４面	128	土坑		6.5（幅）	1.3（厚さ）	4.4（長さ）		サヌカイト製　38.85（重量）　一側面に原礫面あり
-６	硯	第４面	141	土坑		7.6（幅）	2.3（厚さ）	18.7（長さ）		図版17左１　墨痕あり　流紋岩質凝灰岩
-７	砥石	第４面	124	土坑		4.6（幅）	3（厚さ）	10.8（長さ）		４面使用　黒色頁岩ホルンフェルス
-８	骨製櫛払柄	第４面	133	土坑	第4面	1.2（幅）	0.5（厚さ）	4.3（長さ）		図版17左３　2.65（重量）　φ0.2cmの小孔が8孔あり
図33-１	肥前陶器壷	第５面	175	土坑			(11)	7.6	（底部）100	白化粧土を回し掛け、鉄釉を流し掛ける
-２	肥前陶器甕	第５面	175	土坑		42	47.6	22.4	30	多条沈線帯と貼花文
-３	肥前染付碗	第５面	175	土坑		11.3	5.65	4.2	80	内面見込は蛇の目釉剥ぎ　釉剥ぎ部分にアルミナ塗布
-４	肥前染付猪口	第５面	175	土坑		6.2	4.5	3.9	70	高台内には二重圏線内に「福」銘
-５	肥前陶胎染付火入	第５面	175	土坑		11	(6.3)			陶胎
-６	肥前染付仏飯器	第５面	175	土坑		8.5	5.25	4.7	95	高台内は深く削り込む
図34-１	土師質甕	第５面	155	埋甕		51.2	56.3	33		底部は抜かれている　外面にはタタキ・内面にはハケメ調整

表20　遺物観察表（３）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
図35-１	瓦質火鉢	第５面	156	埋甕		17.4	(6.15)		(口縁部)15	２条の貼り付け突帯　突帯間にヘラ描きの波状文が１条廻る
－２	土師質甕	第５面	156	埋甕		52.8	(15.4) ＋ (33.2)	35.55	70	内外面ともハケメ調整
－３	土師質甕	第５面	173	埋甕		46.8	55.6	35.67	80	口縁部外面はタタキ、胴部外面はハケメ調整・内面はハケメ調整
－４	肥前陶器瓶	第５面	174	埋甕			(12.2)	7.8		タタキ成形
－５	砥石	第５面	174	土坑		6（幅）	1.4（厚さ）	(10)（長さ）		珪質頁岩（丹波産）
－６	焼塩壷	第５面				6.6	6.6		10	外面に「天下一御壷□／堺見なと伊□（織ヵ）」銘
図37-１	土師質皿	第６面	188	溝	中層	6.9	1.7	2	50	へそ皿　口縁端部に油煙付着　灯明皿として使用
－２	土面	第６面	188	溝	下層	5.1	1.5		100	図版14左１　土師質皿転用
－３	備前擂鉢	第６面	188	溝	中層		(5.5)			口縁部外面に２条の沈線　擂目は13条１単位のクシ描き
－４	焙烙	第６面	188	溝	中層	24.7	(5.9)			口縁端部に１条の沈線
－５	肥前陶器皿	第６面	188	溝	中層	12.7	3.2	4.1	40	胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
－６	肥前陶器皿	第６面	188	溝	下層	12.2	3.9	5	45	胎土目積み　内面見込に３箇所の目跡　内野山窯系
－７	肥前陶器溝縁皿	第６面	188	溝	中層	12.9	4.6	5.1	70	砂目積み　内面見込に４箇所の目跡
－８	肥前陶器溝縁皿	第６面	188	溝	下層	8.9	2.9	4	100	砂目積み　内面見込に４箇所の目跡
－９	肥前陶器碗	第６面	188	溝	下層	10.2	5.8	4.2	60	
－10	肥前陶器碗	第６面	188	溝		10.5	7.1	4	60	
－11	瀬戸美濃天目碗	第６面	188	溝	中層	13.6	(5.6)		20	
－12	ベトナム製長胴壷	第６面	188	溝			(10)		10以下	胎土は褐灰色で精良なもの　φ0.1～0.3cmの褐色砂粒を僅かに含む　内面はナデによる凹凸著しい
－13	砥石	第６面	188	溝		4（幅）	1.1（厚さ）	(9.4)（長さ）		２面使用　仕上げ砥　珪質頁岩　（丹波産）
－14	銅製棹秤用鉤	第６面	188	溝		0.5（幅）	0.1（厚さ）	4.25（長さ）	100	図版15右２　孔径：0.2cm　1.04（重量）
図38-１	肥前染付碗	第６面	188	溝	下層	9.9	6.8	4.4	40	鋸歯状の一重網目文
－２	肥前染付碗	第６面	188	溝	下層	11.8	5.4	5.2	30	高台内に「太明成化年製」銘
－３	肥前染付皿	第６面	188	溝	下層	14.2	2.2	7.8	70	内面には文様を線刻し、そこに染付を施す　高台内に「福」銘
－４	肥前染付皿	第６面	188	溝	中層	14.6	2.9	7.8		型押し
－５	肥前青磁碗	第６面	188	溝	中層	8.6	(4.5)			鉢か？
－６	肥前青磁香炉	第６面	188	溝		12.1	(5.9)			内面も施釉されている
－７	肥前青磁脚付皿	第６面	188	溝	中層		(4)			内面見込に線刻の文様
－８	肥前白磁輪花皿	第６面	188	溝	下層	13.6	3.6	6.2	30	内面は型打ち成形　内面見込には線刻による菱形文　図55－８と接合
－９	肥前白磁輪花皿	第６面	188	溝	下層	13.5	(2.1)			
－10	肥前白磁仏飯器	第６面	188	溝	中層	8	6.15	4.4	70	
図40-１	肥前陶器溝縁皿	第６面	199	土坑		11.6	2.6	4.7	(底部) 100	砂目積み
－２	丹波大平鉢	第６面	199	土坑		31.8	5.6	22.2	10	口縁部と胴部の境に凹線が１条廻る
－３	ベトナム製長胴壷	第６面	196	土坑		7.8	(3.8)		(口縁部)10	胎土は灰黄色の精良なもの　砂粒はほとんどみられない
－４	水滴	第６面	197	土坑		3.95（幅）	2.8（厚さ）	5.55（長さ）	100	図版14左２　鮑を模したものか　41（重量）
－５	土師質獣脚	第６面	190	土坑		7.1（幅）	2.8（厚さ）	10.3（長さ）		
－６	土人形	第６面	207	土坑		5.8（幅）	2.6（厚さ）	6.7（長さ）		岩に座る人物と鍬？を持つ人物
－７	砥石	第６面	207	土坑		9.5（幅）	5.9（厚さ）	13.2（長さ）		図版17左２　断面六角形　６面使用　粗砥　石英質砂岩　（南紀白浜産）
－８	砥石	第６面	207	土坑	下層	4.8（幅）	1.7（厚さ）	19.7（長さ）		２面使用　仕上げ砥　珪質頁岩　（丹波産）
－９	砥石	第６面	207	土坑		3（幅）	1.2（厚さ）	11.2（長さ）		図版17右２　２面使用　仕上げ砥　珪質頁岩　（丹波産）
－10	砥石	第６面	196	土坑		5（幅）	1（厚さ）	10.2（長さ）		２面使用　仕上げ砥　珪質頁岩　（丹波産）
－11	巴文軒丸瓦	第６面	215	土坑		14.2（瓦当面径）				縦方向の笵傷あり
図47-１	肥前陶器皿	第７－３面	262	カマド			(2.8)	3.9	(底部) 100	溝縁皿か　砂目積み　内面見込に３箇所目跡が残る
－２	肥前染付碗	第７－２面	247	カマド		9.4	6.6	3.8	30	口縁端部に口紅
－３	土師質蓋	第７面	224	石列			(2.8)		小破片	内面はハケメのちナデ、天井部外面は無調整
－４	肥前陶器碗	第７面	246	土坑		11.2	(5.5)		40	灰釉
－５	肥前白磁仏飯器	第７面	246	土坑			(4.15)	4.6	80	高台内は深く削り込む
－６	景徳鎮窯皿	第７面	232	土坑		18.9	4.1	10.4	20	畳付は釉剥ぎ
－７	土製円盤	第７面	257	建物	建物アゼ９	2.5（幅）	0.4（厚さ）	2.5（長さ）	100	図版15左１　土師質皿転用　2.77（重量）
－８	土製円盤	第７面	257	建物	建物アゼ９	2.2（幅）	0.4（厚さ）	2.2（長さ）	100	図版15左１　土師質皿転用　2.25（重量）

表21　遺物観察表（４）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－9	土製円盤	第７面	257	建物	建物アゼ９	2.6（幅）	0.6（厚さ）	2.6（長さ）	100	図版15左１　土師質皿転用　3.82（重量）
-10	土製円盤	第７面	257	建物	建物アゼ９	2.4（幅）	0.8（厚さ）	2.9（長さ）	100	図版15左１　土師質皿転用　3.99（重量）
-11	土製円盤	第７面	257	建物	建物アゼ９	2.7（幅）	0.45（厚さ）	2.9（長さ）	100	図版15左１　土師質皿転用　3.21（重量）
-12	巴文軒丸瓦	第７面	224	溝		13.2（瓦当面径）			40	
-13	一石五輪塔	第７面	224	溝		12（幅）	12（厚さ）	(18.39（長さ）		岩片を多量に含む不均質砂岩　空風輪のみ残存　「妙」「法」
-14	一石五輪塔	第７面	224	溝		15.4（幅）	15.4（厚さ）	(21.6)（長さ）		岩片を多量に含む不均質砂岩　梵字あり
図51-１	土師質皿	第８面	240	溝	中層	10.2	2.1		100	口縁部内外面に油煙付着　灯明皿として使用
－2	瓦質蓋	第８面	240	溝	上層	18.7	5.05	5（つまみ径）	95	方形の摘みが付く　天井部外面は無調整
－3	焙烙	第８面	240	溝	中層	22.4	(6.85)		10	胴部外面に右斜め下がりの平行タタキのちナデ
－4	焙烙	第８面	240	溝	下層	22.6	8.9		10	口縁部外面に不明瞭な凹線　胴部外面に左斜め下がりの平行タタキのちナデ
－5	焙烙	第８面	240	溝	中層	30.6	(6.35)		(口縁部)15	胴部外面下半に左斜め下がりの平行タタキのちナデ
－6	備前壷	第８面	240	溝	下層	13.5		9.6		
－7	丹波擂鉢	第８面	240	溝	中層	34.2	13.7	15	90	口縁部外面に１条の凹線　擂目は８条１単位のクシ描き
－8	丹波擂鉢	第８面	240	溝		35	13.8	15.8	30	擂目は６条１単位のクシ描き
－9	備前擂鉢	第８面	240	溝	上層	32	(9.2)		10	口縁部外面に２条の沈線　擂目は11条１単位のクシ描き
図52-１	肥前陶器碗	第８面	240	溝	上層	11.9	6.35	4.4	25	砂目積み　北部九州産の可能性もあり
－2	肥前陶器碗	第８面	240	溝	最下層	(6)	(6.4)	(4.1)	30	畳付に籾圧痕　焼け歪みが大きい
－3	肥前陶器碗	第８面	240	溝	最下層	10.3	7	3.9	60	天目碗　乳白色の胎土　内野山窯系
－4	肥前陶器碗	第８面	240	溝	中層	9.5	6.85	3.7	70	天目碗　灰白色の胎土　内野山窯系
－5	北部九州窯系陶器碗	第８面	240	溝	下層	11.8	6.85	5.8	95	
－6	肥前陶器刷毛目皿	第８面	240	溝	下層	12.4	3.3	4.3		白化粧土による波状のハケメ文様
－7	肥前陶器皿	第８面	240	溝	下層	12.2	2.8	5.3	50	砂目積み　内面見込に４箇所の目跡　北部九州産か
－8	肥前陶器皿	第８面	240	溝	下層	13	4.15	4.4	60	胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
－9	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	上層	19.5	(3.8)		15	三島手
-10	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	上層	15.9	4.4	5	25	砂目積み　鉄絵
-11	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	中層	15.9	4.8	5.2	25	砂目積み　鉄絵　漆修復
-12	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	上層	12.8	2.8	3.6	75	鉄釉　砂目積み
-13	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	中層	12.1	3.2	5.1	90	灰釉　砂目積み　糸切高台
-14	肥前陶器溝縁皿	第８面	240	溝	最下層	13	4.2	3.9	70	砂目積み
-15	肥前陶器二彩手皿	第８面	240	溝	下層	28.2	5.1		15	
-16	北部九州窯系陶器皿	第８面	240	溝	下層	25	6.5	8.4	30	胎土目積み　内面見込に３箇所の目跡　目跡の後方は釉剥ぎ　上野高取か
図53-１	肥前染付筒形碗	第８面	240	溝	最下層		(6.3)	5.4		
－2	肥前染付碗	第８面	240	溝	中層	9.8	7.7	4.4	70	
－3	肥前白磁碗	第８面	240	溝	中層	9.8	7.55	5	35	胴部外面には線刻の花文
－4	肥前青磁碗	第８面	240	溝	上層	11.1	6.85	4.1	60	
－5	肥前染付皿	第８面	240	溝	上層	13.8	3.1	5.5	20	
－6	肥前青磁鉢	第８面	240	溝		17.8	(4.4)			
－7	景徳鎮窯系碗	第８面	240	溝	中層	11.3	(4.9)		20	
－8	漳州窯系碗	第８面	240	溝	最下層	11.2	(4.8)		15	内面に魚文
－9	漳州窯系碗	第８面	240	溝	最下層		(4.2)	4.7	20	
-10	景徳鎮窯系皿	第８面	240	溝	下層	12.2	3.05	6.7	20	内面見込に龍文
-11	景徳鎮窯系皿	第８面	240	溝		12.2	2.5	7.2	20	内面見込に寿
-12	景徳鎮窯系皿	第８面	240	溝	上層	13.9	2.5	8.6	20	
-13	漳州窯系皿	第８面	240	溝	上層		(3.4)	10.7		碁笥底　第10面372集石出土のものと接合
図54-１	箸	第８面	240	溝	下層	0.8（幅）	0.6（厚さ）	24.2（長さ）		両口箸
－2	箸	第８面	240	溝		0.8（幅）	0.8（厚さ）	26.4（長さ）		両口箸
－3	糸巻具	第８面	240	溝	最下層	2.1（幅）	1.2（厚さ）	13.4（長さ）		枠木
－4	糸巻具	第８面	240	溝	中層	2.3（幅）	0.9（厚さ）	9.1（長さ）		横木　墨書「惣代　清ヵ」
－5	隅切折敷	第８面	240	溝	最下層	5.9（幅）	0.7（厚さ）	31.8（長さ）		漆塗り　周縁に木釘痕
－6	下駄	第８面	240	溝	中層	8（幅）	1.1(身)　2.5(歯含)	18.2（長さ）		連歯下駄

表22　遺物観察表（５）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－７	塗り下駄	第８面	240	溝		(8)（幅）	1.15(身)　3.8(歯含)	(20.9)（長さ）		連歯下駄
－８	櫛	第８面	240	溝	下層	3.4（幅）	1.1（厚さ）	8.55（長さ）		梳櫛
－９	人形	第８面	240	溝		1.7（幅）	1.5（厚さ）	14.7（長さ）		図版16右２　墨による眉・目の表現　胴部側面は削り込む
-10	繰り人形頭	第８面	240	溝	下層	3.5（最大幅）	3.7（最大厚さ）	8.7（長さ）		顔面は摩滅著しく詳細不明　側頭部から額にかけて髪を植え込む小孔が連続して穿たれる
-11	小刀状木製品	第８面	240	溝	最下層	1.4（幅）	3.5（厚さ）	17.4（長さ）	100	両面、墨によって波状の刃文と鍔？が描かれる
図55-１	砥石	第８面	240	溝		4.2（幅）	0.9（厚さ）	6.5（長さ）		２面使用　仕上げ砥　珪質頁岩（丹波産）
－２	硯	第８面	240	溝		7.1（幅）	1.3（厚さ）	(4.4)（長さ）		墨痕が残る　凝灰質頁岩
－３	銅製飾り金具	第８面	240	溝	下層	2（幅）	0.1（厚さ）	4.2（長さ）	90	図版15左２　2.53（重量）　猪の目透かしをもち、草文を透かし彫りにした八双金具　方形の釘孔あり
－４	土師質皿	第８面	242	土坑		11.2	2.2		95	口縁端部に油煙付着　灯明皿に使用
－５	肥前陶器小杯	第８面	242	土坑		7.6	3.7	2.8	70	高台は削り込まず糸切底のまま
－６	肥前染付碗	第８面	242	土坑		8.2	7.7	5	70	高台内に二重圏線内の「福」銘
－７	肥前染付碗	第８面	242	土坑		11.3	7.8	5.2	90	
－８	肥前白磁輪花皿	第８面	242	土坑			(3.2)	5.8	(底部) 60	内面見込に線刻の菱形文　図38－８と接合
－９	丹波擂鉢	第８面	242	土坑		34	(11.2)		20	擂目は５条１単位のクシ描き
-10	土師質皿	第８面	237	土坑		4.9	1.2		100	小型皿　手捏ね
-11	土師質皿	第８面	237	土坑		4.8	1	2.6	100	小型皿　手捏ね
-12	土師質皿	第８面	237	土坑		9.8	2.3	3	100	内面見込に粗いナデ　へそ皿状
-13	肥前陶器皿	第８面	237	土坑		11.6	3.2	3.9	40	胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
-14	肥前陶器皿	第８面	237	土坑		12.9	3.2	4.1	100	胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
-15	丹波変形大皿	第８面	237	土坑		30.6	5.2	25	10	
-16	丹波擂鉢	第８面	237	土坑		33.2	13.2	12	30	口縁部端面に凹線が１条廻る　擂目は７条１単位のクシ描き
-17	丹波擂鉢	第８面	237	土坑		33	13	14	30	擂目はヘラ描きによる一本擂目
図58-１	肥前陶器皿	第８面	258	建物	粘土帯		(2.1)	5	30	砂目積み
－２	肥前灰釉皿	第８面	258	建物	北東隅礎石	11.1	3.2	3.9	40	胎土目積み
－３	備前擂鉢	第８面	258	建物	掘削中	20	(4.2)		20	口縁部外面に２条の沈線　口縁部内面に凹線状の段
－４	漳州窯系碗	第８面	258	建物	北東隅礎石		(2)	4.6	50	
－５	景徳鎮窯系皿	第８面	258	建物	掘削中		(1.25)	6.3	25	
－６	開元通宝	第８面	258	建物		2.51（直径）	0.7（孔径）	1.1（厚さ）		2.28（重量）　鋳上がり不良　通が道にみえる
－７	漳州窯系碗	第８面	244・245埋甕の東側の石列				(3)	7	(底部) 70	内面見込に「魁」
－８	漳州窯系赤絵皿	第８面	281	石敷			(1.9)	19	20	呉須赤絵　被熱により色が退色
図62-１	土師質皿	第９面	328	建物	⑨	9.2	1.9		100	
－２	土師質皿	第９面	328	建物	⑩	9.2	1.7		100	
－３	土師質皿	第９面	328	建物	②	9.8	2		100	
－４	土師質皿	第９面	328	建物	⑦	9.2	2.6		100	
－５	土師質皿	第９面	328	建物	④	9.2	2		100	
－６	土師質皿	第９面	328	建物	①	11.8	2.4		100	
－７	肥前陶器皿	第９面	328	建物			(2.5)	4.6	25	砂目積み　内面に白化粧土による波状のハケメ文
－８	肥前陶器皿	第９面	328	建物	礎石確認トレンチ		(2)	4.25	50	灰釉　胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
－９	肥前陶器皿	第９面	328	建物	整地層		(1.8)	3.4	90	灰釉　胎土目積み　内面見込に放射状の８箇所の目跡
-10	漳州窯系碗	第９面	328	建物		11.3	(3.3)		50	
-11	漳州窯系皿	第９面	328	建物	構築の際の整地層		(1.5)	16	10	畳付は釉剥ぎ　高台には砂
-12	肥前陶器壷	第９面	331	土坑	328建物内	12.9	(10.5)		25	タタキ成形　口縁部は玉縁
-13	北部九州産茶入	第９面	333	石列		3.8	(3.7)		(口縁部)25	焼成不良で釉が綺麗に溶融していない
-14	備前擂鉢	第９面	333	石列		21.4	(4.15)		15以下	口縁外面に１条の凹線
-15	石臼	第９面	355	礎石		(15.1)（幅）	9.9（厚さ）	31（長さ）		328建物の礎石　粗粒黒雲母花崗岩　（上臼転用）　摺目は４条
-16	一石五輪石	第９面	354	礎石		16.9（幅）	16.4（厚さ）	19.25（長さ）		328建物の礎石　岩片を多量に含む不均質砂岩　墓碑銘「永禄七年／□妙心禅尼／十二月二十二日」
図63-１	土師質皿	第９－２面 （西５－２面）	344	土坑		10.5	2.15		45	口縁端部に油煙付着　灯明皿として使用

表23　遺物観察表（６）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－２	焼塩壷蓋	第９面	297	土坑		9.2	1.7		100	二次焼成のため部分的に赤橙色を呈する　内面に布目が残る
－３	土師質羽釜か	第９面（西５面）	302	土坑		22.9	(4.7)		20	大和型羽釜
－４	焼塩壷	第９面	297	土坑		5.5	(5.2)		60	外面は縦方向の強いナデ　面取り状を呈する
－５	焙烙	第９面	298	土坑		20.1	(6.8)		10	胴部外面下半に左斜め下がりの平行タタキのちナデ　胴部上半に凹線が２条廻る
－６	肥前陶器碗	第９面	359	土坑		7.4	4.7	2.6	(口縁部)30	
－７	肥前陶器碗	第９面	307	土坑		11.4	6.7	4	30	
－８	志野鉢	第９面	297	土坑		10	4	5.6	55	碁笥底　口縁部は玉縁
－９	肥前陶器皿	第９面	316	土坑		12	3.85	4.6	30	砂目積み　内面見込に３箇所の目跡　内面には白化粧土を用いた波状のハケメ文様　高台に籾殻圧痕
－10	肥前陶器皿	第９面	311	土坑			(2.3)	3.4	40	胎土目積み　内面見込に４箇所の目跡
－11	肥前陶器皿	第９面	298	土坑		13.7	4.2	5.1	40	
－12	丹波鉢	第９面（西５面）	302	土坑		38.8	(6.4)		15	口縁端部に幅の狭い沈線が１条廻る
－13	硯	第９面	306	埋甕		5.1（幅）	(1)（厚さ）	10.9（長さ）		墨痕残る　黒色頁岩
図68－１	土師質碗	第10面	376	土坑		10.2	(4.2)		40	手捏ね土器　器壁厚い　取瓶のようなものか
－２	土師質羽釜	第10面	357	土坑		22.8	(12.8)		30	口縁端部は片口　胴部中央やや下付近に幅の狭い鍔が廻る　大和型羽釜
－３	瓦質土製品	第10面	376	土坑		(10)（幅）	8.2（厚さ）	18（長さ）		中空　側面には格子状の長方形の区画　上面端部には弧状の文様　瓦塔の台座みたいなものか
－４	軒平瓦	第10面	351	落ち込み			3.5（厚さ）	7.9（長さ）		波状文
図74－１	土師質皿				第９層	4.65	0.9		100	へそ皿
－２	土師質皿				第９層	13.6	(2)		20	口縁部１段凹みナデ
－３	瓦質羽釜				第９層	16.9	(4.55)		15以下	口縁部直下に幅の狭い鍔が廻る
－４	肥前陶器碗				第９層	10.5	(5.1)		20	
－５	肥前陶器皿				第９層	12.8	4.15	4.05	90	口縁端部３箇所に押圧による楕円形の窪み　胎土目積み　内面見込４箇所に目跡が残る
－６	肥前陶器溝縁皿				第９層	12.4	(2.6)		15以下	
－７	肥前陶器瓶				第９層		(14.4)	10.3	(底部）100	タタキ成形
－８	志野菊皿				第９層	12	2.4	6.6	25	
－９	景徳鎮窯系白磁皿				第９層	13	3.2	7	20	畳付は釉剥ぎ
－10	漳州窯系碗				第９層	10.4	5.2	4.8	45	畳付は釉剥ぎ
－11	丹波擂鉢				第９層	25.4	11.2	11	15	擂目は５条１単位のクシ描き
－12	備前擂鉢				第９層	28.3	(13.2)		30	口縁部外面に３条の沈線　擂目は５条１単位のクシ描き
－13	黒色土器				第11層		(2)	8.2	(底部)20	Ａ類椀か　摩滅著しく調整不明
－14	土師器甕				第11層	18	3.9		(口縁部)10	
－15	土師器把手				第11層		(4.7)		把手のみ	
－16	土師器把手				第11層		(3.6)		把手のみ	
－17	須恵器杯身				第11～12層	12	(3.9)		25	TK10型式併行か
－18	須恵器杯身				第11～13層	13	(2.9)		(口縁部)15	TK43型式併行か
－19	須恵器杯身				第11層	9	(3.6)		20	TK217～46型式併行か
－20	須恵器円面硯				第11層以下		(2.8)	12.6	(底部）25	圏脚円面硯　長方形透かし
－21	須恵器杯				第11層		(2.3)	11.4	(底部）15	杯Ｂか
－22	製塩土器				第11層	7.8	(3.8)		(口縁部)10	二次焼成で表裏とも調整不明瞭
－23	須恵質タコ壷				第11層		(4.3)		頭部のみ	紐孔φ0.4cm　頭部側面に幅0.2cmの紐掛けの溝
図75－１	土製独楽				北側溝	4.3（幅）	1.1（厚さ）	(2.5)（長さ）		表面に梅花文　10.21（重量）
－２	瓦質土製品				第５層	3.8	7.5	3.6	90	形態はトチンに似る　中央は円柱形で両端が「ハ」の字にひらく　114.55（重量）
－３	瀬戸内式土錘				第11層	0.9（外径） 0.4（内径）	(3.3)（長さ）			3.13（重量）
－４	瀬戸内式土錘				第11層	1.7（外径） 0.6（内径）	(7.3)（長さ）			21.40（重量）

表24　遺物観察表（７）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－5	管状土錘				第11層以下	4.4（外径） 1.7（内径）	6.5（長さ）			111.72（重量）　４条の短沈線
－6	土錘				第11層以下	5.2（幅）	3（厚さ）	7.2（長さ）		85.47（重量）　側面に紐掛けの溝が廻る
－7	土錘				第11層？	4.8（幅）	5（厚さ）	7.2（長さ）		124.33（重量）　表裏面・側面に紐掛けの溝が廻る
図76－1	鬼瓦				第４層	8（幅）	2.6（厚さ）	10.5（長さ）		鬼の右目部分
－2	鬼瓦				表採	(10.4)（幅）	3.5（厚さ）	(９)（長さ）		鬼の左目～鼻部分
－3	軒平瓦				北側溝	3.4（瓦当面径）	1.9（厚さ）	24（長さ）		９～10層か　線の細い唐草文
－4	平瓦				南側溝	3.5（幅）	1.7（厚さ）	6.0（長さ）		刻印瓦　「堺瓦新」
－5	平瓦				北側溝	13.8（瓦当面径）	1.7（厚さ）	(5.8)（長さ）		刻印瓦　「湊瓦喜三」
－6	平瓦				北側溝	(10.8)（幅）	1.6（厚さ）	(14.9)（長さ）		刻印瓦　「堺改丹治利右衛門」　1819～1821以降の製作
－7	碁石				第４層	2.8（幅）	0.8（厚さ）	2.4（長さ）		黒色珪質頁岩　（南紀・那智黒）　6.93（重量）
－8	火打石				第８層	4.4（幅）	2.2（厚さ）	6.8（長さ）		
－9	二次加工のある剥片				第９層以下	3.8（幅）	1.1（厚さ）	6.3（長さ）		サヌカイト　26.08（重量）　打面に原礫面を残す　風化浅い
-10	銅製棹秤用鉤				１トレ南壁掃除中	0.6（幅）	0.1（厚さ）	3.8（長さ）		図版１右２　孔径：0.15cm　1.44（重量）
-11	錠前				第９面（西５面）	0.45（幅）		6.7（長さ）		図版15左３　15.0（重量）　牝金具　龍頭部を陽鋳
-12	皇宋通宝				第９層	2.45（直径）	0.5（孔径）	0.1（厚さ）		3.12（重量）
-13	元祐通宝				第９層	2.45（直径）	0.6（孔径）	0.1（厚さ）		2.79（重量）
図79－1	瓦燈	第１面	2101	溝		A:17.25　B:8.6	A:7.35　B:8.6	16	80	土師質　上部欠損　外面は横方向ヘラミガキ
－2	肥前陶器皿	第１面	2101	溝		24	(4.6)		20	三島手
－3	肥前磁器染付皿	第１面	2101	溝		13.4	3.1	5.1	80	型打ち成形　貼付高台　口紅装飾　見込に崩れた山水画を描き、全面施釉　畳付釉剥ぎ
－4	肥前磁器色絵皿	第１面	2101	溝		26.5	(3.6)		20	古九谷様式　緑色の部分は銀化しており、赤色のみ残る　外面は唐草文、内面は七宝繋文
図80－1	ベトナム長胴壷	第１面	2061	土坑			(8.3)	10.3	20	外面：灰5Y5/1　内面：灰黄2.5Y6/2　胎土は緻密であるがφ0.3cmまでの褐色砂粒を僅かに含む　内面はナデによって凸凹状を呈する
－2	丹波壷	第１面	2061	土坑		6.3	9.2	7.7	90	お歯黒壺か？しかし内面に鉄分付着は認められない
－3	肥前磁器染付皿	第１面	2061	土坑		23	4.1	10	20	折縁部分に四方襷文　見込は円凹状にくぼみ、その周囲に菊唐草文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
図81－1	肥前陶器碗	第１面	2307	土坑		7.2	4.5	3	40	内野山窯　銅緑釉　高台露胎
－2	肥前陶器碗	第１面	2307	土坑		10.2	5.85	4.6	50	呉器手　見込が広く大振りの碗　全面施釉　畳付釉剥ぎ
－3	肥前陶器皿	第１面	2307	土坑		21.2	(3.6)		15	三島手　胎土は褐色を呈す
－4	肥前磁器染付碗	第１面	2307	土坑		12	6.6	4.6	40	器形は天目茶碗を意識か？　外面は竹文を描き、全面施釉　畳付け釉剥ぎ
－5	肥前磁器染付仏飯器	第１面	2307	土坑		8.3	7	4.2	70	杯部が器高の1/2以上を占める　口縁部は端反る　底部は削り出しで、高台内の刳り込みは浅い　高台内無釉　外面に唐草文　二次焼成を受け表面は乳白色を呈する
－6	肥前磁器香炉	第１面	2307	土坑			(5.6)	5	40	高台内削りは高台脇より若干深い　外面は鉄化粧の後、鉄釉を掛け流す　高台露胎　内面は鉄化粧が垂れ込む
－7	肥前白磁小杯	第１面	2307	土坑		6	3.1	2.3	40	口縁部はやや端反る　高台脇を削り出し、そこから高台内は無釉
－8	漆器皿	第１面	2307	土坑		11.2	(1.6)		30	内・外面ともに朱漆を塗る　内面に金蒔絵
－9	下駄	第１面	2307	土坑		7.2（台幅）	0.45(台高)　2（歯含）	(13.05)(台長)		角型陰卯下駄　柾目材　漆が部分的に遺存
-10	曲物底	第１面	2307	土坑		9.6（幅）	0.6（厚さ）	9.6（長さ）		
-11	糸巻具	第１面	2307	土坑		2（幅）	0.9（厚さ）	14.6（長さ）		図版16左２　枠木　柾目材　横木を差し込むための穿孔あり（２ヶ所）　「泉屋」と墨書が残る
-12	糸巻具	第１面	2307	土坑		1.9（幅）	1.9（厚さ）	18（長さ）		枠木　横木を差し込むための穿孔あり（２ヶ所）
-13	糸巻具	第１面	2307	土坑		A:2.5（幅） B:2.6（幅）	A:0.9（厚さ） B:0.9（厚さ）	A:(8.5)(長さ) B:(7.3)(長さ)		図版16右１　２つの横木が組み合わさったもの　柾目材　「庄左衛門」と墨書が残る
-14	糸巻具	第１面	2307	土坑		1.8（幅）	0.9（厚さ）	8.9（長さ）		横木　「庄左衛門」と墨書が残る
-15	平刷毛	第１面	2307	土坑		8.2（最大幅）	1（最大厚さ）	14.6（長さ）		柾目材　先端部に毛を固定するための横方向の溝２条と穿孔あり　柄の先端に穿孔（紐を通したのか）
-16	平刷毛	第１面	2307	土坑		7.8（最大幅）	0.9（最大厚さ）	15（長さ）		柾目材　先端部に毛を固定するための横方向の溝３条と穿孔あり　柄の先端に穿孔（紐を通したのか）
-17	軒丸瓦	第１面	2307	土坑		13.6（瓦当面径）	1.8（厚さ）	28.3（長さ）		巴文と小粒の珠文で文様構成　丸瓦部に穿孔
図82－1	土師質皿	第１面	2006	土坑		10	2.1		80	口縁部・内面はナデ　底部はユビオサエ

表25　遺物観察表（８）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－2	土師質皿	第１面	2055	埋甕		7.3	1.6		50	口縁端部の内外面はナデ、見込は強くナデて、へそ皿状につくる　胎土は緻密　焼成は良好
－3	焼塩壺	第１面	2066	土坑		6.9	(10.4)	4.6	90	「御壷塩師／堺湊伊織」の刻印あり
－4	丹波大平鉢	第１面	2032	土坑		30	5.35	19.8	30	
－5	備前壷	第１面	2032	土坑		12	6.6		10	乗岡編年中世２～３期　口縁は丸くつまみ出し、先端を少し垂れ下がり気味に調整する　大半が欠損しており正確な傾きは不明だが、内傾していたものと思われる　口縁部には灰が被る
－6	備前擂鉢	第１面	2032	土坑		27.8	(8.6)		10	乗岡編年近世１期　８～９条のクシ状工具で斜め擂目
－7	肥前陶器碗	第１面	2055	埋甕		9.9	6.1	4.1	30	内面・外面上半に灰釉　高台露胎　明瞭ではないが兜巾が見られる
－8	肥前陶器皿	第１面	2078	土坑		12.8	4.6	4.5	60	京焼風　見込に崩れた山水画　高台内に「木下弥」の刻印あり　高台露胎
－9	肥前陶器壷	第１面	2080	溝			(5.7)	4.4	25	高台内の削り込みは深い　高台脇を削り段をもつ　鉄釉で全面施釉　畳付釉剥ぎ　17世紀第２～３四半期のもの
－10	肥前陶器壷	第１面	2063	土坑		11.6	(9.3)		40	三耳壷　叩き成形（内面に同心円当て具痕）　明確な頸部をもち、肩部に沈線を施す　口縁部内・外面に鉄釉　外面肩部に部分的に灰釉を掛け流す　外面は灰が被る　16世紀末～17世紀初頭のもの
－11	瀬戸美濃皿	第１面	2227	土坑		10.3	2.2	6.4	80	碁笥底状で高台内の削りも浅い　灰釉を全面施釉　見込釉剥ぎ　高台内には輪ドチ痕が残る
－12	瀬戸美濃香炉	第１面	2089	土坑		10.2	5.3	6.8	20	外面の胴部～口縁上端に鉄釉　それ以外は露胎
－13	肥前青磁碗	第１面	2080	溝		10	7.25	4.7	10	全面施釉　畳付釉剥ぎ
－14	肥前青磁碗	第１面	2080	溝		10.1	6.9	4.8	30	内面と口縁部外面は青磁釉、胴部外面は鉄銹釉の掛分け　鉄銹を拭い２条の圏線を施す　高台脇を平らに削る　高台無釉
－15	肥前青磁皿	第１面	2080	溝		20.2	5.5	7	20	焼成不良（灰白5Y8/2を呈す）　波佐見焼か？　見込に連弁文？を線刻　全面施釉　畳付釉剥ぎ
－16	ベトナム長胴壺	第１面	2089	土坑			(12.1)	11.4	（底部）100	外面：灰5Y5/1　内面：灰黄2.5Y6/2　胎土は緻密であるがφ0.3cmまでの褐色砂粒を僅かに含む　内面はナデによって凸凹状を呈する
－17	中国磁器染付碗	第１面	2350	土坑		13.8	5.5	5	50	漳州窯　外面に唐草文　見込に文様あり　全面施釉　細かい砂が畳付けに付着
－18	中国磁器染付大皿	第１面	2006	土坑		25.6	4.55	14.4	30	漳州窯　見込に花鳥文　全面施釉　粗い砂が畳付に付着
－19	中国磁器染付皿	第１面	2227	土坑			(1.6)	7.9	（底部）25	景徳鎮窯　高台内には放射状の削りが顕著　見込中央に車輪を描き、その周囲に花文を描く　全面施釉　粗い砂が畳付に付着
図83－1	水滴	第１面	2078	土坑		4（幅）	4（厚さ）	4.5（長さ）	70	京焼　笠を背負った人型　型作り　肩に穿孔　鉄釉で眉・目・口を描き、透明釉を施す　底部は露胎
－2	骨製円盤	第１面	2359	土坑		1.9（短軸）	0.3（厚さ）	2.2（長さ）		加工されているため骨の同定できず　碁石？双六の駒？　2.3（重量）
－3	双履硯	第１面	2001	土坑	下層	5.8（幅）	1.1（厚さ）	8（長さ）	90	図版17右１　黒色頁岩　左側の海には朱色がかすかに遺存する　左で朱色、右で黒色の墨を使いわけていたよう
－4	軒丸瓦	第１面	2055	埋甕		13.6（瓦当面径）				瓦当面裏側はユビオサエの後ヘラナデ　やや小振りの巴文と小粒の珠文　二次焼成を受ける（浅黄橙7.5YR8/3）瓦当面中央にスス付着
－5	棟込瓦	第１面	2282	土坑		7.6（瓦当面径）	1.1（厚さ）	3.4（長さ）		菊丸
図85－1	土錘				１層	7.15（幅）	3（厚さ）	(7)（長さ）		162.55（重量）　胎土にはφ１㎜以下の砂粒を含む　硬く焼き締まる　近代のものか？
－2	焼塩壺				１層	4.8	8.7	6.7	100	輪積み成形　内面には成形の際に使われる布目が顕著　外面は強くナデ、面取り状に調整
－3	タコ壷				１層		(7.8)		60	土師質　釣鐘型　均質な胎土、内面ナデ、焼成が非常に良いことから近世のものと考えられる
－4	備前火入				１層	13.1	6.35	9.8	25	胴部外面下端をケズリ、面をつくる　底部は無調整　それ以外はナデ調整
－5	肥前陶器鉢				１層	7	5.4	3.4	60	灰釉（外面は掛け流し）口縁端反り部分は鉄釉　見込は茶溜り状に凹む　高台露胎
－6	中国磁器染付皿				１層	13	2	7.6	25	景徳鎮窯　小野編年Ｂ群　全面施釉　畳付釉剥ぎ　畳付脇には粗い砂粒付着
－7	銭				１層	2.3（直径）	0.55（孔径）	0.1（厚さ）		寛永通宝　2.75（重量）
図87－1	礎石	第１－２面北	2172	礎石		(16.6)（幅）	7.9（厚さ）	(18.3)（長さ）		一石五輪塔転用　岩片を多く含む不均質砂岩
図88－1	焼塩壺	第１－２面北	2174	土坑		6.6	10.4		95	銘は不明瞭だが、胴部上端にほぼ正方形の刻印あり
図90－1	肥前陶器碗	第１－２面北	2290	溝		9.6	6.4	3.8	60	内野山窯　高台内の削りは浅い　灰釉　高台露胎
－2	肥前陶器溝縁皿	第１－２面北	2290	溝		13.2	3.5	4.4	45	灰釉　高台露胎　兜巾がみられる　崩れた砂目積み（目跡４ヶ所）
－3	瀬戸美濃皿	第１－２面北	2290	溝		11.4	2.6	6.8	30	鉄絵で文様を描き、灰釉を施す　高台内の削り込みは浅いが、高台脇はしっかり削り、明瞭な高台を作り出す　目積み跡が残る

表26　遺物観察表（９）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－４	瀬戸美濃皿	第１－２面北	2290	溝		11	2.2	7.8	45	鉄絵で文様を描き、灰釉を施す　高台内の削り込みは浅いが、高台脇はしっかり削り、明瞭な高台を作り出す　目積み跡が残る
－５	丹波擂鉢	第１－２面北	2290	溝		30.4	(8.6)		15	７条の擂目　外面は指頭圧痕顕著
－６	肥前磁器染付碗	第１－２面北	2290	溝			3.3	5.2	30	外面は鎬状に削り込み、花文で区割りをする　全面施釉　畳付釉剥ぎ
－７	肥前磁器染付筒形碗	第１－２面北	2290	溝		9.4	8.4	5.6	30	外面に草花文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
－８	中国磁器染付碗	第１－２面北	2290	溝		12.8	5.2	4.6	25	景徳鎮窯　呉須の発色は悪く灰色を呈する　畳付に細かい砂付着　高台欠損のため全面施釉か否かは不明
－９	中国磁器染付皿	第１－２面北	2290	溝		13	2.5	7	30	景徳鎮窯　口縁部内面に崩れた襷文　全面施釉　粗い砂が畳付に付着
－10	中国磁器染付小杯	第１－２面北	2290	溝		5.7	3.45	2	60	景徳鎮窯　外面に唐草文　高台無釉
図92－１	礎石	第１－２面南	2372	礎石		12.8（幅）	12.6（厚さ）	15.9		一石五輪塔転用　岩片を多く含む不均質砂岩
図93－１	土師質皿	第１－２面南			近世整地層（東壁断面94）	11.7	2.5		30	底部はユビオサエ　口縁部はヨコナデ　内面はナデ　口縁部にはわずかに油煙が付着
－２	丸瓦	第１－２面南			近世整地層（東壁断面94）	11.8（幅）	1.6（厚さ）	(23.2)（長さ）		コビキＢ　外面はヘラ状のもので強く縦方向にナデ、面取り状になる
図94－１	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑		4.8	1.1		100	手捏ね成形の小型
－２	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当	11.1	1.85		100	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
－３	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	5	1.1	2	100	手捏ね成形の小型皿
－４	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	9.8	1.65	4	40	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
－５	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑		9.4	2.1		50	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ
－６	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	9.6	1.7		40	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ
－７	土師質皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	10.2	2.1		70	胎土は緻密　口縁部はナデ　内面と底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
－８	焼塩壷蓋	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	6.6	1.55		90	胎土にφ１㎜以下の砂粒を多く含む　口縁部はヨコナデ　天井部はユビオサエ
－９	焼塩壷	第１－２面南	2343	廃棄土坑		5	8.6	4	95	輪積み成形　胎土にはφ１㎜以下の砂粒を多く含む　内面には成形の際の粘土の絞り目が顕著
－10	焼塩壷	第１－２面南	2343	廃棄土坑		5.8	9.1		90	輪積み成形　胎土にはφ１㎜以下の砂粒を多く含む　内面には成形の際の粘土の絞り目が顕著
－11	土師質甕	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	22.8	(13)		15以下	胎土はφ１㎜前後の砂粒を含む　外面は左上がりタタキ　内面は横方向のハケメ
－12	大和型鍋	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	23	(5.1)		15以下	外面はナデ　内面はハケメ
－13	炮烙	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	41.4	(6.45)		25	外面胴部下半に右上がりタタキ　内面はハケメ　外面（特に胴部）スス付着が顕著
－14	炮烙	第１－２面南	2343	廃棄土坑		24	(5.1)		10以下	外面胴部下半に左上がりタタキ　内面はハケメ　外面（特に胴部）スス付着が顕著
－15	瓦質片口擂鉢	第１－２面南	2343	廃棄土坑		18	10.1	7.8	25	口縁部はヨコナデ　外面はユビオサエと不定方向のナデ　内面はハケメの後、６条のクシ状工具で擂目を施す
－16	瓦質火鉢？	第１－２面南	2343	廃棄土坑		31.7	(10.8)		15以下	外面は不定方向のヘラミガキ　内面はヨコナデ　胴部に窓を設ける
－17	瓦質火鉢	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	34.4	14.7		15	外面は不定方向のヘラミガキ　内面はヨコナデ
－18	瓦質火鉢	第１－２面南	2343	廃棄土坑			(12.75)	18.2	15以下	外面は横方向のヘラミガキ　内面はヨコナデ
－19	瓦質十能	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	11.9（最大幅）	3.5（最大厚さ）	14.35（長さ）	50	柄側面は角を取り、面取り状に調整　底部にスス付着
図95－１	肥前陶器碗	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	11.6	7.2	4.45	50	外面灰釉、内面鉄釉の掛け分け　外面に鉄釉で文様を描く　高台露胎
－２	肥前陶器碗	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	10.4	6.8	4.1	70	口縁はやや外側に開く　灰釉　高台露胎　高台内に兜巾がのこる
－３	肥前陶器碗	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	10.6	6.4	4.6	60	内面と外面上半に灰釉　高台露胎　兜巾がみられる
－４	肥前陶器碗	第１－２面南	2343	廃棄土坑		12	7	5	95	内野山窯　玉子手　高台露胎
－５	肥前陶器皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	東壁断面116	14.3	3.95	5	45	図版14右１　内面に鉄絵で葦草文　全面施釉　見込に４ヶ所の砂目跡　磁器を意識したものか
－６	肥前陶器皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	14	3.45	4	80	見込を円凹状に削り込む　内面には筋状に鉄釉を流し掛ける　灰釉　高台露胎　胎土目積み（目跡４ヶ所）
－７	肥前陶器皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	東壁断面116	11.9	3.25	4.15	95	口縁を３ヵ所内側に摘み込む　見込は円凹状に刳り込む　灰釉　高台露胎　砂目積み
－８	肥前陶器溝縁皿	第１－２面南	2343	廃棄土坑	東壁断面116	12.75	3.9	4.15	80	灰釉　高台露胎　砂目積み
－９	肥前陶器小杯	第１－２面南	2343	廃棄土坑		6.8	4.7	3	25	灰釉を全面施釉　畳付釉剥ぎ
－10	肥前陶器小杯	第１－２面南	2343	廃棄土坑		8.5	3.1	4	40	底面に右回転の糸切り痕　灰釉　高台露胎
－11	肥前陶器片口鉢	第１－２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	10.8	(6.1)		25	被熱しており表面が発砲しているが、元々は灰釉が施されていたと考えられる
－12	肥前陶器擂鉢	第１－２面南	2343	廃棄土坑		34.6	(9.5)		15	ロクロ成形　口縁部に鉄釉　クシ状工具で上方に掻き揚げるように擂目を施す
－13	瀬戸美濃天目茶碗	第１－２面南	2343	廃棄土坑		10.3	6.25	4.6	50	連房式登窯を代表する高台脇に段がつけられる天目茶碗　鉄釉　高台露胎

表27　遺物観察表（10）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
-14	瀬戸美濃皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	東壁断面116	12.2	2.4	3.3	45	高台脇を明瞭に削り出す　高台内の削りは浅い　灰釉　目積み
-15	瀬戸美濃皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	11.8	2.6	6.3	20	高台脇を明瞭に削り出す　高台内の削りは浅い　灰釉　目積み
-16	瀬戸美濃皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		10.8	2.3	6.5	40	高台脇を明瞭に削り出す　高台内の削りは浅い　鉄絵　目積み
-17	瀬戸美濃皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		12	2.8	7.6	（口縁部）10	高台脇を明瞭に削り出す　高台内の削りは浅い　鉄絵　見込に蘭竹文　目積み
-18	瀬戸美濃皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	11.8	2.7	7.7	40	鉄絵　見込に蘭竹文　目積み
-19	瀬戸美濃鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（３）	14.2		志野釉　輪ドチ痕が底部に残る
-20	瀬戸美濃瓶	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.6	7.2	4.7	55	底部は無釉で右回転の糸切り痕が残る　肩部に緑釉を落とす
図96-１	肥前青磁碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		11.9	6.5	4.6	80	高台無釉
-２	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		9.4	7.2	4	50	外面に柳文　高台無釉
-３	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		9.9	7.85	5.2	40	外面に唐草文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-４	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		11.2	6.4	4.2	45	外面に山水文　高台無釉
-５	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		10.8	6.4	4.4	45	外面に楼閣山水文？　全面施釉　畳付釉剥ぎ　高台の一部が欠損しているが、上に釉薬が掛かっていることから、焼成段階ですでに欠損していたようである
-６	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		8.2	（5.3）		10	外面に折松葉文
-７	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（4.65）	5.2	30	全面施釉　畳付釉剥ぎ
-８	肥前磁器筒型碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		8.9	（6.1）		10以下	胴部外面は縦縞状に削り込みをいれ、その上に草花文？を施す　口縁部外面は渦文
-９	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		11.8	（4.2）		10以下	百間窯　外面に雲気文　貫入が顕著
-10	肥前磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		11.6	7	5.4	40	外面に松文　全面施釉　畳付釉剥ぎ　天目を意識した器形
-11	肥前磁器染付手塩皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		8.9	2.5	3.5	40	全面施釉
-12	肥前青磁手塩皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当	5.3	2.75	3.6	40	見込に菊花文が彫られる　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-13	肥前磁器染付輪花皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	13.5	3.2	5.5	15	型打ち成形　見込に花卉文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-14	肥前磁器染付輪花皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		13.6	4	4.7	40	図版14右２　型打ち成形　見込に花卉文　釉薬が酸化しており、表面は玉子色、呉須は青黒く発色　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-15	肥前磁器染付輪花皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		13	3.6	5.7	75	型打ち成形　鉄銹で口紅装飾　見込に山水文（帆船、竹、雲）　全面施釉
-16	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（2.8）	6.2	30	高台内の深さは高台脇より深い　高台径は比較的小さい　全面施釉　畳付釉剥ぎ　焼成不良
-17	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		14.8	2.7	5.2		口縁は端反る　見込に草花文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-18	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑		11.9	3.4	5.7	70	型打ち成形（外面に布目痕が残る）　貼付高台　内面体部には瓢箪の文様が型取られている　見込には蝶、笹などが描かれる　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-19	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（1.2）	5.2	10以下	全面施釉　畳付釉剥ぎ
-20	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（2.05）	5.9	50	比較的高台径が小さい　見込に山水文　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-21	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（2.8）	4.6	（底部）95	見込に三方割文（1630年頃の量産タイプの皿によく描かれる）　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-22	肥前磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（1.7）	5.3	40	初期伊万里（の中では新しい方）　全面施釉　畳付釉剥ぎ
-23	肥前磁器壷	第１-２面南	2343	廃棄土坑		5.8	（6.6）		20	口縁部外面に連弧文、胴部外面に折松葉文　口縁上端は釉剥ぎ　内面も施釉するが肩部には釉が掛かっていない
-24	肥前白磁？小坏	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当	5.85	4.25	4.65	60	やや口縁部が端反る　全面施釉　畳付釉剥ぎ
図97-１	中国磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	11	4.6	4.2		漳州窯系　見込に官人が描かれる　全面施釉　畳付脇を削り釉を剥ぐ
-２	中国磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当		（3.35）	5.4	50	漳州窯　全面施釉　細かい砂が畳付に付着
-３	中国磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（2.5）	5		漳州窯　高台内に「大明成化年造」　全面施釉　畳付脇を削り釉を剥ぐ
-４	中国磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	12.1	（4.8）		40	漳州窯　見込は釉剥ぎ
-５	中国磁器染付碗	第１-２面南	2343	廃棄土坑		13.2	（4.7）		25	漳州窯　外面は雲龍文　内面は荒磯文
-６	中国磁器染付鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（2.8）	5.8	10以下	景徳鎮窯　鉢もしくは大振りの碗であろう　日本向けに製作されたものの可能性あり　見込に一重方形枠内に「福」、高台内に「壽」
-７	中国磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（1.05）	6.4	15以下	景徳鎮窯　碁笥底　見込に宝文　全面施釉
-８	中国磁器染付皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑			（0.9）	8	（底部）10	景徳鎮窯　名山手　高台内には放射状のケズリ顕著　全面施釉　畳付脇を削り釉を剥ぐ
-９	中国磁器赤絵鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	16.8	（5.5）		25	漳州窯
-10	中国磁器染付大皿	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当		（1.75）	13.5	25	漳州窯　見込に花鳥文　全面施釉　粗い砂が畳付から高台内に付着　スス付着
-11	中国磁器染付碗転用円盤	第１-２面南	2343	廃棄土坑		5.5	1.7	4.4	100	高台周辺を見込側から打ち欠いて円形に調整したもの　（景徳鎮窯　饅頭心　見込に菊文　高台内に「大明年造」　全面施釉　畳付釉剥ぎ）

表28　遺物観察表（11）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
-12	中国磁器転用円盤	第１-２面南	2343	廃棄土坑		3.8（幅）	5（厚さ）	4.3（長さ）		漳州窯赤絵碗を打ち欠いて円形に調整したもの　12.68（重量）
図98-１	備前擂鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面６	30	14	14.4	40	乗岡編年近世３期　４条のクシ状工具で斜めに擂目　よく使い込まれており、擂目は摩滅している
-２	備前擂鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当	28.9	(12.75)		40	乗岡編年近世２期　10条のクシ状工具で直線的な擂目
-３	備前小壷	第１-２面南	2343	廃棄土坑		10.8	(8.4)		15以下	
-４	備前徳利	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14		(4.8)	9.7	50	底部に直径１cmほどの円形の刻印があるが、摩滅しており詳細不明
-５	丹波擂鉢	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	32.4	14.2	13.8	50	８条のクシ状工具で擂目を施す　外面はスユビオサの痕が顕著
-６	丹波壷	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	16.7	(8.2)			
-７	砥石	第１-２面南	2343	廃棄土坑		4.6（幅）	1.75（厚さ）	13.1（長さ）		珪質頁岩（丹波産）　仕上砥（合砥）　表面に刺突痕あり（先端の尖ったものを研いだ際の痕跡か）
-８	砥石	第１-２面南	2343	廃棄土坑		6.4（幅）	1.3（厚さ）	8.9（長さ）		珪質頁岩（丹波産）　仕上砥（合砥）
-９	砥石	第１-２面南	2343	廃棄土坑		5.4（幅）	0.8（厚さ）	8.2（長さ）		珪質頁岩（丹波産）　仕上砥（合砥）
-10	砥石	第１-２面南	2343	廃棄土坑		6.1（幅）	4.5（厚さ）	10.6（長さ）		黒色頁岩　中砥
-11	碁石	第１-２面南	2343	廃棄土坑		1.85（幅）	0.3（厚さ）	1.6（長さ）		黒色珪質頁岩（南紀・那智黒）　1.56（重量）
-12	銭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.4（直径）	0.6（孔径）	0.1（厚さ）		治元平宝　3.33（重量）
-13	銭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.4（直径）	0.7（孔径）	0.1（厚さ）		銭銘不明確　2.98（重量）
図99-１	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		7.9（台幅）	1.1(台高)　3.6(歯含)	21.4（台長）		丸型連歯下駄　漆が部分的に遺存　指の圧痕が残る
-２	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		8.05（台幅）	2.2(台高)　4.6(歯含)	21.05（台長）	90	丸型露卯下駄　柾目材　指の圧痕が残る
-３	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		10.1（台幅）	1.5(台高)　2.6(歯含)	22.2（台長）		角型連歯下駄
-４	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		7.2（台幅）	1.3(台高)　3.9(歯含)	20.9（台長）		角型刳り下駄
-５	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		8.4（台幅）	2.2（台高）	21（台長）	60	角型露卯下駄　柾目材　指の圧痕が残る
-６	下駄	第１-２面南	2343	廃棄土坑		7（台幅）	1（台高）　1.9（歯含）	17.01（台長）	60	角型露卯下駄　柾目材
-７	漆器椀	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14相当		（９）	6.8		高い高台をもつ　内・外面とも朱漆　外面に黒漆で「向かい鶴」、その間に亀が描かれる
-８	漆器椀	第１-２面南	2343	廃棄土坑			(1.2)			見込部分のみ遺存　内・外面とも朱漆　高台内に黒漆で「上」の文字を丸で囲む文字紋（家紋であろうか）
-９	将棋駒	第１-２面南	2343	廃棄土坑	表採	1.5（幅）	0.7（厚さ）	2.45（長さ）		縦に細長い五角形を呈す　断面は駒先が薄く、駒尻が厚い　表に「歩兵」、裏にも墨書があるが判読できない
-10	梳櫛	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	(3.5)（幅）	1.1（最大厚さ）	6.65（長さ）		挽歯技法による木製の横櫛　漆が塗られる　棟断面は逆台形を呈する
-11	梳櫛	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	3.5（幅）	1.3（最大厚さ）	8.85（長さ）		挽歯技法による木製の横櫛　漆が塗られる　棟断面は円形を呈する
-12	箸	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ39・41	0.8（幅）	0.6（厚さ）	24.2（長さ）	100	両口箸　面取りを行い断面は円形に近い
-13	箸	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ39・41	0.8（幅）	0.6（厚さ）	23.7（長さ）	100	両口箸　面取りを行い断面は円形に近い
-14	火付け棒	第１-２面南	2343	廃棄土坑		0.9（幅）	0.9（厚さ）	31.8（長さ）	100	両端にスス付着
図100-１	人形頭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.9（幅）	2.65（最大厚さ）	10.45（長さ）	80	柾目材
-２	人形頭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.55（幅）	2.8（厚さ）	4.3（長さ）	80	柾目材
-３	人形頭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.2（幅）	1.7（最大厚さ）	7.6（長さ）	100	柾目材
-４	人形頭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.9（幅）	2.75（厚さ）	14.35（長さ）	100	図版16下３　柾目材
-５	人形頭	第１-２面南	2343	廃棄土坑		3.5（幅）	3.4（最大厚さ）	7.35（長さ）	95	柾目材　頭部に穿孔（植毛のための孔）
-６	人形	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.3（幅）	2.2（最大厚さ）	8.2（長さ）	100	柾目の棒状板材から彫りだす　四角く頭部を削りだし、鼻から下を彫って顔に立体感をだす
-７	人形	第１-２面南	2343	廃棄土坑		1.3（幅）	1.3（厚さ）	5.7（長さ）		図版16右３　柾目材　首の部分を削って顔を作り出す　頭髪・眉・目・髭を墨で描く　鼻は削って立体感をだす　胴部側面に２ヶ所穿孔(貫通する)手を取り付けるためのものか？
-８	人形	第１-２面南	2343	廃棄土坑		1.7（幅）	1.9（厚さ）	14.6（長さ）		図版16下２　柾目材　首の部分を削って顔を作り出し、目・口は線刻で表現する　鼻は削りだして立体感をだす　体部中央に刻みをいれる（脚と胴を区別するものか？）
-９	人形	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	3.5（幅）	0.8（厚さ）	10.6（長さ）	100	図版16下１　板状の材から人形の形状を彫りだす　頭部は墨を塗り、頭髪を表現する　人形下部にも墨を塗る
-10	人形	第１-２面南	2343	廃棄土坑		3.25（幅）	1.4（厚さ）	10.1（長さ）	100	柾目の板材から人形を彫りだす　頭部、着物の袖など曲線的に彫っており丁寧な作りである
-11	桶材	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面７・14	6.4（幅）	1（厚さ）	(32.8)（長さ）		柾目材　外面３ヶ所にタガの跡が見られる　先端は欠損しているが、並んで２ヶ所穿孔していた痕跡が残る　内面に黄褐色付着物あり
-12	桶栓	第１-２面南	2343	廃棄土坑		3.3（幅）	3（厚さ）	8.5（長さ）		表面は縦方向に面取し角を落とす　断面はいびつな円形

表29　遺物観察表（12）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
-13	しゃもじ	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面7・14	6.5（幅）	0.7（最大厚さ）	21.4（長さ）	95以上	柄側面は面取りし角を落とす　先端へ向けて削り先を細くする
-14	しゃもじ	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面7・14	4.6（幅）	0.6（厚さ）	15.8（長さ）		柾目材　柄側面は面取りし角を落とす　先端へ向けて削り先を細くする
図101-１	荷札	第１-２面南	2343	廃棄土坑		5.3（幅）	0.8（厚さ）	9.3（長さ）		柾目材　上下に２ヶ所ずつ穿孔（ヒモを通す穴か）　右側の墨書は不明　左側には「□舎仝（屋号）」と墨書あり
-２	糸巻具	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面14	2.2（幅）	1.3（厚さ）	(21.5)（長さ）		枠木か？　柾目材
-３	糸巻具	第１-２面南	2343	廃棄土坑	アゼ断面7・14	2（幅）	1.4（厚さ）	26.8（長さ）		枠木か？　柾目材
-４	糸巻具	第１-２面南	2343	廃棄土坑		A:1.9（幅） B:1.9（幅）	A:0.9（厚さ） B:0.8（厚さ）	A:13.8（長さ） B:4.4（長さ）		図版16左１　枠木（完形）と横木（1/2以上欠損）が組み合わさったもの　枠木の一端は焦げておりスス付着
-５	糸巻具	第１-２面南	2343	廃棄土坑		2.2（幅）	1（最大厚さ）	9.2（長さ）	100	横木「仁右（右衛門の略か）」と墨書あり
図102-１	土師質皿	第２面			慶長焼土層相当	5.2	0.9		100	手捏ね成形の小型皿　雑なつくり
-２	土師質蓋	第２面			慶長焼土層	16.3	2.4		20	天井部外面は雑なナデ　それ以外は丁寧なナデ　天井部端をケズリ、面をつくる　口縁部上端は強くナデ面をつくる
-３	土師質堝	第２面			慶長焼土層相当	20.2	(6.3)		(口縁部)20	大和型　外面はナデ　胴部内面は横方向ハケメ
-４	火舎	第２面			慶長焼土層	21.4	(6.05)		(口縁部)10	
-５	朝顔形埴輪	第２面			慶長焼土層		(7.1)		10以下	埴輪の頸部　内・外面はハケメ
-６	肥前陶器皿	第２面			慶長焼土層	11.2	3.2	2	25	大橋編年Ⅰ－１期　内面・外面口縁部に灰釉　高台露胎　高台脇の削りは浅い
-７	肥前陶器皿	第２面			慶長焼土層	26.1	6.8	9.1	55	内面・外面上半に灰釉　高台露胎　胎土目積み（目跡４ヶ所）　二次焼成受ける
-８	肥前陶器皿	第２面			慶長焼土層		(2.55)	5.4		大橋編年Ⅰ－２期　鉄絵　高台無釉
-９	中国磁器染付碗	第２面			慶長焼土層	12.5	5.2	4.6	50	漳州窯　16世紀末～17世紀初頭に主に輸入される粗製の碗　釉薬：浅黄2.5Y7/3　胎土：灰白2.5Y8/2　見込釉剥ぎ　高台内無釉
-10	中国磁器染付皿	第２面			慶長焼土層		(1.05)	8.1		景徳鎮窯　小野編年Ｅ群　見込に龍か？文様あり　粗い砂が畳付に付着
-11	中国磁器染付皿	第２面			慶長焼土層相当	12	2.1	6.2	20	景徳鎮窯　小野編年Ｅ群　内面胴部に崩れた襷文　粗い砂が畳付に付着
-12	中国白磁菊花皿	第２面			慶長焼土層	11.6	2.9	7	15	景徳鎮窯
-13	絵銭	第２面			慶長焼土層？	2.2（径）	0.5（孔径）	0.4（厚さ）		洪武通宝　裏は無文　9.83（重量）
-14	銭	第２面			慶長焼土層	2.4（直径）	0.7（孔径）	0.1（厚さ）		天聖元宝　3.07（重量）　裏は無文で平坦
-15	銭	第２面			慶長焼土層	2.3（直径）	0.6（孔径）	0.1（厚さ）		元□□宝　2.73（重量）
-16	銭	第２面			慶長焼土層	2.45（直径）	0.6（孔径）	0.1（厚さ）		治平元宝　3.25（重量）
図103-１	土師質皿	第２面	2362	溝		5.85	1.5		100	手捏ね成形　口縁部はナデ　内面には目の粗いハケメ
-２	中国？白磁皿	第２面	2362	溝		12.9	(2.55)		25	焼成不良もしくは二次焼成を受ける
-３	軒平瓦	第２面	2362	溝		4.5（瓦当面径）			10以下	二次焼成を受ける
図104-１	瀬戸美濃皿	第２面	2153	埋甕			1.4	8.6	(底部)40	見込に菊花を彫り灰釉を施す　明瞭な高台をもつ　輪ドチ痕が残る
-２	瀬戸美濃菊花皿	第２面	2317	埋甕		10.8	2.2	5.7	90	灰釉　見込は釉剥ぎ　輪ドチ痕が残る
-３	備前擂鉢	第２面	2320	土坑			(6.1)		破片	乗岡編年中世６期　緻密な胎土
-４	備前擂鉢	第２面	2320	土坑		19.7	7.6	9.2	10	乗岡編年中世５期か？
-５	備前甕	第２面	2320	土坑		50.4	(7.6)			
図106-１	土師質甕	第２面	2238	土坑		30.6	(6.2)		(口縁部)15	口縁部外面は左上がりの粗いタタキ　内面は口縁部がナデ、胴部は粗いハケメ
-２	肥前陶器皿	第２面	2327	土坑			3.8	7.9	30	見込はヘラでうず状に削る　鉄絵　高台無釉
-３	礎石	第２面	2192	礎石		(14.4)（幅）	7.75（厚さ）	28.9（長さ）		岩片を多く含む不均質砂岩　石臼転用
-４	礎石	第２面	2370	礎石		24.8（幅）	9.2（厚さ）	24.9（長さ）		岩片を多く含む不均質砂岩　石塔の台座の転用か
図108-１	土師質蓋	第３面	2330-１	濠	下層（東側断面129）	26.4	(3.6)		10以下	口縁部は横方向のナデ　内面は不定方向のナデ　外面は粗いナデもしくは無調整
-２	土師質擂鉢	第３面	2330-１	濠	下層（東壁断面135～141相当）	26.9	(9.8)			表面は剥落しており調整不明瞭　内面は目の細かいハケメ　５条の擂目を施す　胎土にはφ１～２㎜の砂粒含む
-３	土錘	第３面	2330-１	濠	下層（東側断面129）	１（外径） 0.3（内径）	3.6（長さ）		100	管状土錘　中央部が膨らみ、両端へと細くなる　3.22（重量）
-４	土錘	第３面	2330-１	濠	下層	0.9（外径） 0.4（内径）	3.6（長さ）		100	管状土錘　中央部が膨らみ、両端へと細くなる　2.43（重量）
-５	瓦質火鉢	第３面	2330-１	濠	下層（東壁断面129～131）	12.8	5.5		100	外面は横方向にヘラミガキ　内面はナデ　底部内・外面は粗いナデ　胴部外面中ほどに菊花のスタンプが一定間隔で施される
-６	備前甕	第３面	2330-１	濠	下層		(14.8)		破片	甕胴部のみ遺存　外面に線刻あり　内面は粗いナデ　指頭圧痕が残る
-７	備前擂鉢	第３面	2330-１	濠	下層	30	(10.3)		40	乗岡編年近世１期　９条の擂目が一定間隔で施され、その上から部分的に斜めに擂目を施す
-８	丹波擂鉢	第３面	2330-１	濠	下層		(７)		小破片	１本擂目　口縁部はやや外傾し、口縁上端は強いナデ　外面は指頭圧痕が顕著

表30　遺物観察表（13）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－9	肥前陶器碗	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	11.2	5.6	4	35	大橋編年Ⅰ－２期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台脇を削り段をつくる　高台内の削りは浅い　兜巾がみられる
-10	肥前陶器折縁皿	第３面	2330－1	濠	下層（東側断面129）	24.4	(3.7)		10	大橋編年Ⅱ期　灰釉　胎土に黒色ガラス質鉱物混じる
-11	肥前陶器皿	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	11.2	3.75	3.2	35	大橋編年Ⅰ－１期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台は碁笥底状で、高台内をアーチ状に削る　胎土目積み（目積みは４ヶ所）
-12	瀬戸美濃皿	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	11.2	2.45	5.8	20	灰釉を全面施釉　見込釉剥ぎ　高台内には輪ドチ痕が残る　碁笥底状で高台内の削りも浅い
-13	中国磁器染付碗	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	10.6	5.05	3.6	20	漳州窯　高台内無釉
-14	中国磁器染付碗	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面134）		(2.6)	4.4	(底部) 100	景徳鎮窯　見込に花文　外面に唐草文　全面施釉　畳付は釉を拭わず粗い砂が付着
-15	中国白磁皿	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	10.8	2.7	6.3	15	全面施釉　口縁部に釉溜まり　緻密な胎土
-16	中国磁器染付皿	第３面	2330－1	濠	下層		(1.2)	11.5	15以下	景徳鎮窯　小野編年Ｂ群　高台内に放射状の削り痕顕著　見込に花文　全面施釉　畳付脇を削り釉剥ぎ　畳付には粗い砂が付着
-17	柄	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面135～141相当）	3.2（最大幅）	1.7　（最大厚さ）	11.7（長さ）		柄表面は板目　小口に長方形のほぞ穴が刳り込まれる
-18	桶栓	第３面	2330－1	濠	下層（東壁断面129～131）	3.8（最大幅）	2.55　（最大厚さ）	10.5（長さ）	100	
-19	硯	第３面	2330－1	濠	下層	6.7（幅）	1.45（最大厚さ）	(6.5)（長さ）	25	凝灰質頁岩
図109－1	土師質皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	5	1.2		100	手捏ね成形の小型皿　口縁は強くナデ、上方へ立ち上げる
－2	土師質皿	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	4.7	1.2		100	手捏ね成形の小型皿　雑なつくりである
－3	土師質皿	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	9.3	1.9		100	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
－4	土師質皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	4.7	1.7	3.2	100	口縁部はヨコナデ　内面はナデ　底部はユビオサエ　見込周辺を強くなで、段をつける　口縁部に油煙付着
－5	土師質火鉢	第３面	2330－1	濠	上層	22.8	7.7	10.5	30	外面は表面剥落のため調整不明　内面はナデ　胎土にφ２㎜前後の砂粒含む
－6	焼塩壺	第３面	2330－1	濠	上層（東壁123）	5.2	8.4	6	100	輪積み成形　表面は二次焼成で剥落しており、調整不明　内面は成形の際の粘土絞り目がみられる　口縁をつまむようになであげる
－7	土師質甕	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	27.6	(6.8)			外面は横方向のタタキ　内面は横方向の目の細かいハケメ　口縁部はナデ
－8	土師質甕	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	28	(9.25)		25	外面はタタキ調整の後ナデを施し、頸部にのみタタキの痕跡残る　内面は横方向の比較的目の粗いハケメの後ナデを施す　口縁部内面に指絞らしき痕残る
－9	炮烙	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	15	(4.9)		30	外面に右上がりの６条の平行タタキ　内面は雑なナデ調整
-10	炮烙	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	28.2	(7.2)		25	胴部外面下端に右上がりタタキ　内面はナデ
-11	瓦燈	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)		(7.6)	14.2	25	胴部外面は幅広の横方向ヘラミガキ、口縁部外面はナデ　内面は粗いミガキ
-12	瓦質火鉢	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	31.2	(8.5)		25	外面は横方向のヘラミガキ　内面はナデ
-13	瓦質火鉢	第３面	2330－1	濠	上層	16	8.4		20	外面は横方向にミガキ後、右上がりの粗いミガキ　内面は粗いナデ
-14	瓦質火鉢	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	11.8	6.3		50	外面は縦方向にミガキ　内面はナデ　底部内・外面は粗くナデる　胴部中央に菊花のスタンプが施される
-15	瓦質十能	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	8.5（幅）	(3.7)（厚さ）	10.15（長さ）	20	不定方向のナデ　柄の外面下端は削りを施し面取り状に調整
-16	瓦質擂鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	25.4	(8)		20	ナデ調整の後、擂目を施す（磨耗しており不鮮明ではあるが、６～７条の擂目）　外面は摩滅しており調整不明
図110－1	備前擂鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	32	(5.2)		15以下	乗岡編年近世１期　破片のため擂目は不明
－2	備前擂鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	21	(7.4)		15以下	乗岡編年近世１期　欠損しており全体は不明であるが、５条以上で斜めに擂目をいれる　焼成不良
－3	丹波擂鉢	第３面	2330－1	濠	下層	33.7	16	14.4	45	５条の擂目が一定の間隔で施される　口縁上端はやや外傾しながらも丸く調整される　外面は右斜め上方向の指頭圧痕が顕著　口縁部内面に沈線を廻らす
－4	丹波擂鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）		(6.6)		小破片	間隔の広い４条の擂目をクシ状工具で施す
－5	丹波大平鉢	第３面	2330－1	濠	上層(アゼ断面16相当)	28.2	5.9	18		内面は灰が被る
図111－1	肥前陶器碗	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	11.9	6.65	4.5	50	大橋編年Ⅰ期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　口縁部はやや内傾する　高台脇は明瞭に削るが、高台内の削りは浅い

表31　遺物観察表（14）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－2	肥前陶器碗	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	9.6	6.3	3.9	80	大橋編年Ⅱ期　内面・外面上半に灰釉（二次焼成を受けており変色しているが灰釉が施釉されていたと思われる）　口縁部はやや外反する
－3	肥前陶器碗	第３面	2330－1	濠	上層	10.6	6.4	4.2	35	大橋編年Ⅱ期　内野山窯　灰釉　高台露胎
－4	肥前陶器碗	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）		(4.1)	3.3	30	大橋編年Ⅱ期　内野山窯　灰釉　高台露胎
－5	肥前陶器皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	11.6	3.8	4.5		大橋編年Ⅰ期　鉄絵　高台露胎　高台脇を軽く削るだけで高台内の削り込みはほとんどなされない　胎土目積み（目跡は３ヶ所）
－6	肥前陶器折縁皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	13.7	3.8	4.3	55	大橋編年Ⅰ－２期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台脇・高台内ともに削りは浅い
－7	肥前陶器皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	11.4	3.2	4.4	45	大橋編年Ⅰ期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台脇・高台内ともに削りは浅い　胎土目積み（目跡はおそらく３ヶ所）
－8	肥前陶器溝縁皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	13.6	3.3	5.1	50	大橋編年Ⅱ期　灰釉　高台露胎　砂目積み
－9	肥前陶器折縁皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	23.2	(3.9)		10	大橋編年Ⅱ期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎
－10	肥前陶器皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	12	3.4	4	40	大橋編年Ⅱ期　褐色の胎土　刷毛目文様　砂目積み（崩れて広がった目跡）
－11	肥前陶器溝縁皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	12.4	2.9	5.4	40	大橋編年Ⅱ期　灰釉　高台は碁笥底状　砂目積み（崩れて広がった目跡）
－12	肥前陶器鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	11.2	7.9	5.9	50	大橋編年Ⅰ－２期　鉄絵（文様不明）　高台露胎
－13	肥前陶器鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	11.6	(5.05)		15以下	大橋編年Ⅰ期　玉縁状に口縁を丸く調整し外反させる　鉄絵（文様不明）　高台露胎
－14	肥前陶器鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	7.1	6	3.5	80	図版14右３　鉄絵で文様を描く　高台露胎
－15	肥前陶器小杯	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）		(2.9)	3.4	（底部）100	17世紀前半　灰釉を全面施釉　畳付釉剥ぎ
－16	肥前陶器鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）		(4.4)	9	（底部）100	底部のみ遺存　内面・外面上半に灰釉
－17	肥前陶器擂鉢	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	27	(5)		10以下	口縁部にのみ鉄釉　４条？のクシ状工具で擂目
－18	中国磁器染付皿	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）	12.8	2.8	8.2	30	景徳鎮窯　小野編年Ｅ群　高台内には放射状の削り顕著　見込に獅子が描かれる　全面施釉　粗い砂が畳付に付着
－19	中国磁器染付碗	第３面	2330－1	濠	上層	11.8	5.8	5.1	35	景徳鎮窯　見込に「天」の文字　畳付には粗い砂が付着
－20	中国磁器赤絵碗	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	12.4	(4)		20	漳州窯　16世紀末～17世紀第１四半期にのみ輸入されるもの　内・外面ともに赤絵で文様が描かれるが、内面の見込に呉須で圏線を引いており、手の込んだ作品である
－21	漆器碗	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16相当）		(4.2)			内面は朱漆、外面は黒漆を塗る　外面に朱漆で草文？を描く
－22	下駄	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	(6.8)（台幅）	2.3(台高)　4.7(歯含)	(17.7)（台長）		丸型露卯下駄　柾目材
－23	軒丸瓦	第３面	2330－1	濠	上層（アゼ断面16）	13.15(瓦当面径)			30	巴文と小粒の珠文
図112－1	土師質皿	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	5.2	(0.75)		85	手捏ね成形の小型の皿　見込は目の粗いハケメ
－2	土師質皿	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	8.8	1.65		30	内面ナデ　底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
－3	土師質皿	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	10.6	(1.6)		10以下	内面ナデ　口縁部外面を強くナデ、段をつくる
－4	土師皿	第３面	2330－2	濠	下層	11.2	(2.05)		50	底部ユビオサエ　内面はナデ　口縁部に油煙付着
－5	土師質甕	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）		(7.4)		小破片	玉縁　外面の口縁直下は左上がりタタキ、その下部には右上がりハケメで調整かつ装飾する　内面は口縁直下に右上がりハケメと縦方向のハケメ、その下部に左上がりハケメを施す
－6	土師質甕	第３面	2330－2	濠	下層		(8.2)		小破片	口縁部はナデ　外面はタタキの後、ナデ　頸部にのみタタキ痕が残る　内面は細かいハケメ
－7	土師質羽釜	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	14.8	(5.6)		15	口縁部に３条の沈線　外面は鍔より上はナデ、下はケズリ　内面はハケメ
－8	瓦燈	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	8	(4.6)		（口縁部）95	受皿内面に油煙付着
－9	備前擂鉢	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	32.4	6.6		10以下	乗岡編年近世Ⅰ期　内面は灰が被る
－10	備前擂鉢	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	29.2	11.8	14	50	乗岡編年近世１期　７条の擂目を斜めに施す
－11	備前甕	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）	21.6	(4.8)			
－12	丹波擂鉢	第３面	2330－2	濠	下層	32.2	(15.8)		40	ヘラで密に擂目を施す　外面には指頭圧痕が顕著
－13	肥前陶器折縁皿	第３面	2330－2	濠	下層	13.5	4.1	4.2	80	大橋編年Ⅰ－２期　鉄絵　二次焼成を受ける
－14	瀬戸美濃碗？	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）		(1.9)	4.4		碗と思われるが見込が広い　高台内には輪ドチの痕残る
－15	中国磁器染付碗	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）		(3.05)	4.6	50	景徳鎮窯　小野編年Ｃ群　見込に蓮文
－16	中国磁器染付皿	第３面	2330－2	濠	下層（アゼ断面41相当）		(3.9)	17.4	（底部）5	景徳鎮窯　全面施釉　畳付け釉剥ぎ
－17	中国磁器染付皿	第３面	2330－2	濠	下層（東壁断面162）		(4.7)	19.4	15	漳州窯　16世紀末～17世紀初頭にかけて主に輸入された粗製の皿である　全面施釉　粗い砂が畳付に付着
図113－1	土師質蓋	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面26相当）		(7.2)		小破片	口縁部内・外面は横方向ナデ　内面はナデ　天井部は無調整
－2	備前甕	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面26相当）		(6.75)		小破片	玉縁口縁　内・外面ともナデ調整
－3	備前擂鉢	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面26相当）		(4.9)		小破片	５条以上の擂目が口縁部近くまで施される

表32　遺物観察表（15）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
－4	肥前陶器皿	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面26相当）	11.8	3.35	4.6	80	大橋編年Ⅰ期　灰釉を内面・外面上半に施し、その上から口縁部にのみ鉄釉を施す　高台露胎
－5	中国磁器染付碗	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面26相当）		(3.05)	5.6	40	景徳鎮窯か？　小野編年Ｄ群　比較的高くしっかりした高台をもつ　畳付以外全面施釉
－6	土師質皿	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面25相当）		(0.9)		小破片	見込が広く、口縁を僅かに立ち上げ皿の形をつくる　底部無調整　口縁部はナデ　見込には比較的粗めのハケメが顕著に残る
－7	土師質蓋	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	26	(4.05)		15	口縁から内面にかけてナデ　天井部は無調整
－8	瓦質甕	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面25相当）	28.8	(16.2)			表面剥落のため不明瞭だが、横方向の平行タタキが残る　内面は横方向の細かいハケメ
－9	瓦転用円盤	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	6.1（幅）	1.9（厚さ）	6.3（長さ）		両面から打ち欠き円形に調整する　85.65（重量）
－10	備前擂鉢	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面25相当）	11.5	(7.1)		20	乗岡編年中世６期～近世１期　欠損しているため擂目不明
－11	備前擂鉢	第３面	2330－2	濠	上層（トレンチ）	25.7	(5.45)		15以下	乗岡編年近世１期　欠損しているため擂目不明
－12	備前甕	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）		(6.5)		10以下	乗岡編年中世５期　玉縁が垂れ下がり長い口縁帯をもつ　外面は灰が被る
－13	備前汁注ぎ	第３面	2330－2	濠	上層（トレンチ）	14	5.5	6.8	30	注ぎ口の左側に線刻で十字が記される（窯印であろうか）
－14	肥前陶器皿	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	11.2	3.65	3.6	35	大橋編年Ⅱ期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台脇は削り出す　高台内の削りは浅い　胴部は直立し口縁部に至る
－15	肥前陶器皿	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	7.1	3.4	3.6	40	高台脇からそのまま口縁へと立ち上がる　器高が高台径を下回る　全面灰釉で施釉　砂目積み　胎土目と共に持ち込まれた初期の砂目であろう
－16	中国白磁皿	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	11.8	2.9	6.4	20	景徳鎮窯　粗い砂が畳付に付着
－17	中国青磁？皿	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）		(1.3)	4.8	10以下	龍泉窯か？青磁の焼成不良であろう　高台内に墨書あり
－18	中国磁器染付皿	第３面	2330－2	濠	上層（アゼ断面25）	10	2.9	5.2	30	漳州窯　16世紀末～17世紀初頭に主に輸入された粗製の皿　釉薬：浅黄2.5Y7/3　胎土：灰白2.5Y8/2　見込・高台以外に施釉　見込・高台脇に呉須で圏線を描くがその上に釉薬は施釉されていない
－19	中国磁器染付皿	第３面	2330－2	濠	上層（トレンチ）		(1.25)	9.3	20	景徳鎮窯　小野編年Ｂ１群
－20	漆器皿	第３面	2330－2	濠	中層（アゼ断面25相当）	11.8	4.1	6.8	55	内・外面ともに黒漆　見込に朱漆で文様を描く　遺存状態が悪く不鮮明ではあるが「並び丸に二つ引き」か
－21	羽口	第３面	2330－2	濠	上層（トレンチ）	8.4（外径） 3.8（内径）	2.4（厚さ）	10.5（長さ）	20	鍛冶用　外面は強いナデによって面取り状になり多角形を呈す　先端は使用による欠損
図114－1	土師質羽釜	第３面	2330－？	濠	中層	25.5	（６）		20	内面・外面上半はナデ　外面鍔より下半はケズリ後ナデ
－2	肥前陶器皿	第３面	2330－？	濠	中層	11	2.85	3.9	55	大橋編年Ⅰ期　内面と外面上半に灰釉　高台露胎　高台内の削りの深さは高台脇より深い
－3	備前こね鉢	第３面	2330－？	濠	中層	22.2	7.95	10	20	乗岡編年中世６期　底部は無調整　それ以外はナデ調整　φ１㎜以下の砂粒含むが、胎土は緻密である
－4	中国磁器染付碗	第３面	2330－？	濠	中層		(2.75)	4.3	（底部）100	景徳鎮窯　小野編年Ｅ群　饅頭心　高台内に「永保長春」の銘　畳付以外全面施釉
－5	中国磁器染付皿	第３面	2330－？	濠	下層	10	(2.6)		（口縁部）25	景徳鎮窯　碁笥底　全面施釉　碁笥底部分釉剥ぎ
－6	中国磁器染付皿	第３面	2330－？	濠	下層		（２）	6.7	（底部）20	景徳鎮窯　小野編年Ｂ１群　シャープな高台をもつ　内面は十字花文、外面は唐草文が描かれる　全面施釉　畳付脇を削り釉剥ぎ
－7	砥石	第３面	2330－？	濠	中層	6.75（幅）	1.85（厚さ）	11.85（長さ）		片状ホルンフェルス（宇治・和束谷産）　仕上砥（合砥）
－8	雁首	第３面	2330－？	濠	南北トレンチ	0.8（幅）		6.8（長さ）		図版15右３　8.61（重量）　真鍮製　首部は一枚の真鍮を湾曲させてつくり、首部側面で接合させる　火皿は厚さ１㎜ほどで、首部よりも厚みがある
図115－1	土師質堝	第３面	2325	濠	下層	18.6	(13.3)		40	内面・外面上半はナデ　外面胴部下半は右上がりタタキ
－2	土師質？擂鉢	第３面	2325	濠	下層	31.9	(8.65)		15以下	胎土：灰白7.5Y8/1　堺在地のものとは器形が異なる　４条の擂目
－3	瓦質羽釜	第３面	2325	濠	下層	21.6	(5.1)		15以下	外面鍔以下はケズリ　内面はナデ
－4	瓦質甕	第３面	2325	濠	下層		(5.7)		小片	口縁は折り返し玉縁状に調整　内面ハケメ　外面やや左上がりのタタキ
－5	備前甕	第３面	2325	濠	下層		(8.6)			口縁は玉縁が扁平化し幅広の縁帯をつくる
－6	肥前陶器皿	第３面	2325	濠	下層	9.8	(2.3)	3.4		大橋編年Ⅰ－１期　内面・外面上半に灰釉　高台露胎　高台は比較的しっかりと削りだす
－7	中国磁器染付皿	第３面	2325	濠	下層	12.2	3.1	7.3	40	景徳鎮窯　小野編年Ｂ１群　十字花文
－8	中国青磁碗	第３面	2325	濠	下層		(4.5)	4.95	（底部）95	龍泉窯　高台内無釉
－9	中国青磁稜花皿	第３面	2325	濠	下層	10.9	3.25	4.75	60	龍泉窯　見込釉剥ぎされており、普通の稜花皿より新しい要素をもつ　16世紀後半頃か　高台内無釉　二次焼成を受ける
－10	瓦質羽釜	第３面	2325	濠	中層	26	（９）		20	口縁部内面は右上がりハケメ、胴部内面はハケメ後ナデ　口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリ　やや口縁は内傾し鍔はほぼ水平にのびる
－11	備前擂鉢	第３面	2325	濠	中層	31.2	(5.8)		（口縁部）15	乗岡編年中世５期　緻密な胎土

表33　遺物観察表（16）

図番号	器種	層位	出土遺構			計測値cm			残存率%	備考（調整など・重量単位はg）
						口径	器高（残存）	底径		
-12	備前甕	第３面	2325	濠	中層	31.2	(5.3)		(口縁部)10	口縁は玉縁が扁平化し幅広の縁帯をつくる
-13	中国青磁稜花皿	第３面	2325	濠	中層	8	(2.8)		10	龍泉窯
-14	中国青磁碗	第３面	2325	濠	中層		(2.7)	4.4	(底部）100	土龍泉　釉薬：にぶい黄褐10YR5/4　胎土：灰白10YR8/2　見込に文字（不明）をスタンプする　高台内釉剥ぎ
-15	朝鮮王朝白磁皿	第３面	2325	濠	中層		(1.2)	5.2	(底部）20	釉薬：灰白5Y8/1　胎土：灰白2.5Y8/2　高台内に墨書あり　高台無釉
-16	土師質蓋	第３面	2325	濠	上層	32	(4.8)	22	10以下	内面は目の細かいハケメ　口縁は強くナデ、面をもつ　天井部は粗いケズリ
-17	土師質羽釜	第３面	2325	濠	上層	23	(5.7)		10以下	口縁部内面は横方向、胴部内面は左上がりハケメ　その上から軽くナデ　外面は鍔含め胴部上半ナデ、鍔以下は粗いケズリ
-18	土師質甕	第３面	2325	濠	上層（トレンチ）		(7.75)		小破片	外面は横方向のタタキ　内面は黄褐色付着物があり不明瞭であるが横方向のハケメ
-19	肥前陶器碗	第３面	2325	濠	上層（トレンチ）	9.2	6.8	3.4	35	あめ釉　高台露胎
-20	肥前陶器皿	第３面	2325	濠	上層		(2.5)	6	(底部）100	内面・外面上半に灰釉　高台露胎　胎土目積み（目跡は４ヶ所）
-21	瀬戸美濃天目茶碗	第３面	2325	濠	上層（トレンチ）	10.7	6.1	4.2	50	大窯の後半段階（16世紀後半）頃のもの
-22	常滑甕	第３面	2325	濠	上層	48	(6.7)		10以下	口縁をＮ字状に折り返す
-23	中国青磁香炉	第３面	2325	濠	上層	8.9	5.3		25	
図116-１	土師質蓋	第３面	2300	濠	最下層粘土		(3.25)		小破片	天井部は無調整　それ以外は丁寧にナデ
-２	瓦質甕	第３面	2300	濠	最下層（西側断面73・75・76）		(5.3)			口縁を折り返し玉縁状に調整　外面は横方向タタキ　内面は横方向ハケメ
-３	瓦質羽釜	第３面	2300	濠	最下層粘土	23	(5.6)		(口縁部)15	口縁部はナデ　胴部内面は横方向ハケメ
-４	瓦質羽釜	第３面	2300	濠	最下層粘土	24.6	(7.5)		(つば部)10	口縁部はナデ　胴部内面は横方向ハケメ　外面鍔以下はケズリ
-５	瓦質羽釜	第３面	2300	濠	最下層粘土	22.4	(7.4)		(口縁部)10	口縁部はナデ　胴部内面は横方向ハケメ　外面鍔以下はケズリ
-６	瓦質羽釜	第３面	2300	濠	最下層粘土	23	(5.3)		(口縁部)15	口縁部はナデ　胴部内面は横方向ハケメ　外面鍔以下はケズリ
-７	墨書卒塔婆	第３面	2300	濠	下層東側断面32～34	13.2（幅）	1.4（厚さ）	41.35（長さ）	25	「大姉一回之□（辰？）／ノ塔奉祈佛果」と墨書が残る　板材として転用されたのか、四角く切り抜きが施される（部材を合わせるホゾ穴か？）
-８	下駄	第３面	2300	濠	最下層粘土	6.8（台幅）	0.8(台高)　2.9(歯含)	14.7（台長）		丸型連歯下駄　足のサイズからみて子供用か？
-９	曲物	第３面	2300	濠	下層東側断面32～34		(4.45)	14	50	
-10	瓦質羽釜	第３面	2361	土塁	ブロック土内	16.4	(4.7)		20	口縁部はナデ　胴部内面は横方向ハケメ　外面鍔以下はケズリ
-11	瓦質甕	第３面	2361	土塁	薄い炭層直下		(8.1)		15以下	口縁を折り返し玉縁状に調整　外面横方向タタキ　内面横方向ハケメ
図117-１	土師質甕	第３面	2300	濠			(6.5)		10以下	外面は横方向タタキ　内面は横方向ハケメ（淡黄色付着物あり）
-２	瓦器皿	第３面	2300	濠		9	1.4		60	口縁部はナデ　底部はユビオサエ　口縁部に油煙付着
-３	瓦質こね鉢	第３面	2300	濠		28.5	(5.2)		(口縁部)10	口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリ後ナデ　内面は不定方向のハケメ
-４	備前擂鉢	第３面	2300	濠		32.4	(8.3)		(口縁部)10	乗岡編年中世５期　緻密な胎土
-５	備前擂鉢	第３面	2300	濠		29.2	(６)			乗岡編年中世５期　緻密な胎土
-６	箸	第３面	2300	濠		1.1（幅）	0.9（厚さ）	24.1（長さ）	100	両口箸
-７	箸	第３面	2300	濠		0.8（幅）	0.55（厚さ）	20.65（長さ）	100	両口箸
図119-１	丸瓦				南10層上面	9.3（瓦当面径）	1.4（厚さ）	37.2（長さ）		凹面には布目痕が残る　凸面はタタキ
-２	丸瓦				南10層上面	16.7（幅）	1.6（厚さ）	37（長さ）	100	凹面には布目痕が残る　凸面はタタキ
図120-１	平瓦				南10層上面	25.4（幅）	2（厚さ）	(20.8)（長さ）		凹面は布目痕が残る　凸面は縄目タタキ
図121-１	土師質羽釜				北西トレンチ	13.5	9.05		80	外面鍔より下は粗いケズリ、上はナデ　内面はナデ
-２	備前建水？				南サブトレ	15	8.4	12.6	25	図版14右４
-３	瀬戸美濃碗				南北トレンチ	9.8	7.1	4.8	60	鉄釉　高台脇を削り、そこから高台内は無釉
-４	肥前磁器染付皿				南サブトレ	14	3.2	5.4	80	図版14左４　見込に魚文　全面施釉
-５	中国磁器染付皿				東側溝		(2.7)	6.6	30	景徳鎮窯　全面施釉　畳付脇を削り釉を剥ぐ
-６	中国白磁皿				東側溝		(1.45)	3	30	高台内に朱で記号（十字）を描く　高台無釉
-７	硯					6.0（幅）	(20.2)（厚さ）	(15.1)（長さ）		黒色頁岩　両面に墨が残存する

写　真　図　版

図版１　１調査区断面

１調査区東壁中央１～10層

１調査区南壁東端１～10層

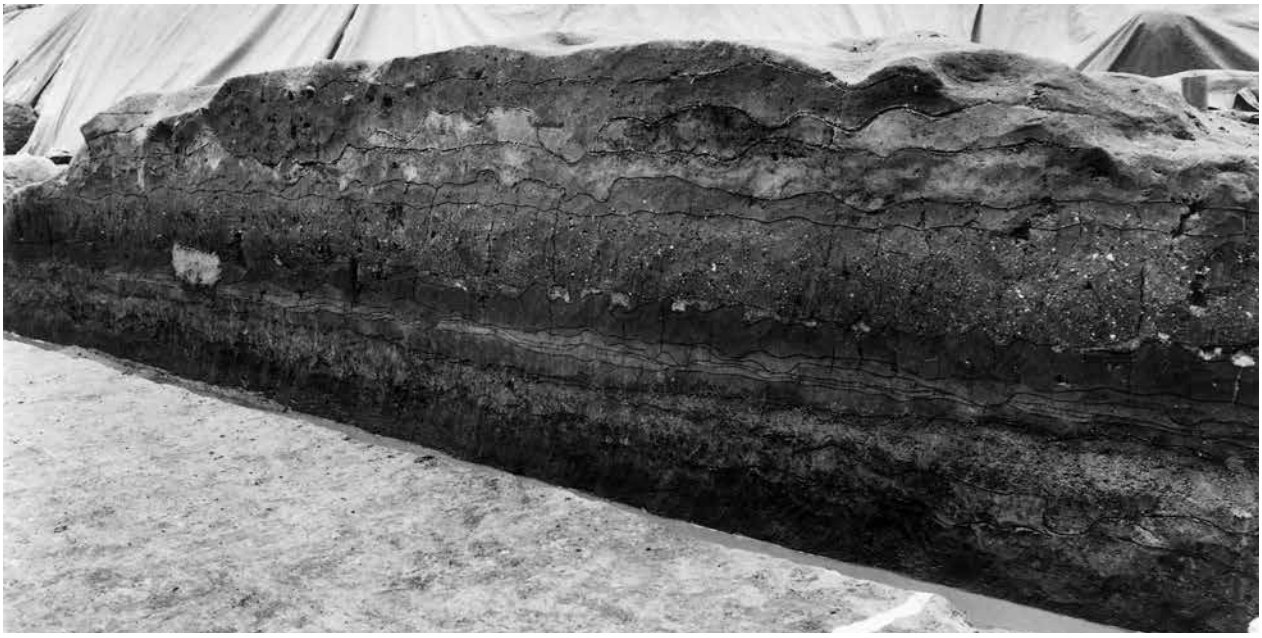
１調査区西壁中央１～10層

図版２　１・２調査区断面

上　１調査区南壁中央区画溝

中　２調査区東壁東端

下　１調査区南壁下層
（９層～15層）



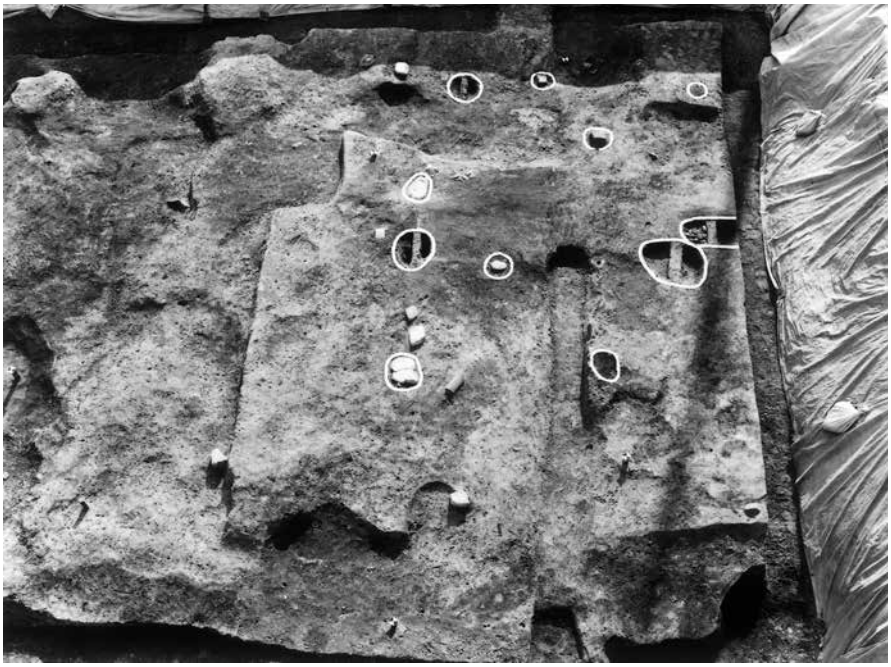
図版３　１調査区遺構（１）

１調査区西側第１面
（北から）

１調査区西側第１面70建物
（西から）

１調査区西側第１面66土坑断面
（南から）

図版４　１調査区遺構（２）



１調査区第８面西端礎石列
（北西から）

１調査区第２面51土坑断面
（東から）

１調査区第３面中央部
（東から）

図版５　１調査区遺構（３）

１調査区第５面中央部
（北西から）

１調査区第５面
156・173・174埋甕検出状況
（西から）

１調査区第６面中央部
（東から）

図版６　１調査区遺構（４）

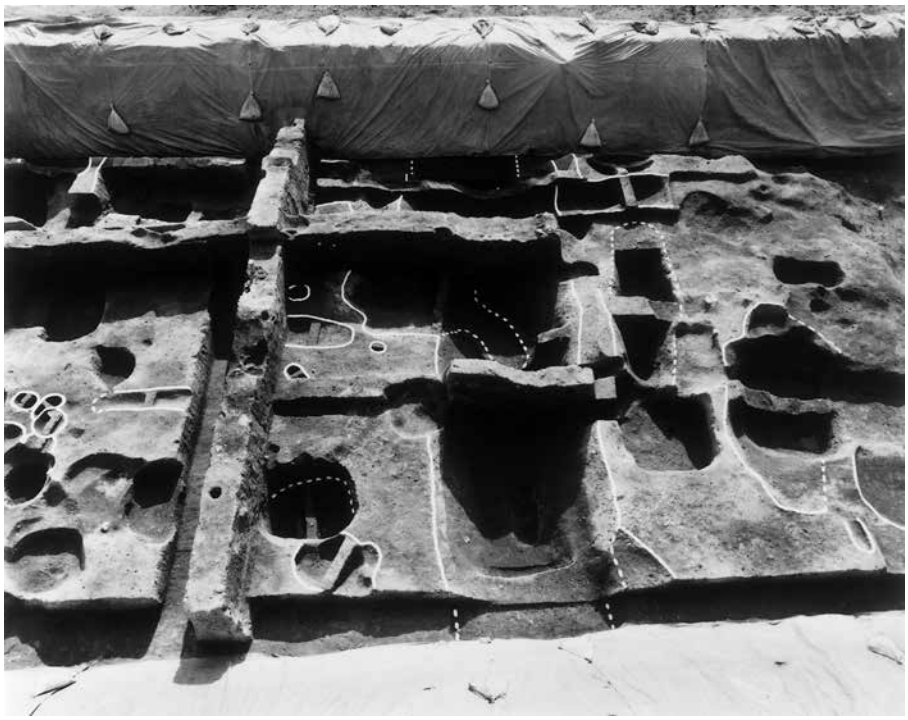
１調査区第７面257建物
（北西から）

１調査区第７－３面262カマド
（西から）

１調査区第７面カマド断面

図版７　１調査区遺構（５）

１調査区第７面224溝
（北西から）

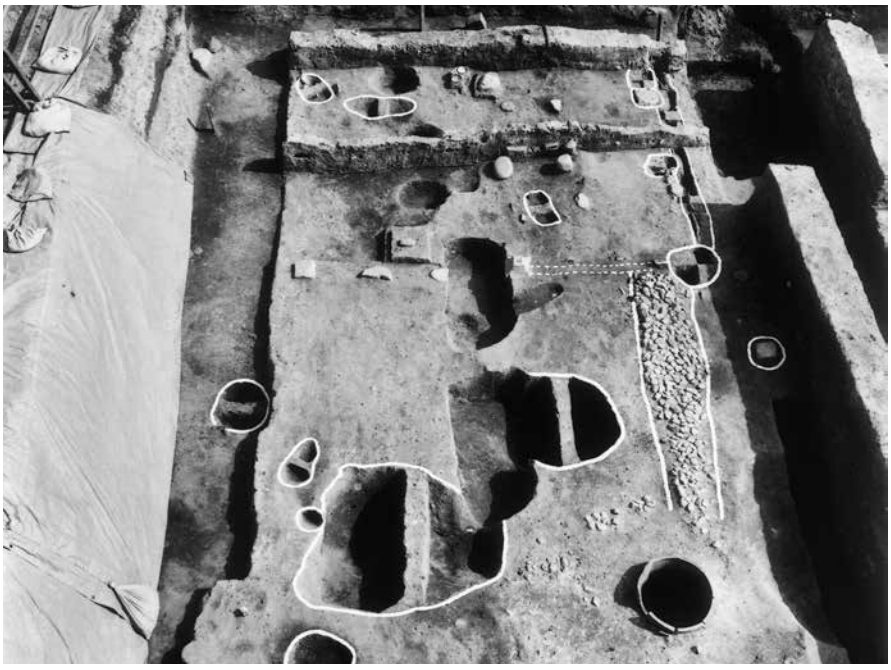


１調査区第８面中央部
（北西から）

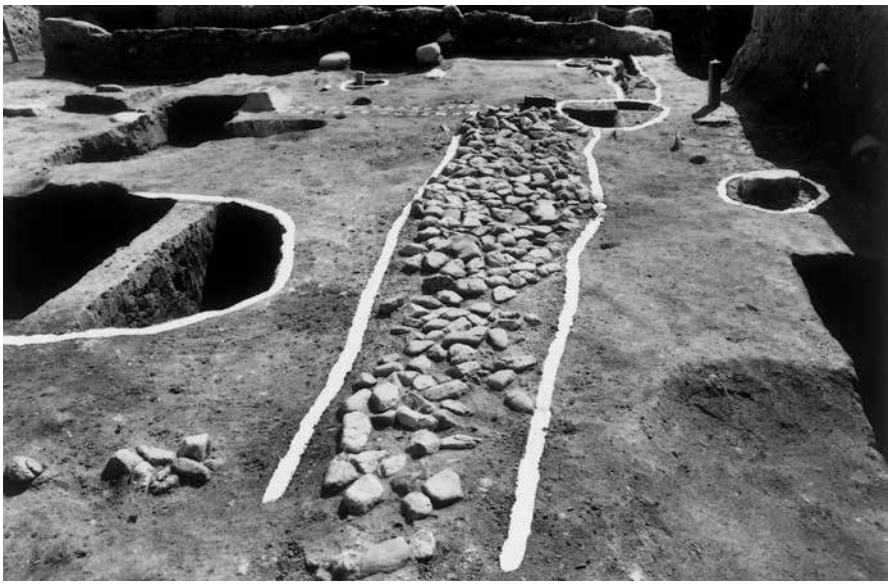
１調査区中央部区画溝

図版８　１調査区遺構（６）

１調査区第８面258建物
（西から）

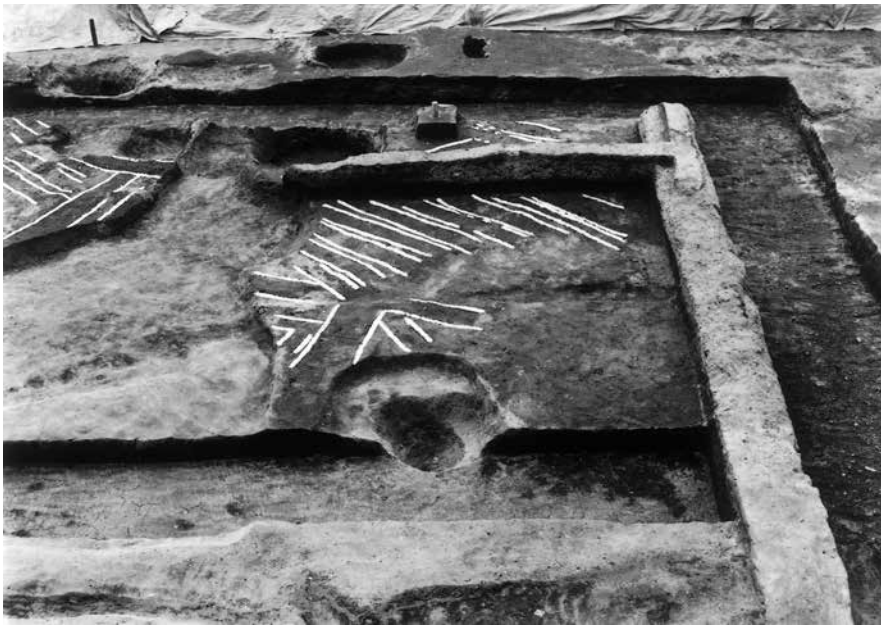


１調査区第９面328建物
（西から）

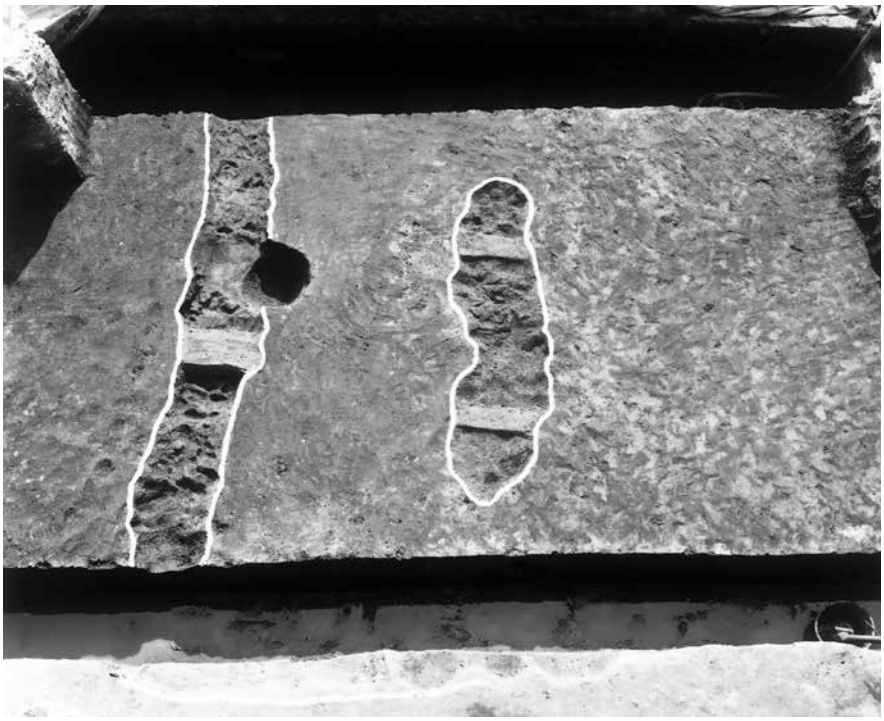


１調査区第９面333石敷
（西から）

図版９　１調査区遺構（７）



１調査区第10面西端鋤溝群
（北東から）



１調査区第12面
（北東から）
溝よりも右側は
足跡が多数見られる

１調査区第15面
（北東から）

図版10　２調査区遺構（１）

２調査区第１面2152埋甕

２調査区第１－２面南端
礎石建物
（南西から）

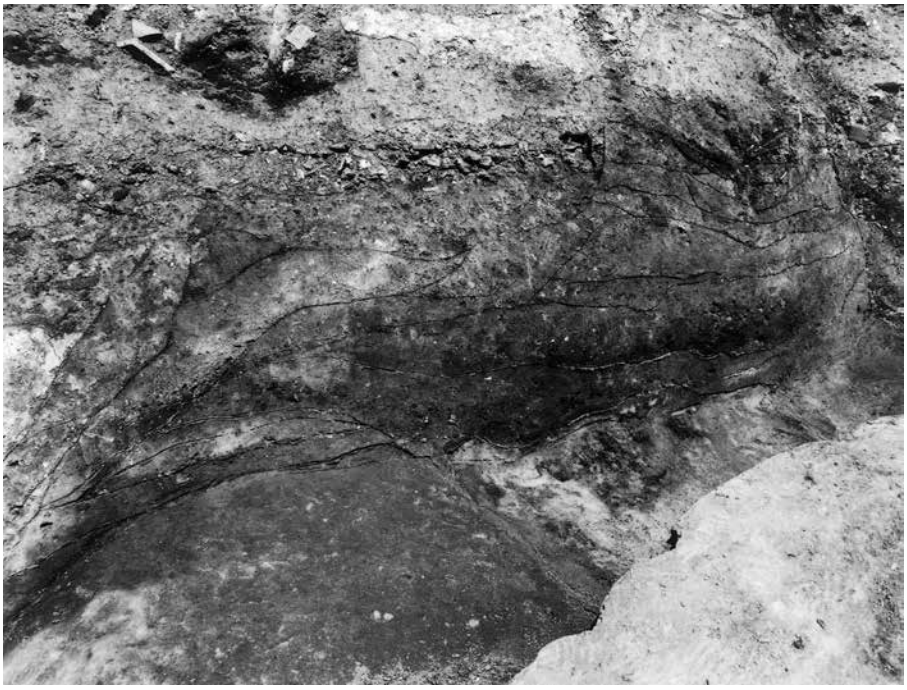
２調査区第２面2362溝
（東から）

図版11　２調査区遺構（２）

２調査区第３面
濠全景
（北から）

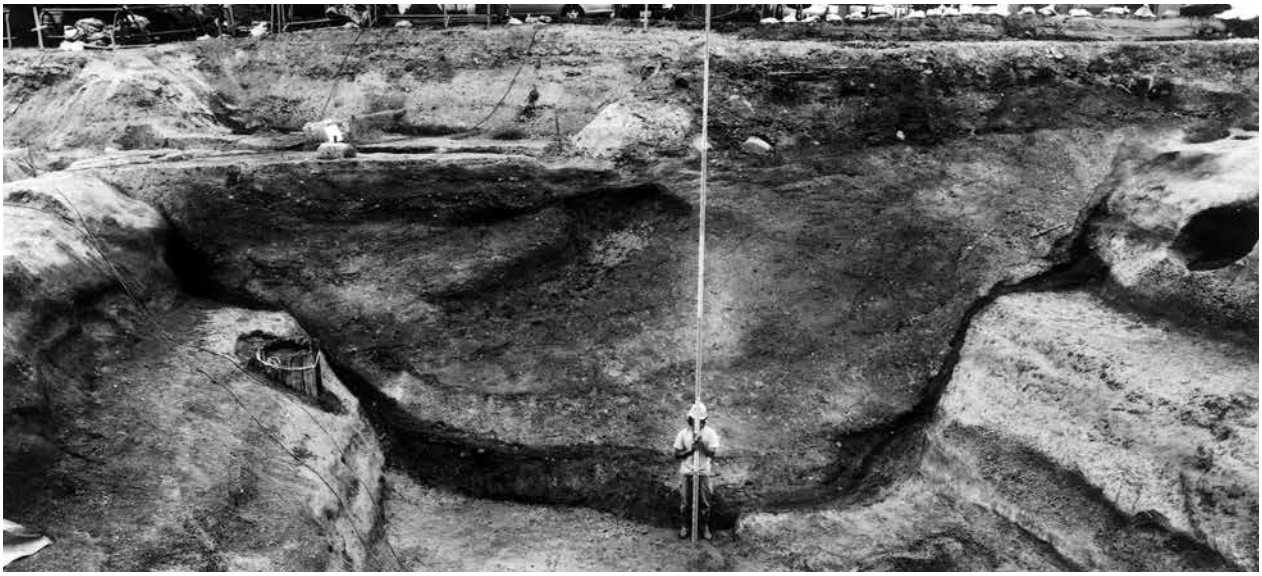
２調査区第３面
濠全景
（西から）

図版12　2調査区遺構（3）



2調査区第3面2361土塁
（2300濠北側土塁）

2調査区第3面2300濠
（東から）



2調査区第3面2300濠西側断面

図版13　2調査区遺構（4）

2調査区第3面2325濠東壁
（西から）

2調査区第3面2325濠中央断面
（西から）

2調査区第3面2330-1濠東壁
（西から）

2調査区第2・3面2330-1・2濠中央断面（南西から）

図版14　出土遺物１（陶磁器・土器）

図37－２

図95－５

図40－４

図96－14

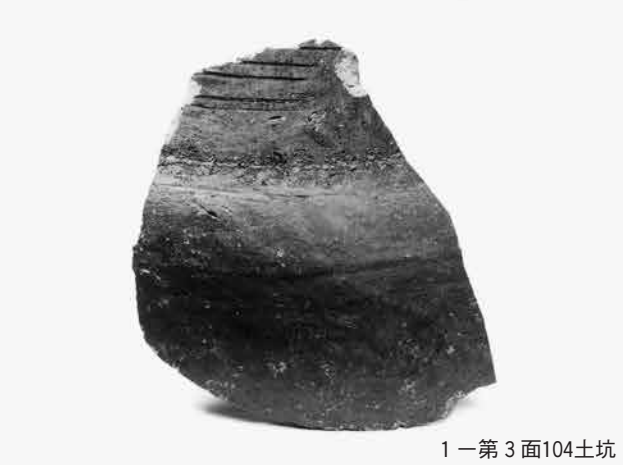

１－第３面104土坑

図111－14

図121－４

図121－２

図版15　出土遺物２（土製品、金属製品）

土製円盤

土錘

図55－３

図37－14　図76－10

図76－11

図114－８

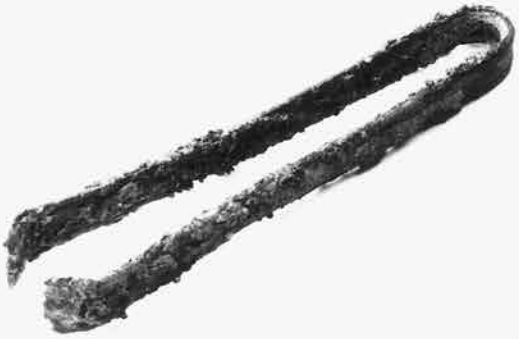


図25－17

羽口と椀形滓

図版16　出土遺物３（木製品）

図101－４

図81－11

図81－13

図54－９

図100－７

図100－９

図100－８

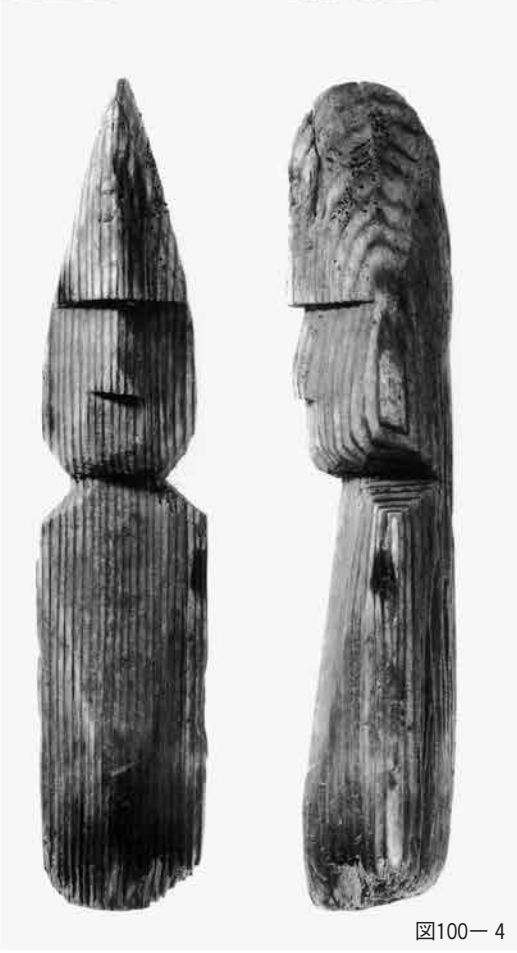


図100－４

図版17　出土遺物４（石製品、骨・貝製品）

図31－６

図83－３

図40－７

図40－９

図31－８

２－第１－２面2343廃棄土坑

図21－３

１－第２面51土坑

図版18　動物遺存体

1 頭蓋骨
2 下顎骨（左）
3 肩甲骨（左）
4 寛骨（左）
5 上腕骨（右）
6，7 上腕骨（左）
8 橈骨（右）
9 脛骨（左）

①動物遺存体（イヌ）

1～4 イノシシ
1 下顎骨（左）
2 大腿骨（右）
3 脛骨（右）
4 脛骨（左）
5～14ニホンジカ
5，6 椎骨（胸椎）
7 肩甲骨（右）
8 上腕骨（右）
9 上腕骨（左）
10橈骨（右）
11橈骨（左）
12中手骨（左）
13大腿骨（左）
14脛骨（左）

②動物遺存体（イノシシ・ニホンジカ）

報告書抄録

ふりがな	さかいかんごうとしいせき　2
書名	堺環濠都市遺跡Ⅱ（SKT960地点）
副書名	少林寺･B団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第178集
編著者名	新海正博･水野恵利子･松井　章･丸山真史･池田　研
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590−0105　大阪府堺市竹城台3丁21番4号　　TEL072（299）8791
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さかいかんごうとし 堺環濠都市 いせき 遺跡（SKT960）	おおさかふ 大阪府 さかいし 堺市 しょうりんじちょうひがし 少林寺町東 さんちょうちない 3丁地内	27201	6	34°16′27″	135°28′16″	2006.10.27 ～2007.5.30	663㎡	大阪府 住宅供給公社 少林寺･B団地 建替に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
堺環濠都市 遺跡（SKT960）	集落	近世	区画溝、礎石建物、 廃棄土坑、埋甕	近世陶磁器、 金属製品、石製品、 木製品	近世期の職人町屋を 重層的に検出
	集落	中世	濠、礎石建物、 鋤溝	陶磁器、石製品	中世堺の環濠を検出
	集落	古代	足跡	土師器、須恵器、 黒色土器、瓦、埴輪	圏脚円面硯

要約

今回の調査区は堺環濠都市遺跡の南東部に位置する。
近世段階には、17世紀初頭から19世紀に至る短冊形地割の町屋構造を検出した。
町屋は職人町で調査区の東側が樽屋町、西側が絹屋町となっていた。
短冊形地割であるため、１軒の町屋の間口は細長く、奥行きが長い構造である。
敷地表側の道路に面する部分に礎石建物を建て、裏側にあたる部分には廃棄土坑や井戸、埋甕などが作られていた。また、先に述べた樽屋町と絹屋町を区分する背割の区画溝が敷地の最奥に位置している。
中世段階では、1615年の大坂夏の陣で被災した遺構面とその時に機能していた濠を１条検出した。この濠は夏の陣のあと、埋め立てられて近世町屋へと変貌する。
それ以前には、先の濠よりも北側に３条の濠が掘削されていた。これらの濠は同時存在ではなく、都市域を拡張するかのように掘削と埋め戻しを繰り返していた。
一番北で検出した濠は、堺環濠都市遺跡で発見されている濠の中でも、最大級のもので、1586年に豊臣秀吉が出した埋め戻し令によって埋め戻されたと想定出来るものであった。
中世以前には後背湿地が広がっていた。耕作が行われた痕跡を明らかには出来なかったが、牛や人の足跡を検出することが出来たので、何らかの人為的な活動が営まれたことが推定できる。

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第178集

堺環濠都市遺跡Ⅱ
（SKT960地点）

少林寺・Ｂ団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　2008年３月31日

編集・発行　財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番4号

印刷・編集　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300